日本プロレタリア文学大系

5

三一書房

責任編集　平野謙　蔵原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

5

運動開花の時代　下

「戦旗」創刊から文化連盟結成まで

三一書房

第五巻

「運動開花の時代」（下）

凡　例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第五巻　目　次

I　小説・戯曲

II 評論・声明書

III　詩・短歌

詩

I 小説・戯曲

綿

加賀耿二

一

白山山岳地帯へ加賀平野の東端が所々で芋虫のように喰い込んでいた。その芋虫の一つに私の生れたT部落があった。西から喰込んで来たこの猫の額ほどの平地は、南と北とに山を持ち東方へゆるい傾斜を以って高まり且つ狭くなりつつ、遂に重なり続く白山山脈のために遮られてしまう。平地の中央に流れの急な割合に大きい谷川があり、田畑への灌漑と人家への飲水とを供給していた。部落は北山の山裾とこの谷川との間に藁屋ばかりの家を集めて形作られていた。冬になると北陸特有の大雪が降り、夏になると窪地一帯に螢が群生した。

だが、私の幼年時代の記憶は、この雪にも螢にも連りをもっていない。不思議なことには、綿に関聯しているのだ。南山の山裾の段々畑や谷川の陽あたりのよい川岸に、あの骨張ったガラガラの植物に白い綿が吹き出していたのが、今も、明かに私の記憶に残っている。まだ自給自足の封建的経済生活を脱し切っていなかった日露戦争前の北陸の寒村の風物には、糸車や手織機の音や綿の木が、尚重要な生存を続けていたのだ。

六つか七つの時であっただろう、私には耐え難い空腹との関聯において、忘れ難い綿の記憶が残っている。

夏であったか、それとも秋であったか、それは今判別出来ない。何でも曇り日の湿気を含んだ日であった。空は灰色に塗り潰されて、今にも下風と共にひと雨来そうな空模様だった。私は土手の桑の木の根本に積み上げられた石ころ塚の上に、母の幅広の前垂れを敷いて坐っていた。足元には二三本の生芋が、雨を予想して持って来た母の破れた檜笠と共に投げ出してあった。土手の下は綿畑で、綿畑の向うに川が流れていた。猫柳や川原竹の川岸が、滔々と流れる劇しい水の音に、何かしら心細い幻影を醸し出しつつ、私の幼い心に迫っていた。

綿畑には貧弱な綿の木が一面にカサカサと立っていた。白い綿が、その骨張った枯植物の所々にポッカリと喰っついていた。

私は無性に腹が減っていた。けれども、生芋にも喰い飽きていた。あの綿が、白い大きな握飯ならどんなに嬉しいだろう、私はそんな事を妄想して一つ一つの綿を見つめていた。するとその一つ一つの綿が、何時の間にか白い大き

な握飯となって、私の脳裡へ迫って来るのだった。
母は私には頓着なく綿を収穫するのに一生懸命だった。破れた野良着の背をまるめて、畝から畝へと忙しそうに獅噛ついている、千切った綿が節くれだった黒い手に一ぱいになると、腰にさげた餌籠に押込み、餌籠があふれると畑の隅に置かれた畚へ急いで詰め込みに行った。腰を曲げて走り歩くような動作が繰返され、何か急き立てられているように一心不乱だった。
私は、母が私をかまってくれないのが不服だった。早く切り上げて家へ帰りたかった。
私は、空腹と淋しさに耐えかねて母に呼びかける――
『おっ母アまだすまんのか』
すると母は顔を上げて返事をする。
『おいさ、もうじきじゃぞい。淋しゅなったか。待っとれよ。もうじきじゃぞい』
だが、母は決して手を休めない。一生懸命毟り続ける。それを見ていると、末ッ子のゆえについ去年まで飲んでいた、母の乳房の匂いと触感が、私の官能に迫って来た。汗にすえた母の胸の肌を感じたが、それはもう許されない事だった。
饑じさが百倍してまた母に呼びかける――
『おッ母ア、家イ行こう、腹へったよウ』
すると母は悲しそうな瞳を向けて返事をする。
『ウンよしよし……もう芋ア無うなったかい。笠の下にもう無エかい』
『ウン、もう無エよう。あっても嫌ぞウ』
『そうかい。…けんどなア坊、腹ア減ったは、お母アもぞい。この綿みんな採らずばお天とう様に悪るかろうぞい。雨の来ん間にもう一っぱしりじゃ。待っとってくれや』
『ウン、その代り家イ行ったら焼く飯（握飯）してくれや』
『ウン、よしよし』
『白い飯の焼く飯ぞ』
『おいやさ、白い飯の焼く飯とも』
だがその頃の私には、常の日に『白い飯』なんか勿論無かった。部落百戸のドン底に位する水吞小作の家では、薩摩芋と麦の炒粉が常食だった。いや、それもまだよい部で時によると菜ッ葉と潰し大豆のお粥が食膳にのぼされた。米の飯があっても大抵一碗の盛切りで、二碗は許されなかった。子供も、大人も空腹を感ずることなく一日の日も暮せなかった。
私の家の小作段別は、僅か三段に足らなかった。田圃の少い山間の部落では、普通でさえも小作米高を競争することなしに、五段以上を作付する地位にはなれなかった。私の家では、当時父が激烈なロイマチスで病臥していたから、三段を維持するのも精々だった。
三段歩から収穫する六石余の米のうち、四石近くの上米

が地主の倉へ持って行かれた。残った二石余斗が親子五人の食代だった。薩摩薯や豆や菜ッ葉が常食となるに怪しむことはなかった。

自給自足の経済生活を脱していなかったら、村にも近郷にも労働で現金を儲ける術は一つもなかった。村人は綿を作って紡ぎ布を織って自家の衣類をこしらえた。椿の実や菜種で油が作られ、宵の口だけ細々として行燈が灯された。薪は山へ拾いに行き、山持ちは伐り出して売った。喰い米以上を収穫する者は米を、山持ちは薪を里へ売りに出して現金を握った。食米さえ足らず、加うるに山を持たぬ私の家では、田圃へ施す肥料代の出どころがなかった。

村で唯一の地主たる坂村は、村の田地の三分の一を占有していた。だから彼は村の支配者であり帝王であった。人々は彼の機嫌を損ねないように汲々としていた。彼はまた冷酷な金貸しを副業とし、その方面でも村人を搾取した。

村の小作達は、肥料代に困るとこの地主の家へ出かけて行った。そして三円五円の金を借りた。だがそれは彼に収めるべき小作米を完納した者に限り与えられた特権だった。小作米を完納していない者に対しては彼は一厘だって貸さなかったばかりでなく、未納の小作料や、貸金の督促には冷酷極まる手段を用いて村人に君臨していた。小作料の貸金の抵当に食い米や綿や芋や椿の実や薪を押さえることはまだいい方だった。時によると、宅地に立っている樹木や竹藪さえも切り取って行く事があった。だから村人は彼の怒に触れる事を極度におそれ、血を吐く思いの無理算段をしたり、狆ころのような諂いで日を送った。彼等はこの暴慢な地主に対して団結する事を知らず、各々激烈な反目と裏切りを以って争いながら地主に取り入る事に苦心した。地主に取り入る仲間同士の相剋に負けた者は、夜ひそかに土着の村を落ちのびねばならなかった。

私の家も坂村の小作だった。一番貧弱な人間以下の小作だった。だが父が病気になるまでは、それでも相当の『信用』を地主に持たれていた。父は日夜地主の邸宅に出入りを許され、使い歩きや邸宅の草毟りに手伝わされた。勿論それは下男部屋で夕食を与えられるだけで、外に一厘の報酬にもありつけぬ労働であったが、小作米の残りや借金の追及を緩和して貰うために、父が好んで――むしろ喜んで実行した哀れむべき奴隷行為だった。父はこの特別の関係を以って、並び居る小作人仲間に限りなき優位を感じていたに違いなかったのだ。

だが、私の三つの時、父は激烈なロイマチスで倒れるに至って地主に対する感情を一変したようだった。

私の三歳の年の夏の初め、村ばなを流れる谷川が、氾濫した。数十日に亙る降雨がその原因だった。川の流れを自然に委し川床にも堤防にも何等の意を用いず、水源地帯の山林を伐るに委せていた原始的な河川政策は大自然の一寸した怒にも敗北した。村ばなを流れる谷川はそう大きな川

ではない。だが、少し雨が降るとすぐ村上に当る窪地の堤防が押し切られ、部落の窪地々帯へ汎濫するのだった。
この時の洪水は、度々の氾濫を恐れていた堤防工事が、数日間逆巻く濁流をせき止めていたほどの頑丈さであっただけに、それが崩れるとなると、従来にない大袈裟のものでなければならなかった。果して、午後一時頃、鐘や太鼓の警報に驚いて村の人が川筋窪地々帯へ駈けつけた時には、既にその辺一帯の青田が泥の海と化し、滔々たる水勢が、窪地にある家々へ押しかけていた。私の家は窪地をはなれた北山の山裾にあった。従って、水に襲われる恐れはなかったが命より大事な地主の家が窪地にあった。父は、氾濫と同時に取るものも取らずに雨の中を駈けつけねばならなかった。
行って見ると、果して地主の豪壮な屋敷は水で一ぱいだった。人々は雨と水の中を地主の家財を水のつかぬ箇所へ運びまたは二階へ上げるべく右往左往していた。私の父も血眼になってその中へ加わった事は云うまでもない。幾棟もの土蔵は戸を固く閉められ、『離れ』は床の上まで水につかって居た。庭先にはいやな匂いのする泥水が、下駄や木切れや塗りのはげた欠椀などを浮べて流れていた。辛うじて床板を水に免れた本宅では、裾からげ素足の主人が蒼白い顔色をして人々を指図していた。
広い邸宅中の道具や建具や畳の始末がつくと、もう夕ぐれに近かった。一段落と云うので、そこで酒が出たが私の父はそこへ加わる事が出来なかった。父はまだ昨年の小作米を全部収めて居ず、従ってそんな席上には遠慮すべき立場にあったのだ。
で、父は恐る恐る、雨と水に濡れたからだを主人の前に運んで、次に行うべき行動の伺いを立てた。
『あのう、何んか外に片づけるものでも…』
『そうだな』と、デップリ顔の主人はホッとして答えた。
――『お前は太助(地主の下男)と一緒に庭の植木鉢を探して集めてくれ』
父はそれから約三時間余り、トップリ日の暮れて仕舞うまで、雨と水の中をずぶ濡れになって広い庭中を這いずりまわった。植木鉢と云っても百個余りあった。そのうち段々棚の上に水を免かれて残っているものは僅かで、大半は洪水のために棚から押し流され、水の中へ落ち込んでいた。父と太助とは、水の底へ、何処にあるか判らぬその夥しい植木鉢を探して庭中を這い廻って歩いたのだ。
父はその時、既に五十に近かった。もともと軽微なロイマチスでもあった。それが今、前後七八時間も雨と水の中に全身ずぶ濡れにして過した。如何に頑強な健康人でもこれは耐えられる事でなかった。父の病気は急に悪化し、三日の後雨と洪水が引いて人々が地主の屋敷へ掃除の手伝いに出かけて行く頃には、父は全身に襲って来た劇しい関節炎のために、豚小屋のような自分の家の中でのたうち廻っていたのだった。

植木は地主にとって大切な財産だった。中には一株が米一石にも相当するものもあった。父はそれをよく知っていた。だから今、その大事な財産を守った父が、そのためにひどい病気になったと知ったなら、必ず相当の手当をしてくれるものと信じていたらしい。だが、何時の時代にも地主や資本家と云うものは、打算に生きる動物であった。彼は、父が病に臥して働けなくなり、最早や無料労働を提供することが出来なくなったと知るや、見舞の代りに、完全に父を突ぱなして了ったのだった。

以来、数年間父は動けなかった。動けるようになってからも決して人並の労働に従事することが出来なかった。温泉も近くにあったが、そこへ行く余裕などのある筈もなかった。僅かに芋粥をすすって家の一隅に横わり、隣村の漢法医に教えられた野生のマツフジを煎じて呑むだけが一ぱいの手当てだった。父は非常に怒りっぽくなり、地主の『温情』に関する信仰を完全に失ってしまった。

父はこれらの事を、時々私に語って聞かせた。勿論幼い私には、家の暮しや、洪水の事や、地主の暴慢振りを根本的に理解する事は出来なかったが、只、自分の家が非常に貧乏であり、母一人が働いて皆んなを育てているのだと云う事やこの貧乏や、苦しみや父の病気が、あの窪地にある白壁の塀を廻らしたお寺のように広くて大きい地主のためにもたらされたものだと云うことを、それでもおぼろげに知るようになって行った。

貧窮のドン底にある私の家の一切の生活は、文字通り母一人の痩腕で切り盛りされていた。実際母が人一倍健康で勤勉で、昼は野山に牛のように働いたからだを、夜は、当時唯一の手工業であった綿繰り、糸紡ぎ手機織りに他家の仕事をまでやらなかったなら、私共はとうの昔に餓死してしまって居ただろう。

だが、母は健康で勤勉だった。三段足らずの小作は、二毛作の麦に至るまで一人で処理して行った。唯一の財産である向山の山畑には、芋やズイキや大豆やネギを、代る代る育てて行った。洪水のために荒れ果てて他人の顧みない川原の荒地を、それこそ原始的な鍬一挺で丹念に打ち拓き、綿や菜種を栽培した。早春、薪を切る時には他人に雇われて山へ行き、賃銀として幾把かの薪を貰って冬に備えた。そして夜は他人の綿を繰り、糸を紡ぎ、機を織った。

父が疼痛に呻いている枕元、土の上に僅かに藁と莚を敷いた家畜小屋のような家のなかで、細々とした行燈の光を頼りに母の夜の労働が進められて行った。或る時には糸車を廻してブンブブンブと糸を紡いだ。そんな時には私は、よく二番目の姉と綿の棒をこしらえる仕事に従事した。黒い丸い竹箸に種をぬいた繰り綿を巻きつけて、一升枡を伏せたその底の上で二三度ぐるぐると、押さえて転すと綿は箸を心に五寸ほどの棒になった。箸を抜いて母に渡すと、母は片っ端からそれを糸に紡いで行った。ブンブブンブと

云う車の音に交って母の千篇一律の唄声が続いた——
　あわてしゃんすな
　まだ夜が明けぬ……
　また或る時には母は、機の上にあった。今頃あんな手織機なんて、どんな片田舎へ行っても見当らぬであろう。長く機に張った経糸を交互に上下さすのは、足でふまえた二本の簡単な桿であった。緯糸を通し、それで密度を調節するのは筬でなく、杼であった。大きな鰹節のような杼の中に緯糸の管が仕掛けてあった。一漏々々杼を左右に抜き出すことによって緯糸を通し、その都度一つコトンと密度を叩いて杼は母の手で運動を繰返した。その運動から起る淋しいリズムは、今も尚私の耳の中にある。
　母が機に上っている時には、私達の仕事は綿繰りだった。一尺四方位の厚い木の盤に、二本の角棒を立て、それによって綿を繰り込む二本の木のローラアが支えられていた。それが綿繰道具だった。ローラアの一本に取りつけられたハンドルを左手で廻すと、それと並行して密接している他の一本に運動が伝わり、二本で綿を食い込むようになっていた。廻すと、ギクギクと音がした。私は小さな膝を着物からはみ出して坐り、ギクギクと云うその小さな音を楽しみつつ、綿をローラアに喰い込まして行った、すると綿の種はローラアに食み出されて手前に落ち、綿だけが道具の向うへめらめらと抜け出て溜った。
　父はおとなしい人だったが、時々癇癪を起した。不治の業病が父の心を時々いらだたせたのだろう。疼痛の劇しい時には一層癇を立てた。母はうろうろして父の世話をしたが、父は行き届かないと云って母を罵った。耐えかねて母も罵り返すことがあった。そんな時にはきっと父は枕元の何かを母に投げつけた。父は病床で動けなかったので憤激のやり場を此処へ求めねばならなかったのだろうが、薬瓶や土瓶や茶碗が母に当って粉々に砕け散るのを見ると、私共は泣くにも泣けなかった。おとなしい母は、事態がそこまで来ると諍うのを止めてジッと耐えて仕事に就くのだった。
『二日でもよい、父の後まで生きて見たい』
　そんな時、母はよく私にこんな言葉を洩した。
　だが、母の機の下で、私が綿繰りを手伝っているような夜には流石に父の機嫌もよかった。
『せい出して勉めや。こんだお母アの織っとるのは坊の着物になるのやぞ』
『ほんとけ』
『ほんとじゃとも、なアおい、それや何時織りあがる？』
　すると機の上の母は、
　あわてしゃんすな
　まだ夜が明けぬ……
と云う口癖の唄声を止めて、
『ウン、明日ひと晩。けんど、坊のにしようか、お父のにしよっか……』

と云う。
『だけんど、お父病気で着られんがな』
と私は答える。
『ウン、着られんけど、売りゃお父の薬が買えるしな』
母は私をからかっているのではない、真実そう思っているのだ。
『イヤ、おらの心配はいらん。なァ坊、坊も新しい着物ァ欲しいわなア』
そして父はしみじみと続けた。
『……今年やア、お天とう様のお蔭で、綿も豊年じゃったと云うじゃねえか。おらもこの調子じゃ来年あたりにゃ起きて働けるようになろうぞい』
『早ようそうなって……』と、母は早くも涙声だった。『……せめて一人息子の坊にだけなと、白い飯を食べさしてやりてえ……』
『おいや、……辛抱してくれ。……なア、三年前の洪水せいなけりゃ、こんなからだにもならんだろうけんど……畜生、地主の野郎のためにこの苦労じゃ……』
『おいのさ。じゃが何んもかも愚痴じゃ愚痴じゃ……』
『愚痴かも知れん……なア坊や、せい出して勉めや。いまに吉兵衛さや佐々木みていに、綿繰りなんかみんな他人(ほかのひと)にさせるようになってやるぞい』
間もなく私は学校へ上るようになった。八つの春だった。二人の姉のうち、二番目のはるは既に死んでいた。上のはつはその時十六歳で、子守か何かに他家へ行っていた。

二

何時のほどにか、私の地方では綿を栽培しなくなっていた。私はそれを少しも気付かずに成長した。
十三の秋であったか、或る日私は学校で綿の事を習った。地理か理科の時間ででもあったのだろう。綿は着物の原料で遠い温かい外国から輸入されると聞かされた。
勃然として私の脳裡に蘇ったのは、幼い頃の綿畑の記憶であった。だが、いくら考えて見ても、現在の村の何処にも綿畑が見当らなかった。そう思えば、綿畑だけでなく綿道具も糸車も手織機も村の天地から姿をかくしている事に気がついた。私は不思議に思った。何のために綿の栽培をしなくなったのか？　なぜそれでも不自由でないのか？　私はその日家に帰ると、夕飯を待って父母にこの事を訊いて見た。
『お父う、何で、もう綿ア作らんのや』
『綿？　綿がどうしたッて』
突然の、しかも思いがけない質問のため父は面喰って訊きかえした。囲炉裏端の二分心の洋灯が、貧しい豆飯をのみ込んでいる親子三人を照し出していた。
『ウン綿よ。のう、おらら幼い時に綿ア作ったり綿繰りし

たりしたじゃねえか。そんだにもう綿ァ一つも作らねえ。これ、どんなわけだちゅんだよ』

『なんや、また今日はひょんな事を訊き出したな。……ウンそう云えア、何時ン間にやら作らんようになっとるな』

『それでさ、不思議なんや』

『ウーン、それァな……綿ァ作っても引き合わねえからよ。此処辺じゃよく実のらねえし手間がかかるし、金にならねえしよ、それよかその暇で労銀取りして買うた方が安いんじゃな。そんで作らんようになったんじゃ』

『世ン中開けてくると』と、母も口を添えた。――『何もかも変るぞい。綿ばっかりでねえぞい。菜種油も手作草履もみな無うなった。これ見イ、こんな明るい洋灯がはやるし、手作草履はく者ァ一人も居らん。猫も杓子も、みんな下駄じゃ』

『昔から見れァ、豪れえ違いじゃ。だけんど、そのかわり現金が無うては日暮しァ出来んて』

『なァ坊、昔ァ何も彼もみな自分の手のもんで間に合うたが今じゃ世ン中ァ進んでそんな事ァ流行らんようになったんじゃ。その代り金じゃ。綿作り織機ァせんでもええが、田圃の暇々に工場でも鉱山でも行かんならん。そして人に使われて労銀取りせずにゃ、田圃ばっかりじゃ行けんぞい。便利ンなって有り難ていようじゃが、苦労の絶えぬ世ン中だい』

父と母とが交互に繰返すこの説明も、しかし少年の私にはよく呑み込めなかった。

私は学校で先生にも訊いて見た。すると先生は即座に答えた。

『そりァ君、世の中が文明になったからです』

文明？ そうだ文明！

注意して見ると、確に世間は私の幼い時より変っていた。村から三里ほど離れた海岸線を、数年前に汽車が開通していた。学校の上の山へ登ると、海岸線を白い煙を吐いて通る汽車が小さく見えた。一昨年から、山を越えた南の谷の奥にY銅山が出来た。自分の村にも三年前から陶器工場と製糸工場が出来て沢山の男女がそこで働いている。村には呉服屋が出来、床屋が出来、雑貨屋が出来、菓子屋が出来た。天狗印の私製煙草が影をひそめ、代って『お上』の煙草が幅を利かせている。行灯が洋灯になり、ベタ紺の手織着物が、縞や飛白の『呉服』に変った。糸車や手織機の代りに養蚕の棚が家の中を占領し、綿畑の代りに桑畑が出来た。村の道路が拡張され、橋が新しく架け代えられた。――

確に『文明』はこの寒村へも這入って来ている。

だが、だが『人に使われて労銀取りしなければ、田圃ばかりで暮せない、便利になって有難いが、苦労の絶えぬ世の中だ』と母は私に教えた。――これが果して『文明』だろうか？ 部落の地主の坂村は、依然として大地主であった。否、地主以上であった。彼は、有り余る金を、近郷近

在に勃興する新しい事業へ注ぎ込んでいた。部落の坂村は、県の坂村になっていた。何十万とか云う大資本のY銅山にも彼は相当の株主として参加していた。しかし、部落百戸の大多数は、これまた依然として坂村に支配されている水呑小作たる事に変りがなかった。否、これらの百姓は、坂村の小作人であると同時に、陶器工場や製糸場の雑役夫であり運搬夫であった。Y銅山の臨時雇であり、道路工夫であった。彼等は小作田を耕作する暇々に、工場や鉱山へ働きに出るのだった。

小作人や貧しい自作農の神さんや娘達は、自村の製糸工場へ働きに住込んで行った。青年達は、近いY銅山や陶器工場へ職工となって住込んで行ったばかりでなく、中には、遠い京都や大阪へさえ『成功を夢みて』出稼ぎに行った。

これらの労働は、成果となって年二回、盆と暮とに幾許かの現金を貧農の家々へもたらした、がそれは一日と止まる事なしにすぐ他へ持って行かれた。それが少年の私にもよく分っていた。肥料代、物納から金納へ転化した小作料、『便利』な『文明』への消費料、そして借金の利子。持って行かれるところは無数にあった。だが、何処の家でも儲けて来た家族の労銀はその何分の一にしか当らなかった。神代ながらの貧窮した生活が依然として続き、近代的な激労が再び彼等を引っさらって行った。そしてその半面に、地主や工場主は益々太って行くのだった。

私は子供心にも、文明とは変なものだと思った。しかし、これがほんとうに近代的な文明の姿であったのである。

考えてみると、当時は丁度日露戦争直後の時代であった。日清、日露両戦争に勝利して、資本主義が愈々展開期に入った時代であった。官業と政府に対して民業が起り、政府の保護政策に対して産業における個人主義が勃興した。思想界では自然主義が全盛となり、社会主義が漸く先覚者を把えて来た。商品生産が素晴しい勢で都市に溢れ、近代生活のベルトが都市から農村へ投げかけられた。商品は魔術をもって交通線の発達をお先棒に山奥の寒村の隅々まで喰い込んで行った。そして、其処に保たれていた古い秩序と生活様式を一たまりもなく破壊したのだ。手織木綿や、菜種油や、草履やの手工品の敗北は問題じゃなかった。農村民衆全体の、資本主義への敗北が、其処に起ったのだった。

資本主義はまた、安い労働力を求めて、生活程度の低い農村の隅々へその生産機構の細胞を持ち込んだ。農村における企業が新しく展開し、古い地主は新しい資本家と結託して行った。農村の青年男女は駆り出されて都会地で賃銀奴隷に早変りした。

地主は金納制度を採用して、小作米の価格の変動と売却の手数を小作人に転嫁した。資本家地主の政府とその地方出張所は、資本主義のために番犬となり、高い税金や寄附

金をとりあげて道路を拡大し、橋を架け、鉄道を敷き、学校を建て、警察を増設して小作人を誅求した。
これが明治四十年初頭農村へもたらされた『文明』の正体だったのだ。
勿論当時の私にはこう云う事が判らなかった。私は只『文明』に疑問をもち『文明』の中に父母と共に苦しんでいたに過ぎなかった。
耕作の仕事は相変らず苦しい。だが、その外にも母は『労銀』を求めて有りとあらゆる激労に従事しなければならなかった。
姉は、近村の製糸工場の女工として、一家の支柱を司っていた。
私は母につれられて田畑へも出た。学校から帰って来ると風呂敷包みを土間に投げ込んで、そのまま母の居る田圃へ出掛けて行った。
田植えが一番楽しみだった。本家の伯父一家と助け合って植えて行くのだった。朝早く苗代におりると、長く伸びた早苗がさわやかだった。しゃがんで引き抜くと、パシャパシャと根本の泥を洗い落して束ねた。村の木立は滴るような緑に燃えていた。燕が腹を翻してスイスイと飛んだ。
『今日はさつきか？』
斯う云って農夫達は畦道を通って行った。
抜き取った早苗を籠に入れて田へ運ぶと、畦の上から、ポイポイと澄んだ田の中へ投げた。すると母や従兄弟達が男も女もそれを植えつけて行くのだった。
夏の炎天に、パシパシする鋭い稲の葉の中へ顔を突込んで草取もやった。汗が全身を流れ、顔は稲の葉で傷だらけになった。
母につれられて、雪の降る中を陶器工場の薪運びにも出かけて行った。運搬夫は大抵女か子供で小作人の神さんや子供達だった。杉立つ雪の谷間を踏み登り、吹雪の鋭い松と岩々の山根を越えて、遠い遠い奥山に割木の棚が並んでいた。私共は雪を掘って薪を引き出すと、雪の上に背板を並べて荷造りした。そしてそれを背負って元来た足跡をたどり、山の根から横腹へ、横腹から谷へそしてまた山の根へと、雪にまろび乍ら熊のように村へ急いだ。午前に一度午後に一度が漸くだった。一日に二度運んで、母達大人は四十貫も稼いだ。私は身体が弱かったので、一度に五貫がやっとだった。従兄弟の安吉は同年で八貫も運んで私や母を羨ましがらせた。十貫運んで賃銀は僅かの三銭だった。
十三の年だった。
何処の家庭でも、どんな子供でも、斯ういう激しい労働はつきものだった。何んなに辛くても、村の工場が与えてくれる労働に参加しなかったなら、家付の女や子供は労銀の取り場を失うことになるのだった。
父は相変らずロイマチスのために人並の労働が出来なかった。Ｙの銅山や村の陶器工場へは、五十六十の老人も働

きに行った。だが、私の父はそんな激労に耐えられなかった。それで父は、耕作のうちやさしい仕事を母に手伝う外には、主として昔からあり来りの田地山林の仲介や生り果物の担ぎ売りをやっていた。田地の仲介は相当にあった。大抵は自作農が窮迫して伝来の持ち田を売り出すのだった。この仕事は冬に多かった。二月の正月には、嫁と田が騒ぐと云われていた。父の仕事は、売人買人の間に話をまとめて、少しばかりの仲介謝礼金を受ける事にあった。

春になると茶の仲介をやった。これには私も手伝った。村の老母達は、桑の実の熟した畑の角で、一株二株ずつある新芽を摘んだ。大抵小さな孫の守を兼ねていた。夕方になると父と私は畚をもってそれを買い集め、翌朝町へ父が売りに行った。三銭五銭の口銭が父の収入となり、田の仲介の謝礼金と共に、肥料代や小作料のために積み立てられた。

稲刈りが大体終って、十月の終りになると、近村の寺々に報恩講が挙行された。稲の刈取りを終えた農民達は遅手の籾を気にしながらも、珠数と弁当で、今日は山を越え、明日は谷川を下って参詣に行った。私は父につれられて、果実の露店を出すべく報恩講の寺々を廻って歩いた。報恩講の寺の内外は、素朴に着飾った農民の男女老若の群が押し合っていた。まんじゅや氷砂糖やニッキ水や玩具や果実を売る露店が寺の附近の道の両側に軒を並べ、覗機関が人々を呼んでいた。子供達は一銭二銭の小遣を貰って、鳴り風船や鉄砲や、焔硝を買い、この一年一度の楽しみを享楽して立騒いだ。

『さア買わんか買わんか。安うてうまい柿に梨！　さア買うたり買うたり！』

父は、その瘦せた容貌にも似合わぬドラ声を挙げて、前を流れる雑沓に呼びかけた。

『さア坊、お前も呼ばんとあかんぞ。……さア買わんか買わんか！』

だが、私は露店の中に立つと、どうしてもその呼び声を上げることが出来なかった。

時とすると、雑沓の中に村の少年の顔を見つける事があった。そんな時私の全身の血が跣足で頭へ上った。恥しくて世界が真暗になるように思われた。

十一月に入ると、毎日のように籾摺をやらねばならなかった。もう降雪の用意に、すっかり藁や萱で腰を包んだ家々の中から、ゴリゴリゴリゴリと云う磨臼の音が響いて来た。木々は綺麗に葉を落し、枯木のような柿の枝に、採り残された二つ三つの赤い柿が見えたりした。

一年に亙る労働の成果は、愈々最後の米に仕上げるこの籾摺の作業において、農夫達は各々憂鬱になるのだ。ドン底の小作生活をやった人間でなければ農夫のこの悩みは解らない。収穫した米の半分以上を地主に略奪されると云う事実こそ、この憂鬱の根源だった。

父も母もこの愚痴をこぼしつつ籾摺を続けて行った。母はリスのように敏捷な動作で、臼の柄元を握って廻転を調節した。私と父はY字形の押木を押して臼を廻した。米と籾殻に分れた籾は、臼の横腹をぐるりと破いて弾け飛んだ。無数の埃が舞って暗い土間を一層暗くした。
唐箕にかけるのは母の仕事だった。千石篩を調節するのは父の仕事だった。私は摺籾を唐箕に運び、更に千石篩に運んだ。千石篩の下にうずくまって米を選り別けている父の姿は痩せた沢蟹のようだった。
或る霙の日だった。私達親子は、かじかんで来る手や身体を我慢しながら、是を今年の最後として『大場』の籾摺をやっていた。
『やれやれ、今年の田圃の仕事も、もうお仕舞じゃ』
千石篩の下から立ち上った父は、垂れ下る鼻汁を吸い上げながら云った。
『うれしやな、御苦労様じゃった』
と、母もそれに応じた。
米が六七俵――その時分はみな五斗俵だった――と籾が三俵土間の隅に積んであった。他に屑米が一俵あった。積み上げた米は小作だった。金に換えて地主の帳場へ差出さねばならぬものだった。今日摺っている若干と、三俵の籾と一俵の屑米が僅かに自分のものだった。
『得米（小作米）さえ収めりゃ、二十両の借金は待ってやると地主さ云いよった。暮れにァはつが肥料代を儲けてくるじゃろ。どうやらこうやら今年もこれで暮が越せるぞい。――じゃが、惜しいもんじゃなァ』
父は、積み上げた米を見つめて、長い眉毛をピクピクさせた。
と、そこへ玄関の蓆をまくってぬっと這入って来たのは地主の使用人吉松だった。
『どうじゃ、大百姓じゃから、中々籾摺も大変じゃろ。……おお、摺り上った摺り上った』
柄が小さいのと冷酷極まるのとで、蝮と綽名されているその男は、筒袖の中の懐手を出しもしないで、積上げた米俵へ顎を向けた。
『まァ、これさ、吉松どんか散らけたとこじゃが這入ってくらっせ』
癪に触るが地主の手先だ、母は働く手を止めて吉松を迎えた。
『いんにゃ、這入らん。ところでここのお父う、お前はあっちこっちの報恩講様で、今年ァ豪い儲けをしたそうな。坂村さんの借金も返せるじゃろ。今貰いに来た』
そして入口の敷居の上に悠然と腰を下し、腰の煙草入れを抜き出した。
『ああ、そうじゃったかいの――』と、父は千石篩の下から這い出して土間の入口の吉松のそばへ行って突っ立った。そりゃ約束が違う、と云いたげに濃い眉毛がピクピクしている。『ちったァ、商で儲けるにゃ儲けた。だけんど

もう一厘もありましねえ気の毒じゃが四ヶ月頃まで待って下され』
『四ヶ月？　オイオイお父う、馬鹿もええ加減にせえ。切りは十月でもう二週間も延びとるぞい』
『おお、そりゃ分っとる。そんでに先月坂村どんへ頼みに行った。そん時、今年の得米せい綺麗に収めりゃ金は春まで待ってやると云わっしゃった。お前さそれを知ってござるか』『なるほど、そんときにァ、大将もそう云わっしゃったそうな。じゃがお父う、お前さ商で溜めた金を、他の安田や吉兵衛さの方へ返して、義理ある地主にゃ知らん顔しとるじゃねえか。うちの大将はこれを訊いて豪い立腹じゃ。そんな義理知らずに待ってやる事ァいらん。吉松、今日は行って貰うて来い、とキツイ命令じゃ。知っての通り、うちの大将は云い出したら後へは引かん。気の毒じゃけんど、俺は使じゃ、米でも何でも貰うて行きますぞ』
そして吉松は、一寸表へ出て行ったが、間もなく荷車を一台引っぱって来た。
『この通り車も用意して来た。金が無けりゃこの米を貰うてく』
『やァ、待ってくらっせ』
と、父もうろうろ声だった。
『この米ア、地主さ収める小作米じゃ。それを持って行かれちゃ小作料はどうなる。……そんなら、今年の小作料さ待ってくらっしゃるか』

『その心配はいらねえ』
と、土間へ踏み込んで来た蝮は傲然と云いはなった。
――『序でじゃから云っとくが、なァお父う、今年からは坂村じゃ小作料は小作人の勤め先で、労銀の中から天引しといて貰うことにしましたぞい。あァ、誰でもええ、婿でも娘でも息子でも誰でも働いてる先イ行って、ちゃんと親方に引いといて貰うことにしたぞい。知っての通り、在所の陶器屋の村田はうちの親類じゃ、Yの銅山もうちの大将は豪い株持ちじゃ、W村の製糸場やそん他の工場でも、坂村が頼めば嫌云わん』
そして彼は、積んである米に一度腰をおろすと、なおつづけた。
『そんでに、お前とこのはつの労銀も、W村の加藤工場から直接にうちが貰うて来る。どれだけ儲けてあるか知れんが、四石の小作料にァ危いもんだなア、ヒヒヒヒヒ』
聞いていた父も母も小さな私も、云い合わしたように棒立ちになった。憤激と絶望に目の前が真暗になった。私は小さな胸に戦慄の起って来るのをどうすることも出来なかった。
小作人の息子や娘達の勤め先へ手を延ばして、その給料を天引する！　しかしそれは坂村の地位をもってすれば、出来ない事でなかった。彼は近郷に鳴り響いた地主であり素封家であるばかりでなく、新進の地方的資本家であった。彼は近郷の大抵の事業に出資して居り、近郷の地主や

事業家の中心勢力となっていた。又、近郷の地主や事業家の中に、多くの縁続きや親類を持っていた。そして、当時の労賃は例外なしに盆と暮との二回払いだった。
信じ難いほどの恐ろしい力の前に、今は茫然と棒立ちになって了った三人の小羊達の蒼白の顔色を見ると、蝮は痛快そうに哄笑した。
『ワハハハハ、お父う、そんに驚くことアないわさ。出すもなア出さんなん。取るものなア取らんなんどうせ出すもんなら、手間のかからん方がお互にええ。……さア、そいじゃこの米貰ろて行くぞい』
『どうでもして下され。借った者ア弱身じゃ……お母アも坊もあきらめろ！』
父は悄然と答えると、わなわなふるえる足を運んで、そのまま奥へ這入ってしまった。蝮の吉松は、母と私を尻目に鼻唄を唄って四俵の米を次ぎ次ぎに表の車へ運び積んだ。そして寒い霙のはれた夕方の道を、窪地に向って引きあげて行った。当時米は一石十円位だったと記憶している。
年が迫った。雪が五尺も降っていた。氷柱が藁屋の軒々にぶら下り、藁搗く音が遠い響きを伝えた。正月が近づいても村では餅搗く音もしなかった。
吉松の宣言の通り、はつの給料は勤め先でそっくり地主の方へ渡された。だが、それは決してはつだけでなかった。はつと一緒に村から女工に行っている誰も彼もが同じ被害を蒙った。否はつ達の工場だけでもなかった。陶器屋でも銅山でも同一の天引が、坂村のために実行された。
村の人々は、打ちひしがれたような絶望の心をもって正月を迎えた。彼等は暗く悲しい心持ちに人知れず泣いたが、しかしどうする術も知らなかった。

三

校庭にはチラホラ山桜が咲き出していた。学校の背後の山裾の陽だまりに、薪を切る農夫が立ち働いていた。
講堂には、今日を着飾った三百の生徒が小さい一年生を前にずっと後へ並んで腰をかけていた。来賓席には巡査や学務委員や村の有力者が紋付羽織で腰かけていた。今年から村長に就任した地主の坂村も、そのデップリした赤顔をフロックに乗せて尊大そうに並んでいた。
校長の訓辞が済むと、私は膝にしていた夥しい賞品を腰掛けの上に置いて、そうっと立ち上った。私は卒業生を代表して『答辞』を読むことになったのだ。
『なるべく当日は紋付を着て来るように』
と、前以って受持ちの先生から注意されていたが、紋付どころの騒ぎではなかった。よれよれの小倉の袴さえ漸く借りて間に合わしたのだった。私はそれに引け目を感じつつ式台の前へ進んで行った。
――維時明治四十四年三月二十八日、幾多貴賓ノ来臨ヲ

交っていた。

そう云う言葉で綴られた答辞を、私は震える声で読み上げて行った。読み終って、チラと、左手の廊下を見ると溢れるように詰めかけている父兄達の中に、父の瘦せた顔も交っていた。

螢の光窓の雪
　ふみよむ月日重ねつつ
　いつしか年も過ぎのとを
　明けてぞきょうは別れ行く

校門を出ると、校舎を振り返って私は感慨無量だった。八ヵ年も通った懐しい学校！　これで一生学校と云うものに遠ざかって行く自分の将来！

私の胸はいつしか熱く熱くなって来るのだった。

家へ帰ると、父は既に帰っていた。そして家の前の路端に新しく買山から伐って来た青葉の柴を並べて、山田と云う知人と腰かけ乍ら話していた。

『ほら源治さ帰って来た』と、急いでかえった私の顔を見ると、山田のお父うが云った。――『豪いもんじゃ、褒美がひと抱えじゃ』

私は微笑して家に這入った。

『なア、金さえありゃ、学問さして……ここの源治等いくらでも豪くなれるのじゃが……』

『いやはや、学校のすむのを待っとった。早う大きくなって金儲けして貰わなアどむならん』

山田のお父うと父は話合っていた。

飯を食って、着物を着かえると、母が朝から弁当持ちで行っている田圃へ出かけて行った。出かける時にも父達の話はまだ済まぬようだった。

父達が何の話をしているのか、何かしら私には気がかりだった。何時も来たことの無い山田のおやじの来ているのが不思議なのだ。若しかしたら私を銅山へでも……そう思うと山田のおやじがY銅山の鉱夫であることに気がついた。銅山の仕事は荒い――そう私は聞いていたので一寸恐れに似た気持ちがあった。だが、もう十六で学校も終ったのだ。どこへでも行こうかい。

だが、山田のおやじの来たのは、もっと厄介な話を持って来たのだった。姉の恋愛――結婚の問題だった。

『なアおっ母ア、今日山田のおやじが来てなア……』と、父はその夜夕食が済むと話し出した。

『……ひょんな話でな』

『ウン、坊から一寸田圃で聞いたが……』と、母も何かしら？　と興味を持っているようだった。

『それがさ、困った話で……はつ嫁にやらんかちう話なんじゃ』

『何の話やったぞい』

『またか？』と、母は即座に答えた。――『何処か知らんがやれんやれん。まだ二三年坊のせめて十八九になるまで何処へもやれんぞい』

『おいやさ、それァわかっとる。きょう日はつを取られたら、家ァ一寸もやって行けんこたァ俺が承知じゃ。じゃがな。こんだは一寸困ったことにァ、はつは男ともう約束して坊の学校を卒業するのを待っとったちゅのじゃ。年が年じゃから無理も無えが、家の有様を見りァ、手放しかねる。困った事じゃ』

男と既に出来ていると聞くと、母も頗る当惑したようだった。一瞬間、何かに突き当ったような空虚な顔をした。

『…………』

『そんでに俺は、いつもの通り家の事情を云うて、断ったは断ったげんど……』

父も当惑し切っている。

実際これは私の家の浮沈に関する重大問題であった。姉を他家に取られることは、私の家を暗闇に突落すことだった。私はまだ子供で父は病身だった。僅かに三段に足らぬ小作を維持するだけにでも、誰かが『労銀取り』をやらねばならなかった。そして私の家では、姉がこの重大なる役目を帯びていたのだった。姉が製糸工場から儲けて来る年額四十余円の労賃が、私の家の肥料代や、県の税金や、小作料やらの信用の根源であり、財源であった。

三段や五段の小作に生きる貧農の娘に恋愛や結婚の自由のありようが無かった。部落の娘達は『親兄弟のため』に労賃を追うて、晩婚へと追いつめられた。余り年齢を取り過ぎて婚期を失い、独身で世を送る娘さえあった。そんな娘へは村長坂村から表彰状が贈られ、孝行娘の典型として誉め称えられた。資本家と地主はその貪慾な搾取を容易にするために村の娘達の結婚の自由さえ『不孝』と規定していたのだ。

階級意識の片鱗だに持たなかった当時の貧農達には、彼等の生活の貧困におけると同じく、この可哀相な娘達の運命の拠って来たる根源を見破ることが出来なかった。彼等はこの運命を偏えに貧乏人に与えられた当然のものとして受取り、娘達に強制して来た。悲しみ、嘆き、苦しみ、喘ぎながらも、強制せずには居られなかった。

だが、若い血潮の燃える娘達はたまらなかった。彼女達も勿論この受難の来たる根源を知らなかったが、胸の裡から溢れ来たるやるせなさと淋しさにたえられなかった。彼女達は偏えに父兄の甲斐性無さを憾み、次第に自分自身でこの荊の道を打開する手段をとるに至った。勝手な恋愛と出奔がそれだ。

女性の自由な恋愛が、一つの反道徳な行為として指弾された当時において、娘達のこの態度は確に思い切った態度、行為であった。だからこの結果は醜い親娘間の争いとなり、彼女をも、また彼女の父母兄妹をも更に百倍する貧窮と苦悩の地獄へ突落した。

私の姉も同様な道を辿った。姉はもう二十四だった。地主の強制する道徳から云えば、彼女も確に孝行娘の一人であった。だからこの二三年来、冬から春にかけて結婚の申

込みが絶えずあった。だが、父と母とはその生活の防衛のために――本質的には地主坂村の貪慾に縛られて――其の都度断然と拒絶し続けた。
『せめてこの坊主が十八九になるまで……』
斯う云って次ぎ次ぎに打ち消されて行く結婚話を見送って、姉は辛抱強く二十四の今日まで工場で蛹の香を嗅いで来たのだった。――
が、その姉も今や父母に反逆した。勝手に男をこしらえて此の始末をどうつけてくれる？　と迫って来ている。それは父母の手から出奔するスタートの構えでないか？
山田のおやじから話を受けて、今私の父母が当惑し切っているのは決して無理ではなかった。
『一体相手はどこの者じゃ？』
母は、暫くしてからはじめて肝心の事を訊いた。
『何でも一緒にWの加藤に働いとるS村の男じゃそうな、家は矢張百姓で、男ァ長男、工場じゃ釜場の腕利きじゃということじゃ』
S村というのは、私の部落より西へ加賀平野を二里半も行った海岸近くの農村だった。そこには山田の親類があり、其処を頼って男の親元から申込んで来たものだった。
『困った事じゃ』と、父。
『…………』
『キッパリはねれや、近藤のみつ見たいにどんな事するか分らんし……』
『…………』
『嫁ってしまえァ家ァ困るし……』
『…………』
『腕利きでも……』と、母は初めて決心したように口を切った『またァ、はつがどんな関係しとるにせい、こりゃ矢張り先方へもキッパリ断り、はつにも諦めて貰うより仕方があるめえぞい。はつも親子三人の為めじゃ、よもや我慢せんとは云うめえ。そんなこと云うたら鬼じゃ』
『ウン、そうしよう。それより外に仕方があるめえ』
それから二三日して、姉は一日の休みに帰って来た。男の方から申込んである事を知っていたからだろう、妙に窮屈そうな態度と、また反対に反抗するような態度とを交ぜて家の敷居を跨いで来た。
その夜、私が寝床に這入ってから、父母が交互に姉を口説いているのを耳にした。
『どんな約束があるか知らんが、今まで辛抱して来たお前じゃ、キッパリ手を切って家のためにもう二三年辛抱してくれ……』
父の声だ。
『今まで真面目な者じゃと評判とったからには、もう二三年後指さされるような事せんと置け。俺がの頼みじゃ……』
母の声だ。

『坊も真面目な者で、間も無う銭儲けするようになる。親や弟を助けると思うて、軽卒なことアせんと置いてくれ。お前が頼りじゃさかいにな……』
こんな言葉の中に、姉の切れ切れの言葉が続いた。
『もう俺も二十四じゃ。糸場じゃ婆さん、婆さんと云われて……』
『おいや、そりア判っとる』
『……幾つ何十になっても……恥しや……』
すると母の息んだ言葉がはさまる。
『じゃがはつ、おっ母アの苦労思えア、そんなこと何ぞい。親に甲斐性が無いと思うか知らんが、病気なりア仕方があるめえ。自分だけよけりア親兄弟がどうなってもええというのは鬼ぞい。』
威し、賺し、口説きして、それでも父母は姉を説伏したらしかった。翌日田圃で母に訊くと、
『親の頼みを聞かん馬鹿でもあるめえよ』
と答えた。
だが、二週間の後、姉と一緒に働きに行っている他の娘が十五日の休日に帰宅した時、私共は大変なことを聞かねばならなかった。
『そうか、承知してやらっしゃったのじゃなかったんか』
『もう三日も前の事じゃぞい……』
『え、大変喜んで、いそいそと荷物をまとめて行かしゃった……』

夕方の薄闇の中、家の表の柚子の木の茂みの下で、野良から帰って来た母と私とを捕えて、娘達は口々に喋った。姉は三日も前に男と一緒に工場を出て行ったと云うのだ。
この話を聞くと、母は気狂いのように逆上した。まさかと信じていた娘に裏切られた口惜しさと、暗の経済の切迫を如実に感じた事が、母の思慮を狂わしたに違いなかった。田圃から携えて来た鍬を玄関に投げ出すと、嗚咽をあげつつ家の中へ駈け込んで行った。
家の中には父が一人、暗がりの中にポツネンと坐って、炉で茶を沸かしていたが、この有様に驚いて叫んだ。
『どうした？　え？　何した？』
『ああ、口惜しい！　口惜しいわいの！』
母は喪心したように突伏すと、只身をふるわして泣くばかりだ。
『え？　坊どうしたんじゃ？　おっ母アどうしたんじゃ？』
父は闇の中を立ち上って、土間にうろうろしている私に劇しく訊いた。その声はうわずっている。
『何んや知らんが、姉が工場に居らんようになったちゅで……』
『ナニ、はつが工場から逃げた？　どうして？　どこへ？』
父も流石に愕然としたらしかった。
『俺はよく知らんが、今表で橋本のイシや吉岡の姉達アそ

う云っていた。姉が三日前に男と工場を出て行ったって』
『そうか、ウーム』
と、父も初めて事態の重大性に気付いて呻いた、――『困った事をやらかしたなア』
それから私は夕食を掻込むと、母に連れられて姉の勤め先たるW村まで夜道を急いだ。工場へ行ったとて姉の居ない事は分っていたが、母が承知しなかった――他人の大事な娘を預っていながら、こんな大事を仕出かした工場主が悪い、工場主に談判して無事に返して貰わな承知出来ん、――母は斯う云って承知しないのだ。ジッとしていられなかったのだ。
W村は北方へ山越えして一里あった。私は悪魔に憑かれたような母に食っ付いて、細い曲折した闇の山道を急いだ。母は一言も発せず、暗い提灯を突き出しながら蹴けるように急いだ。
W村の加藤工場へ行ったが、もとより何の要領も得なかった、むしろ立腹の上塗りをするようなものだった。門を潜って石炭殻を敷き詰めた広場を、とっ突きの事務所――と云ってもそれは工場主の自宅の一室であった。――へ這入って行った母子は、前垂れ姿の小生意気な若い事務員に鼻で応待された。
『はつさんは三日前に片山君と結婚するちゅうて、当工場を暇取って行った』
母がくどくど事情を話すと、
『そんな事は此処の責任じゃない。片山君のとこへ行って云い給え』
と云った。
取りつく島もなかった。憤怒に燃えながら暗い夜路を悄然と帰るより仕方がなかった。片山と云うのは姉の『男』の名前らしかった。
こんな事件になると、父親より母親の方が強く憤慨するものらしい。私はこの時の母の、余りにも強い憤激と行動とにそれが収まってからも長い間脅かされた。執拗な泣きごえ、繰返す呪咀、そして猛り立った昂奮は、遂に母を持病の癪へと導いた。それが母思いの私の胸にどんなに強い衝動を与えたことか。
大体母は、姉の結婚問題について、常に父よりも積極的な意見を持っていた。父は、姉の結婚延期が偏えに自分の病身の故にあると考えていたらしく、絶えず働く姉に引け目を感じ、同情をもっていた。しかし母は違っていた。母は二十年来、病夫と貧困を一身に背負って、熊のように働きつづけ、そして子供達を大きくした。その子供が、この苦しみに耐えて来た親と家を救うために、僅か婚期の二年や三年延ばされた所で、決して不服を云うべきではない。――と母は常に主張していた。しかし母はこの主張を実行に移す場合には決して威圧を用いなかった。当然の事と思い乍らも口や行いでは頼みに頼んで来た。苦悩に耐えて来た母なればこそであった。それが今、根こそぎ娘のために

覆えされた。
母の憤激はむしろ当然であったかも知れない。
だが云うまでもなく、この憐れな貧農の一家は、反抗すべき、憤激すべき戦うべき敵を間違えていた。一家の経済を破壊し親子間の愛情を攪乱し、骨肉を醜い争いに導いた真実の敵は、段に一石五斗も掠奪して行く地主その者ではなかったか。
しかし、当時のすべての農民達と同様に、この事を少しも理解しない私の一家は、更に更に醜い争いを展開しなければならなかった。
W村へ行った翌日、私の家では急遽親族会議が開かれた。父、母、私、伯父、母の枕元に集る三人の男は細々と相談した。
そのまた翌日朝早く、私は伯父と一緒に、姉を引摺って来るべく、S村へ出かけて行った。嫌でも応でも男の手から引き離し、女工を続けさすこと――斯う決まったのだ。
七十を過ぎた伯父は、それでも元気だった。新しい紺の法被に紺の股引をはいて、草鞋がけでとっとっと歩くのを見ていると、若い者のような気がした。谷川に添うて路を下ると処々で声をかけられた。声は田圃の鍬の音から来る。
『今日はどこじゃ？』
『ウン一寸町に用じゃ』
私達は他人に知らせられぬ用事を持っていた。――
S村は海岸近くの村であった。山が無くて松林があった。部落の背後を汽車路が通っていた。
片山と云う家は、往来に面した村の入口にあった。伯父と私とは家の前に着くと、すげの笠を脱いで、入口から声をかけた。何処も同じ建方の家で、入口の大戸の中は広い土間、その左手に勝手流しが設備してあった。暖かい日だった。
『毎度さん、御免』
声をかけて私と伯父は土間を覗いた。と、声に応じて、流元に茶碗を洗っていた若い女が、
『あい』
と返事をして顔を向けた。それが『自由結婚』をやった姉だった。
『あ、姉（あんね）！』
私は思わず叫んだ。と、姉も私共に気付いて、咄嗟に家の中へ逃げ込んだ。私はその姿に『他人』を感じ、一寸、空虚な心だった。
家に這入って、先方の親達との間に一通りの挨拶が済むと私共は直ちに用件に話を進めた。そして私は此処で飛んでも無い事をやって了った。
それは斯うだった。話が進んで、先方の親達が、娘をつれ出した息子の行為と、それを承認して勝手に結婚させた自分達の非を平謝りに謝った後、それではつさんを連れて帰ってくれと云い出した時、それまで奥にかくれて姿を

見せなかった姉が泣き乍ら出て来た。そして斯ぅ云ぅのだ。——

『俺はあんな情ねえ親達のとこへ帰らん。どうしても連れて行くなら死んでしまう』

そして如何にも男の家の者らしく、また奥へ這入ろうとするのだ。

私はこの言葉を聞き、この行為を見て、前後を忘れて了った。殊に『あんな親達』と云う言葉に胸が煮えくり返った。

『ナニ、もう一度云って見ろ！　畜生！』

そう叫ぶと、板の間に蹙然たる足音をたてて姉の背後へ飛びかかった。

『あ、あんな親たァ何じゃ！　お、おっ母ァはお前のために病になっとる！　あ、あんな親たァ何じゃ！　き、きさまは自宅よりここがええのか？　ど、どこの馬の骨やら分らん、ここの泥坊がええのか？』

私は大声でそう叫び乍ら、姉の髪を引摺廻し、手当り次第に擲り続けた。

先方の両親は同時に立ち上った。そして

『まアまア、兄さん、腹もたとうが堪忍して堪忍して……』

と、うろうろしながら私を姉から別け隔てた。

別け隔てられ乍ら私は伯父を見た。伯父は囲炉裏端に黙然と坐って灰色の眉毛の下で瞳をつぶっていた。私はそれを見ると急に悲しさがこみ上げ、ワァッと声を出して伯父の膝へからだを投げかけて行った。

斯うして憐れな姉弟は、赤の他人の家で恥しい争いを曝露しながら、最後に矢張り一緒に我家へ帰らねばならなかった。夕方私共三人は黙々として人目を避けながら家路へ急いだ。

家に着いてから、また一騒動持ち上った。今度は母が過日の鬱憤を爆発させたのだ。

私共の後について這入って来た姉の脹れ面を見ると、母は物々しい形相をして憎々しげに睨みつけた。その唇はぶるぶるとふるえ、瞳は焼きつくような憎悪に燃えていた。そして姉が黙つて炉端に坐ると、耐えかねた如く激烈な罵詈を叩きつけた。

『よ、よくも、おおお、おめおめと帰って来やがった！　おお、親の苦労をも知りくさらずに！』

『まア、まア、帰って来たのじゃから……』

伯父はなだめた。だが、母は止めなかった。

『イヤ、イヤ、云わんと置こうかい。このすべた女郎！　顔を見せ！　親の顔に泥を塗りやがって、畜生ッ！　ど、どの尻で男とくっ付きやがった！』

『なア、おっ母ア！　いい加減にしなせ。若い坊も居ることじゃ！』

『どの尻で、ど、どの尻で男を追い廻しやがった！　この恥曝し！　畜生！　ど畜生！』

そして母は矢庭に立ち上ると、下座にうつむいて坐って

いる姉を、脚を上げて蹴倒し、跳びついて髪を掴むと毟り廻した。

『畜生！　畜生！　畜生！』

『ああ、修羅じゃ！　地獄じゃ！　俺ア見ていられん。地獄じゃ！』

父はほろほろと涙をこぼすと、ふらふらと起って仏壇の前へ行くのだった。

この事件があった後、姉は間もなく淋しい姿をして大阪へ出かけて行った。『後指さされるような』事件を仕出かした姉は、到底郷里の近くに居るに耐えなかったのだ。

私は山路を遠くまで送って行った。赤松を立てた左右の山肌には、細い雑木が若芽に燃え、早蕨が腕を突出していた。時々雉の鳴く声も聞えた。寂とした山の気は二人の足音を包んで澄んでいた。その中を柳行李を背負って行く姉の後姿を見ると、私は次第に悲しくなった。

『なア、姉！　いつかの事堪忍してくれや！』

私は長いこと云いそびれていたその一言を、やっと姉の耳に入れて涙ぐんだ。すると姉は振り向かずに答えた。

『みんな、みんな仕合せが悪いのだい。お父うにもお母アにもそう云うてくれや、姉は以前のように一生懸命で働くから安心してからだを大事にしてって』

私には今にも嗚咽が口をあふれるのを、じっと食いしばって我慢した。

大阪へ行った姉は、郷里出身の女工を頼って四貫島の紡績工場へ這入ったのだった。姉が大阪へ行った後、私も間もなくY銅山へ、百姓の暇々に通うことになった。

いつしか秋となった。あの憂鬱な収穫が始まった。目前に地主の赤ら顔を思い浮べて私共は稲に鎌を当て続けた。十一月の末だった。雪が、白山の頂を次第に下り広がって近くの山の頂まで来ていた。軒の吊柿が秋の陽の直射を受けて固まる日だった。

私の家へ、大阪の姉から一葉の電報が届いた。

――ハツキトクスグ　コイ

はつ危篤急ぐ来い！

籾を干していた父も母も私もこの紙面を見て愕然とした。就中、春の狂態を慚愧にたえなかった私と母はすっと全身の血の気を失うように感じた。キトクという電文は、シスと云う言葉の代りだと云う事が農村では常識であった。

すべてを抛り出して、直ちに米が一俵金に換えられた。父は喪心したような母を鞭撻して、停車場のあるK町へ急がした。

果して姉は死んでいた。

四貫島の紡績工場に這入った姉は、恋愛に傷つけられた胸を、更に病気にとりつかれたのだった。一度肺を冒されると、原始的な搾取の横行していた当時の紡績工場の猛烈な労働と、毒々しい塵埃とは、急激に病気を昂進させずに

は置かなかった。姉は工場へ這入って四ヵ月にもならないうちに、早くも大喀血をし、同時に工場と寄宿を追い出された。

既に一切を諦めていた。恋愛も、窮乏も、病魔も、その姉にとって、せめてもの願いは、郷里に喘いでいる親と弟と、なるべく心配をさせないと云う事であった。八月、工場の寄宿を追い出されると、知人の、傾いた社宅の二階を借りて病床を移し、ひたすら現状の故郷へ知れることを恐れて死を待ったのだった。

母が未知の土地を、伜に身を委せて姉の住居を探し当てた時、その家には十歳ばかりの女の児が一人居るだけだった。

『加賀から来ました者じゃ。川上はつの母でござります。父さまや母さま留守でござんすか』

母は、Y銅山の軒割飯場に似た軒並の社宅をいらいらした心で眺めながら、精一ぱいの上品な言葉でその児に尋ねて見た。

『ああ、そうだっか。来よったら呼びに来イてかあちゃんから云いつかってるわ。わて行んで呼んで来まっさア』

女の子は、その母親か父親かを呼んで来るべくバタバタと駈けて行った。行く手には、毒々しい煙を吐いている数本の大煙突が、工場と見える大きな建物の空へ突立っていた。

母は、二階へ上って行った。と、そこには娘の死骸が、只一人、冷く淋しく横わっていた。枕元には灰を入れた欠茶碗が一つポツンと置かれてあったが、線香さえも立ててなかった。——

姉の骨を持って家に帰って来た母が、泣き泣きこれらの事を語った時、父も私も手ばなしで泣いた。

家でささやかな葬いを済ました日、親子三人が姉の荷物を開いて見た。小さな柳行李であった。持って行った、着物は一枚も無かった。恐らくみんな売るか質入れしたものだろう。売れ残りらしい襦袢や腰巻や頭髪の物のなかに、キチンと包んだ新聞包みがあった。如何にも大事そうに見えるので、中に何があるかと怪しみながら開けて見ると、新聞や風呂敷の幾重もの包装の中から、出て来たものは綿だった。

『あ、綿！』

『あら、綿！』

私も母も同時に叫んだ。

『何の綿やろ』

斯う云って広げて見ると母の手に縋ったものは、綿と真綿でこしらえた粗末な綿帽子だった。恐らく、姉が親達に無断で『結婚』した時、男の家で慌ててこさえて間に合わせたものに違いなかった。可哀相な姉はそれを一生の思い出に死ぬまで大事にしまって居たのだ。

母はやにわに突伏すと、よよとばかりに泣き出した。

『ああ、はつや！　可哀相な事をした！　堪忍してくれや

！　堪忍してくれや！』

四

明治が大正になって二年過ぎた。その間に父が死んで、私も十九歳になった。

去年の夏、父の死ぬ時、私に残された最後の父の言葉はこうだった。

『兄、――その時分から私は坊と呼ばれず、兄と呼ばれた。――世の中と云うもんは、精一ぱいの金持になるか、そんなかったら精一ぱいのきかぬ気の者になるかせにア、いつも他人の下馬になって頭ア挙がらんぞい。お父は病気じゃったで、思うようにア行かんだがな』

私は初めて父の本心に突き当った気がした。――俺は病身で何事もひかえ目に暮したが、これは本心じゃ無かった。貧乏人は、勝気で暮せ！――父はその子にこう遺言するのだ！　坂村や吉松になめられ続けて来た父の一生を顧みて、私は暗然とした。そうだ、私こそ、父が一生考えて実行出来なかった事をやらねばならぬ。

『ああ、苦しい一生じゃった……』

父はそう云って死んでいったのだった。

今や私は、五十四歳の老母とほんとうに二人切りの者となった。しかし私は幼年時代に似あわぬ頑丈な大男となっていた。

世は大戦前の不況の最中であった。疲弊は農村において極度となり、自作の中に破産が続出した。小作達は――彼等は破産する何物をも持っていなかった。彼らの持っているものは厄介極まる各自の生命だけだった。

首縊りが流行した。去年一年に三人もの小作が首を吊った。彼等は云い合わした様に、これ見よがしに茂っている、地主坂村の持ち山の松の枝にブラ下った。最後まで地主の『厄介』になるという事が、彼等のせめてもの反抗であった。

娘を近くの温泉へ酌婦に叩き売る者も出来た。一人の勇敢な『先覚者』がそれを実行すると、後から後からそれに見習う親達が続いた。

戦うことを知らぬ農民達は、小作に、労働に、借金に、税金に、それからまた農村を今やすっかり俘虜にした商品の魔術に、骨の髄まで搾り続けられながら、依然として『自分の不運』をかこつだけだった。

だが、地主坂村と其の一族は、四眠を終えた蚕のように太って行った。坂村は部落の田地の三分の一以上を占有して、毎年二百石からの小作料を収奪した。白壁の塀を囲らした城廓のような邸宅の木立は、それを取巻く豚小屋のような貧家と素晴らしい対照をなしていた。農民達は、その豪壮な邸宅の一木一石に至るまでが、自分達の祖先以来の血と汗の結晶である事に気がつかなかった。彼等は限りなき畏敬と羨望を感ずるだけで、微塵の反抗も怨嗟も意識し

なかった。
　経済の支配者は、政治の支配者である。何処の土着の地主もそうである如く、地主坂村も部落一切の完全なる支配者だった。県や郡や村の有力者であったばかりでなく、行く行くは代議士を夢みているらしかったが、そんなことは今の場合どうでもよい。
　問題になるのは、T部落の政治、事業、計画、相談の徹底的な独裁者であった事だ。彼の一言の承諾の声なくして、部落には何事も出来なかった。
　官吏が瀆職を敢えてして不浄財を貪るように、この下劣極まる山間の大地主も、かかる地位を利用して盛んに不浄財を掻集めた。
　昨年の春だった。まだ私の父のいる時だった。当時の流行として部落に肥料共同購買組合が設立された。小作農も自作農も取交ぜて一組合員拾円宛の出資をし、それを資金にK市の肥料問屋から直接肥料を購入しようと云うのだった。農民達の調べた所によると、これで約二割方安い肥料が手に入る筈だった。例によって計画は地主坂村に相談され、組合の信用を鞏固にするため彼を名目上の組合長に推薦し、その承認を得たのだった。と、坂村はその地位を利用して密かに肥料問屋と結託し、莫大なコンミッションを懐にしたばかりでなく、殆んど小売商の手を経たほどの値段の肥料を組合員に押しつけたのだった。
　流石にこの時には部落に不平の声が起った。しかし、それも主として自作農の層からの、しかも蔭でぶつぶつ云う不平に過ぎず、小作農に至っては依然として、心の中は兎に角口に出しては何事も云わなかった。奴隷の観念に馴らされ切っている彼等は、むしろこれを当然の事として諦めていた。
『無料の組合長じゃ、一寸は役徳がなけれァ……』
『そや、そや』
　父は頗る憤慨して、自作達と一緒に組合を脱退した。これが恐らく父の、最初にして最後の反抗的行為であったろう。
　父が死に、そうして一家の責任ある地位につくと、自然私も斯う云う事に敏感になった。元々、地主のために人一倍迫害を受けた家に育った私は、父と共に、感情的には頗る地主を敵視していた。勿論階級的な意識からではなく、個人的な感情からであった。個人的な感情であったから、絶えずそれに自制を加えて暮したが、腹の中では熾烈な反感をもっていた。従って今貧しい乍ら、一個の『戸主』として立つに至って、彼の為すことに対しては、絶えざる注意と猜疑とを持って注目することを怠らなかった。私は何時の間にか、他の青年達と違った分別臭さを持ち、他の小作達と異った対地主の感情を胸の中に育てていたのだ。
　私のこの感情が表面へ爆発して行為となったら、それは必ず私を滅す結果をもたらすに違いなかった。何故なら、団結の基礎をもたぬ個人的反撥は、敵階級のために徹底的

に粉砕されるにきまっているものだから。しかし、地主に対する反感をもってはいたが、階級意識の片鱗だに持たなかった私は、そしてまた父ほど人生の労苦を積んでいなかった若い私は、何時か機会があったら、横暴極まる地主を、一ぺんに取っちめてやろうと云う気に次第になって行ったのだった。

尤もこれにはなお他の方面からの刺戟もあった。

私はこの年――十九の年――の一月、Y銅山で一人の『他国者』と知り合いになった。十六の夏から私は農閑を利用してずっとY銅山へ通っていたのだ。その男は、五十を過ぎていたが独身者だった。窪と云う変な名の男だった。顔全体が疱瘡のためにクシャクシャになっていた。痩せていたが頑丈な体軀をしていた。眼が鋭かったが私を頗る可愛がった。私もその男を信頼した。

その男も私も、掉取場から選鉱場への、掘り出された鉱石を運搬するトロ押しが仕事だった。

一月と云えば北陸は雪の最中だった。銅山全体が山も街も雪に蔽われていた。ガイガイたる雪を掻き別けて、線路が縦横に走っていた。その間に、発電所や、排水装置所や精煉所やタンクが、雪をかむったり或は雪を突抜いたりして雑然と屯していた。幾本もの煙突からは黒煙がもくもくとのぼり黒い石炭の粉が雪を灰色に染めた。グレーンの腕、電柱の交錯。轟然たる機械の音と行き交うトロの喧騒は雪の底に呻き地上に働く労働者達を苛立たせた。

『そら坊主、引っくり返せ！』

屈みこんだからだで、選鉱場の寒く開放された鉄筋の建物の前へ来ると、窪のおやじはそう呶鳴って私のトロを引くり返してくれるのだった。

私はこの男から、よく色々の話を聞かされた。彼は方々を放浪した渡り者で、頗る豊富な話題を持っていた。九州の炭山の話、大阪の鉄工所の話、日露戦争の話、それから政治の話。

私は或る日、積み上げた鉱石の山の裾に、並んで寒い弁当を食べながら、彼に坂村の暴虐を話して見た。と窪は、

『そうかい。そんな奴ア一ぺんひっぱたいてしまえ！』

と云って次の様な話を聞かせた。それは彼の女房が、その時働いていた足尾の銅山で、坑内落盤の下敷となって惨死した時の話だった。

『俺ア嬶のむごい死ざまを見ると、黙っちゃいられなかった。飯場で葬式を済まし、嬶アの死骸を後の禿山の土ン中へ叩き込んでからよ、ドスを呑んで事務所へ呶鳴り込んで行ったんだ。畜生ッ、嬶ア殺したなアお前達じゃ。腹に金鎖ぶら下げる金アあったら、坑内の磐止めをしっかりしろい！　女郎に呉れてやるほどの見舞金で、嬶ア生き返るけい！　こうなりア何奴もこ奴も俺の敵じゃ、さア、かんべんならねえッ！　俺はそう云って事務所で滅茶苦茶に暴れてこました。おいさ、帳簿もテーブルもねえ、手当り次第に引っくり返してよ、ガラス窓を散々叩き破ってよ、さ

ア、もっと見舞金出すか、俺と勝負するかって、呶鳴り廻してやったさ。仲間が心配して止めに来たが、同じ腹だから止められめえ。小頭の野郎とうとう仲に這入って、金二十両を事務所から出させたよ。ワハハハハハハハなア源坊、いつも頭ア押えられるが男の能じゃねえ。犬畜生のような奴にア、尾を巻くよりア跳びついてやる方が為めにならア。くよくよするねえ！』

この話は、私に非常な感動を与えた。そうだ。いつも女のように、腹ン中だけで焦燥しているばかりが世渡りじゃねえ。おやじも死ぬ時云ったじゃないか、きかぬ気の者にならなきア、一生頭が上らんぞて。あの赤ら顔の地主の野郎を、豚のように扱下してやったら――そうだ扱下してやったら！　父も姉も土ン中から歓呼の声を挙げるに違いない……。

私は、機会があったら一ぺん地主をやり込めようと思う決意を益々固めた。しかも幸か不幸か、その『機会』は間もなくやって来たのだ。

この年の三月、部落に手押ポンプ購入の話が持ち上った。これが私の地主に対する戦の機会となった。私は次に話すように、徹底的に地主をやっつけた代りに、遂に母をつれて部落を出奔せざるを得ない羽目を作ってしまったのだった。

前の月、まだ雪の中を、隣村に大火災が起った。その時、そこの部落に備えつけてあった手押ポンプが、非常な威力を発揮した。それを目前に見た私の部落の人々は、直ちにそれの購入を計画したのだった。例によって区長を交えた有志は、坂村に相談を持ちかける。豪壮な邸宅を持っている彼に異議のあろう筈がなかった。

直ちに購入費捻出について部落全体の集会が持たれる事になった。

集会前の輿論は区々であった。貧富等差――農村では戸数割税を決定するために貧富等差なるものが決められてあった――に応じて割当てよと云う声もあった。税金と異なるから頭割になるだろう、と云う者もいた。イヤ、寄附がよかろうと云う話も出ていた。

私は、当然等差割当てでなければならぬと考えていた。伯父に相談すると、矢張り同意見で、小作は大抵それを望んでいると云う話だった。だが、果して坂村はどう考えているかそれが判らなければ誰も率先して口をきる者はあるまい、とも話した。こう云う考えは、かかる場合のこの部落での常識であり、道徳であった。

集会は、三月九日の山祭に決められた。その日は村の休日だった。

昼食を済ませて人々は三々五々集会所たる区長の家へ集って行った。区長は自作農の神田と云う家で、玄関の軒に大太鼓がブラ下げてあった。

私も出かけて行った。

区長の家では、広い板の間と奥座敷とを打抜いて広げてあった。広いだけ寒くて暗かった。煤が、竹を並べた天井から時々落ちた。
みんな野良着のまま集っていた。ガヤガヤと喋っていた。まだ薄寒い家の中には、囲炉裡で焚く木の枯株が濛々とたて込んでいた。奥の仏壇の前には、めずらしや地主の坂村が、区長や吉松や陶器工場の主人らと、その尊大な赤ら顔を並べていた。
私は板の間の隅の人々の背後に、伯父や山田のおやじとかたまって坐っていた。彼らは彼らだけで笑い声を立てていた。みんな年輩の百姓ばかりで、若い者は私だけのようだった。
『寄附がよかろ、寄附が……』
『イヤ、矢張り等差に割った方がええ……』
人々は騒いでいた。
『二百円もすんのか。俺の家じゃ身代限りをしても足らねえ』
と、とんきょうな声を出す者もいた。
『馬鹿こくな、お前一人に出せと云うじゃあるめ』
『そりゃそうやが、豪え高えもんやな』
笑い声が起った。
赤の御膳が、茶の這入った五郎八茶碗をのせて廻って来た。人々は各自一つ取ると肩越しに次へ御膳を送った。
茶が行き渡ったところで、区長が話し出した。
『そんなら、皆さんこれから話し始めよう……』
一時に私語を止めて人々は奥へ向ってにじり寄った。
『……知っての通り、ポンプの話じゃが……』
区長は続けた。温厚で人望ある四十男だ。
『……買うことにア誰も反対じゃあるめえ。だけんど、金をどうして集めるかちうことじゃ、思い思いの腹があるじゃろ、相談ちゅはここじゃ、皆んなから口を切って下され』
一座はまた喧騒に立ち返った。
と、その時、地主の手先、蝮の吉松が、区長へにじり寄って何事か耳打ちした。すると区長は、
『あ、それから……』と、慌てて云い足した。――『坂村どんが、今日の寄合に酒一斗寄附さしゃった。礼云うてくらっせ』
『そりゃおおきに』
『や、御馳走さま』
奥の方の二、三の声がそれに応じた。
が、私はハッとした。こりゃ坂村の奴また何か謀んでいるな。――私の頭にすごくこの事がピンと来た――油断ならんぞ！
話は元へ帰ると、人々は口々に意見を述べた。が要するに同じ事だ。――
『寄附がええ』『等差に割るべしじゃ』『頭割りが正当じゃ』ガヤガヤ、ガヤガヤ。
坂村はそれをニコニコしながら聞いていた。まア何とで

も云うとれ、俺が喋らなァ決まらんぞ――斯う云う腹がその顔に現われていた。

果して人々の中に声があった。

『みんなガヤガヤ云うとるより』と、その男は大声を挙げた。それは正直者で通った西田と云う小作人だ――『地主どんの意見を聞いた方がええ、その方が近道じゃ』

『そや、そや』

二、三の声がそれに応じた。

『ハハハハハ、俺が云わんかとて』坂村は寛大に笑声を挙げた。――『みんな、もっと意見を述べえ』

『イヤ、地主さんの意見、聞かしてくらっせい』

『そや、そや』

『それがええ』

『それじゃ』と、坂村は吉松を顧みた。

『俺の考えは吉松が知っている。吉松云うて見イ』

『あい。そんなら俺から……』

吉松は居住いを正した。相変らず癇にさわる面をしている。

『うちの大将の考えは、みんなにも金を出させず、二百円のポンプも買える、尤もそんためにァうちの大将ァ一寸犠牲にならんなんが、まァそんな事ァ、村のためじゃ、どうでもええ、……つまり耳よりの考えをもっとらっしゃる。二百円の金と云えァ、頭割りにして一軒二円じゃ。二円とはきょう日一寸辛い。税金で無えから等差で割るわけにァ行かねえ。寄附で行うても仲々二百円集るめえ。ここをうちの大将は考えた……そら学校の後の古宮の森よ。あこに杉が沢山ある。あれァ知っての通り在所の共有財産じゃ。あれを売って、その金でポンプを買えァ、誰も懐から銭出さんでもええ。古宮の森をああして置いた所で、誰も一文にもならん。一文にもならん物を売って此の急場を救う。……と、まァこんな考えじゃ。そして今ァ古宮の杉を売るいうても、この不景気じゃ、仲々買手があるめえ。そいで、うちの大将、別に欲しゅうもないけれど、村のためなら買うてもよい。あの森は、ほんと二百円がとこ値打ちあるかどうか考えもんじゃが、十円二十円のとこ損しても仕方はねえ。高いもんじゃが、在所にポンプ出来ること思えば、我慢出来る。と、まァ、斯う腹ァ決めなさった。どうじゃ皆さん、耳よりの話じゃろ』

話の中ほどから、私は切歯扼腕した。畜生！　等差割になれば七、八十円も出さんなん。それを免れるばかりか古宮の杉を我物にして、のほほん治まる心算なんだ、この恥知らず奴！

私はこう気付くとたまらなかった。今日こそ奴に一泡ふかしてやるべきだと思った。

が、多くの百姓達は、一厘も出す必要のない事に眼がくらんで、すっかり賛成した空気だった。吉松の声が終ると、

『ああ、それがええ』

『やっぱり地主どんじゃ』
『仲々名案じゃ』
と、各々の感歎の声を挙げた。尤も中には
『二百円たア、安い！』
と、声を挙げた者も居たが、それとても根本的に反対しているのではないのだ。
『なア伯父さ』
私は小声で伯父に私語いた。
『俺は等差別が正当じゃと思うとるがな。地主の奴、自分が七、八十円も出さんなんし、また古宮の杉を欲しいもんじゃから、あんな事云うのじゃろ』
『ウン、そうらしい』
『そうに決まっとるさ』と、他の男も私語いた『いつもあの手じゃ』
『それになア』と、山田も私語いた。――『杉をY銅山へ向かわすのじゃろ。銅山にサ、私立の学校建てるちゅ話もある』
『畜生！……俺ア伯父さ、反対するぜ』
私は黙っていられない気がした。それに中には反対している者もあるのだ。やろう！
『ウン』
と、伯父は老人臭く分別した。『……しかし皆がその気なら、あまり憎まれん方がええぞ。出る釘ア打たれるちゅからな』

どうしよう？　敢然とやろうか？　云うべき意見は今日のためにちゃんと胸に纒めてある。それとも一文にもならぬ事で憎まれずに置こうか。
一瞬私は思い迷った。胸は早鐘のようにドキドキする。見ると、吉松はまた何か喋っている。愚図々々していると決められてしまう。……。
瞬間、私の脳裡を、父の顔が過った。窪の顔が笑った、――そんな奴ア、一ぺんやっつけてしまえ……
咄差に私は覚悟を決めた。そして叫んだ。
『そ、その話にア、俺がは反対じゃ』
人々は一度に私の方を見た。それが息込んでいる私の眼に迫ってくるように見えた。伯父はしきりに私の袖を引っぱったが、もうあとの祭だ。
奥の方で坂村も吉松も区長も、伸び上るようにして私を見た。
『ホウ、川上の兄貴か？　お前さ反対か』
坂村は一寸不機嫌な顔をして云った。――『意見を訊こう』
『あ、聞いてくらせ』
と、私は必死だった。全身が坐っているのにぶるぶる震えた。
『俺がの考えは、矢張り等差割の方がええ。ポンプは、道路や橋と同じように、在所（部落のこと）の便利のための設備じゃ。道路や橋の金ア、みな役場から等差割でかかっ

て来る。ポンプも、そいで、矢ッ張り等差割で集めた方がええ。こう思うとる』
私は震い声でそれでも考えて置いた主張を精一ぱいに述べた。汗が額ににじんで来る。
『馬鹿こけ』
と、吉松は相手が若僧だと見て一喝した。――『ポンプと道路と同じかい。道路は村や県、つまりお上の仕事じゃ。ポンプはこのT字の仕事じゃ。それにポンプは道路や橋と違うて在所の財産じゃ。共有財産じゃ。それを共有財産の古宮を売って買うのが何が悪い』
斯う云う主張のある事は、既に私も知っていた。それに対する反駁も考えて置いた。
『ポンプは財産じゃねえ』
私は即座に応酬した。
『財産ちゅたら利益が目的のもんじゃ。ポンプは金儲けになるけえ。ポンプは道路や橋と同じに、在所の設備じゃ、施設じゃ』
私は眼が眩みそうになるのを堪えて続けた。
『……儲けるための在所の事業なら、資金は頭割で結構じゃ。俺達ア去年の肥料の組合の時ア、貧乏人も身代よしもみんな同じように十円宛出した。これで当り前じゃ。しかしポンプは違う、ポンプは道路と同じように事業じゃねえ、財産じゃねえ、設備じゃ』
私は設備という言葉では充分ポンプの本質を云い表わしていないと気付いて、ドキッとしたが、うまく話が打開された。
『いや、分っとる』
と、今度は坂村が喋り出したのだ。
『だから何も頭割にすると誰も云って居らん』
『だけど、古宮の森を売って買うことになりア、頭割も同じになる』
私も大分落ちついて来た。
『……あの森こそ、在所の共有財産じゃ。共有財産じゃから在所の一軒々々同じ権利があるもんじゃ。あれを売って別けるとすりゃア一軒々々頭割でわけて貰えるもんじゃ。そうすりア……あれを売った金でポンプを買えア、頭割で銭出したも同じこった』
この意見には誰も感歎したらしかった。あちこちに、フン、なるほどなア、という小声が聞えた。私は勇気づいた。
『地主どんがあれを買うてくらっしゃるのはええ。また在所の人がみんな売ると云わっしゃれば俺がも賛成じゃ。じゃが売った金は三百円あろうと五百円あろうと、一軒々々頭割に分けてくらっせえ。そいから、ポンプの金ア等差割に集めてくらっせえ。そしたら、貧乏人は、ポンプの金出いてまだおつりが来らア。地主どんの案よりもっとええじゃろ』
私は前に考えていなかった事まで云って了った。我なが

らうまく云ったと思った。余程Ｙ銅山の小学校の建築を曝露しようかと思ったが、坂村の顔を見ると流石に云えなかった。

『妙案じゃ』

と、唸る声があった。緊張し切っていたが一座がその方を向いたので、その男は首を引込めた。正直者の西田だった。

云い込められた坂村は、今度は違った論点から来た。

『なるほど、お前達のためにァ妙案じゃ。じゃが、ポンプが役場の道路改修事業と同一の性質じゃという意見に承服出来ん。もう一度聞かしてくれ』

フン、小僧、お前達にこれの説明が出来るまい。そう云う優越感がこの言葉の中にあった。

『そ、それァ、利益を目的としとらんから』

私は簡単に答えた。もう落ち付いている。

『そんな事ァ無かろう。道路からは直接の利益は出んが、ポンプからは出る』

『そりァどんなわけで？』

今度は私が反問した。

『どうしてお前、家が焼けりァ家い損害じゃ、それも食止めりァ利益と云うもんじゃ。ハハハハハこんな理窟が解らんで、若い若い』

瞬間私はグッと詰ったが、即座に機智が働いた。

『成程、そんなら地主どん、一層等差割にして下され。俺らの家イ焼けても屁の河童でもねえ！　じゃが、地主どんとこなんか焼けたら在所皆焼けたより、もっと太かい損害じゃろ。そうすりァ地主どんらァ沢山出してくらっしゃるのァ当り前ぞい！』

『…………』

討論終結！　明かに地主の敗北だ。だが、一座は沼のように沈黙している。地主の腹を忖度しての不安と、論戦の緊張とで声を出せないのだ。

かくして其日ポンプの購入費は等差割当徴収と決まった。流石の坂村も斯うまで曝露されてはその我意を通す気になれなかったのだろう。

だが、会合は、何と白け切った空気を残して散会した事か。村人は、明かに地主坂村の憤激を胸に感じて不安でならなかったのだ。坂村は始終ニコニコして機嫌がよかったけれど……。

『川上の兄貴も、ああまで地主どんに楯衝いちァあとが悪かろに』

『利口者じゃと云うてもまだ若イからな』

『じゃが俺達ァ他人の褌で相撲取ったようなもんじゃ。儲けたさ。ハハハハハ』

『ほんとじゃ、ハハハハハ』

こう云う会話をしながら人々の帰って行ったのを、私は

知らなかった。私は勝利の快感に浸って自ら騎士のような感じだった。

が、人々の感じていた不安と推測とは直ちに実現して来た。

翌日夕方私が銅山から帰ると、家には坂村の手紙が待ち構えていた。昼のうちに吉松が持って来たものだった。私は何か不吉な予感を感じながら急いで開けて見ると、そこには次の如き簡単な文句が書かれてあった。

　事情により本年以降小作田地貸借を解除仕り候

一読、私は総身の血が一度に引いて行くのを意識した。考えても居なかった事だけに、極度の狼狽と憤激が、私に来た。

『畜生！』

何と云う恥知らずだ！　己れが非違を阻まれたとて、この犬糞的報復手段は何事ぞ！　だがそれにしても何という殺人的な復讐に見舞われた事か？

『うーむ。酷い野郎だな』

私は昂奮と当惑と憤慨とそして若干の後悔とが胸一ぱいになって唸った。眼頭には、惨めにも、涙さえ出て来る。

……囲炉裡で私の足の湯を沸していた母は、この様子を見て心配相に訊いた。

『どんな手紙じゃい？　何か昨日のことでも』

『おう、昨日のこっちゃ。……おっ母ァ坂村の野郎、昨日の事を根に持って、田圃を返せと云うて来た。……む、村から追い出すつもりじゃ』

『何て云う？　田圃を返せ？……そりァあんまりな……』と、母も蒼白に変じて叫んだ。――『そんな無茶な事ァあるもんか。それァあんまりな仕打じゃ！』

そして母は私に食ってかかった。

『……お前もまたあんまり向う見ずじゃ、なんぼ腹ン中に思うたかて、若い者が、地主どんに生意気云うからじゃ……ああ、あ、この年ンなって困ったこっちゃ。行って詫って来い！　詫って来い！』

私はそう云われると、自分自身にそう云う気持が動いていただけに、堪らなかった。

『おっ母ァ、堪忍してくれ、何とかうまく行くように頼んで見る』

私は腑甲斐なくも、もうへたへただった。

其の夜、私は母に連れられて坂村の邸へ出かけて行った。行って詫びるのは流石に業腹だったが、母の姿を見ると強いことも云えなかった。泣きたい気持ちだった。

だが、地主はてんで相手にしなかった。勝手口から声をかけると、闇の中へ初めに女中が出て来、次ぎに懐中電灯を持った吉松が出て来て突放した。

『や、何か用やったか、おっ母ァ……』

『あい、地主どんにも吉松どんに詫びんならん思うて……態が太こうてもまだ子供のこっちゃ、昨日の事は勘弁して……』

皆まで云わせず、吉松は上り框に突立ったまま手を振った。
『おっ母ア、何か感違してるんじゃないか。昨日の事何とも思うとらんぞ』
『あい、あの、わかってます。そいで、どうか勘弁して田圃の事も一つ……』
『田圃の事か。それア必要なかろう。立派な息子じゃから田圃なんかせんでもよかろ』
『そう云わんと、この通り詫るさかい……』
母は女中達の下駄の並んだタタキの上へ膝をついて、土下座するように頭を下げた。――『どうか今度のところは勘弁して、もともと通り田圃を作らして下され。……これ源、お前も突立っとらんと、吉松どんに詫れ。地主どんに詫まって貰え』
私は涙が出て来た。吉松の懐中電灯に照らし出された母の土下座姿――おお、これは屈辱以外の何者でもない！
『おっ母ア、何度云うてもあかん。田圃はこっちのもんじゃ。ロアそっちのもんじゃ。お前もええ息子もって仕合せじゃ。……なア源、癪にさわったら、首でもくくれ！』
吉松はそう云うと、そのまま奥へ這入って了った。母は真暗のタタキの上で、しくしく泣き声を挙げている。私は煮返る思いだった。
『おっ母ア、帰ろ！』
闇の中に暫く立ちつくした後、私は母に云った。

『もう帰ろう。相手は鬼じゃ。諦めた方がええ』
『…………』
闇に声がない。歔欷の音ばかりだ。
『な、おっ母ア、諦めてくらっせ……』
暫くすると、吉松がまた出て来た。
『ああまだ居たんか。帰ってくれ。誰も居らんとこに居って貰うと物騒じゃ』
『ナニ！』
と、私は思わず叫んだ。――『物騒た何じゃ！　物騒た！　泥坊か何かに思っているか』
『フフン、何とでも云うとれ』
吉松は冷笑した。
と、それまで土下座して泣いていた母はこの冷笑に突然立ち上った。そして叫んだ。
『そうかいの、物騒なら帰りますぞい。どど泥坊はどっちゃぞい！　女子供や思ってあんまりじゃ。理窟に負けたが腹立ったら、もっと学問さっせえ！』
坂村は金持だったが、学問の無い事が評判だった。最後に立腹した母はそれを罵倒したのだ。
『フフン、何とでも云うとれ、引かれ者の小唄て云うてな』
吉松はまた鼻で笑った。
斯うして母も、遂に地主の暴虐に立腹してしまった。だが、道々私が、

『なアおっ母ア、心配するな。何でもして養うてやるぞい。なアに、ここばっかりに陽が照るじゃねえ。一層の事都会へ出て旗を挙げようかい』
と慰めても、母は昂奮と絶望に喪心したようになっていた。
明る朝、私は銅山を休んで本家の伯父に相談に行った。一部始終を聞き終った伯父は、何時もの分別臭さに似ず、これには流石に激烈に憤慨した。
『そうかい、よしッ！ そんな醜悪な敵打ちすんなら、こっちも黙っとれん。ポンプの金の事ア、何もお前一人が責任負わんなんこたアねえ。意見述べ云うたから述べたんじゃ。そして、みんなが賛成したからお前の意見通りに決まったんじゃ。それが悪かれア、在所の皆の人が悪い。在所の人のためにええこととしてやったお前が、こんな酷い目に逢わされるなら、……よし、斯うなりア、在所の人に集って貰おう！ それからのこっちゃ。おい、兼吉、お前も今日は田圃休め。そしてお前ア、区長と五人組へ行って、この事話して集会頼んで来い。畜生、女子供の家じゃ思うて。余り馬鹿にしてけっかる！』
兼吉と云うのは伯父の長男で、妻子も居るもう四十余りの壮年である。五人組と云うのは、部落を五つに区分してその各々に一人宛選定されている代表者のことで、部落の出来事は、先ずこの人々に相談することになっている。
『それから……』
と、伯父は囲炉裏から起ち上って続けた。――『源、お前は家イ行ってお母アにそう云え、事情が事情じゃさかい、在所の人は見殺しにせん。心配するなてそう云え。……俺もこれから親しい連中のとこへ廻って来る。ナーニ畜生！ 在所皆んなと如何に地主でも、百万長者でも喧嘩は出来めえ！』
そう云って、七十を過ぎても元気な伯父は、煙草入を腰にブチ込むと、野良着のまま外へ出て行った。兼吉兄も、
『お前もちったア云い過ぎやったが、坂村も坂村じゃ。他人にも云えんほどの犬の糞じゃ。まア、五人組や区長にも相談して、何とかうまくやって見る。在所を仕舞うて都会へ出るんはそいからのこっちゃ』
と云って出て行った。
離れの間に子供達の世話をしている嫁さんは、
『地主どん、理窟に負けたのが、よっぽど業腹じゃったのやなア』
と笑った。私も何かしらまだ前途に一縷の光を期待出来るように感じて、一寸軽い気持ちになった。何と云っても『土』を失って村をはなれることは、百姓にとって何よりも恥しく辛い事であった。
だが『在所』の人は起たなかった。
伯父が意気込んで、住宅や田圃を駈け廻って『親しい人々』に訴えて歩くと、人々は斯う云った。
『それア気の毒な。じゃが、俺達が騒ぐと、俺達までに当

りが来るじゃろ。それが恐い』
五人組を廻った兼吉はこんな返事を聞いて来た。
『そりア気の毒じゃ。坂村どんもまた豪え大人気ない敵打ちしたもんじゃ。じゃが、これア一人と一人の事で在所の事と違う。また俺達に坂村どんへ詫びてくれと云わっしゃるなら詫びても見るが、坂村どんの性質じゃ、頼んでもあくめえ。俺達がそんな事云うて行ったら、またどんなに腹立てるか知れん』
私と母は、伯父の家でこの返事を聞いて、ほんとうに、決定的に憤激した。地主に対してもそうだったが、それよりも一層村人に対して憤慨した。何と云う薄情な、何と云う腑甲斐ないエゴイストばかりだろう！
だが、地主に畏服し、仲間同士バラバラに分裂して奴隷の生活を続けていた無自覚な農民として、これは誠に当然な処世術であった。
一週間の後の或る日の午後、私と老いた母とは、生れ落ちるより住みなれたこの部落を、まるで盗人の逃げるが如くに落ちのびて行った。伯父と安吉が送って来た。曽つて姉を送った山路を、我々四人が通って行った。貯水池の崖をかけ上って山の端を曲る時、母も私も部落を振返って見た。早春の部落は、まだ芽を出すには早い欅の灰色と雪に圧された藁屋根とをまとめて静かに屯していた。ずっと向うの窪地には、坂村の豪壮な邸宅の白壁が瞥見された。
——我々を追い出した村！
——我々を見殺しにした村！
おお、だが、なつかしき土よ！　いつになったらまたお前と笑って逢えることか？
『ああ鶯が啼いている！』
と安吉が云った。
『ホンに、また下手な声じゃ』と母は答えた。——『もう彼岸じゃからな』

五

母と共に故郷を出奔した私は、伝手を求めて大阪へ出た。そして北区（今の此花区）大開町の或る荒物屋の二階に住居を構えると、間もなく〇〇ゴム会社の職工となった。
それから十七年の歳月が流れた。
十九から三十六の今年まで十七年間——それは人生の働き盛りの大半を意味する。私は果してこの間どんな生き方をしたか？
だが、この事についての委しい話はここで避けようと思う。只次の事を知って置いて貰いたい。
私は最初、地主坂村や村人に対する反感から
『見て居れ、ここでウンと働いて成功して必ず見返してやるぞ！』
と云う気で働きつづけたが、間もなくそれの不可能さに

自覚し、熱心なプロレタリア運動者となったことを。
これは無理のない道行であった。時代は丁度、欧洲大戦とそれに続く永久的世界恐慌、プロレタリア運動の勃興と階級闘争の鋭化——世界革命の展開期であった。農村において地主の暴虐と貧窮生活を満喫し、更にそれに続いて純粋なプロレタリアとなった私、地主によって燃えるような反抗心を植えつけられて来た私にとって、資本と労働の対立、階級闘争——革命運動の必然性を理解することは、そう大して六カしい事ではなかった。私は大正十年、それまでに勤勉にしてためた八百余円の貯金を、預金銀行の破産によって吹き飛ばされて最初の『成功』の夢を見終るや、それを転機として完全に全生活をプロレタリア運動に捧げる戦闘的労働者の一人となったのだった。
その頃私は同じ組合の一人の若い女性と結婚した。
母は旧時代の人間だったので、私のプロレタリア運動への進出を理解するために余程困難を感じたらしかった。初めは大分反抗もしたし愚痴も云った。だが母は息子とその妻とを絶対に信頼していた。信頼していたがゆえに、理論的にはいくら経っても何も理解することが出来なかったけれども、本能的には次第に信頼する息子達に同化して来るのだった。そして終いには、どんな苦労が来ようとも、またどんな迫害に逢おうとも、プロレタリアの母らしく希望をもつ笑いの中にたえ忍ぶほどに訓練されて来た。私は母のその進化に限りなき喜びを感じて戦いつづけた。

三・一五事件の時、私は神戸で捕った。党のレポを持って出張中をやられたのだ。その頃の自宅は大阪の九条にあった。母は当時既に六十九歳であったが、私の忠実な妻であり且つ同志である妻と共に(私共には子供が無かった)不意に襲って来た家宅捜査に驚かされながら一切を理解して息子の無事を祈っていたのだった。
息子を奪われたにも拘らず、母は非常に元気だつた。予審後時々刑務所へ面会に来て
『俺と定子とでお前の分も働くぞい。定子も居るし他の人達も親切にしてくれるから、俺は少しも淋しうねえ。お前も仲間に迷惑にならんようにガンバレや』
と、私を激励した。
刑が決まって、私が四国の或る刑務所へ送られた後、老人の母でなく、若い私の妻が急に死んだ。私はそれを長い間知らなかった。刑務所では二カ月に一度家族と手紙の往復を許していたのだが、めったにそれを実行してくれなかったから。彼女は昭和五年の選挙闘争中に検挙されて、私の時分よりももっとひどい拷問に逢わされた為めに、急激な腎臓と脚気とにたおれ、義母のもとへ帰った日に死んでしまった。
彼女の死を獄中で知った時、私は非常に静かな心だった。階級闘争の人柱、おお、それを思えば私の姉より彼女は幸福である!
今年(昭和六年)の春、私は二年半の刑期を終えて〇〇刑

務所を出獄した。小さい風呂敷包みを持ってコンクリートの高い塀の中から突出された時、私は手に錠のはめられていないのを不思議に思った。早朝の闇の中には、二人の特高だけが『迎え』に来ていた。

私はスパイ達に附纒われて先ず大阪に渡った。小さな汽船の中で、私は広々とした青い海を見、遠く霞んだ六甲を見た。淋しさが初めて身内を襲って来た。

築港の桟橋へは、左翼運動のシンパサイザーであり弁護士である畠山が只一人迎えに来ていた。錯覚からもしかしたら……と思っていた妻はもとより、心待ちに待っていた母の姿さえ見えなかった。

船を降りると畠山がつかつかと寄って来て手を握った。八字髭が濃くなって精悍な顔つきが一層精悍になっている。

『やア、やつれたな。もう大丈夫だ』

彼はそう云って握った手に力を込めた。

『ウン……運動はどうだ？』

『心配するな。地に着いて来てる。裏切者はどんどん裏切って了ったし、本物は後から後からと出て来た。大衆との結びつきも三年前の比じゃない』

『そうか。俺も愚図々々していられんな』

私は瞬間心からそう思った。三年間の孤立生活は俺を後らしている……

畠山の家に落ちついて後、私は初めて、母の安否を訊いた。

『時に、俺の母はどうしている？　今日迎えに来てくれると思っていたんだが』

すると畠山は

『そうそう、お母さんの事を云ゃア、定子さん気の毒しちゃったな。……打撃を受けたか』

『うう、仕方がないよ』

『お母さんの事を心配してね。川上が居ないし、私が死んだらさぞお母アさん力を落すか知れんて、大変心配して死んだよ。自分のことは、これで満足だと喜んでいたがね』

『……………』

『いい闘士だったよ……』

『そして母は？』

私は堪えられなくって話を元へ戻した。

『ウン、まだ知らなかったのか。故郷へ行っているよ。定子さんの亡くなってから間もなくだから、……そうだあれは昨年の夏だったかな』

『郷里へ？』

私は思わず意気込んで反問した。

郷里を出奔してから十七年、初めのうちこそ時々思い出して愚痴を云っていたが、そのうち私が階級運動に関係するようになり、自分もそれについて来るようになって以来故郷に対する反感と軽蔑とで、曽つて一度だって帰ろうとも文通しようとも云わなかった母を思い出して私は不思議だ

ったのだ。
『ウン、故郷へ。何でも君の従兄弟のとこへ一寸行ってくると云って行ったのだが……僕達は事情を知っているので止めたんだがね』
『そうか。母も矢張り死期が近づいて来たかな』
私は一寸淋しい気がした。
『そして其後手紙でも寄越したかい』
『簡単なハガキを当時寄越した切りだ。書けないんだから仕方がなかろう』
そして畠山はなお語を続けた。
『君の捕った後も非常に元気だったよ。救援会の会合へは出て来るし、外の同志の妻君とも往来するし、新労農党の出来た時なんかはダラ幹が、ダラ幹がなんて流行の言葉を盛んに口にして若い者を煙に巻いていたが、定子さんが死んだらすっかり呆然として仕舞ってね、時々一人でじっと家の中に坐っているような事もあったらしいよ。みんなが心配して犠牲者の妻君達の合宿へ寝泊りさせるようにしたんだが、矢張り元気を回復しなかった。僕の家へ来ても、子供達をジッと見て涙ぐんだりしてね』
私は堪らなかった。自覚した自覚したと云っても七十を過ぎた年齢だ。生命のように頼っている息子を取られ、またその嫁に死なれたりすると、こりゃアなるほど気を落すのも無理はない。
『……そうか』
『それでな』と畠山は云った。――『君もまた第二の仕事へ這入らねばならんのだろうが、その前に一度無事な顔をお母さんに見せて来たまえ。どうせ少し社会の新情勢に通ずるまでは党生活も出来まい。え？』
『そうしよう』
私は即座に答えた。
『……そして今度は郷里へ預って貰おう。今度は百パーセントに身軽な方がよい。でなきァ働けなくなってるんだろうからな』
『そうしたまえ。そしてお母アさんの乳をウンと呑んでやり給え』
『全くだ。……肉身にこだわることは余りよいことではないけどなア』
一週間の後、私は次の闘争の準備と連絡を整えてから、急遽郷里への汽車に乗った。全く出奔してから初めての訪問である。
四月中旬の昼の汽車だった。普通列車だったので、小駅小駅で百姓姿の乗客が乗ったり降りたりした。故郷に近づくにつれて、それらの乗客の口から洩れる覚えのある方言は、流石に懐しさを私の胸に呼覚ました。だが、ゴム靴を履いたその百姓達の語る話題は、誰も彼も皆な不景気の話ばかりだった。
……米が十六円五十銭位じゃ肥料代にもならねえ。今年

もまた一円七十銭の蚕さ作らんならんか。俺の村じゃ税金の滞納者は半数以上じゃがの。どこでもじゃ、そんで俺の村じゃ四つの学校を二つ廃校にした、それアええこった、先生にア気の毒じゃがの機場機場が休んで娘アひょろひょろ帰ってくるしさ。おいさ、京大阪へ行った息子の野郎までどんどん戻って来るぞい。何じゃ俺達せえ食えんとこへ何しに来た、ちゅと俺ア失業者で仕事が無えとぬかす。浜口早よう止めるとええ。そやそや政友会になったら一寸は景気イ出るかも知れん。いやいや同じこっちゃろ、ドカンと一つ何かやらなきゃ駄目じゃて。何でもええ、何とかして呉れんと餓死じゃ。この不景気ン中へ本願寺の坊主が金集めに来るしさ。そんなもなア断っちまえアええ。イヤイヤ未来が楽しみやさかいなア。何のお婆ア、未来もへちまもあるもんか、後の雁より現在のすずめじゃ、お医者様の薬代でも無料ならええ。ほんとうじゃほんとうじゃ。……

皆んな苦しんでいる、と私は思った。皆んな『ドカンと一つ』の『何』かを待っている。そうだ大衆は燃え上る革命的エネルギーを身内に醱酵させている。組織が手を差し延べれば、わけなく起つだろう。

『大変な不景気ですね』

と、私は前の座席に居た二人の百姓姿の壮年男に話しかけた。――『都会でも労働者は飢餓に瀕していますよ』

『困ったもんじゃわい。まだこの不景気続きますかい？』

『続きますよ、まだまだ。イヤ、先刻の誰かの話じゃないが何か一つドカンと来るまで停りませんね』

『やっぱりなア……』

『だから都会じゃ労働者がやり始めて居りますよ。大かい争議をおっ始めるし、幾千幾万の大示威運動が街ン中を氾濫するし……ううん、賃銀を上げろ、首切らんと置け失業者に手当出せって云うのですよ。そしてこれを妨害する奴ア巡査であろうと誰であろうと片っぱしから叩き伏せて、それア豪い力ですよ。この間も千人からの道路工夫が大阪の市役所へ押しかけてね、課長とか何とか云う市の豪い役人を惨々取っちめて要求を貫きましたよ。もう労働者じゃ、他人になんか頼っても駄目、自分等だけで団結して上の奴等を征服せなきア駄目だと云う事を知っているんですね』

『そいで利目ありますけえ』

『ありますとも。だって労働者が一切の必要品を作るんじゃありませんか。それを資本家やお上が取り上げてうまい汁を吸うているんです。労働者が仕事をしなきゃア資本家は上ったりです。で、賃銀上げて呉れなきア仕事をしないって云うのです。勝つに決まっていますよ』

『なるほどなア』

『百姓達もやっていますよ。新潟や岐阜や其他全国各地で、小作米負けろ、負けなきア小作米納めんて云うわけで、村々の百姓が農民組合を作って地主と戦っています。……あなた方の村じゃまだやりませんか？』

人々は顔を見合わせた『やった事ァありましねえ』
『そうですか、おやりなさいよ。と云っても皆さん小作人じゃなけれァ……』
『いんにゃ、小作じゃ。小作米高うて弱っとる小作じゃ。……もっと北の方へ行くとやっとる、所もあるちゅ話じゃが』
『そうですか、おやりなさいよ。その時ァ僕達の仲間から応援しますよ。僕もその方の関係者です。都会の労働者と農村の百姓と手を組んで、一つドカンとやりましょうよ。貧乏人は貧乏人同士と云ってね、もともとこれァ兄弟なのです』

間もなくその百姓達は降りて行った。汽車はゴトゴト今遠くに白山の見えるC川の曲線に添うて走っている。もう暫くで私も降りなければならない。

私は改めてあの軽蔑に価する姑息な盆地の部落を思った。坂村はもう死んだだろうが、あの時分中学へ行っていた息子が矢張り地主面で貧農達を虐めている事だろう。今の百姓達の話から推して部落の農民達も相変らず奴隷生活の袋小路に相剋の分裂を繰返している事だろう。母は兼吉の家で、どんな心持で暮して来たか——また卑屈な性格を甦えらしていなければよいが。それでも今日は自分の電報を見てどんなに喜んでいるだろう。

O町で汽車を降りて、すぐ加賀平野を東へ貫くKT電車に乗換えた。この電車も私の知らないうちに坂村の息子、——と云っても今じゃ三十過ぎの男だが——達によって敷設されたものだった。春の陽は傾いて来たが、まだ暮れるには間がある。あと二十分、陽のあるうちに部落へ着けるだろう。

幾つかの見覚えのある部落の中や脇を過ぎて、電車は低い山の起伏する地帯へはいった。もうすぐ部落だ。

突き出た山の端の杉林を突抜けると、見えて来た、私を生んだ部落が。川の土手の向うに、まだ、芽を出さぬ欅の森、灰色。藁屋根、そして坂村の白壁の塀。すべてが追い出された日のままだ。田面はまだ荒起しの程度だ。長い冬籠りを思わせる雪に押さえつけられたままの田もある。盆地を囲む山々は、一方は夕陽に映え他方は灰色に沈んでいる。

これだけは昔の面影のない立派な堤防を乗り越えて川を渡ると、左手の往来と交叉する所に停留所がある。丁度部落の入口で、電車の中からも小さな建物がよく見える。

と、私は其処に少なからぬ人間の集団を発見して凝視した。集団は建物を包むように往来に溢れている。近づくとすべての人間が私の電車を見つめているようだ。構内へ出ているのでないから電車に乗る人でもないらしい。もう口々に何か騒いでいる声も聞える。

電車が停った。群集に気を取られながら、私は電車を降りた瞬間、私はプラットに立竦んで了った。群集は私を見ると構内へ殺到して来たからだ。

『来た来た！』
『川上ッ！』
『待っとったぞ！』
『万歳！』
『わあッ！』
私は突嗟にこの場の光景を理解出来なかった。が、ある！　旗が！　赤旗が!!
『お！』
全国農民組合の旗ではないか！
私は一切を理解した。そして夢中で群集の中へ飛び込んで行った。私は一切を理解した。そして夢中で群集の中へ飛び込んで行った。手当り次第に誰彼の手を握った。私の眼頭が熱くなっている。
『源治……』
夢中になつている私の背中で太い声がした。振返ると兼吉だ。安吉も居る。
『おお、兼吉か？』
『おい！　よく来た。見てくれ、この人々は皆んなお前の帰るのを迎えに来たのじゃぞ』
『川上の兄貴どん！』
老人の声だ。私も忙しい。
『や、西田のお父か？』
『よう帰ってくらっしゃった。もう在所中お前さの味方じゃ。追い出しゃしねえ』
そのうち
『挨拶しろ！　同志に挨拶させろ！』
『そうじゃ、パイ（警察）の来んさきにやってくれ！』
と、云う声がした。私はふっと母の事を思ったが、そんな余裕はなかった。
『諸君！』
と、誰かが演説し出した。
『……同志川上が今着いた。我々を今日にまで仕上げてくれた川上が来たぞッ！　長い獄中生活を蹴飛ばして元気で来たぞッ！　昔我々は川上をこの村から追い出した、地主の野郎におべっかするために！　じゃが今の我々の姿を見たら、同志川上も許してくれるだろう！』
それに続いて私も何か云わずに居られなかった。
『諸君！』
と、私は昂奮の絶頂で叫んだ。
『俺は何にも云うべき言葉を持たない！　赤旗を見たときそれを捧げる諸君を見た時、僕は喜びで胸が破れそうになって了った。よく起ち上った。僕は全国のプロレタリアートの名でそれを祝福する！　××農民組合ばんざアい！』
『万歳！』
『労働者農民の政府万歳！』
『同志川上万歳！』
『わあッ！』『わあアッ！』
人々に押されて私は構内を出た。そして人々に守られている母を見た、母を——私は駈け寄った。

た。

『おっ母ア！』

『おい帰ったか！　見て見イ、坂村をやっつけたぞ！』

母は皺でくしゃくしゃになった顔を輝かせて腰を延ばした。

数人の代表者と一緒に兼吉の家に落ちつくと（伯父はもう死んでいた）私は色々の情勢を聞いた。それによるとT部落に農民組合の出来たのは、昭和二年の暮だった。東京の旧出版労働に居た部落の青年が、失業して帰郷してから着手した仕事だった。その同志は今県聯合会に働いていると云う事だった。そして、私の帰った時は、丁度KT電車の労働者と協同戦線を結んで坂村の立禁政策を叩き伏せた所だった。

私が帰ったので、村の巡査は非常に慌て出した。所轄警察署から巡査部長が駐在所へ派遣された。高等係が二人も来た。

百姓達は、この厳戒の中を巧みに潜って、わざわざ私のために秘密の座談会を開いてくれたりした。

彼等の聞きたがる事は百パーセント党の話であった。労働者はどれ位党に加盟しているかとか、どんな風に活動を続けて行くのかとか。私は出来うる、そして可能な範囲でそれらに答えた。彼等は私の一語一句も聞き洩らすまいと、眼を輝かして聞き入り、そして云うのだった。

『何時になったらの俺達ところへ党が手を差し延べてくれるかな？』

母は私が元気で帰ったので、すっかり元気だった。私の居ない間も、部落での人気者だったらしく

『みんなが川上の母じゃねえ、在所のおっ母アじゃ云うてな、可愛がってくれたぞい。久しぶりに雪に籠って、いい冬じゃった。』

とホクホクした。

私は折を見て、母を預って貰うべく兼吉に頼んで見た。すると、

『ああよしよし、おっ母アもこの年になってからお前と別れになんのア、辛かろうが、お前のからだじゃ仕方あるめえ。……じゃお前もうまくやらな駄目じゃぞい』

と承諾した。

だが、母はそれを聞くと又非常に淋しい顔をした。私は胸を打たれたが、色々に慊した。母も漸く承諾した。

『おっ母ア、ほんとうに在所の人の云う通り、おっ母アの子は僕だけじゃない。戦っている者は皆兄弟であり親子じゃ。今度来る時にア、それこそほんとうに解放されて来るよ』

『皆の為めなら仕方がねえ。定子の仇も討たんならんし…
…じゃが大事にしてくれや』

だがその淋し相な顔。しかし闘争はこの辛さを踏み超えるべく我々に要求している――

私は古い形容だが、心を鬼にして再び故郷を出発した。この戦いの前には、すべての個人的な事を忍ばねばならぬ。救援の手が届かないで見知らぬ都会で餓死に瀕している同志の家族もある。それを思えば母などはどれだけ幸福か知れない。村の同志達は親切にしてくれるではないか……

母と、それから三人の同志が私をこっそり送って来た。地下の闘争へ潜り行く者にとって、花々しい送別は禁止されねばならぬ。

早朝出発した私達一行は、母の最後の希いを入れて、その日一日を△△市に遊ぶことになった。△△市は私の今度の戦地たる東京への汽車を、K町から出発して二つ目の都会だった。農民組合聯合会もそこにあった。

昼前、私共は△△市へ着いた。それから自動車をはずんで市内の名所を見物したり、母には破天荒の洋食を食べさせたりした。母は木綿のゴツゴツな袷に、一張羅の高貴の羽織を着ていた。髪がほんのちょっぴりしか無く、しかも殊んど白髪だった。後頭につくねた貌には、銀の耳搔簪を突差していた。私は、果してこの風貌が再び見られるかどうかと思うと流石に暗然となった。母も矢張り浮かぬ顔付だった。

夕食を済ますと、私共は盛場へ行って映画に這入った。活動は母の好物であった。はずんで上った二階には殆んど人が居なかった。

実写物の次はロシア映画だった。プログラムを見ると、『トウルクシブ』と書かれてあった。有名な映画であるとそれに口上が書いてあった。

私共は異常な興味を持って、字幕からスクリーンを凝視した。と、其処へ輝かしく写し出された物は、大きな綿の木であった。

『お、綿！』

『あ、綿！』

私も母も同時に小さな叫び声を挙げた。長い間忘れていたものに対する懐しさの叫びだった。

私共は熱心に見入った。広々とした豊饒な綿畑、羊の群れ、空漠たるトルキスタンの原野、旱天に苦しむ蒙昧の境。輝き渡った紡績工場の内部、積雪の中に立ち茂るシベリアの大森林、穀物の滝、この二つの地方を結びつけるために、サヴエートロシアの労働者と農民が彼等自身の政府の指導によって零下幾十度の氷の河中や、旋風激しい山野を貫く大鉄道を敷設して行く光景は、私達の胸に焼鏝のような迫力を以て迫って来るのだった。私は映画の進行につれて、社会主義建設の熱意と意義を時々母に説明した。母はうなずき乍ら瞬きもしないでその老いたる顔をスクリーンへ向って屹立させていた。

画面は更に進んで行った。そして、縦横に写された機関車の驀進に交錯して、穀物の山、機械の美、農村と都会、文明と蒙昧の瞬間が織込まれて社会主義建設の勝利を表徴

する急テンポの場面が過ぎた後、再び見事な綿の木がスクリーンへ焼きついてこの映画は終った。
私達は物に憑かれたように茫然としていた。昂奮と感激の余りに我を忘れたのである。
『お母ア！』
と私はかたわらの母を顧みた。――『長生して下さいよ、おいらあニッポンを……』
いっている内に涙がにじんできた。
すると母は心持ち震える声で叫んだ。
『おおいさ、長生せいでか！　俺は大隈の二倍位長生するぞい。俺のことア心配せいで、お前は、元気で戦うてくれや、待っとるぞい！』
私は思わず母の肩を強く抱えた。

（一九三一年八月『ナップ』）

売られる田地

――文戦劇場上演用台本――

伊藤貞助

ある早春の朝
ある農村に起った出来事

人物
佐助
おしも
お好
善太郎
吉彌

佐助の家の土間。外は朝日が輝いているが、家の中は暗く、割れた羽目や正面の奥にある開いた戸口から明るい日光が射し込んで縞目をつくっている。
右手にアンペラを敷いた上り鼻の一部と爐が見え

る。
女の罵り声が戸外から聞えている。
上り鼻には佐助が腰掛けて、思案し乍ら独り言を言っている。

佐助　……何ちうわけだかわからねえ。さっぱりわからねえ。俺ら、何悪いことしたべえ……なんにもしねえ。それどころか、俺ら旦那の大嫌えな組合員でなくなったんだ。それだのに、この俺から田地を取り上げるなんて、あんまりな話だべえ。……わからねえもんだ、人なんてもなわからねえもんだ。

おしもが悪態をつづけながら戸口迄もどって来て、其処でも一度、あらためてわめき始める。

おしも　この化トウモロコシ野郎！　この椎の実野郎！　いまに見ていろ、この極道のむくいはきっとあんだからさ。……てめえは死んだらきっと地獄の剣の山に行くんだ。

佐助　おっかあ……！　おー、おっかあってば。もう止めろよ。いくら悪態ついたって仕方がねえだ。

おしも　なに止められるかね！　あの野郎の姿の見えん間は、俺らど鳴ってやんだ。……見なよ、あの小面憎い、いいいちんちくりん坊が肩ふって行きやがっから。……この情知らず、帰ったら旦那さよく言え、旦那見てえな道理知らず、義理知らずは、此の世の中に一人もあるめえってな。……泥棒にも劣ってんぞ。この泥棒野郎、手前は泥棒みてえなもんだ！

佐助　おっかあよ、もう止せっちうに……。いくらわめいたって駄目だべえよ。

おしも　何言ってんだ、おっちゃんは…？　おめえは腹が立たねえのけ？　俺ら、腹が立って腹が立って、胃袋がにえくり返りそうだ。

佐助　俺らだって、何んで腹が立たねえことがあっかい。腹は立つわ。ふんだが、わめいたって何んになるこった。……俺ら達やペテンにかけられたんだよ。皆んなペテンだに……。

おしも　俺ら、ペテンだって、べんべんと黙って見ちゃいられねえ。……おっちゃんがそうた風に甲斐性がねえから、こんなことになんだ。

佐助　何んだと？　俺らが甲斐性がねえからだと？　口が横さけてるからって、あんまり頬けたを叩くもんじゃねえぞ。ことの起りは、てめえが慾どしい猿智慧を働かせっからなんだ。

おしも　(土間に這入って来る)おっちゃんも一度いっておくんな！

佐助　何度でも言ってやらあ、てめえの猿智慧からこんなことになったんだ。

おしも　どんな猿智慧だね？その証拠を見せて貰あべえ。俺ら家のためを思えばこそ組合なんざ抜けて旦那がとこさよく思われた方がええって言い出したんだ。それがど

うして猿智慧かね？　げんに旦那も、おめえの前で、農民組合た仕末にいけねえかたまりだって言ったってじゃねえのけ……？……悪いなあみんな、あの番頭の金造奴とおっちゃんなんだ。おっちゃんが甲斐性なしだかん甘くみられてこんなことになっただ。そんでなくって、何処に俺ら達をひでえ目にあわせる理窟があっかね？　そんじゃ道理に合わねえ。

佐助　道理に合わなくったって、本当のことなんだかん仕方があるめえ。……おめえは、よくも亭主をそう甲斐性なし甲斐性なしって云えたもんだ。そんなにおめえが偉え女なら、これから下宿さ行って掛合って来う。

おしも　誰が行くもんだ。そら、おめえのやるこったわ、それにこうなったらお好も、一日だって置いとくことはなんねえ、早速つれて来て貰あべえ。

佐助　俺らは甲斐性なしだで、俺らなんざ行ったたってどうなるもんだ。

おしも　そんなら、誰が行ったって、どうなるもんだ。

佐助　このあま、亭主を散々悪口ついて、そんじゃ道理が立つめえ……？

おしも　甲斐性なしって言ったのが、そんなに気に入らねえのかね!?　誰が聞いたって、こらおめえの甲斐性なしのためでねえか！

佐助　てめえがどれだけ甲斐性あんだ、このとうなす婆！

おしも　何んだこの狸爺！

佐助　婆奴、言わせて置くってと……畜生、承知しねえぞ！

二人摑み合いになりそうになる、隣家の善太郎が飛込んで来て二人の間に割って入る。

善太郎　一体え先ず、何んとしたこったね？　年甲斐もなく夫婦喧嘩だなんて、頭の白髪が泣くべえよ。

おしも　（善太郎を見て一寸ひるむ。それから意外といった口調で）善さん、よく俺ら家さ来てくれたね？

善太郎　（苦笑して）うむ、あんまり言い合いがひでえんで、つい這入っちまった。いくらつき合いなしでも、やっぱり長い知り合いだかんなあ……。

おしも　ほんとにいいとこへ来てくれたよ。

善太郎　何んだって喧嘩なんだね？

おしも　おっちゃんが、俺らがことを慾ばり婆だの、とうなす阿魔だのって毒ずくもんだからね……。自分の甲斐性なしを棚さ上げてさ……。

佐助　（手びかえていたが再び憤然として）また言いやがったな、亭主を摑まえて甲斐性なしって言うからにゃ、その亭主にくっついている女房はもっと甲斐性なしだべえ、この気狂婆！

おしも　あれだよ善さん、弱い女子供にゃアとてもなく威張りやがって、地主の前に出りゃ塩喰ったナメクジみてえなんだ。さっき金造が来た時の面見せてやりたかったわ、蒼くなって、ペコペコ頭下げてよ……。

佐助　この婆、亭主の悪口こくために生れて来やがったんだべ。もう勘弁出来ねえ、善さんどいてくんろ！（押のけて出ようとする）

善太郎　まあいいってことよ。それよりゃ、甲斐性なしだの金造だのって、何んのこったい？　喧嘩のもとは何んだね？　聞いてもさしつかえなかったら話してみねえかね。俺ら閑役になって、それでもやんなきゃなんねえわけがあんなら、出て行くべに……。

佐助　うん、そりゃまあ……話っても大したこっちゃねえがな、この婆が悪くうるせえもんだかんな。

おしも　大したことでねえことがあっかね。俺ら達の生き死のこったに……。

佐助　そら別だ。喧嘩の方よ。

おしも　喧嘩もつまりそれでねえかね。おめえが甲斐性さいあったら、こんなことにならねえんだで……。

佐助　また言いやがっか？

善太郎　まあまあ、わけを話してみなよ……。

おしも　じゃ聞いとくれ、善さん、こんなひでえことがあんだよ。（と云って、一寸ちうちょしてから）俺ら家じゃ不動様の前の田を引上げられちまったんだ。

善太郎　何んだって!?……そいつあ下宿（しもじゅく）が持田だな……？

佐助　そうだ。……あれを引上げられちゃ、俺ら達暮（くらし）が立たねえ。

善太郎　お前えとこもやられたのけ……。そして、そりゃいつの事だ？

おしも　たった今のことだに……。

善太郎　たった今？……ハハア、今し方おしもさんが外で我鳴っていたな、それだな？

おしも　金造奴に云ってやったのさ。そんだってあんまりだべよあの野郎だに。こんな事になった元はって云えば、あの野郎が悪いんだ。

善太郎　一体え、どんなわけで引上げられたんだね？

佐助　それがよ、金造の話だと、日雇を入れて自作にするんだっちうんだ。おめえ、あんなでけえ地主が今更そんなことするにもあたるめえでねえか？　俺ら、ほかに何か訳があるだべえと思うんだが、その訳がわからねえ。

おしも　誰か胡麻すり野郎がいんに違いねえんだ。

善太郎　いや、そうじゃねえ。（一寸思案して）こ奴あ何んか思わくがあんだぞ……？

おしも　なんかわけがあんのけ？

善太郎　こ奴あお前えとこばかしがやられたんじゃねえ、組合の者じゃ、岩さんと、友やん、新さん、三之助の四人にも昨日その話があったんだ。やっぱり不動前の田よ。

佐助　どんな理由でだね？

善太郎　やっぱしお前えとこと同じだ。

おしも　じゃ、自作するてな本当なんだべか？

善太郎　本当かも知れねえ。しかし、下宿のこった、何を

目論んでっか判らねえぞ。
おしも　どんな目論みがあっか知らねえが、俺ら家まで引上げっとは、あんまりじゃあるめえか？　本当のこと言えば組合員でなくなった俺ら達には目を掛けてくれんのが当り前じゃねえかと思うよ。
善太郎　(苦笑して)そんな理窟もあんな。けんど、組合を除けられて小作人にええこたあねえそうだよ。
佐助　ふんだが、背に腹はかえられなかっただ……。
善太郎　それでええことがあったかね？……組合にいるうちは小作人にゃ力があんが、組合員でなくなりゃ弱えや。いいかな佐助やんさあ田を引上げられるっていう今よ、お前えはどうしべえちうんだ……？……お前にゃ何んにも出来めえ。ところが組合員はどうだ、田を引上げられべえっちう四人のために、組合じゃ今日、下宿に掛合に行くんだ。そして今に見てろ、此処の前を組合員の示威運動の行列が通っから。組合は、四人の組合員のために戦うことになったんだ。
おしも　おお、俺ら達ちゃどうしたらよかんべえ。
善太郎　今度のこた確かに、お前とこのも、組合の四人のも同じ穴から出ているんだぞ。あすこんとこの下宿の持田は、お前えと同じように組合を除けられた治助と、組合員でねえ川向うの者が二人小作してん筈だ。……こ奴は一つ吉ちゃんにも相談してみべえ……。
おしも　吉ちゃん？

善太郎　今日は一緒に下宿に押しかけんので狩り出しに方々駈け廻ってんが、今頃ら俺ら家で腹ごしらえしてる筈だ、一寸呼んで来たがええ。
佐助　来てくれるべか、俺ら家に？
善太郎　俺らが言ったと云や来てくれべよ。
おしも　(躊躇した後)そんじゃ、俺ら頼んでくべ……(去る)

一寸の間

善太郎　(更まった口調で)佐助やん、おめえは心得違いだったとは思わねえか？
佐助　うむ……。
善太郎　おめえん処のおっかあは、あんまり小才が利き過ぎんな……。
佐助　うむ……。
善太郎　おめえは又、あんまり気がよすぎんだ。組合を除けられて、いい気持がすっかね？
佐助。……。
善太郎　仲間を裏切って自分ばっかし得したってよしんば下宿に気に入られたって——つまりは駄目だ。地主と小作人は今じゃ仇同士みてえなもんだ。その仇の方について決して、長くいいことはねえや。
佐助　(がっくりと首を垂れ、深く溜息ついて)俺ら、あの田を引上げられて、この先どうしてやってゆくべ……？
善太郎　(悩むように首を振って歩き出す)

話の間に、娘のお好が大きな荷物を背負って戸口に現れるが、立止って這入らずにいる。
善太郎、彼女を見つける。
善太郎　おや、お好っ子じゃねえか……どうしたんだ？
佐助　（ハッと顔色を変えて）お好、何んだ今頃？　そんなとこに立っていねえで、中さ這入ったらよかんべえ。
お好、口惜しげに泣き出しながら這入って来る。
善太郎　（佐助に）泣いてるじゃねえか？
佐助　（お好に、鋭く）おめえ出て来たのか？　それとも出されたのか？
お好　今日限り帰ってもええって言うんだ。俺ら口惜しい。
佐助　何時言った？
お好　今朝だよ。人手が余っから暇やるっていうんだ。おっちゃん、俺ら達ちゃだまされたんだ！……
佐助　人手が余っからとは、あんまりじゃねえか？　そんな言い分てものがあっかい。まだ半月にもならねえでねえか？
善太郎　お好っ子近頃姿が見えねえと思ったら、奉公にでもやったのけ？
佐助　（口の中で）うむ……。
善太郎　半月にもなんねえのに、人手が余ってるたひでえ言い分だな。馬鹿か片輪ならとも角、お好っ子は働きもんじゃねえか。まるで難くせつけられたようなもんだ。

佐助　……何処だえ、一体奉公先きは？
（言いにくそうに）実は下宿なんだ。
善太郎　下宿？
佐助　金造が来てうまいことべえ言うんで、これもおっかあも大乗気になって、遂々行く気になったんだよ。小間使ってのにしてお針は教えんし、仕着せはあんし、それに行々はええ婿も見附けてやるってんだ。
善太郎　そして、その代りにゃ組合を抜けろって云うわけなんだべえ？
佐助　そうまでは言わなかったけんど……俺らどうも話がうますぎるで、乗気にゃなれなかっただ。
お好　（畳に荷物を下す）金造が言ったこたあみんな嘘だ。俺ら作女（きくおんな）だよ。飯たいて、畑さ出て、夜は御隠居さんの肩もみなんだ。ふんだが、それよりゃ、もっともっとひでえことがあんだよ、おとっあん……
佐助　畜生！　俺ら、すっかりはめられた！（胸をトントン叩いて口惜がる）
おしもが吉弥と一しょに入って来る。
吉弥　今日は。どうしたい？
おしも　お好、おめえ帰って来たか？
お好　暇出されたんだ。
吉弥　お好っ子、何処かさ奉公に行ってたのか？
善太郎　下宿さだってよ。金造奴に、うまく口車さ乗せられたんだ。

吉弥　いやはや、仲々こみ入っていやがんな。
善太郎　そりゃそうと吉やん、こっちでも不動前の田を引上げられたってよ。
吉弥　そうだってな……。
佐助　吉やん、面目なくってしょうがねえ。
善太郎　こりゃ何か曰くがありそうだと俺らは思うんだがどうだべえ。その後何の話も聞かねえかね？
吉弥　それがよ、治助がとこにも今朝方金造が行ったって話だ。
善太郎　治助がとこにも？
お好　そんじゃ小父ちゃんら、今度の話はまるきし何んにも知らねえんだね。
吉弥　今度の話たあ何んだ？
お好　下宿じゃ、不動前の持田を町の酒造屋さ売んだよ。
吉弥　(驚いて)売る？
お好　俺らちゃんと聞いたんだよ。俺らゆんべ納戸で御隠居さんの腰をもみながら、座敷の話を聞いたんだ。
吉弥　誰の話だ。
お好　旦那と、町の代言人と、金造の三人なんだ……。俺ら聞いてて、腹が立って涙が出るような話だったわ。下宿じゃ昨日不動前の田で組合員の小作してんのを、みんな引上げるってふれて歩いたべに？　ありゃ何んでなんだか知ってんのけ？
善太郎　何んのためだ？
お好　ありゃ、値よく売るためなんだ。酒造屋じゃ組合員の小作してる田は後々が面倒だかんうんと負けろ、でなけりゃ組合員の小作を止めてから買うべっちうんだよ。……下宿じゃどうでも金を造らにゃなんねえわけがあって足元を見られてんらしいだわ。だかん、組合員の小作は引上げにゃなんねえわけなんだべ。……ところがどうだべよ、昨夜になって又代言人がやって来てさ、「組合員ばかしじゃいけねえ、今迄に組合さ這入ったことのあるもんもあるそうだかん、そ奴も取上げろ」ってんだよ。一度でも組合さ這入ったもな札付きだで、あぶねえてんだよ。
おしも　俺ら家も札付きだっちうんだかや？
吉弥　そうよ、いくら一度は出されたって、悪い目に合や又泣きを入れて戻るようにならねえとはかぎらねえ。と思うべえ。組合ッ気のねえ小作人を欲しがんのは、今の地主根性だで……。
お好　そんで今日は、俺ら家と治助さんがとこの受田も引上げることになっただ。……金造が愚痴ってたよ。「組合崩して、なるべくちっとの者を引上げることにしてえと思って一生懸命にやったのにも、何の役にも立たねえ」って……。
善太郎　するてえと、こりゃ前々からの仕組なんだな……。
お好　そうなんだ。そして金造奴は、「こりゃ組合に這入

らねえ方がええっていうもってこいのあかしでもあったに……」とも言ってたよ。
吉弥　(怒って)畜生、何処迄も俺達を仇あつかいにしやがるんだ。それもよかるべえ。だが、田地を値よく売るために、そんな小細工をしねえじゃなんねえとは、何んてえ獣奴だ!!　小作人なん暮せようが暮せめえが自分の懐せえふくれりゃ、それでいいっちうのが奴等の根性なんだ。見やがれ畜生!　てめえ等の思わくがそううまく当ってたまるもんか。小作人は虫ケラじゃねえんだ。やるんだ。何処迄もやるべえ。うまうまと奴等にだまされちゃなんねえ。
善太郎　そうだ。なんねえ!
お好　小父やん等!　話はそれだけじゃねえんだよ。代言人がしまいに云っちゃったなどんなこったと思うね?……たまげちゃいけねえよ。年貢の二割引上げ、二割引上げだよ。
吉弥　な、なんの年貢だ!
お好　売られる田地の年貢さ、酒造屋が目論んでいるんだよ。
吉弥　うーん……(ハタと手を打って)そうか、読めた!
善太郎　何が読めた?
吉弥　今度のことの根は其処にあんだ。組合があっちゃ魂胆がうまくゆかねえ。組合の反対闘争を恐れていんだ。だから、組合のねえ小作人ばかりにして、思う存分搾めつけるべえってんだぞ!
お好　そうだよ。代言人は酔っぱらってみんなぶちまけちゃったんだ。
吉弥　よし!　そんなら俺達ちゃ、そのつもりで交渉せにゃなんねえ。……お好っ子、いいことを知らせてくれた。これで俺ら達ちゃ腹をどっしり決められるんだ。今日の示威運動は腹の底からの呪いの行進だぞ!!
　この時、遠くに大勢の唄う農民歌が聞えて来る。
善太郎　おい、やって来たぞ!
吉弥　うん、こいつを早く知らしてやるべえ。どうでも奴等の面ひんむいてやるんだ。絶対に奴等の思わくを通しちゃなんねえ!
佐助　ああ、俺らどうしたらいいだべえ?　俺ら家じゃどうしたらいいだべ?　組合がねえ。……あの田がなくなりゃ俺ら家じゃやってゆけねえ。
吉弥　仲間を裏切って決していいこたあねえんだ。
おしも　そんじゃ、皆んな俺らが悪いのかや?
吉弥　誰が悪いんだかわからねえ。しかし、しかし、おめえとこの親爺が、選挙の時買収されて政友会さ票を入れた、あん時からこりゃ見え透いていたこった。
佐助　そうだ、俺ら心得ちがいだった。ふんだが俺ら、今どうしたらいいだべ?　なあ吉やん、善さん……?
吉弥　(戸口を出て行きながら)闘争にかえってこい!今日の示威運動に這入れ!……そして組合にかえしてもらう

こった。
善太郎　(同じく)そうだ。俺ら達は元々同じ仲間だ。一時の心得ちがいなんだ。本当に後悔するなら俺ら達はやっぱり助け合うべ。力になるべえ。
吉弥　示威運動の先頭にやって来い!!
　二人出て行く。
　佐助、おしも、気の抜けたようになっている。
　歌声が段々近くなって来る。
お好　(戸口まで出て行って)お父っつあん!!何故出て行かねえのだ？　あれを見な、皆んな腕を組んで歌を唄って来るじゃねえかね！……出て行かにゃ駄目だよ。組合より外にゃ俺ら達のために戦ってくれるもんはねえんだ。……女達もいる。お父っつあん行こう俺らも行くよ……。
佐助　だけど、組合じゃ皆んな俺れを入れてくれべえか？
お好　何言ってんだね、組合は小作人のためにあんだよ。お父っつあんが本当に後悔して這入りてえってのに、どうしていけねえって言うべえ。小父やん達もそう言ったじゃねえけ……
佐助　(決心したように)うむ、よし。俺らは行く。
おしも　行ってくれるけ！
佐助　行く。
お好　さあ行くべ！……
　佐助とお好去る。
　歌声が潮のように間近に響いて来る。

(一九三〇年八月「文芸戦線」)

浅野セメント争議六月三十日夜の素描

今野賢三

一　燦とした工場の灯

空地を見わたすような広い構内は仄かに暗かった。まっすぐに、黒い城廓でも浮んでいるような浅野セメント工場には、燦々とした灯が光っていた。そこは川崎市大島町。

私のかたわらへ、異様な眼を見はった五六人がちかよって誰何した。会社の暴力団であった。

十分ばかり前であった。組合旗の赤い色と、槍のホサキを仄暗にキラめかして、激浪のような唄声が、強い足どりといっしょに、三十人五十人と、工場の正門へせまった。御用暴力団はこれと対抗した。構内へ今一歩踏み込んで、嵐のような衝突を捲き起そうというときに、旗はもぎとられ先頭は検束された。三四本の組合旗は、悲憤の血を惨ませながら警官にかつがれて、寂しく垂れたまま交番へ持ってゆかれた。

二　応援演説で血潮は湧く

セメント労働組合川崎支部は狭い路次のなかの、カッとかがやく灯の下に、わけもなく混雑していた。赤タスキの若い女工が額の汗を拭きながら幹部たちに交っていた。

事務所のかたわらで、四十ぐらいの、解雇されたらしい一人が、

――親子心中が……親子心中を……。

昂奮してなにか言っていた。飢えに襲われてゆく失業者の、痛切な声が、するどく私の胸にせまった。

窓の外で新聞記者の一人が、

――読売新聞の記者ですが……。

誰もそれにとりあっていられない様子であった。

――なんだって？　ヨメウリ新聞だって？　そんなものに用がないよ！

知識のないらしい若い女工が笑いもせずにヨメウリ新聞にしてしまった。それほどおちつかなくなっていた。

応援団体から来ている四五人の演説が初まった。

――会社からして、われわれに、暴力団を使って挑戦してきた以上は、血を見るかも知れない。血に対抗するものは血だ！　もはや、これよりほかにみちがなくなっていることを示した。

――浅野良三のところへお願いに行った。ようやくのことで会うまでお茶一つくれずに数時間待たされ、代表者が泣いて訴えるのをどこ吹く風といったように……富士紡績のこんどの解雇が発表されると、あまりの驚きに鉄橋から投身しようとしたのを、警備団が発見してやっと連れもどったような、悲惨な労働者の失業を、資本家は……？

こんな演説があるかと思うと、白い上着に黒く短い袴の、青いネクタイをつけた女学生のような洋服姿の『日本電気』の望月ハナ子それから製鋼労働組合の斎藤フキ子などという、シッカリした女性の応援演説があって、やがてまた、みな立上って、激浪の吼立てるような唄を声かぎり合して、それから、まだガマンが出来なくて、工場めがけて散歩に行こう！　散歩からデモにッ！

口々に叫ぶなかで、憤激のあまりに、誰か思わず、『×をつけろッ』と口走ったものもいた。

三　労働者は罐詰にさる

会社は計画的な解雇を行った。七百七十名のうち、二百七十五名！　二十五日わざと臨時公休にして、（或る手段のために）夜勤の職工が朝七時に何気なく帰宅すると、九時に解雇の書留郵便がつくようになっていた。まったく寝耳に水であった。

罷業を指導しそうな有力な幹部で、技術がすぐれていて解雇の出来ないものは臨時出勤停止として、厳重な監視と片方では失業で脅かして、罷業団へも組合事務所にも姿を出させない方法をとった。そして四百数十名の職工は、全部『工場内へ罐詰』にしてしまった。外は暴力団と警官がとりかこんでいるのだ。食事だけはあたえられても妻子のもとへは帰られない。こうして昼夜交代の就職でもって、完全に争議団と切放して工場へ封塞してしまった。資本家の戦術は組織的に巧妙になった！　赤児の手をもぎとるように、易々とはこばれていた。

『一時的な労働者の罐詰！』果してそれで済むものか！

四　妻子を捨てても！

『それッ！』

とばかり、二台の自動車、サイドカー自転車――警官を山積して工場の方面へ走った。

ひとしきり、『組合事務所』の露路を出たところの往来がしずかになった。赤ダスキの女工さんを、男工が護衛して行くのも見えた。

往来の彼方から、二つの影がうごいてきた。女房は赤ん坊を背負っていた良人に懸命になってブラ下っていた。

――おまえさんッ、恥しいじゃないか、おまえさんの心持はわかっているよ、まアいいからウチへ帰っておくれよッ！

女房は泣きながらわめいた。良人は、五六間さきに警官の姿を見つけた。いきなり、狂犬が噛みつこうとするようにはねあがって駈け出そうとした。女房は引摺られた。しかし、警官のちかくまでゆかないうち、女房は死にものぐるいで良人を、二つに裂けているほかの道へ引張っていった。

——労働者だと思ってあんまり侮辱しているッ！

良人は、昴奮のため殆ど自分を制しかねていた。

——キサマ！　おれが争議団の味方をするのがいやならおれを捨ててどこへでも行け、かかあや子どころの問題じゃないッ！

女房はまた良人にブラ下った。二つの影が泣いたり言い争ったりして遠ざかった。

一夜の風景！

そこになにがある？　極端なる資本の攻勢！　階級闘争の深刻な激化！　そして、未来は労働者のものだ！

（一九三〇年八月「文芸戦線」）

天国の記録

下村千秋

彼女等はこうして、その血と肉とを搾り尽された。

一

三月の末日、空っ風がほこりの渦を巻き上げる夕方——。溝の匂いと、汚物の臭気と、腐った人肉の匂いともいうべき悪臭とがもつれ合って吹き流れている。六尺幅三尺幅の露路露路。その中を、海底の藻草のようによれよれと声もなくうろついている幾千の漁色亡者。

一つの亡者が過ぎて行くと、その両側の家の小窓から声がかかる。遠くから網をなげかけてたぐり寄せるような声、飛びついて行ってその急所へ喰いつくような声、両手で摑まえて力一ぱいゆすぶるような声、嘆声をあげてあわれを売るような声、哀音をしのばせて可憐さを訴えるよう

な声。
「どうだえ、陽気なもんだろう。」
先に立って歩いていた辰つァんは、後からついて来る周三とおきみの方へふり向いて、そう言いかけた。
「まるで何だろう。夏の夜、谷川の道を歩いてると、それ河鹿てえ奴の鳴き声が、次から次へと新らしく湧いて来るちょうどあれ見てえだろう。」
周三もおきみもそれには答えなかった。周三は、よれよれの袷の裾下から現わした細い脚をひょろつかせながら、首を縮めて歩いていた。おきみは、からだ中に悪寒を感じながら、胸を顫わして歩いていた。彼女の耳には、女達の叫び声が、地獄の底から漏れて来る阿鼻叫喚に聞えた。
「何しろいい気持ちのもんだよ。これが毎日毎晩、照っても降っても、三千人からの客がなだれ込むてえんだから、まったく豪勢なもんだろう。おんなじ働くくんなら、こんな場所で働かなけりゃ嘘さ。」
辰つァんはまたそんなことを言いながら、叫びかける女共の声へ頓狂な声で答えたり、呼び込み口へ頭を突っ込んで、げすなことを吐き散らしたりした。
暗い露路は奥へ入るほど複雑していた。それはまるで蟻の巣であった。辰つァんは、その中を右へ折れ、左へ曲って、後の二人を案内していたが、とある角の青い軒灯ののついた家の前へ来ると、その呼び込み口へ、モヂリの片袖をかけて、

「こんばん」と声をかけた。と、中から可愛いい声で、
「はい、こんばん、おあがんなさいな。」
「このおたんちん、お客じゃねえや……いるかえ?」
「あら、辰つァんなの、いやに色男に見えたからさ……いるわよ、どうぞ。」
辰つァんは、少し離れて立っている周三とおきみの傍へ来て、
「ちょっと待っててくんな」と言いながらやっと人のからだが入れるほどの露路を、裏手の方へ入って行ったが、すぐ出て来て、
「こっちへお入りよ」と二人を手招いた。
二人は、裏手の台所から、三畳ほどの茶の間へ通された。そこの長火鉢の前には、銀杏返しの変に青っぽく光る羽織をだらりと引っ掛けた女が、いぎたなく坐って巻煙草をふかしていた。
「こちらがおきみちゃん、こちらが旦那様、それからこれが、当家の御主人、お銀ちゃん。」
辰つァんは、そんな言い方で、双方を紹介した。
「どうぞ、よろしくお願いします」
おきみは叮嚀に頭を下げた。
「あたしこそ」お銀ちゃんと言われた女はそう答えると、
「辰っアん、二階へ案内しなよ。ここは狭くって話も出来やしない。」
二畳と三畳と四畳半が二階の全部であった。二畳と三畳

は、彼女達の労働部屋で、四畳半はひきつけ部屋になっていた。二人はそこへ案内された。黒檀まがいのちゃぶ台、真赤なメリンスの座布団、ビーズ細工を飾りつけた電灯、壁に貼りつけた活動俳優のブロマイド、ペンキ画の富士山の額、一生懸命に明るく華やかに飾りつけていながら、そこには塵箱の中のようなむさ苦しさとむせっぽさとが籠っていた。

「どうです、見かけによらずしゃんとした家でしょう。」とふところから出した手で顋を撫でながら、二人をその中へ坐らせて、部屋を出て行った。

間もなく階下からは、ときどきげすな大声が混って、辰つァんとお銀ちゃんの密談がもれて来た。

周三は壁に凭れて、おきみは、ちゃぶ台の上に肘をついて、じっと息を殺していた。やがて周三は言った。

「辰っアんがここの主婦の亭主だというのは嘘らしいよ。また引っかかったかも知れない。」

「そんなこと、どうでも構わないわ。」

おきみは、度胸を据えた声で答えた。

「こんな場所で、お前につとまるかえ?」

「やって見るわ。だって仕方がないじゃないの、今更ら……」

二人はそんなことを話し合いながら、各自の胸の中で、——こんなことになる筈ではなかったがと自分に言った。と言って、——じゃこうならなければどうなったのだ?と自問しても、それに答えることは出来なかった。

十日ほど前の夜のことであった。おきみは、長野発の終列車で上野へ着いた。そして、省線電車のガード下に待っていた周三と一緒になった。半年ぶりで会えた二人は、互いの愛情を現わすために、互いの腕を力一ぱいつねり合った。彼等はそんな場所でものを言い合うことを予め禁じていたのである。

二人はすぐ省線に乗った。新宿で下車した。その足ですぐ旭町へ入って行った。そして狭い露路の中のマルマンという木賃宿についた。

おきみは、命がけの仕事をして来ていたのである。それは、火のついた爆弾を背負っているような気持ちであった。二人はそのためにいつ粉砕されるかも知れない気持ちであった。それは何であったか?

しかし二人はそれを二人きりの部屋の中でも口へ出さなかった。あらゆる意力を水の如く冷静に集中して、その爆弾の火を消そうとしていた。

二人は最初一泊二円の四畳半の部屋で、メリンスの蒲団へ寝た。が、三日目には一泊一円の木綿蒲団へ移らねばならなかった。しかしこれも二三日で、こんどは一泊七十銭の北向きの三畳の、棚も押入れもない、さまざまの汚物で真黒になった畳の部屋へ追いつめられた。

二人は、この部屋の窓から、灰色の空を眺め、下の露次

をうろつく浮浪者を見下し、近くの線路を往復する汽車と電車のひびきを聞き、木枯らしの後の海鳴りのような都会の喘ぎ声を聞いた。そうして、明日の日の来ることも信じられない真暗な前途に対し、深い溜息をもらしていた。

一週間ほどするうち、二人は日払いの宿料が支払えなくなった。当然の結果として、二人はその宿の追い立てを喰った。おきみは、宿の主婦の膝元へひれ伏して、もう五六日泊めておいてくれと願ったが、主婦は砂利のような言葉を吐いて、おきみの頼みをはねつけた。

そこへ一人の男が出て来た。彼等の隣室に泊っている夜店のバナナ屋と称する男であった。その男は、これまで廊下などでおきみとぶつかる毎に、へえへえと頭を下げて馴れ馴れしく言葉をかけていた。それが出て来て、「同じ宿へ泊っているよしみです。当分の宿料はわしが立て替えときやしょう。」と言った。

そういう男の魂胆はどこにあったか？　しかしおきみと周三はその疑問を詮議する前に、背に腹は代えられぬ、というせっぱ詰った気持ちから、とりあえず、その男の厚意を受けずにはいられなかった。

と、次の夜、その男は二人の部屋へのそりと入って来ておきみへ言った。

「どうだね、失礼な話かも知れねえが、実ァわしの女房も働かしとくんでこんな話も持ち出すんだが、一つ、わしの女房のいる銘酒屋で働いて見ちゃ。」

おきみはそれを聞くとぐっと、胸が詰った。黙っていると相手は、

「働くのがいやじゃこれから先、どうして生きて行こうてんだね。こんな木賃宿にいつまでもそんなことをしていたら、飛んでもねえ誤解を受けて、警察へ突き出されますぜ。」

この言葉に、おきみは思わず顔色をかえた。相手の男はそれを見逃さなかった。そしてこんどはおっかぶさるように

「そいつが恐かったら、わしの言うことをききなせえ。悪いようにはしないよ。」

「…………」

「いやかえ。いやだというのかえ？」

彼は自分の顔を、おきみの鼻面へぶつけるように持って来た。その顔の眉間には、ジャガ芋ほどの瘤があった。その瘤の下へ暗い影を寄せて、彼はぐいとおきみを睨みつけた。そこには、金と意地とのためには命のやりとりもしかねない無智な狂暴性が自ずと浮んで来た。

見ていた周三もそれにはギクリとした。

おきみは声をふるわして答えた。

「行きますわ、どこへでも行って働きますわ。」

そうしておきみと周三は、首に綱をつけられた仔犬の如く、いや応なしにこの世界へ連れ込まれて来たのであった。その男というのが即ちこの辰つァんだったのである。

二人は、階下の密談にきき耳を立てながら不安の目を光らしていた。
そこへ辰つァんが先に、お銀ちゃんも上って来た。お銀ちゃんは、ちゃぶ台の上へぐたりと肘をつき、その上へ、平ったい濁った顔を載せて、おきみと周三を代るがわるジロジロと見守ってから、
「とにかく、ひも(情夫)つきには困るよ」とふてぶてしく言った。
「まア待ちねえ」と辰っァんは受けて、いが栗頭をぬっと周三の方へ突き出し、「お前さんは受けて、いが栗頭をぬっとんでおかみが文句をいやがるんだよ。ひもつきには懲り懲りしてるといやがるんだ。一体全体お前さんのようなれっきとして一人前の男が、何だってひもなんぞになっているんだね。お前さんがぶら下っているばかりに、この女もこんな所へ身を売らねばならなくなるし、おまけにそれもうまくは売れねえってことになるんだ。せめて自分だけは働いて喰ったらどうどえ。」
「…………」周三は、蒼白い顔をねじ曲げながら視線を乱しておどおどした。それがいかにもあどけなく、また意気地なく、生れつきのひもらしい感じであった。
「そんなことを言わないで下さい。」おきみは辰つァんへ答えた。「あたしから頼んで無理にこの人を引き寄せているのですから。あたしは、この人がついているからこそ、どんなことでもする気になっているのですから……」
「お前の心懸けァそりゃ感心だが、男の方がそれでいい気になって働かずにいるって法はねえ。」
「働きたくっても仕事がないんですから仕方がないんです。……それに男は、女のようにからだを売って喰うことは出来ませんもの。」
「そんなら死んでしまえゃいいんだ。」
「……だから、この人は、いく度も死のうとしたんです。」
「…………」
「そいつをお前が助けてるてえわけかえ?」
「…………」
「野暮なことを言うなァお止しよ、辰つァん」とお銀が口を出した。「ひもというもんは瘤見たいなもんで、切り離したら生きちゃいられないし、と言って喰っつけといてもやっぱり、なァんて縁起でもないことを言って悪いわね。つまりそら、花に蝶々、水に魚で、持ちつ持たれつ、その味は辰つァんなんかにゃァわからないのよ」
「へん、そんなことを言うなら、黙ってこの花と蝶々と引き取ったらどうだえ?」
「それとこれとは別問題じゃないの。」
「面白くもねえ……」
辰つァんは、そう言って、急に、例の眉間の瘤の周囲に恐ろしい狂暴性を浮かばせ、おきみと周三へ言いかかって来た。

「とにかくお前達に言うことがあるんだ。というなァ、わしゃアこのおかみの亭主だと言ったが、そいつァ嘘だぜ。先ずそれを承知して貰って、それからわっしの商売は夜店商人ということにしていたが、ありゃ内職、本職はこの中の女の周旋屋で、それでおまんまを喰ってる男なんだ。ね、そいつをよく承知してくんなよ。こう言っちまや、お前達がいくらドジでも覚悟ァきまるだろうね。ぶちまけたことを言えゃ、わしァ、お前達がこないだ長野の方から来た終列車で上野へ着いた時から、後をつけてたんだよ。ちょうどわしが張ってる所へ、おめえ達がポンと飛び込んで来たのさ。ねえ、だから、このわっしに摑まって、この中へ連れ込まれりゃ、もういくらジタバタしたってどうにもならねえ、ってことをよく承知しなよ……。ところで、今改めて言うんだが、お前達ァ馬鹿に××ってものを恐がってるね。いや、そいつァお互いだが、そこでその××を恐がるものが隠れて絶対××だてえ所は、広い東京にも、こと、××の二カ所しかねえんだ。そりゃお前達も百も承知で、承知だからこそわっしの言うなりにこの中へ入って来たんだろうが、とにかく、××の御用、って奴が嫌えならここにじっとしていねえよ。お前達に取っちゃ、この中は極楽で、この外はどこもかも地獄なんだ、てえこともよく承知しときなよ。そいつを承知してこのおかみの言うことをきいてりゃ、第一おめえ達の身が安全だし、ここん家でも安心して世話をしてくれるし、金も貸してくれるてえ訳だ、どうだ、解ったかね？」

「ええ、よく解りました。」

おきみは、垂れていた頭を更に低く垂れた。

「君もわかったろうね？」

辰つァんは、周三の顔を覗き込んだ。

「え、わかりました。」

辰つァんはここで、お銀ちゃんを顧み、

「二人が口を揃えてこう言ってるんだから、どうだ、置いてやりねえよ。」

「……仕方がない。当分置いといて見ようかね。」

お銀ちゃんは、生あくびまじりにそう答えた。

「じゃ、着物を買うぐらいは貸してくれるだろうね。」

「まァ、五六日様子を見てからね。」

「頼むよ」辰つァんは、ここでもう一度狂暴性の浮んだ顔でおきみと周三を睨みつけ、

「この中は、田舎のだるま屋たァわけが違うんだからね、ここからずらかろうなどとたくらんだら、脚の一本二本、おっぺしょられると思わなきゃァいけねえぜ。」

二

「今の男、口じゃあんなことを言っても、気は至っていいんだよ。もっともあの鼻の上のこぶがくせ物だが、今日からこのお銀ちゃんがついているんだから、安心してりゃい

いよ。」
　辰つァんが帰ったあと、お銀ちゃんはそう前置きをしておきみの方へ、
「それでどう？　今晩からでも働いて見たら。」
「……え、でも、こんななりじゃ」とおきみは、目を膝の上へ落した。それはボカボカになったメリンスの羽織と着物で、膝のあたり地がすけて見えていた。
「着物なんか何だっていいのよ。厭じゃなかったら、この羽織を着ちゃどう。模様さえパッとしてりゃ、男の目なんかごまかせるものよ。」
「でも、あなたが困るでしょう。」
「だからね、代るばんこに着ましょうよ。実はね、あたしは、名義はこの家の主人だけどほんとうの主人は、この表通りの自転車屋なのよ。それであたしは、この家の呼び込み口一つと二階の一間だけを毎日二円の日払いで借りてるのよ、だからあたしはあんたのほんとうの主人じゃないしつまり二人で共同に働くというわけになるのだからね、この羽織も共同で使えばいいのさ。ね、その代り、そういう訳だから、お金もないし、あんたにもそうたんとは貸せないのよ、それにあの辰つァんにも周旋料を払わなけりゃならないし……」
「それじゃ当分、それを拝借さして下さいね。」
「拝借なんて代物じゃないのよ。この裏を見てごらん」とお銀ちゃんは、枯れた芭蕉の葉のように横切れのした裏を返して見せた。
「それはそうと、うちの奴がこんな場所の店へいきなり出て、お客が取れるでしょうか？」
　周三は、青白い頬を撫でながら、おどおどと訊いた。
「ところが案外よ」とお銀ちゃんは声をひそめ、「今、お店でお客を呼んでる娘ね、あれはやっと十七よ。こないだ目黒の方からうちへ初めて遊びに来て、店へ坐って鏡を見ていたら、どうだ、上ってやろうかという客の声がするので、聞き覚えで、おあがんなさいな、と受けたら、それがすぐ上って来たのよ。それが手初めであの娘はこの商売を始めたのだけど、今じゃもう立流に一人前よ。」
「それで、僕達は、その自転車屋とはどんな関係なのでしょう？」
「何の関係もないのよ。その点は、ちっとも心配しなくてもいいの……あの自転車屋も、考えると獱さ。自分じゃ表できれいな顔をしていて、裏へ廻ってぼろい儲けをしているんだからね。そんな家が外にもいくらもあるのよ。表じゃ、酒屋をしたり、荒物屋をやったり、煙草屋をやったりしている家がね。人のふんどし、じゃない、人の腰巻で角力を取ろうって奴さ。」
　お銀ちゃんは、初めは狡猾な意地悪のふてぶてしい女に見えたが、こうして話して行くうちに、腹の底まで見せるあけすけのお人好しに見えて来た。おきみと周三はいくらか気楽な気持ちになった。

お銀ちゃんは二人をまた下の三畳へ下した。そしておきみへ言った。

「じゃ、お化粧を直して坐ってごらんよ。髪は、今晩はそれでいいわ。あしたの朝、髪ゆいさんへ行ってらっしゃい、あんたはきっと結い綿が似合うわね。」

おきみは鏡台へ向った。その鏡へ映った眼の細い下ぶくれの顔を、周三はこっちからときどきぬすみ見て、そして泣きそうな顔をした。

お銀ちゃんは、おきみの背へ向って、店へ坐ってお客を呼ぶ方法を教えた。その中に二つの××があった。××を呼び込まぬこと、ひやかし客と長話しをせぬこと。

「××の顔はあとで教えるけど、ひやかし客と長ばなしをしていると、やっぱり××に踏み込まれるのよ。そしたら主人名義のあたしとあんたとが三日の拘留を喰った上に二十六円づつの金刑だからね。表の自転車屋が、あたしのようなものを主人として届けとくのも、そんな場合の用心なのだが、それで一番馬鹿を見るのはあたしなんだからね。そこはしっかりやっておくれよ。」

おきみは、髪を直し、顔の化粧をすますとその顔をお銀ちゃんの方へ向けて

「これでようございますか?」と言った。

周三はそれを見ると、顔を赤くしてうつ伏した。

「そうね」とお銀ちゃんは、出来上りの品物を吟味するように、「眉をもっと濃くして、頰紅ももっと染めなさいよ。何でもいいから、うんと若く見せる算段をしなきゃァ駄目よ。そんなこと御承知でしょうが。」

やがておきみは、店へ――やっと一人が坐れるほどの場所へ出て行って坐った。そして、音もなく左右へ流れる人の影へ声を掛けた。

が、その声は泣くように顫えた。

「駄目よきみちゃん、そんなことじゃ」とお銀ちゃんは茶の間から呶鳴った。「もっとこう力のある声で、歩いて行く野郎をうしろからねじ伏せるような勢でなくちゃ。……いろんな野郎が通るだろう。みんな雑魚野郎なんだから、こっちもそのつもりで、この馬鹿野郎と呶鳴るつもりで呼びゃアいいんだよ。」

そう言われると、おきみはますます声がふるえて来た。夕方、外から見た時は、男を呼び込む女の声が、悪寒を感じたほど哀れな悲鳴にきこえたが、こうして内から覗いて見ると、窓先を群り過ぎる男共が、一種奇怪な原始動物に見えた。

おきみは窓の下に怯えちぢまって、一人ほろほろ涙をこぼした。

三

一と月して、春も過ぎた。この中では、春が来て、その春も過ぎたことを、花が咲き、花が散り、木の葉が繁り出

したことで知るのではなかった。この中を縦横に流れている溝の水が、温気でぶつぶつと煮え出し、その中にボーフラが行列をつくり出し、それが一つ一つ羽を生やして露路から露路、部屋から部屋へ、ワンワンと群り出したことでそれと知るのであった。

おきみは、近くの洋品店の二階の三畳へ間借りさしとく周三のところへ、親雀が小雀の巣へ餌を運んで行くようにして、一日に一度ずつその日の食べ物を運んでやっていた。

周三は曇った顔にふがいなさそうな、色を浮かべながらも、その餌の方へ開けた口を持って行った。

暗い露路露路には、漁色亡者がボーフラのように夜毎に群りふえて行った。

そういう或る夜のこと、お銀ちゃんの家では例の十七の女――八重ちゃんが、うっかりして因業なひやかし客を呼び込んだ。二人は呼び込み口の内と外とで、引っ張ったり引っ張られたりしていた。

そこへ××が飛び込んで来た。その結果は簡単明瞭であった。八重ちゃんと、主人名義のお銀ちゃんとは、翌日午前九時迄に、T署へ出頭を命じられた。即ち、三日の拘留と二十六円の金刑とを二人は言い渡されたのである。お銀ちゃんは血相をかえて怒り出した。

この私娼窟に於ては、この体刑と金刑とが、周期的に、一年に×回乃至×回の割りで、全部の銘酒屋へ科せられることになっていた。で一度処罰されると、一つの家で、出方(私娼)と主人とが二人で都合六日の拘留と五十二円也の罰金を申し渡されることに極っていた。だから、これを一年四回と見ても、一年間一軒の家で、二十四日の拘留体刑と、二百八円の金刑処分をきちんと命令された。これは彼女達の一ヵ年の実収入の×分の一に当るので、彼女達はこの「本署へ出頭しろ」に対しては、いつもおぞけをふるっているのであった。

お銀ちゃんは、毒々しく塗った紅の唇から赤い唾を吐き飛ばしながら、八重ちゃんを呶鳴りつけた。

「……白首のひよっこの癖に、いけ図々しいことをしやがるから、こんなことになるんだよ。あたしゃ、どうしたって行きゃしないから、どっかで代りをめっけて来て頂戴」

「だって、罰金はお銀ちゃんが出すんじゃないんでしょう。自転車屋で、出してくれるんですもの、ずいぶんいいわ。あたしは罰金も自分で出さなきゃアならないのよ。」

八重ちゃんも、円い小さな顔を角張らせて、負けていなかった。

「八重ちゃんが自分で出すのは当り前さ。しかしあたしの分を自転車屋で出すなんて、当てになりゃしないよ。あたしは、八重ちゃんとは何の関係もないんだからね。八重ちゃんの巻き添えを喰っちゃ堪らないよ。」

「そんなこと言ったって、お銀ちゃんはこの家の主人なんでしょう。」

「そりゃ名義だけじゃないかね。」
「名義だけだって主人は主人ですもの。」
「だから猫で堪らないのよ。自分で泥棒をしといて、罰は人に被せるってんだからね。」
「そんなこと××へ行って言うといいわ。」
「へらずロを言うとのすよ、八重ちゃん。」
「…………」
八重ちゃんはとうとう黙ってしまった。
お銀ちゃんは、唾の泡立った唇を嘗めまわしながら、まだ何かを叫ぼうとしていたが、やがてその口をおきみの方へ向けて、
「ねえ、済まないが、あんた、あたしの代りに行ってくれない」と言った。
おきみは、そう来ることを予期していたが、いざそう出て来られると、はらはらしながら、「……でも、あたしが代って行ってもいいんでしょうか」と何かを嘆願するように言った。
「そりゃ構やしないのよ。あんたが代って、行ってくれりゃ、その間の稼ぎ賃まであたしが出すわよ。」
おきみは頬に乱れ下った結い綿の髪を、小さな唇でなぶりながら、深い溜息をついていた。
「いやなの？」
「……お銀ちゃん」おきみはおろおろと答えた。「そればかりは勘弁して下さいね。」

「あら、そう！」とお銀ちゃんは、ジロリと睨みつけて、「どうせそう来るだろうと思ってたよ。だからひもつきは大嫌いさ！」
「そういう訳じゃないのよ。」
「じゃ、何のわけさ。……ああっ解ったよ。ずらかりもんだからね、警察へ行ったらそいつを洗い出されるのが恐いんでしょう。ええ、もう頼みませんよ。その代りあしたっからこの家は空っぽになるんだから、今夜のうちに何処かへ行っちゃっておくれよ。だけど、借金はきれいにしてって貰わなきゃァ困るよ。」
その夜更けである。おきみと周三は、このお銀ちゃんから、所有物一切を巻き上げられてしまった。おきみは持ち金全部を、周三は洋品店の三畳で使っていた夜具まで強奪された。そのため周三は、その部屋からも追い立てられてしまった。
二人は途方に暮れ、どこへ行くあてもなく、溝に沿った暗い露路をうろついていた。
と、うしろから二人を呼びかけるものがあった。見ると、八重ちゃんである。
「ねえ、あんた達、これからどこへ行くの？」
「そのあてがないのよ」おきみはほそぼそと答えた。
「そうだろうと思って追っかけて来たのよ。それじゃ、あたしについていらっしゃいよ。只で泊めてくれる家があるんだから。」

「それは銘酒屋ですか？」周三はもう怯えているように訊いた。
「うそよ、何でもない家なのよ。あたしが、前に世話になったことのある家よ。」
二人は、八重ちゃんの後について歩き出した。もう一時を過ぎていたが、雑魚野郎共はまだ、どの露路にも七人八人とうろついていた。
長屋の胴腹に穴をあけて造ったトンネル露路まで来ると、周三は、そこの破目に凭れてしゃがんでしまった。
「どうしたの。気持ちが悪いの？」おきみは、踵をかがめて周三の横顔を覗き込んだ。
周三は、何んにも答えず、両腕の中へ頭を埋めた。
「どうしたのよ。ねえ。」
「……お前一人、ついて行きなよ」周三は腕の下で言った。
「何を言ってるの！」
「おれがついてるから、お前までこんなことになるんだろう。……おれは……」
「馬鹿なことを言うんじゃないのよ。あたしは、あんたがいなかったら、今頃、生きてやしない。あんたは、あんたは……」
おきみはそう言っていたが、いきなり周三の腕をとって引き起し、その胸へしがみついて、
「あんたは馬鹿、あんたは馬鹿！」と咽びながら叫んだ。

「…………」
周三は、黙って立ち上り、よるべない足どりで歩き出した。

（一九三〇年七月「中央公論」）

波

貴司山治

一　救援会ニュース

一九三〇年の夏、救援会が再建され、全国に根を張った。それは操短賃下、閉鎖、首切り、失業、飢餓の狂瀾が、日本資本主義を歴史の、最後の波頭へと追い立てている年であった。

秋十月、全国労働者、農民の間に叫びおこされた「共産党被告を全部東京に集めて裁判を開け！」の要求に動かされた支配階級は、まず静岡、前橋、水戸、千葉、横浜五地方の被告三十四人の階級裁判を東京で開かざるをえなくなった。

裁判の日取りがきまると、同志たちはそれぞれの地方から東京に護送されて来た。

七月中頃に、革命的労働者及び農民の、地下的指導部は弾圧によって傷められていた。そのため、党がその影響下の工場労働者を集中しようとした八・一デーは予期した程の示威を、街頭にあらわさなかった。しかし、指導機関はもうすぐ、八月に入ると勢いをもり返してプロフィンテルン大会のアジプロを行い、九月七日の国際無産青年デーには、東京市中の警戒網のあちこちが破られ示威隊が動き、血と、ビラが散った。

かくて十月に入った。統一公判は八日に開かれるのだ。その前日、十月七日は労働者にとっては忘れる事の出来ない古き指導者渡辺政之輔の殺された日だ。救援会はこの二つを結びつけて九月下旬からアジ・プロを開始した。初めて組織しえた全大衆をこれに向って動員しようとするのだ。

救援ニュース

日本赤色救援会東京地方××地区委員会

渡政デーと五地方控訴公判を闘え！

同志諸君、今から二年前一九二八年十月七日は、俺達プロレタリアートの大きな指導者であり、日本共産党書記長たる同志渡辺政之輔が上海より日本への帰途、台湾キールンで官憲に包囲され、極力之れと戦いついに力つきて、恨みをのんで憤死した日だ。

日本の資本家地主の階級は、渡政一人を殺しただけでなく、俺達のすぐれた仲間を幾人も爪牙にひっかけている。山宣をみろ！　三重の大沢を見ろ！　その外、伊藤

宮下、最近には赤大島等、かれらの野蛮な拷問や檻禁によって殺された同志は数え切れないのだ。病気出獄中だった渡政の妻丹野セッも再び捕われて死に瀕している。しかもそうした迫害に喘ぐ俺達の同志は全国の刑務所に何十人あるか、一々数え切れないのだ。俺達はかかる一切の白色テロルに抗議する！　そして俺達の抗議は、単に一片の抗議文を官憲に叩きつける事だけではない。俺達の最大の抗議は、迫害になやむ獄中同志の救援だ。家族慰問隊の組織だ。出獄者及びその家族を中心とする懇親会の開催だ。そうして十月七日を渡政デーとして断然職場内では平常の不平不満をまとめて職場大会を開け！五分間黙禱ストライキを決行せよ！　工代会議を開きゼネストを計画せよ。市川町で行われる渡政埋骨式に参加し街頭デモを敢行しろ！　これらの大衆行動こそ白色テロルに対するわれわれの力強い抗議なのだ。

同志諸君、そうして更に十月八日からは五地方控訴公判がひらかれるぞ。五地方控訴公判とは、四・一六の水戸、千葉、横浜、静岡、前橋の三十四人の同志の控訴裁判が東京控訴院でひらかれる事なのだ。

今まで日本の資本家地主は十人に近い日本共産党被告を全国に亘って前例のない野蛮きわまる長期の未決にほうりこんでいる。新法だとか旧法だとか、地方別だとか分離だとかいうのはかれらの恣なお題目だ。俺達の要求は全獄中党員を全部東京に集めた公開裁判だ。同一事件である以上同一裁判が当然ではないか。

四・一六の今度の五地方三十四人の同志は高く上っている全国労働者農民のこの声に応じ、暗黒分離裁判に出廷を拒んだので、仕方なく裁判所は五地方を一緒にした。しかしわれわれの要求は飽くまで全国統一裁判だ。で、八日には、被告家族を先頭に全会員は早朝から裁判所へおしかけて、われわれの正当なる要求をデモを以て示せ！　渡政其他の同志を殺した白色テロルを粉砕しろ！

白色テロルに斃れた同志の家族を救え！
暗黒裁判絶対反対！
全国的単一裁判を開け！（以下略）

救援ニュース

××地区××委員会

八日から地方控訴裁判が開かれる。しかし共産党事件全被告を初め俺達大衆の要求は全国的統一公開裁判だ。もり上る大衆の力でこれを闘いとらねばならぬ。各班ではニュースを受取り次第すぐ準備にかかれ。では俺達はどんなことをしたらいいんだ。まず各班は至急班総会を開いて、

一、カンパニアの意義を討議せよ。
二、獄中の犠牲者家族に慰問の手紙を出せ。
三、救援金差入れ物の募金をなせ。

四、工代会議、職場大会の計画を討議せよ。
五、五分間ストライキ断行の計画を討議せよ。(四)(五)は委員を選び活動せよ。
六、八日の大衆デモに参加せよ。参加者は班代まで申出で指令を待て。(以下略)

二　埋骨式

渡政の埋骨式は、東京から少しはなれた千葉県市川町のある寺で行われた。

電車賃がいるのにかかわらず式の時刻になると、会場へは工場から組合から洋モス争議団から救援会各班から夥しい参会者がはるばるとやって来た。弔辞、電報、香奠も来た。

「救援会の動員がきいている。」

人々は感じ合った。

「この調子ではあすの裁判が大変だぞ。」

「うん、きょうのは公判デモの演習だってよ。」

埋骨式からかえる二人の労働者が話しながら停車場の方へ歩いて行った。一人の方がズボンのポケットからよれよれになった小さな半紙の片れを出して見せた。

「……俺、あの会場でモップル班代の木内から指令を貰ったぞ。」

「どら？　みせろ？」その男は友達から紙片を受け取って読んだ。

> ××班行動委員宛
>
> 日本赤色救援会東京地方××地区委員会
>
> 五地方公判への大衆デモに対する指令。あすはいよいよ五地方公判だ。俺達はこぞってここへおしかけねばならぬ。随って左の通り公判デモ参加の組織を行え。
>
> 一、五人一組の公判闘争行動隊を作り、内一人をキャップ(隊長)とし、すべて隊を一単位として行動する。
>
> 一、今夜中にキャップ会議を開く、二隊出来たら二人、三隊出来たら三人のキャップを午後八時〇〇までよこせ。そこで詳細打合わせをする。
>
> 一、但し主要な事だけをここに書いておく。法廷は地方裁判所第二号陪審廷だ。法廷へおしかけたら、被告家族を先頭に、たとえ傍聴券がなくとも構わず傍聴席にのりこめ。傍聴にパイがのさばっていたら騒ぎ立て追出せ。
>
> その他、入廷出来ぬ場合、検束者が出た場合、法廷の場所、時間、被告との共同闘争方法等重要な項目があるので、それは皆今夜のキャップ会議できまるのだ。
>
> 以上

「おれの方じゃ二隊だよ。」

「君と俺がキャップか？」

「そうだ。婦人隊が一隊できないかしら?」
「うん……できるだろう。これからかえって、やろう!」
指令を貰った男はこういって、その紙片を細かく破って捨てた。

三　傍聴者入場

集まっていた。朝六時前だというのに、もう地方から上京した被告の家族らしい女たち男たちの一団が、地方裁判所の廊下を埋めていた。
しかし、もっと多くの人間が方々にいた。私服だ。制服のアゴヒモだ。お、憲兵も来た。来た。来た! 五十人、一小隊だな。そういえば中折を額までかぶって、外套のポケットにいざといえば何か取り出しそうに手をつっこんでいるがっちりした肩つきの特高たちも五十人近くうろうろ眼を光らせて歩いている。制服は物々しくアゴヒモをかけて方々に立っている。いや入口という入口、二階から、三階、地下室まで、もうちゃんと張っている。
この警戒の中を、労働者らしい若者、菜っぱ服、学生らしい者、断髪の女、被告の家族らしい女、子を背負った婆さんなど、続々とやって来た。
「どこいくッ!」
とアゴヒモは、すべての人間に対してよびかけた。平常はどこへでも自由に通行できるこの建物の中がきょうはそうは出来なかった。第二号陪審法廷への通路以外はすっかりアゴヒモによって遮断されていた。その遮断網を憲兵が肩からピストルをぶらさげ大きなサーベルを引きずって、たえず廻っていた。まるで戒厳令でも布いたようだ。
七時になると、傍聴席に限りがあるというので、二百枚の入場券を発行するということがわかった。家族たちは先頭になって入場券を争った。しかし、二百枚といっても内四十枚はそっと警視庁の特高に先取りさせてしまっていたので実際は百六十枚しか渡らなかった。
入場券を手に入れた者は入口に密集した。屈強そうな巡査が十五六人で、入口に頑張り、手荒く入場者の身体検査をやって、中へ入れた。菜っ葉服の若い男は、鳥打帽をめくりとられて検べられ頭髪を拷問の時のように掴んでかきまわされた。そしてポケット、所持品、上衣、ズボンを厳重に捜索し、靴をぬがして中をのぞいた。それを傍から私服の四五人と、ピストルをぶら下げた憲兵、短剣の看守などがじろじろ眺めている。だれもかれも、一人一人この調子だった。女でも容赦しない。帯の間に手をつっこみ、胸をぐいぐい抑え、手提などはひったくって中身を掴み出した。
「靴をぬげ! 靴をッ!」アゴヒモが断髪の女にどなっていた。
「靴?――靴を預かるっていうの?」
「何ッ!」

まるで喧嘩だ。傍聴人に化けた特高が、そうとは知らぬ、アゴヒモにやはり手荒らな身体検査を受けて、入場していた。

あとからあとから、傍聴者は黒山のようにこの入口さしておしよせてきたが、八時をすぎた頃にはもう「第二陪審法廷」のドアはぴしゃりとしまり、看守とアゴヒモが二三十人でその前をふさいでいた。九時、十時、傍聴者はますますふえた。法廷入口へは近づけないので、弁護士控室の前と、正面玄関前に密集した。これを憲兵と巡査が遠巻きに包囲し、私服はジロジロと薄笑いを浮べて、群集の中をうろついていた。

四　パイを外へ出せ！

法廷の中では、開廷時間の九時が過ぎても、裁判のひらかれそうな気配はなかった。傍聴席にいっぱいになっている二百の人々は口々に叫び出した。

「裁判長は何をしているウ！」

ところが被告席もがらあきなのだ。まだ同志たちはだれもやって来ない。うしろの弁護士席には、布瀬を先頭にきょうの弁護士団が五六人きている。皆黒のビロードの法服を着てシャッポをかぶり、書類を調べたり、立ったり話したりしている。

十時になった。傍聴人たちは、特別傍聴席に居並んでいる検事たちの方をむいて、とほうもなく大きな欠伸をしたり、クサメをとばしたり、どなったりした。廷内のあちこちに立っている看守は、その度に眼を光らすが黙っている。

その内に、ドアがあいて、やせた背の低い男が一人、汚い身なりをして入って来て、被告席についた。傍聴席はその男に向って沸き立って拍手した。その同志は、被告席へついても、古びた中折帽をとらなかったので、看守が来てむしりとろうとした。同志は怒って、看守の手にとられかけた帽子をひったくり大事そうに又頭にのせて、そして、傍聴席の方へ向いて笑った。

「やれ！　やれ！」

「その調子で――」

傍聴席の最前列に太った四十余りの白熊のような女と、丸髷に結った五十あまりの頬骨のとび出た真っ黒な婆さんとが陣取っていたが、この二人が一緒になって手を叩いた。

続々と保釈中の同志が普段着のままで出廷した。その度に拍手がわきおこる。

弁護士団も全部揃った。突然弁護士の布瀬が立ち上って、正面壇上の書記席に向い、

「傍聴券の責任者について、詰問する。二百枚の傍聴券の内、四十枚をぬきとって警視庁特高課員へ配布したのはだれか？　かかるやり方は不当である。廷外には被告の家族

友人知己等当然本日の公判を傍聴しなければならぬ大衆が何百人も困っているのだ。きく必要もない連中には出て貰いたい。それまでは、開廷をさし控えて貰いたい。」

と、大声に暴露した。

「そうだッ！」

「パイをつかみ出せ！」

傍聴席は男の声で殺気立った。がたがたと皆立ち上って自分たちの周囲を見廻わした。それらしい男に向っては、皆一団となって、わめきたてた。傍聴席は怒号と叫声に満ちた。うまくまぎれこんでいた特高課員たちは、黙って不愉快そうにわきをむいたり、うつむいたりして、大勢の中でもまれ、押されてやがてうしろの方へ行った。廷内の殺気立っているのをききつけた廷外の方でも、わあッーというう気勢があがった。

裁判所は我を折って、入れ換える代りにもうあと四十人入れるということになったので、更に傍聴券が出され、家族近親たちがなだれこんで来た。法廷の中は十月の昼を夏のようにむかむかさせた。人がいっぱいだ。だれもかれも赤黒い怒りに満ちた顔、顔、顔、顔。だらけだ。

五　被　告　会　議

被告席には、保釈中の同志が丁度十人来ていた。正午をすぎ、一時近くなって、未決にいる二十二人の同志が手錠編笠姿で、それぞれ看守に曳かれて出廷した。さきのとがった編笠がみえると、法廷にいっぱいの傍聴者は総立ちになった。声が喊声となった。

「万―歳―！」

「四・一六同志！　万歳ッ！」

女たちの多くは泣いた。被告たちは、手錠のままの不自由な手で編笠を押し上げむしりとって、友人知己の方へ、ふって応えた。皆その顔が青白くやせていたが、笑った。笑ったのを見て、傍聴席の男まで、涙をうかべた。互に顔を見合せたのだ。

ずらりと席についた被告たちの中から一人の同志が立ち上って、演説を始めた。

「われわれはこれからここで被告会議をひらきたい。これは裁判長も承知している。われわれはすべて、日本共産党員として同一内容の事件について裁判をうけようとしているのである。そのために、われわれの間には一定の、同一の、連絡ある態度が必要である。被告会議はその為に開くのである。議長に同志山城安峰君を推したい！」

「異議なしッ！」

「異―議―な―しッ！」

「やれ！　やれえ！」

被告席よりも、傍聴席の方が叫び立てた。拍手が鳴りやまなかった。一段高い検事席、特別傍聴席では、検事や特

高課員がむずかしい顔をしてこの光景を眺めている。

同志山城は立ち上った。かれは、他の同志たちと、傍聴席とに向って、磐城炭坑の飯場頭らしい親分めいた落ちつきを見せて悠々と、高声に挨拶の演説をした。

「ではすぐに会議をひらく！　何をどうする？　まず同志諸君当面の総ての議題を提出してくれ給え！　傍聴席の同志諸君からもいいたいことがあったら発言してくれ！　禊様によっては拡大会議としてもいい。但し敵階級の人間はダメだぞ！」

傍聴席はどっと喜んだ。しかしさすがに会議には口を出さなかった。

「議長！」一人の保釈中の同志が被告席から立ち上った。「まずきょうの裁判に対するわれわれの立場からの意義を討議したい。それからすべての決議事項が生れてくるだろう。」

「よろしい！　では君の提案を採用する。すぐに君自身の意見をのべてくれ。」

と、議長はどなった。するとつづいて、その同志は語った。傍聴席の方へ視線をそそぎながら。

「まず結論をのべて理由を説明する。第一われわれは五地方合同公判ではなく、三・一五、四・一六等すべての治安維持法被告を東京に集めての全国的単一裁判を要求する！第二、階、級、裁、判、絶、対、反、対！　階級的被告の即時、釈、放、を要求する！　そのは理由――」

然し、理由をのべる必要はなかった。傍聴席が沸騰して口々に鋭い叫びがわき上った。

「治安維持法を即時廃止しろ！」

「結社は自由だぞ！」

「資本家地主の政府を倒せ！」

そして遂に叫び声は、最後の言葉に点火された。

「日本共産党万歳！」

「万……歳！」

看守は五人も七人も束になって傍聴席へおどりかかった。しかしただそれだけの事であった。傍聴者は五人ずつ固く組んでいた。看守ははね返された。看守がとびついてくると女達は、(前列は皆女だった)やぁあーッ、と金切り声をあげて廷内を騒がせた。騒ぎを静める為には、看守たちは、遠のかねばならなかった。

「議長！」横浜の保釈組の一人の同志が立ち上った。「緊急動議があります。われわれの同志中本、伊東の二君が富士紡事件で横浜警察署に拘留中であるため、きょうここへ来ていない。来ようにも来られないのだ。横浜官憲が二人を解放しない以上、我々は結束して、裁判を拒否することにしたい。」

「異議なーしッ！」

多くの、同じ言葉が殆ど一斉に、被告席のすべての同志の口をついて出た。そこへ、壇上の扉があいて、いかめしい恰好をした裁判長が、陪席判事などを先立てて出て来

た。——そして着席した。かれは法廷を見渡して、「静粛にしなければ困る！」と大きな声を立てた。壇の下の弁護士席の布瀬やその他の二三人が、それをみて額を鳩めた。すぐ布瀬が立ち上った。

「裁判長！　ここに居る被告達はまだめいめい錠さえもはずされていないではないか。本件の被告は強盗や人殺しではない。まして法廷においては直ちに戒具がのぞかれ、その上で公判がひらかれなければならないのに、手錠も外されていない以前に裁判長が出て来るとはいけないではないか。」

裁判長は、壇の上の方で表情のない顔をしてきき流している。布瀬は更にいいつづけた。

「それに、裁判長は、同一審理を受ける五地方の被告同志の間には、始めて顔を合せる者が多いので絶対に打合せの必要があるため、各被告に相当その時間を与えると既に言明している。その打合せの被告会議が終らないのに着席開廷しようとするのは明かに、被告利益を蹂躙するものである。——裁判長は今少しく退廷していて貰いたい。」

裁判長は困ったような顔をしたが、威厳を見せるようにうなずくと、

「弁護士において責任をもち、法廷内の静粛を保証するならばそうしてもいい。」

それに対して布瀬は答えた。結局裁判長は退廷した。傍聴席は拍手喝采した。時別傍聴席の、高官連はそっぽをむいたり、わざと顔を向け合って何事か話したりして、その方をみないようにした。

壇下の、被告席では、三十二人の同志が円くなってかたまった。主として保釈中の同志たちが発言した。それは、かれらは外にいるため、それぞれ救援会がレンラクをつけ法廷闘争に関する方針をさずけられていたので、その方針を被告会議に持ちこむためであった。

「議長！……われわれの今ここに連坐している日本共産党事件は、いかなる事件であるか？　この事件は、日本資本主義が国際資本主義に歩調を合せて、いわゆる第三期に入り、そこに不可避的な、国際的、国内的、恐慌をまきおこし、遮二無二これを切りぬけ、第二次帝国主義戦争を準備せんとして、そのため一切の負担を、日本の労農階級に、押しつけようとする瀬戸際に立ち到り——これに反抗し闘争するわれわれプロレタリアートに対する弾圧の焦点として——理解されるものである。……従って、この法廷に於けるわれわれの闘争は階級対階級の闘争の、その一部分である。同志諸君！　この場所も亦階級闘争の一戦場である！」

保釈中の横浜の同志の演説に、被告席も傍聴席も急皺のような拍手を送った。かれはつづいてしゃべった。

「……で、もはやわれわれのスローガンは明かである。さっき、一同志によって提出された三・一五、四・一六等すべての被告及び下獄者の即時釈放——一切の階級組織及び

活動の自由――これだ！　われわれはこれを要求する！」
「そうだ！」
「異議なし！」
「そして、われわれの要求は、ブルジョア的法律の下にそれが可能であるかどうか？　許されるものかどうかということを条件とするものではない。又現在のわれわれの力によって戦い取れる限りの要求を戦おうとするものではあってならない。ブルジョアジーがどうあろうと、われわれは労働者農民の全階級的要求を以て正面から戦うのである。階級闘争の正しい一切の方向と一致したる要求をとりあげなければ意義はないのだ。――いいか同志諸君、当局がわれわれの要求を容れず、われわれの拘禁をとかず、不公開分離裁判をやろうとする瞬間は、目の前に押し迫っているんだ！　その時、われわれはいかにするか？　われわれは、その場合には、一切の審理を拒絶するのだ！　拒絶しても裁判はつづけられるだろう。然し、われわれはそれに服従しないのだ。服従しなくても、われわれはやがて長い、暗い牢獄の中へ押しこめられるだろう。然し、われわれは服従しないのだ！　これがわれわれの態度だ！　何故なればプロレタリアートは最後までブルジョアジーと戦う者であるからだ！」
かれはかく言葉を切った。傍聴席は叫びと拍手を以てかれに酬いた。まるで法廷は演説会場だった。

六　自己紹介

もう午後二時であった。法廷は被告と傍聴人とに占領されていた。四十人あまりの特高課員は傍聴席のうしろの方でかたまって小さくなっている。「法廷」の中は「神聖」なので、警察権からは独立しているのだ。で、いくら騒いでもどうすることも出来ない。被告と傍聴者とは「法廷の神聖」を極度に利用したのだ。
そこへ、再び裁判長があらわれた。正面中央に着席すると、場内は一斉に亦殺気立った。
「維持法絶対反対！」
「ひっこめ！」
「進歩的にやってくれ！」
議長の山城が立ち上った。
「裁判長！」とよびかけて、かれはつづけた。
「今、被告会議において、横浜の同志中本、伊東の不当拘束が解かれてここに出廷するまでわれわれは裁判の延期を要求することに決定した！　裁判を延期されたい！」
すると、裁判長は答えた。
「氏名点呼だけをすることにする。」
それをきいた弁護士席の布瀬が立った。
「裁判長！　氏名点呼は審理の開始であるから、その以前に、被告の要求をききとどけられた上、中本、伊東の両人

をここへ呼ぶか、裁判を延期するかきめて貰いたい！」
「そうだ！　立つな！　立つな！　立っちゃいかんぞ！」
黒い顔の丸髷のおばあさんが金切り声を張り上げた。看守がとんできて、おばあさんを制した。一としきり動揺した。
「審理はまだ開始しないことにして氏名だけを取調べる」
裁判長は布瀬に答えてから、手前の書類をみながら被告の氏名をよんだ。然し、誰も答えなかった。答えないというに対して傍聴席が喝采した。被告会議の議長が立ち上って、
「諸君、裁判長はわれわれの名前を呼んでいる。この際われわれは、裁判長及び廷内大衆諸君に向って自己紹介をやろうではないか？」
そしてこの提議が異議なしの声に酬らいれると、
「ではおれから——コンミンテルン日本支部日本共産党員山城安峰！」
とかれは叫んだ。つづいて外の被告が続々立った。同じようなよび方で自分の名をよび上げた。中で唯一人、一審で無罪になっている非党員の同志は「日本共産党支持者」と名のった。
これで「氏名点呼」がすんだ。すると裁判長は前言をひるがえし「二人の被告は分離して行うから」と宣言して、取調べに入ろうとした。傍聴席も、被告も、弁護士も一団となって反対した。仕方なく、裁判長は休憩を宣して、追われるように引き上げた。

七　裁判は不可能である

三時に、法廷は再開された。一旦地下室へ収容されていた被告たちは、看守たちに送られて又ぞろぞろとはいって来た。拍手が迎えた。
傍聴席はもうこの時、休憩前と様子が変っていた。女たちは黒い顔の丸髷のおばあさん（それは同志山城の母であった）を中心に密集し、男たちは、又一団となってかたまった。この男たちの中心に、きのう市川の埋骨式でみかけたあの二人の若い労働者もちゃんとまじっていた。では、この傍聴者は？——みんな、救援会の行動隊だったのだ。地区委員会が組織した五人ずつの一隊がここには少くとも三十何組いるわけだ。みると、最前列に、全隊指揮の責任者らしい男がいた。いやまちがった。それは男ではなかった。二十三ぐらいの、色の浅黒い丸顔の女であった。その女は黒い洋服を着て、紺色の帽子をぴったりとかぶっていた。かの女はゆうべキャップ会議に現われたモップルの上の方の委員だった。そして、たしかにきょうの全行動隊のキャプテンをつとめていた。で、スローガンと、万歳とは、あらゆる機会にかの女の音頭によって叫ばれ、全隊の怒号となった。休憩の間に、編隊の入れかえをやったのもかの女だった。

傍聴席のうしろの方にかたまっている本庁特高課員たちは眼と眼で合図して、かの女を注視していた。
被告席では、裁判長や検事を無視して、又もや被告会議が開かれた。同志たちは、さっきの会議で決議されたスローガンをてんでに叫んだ。一人の同志はつと立って、
「きのう十月七日は、二年前、日本のプロレタリアートが有する最もすぐれた革命の指導者、われらの先輩渡辺政之輔君がキールンで白色テロルに斃れた日だ！　きょうはその翌日だぞ！　われらは、かれ渡政の死を想起することによって河見、麻生等の獄内解党派と断然戦う決意を固めたい！」
「然り！」議長は、被告たちを見渡して、
「今の、同志恒藤の意見に対して採決する！」
「そんな必要はない！」
「異議なし！」
「われわれは決意を固めていることを誓うぞ！」
「そうだ！」
最後の声は傍聴席の女の声であった。またしても拍手が起り、万歳が渦をまいた。
検事席にいた検事は、額に青白いすじを立てて立ちあがると、裁判長に向った。
「裁判長、この状態は治安に害があると思うから公開を禁止されたい！」
被告席からも傍聴席からも叫びがあった。怒号、罵言、叫喚だ。
「まだ審理に入らずして公開を禁止するというのは、憲法に違反するやり方である。そんなことは出来ない！」
布瀬は、赤くなって、検事にくってかかった。裁判長はいった。
「こう騒いでは審理に入ることが出来なくなるではないか？」
「それは、裁判長が被告の言を蹂躙しているからである。被告達一同は出廷なき二人を入れて正しき裁判をしてくれと要求しているのだ！」
布瀬が立って裁判長を詰った。裁判長は布瀬の方へ怒って、言った。
「あの二人を出廷させることは、裁判所の権限外だ！　裁判所は行政警察に容喙出来ない！」
「同じ穴の狸じゃないか！」
野次がとんだ。議長山城が立って裁判長の方をにらみながら、
「われわれ三十二名の要求は、単なる三十二名の要求ではない。全獄中の同志、全国労農階級の一斉の叫びなのだ。われわれはその要求を代表して叫んでいるのだ。中本、伊東を出せ！　獄中同志の、全国単一合同裁判を開け！　われらの獄中同志を即時解放せよ！　暗黒的分離裁判絶対反対だ。これらの要求を戦いとるためにはわれらは法廷で斃れてもいい。きかなければ審理を拒否して退廷するばかり

だ！」
夕暮が迫ってあたりが薄暗くなって来た。同志は咆哮した。それに和して傍聴席の叫びも、深刻になった。だれもかれも声をからして叫び、日本共産党万歳を連呼し、キャプテンの音頭取りで、革命歌の合唱が始まった。
裁判は完全に蹂躙された。

八　波

おさまりのつきそうもない廷内の光景を見渡していた裁判長は、つと立ちあがった。そして、袖をひるがえして退廷した。又休息だ！
検事もつづいて退廷した。しばらく裁判席はからっぽだった。まもなく出て来た裁判長は、おもむろに着席すると、眉間に立皺をあらわして、陰鬱に咳払いをした。そして、一段と大きな声を張り上げて宣告した。
「本件公開は安寧秩序を乱す虞れあるものと認め、審理の公開を禁止する！　本日はこれにて閉廷する」
満廷が、不意をくらって、まだ動揺にも陥らない素早い瞬間に、裁判長はさっさと引きあげてしまった。
傍聴席は総立ちになった。そして喊声をあげた。
法廷の入口が大きくさっと外から開いた。裁判長が退廷した時すぐに手筈をきめたらしい警官隊が凡そ百人あまり署長を先頭におし立てて雪崩れこんできた。
その時、傍聴席のうしろにかたまっていた特高隊が、バラバラと、かねて目ざしていた傍聴者中の中堅分子と覚しい人物にとびかかった。
傍聴席の前方からは、別の方の入口から裁判所看守一隊が突入してきた。
傍聴席は――三方から挾撃された。警官達は特高のとびついている人間を、引っこぬいて検束しようとした。叫んで反抗するものは、無茶苦茶にひき倒された。歌をうたっていたものは頬をなぐられた。スローガンを叫んだものは、よってたかって、蹴転がされた。椅子がとび、物のこわれる音がした。「閉廷」さえすれば、もうここは「法廷」では、ないのだ。
警官隊はそれを待っていた。今や、かれらの復讐が始まったのだ！　乱闘と叫喚の中で、あらゆる合言葉（スローガン）が叫びかわされた。ある検束者は、分捕品のようにかついで行かれた。山城の母は三人のサーベルの男たちに引きずられて行った。黒い洋服のキャプテンは五六人で舁いで行かれた。あの二人の労働者も打たれながら引きずられていた。
そうした混乱の中で被告附添の看守たちはそれぞれの被告たちに、手錠をはめこみ、被告たちがてんでに亢奮して
「ハンガー・ストライキだ！」
「モップル万歳！」
と口々に叫ぶのを、なだめすかしたりしつつ、向うの地下室への扉の方へ曳いて行った。被告たちは、ふり返り、

頑張り動くまいとした。
この時まで、弁護士控所や、正面玄関前に根気よく待っていた行動隊員が何組となくはいってきた。数にして百人位だ。それが、廊下を追われて出てくる人々と次第に合流した。
「デモにうつれ！」
しかし、もうとっくに裁判所構内のすべての門は、警官と憲兵によってふさがれてしまっていた。そして、唯一カ所だけしか町へ出る門はあいていなかった。その門の出口のところに、百人以上のアゴヒモが烏のようにたかっていた。
デモの編隊は、ここへぶっつかった。ぶっつかる外はなかった。喊声をあげて――土烟りと、怒号の中で、人々は、とびかかる黒烏の羽ばたきの下に、ねじ倒され、つきやられた。女は金切声をあげて叫んだ。
すべての行動隊は、バラバラにされてしまった。一人、一人、にくにくしげに、もう灯のついた夕闇の往来へ、門からつきやられた。そして執拗にも、往来の辻々にも尚、何間おきかに、アゴヒモが散り行く人々を見張っていた。アゴヒモ側の行動と組織は、みごとなものであった。日本赤色救援会の力ではどうすることも出来なかった。
かくして十月八日は終った。
十月八日の波！　それは全く波であった。最後の一線へ向って、打ちよせ、高められて行く波、それは今あらゆる場所におこり、又おこされようとしている。
裁判所を襲った波はその一つの波だった！　たしかに波はしぶきを上げた。打ちよせ、叫び立てた。
その日の夕刊及び翌日の朝刊の、あらゆるブルジョア新聞には、「控訴院始めての大混乱裡に」四・一六の最初の五地方公判が「失敗に終った」ことが大々的に報道されていた。そして、傍聴人中の女たちの「狂態」が物珍らしく書き立てられた。
けれどもその三日後に発行された地下的出版物「プロレタリア新聞」には、その日には単に裁判所だけでなく東京中の各所の工場に、五分間ストライキがおこり獄中の多くの同志が各々その独房においてハンストを以て三十二名同志の公判闘争に参加し声援したことが書かれてあった。そしてデモの翌日、五地方統一裁判が再び分離裁判に切りはなされたことが報ぜられていた。そこには次のような文句が書かれていた。
すべての闘争を、来る十一月七日の、ロシヤ革命記念日の闘争へ全国的街頭デモに集中せよ！　十月八日の波を、十一月七日へ！

（一九三〇年十月「戦旗」）

嵐に抗して

木村良夫

　工場から帰って見ると置き手紙があった。筆跡は同居人の吉村である。『僕の帰る迄待って居てくれたまえ』と、吉村は私が今夜九時迄に工場分会に集会が在るので、出席しなければならない事は知って居る筈だった。それなのに、私が工場から帰るのを待たずに、置手紙をして行ったのには、分会に対する特別の問題があるのか、又は分会の集会よりもっと重大な仕事が出来たのか、何れかだった。七時が過ぎ八時が過ぎても吉村は帰らなかった。分会では私の行くのを待って居るだろうと思うが、吉村はそれを承知の上で置手紙をして行った以上、待つより外なかった。然し十時が過ぎ十一時になっても吉村は帰らなかった。私は或る予感の様な物を感じた。分会とは別個な重大な用で、危険な所へ行き、検束されたのでは無いかと、十二時迄待ったが、吉村は遂に帰らなかった。今夜はもう帰る見込は無いと思ったが、それでももし帰るやらわからないと思って、私は吉村の床もとり一人横になった、だが吉村の事が心配になって眠れなかった。私達は普通の場合は外泊を絶対に禁じ合って居た。どうしても途中が危険な時とか、或は余り遅くなった場合は止むを得ないが、なるべくそう云う事のない様に総べての仕事をはきはきやってのける様に、互に話合って居た。でなければ、捕われない為めの安全地帯である、秘密なアドレスは、何の役にも立たないわけだ。吉村は私と同居してからは、外泊した事はなかった。

　翌日私は六時に目を醒したが吉村はやはり帰って居なかった。私は遠まわりして、彼の欠勤とどけを出し、自分の工場へ行った。工場から帰ると私は直ぐ階下の主人に吉村が帰ったかどうかを尋ねたが、帰っては居なかった。いよいよ吉村の検束された事は、事実と思うより外なかった。いよそれにしても何処で検束されたか、それを確めねばならない。検束た場所に依っては留置の日数も見当は付くし、又場所が場所なら、私も吉村と同居して居る以上、吉村と同じ運動をして居ると目を付けられる事は当然であるから、早く転居しなければならなかった。若し、私が捕まるようなことがあれば、たとえ吉村がどう自白して居るとしても同居して居た事及び其の他の事を否定せねばならなかった。

　吉村も私も、良く武村の所へ遊びに行った。武村は現在は四・一六の犠牲者として市ガ谷に居る。武村が捕われてからも私達は遊びに行った。妻君はミシンで自活をして居

り、外に多少は意識のある婦人が二人居た。武村はインテリ出ではあるが、しっかりした男だった。が、妻君はどちらかと言えばのんきな方だった。だからと云うわけでもあるまいが、武村の家は合法性が充分あった。スパイは武村の家を問題にして居なかった。私達は自分のアドレスを秘密にしておく関係上、外に合法的なレンラク場所が必要だった。私達は半非合法程度のレンラクは武村の家を使って居た。私は昨夜も吉村は、武村の家へ行ったかも知らぬから何時頃行ったかそれによって、彼の行く先を調べ様と思って、武村の家に向かった。私が武村の家の前迄行くと、入口の戸が開いて居り、妻君が一人ぼんやりと入口に腰掛けて居た。中には誰も居ないらしく静かだった。妻君が私の顔を見ると手で帰れ帰れと合図した。私達は此の家ではいつでも冗談ばかり云って居た。真面目な話を意識的にさけた。だから妻君達は私達の顔を見ると時々軽いいたずらをした。又私達もそれに引かかる事も度々あった。私は又始めたなあ、と思いながら笑顔をして妻君の方へ近づこうとした。すると妻君は裸足のまま飛び出して来て私をつかまえ、物も云わず真剣に押返した。私は此れはあぶないなと思って直ぐ引返し、小路に入り小路から小路を通って姿をくらました。私は吉村が此処で検束されたのかも知れないと思った。此処でないとしても、自分達がレンラク場所にしておく以上は、誰が検束されたか、又誰を検束仕様と云うのか、それを調べねばならなかった。私は武村の家と一番レンラクの多くある高田の家に足を向けた。高田は家に居る事は少なかった。工場から自分の家へは帰らず、直ぐ用のある方へまわって終うので、夜半か又は朝早くでなければ居る事は少なかった。でも折良く高田は居た。高田は私の顔を見ると直ぐ、

『吉村がやられたのを知ってるか？』と尋ねた。私は、

『今調べに来たのだよ』と云った。

『まあいいや、上がれ』と元気良く先に階段をあがって行った。高田の話によると、一昨日未明に武村の家は総検束された。それもA署とK署が共同であった。検束された人達はA署に持って行かれ、共同で取調べられた。吉村と私を捕まえ様と云うのだ。だけど武村の家で私達のアドレスを知って居る者はないのだ。尤も外にも知って居る人はないのだが、それで妻君達はカミの毛を持って引ずり廻され、皆の居る前で裸にされ水をひっかけられた。だが知って居っても自白はしないのに、知らなければなおさらだ。スパイ共は、仕方なく私達が武村の家に行った所を捕まえ様と、妻君だけ帰し囮として自分達は裏にハッて居たのだ。後の話だが其れと知らぬ塚本が、ノコノコ行って捕まり、お前は吉村だろうと、可成やられた。今でも、塚本に会うと、笑談にウラミ事を云われる。其の翌日つまり昨日だ、吉村は余り注意もせずに行き捕まったのだ。捕まる時にはずい分暴れまわったが、スパイは五人も居り、私達を大物と思ったのか皆武器を持って居やがったので遂に捕まりA

署でなくK署に持って行かれたのだ。武村の家はA署の管内だが、K署から来たとすれば、私達にも運動上からも相当に問題だ。私は今後非合法の人にならなければならないかも知れぬと思った。絶対非合法の人になると時に顔の知れて居る人は危険ばかり多くて運動はしにくかった。何しろスパイの追及は激げしくなるので、交通費はかかるしヘタな工場へは行って居られないので失業が多くなるから、ら其れが最後なのだから、どうしても命がけで逃げねばならない。逃げる時には金は少なくとも五円や十円は持って居ないと、思う様に乗物を利用出来なかった。

A署は本所だがK署は東京の西の府下にあるのだ。其のK署には四・一六後引続き幹部が捕まり、戦線は四分五裂になって居る中を、一人活動して居て遂に捕まった中幹部の森君が留置されて居たのだ。此の森君と私達とのレンラクが一カ月前に切れて終ったのだ。無論私達も彼は捕まったとは思って居たが、其の当時は四・一六直後だったので、我々の周囲からも多くの同志はうばわれて行って居た。私達は其の同志の後を引続き活動すべく、森君から引次いで居る時に捕まって終ったのだ。其後私達は上とのレンラクはタチ切られ、工場の細胞ははっきりと知れず、活動したくもどうすれば良いのか見当も付かず困って居た。其の後上とのレンラクは兎に角付いたが、書記局がやられて居たので、工場細胞はやはりわからなかった。其の時森君からレポが来たのだ。十日ばかり前だった、私が武村の家に行くと妻君が、

『森さんからレポが来たよ』と云った。私は喜んだ。妻君及び婦人達の話に依ると、レポに来た男は、四十歳前後で身体のガッシリした眼光のするどい、一クセのあり相な面構の男だった。

『森君からたのまれて来たのだが、吉村と云う人は居りませんか？　木村と云う人でも良いですが』と云うので妻君は、

『居りませんけれど、時々は来ますから用件を書いて行って貰えば間違いなく渡します』と云うと、

『いや、そんな事は出来ない。秘密な事だから……是非会って話さなければならない』と云って居るので妻君は、

『それでもし来たら、そう云っておきます』と云うと、

『では又、九時頃来るから』と云って帰って行った。私はどんなことをしても是非此の男に会わなければならないと思って、おそくも九時迄には必ず来るから、来たら待たせて置いてくれと、妻君達にたのんで、私は武村の家を出た。出る時には、同志に会う約束の時間が定って居るので、いそぎは仕なかったが、帰りにはガマロのソコを叩いて青バスに乗った。私が武村の家に着いた時は九時に二十分もあったが、其の男は帰った後だった。私は妻君達に不平を云った。

『あれ程たのんで置いたのに、どうして帰して終ったの

だ』と――

『そんな事云ったって、用事があるから待たれ無いと、云うのだから仕様がない、でも明日十時頃来ると云って行った』と、私は残念だったが、又何処となく不思議な点がある様な気がした。

其の夜私は吉村と話し合った。其の男と逢うか？ それとも逢わないか？ 逢うとすれば工場を休むか？ それとも工場を知らせて、工場で逢うか？ 結局は、工場は重要だからスパイでないとしても知らせる事は良く無い。休んで武村の家で逢う事にした。翌日私達はスパイである場合を思い、武装し××迄持って行った。十時半頃其の男は来た。成程ブタ箱に居たせいか、ヒゲは長くのびて居り、一クセありそうな奴だった。私は其の男を二階の一間に入れ、私は階下に降りて武村と話し合った。スパイとしても彼奴一人なら平気だが外に来ては居ないかと、思って外に出て、附近を注意して見たが、それらしい者は居なかった。それでも時間を見計って来るやらわからないと云うので、妻君や婦人達にピケをたのみ、初めは私一人逢った。其の男は注意深く立聞きされ無い様に、戸を皆開き、階段で一寸音がしても話を止めてのぞいて見た。私は此家は親しい内だから立聞き等する者は居ないからと云ったが、其の男はやはり注意深かった。其の男の話に依ると森君は間借りをして居たのだが、其の家の者に密告されたに違いない。朝三時頃、ようやく眠りに就いて間もなく、ワッとすごい音がしたので、飛び起き様とした時すでにスパイ四人に押え付けられ、一人はまくらの下に手を入れてピストルをうばって終ったので、ムザムザと捕まったそうだ。私は何日に捕られたのかと聞くと、

『君達が浅草の電気館の前で逢っただろう、其の次に新宿の駅で逢っただろう、其の翌日である』と、云った。私は逢っただろうと云う時には、後でそれを否定するのに都合の良い様に、あいまいな返事をしておいた。然し新宿では私達は逢って居なかった。正直な話をすれば新宿で逢う約束した日は第三日曜である。森君の都合で朝早くと約束したが、当時訓練の足らない私達は、前日からの疲れで朝ネボをして終ったのだ。目をさました時は、約束の時間より二十分もおそかった。其の男は、森君については、拷問に合った事、彼が度胸の良い事、位しか知らない。私はうたぐって居るせいかわざと注意深いような風をしているのではないかと思った。運動の事に就いては、まる切り無関心であるらしい。それでレポと云うのは、森君を助け出してくれと云うのだ、K署は今バラックだから、留置場も板一枚である。ノコギリとツナがあれば直ぐ×××が出来る。看守に感付かれると失敗するから、板ベイを叩いて中に合図をする。又中で叩けば仕事に掛っても良いと打合せてある。仕事の方は、君達は馴れないだろうから、自分達が引受ける。子分達を集めてすれば朝めし前の事であるから、君達はピケをたのむと云うのだ。書きわすれたが、此

の男はゴロッキでケンカで検束たのだそうだ。失敗してもスゴイ子分ばかりつれて行くし又ピストルでもドスでも何でも在るから、捕まる様な事は無い。君達はピケだから失敗しても大丈夫だ。それを実行するには少くも二十円は必要だし又実行後、森君と一時東京を去るから皆で四五十円は用意してくれ、それも駄目なら自分の方で都合する。と、話はとても良過ぎるのだ。私は此の男を全部信用する事はどうしても出来ないが、然し此の男の云う事が事実であってくれれば良いと思った。幹部はほとんど捕まり、戦線はみだれるだけみだれて居る今日、たとえ私達二人が犠牲になったとしても、森君を助け出す事は、階級的義務である様に思った。其の男は森君が書いたのだと云って、チリ紙を出した。チリ紙には私達二人の姓名と外にもう二人の姓名が書いてあった。此の二人は私達の間にスパイだと、うわさされた事のある人達だった。うわさは兎に角として、一人は人間的にしっかりして居ないからだろうが、他の一人はもう七八年も前から運動をして居りながら、何事もハキハキせず、金等は何時でもまとめて持って居た。だが人の前では決して出さなかった。それればかりでは無く金等は持って居ないと云う様に、時々電車賃を貸せとか、めし代を貸せとか云う奴の姓名である。私達は無論、奴をうたぐって居た。私達の組合でも、以前は調査部長をさせた事もあったが、当時は平組合員にされて居た。其の後組合費の使い込を名目に除名された。私は此の二人の名は何の為めに書かれたか不審に思ったので尋ねて見た。君達に逢えない場合は、此の人達に相談して実行してくれと、云われたと。話はチトおかしいと思ったが、チリ紙の筆跡は森君のかどうか私だけではわからなかった。後で吉村と調べ様と思ってチリ紙は受取っておいた。ゴロッキは留置場破りは少しも早い方が良いと云った。私も無論早い方が良いけれども、急いで失敗する様ではいけないから、充分戦術を考えてから後でもう一度逢って相談仕様と、私の方から場所と時間を指定したが、其の時には行かれないから僕の内へ来てくれと、木賃宿らしい名を書いて私に渡した。其の男は帰ってから三十分位して又引返して来た。夜は何時でも居るが、早い方が良いから、明晩八時迄に来てくれと、そして来られるか来られないか念をおして行った。

私と吉村は自分の家に帰り、色々と話し合った。最後は其のゴロッキを充分信じる事は出来ない、もしゴロッキがスパイでないなら、あれ程一心に云うのだから、僕達が居なくとも留置場破りは実行する、と云う事に話が落ち付いた。私達がゴロッキの家に行かなければ、又武村の所へ来るかも知れぬと云うので、武村の妻君の所へは、僕達は検束された、と云う様にたのんでおいた。其の翌々日ゴロッキは予想通り武村の所へ来て、どうして来ると云って来ないのかと、呶鳴るので妻君は僕達の云った通り、二人は検束された、と云うと、其んな筈は無い、意気地無しめ、義理知らずと、ののしって行ったのである。其の後何事もな

かったが、予想通りスパイであると云う事は、武村の家の総検束及び吉村の捕縛となって現われて来た。スパイ政策で失敗した彼奴等は周章てて武村の家をおそったのだ。
私は吉村がK署へ検束れたのだから早く書類を片付け自分も直ぐ逃げ様と思って家に帰った、二階の自分の部屋に這入って見ると、フトンや着物や書類が室一杯に散って居た。捜索されたなあ、と思ったが何人で来たかを知る為めに、階下の親父に対って見た。親父達は家中の者が集まって、捜索された事に付いて相談して居る所だった。
私は『僕の部屋に誰か這入らなかったですか?』と、云うと、しばらく思案して居たが『本庁の者だと云って、九人も来て畳をはぐやら天井板迄はがして調べて行った』と云った。私は泥棒と間違えられては、有難くないと思って、
『私達は運動して居るので、度々こんな事をされるのですが何でもありませんよ』と気軽に云った。
『運動ってあの共産主義と云うのですか?』
『ええそうです』と言って私は笑った。
『又スパイ共が来るかも知れませんから、僕は二三日帰りませんから、たのみます』と云って二階に行き私は手早く工場へ通うに必要な、通勤簿やナッパ服弁当箱等をまとめて外に出た。然し吉村は何と意気地無しなのだろう。私は吉村と検束された場合は、少くとも三日位は自分のアドレスを自白してはいけないし、又三日位は平気で、何とでも云って居られる筈だ。どうせ自白はさせられるのだが、三日位がんばらなければ、後に残った者が、書類さえ片付ける間が無い。だから是非がんばる様に話し合って居たのだ。それを満一日過ぎない内に自白して居るのだ。私はこんな様子ではもう何を自白して居るかわかったものでは無い。又ナッパ服の内ぽけっとに入れておいた通勤簿はそのままであるが、天井裏迄調べて行ったのに此れを知らずに行く筈は無い。工場で私を捕まえ様と思って、見て見ぬふりして行ったに違い無いと思った。後で知ったのであるが、アドレスは間代の受取を持って居たので早く知れたのだ。
私は歩きながら、何処の家に行って寝ようかと思った。私の知って居る家は皆署に知られて居た。署に知れて居ない家を借りて居る同志は同じ同志である私達にも知らせては置かなかった。私は止むを得ない、一時的に何処でも良いと思い、小山君の所へ行った。小山君は親切に色々と注意し、スパイが来ても直ぐには家に入れないから、スパイと争って居る内に窓から逃げ出す様に、窓を逃げ出すと、屋根を伝って向う側の小路に出る事、小路は屋根がひくいから平気で飛び降りられる事等を細かく云ってくれた。其の夜、私は今後の方針等を考えて、トロトロと眠ったのは三時頃だった。翌日は工場を休む事にした。十日間の欠勤とどけも手紙を出しておいた。日中は家に居た方が良いと云われたので、永い間のつかれで昼寝をした。私は夜になるのを待つて小山の家を出た。私は吉村の受持って居た工

場も一時的に引受けねばならなかったので、仕事は多忙になった。其の夜私は第一に、吉村の捕まった事、捜索された事、吉村の引継等々に付いて打合せる為めに、上との連絡である大田に逢った。大田と今後の方針に付いて充分打合せた後雑談に入り、大田は、まだまだ検挙の手はどんどんのびて居る事、工場地帯と云わず、山の手と云わず、全市に渡ってシラミつぶしに調べて居る事を話し君も小山の家等に居ては危険だから、早く安全なアドレスを見付けねばいけないと云われた。

　小山の家に来てから三日目だった。私は○○工場の永井と白木屋の前で逢う約束があったので電車に乗った。電車は空席が多かったけれど、腰掛けるとスパイの乗込んだ時知らずにいる事があるので、腰掛けずに中央にがんばって外を見ていた。三ッ目の停留場へ来た時、本庁の中島の奴が安全地帯に立っているのを私は早くも見付けた、此奴はあぶない！　私はもう逃げる用意をした。中島は私がいるとは知らず、前から乗込み入口に立って中を見まわした。私は中島が前から乗込むと知ると同時に、後の出入口に来て、電車の動き出すのを待って、飛び降りを準備をしていた。中島は私のいるのを感付き、電車を降りて捕まえ様か、電車の中を追かけ様かとまごまごしている内に電車は走り出した。私は走り出すと同時に飛び降りて逃げ出した。振り返って見ると中島は電車を止めて降りる所だった。私は

『馬鹿野郎、手前達に捕まってばかりいられるか！』と思った。其の翌日だった。小山は

『君、僕の家等にいて、大丈夫なのか？』と云った。明らかに何処かへ行けと云う言葉だ。私は何と返事をして良いかわからないので、ただ笑っていた、後で知った事だが、中島の奴私を電車の中で見付けて追かけた後、嗅ぎ付けたと云う程でも無いが、小山の所にいるのでは無いか？　位に思い、小山の所へ来て、

『木村がいるだろう、いる筈だ。調べて来たのだから、かくしても駄目だ。普通の人なら同志である以上かくまうも良いが奴は党員だから君も引掛るぞ』と、おどかして行ったので、おそれて私を追出そうとしたのだ。

　小山は今から十年も前鉄道に出て居り其の当時から運動をして居たと云うのだから、ずい分古い方だ。かかあも其の当時貰ったのだろうが、初めて逢った人は必ず、

『小山の妻君は別嬪だなあ』と云う。別嬪かどうか、それは兎に角、私は小山の妻君の地顔を見た事が無い。何時でも厚化粧をして居た。小山は当時、今でもそうだが、自分の家でヒキ物をして居た。ヒキ物とは普通の鉄の棒を何の金棒でも同じだが、ニジリッ釘の様な物に簡単な機械でキザムのだ。小山は時計の何処かへ使うニジリッ釘を専門にやって居て、工場の生活等は少しも知らなかった。此の小山は子供は無かったので、かかあの弟を貰って、自分のあとつぎにしておいた。此の後ツギの頭が非常に良いのと、

子供である為めに、小山の所へゆく多くの同志に可愛がられ、てってい的にプロレタリア意識を叩き込まれてゆき、未来の戦闘的な闘士になるだろうと思われた。名は二郎と云った。二郎は昨年小学校を終えたので、小山は中学校へ出すと云った。私達は反対だった。中学へ出すも悪くは無いが、第一に大工場へ入れ、プロレタリア的に叩き上げるべきだと云ったが遂に中学校へ入学させて終った。これでもわかるように小山はプロレタリアを信じなかった。そしてプロレタリアの味方ヅラをして運動して居た民主主義者である。民主主義者はプロの味方ヅラをして居ても最後のドタン場で裏切る。小山は其の後大山の合法党へ喜んで走った奴だ。

私は小山にそんな事も云われたが、まだ新たに間借の目鼻も付いて居なかった。新たに間借するには少くとも十円は必要だったが、私は交通費を少しばかり持って居たばかりだし、又金の都合の出来そうな同志は私の周囲にはいなかった。私はなお三日小山の家に居り、其の間顔の知っている友人を片ぱしからたのんで見た末、当時町工場に勤めて居り、意識はハッキリしていないが、スパイには顔の知られて無い同情者の西沢が心持良く引受けてくれた。夜になってから私は西沢と二人で西沢の友人を尋ね歩き、友人の洋服や着物を質に入れさせてやっと八円都合が出来た。私は一人で間借をしていては、とても経済的にやってゆかれる見込が無いので、西沢も同居する事を勧めた。西沢は意識ははっきりしていないが、大工場の経験もあるし、人間的にはしっかりしているし、又運動もしたがっているので、私は運動に引入れて見ようと思ったのだ。西沢も喜んで私に賛成した。貸間は沢山あったが、私達は直ぐ帰り道をハリ紙を見当に貸間を尋ねた。私は署に顔を知られていないので、T署の管内である事と、おそわれた時逃げるに都合の良い所である事とが条件だったので簡単には見付からなかった。二日目に私はもう厭になる程尋ねた末ブラブラと帰ろうとする時はからずも良い貸間を見付けた。二階のマドから見渡すと、其のへん一帯は住宅ばかりで平家だった。マドから逃げ出すと屋根伝いに何処迄もゆかれた。間代も四畳半で七円と云うので安かった。私は此奴が気に入ったと思って、直ぐ約束した所が敷金を二ヵ月分あずかると云うのだ。此れには私も困った。然し此のへんは皆敷金をあずかっていると云うので仕方が無かった。私はどうせもう外に金の都合出来る見当は無いし、此のへんは皆敷金をとるのなら約束の時内金だけ入れたままで、ヅウヅウしく借りて終うより外に道はなかった。まして小山の家は多少感付かれているのであるから、少しも早く安全な家が必要だった。翌日西沢の荷物を運搬し、私の荷物はまだ前の家が整理してないので、其のままにしておき西沢のふとんで一緒に寝た。私は久しぶりで気をゆるめて眠った。めし代も月末になれば私の前の工場から金が手に入るので、それ迄西沢に前借させ立替えて貰った。私は再び大工場に

這入りたいのは勿論だが、一時的に生活を立て直す為めに町工場でも良いからと思って毎日就職を尋ねて歩いた。一週間目に西沢の得意先で一人入用だと云うので西沢に紹介して貰った。自転車のベル製作所である。私は此れで生活も確立し運動に専心出来るので嬉しかった。月末もせまって来たので私は前の工場の会計を取って貰う為めに色々考えた末、署には合法的の人で通っている立松をたのみにやった。立松はそれでは俺と君とは逢っていない様に、又今後も逢う必要が無いと云う様に、何とかうまくやろうではないかと、云った。色々話合った末、私が立松から借金をしているとして、其の金を工場から受取ってくれ、私は病気で当分田舎へ帰っている、と云う手紙を私から立松に出す事にした。工場の方へも代理がゆくから渡してくれと出した。会計日には七時と九時に、立松と逢う約束をしておいた。私は七時に指定の場へ行ったが立松は来ていなかった。九時に再び行ったが又来てはいなかった。私は不安になり出したので、危険だと思ったが立松の家へ行って見た。立松は帰ってはいなかった。私はガマロのソコを叩いても一銭もなかった。西沢も、前借があるので、月末でも交通費位しか手に入らない筈だった。私は今度の工場は第三土曜日が会計日だったので、もう二人分のめし代がなく、心はあせった。更に私は十時半頃行ったが帰ってはいなかった。立松は少しのんきな方なのであるから、私は不安等考えずに何処かへまわったのでは無いかと、気休めに思ったが不安でならないので、翌朝夜の明けるを待って又行って見たが無駄だった。工場で検束されたに違いない。私は其日又、西沢にめし代を借りて工場へ行った。工場から帰ると、それでも帰っては居ないかと思って行って見たが同じだった。立松の検束された事は確実である以上、金の手に入らないのも確実となったので、私は西沢とめし代の事に付いて話し合った。西沢は現在手に在る金は、二円と十銭である。前借するには十日以上働ねばならないと云った。然し二円と十銭では二人の十日分のめし代にはどう考えてもチト無理である。二円と十銭では一日一回も満足には喰え無い。友人達はまだ勘定を貰ったばかりだから、少し位は何とか成るだろうと、又西沢の友人の所へ行った。然し友人は、めし屋や間代を払って終ったから無いと云った。更に他の友人の所に行き、やっと一円だけ都合出来た。合せて三円十銭を二人で分けて持っていた。一日一回だけの保証は出来た。私達は其の翌日から朝めしは喰わなかった。仕事をする時は現金に力が出なかった。腹は空っぽになるので水を飲んで我慢はしたが、アセばかり出て腹にはチットも力が無かった。初めの二三日は昼にめしやへ行っても、余り腹がペコペコになって居るのでめしは喰われなかった。夕方工場から帰る時には目に見えて疲れを感じた。頭は何時とは無くぼんやりして、時々物わすれをした。つまずく様な事は何回もあった。それでも私は多少経験があったのでいいが、西沢は初めてなのでゲッソリと

やせて哀れだった。其の頃町村会議員の選挙があった。私は〇〇方面の工場の責任者だったので選挙の時も常任に選ばれた。然し私は外に重要な任務があるし、特に吉村が捕まった後、多忙なのでコトワッた。だが〇〇方面には適任者が無かったので、是非是非と云われた。私は幾つもの責任を引受けてもとうてい全部は出来ない事も良く知って居るし、又選挙の時には工場へ働き掛けるに、最も良い時期であり重要な時である事も知って居ったが、その為めに自分の行動に少しでもぬけ目があって、捕まる様な事があれば、それこそやっと付き初めたレンラクはたち切られ、戦線はますますみだれるので、どうしても引受けなかった。だが〇〇方面には、後大山の合法党に走った奴等が多少居ったので、合法的な運動ばかりして居り、我々の根城である工場へ働き掛け様とはしないので、常任を引受けなかった私も、自分から乗り出さずには居られなかった。此の地方は区域が広くて交通の便が悪かった。同志の家から家に行くに二時間もかかる様な所もあった。此んな同志の家を三人も尋ね歩くと帰りには、疲れてがっかりして終った。頭がふらふらとして倒れそうになる事も何回もあった。家に帰るのはどんなに急いでも十二時過ぎだった。私は西沢を可愛そうには思ったが、其処が訓練だと思い、西沢でよい事は何でもさせた。私は知っている同志も多いので、夕めしには時々あり付けたし又あり付け無い時は、金のあり相な奴を見付次第請求も出来たが、西沢にはそれが出来なかった。そして又西沢は訓練が無いので彼のする仕事はレポとか、文書の配布なので一晩中歩き通しだ。床の中へ這入ると正体も無く眠って終った。私は自炊している親しい同志の所へゆくと定って余りめしが有るかと尋ね、有る時は自分で握りめしを作り、味噌を付けて持って帰った。西沢は其の握りめしをおいしそうにパク付いた。集会の在る時等、めしを喰わない人達が四五人寄ると、集まった人達から一銭二銭と集めてやきいもを喰った。そんな時も私は必ず持って帰った。何もない時等、西沢に何か持って来たかと、尋ねられる事もあった。私はそんな時センチメンタルになる事も無いではなかった。

　西沢はどんどん訓練されて行った。云われた事は守り実行した。私は見込のある奴だと思って期待していた。選挙も一段落付いたので、身体も少しは楽になったが、大きな工場と違い町工場は、十一時間も十二時間も休み無しにコキ使われるし、めしは多い時で二回しか喰わないので、身体はだんだん衰弱して行った。私は何とかしてめしだけ満足に喰わなければいけないと思って、前借は一切駄目だと云う話は職工から聞いていたが、工場の親父に交渉してやっと、一円だけ借りた。後は会計日でなければ払わないと云った。私はシャクにさわったが、現在の所非合法になって居るので、強い交渉は出来なかった。西沢に又前借をさせて、前と同じ様な一回食を続けるより外無かった。

　其の月も半ば過ぎた十七日だった。私はいつものめしや

へめしを喰いに行った。顔なじみの女中は、写真を持って貴君を尋ねて来た人がありますよ、と云った。どんな人かと聞くと、色は真黒でブルドックに似た顔の人だ、と云った。私はテッキリ本庁の中島だと思った。それでどんな事を尋ねて行ったかと云うと、私の服装や、手のよごれ迄細かく聞いて行ったと云うた。私はぼやぼやして居ると危険だと思い、めしもそこそこに喰って飛び出した。町の四ッ辻迄来た時、成る程中島の奴ノコノコ歩いて行く。私は奴何処へいくかと思って電信柱の影にかくれて見て居た。奴は秋田と云う鉄工場へ這入って行った。私は此れは手が油によごれて居たので、鉄工場と目星を付けられたと思った。ベル製作所も鉄工場と同様に手足は油によごれた。中島の奴片っぱしから鉄工場を探し歩いているに違いない。私の工場も同じ町内だから、わけ無く来ると思った。私は工場の親父に又前借を交渉したが、金は無いと云った。金の無い事は私も良く知って居た。此の親父も前は二百人ばかりの職工を使い、相当金廻りも良かったらしいが、今は私を入れて五人の職工が居るばかりだ。産業資本の没落と云うのだろう？　現在では大工場に圧迫され、それに対抗してゆく事は出来なかった。そこで考え出したのが古金を使う事だ。此の工場で仕上げるベルには一ッとして新しい鉄の使ってあるところは無い。それで居て営業困難なので、材料屋は勿論、米屋や味噌屋迄今では現金でなければ鼻もひっ掛けなかった。親父は朝から夜迄古金屋を走り歩いて、直ぐ入用な古金を見付けると、金を入れ約束だけして、夕方仕上ったベルを問屋へ納め、金を受取って帰りに古金屋へ廻ってやっと材料を持って来るのだった。会計日でも満足に支払った事は少いらしかった。私はそれを承知していながらも、目の前にスパイの攻撃があるのでどうしても、金が必要だった。私は金を出さねば動かない、と云ってガンバッた。親父の娚の財布から娘のガマロのソコ迄叩いてやっと三円しか無かった。三円ばかりでは仕様がないが、と云って無い金は取れなかった。まごまごしていて、中島に捕まる様な事があっては取返しが付かないと、ベル工場を飛出した。出るは出たが、私は此の工場へ西沢の紹介で来たのだから、中島の奴ベル工場を尋ね出せば無論西沢の所へゆく事は決っている。私は西沢の所へかけ付けた。話は後でするから前借出来るだけ多くして三四日休む様に云って直ぐ帰っている様に、と云って私は直ぐ家に帰った。西沢も三十分して息を切らせて帰って来た。私は話を一通りしてから、自分のアドレスは大丈夫かどうかを知る為めに、西沢にどんな親しい友人にでもアドレスは知らせてはいけないと、云っておいたが改めて尋ねて見た。西沢は誰にも知らせては無いが、湯にゆく時工場の小僧に逢った事があると云った。其奴は安全で無い、町名がわかればシラミつぶしに調べて来るし、又間代の敷金も入れるのを入れて無いから、スパイに何を云うかわからない、と思った。所で西沢の前借は五円出来た。合せれば八

円になる。めし代は駄目だが、間借は又直ぐ出来る。私達は書類をやき払い久しぶりで金が手に這入ったので、少し早いが夕めしを喰う事にした。食後直ぐ越される様に荷物を整理した。荷物は二人で一回背負ってゆけば良い程少なかった。夕方湯から帰ってまごまごしていると、階下で、「二階の人」と云う話声がした。どうやら巡査らしい。私は階段のそばへ行って耳をすました。荷物は二人で一回背負ってゆけば良い程少な

別調査が油断のならない事は度々の経験で知っていた。此の戸の巡査はずい分細かく調べて行った。私は今夜あたり来るかも知れぬと思った。兎に角今夜は此処にいる事は危険だからと西沢に注意した。十一時頃私は奴等が来たかどうか様子を見に行った。予想通り来ていた。二階の窓を一杯に開けて、畳を引はいでいる最中だった。外から窓を通して良く見えた。馬鹿野郎、手前達に捕まる迄、ぼやぼやしているものかと、思って引返した。帰りに今夜は誰の家で寝ようかと思い乍ら西沢が今夜泊ると云った家に行った。此の家は私達の運動している事を少しも知らせて無いので、西沢を呼出して、スパイの手が這入った事、今夜ハッている事を話して充分注意した。其の夜は私も其の家に泊った。其の後は同志の家でも安全な所は無いので、別に定めずに泊り巡った。新たに間借するとしてフトンも何も無いので駄目だった。三円の金は交通費以外には使わず、めしは泊った同志の所で喰う事にした。西沢はわずかの間にめきめきと訓練されて行った。私は西沢はまだスパイにも顔を知られていないし又充分見込があると思ったので、合法的な所へは出さず、少しずつ非合法的な事をさせて行った。

小雨のシトシトと降っているうすら寒い夜だった。吉村が連絡だけ付けておいた〇〇工場を私は引受け、やっと分会が出来る様に成り、初めての集会の帰りだった。私は吉村の連絡を付けた佐藤よりは、清水の方が年は若いが見込があるらしい、今後はあれを、みっちり訓練してやろう等と考え乍ら、ブラブラと柳島の電車通りを歩いていた。押上の停留場近く来た時、どうも、私の直ぐ後をおかしな奴が来る様な気がしたので、振返って見た。すると中島の奴、今にも手を出し相なかっこうをしていた。私はドキンとしたが、直ぐ逃げ出した。中島の奴は泥棒泥棒とどなり乍ら追掛けて来た。私はこんな所で捕まってなるものかと、小路から小路を一生懸命に逃げたが弥次馬の為めに逃げ道がふさがれた。私は匕首を出して逃げ道を切り開こうとあせったが、使った事の無い匕首は却って自分の手にきずを負って捕まって終った。私は弥次馬の為めに雨後の泥道に倒されてさんざん蹴ったり、踏まれたり、叩かれたりして、身体中泥まみれにされた。それから捕縄をかけられて交番に引張り込まれた。交番では裸にされ猿股迄取って調べられた。私の持っていた書類は中島の奴一通り調べてから、又元の泥風呂敷に包んだ。私は捕まったのが残念で残念でじりじりした。私はどうしても何とかして逃げてやろ

うと思い捕縄を取ってくれと云った。然し直ぐは取ってくれなかった。私は捕まって終えば卑怯な事はしないから、と、云うと、此奴油断出来ないからなあ、と云いながら捕縄を取った。私はしめたと思った。中島は外に出て円タクを呼び止めた。私は、よし乗る時に逃げてやろうと、思ったが、巡査の奴二人も付いて居るので駄目だった。円タクには巡査も乗った。私は此れは手早くやらねば駄目だと思って、奴等がまだ落付かない内に、走り出すのを待って、身体とも円タクのドアにどっとぶっつけた。ドアは美事に開き私は外に投げ出されてコロコロと四五回転がった。尻のあたりを打ったと見えて、直ぐには起てなかった。円タクは五六間先で止まった。私はやっと起き上がりビッコを引き引き小路に逃げ込んだ。巡査と中島は呼子を鳴しながら追かけて来た。私はだんだん追つめられて来た。私は再び電車通に出た。其の時トラックが走って来た。私は死にもの狂でトラックに飛付いた。トラックはそんな事を知らずに走って行った。中島は私を追かけ様とはせずどう仕様かとまごまごしているらしかったが、前の交番の方へ引返して走り出した。トラックの行手には交番があった。中島はもう電話を掛けたかも知れぬ。私はどうしたら良いかと思っている内にとっさに考付いてわっとド鳴った。運転手は驚いて急停車をした。其の時私は手を離して何喰わぬ顔をして歩み初めた。運転手は私の顔を見て何だおどかしゃがって、と云う顔をして又走って行った。私はスパイの手からはのがれたが、泥だらけの身体では目に付くし又、もう手がまわっているかも知れないと思ったので円タクを呼止めた。運転手の奴一寸ためらっていたが、私はかまわず乗り込んで、深川方面へ走らせた。円タクから降りてもどうしたら良いかわからなかった。其の時ブタ箱で、コソ泥が空家に寝たと云う話を思出した。私はよし今夜は空家で寝る事に仕様と思って空家を探した。空家で寝るとしても身体が泥まみれでは、明日困ると思って身体を洗う事が先決問題だった。それで水道の在る空家を見付る事にした。空家は沢山あったが戸じまりのしてあるのが多かった。時々は中に這入れたが水道はなかった。又在っても水はなかった。此れには私も閉口した。家々はもうすっかり戸を閉めて街は暗かった。私はうすら寒さを感じながら時計を見ると、一時真近だった。私はまごまごしていて巡査に見付かっては、いけないと思って服の洗たくは明日何とかするとして、今度見付かった空家で寝る事に決めた。次の空家は運良くも水道の水が出た。借手が付いたのか新らしい畳や、建具も二三付いていた。私は水を出しばなしにして先ず頭を洗いそれから服やずぼんを洗った。シャツもどうやら泥が相当付いているらしいが寒いので上着だけにしておいた。階下で寝て人目に付いてはいけないと思った。私は音の仕無い様に二階へ行って見た。二階も畳が這入っていた。畳屋はまだ仕事に来ると見えて、畳台や表の付かない床が七八枚あった、私はゴロリと寝て見た。身体が冷や冷

やした。此れでは面白く無い、畳屋が仕事に来ているとしたら何か着る物でも無いかと手さぐりで尋ねて見たが、何も在り相で無いので、仕方無く又ゴロリと寝た。やはり寒いのでもう一度着る物は無いかと尋ねた。が無かった。私は独房にいて寒い時に、一二一二と体操をする時の様に、体操を初めた。身体が暖まってくるとゴロリと寝た。だが直ぐ寒くなるので何とか良い方法は無いかと考えた末、畳を着て寝る事にした。敷いて在る畳をはいで寝ている自分の上へ「入」の字に乗せた。少しは重みで暖かくなった。此んな寒くなると寝ているままで一二一二と運動をした。此んな事を繰返している内に少しも眠らずに朝になった。私は畳屋の来ない内にと思って仕度をした。服やずぼんは昨夜水をしぼった時とそんなに変っていなかった。ドロも所々に付いていた。私はぬれたずぼんに服を着て外に出ると頭がヅキンヅキンと痛んだ。カゼを引いたらしい。私は誰の所へ行ってやろうかと考えたが、誰でも今行った所で工場へ行く仕度をしている頃なので駄目だった。そうだ、武村の所へ行こうと考え付いた。武村の所へはあの一件以来一度も行かないから、今日は行って久し振りで笑談でも云ってくつろごうと思った。武村の所ではまだ寝ていた。私はかまわず戸を叩いて起した。妻君はふきげんな顔をして出て来たが、私の顔を見ると、久振りだねと、云って喜んでくれた。外の女達もどうしているかと心配してたよと喜んでくれた。妻君は私が寒そうな顔をしているので、ぬれた服に気が付き、どうしたの？　と云った。私は昨夜の事を面白おかしく話して聞かせた。婦人達は愉快相に笑った。私は武村の着物を拝借して朝めしを喰った。私はもっとくつろいでゆっくり話したかったが、頭は痛むし眠くもあるので二階の一間を借りて眠る事にした。床に這入るには這入ったが頭が痛むので良く眠られなかった。私はウツラウツラとして十一時頃眼を醒した、眼は醒めたが床から出様と云う気持にはならず、昨夜の事を考えている内に、今は四・一六の犠牲者になっている、萩野の言葉を思い出した。『中島の為に、多くの犠牲者を出している、少し位の犠牲を払っても、あの男をやっつけねばならない』と、実際、中島の奴は自分から生き字引だと云っているだけあって、スパイとして、現在活動している我々の知らない、古い多くの同志を知っていた。三・一五及び四・一六でも中島の為めに多くの犠牲者を出し、又外のスパイ共は写真以外に知らない。三・一五事件以後ロシヤから帰って来た同志等は、この中島の為めに捕まっている者が多かった。中島はヒマさえあれば全市の此の組合の支部を廻り歩いているので此の組合の闘士の顔は皆知っていた。此の組合は我々の指導者〇〇〇〇が居ったただけあって多くの党員を出して居り、其の捕われた同志は、大がい中島の為だった。私も此の組合員だったので中島には良く顔を知られていた。然案外頭の中は空っぽな男だが、元本所の〇〇署のスパイで、其の管内に在った〇〇〇労働組合の係をして居り、

し、私はまだ運動が浅かったので、街で逢っても詈のスパイ共には気付かれずに通り過ぎる自信は充分あった。だが中島の奴にはそうはゆかなかった。そして又スパイとして此んな熱心な奴はない。ヒマさえあれば運動している人の家を巡り歩き工場の終業頃になると、門のあたりをぶら付いている、私は何とかして此奴をやっつけてやらねばならないと思った。私は自分の身体が強く無いのが残念だった。又頭が痛み出した。こんな事を考えている内に、此んな事でカゼを引く様では何んにも出来はしない、もっとプロ的にきたえねばならないと思った。

『何時迄寝ているのだ、もう十二時だぞ』とどなりながら階段を昇って来る奴がある。×××事件で検束された塚本の声だと思っている内にもう部屋の中へ這入って来た。私は半身起き上り笑顔をした。

『あれ、此の野郎良い着物を着ていやがるなあ、何処から集めて来た？』塚本は相変らずのんきだ。

『馬鹿云え、手前ではあるまいし、人の古物ばかり貰うか』

『だけど見た事のある着物だなあ』こんな馬鹿を云ってる内に、私の勘定を取りに行って検束された同志の事を思出した。

『君の相棒出て来たか？』と尋ねて見た。私達の中では立松と塚本は仲が良いし、又のんきなので両方に良い相棒だったのだ。

『ウンおごらせると云って居ったぞ』と、私は二十円足らずの金が手に這入るので、間借も出来ると喜んだ。昼めしは塚本も一緒に武村の所で笑談を云い乍ら喰った。塚本は、私の顔を見て、

『何を苦労したか？　ヤセたな』と云った。

『俺はまだ若いのだからな』と云って笑わせた。

武村の妻君は『又吉村さんから、レポをたのまれて来たと、朝鮮の人が来ましたよ』と云った。

『今度は刑務所破りか？』と又大笑をした。私は吉村からのレポと聞けばまだわからない所もあったので、逢わないわけには行かない。姓名と人相を聞き、朝鮮の同志に調査をたのんだ。三日後大丈夫と云われたので逢った。吉村は

『自分は○○工場の伝単をはった時に、指紋が残って居ったので強制処分でやられた。其の点君のは大丈夫と思うが、服装其の他可成知れて居るので、検束されたら駄目と思う』と外二三注意があった。森君からもレポが来て居た。連絡細胞其の他の事は此の中に書いてあると云って三分位の包を三ッ渡された。

『××間も嵐も強い、死を決して戦ってくれ』と何回も繰返して云われたと。それから、此の時計は三・一五の犠牲者から贈られたのだが、俺も必要無くなった。君におくる、又此の前に逢った時君のくつは、大ぶボロになって居った。くつのボロは目に付き易い、此れもおくる、と二品渡された。其の夜は私は、仕事を皆済ませた後だったので、色々の事を語り合った。支配階級は無産階級を××搾

躊する為めには、味方同志をも殺し合う。と云う話から、吉村の捕われた×××事件に進んだ。其のゴロツキは、森君と二言三言話した事があるだけなのに、特高係に五十円貰って挑発者に成り、又ブタ箱で留置場破の相談等はしないのに、奴等が勝手に作り上げておき乍ら、こんな相談をして居ったのに知らずに居たと、看守連は、ゲン棒を喰せられたと話した。

森君からのレポに依って連絡はすっかり付いた。然しレポの来る前に、まるっきり知らない、唯細胞が在る事だけしか知れて居ない工場と連絡を付けるにはずいい分苦労した。又其の為めに多くの犠牲者を出した。止むを得なかった。其後地方委員会も確立し再び活潑な闘争を開始した。合法党の問題は其の直後だった。合法屋共は労働農民新聞で共産党は全滅した、とほざいた。

私は其の後、立松から金を受取り又ベルエ場からも勘定を受取り、西沢と又間借りをした。戦線も確立したので、私は何とかして中島を×××事を、どうしても必要だと思い西沢に奴の家を調べさせた。奴の家は〇〇署の看守に町名を聞いておいたので、直ぐ見付けた。私はテロに馴れた者ばかり五人集めて、奴の家に行ったが、奴は居なかった。仕方無く引返そうと表通り迄来た時、街の角で逢った。真先に居た須田は手早く眉間に一××せた。中島は突然だったので、後に倒れた。私達も突然だったので、思切り××××××××したただけで目的は果さなかった。其後中島は一ヵ月休んで居たらしい。だが然し中島の奴は、其の後、カカアや子供を田舎に帰し、ますます意識的にスパイになって来た。其の後何回ともなく他の同志に依って、×××は見舞ったが、まだ生きて居やがる。(終)

(一九三〇年一〇月「ナップ」)

愛情の問題

片岡鉄兵

その仕事をたのまれた時――終りは来たと思った。彼らの結婚生活に、まだ始めて二カ月しか経たない同棲生活に。

それは階級が要求した。彼らの同棲はその要求から始まった。そして闘争の必要は再び彼らに要求した、彼らが別々に生活することを。

彼と彼女とは最後の夜を笑った。それから黙ってしまった。励まし合う――そんなことは言葉では表現出来なかった。彼等は夫婦だったから。で、沈黙を深く諒解した。

明日から別々の地区で働くのだ。明日からはお互いの居所も、お互いの生死さえも知ることなしに生きなければならないのだ。別れ――一生の別れだ。初めから覚悟して一緒になった。それは遅く遅くやって来た。二カ月も、二人は一緒に暮したのだ。

沈黙。秋の夜だ。二人は、お互いに、相手の心の中を去来し、或は圧しつけているところの感情を、お互いにハッキリ感じ合うことが出来た。もしそれが悲痛なものなら、その悲痛を相手のために悲しんでやった。もしそれが憂鬱なものなら、その憂鬱をハネ返す力が自分にもある以上、相手にもまた在ることを何の疑惑もなしに信じることが出来た。沈黙とはそのようなものだ。言葉で飜訳出来ないものではない、ただ、言葉で飜訳する慾望を伴わないだけだった。そして又、この新しい時代の男女にとって、彼らの間に割り込んで来た沈黙に、決して神秘的な意味はなかった。それは交流ではあろう。交流とは何か？　理解だ。何によってこれらの二つの心はそんな理解に結びつけられているのか？　それはイデオロギイだ。二人が同じ観点に於て自己を認識しているところに、深い理解が成立っていた。

沈黙。うすい蒲団に二人は寝ていた。同じぬくもりの版図の中に、それが別々の二つの身体であるとは信じられない程。しかしながら明日までの安易だ。

女がかるく咳いた。

暗がりで、男は枕もとの煙草とマッチを手捜った。

マッチの明りが、青白い額の上にゆらめいた。女は、とじた眼をまぶしそうに、ちぢめた。

「眠れない？」

「ううん」

マッチは消えた。煙草のさきに残った火が、暗闇（くらやみ）の中で

精悍に動き、瞬いた。
「然し、俺たちは没落しなかった。それだけのことだ。ホッとした気持だ。それ以上、考えることは要らないんだ。寝よう」
「誰も恋愛至上主義者になったとは云ってなくてよ」
「分ってるさ。が、眠ろう。明日は早いんだから」
「あんたが発つ時、あたし眠ってたら御免ね」
「ああ好いとも」
再び沈黙した。個人生活へ執着する感慨が其所に在ってはならなかった。けれどもあった。仕方がなかった。階級闘争の必要のためには、あらゆる個人的な幸福を破壊するのだ。しかし其所に悔があるのは自然だ。悔恨、悲歎、そのまま闘争から逃避した人間も無数に出た。それは人間らしい弱さかも知れぬ。けれども、その悔恨や悲歎に負けないで、その中をくぐって来た人間も無数にある。これは何か？　そういう人間らしからぬ英雄、不自然な公式の過程――此所にその過程を経験しようとする彼と彼女がいるのだ。
彼らは沈黙の中に再び自分たちを試練した。お互いに弱味を見せてはならなかった。お互いに、俺は階級のことが第一だと思いつめていることを相手に感じさせなければ、別れようとて別れられないのだ。薄情でなければならない。悲しんではならない。それは虚勢と壁一重の隣りにいて、しかも全然別のものなのだ。二人は闘争して来た。闘争が彼らの生活だった。三・一五事件以来、彼らは半×××的な存在として、江東地区で働いて来た。労働大衆の中にいつもいて、その先頭に押し立てたスロオガンは彼らにとって決して空虚な叫びではなかった。骨肉のように親しいものが数知れずその戦線に倒れた。同じ釜で乏しい米を炊いて食った者の幾人が×××したであろう。「××××れたスロオガン」とは彼らにとって景気の好い修辞に過ぎないであろうか。いや、それは実に、他の言葉では適切に表現出来ない実感の抜き差しならない言葉なのだ。その生活に「××××れたスロオガン」を持つ彼らである！　階級のために生死する人々のまん中にいる彼らである。階級闘争は自己の内側でも激しく闘われた。個人的な安易へ行こうとする傾向に対する、この一般には自然な欲求であり人間らしい弱さから来るところの傾向に対する闘争がそれであった。それは外での現実の闘争、運動の実践によってのみ強められる自己であった。この自己は、階級闘争のために犠牲とされることを不自然だとは感じない。そういう意味で自己の自由や尊厳を主張しはしないのだ。これは不自然な訓練であろうか。人間本性の学問からは理解されない気持だろうか？　彼らはプロレタリアだ。プロレタリア以上にプロレタリア的ではないと同時に、ブルジョア文化から独立した珍しき産物でもない。彼らの心理だって、同じ方向へ流れる一つの勢力の統一では有り得ない。矛盾する力は常に生起する。それを正しい流れの方向へ統一させよ

うとする努力が、彼らにあってはもはや不自然ではないだけなのだ。浮世の高利貸には高利貸の心理があり、文士には文士の心理があろう。それは馴れだ。一つのハッキリしたイデオロギイを持ち、血だらけな闘争を生活して来たものには、その人の心の馴れがある。馴れである点では同じ必然だ。けれども、この闘争するプロレタリアの心の馴れ——自己犠牲の苦痛に対する比較的な無関心から絶対的な無関心へと成長しつつあるところの——は、他の階級の生活を生活しているものにとっては十分によく分らない。それは鈍感と無反省とに帰され勝ちだ。だが、ここに明日は別れなければならない同棲の最後の夜を寝ている二人にとっては、悲しまないことが自然であった。個人的な欲望を斯くもアッサリ片附けてしまうことが当り前なのだった。それは本性だ。それは道徳だ。そして自然だ。他の階級は、安易への執着とエゴイズムとを「神」によって与えられた。然しながらこの階級は、その反対なる心的動機を「闘争からの必要」によって獲得したのだ。

彼女はいつの間にか、うとうとと眠りかけていた。ふと男が云った。

「ここも、いつまでも××という訳には行かないから、早く変った方が好いね」

「そうよ、岸田君の方へ行くつもりでいるんだけど……」

「そうだな」

男はしばらく黙っていた。彼女はハッキリ眼が醒めて云った。

「あたしは、岸田君と一緒に仕事をするようになるんじゃないかしら？」

「多分そうなるだろう。僕もそれが一番良いと思うんだが」

男は、考え考え云った。が、非常に自然に不安なものが胸を突いた。女だからひょっとしたら——と云う怖れだ。ひょっとしたら、(女だから)こんなことを想ってはいないだろうか——「この男は漠然とした嫉妬のようなものを気持の中にもてあましているのではないかしら？」と。明日は別れる。他の男と一緒に仕事をする。そのことに対して、男は不安を感じているのではなかろうか。そういう風に女に想われると云う事は堪らない不愉快だった。果して女はそんなことを想っているか？　そんな風に男があわれむことによって彼を軽蔑するような女か？　まさか……

「だが、分らない。俺が嫉妬などという感情のオリを清算し切った人間であることが、まだこの女には本当に理解されていないのかも知れない。俺は平気な顔をしている。だがそれは痩我慢だ、と云う風に女はとっているのかも知れない。そういう感情を清算し切った人間というものの存在を、彼女はまだまだ信じ得ない種類の女ではないだろうか。彼女自身がそこまで行っていないから。そうだ、何と云っても彼女は余裕のある闘争をやって来た。比較的危険でないラクな場面だけしか彼女はやって来ていない。だか

ら、彼女には本当の苦しい闘争をやって来ている人間が、その実践によってどう云う性格を獲得するかがよく分らないかも知れない」
これらの疑惑は知らず識らず彼女を軽蔑していることになるのだ。「俺を信じない」ことで以て、「俺と同等でない」彼女しか認識していないことを自ら暴露するものだ。俺はまだ彼女を本当の同志として信頼していないのか！
そう考えて男は急に不愉快になった。
女も同じようなことを考えていた。男は――と彼女は思う――男は、自分が男を信頼していないと考えて自分を浅ましく思ってるのではないだろうか。「この男はやきもちを起している」そんな事を自分が思っているかのように考えて自分をあわれんでいるのではあるまいか。自分は断じてそんなことを考えていない。この男のしっかりしていることをこんなにも尊敬しているのだ。同志として！　だが何ということだろう、こんな下らない考えに引掛って睡眠すべき時間を無駄にしてしまっている！　今は休養に全力を傾けるべきだ。要らぬことを考える、これが非闘争的でなくて何であろう。眠ろう。
沈黙の中で、流れるものが再び調和した。男もまた、こんな下らない問題に引掛っている自分に愛想がつきたのだった。やがて男はスヤスヤと寝息をたて始めた。あらゆる妄念への執着は断ち切られた。もはや明日があるのみだ。女は安心した。そして眠った。

闇の底で、彼らは眠っている。
眠りは彼らから意識を奪った。ただそれだけだ。これは休息か。苦痛か。もし意識があるなら、苦しい眠りを彼らは感じたであろう。そういう眠りだった。粗食と過労とが、寝息の中に聴えた。それは微風の中の鐘の音のように、かすかで、しかし痛ましい響き。彼らは眠っている。それは休息だ。苦痛だ。寝息を聴こう。眠っているのは闘士だ。このジメジメした部屋の闇の中に、物のすえて行く音を聴く。この弱い身体！　あらゆる不幸で身をスリ減らされた肉体、粗食で瘦せ青ざめ、過労で胸を痛めている。眠りで意識を失った二人は、ただ弱い二つの肉体にすぎない。明るい日光に嫌悪された二人の恋人にすぎない。あらゆる努力を別れるために捧げた、あらゆる努力を××に行くために捧げた、そのことによって結びつけられた愛人だった。けれども、この弱い愛人、この哀れな恋人、この痛めつけられた二つの肉体は、朝が来ると同時に×××に先頭に立つのだ。生活の中に甦るのだ。味噌と米との食事さえ足らぬ勝ちの生活が、××を×かして行く。彼らは強い人間だ。積極的に歴史に参加している男と女だ。プロレタリアだ。
二ヵ月――同棲生活はこれで終るだろう。実は、もっともっと前に、彼らは別れている筈だった。一緒になって十日も経つか経たぬかの時、彼らは一度別れた。

同じ江東だったが、彼女は或る紡績工場に働き掛ける関係上、そこの工場の附近に或る男と一緒に一軒家を持つ必要があった。その男——石川は紡績工場の中に職場を持っていた。彼女はその妻という形で石川の家に同居した。その家は非常に××だった。折々小さな会合が其所で持たれた。泊って行くものもあった。

彼女の仕事がまだ巧く着手出来い間に破綻が来た。石川が言い出したのだ。

「同棲しているのなら、近所に変に想われないためにでも、本当の夫婦になってしまわなければ不便でもあるし、不自然でもある」

石川はこの場合どう批判さるべきかは此所では問題ではない。石川は好い闘士であった。けれども、若い女と同じ狭い家に同居している時、彼が或る悩みを持て余したとて、それは有り得べからざる事ではない。それに、これからは女工の中から物色してこの家につれて来て、従ってこの家で彼女と女工との接触が始まる。そんな場合、石川と彼女と果して夫婦らしい自然さを持って、彼らの前をゴマ化すことが出来るかどうか。二人が本当の夫婦でないことが分れば、それらの女工は兎も角、近所の人に怪しまれ、従ってそこいらをウロウロしている××××××されるもとにならぬとも限らない。何れにしても二人には夫婦関係がある方がないよりも運動には便利だ——石川の理屈は詮じるところ、そんなところにあった。

けれども、この理屈にはどこか薄弱な隙があった。彼女は抗弁した。カモフラァジは技術の問題だ。自分たちの慎重な用意と配慮とで解決のつくことだ。あらゆる瞬間に油断をしないと云うことが自分たちの性格でなければならない——そういう自分たちにとって人前を夫婦のように取繕うことくらいが何の困難であり得よう……彼女は一応そんな風に抗弁した。

「だがね」と石川は云った。「君の寝息をきいていると眠られない。それは俺がなってないからだと思う。思うけれど——そんなことに煩わされて、夜眠らないなんて要らぬ精力の浪費ではないか。これは事実だ」

石川の眼が真剣な哀求に輝いて見えた。それは夜だった。二人はこれから別々の寝床に寝ようとしているのだった。彼女は何と云うこともなく石川が怖くなった。それでありながら石川の云うことを無理だと、一がいに蹴ってしまうことも出来ない。性慾に悩まされるそのことが罪悪である筈はなかった。ふと××と云う言葉が彼女の頭に泛んだ。それは単なる言葉だった。鉄則と云うには余りにもろい感じであり、いつ砕けてしまう珠であるかも知れない。たとえ一個の人間の一個の××にしろ、それがもしほんの少しでも階級闘争の上に役立つというのならいつだって犠牲にしなければならないのだから、けれども、闘争は好んでそういう犠牲を要求するのではない。そういう場合は殆ど稀有である。この稀有の場合を稀有たらしめるので——

ザラに起させないもの――それは闘争する個人の克己と節制とである。

その日は、泊りに来た人もなく、彼らは二人きりだった。二人は議論した。石川は議論を押し切ることが出来なかった。「節制が足りない」そう云われたらギャフンと参る他はなかった。石川は彼女に対する恋愛的な自分の気持を批判した。彼女が、数日前まで自分たちの同志である皆木と同棲していたことを知っている。彼女と皆木との間に肉体的関係があったかどうか――それについては石川は考えなかった。いや、考えないのではない、関係があったか無かったかのどちらを考えることも出来なかったのだ。時として有ったと考える。しかし、それは彼らを侮辱することになるような気がした。同棲していれば関係があると見るのが自然だ。しかし、あのシッカリした皆木や彼女にとっては、闘争以外の何物も心にはないのだ。彼らなら、自然発生的な性慾なぞ心の埒外に閑却して、それを埃だらけな骨董品のように忘れることが出来たかも知れないのだ。又それ故、石川は、彼らに関係なんかなかったと考える。けれども、それでは余りに不自然であり、人間らしからぬ現象のように思われる。結局、彼らに関係があったか無かったかなどを考えること自身が、卑俗極まることに思われた。そんなことを考えた結論がどうあろうとも、それによって石川自身の行動が制約される筈もなかった。石川自身は甚だ恥しいことだが、斯うして同棲していると、堪え難い圧迫を感じる。それをかくしていることが出来なかった。けれども、それを正直に打明けるのは、罪悪か、でなければ何か良心的なひけめを感じた。そこで彼はこの慾情を何らか階級的な意義に於て合理化しようとした。そこに隙があったのだ。彼女の見事な抗弁に打勝つことは出来なかった。議論――だが、こんなことは理屈ではない。それだのに、議論によって彼女を説き伏せたって、それが何になろう。ただ、彼は底知れぬ羞恥の中に落ち込んで、もがいただけだった。彼は悲しくなって沈黙した。

然しながら、其所に寝床がある。彼女は戦慄した。この男は！　彼女はこの夜更けにこの男と二人だけであることを強く意識した。男が可哀想になった。苦しそうな彼の吐息が心を一つ一つ刺した。此の状態の自分に怖しくなった。どんな事が起るだろう？

最悪の場合を想像した。それは嫌悪すべき状態だった。物事があまりに乱れすぎる！　乱れすぎると云う漠然とした不安、考えると耐らないきたなさ、それを感じるこの潔癖、それが貞操だろうか？　そうだ、それは常に追われているようで、そして常に追っている者、生活に秩序を持つことを絶たれている者、具体的に云えば、此の××時代の苦痛の中に闘っている者にとっての、貞操のすがり所だ。この事は「売買」や「取引」の対象となるべき××を彼らが持っていないことの証拠であるが、同時に潔癖という個人的な気分である限り、階級闘争の広い見地の前には、いつ

でも××になされ得る根拠でもある。そんな場合は闘争の場面で稀有にしか起り得ないことではあるが。
で、彼女は、此の潔癖をもって、今身近にいる男を限りなく反撥した。もはや同志としての彼に対する思いやりは取落された。それは殆ど見失われた。やがて単に嫌いな男が側にいるという不快だけが心を一ぱいにした。自分は、いやな男と狭い一つの家の中で、たった二人きりで寝なければならないのだ。誰もいないのだ。男は、自分を目掛けて、野獣のように心を燃しているのだ。
すると、いやな男に対する恐怖で、もはや一刻も其所に居堪らないようになった。
同志を失った彼女——闘争から孤立した彼女——もはや彼女は弱い弱いあたりまえの女にすぎない！
男はさきに蒲団の中にもぐり込んでいた。彼女はしょんぼり坐っていた。男は眠ったようにじっとしていた。
が、ぴょんと首を持ち上げて、
「僕がわるかった。寝ない？」
「寝るわ」
彼女は立上った。すると男も何を思ったか立上った。彼女はびっくりした。殆ど声を立てたい程おびえた。そして壁ぎわまで二三歩無意識に飛び寄った。が、男は迫って来たのではなかった。便所に行ったのだ。
瞬間彼女の内に複雑なものが渦巻いた。これでは——こんな心の状態ではとてもここに落ちついては居られない。

ちょっと病的だなと自分をせせら笑ったが、すぐそのあとに男に対する恐怖が湧き上って来た。再び男が部屋に帰って来る時、又新な怖れに襲われなければならない。そう思うと一層堪らなかった。彼女は女性の云いようなき頑固な冷たさで武装しながら、玄関に出た。暗がりで土間の下駄をつっかけた。戸をあけて外に出た。
「俊さん」
内で呼ぶ声がしたように思ったが、彼女はもう返辞もしなかった。そのまま電車通りの方へ駈け出した。
終電車には間のある時間だった。
荒物屋の二階では、彼はまだ帰っていなかった。皆木とここで同棲しはじめてから十日もたたぬうちに石川の家の方へ行ったのだが、ここに来て見ると矢張り帰って来たと云う感じだった。安らかな憩いが此所にあるような気がした。兎も角、今宵ここに来たのは良かった。彼女は男の愛撫を思った。彼が早く戻って来ればよい！
やがて階段を上って来る音がした。帰って来た！　咄嗟に或る不安が胸をついた。自分は誤謬を犯している。彼にそれを指摘されるかも知れない……
障子をあけて男は其所に佇んだ。
「どうした？　何かあったの？」
「ううん」
彼女は微笑した。半分は自嘲の笑いだった。
火鉢に火もない。炭がないのだ。その火鉢を中にして坐

りながら、
「別になにもないのなら好いが、何か御用？」
「あたし、困ったわ」
今夜どういう事件が起ったかを彼女は説明した。石川をあまり傷つけないように云わねばならぬので六ヵ敷かった。が、そんな事情は、短い説明だけで判ることだけに、その短い言葉の中に案外石川を傷つけるような意味を含蓄するかも知れなかった。話しながら、彼女はこの思いもかけなかった困難に出会って、とうとう言葉に窮してしまった。
しかし、男には事情は正しく分った。
男は黙っていた。しばらくして静かに、目を伏せながら言った。
「お帰り」
もう終電車はなかった。彼女は男を了解しかねて眼を上げた。
「だって……」
「馬鹿！　そんな事で自分の部署を忘れる奴があるか」
昂奮した時の癖で、男の眼のふちがポッと赧らんだ。
彼は言葉を続けた。
「ここへ来て、そんな問題がどう片附くと云うんだ。そんな事で部署を捨てて、それでこれからどうすると云うんだ？」
「だって、だって――」と彼女も昂奮して、一生懸命だった。「あんまり、きたな過ぎるわ、まるで泥まみれじゃない」
「泥まみれになるのが厭か」
彼は笑った。
「泥まみれも事によると思うわ」
「そうか、泥まみれの選り食いも好かろう。だがな、そんな問題が起る度に部署を捨てたんじゃ、限りない退却があるばかりだ。俺はそんな敗北主義には賛成しないな」
「でも、あたし部署を捨てたわけじゃないわ」
「捨てたんじゃないか。石川と一緒にいることに堪えられなくなった。その個人的な感情を以て、其所に居ることを放棄したのが退却でなくて何だ？」
彼女はかえす言葉がなかった。彼の云う通りだ。自分は帰って行かなくちゃならない。あそこにガン張っている。これが現在の瞬間に与えられた彼女の存在理由だ。ガン張ることを捨てて問題を解決しようとしたことが、根本的な間違いだった。今宵ここに来たことは、自分の弱さ、自分のつまらなさを証明する他の何物でもありはしなかった。自分の強さ、一切を解決するものは、それだ。彼の云う通りだ。だが、今宵は見のがして呉れても好い。
「これから歩いて帰れるかしら？」
彼女は溢れて来る涙を押えながら呟いた。
「矢張り危険だな、明日の朝にしたら好いだろう」
危険だと云うのは、勿論、石川に対する不安を云うので

はなかった。深夜の街を女ひとりで歩くことの危険だった。と云って泥捧や追剝が怖いというわけでもない。××××××××××××××。往来××××××××していたのだ。

翌朝、彼女が石川の家へ帰ろうと思って立上りかけたところへ、若い同志があわただしく報告に来た。

「石川の家が××××！」

同時に彼女は、石川に対する或る真実な情愛をおぼえた。

それ以来、石川のいた工場に近づくことは彼女にとって××になったので、彼女は矢張り元のように、皆木と一緒の地区で、皆木の手助けみたいな仕事に従事して来た。それが今日までつづいたのだ。

だから、二カ月もこの同棲がつづいたということは、寧ろ個人的に云えば長い幸運だったのだ。もっともっと早く二人は別れていた筈だった。

が、とうとう最後の夜は来た。皆木は京浜地方で仕事をしなくてはならなくなったのだ。女も一緒にというわけには行かなかった。女は此所に居残って、今までの仕事をガン張るように要求された。

夜明けは近かった。が、二人は底知れぬほど深い睡眠の中にいた。疲労の底に。それは休息か、それは苦痛か……

夜が明けた。男は早く起きた。今日中に東京の市内でまわって置かなければならぬ場所が二三カ所あった。それを済ませて、その足で横浜へ立たなければならぬ。だが、女のほうは、それ程早く起きる必要はなかった。別々に起きるのは二人にとっていつもの事だった。一人に在る休養の時間が、他の一人の都合で妨げられてはならなかった。この原則は殆ど例外なしに守られて来た。

女は浅い眠りに浮き上った。彼女はうつらうつらと、男が出立を用意しているのを知っていた。眠らなければならない、彼女はそう思った。昨日の疲労はまだ頭の底にあった。

けれども、すぐ彼女はハッキリ目覚めた。

「起きなくても好いよ」

「でも」

無駄なことだ、と云わぬばかりの視線が注がれた。しかし彼女は起き上った。身体はうちのめされたようにダルく、頭は痺れていた。けれども、こんな苦痛に抵抗して起き上るのは今日に限ることだったろうか。いや、それが彼女らの毎日の目覚めだった。

彼女は、男のために、茶を湧かす用意をし始めた。それは男に従属した女のやる奉仕ではなかった。それは今日出立して又いつ逢うか分らぬ人への人間同志の切ない愛情だった。同志への挨拶だった。

四月十五日が来るまで、彼女はもとの荒物屋の二階に一人いた。そこは××××だった。一緒に仕事をするように

なった。岸田との接触では以前石川との間にあったような気まずい事件は起らなかった。岸田はしっかりしていた。会っても、用事だけ済ませると無駄口ひとつきかずに別れて行った。会合の時間を遅らすようなことも彼にはなかった。

京浜地方に行った彼のたよりは、時々いろんな——しかし極めて少数な——同志から聞いた。元気で働いている。いつもそれだけの消息だった。が、それだけの消息が、余部を物語っていた。

ところへ、××××が突発した。

その日、彼女は定められた場所である男と会うことになっていた。岸田とはちがう男であった。場末の盛り場に近い、ある露路だったが、約束の時間が来ても彼は姿を現わさなかった。彼女はすぐ近くの盛り場まで行ってショウ・ウィンドウを覗いたり、活動の絵看板を見上げたりすることで、二三十分もそのへんをウロウロした。けれども、彼はとうとうやって来なかった。

彼女は××を感じた。三十分待っても相手が来なければ、その会合は抛棄する習慣になっていたのだ。彼女は自分の巣に帰った。

翌日は他の場所で、岸田に会うことになっていた。ところが、岸田もその日、姿を見せなかった。彼女は程近い京橋の××島にある組合事務所に行って見ようと決心した。非常に××なことだとは思ったが、この場合これ位の××はしなければ今後が闇になるような気がしたのだ。組合事務所は狭い露路の中にあった。途中で買った大根を風呂敷包みのはしにハミ出させながら、いかにも近所の細君が買物から帰って来たと云う形だった。そして、組合の前を何気ない風で通りすぎた。

組合の戸はしまっていた。

ハッとした顔いろも、現わすわけには行かなかった。どこに、誰が、そっとこちらを注意しているかも分らないから。

行きすぎて堀割の岸に出た。それから渡し場の方へ急いだ。

誰もついては来ない。

自分の部屋に帰ると、絶望に似たものに身体中が濡れていた。非常に大きな××があったのに違いない。左翼全体の上に、××。

云いようのない×××しさ、云いようのない×××しさの次に、如何ともしがたい悲しみがこみあげて来た。あらゆる××は断ち切られた。三日四日たつうちに、その事は次第にハッキリして来た。

彼女は孤立した。

××されたであろう同志の面影を描いて見る。その中で彼女の居どころを知っているものは岸田ともう一人いた。

その中の何れかの口が××××。この荒物屋の二階にも××××××来るはずだ。

他の多くの同志は、彼女の居どころは知らなかった。ただ彼女と間接な××によっての××があるだけだった。彼女は幻想した。それらの同志についてのいろいろの場面を。

ある一人は××××××××××××××××××、

ある一人は××。

ある男は×××××××××××××。

ある男は××××に。

ある男は×××状態に。

「貴様と岸田との××はどうして取ったのだ？」

「そんなことは知らない」

「此奴！　なめてやがる！」

××。××。

×××××。×××××。

「岸田は知っている。だから××がとれたんだ」

そこまで云ったら、もうお終いだ。これ以上云わない決心をとおしつくすまでに×が来る。

「じゃ、岸田の居所は何所だ。云え！」

「それは分らぬ！」

「馬鹿が。今知ってると云ったじゃないか」

「ふむ」と詰ってしまう。

「×××××……」

「本当は知らない」

もうろうとした意識がこんな事を云わせる。彼は××のがれようとしたのだ。彼は×××××××生死しなければならないことを忘れさせられたのだ。生理的の苦痛、苦痛の感覚で圧迫される心臓が、彼をそんなに弱くするのだ。彼はここに連れて来られたら、もう×を甘受しなければならなかったのだ。苦痛のなかに無言のままで××ければならなかったのだ。けれども彼は何とか××のがれようとした。××××××。もはや敗北だ。もはや彼は××××××であることを止めたのだ。

「本当は知らない？　そんな馬鹿な理屈があるか？　ハハハハハ、知らないでどうして××がとれたのだ？」

××の上に坐って、苦痛は腕と向うずねとに文字通り×××××××。顔はクリイムを部厚く塗ったように脂汗で包まれ、頭は溶けそうに熱いのだ。うつらうつらとしている。このもうろうたる意識が、絶え間なく鋭い苦痛に呼び醒されながら、もはや×××××であることを止めた彼は、心の底から微かな生命への哀求の声を上げ始める。生命へのあこがれは、挑みかけられる理屈の闘いに応じようとする努力に現れて来る。彼は×××けようと焦る。

「そりゃ、××は取れる。××が来るから」

「その××は誰だ？　こら！　何も彼も上ってるんだぞ！」

じたばたせずに云っちまったらどうだ？」
その前から、彼がまだ意識のハッキリしている間に、今や×××××××××××××××、どんな意味からも××の××××××××形勢だ――と云うように懇々と説き聴かされているのだ。意識がハッキリしている時、彼はそれを信じなかった。どんな事があっても、彼らの××が××しにされると云うことは有り得ない。
どんなに××されようが、××されたその日から、××××××××××××××。その事を彼は信じた。そして××××階級によって植えつけられようとする×××の幻想を受けつけなかった。けれども今は？　今この現実の苦痛の瞬間、彼は×××××であることを止めているのだ。自分の生命を愛する単なる本能の奴隷だ。彼はふと考える。成程、俺までが×××たのなら、我々の××も××したのかも知れない。したのかも知れない――彼の確信はぐらついた。すると、もうその時は壊滅したという結論に知らず識らず取縋っているのだ。この結論から、何もかも××ているぞ、俺だけがガン張ったところでどうなるものでもないと云う考えが来る。安易だ。生命への希望が濃厚になる。
「××は――俺は知らない」
「知らぬ？　嘘つけ！」
「いや、それは本当だ」
「こいつ、白っぱくれてやがる。そいつの名が云えないのなら――矢張り岸田と直接の××があったんだな」
「そんな事は決してない、俺は嘘は云わない！」
その声には、此の上の苦痛に対する恐怖がひびいていた。
「いや、貴様の言うことはなってない。もっと念入りに訊いて見よう、××にな」
「俺は本当に、その××の奴の名前は知らないよ」
彼の声は真剣だ。
「じゃ、どんな男だ？」
「女だ！」
「女？　ふむ。とうとう云ったな。じゃ、その女の名前は？」
彼は生きようとした。そして生きた、その代り、彼女が新しい××として摑み上げられる番だ……
これは幻想だ。しかし、そう云うことが有り得ないとは云えない。この幻想には根拠がある。プロレタリアートは、一年前の××××の事件の経験によって、いろいろの知識を持った。
けれども×××××××××××××××。彼らは生き残った。彼女の幻想は、闘争から孤立したものの信念の稀薄から来たことは後になって分った。××××××××××××××同志は×××いた。××××××××の驚異だった。その驚異に価する存在がある！　人間の忍耐力は我々は信じていい実例によってだ。具体的事実×××に

よってだ。

彼女は家にじっとしていることが出来なかった。底知れぬ淋しさを持って、街をさまよった。遠い山の手の裏通りにある、ブルジョアの同情者を訪れた。そこへ行けば誰かの消息がきけるかと思ったからだった。しかし、その人は留守だった。で、門を出て行った。すると、すぐそこの往来で、岸田とパッタリ出会った。

「や、××だったな！」

岸田が輝いた声で叫んだ。

彼女も同じことを叫んだらしい、が、何と云ったのやら夢中でその側へ走り寄った。

「ああよかった。ああ好かった！」

それ以上のことは云えなかった。胸にこみ上げて来るもので一ぱいだった。

「ここを訪ねて来たの？」

「留守よ」

二人は無言で歩き出した。云うべからざる感動で、あらゆる疲労を忘れていた。

「今、それで何所にいる？」

「どこにって——困ってるわ。スッカリ×××切れちゃったんだもの」

「そりゃ、そうだろう、そりゃ、そうだろう」

「他の連中はどう」

「たいがい、××××」

予期した通りだ。しかし、ここで岸田と逢ったのは甦生そのものだ。

「で、どうしたら好いの、一体——岩ちゃんも×××？」

「あいつは本所で××××××」

「みいは？」

「みい公もさ」

「山は？」

「そうだ」

「そうだって——矢張り？」

「うん」

「そう——仲もかしら」

「大丈夫」

「まァ嬉しい！」

「まだ残ってるさ」岸田は笑った、そして訊いた。「しかし君は、矢張り、あそこにいるの、荒物屋の二階に？」

「だって、何所にも行く所がないんだもの」

「×××××」

「まだ、×××××」と云ったが、完全に×××だとは自分でも信じているわけではなかった。

岸田は今まだ定ったアドがないと云った。野宿もするし空家の中にそっともぐり込んで寝ることもあると云った。斯うして××××××××歩いているのだ。ぽつりぽつりでも、××××いるらしいその口吻は、彼女を非常に元気づけた。岸田とめぐり会ったことによって、彼女と×

××××××××結びつけられた、この根柢は抽象的なものではない。岸田は直接×××と××を持っている。×××の××は大衆の中にいる。岸田と再び会ったことによって彼女は希望を取返した。これが××××××××××××でなくて何であろう。××されたあとで、×××する一つの動力に結びついた時の××は、それを経験した者でなければ分らないのだ、それはブルジョアにおいて、遺失した財産を再び発見した時のそれにも増している。

「今晩、兎も角、あんたのところに行くよ。その時、相談しよう」

「ええ、待ってるわ。もう×××だわね」

「そりゃそうさ。一人でも残ったら、××××××××××××××、因果なものさ」

二人は別れた。

夜、おそくなった彼女の部屋に岸田は再び現れた。

「今晩、泊めて貰って好い？」

彼は磊落に云った。

「ああ好いのよ」

「有難い。それから何か食べるものはないかしら――」

「それが無いので困ってるのだけど」

「まあ好いや」

岸田はポケットから銀貨を掴み出した。

「二円あらァ。五十銭もらっとくよ」

「あんた、困るでしょう？」

「明日は、どうにかなる」

その金は実際彼女にとって有難かった。彼女はまだ、今日の晩飯を食べていなかった。明日の食事のアテもないのだった。

岸田は用談に入った。三四人の名をあげてから、

「今日はこれだけしか見つからないんだが、××××××××××××、どうにかやって行ける。京浜の方では××××××××それがまだハッキリしないんだが……」

「あの人はどうしたかしら、皆木君は？」

「それなんだがね、皆木君のアド、君、知っている？」

「それが――妾にも分ってないの」

「いや、それは別の方から、多分二三日うちに分るだろう。居て呉れれば、しめたもんだがな」

「ほんとに！」

今日まで皆木のことを余り気にしなかった自分が、ふと不思議なような気がした。何か迷信的なもので、彼女は皆木を無事なものと決めていたのだ。しかし考えて見ると、何らか偶然な幸運でも空想しない限り、彼が無事でいようとは思われなかった。

「それで、妾の当面やらなくちゃならない事は何？ それを教えて頂戴」

「いろいろして貰いたいことはあるんだがね、まァ暫く待って貰いたい。明後日ごろ、君の××を決めて××を寄越すから――然し、僕はもうこの××にはいないよ」

「何所へ行くの？」
「なに、まだ決ったわけじゃないが」
彼は言葉を濁した。答える術がなかったのだろう。そんなことを訊いた自分の方が間違っていたのだ。誰が何所に行こうと、それを知る必要のある者だけ知って居れば好いのだ。もし彼女にその必要があると認めたら、彼の方から言ってくれる筈だった。こっちから訊ねる権利も義理もないのだ。彼女は自分のはしたなさを顧みて顔を赧くした。
俺は馬鹿に眠いんだが——と岸田が云った時、彼女は薄い布団を敷き終っていた。一組しか夜具はなかった。岸田はその中にもぐり込んだ。彼女は机の前にぼんやり坐って、眠さと空腹とに闘った。
岸田の健康ないびきが聴えて来る。
自分も、あの蒲団の中にもぐり込んで行けば好いのだと考えた。それを喋々するのは却っておかしいことだ。そう思った。
が、そう思い切れないカスのような物が、空腹の底にたまっていた。それはカスだ。そんなものにこだわっている間はまだ卒業していないんだ。だから平気で、こだわりなく、そこにもぐり込んで行けば好い。物事が乱れるような結果になるかも知れない。けれども、それが何であろう。それは闘争するものが余儀なくされる生活の形式の中から、ふっと浮んで消える泡のようなものではないか。泡だ泡だ。そんなものを怖れて何の闘争が出来よう。あらゆるものを投げ出したものに、××なんか何だ？　もはや石川の場合の彼女とはちがっていた。彼女はもっともっと育っていた。もっともっと自由な女性を自分の中に自覚していた。たとい肉体は腐ってもよかった。××を裏切らず、卑怯者にならずに、自分を押し進めて行く途中で、どうせ××身体だ。もはや彼女にとって××以外に大切にするものは何にもないのだ。××ばかりを破れ物のように気に掛けていたら、それでどうなると云うのだ？
ここに、自分の側に寝ている男が、この自分の部屋に来て寝るということが間違っているだろうか？　彼は野宿すべきだろうか？　彼は此所に来て寝ることを拒まれねばならなかったのだろうか？
追いつめられて、此所に彼は寝に来た。彼は久し振りに蒲団の上に寝た。此所より他に安全な寝床は彼にはなかった。
彼は××××はならない。このことは階級的な見地に於て真理だ。
彼を無益に疲労させてはならない。彼が久し振りに蒲団を求めた。（何という薄い蒲団！）それは階級的に必要なことだ。
今宵、彼のこの必要を満すものは、この彼女の寝床の他にはなかった。地球上の他のどこにも無かった。
何によって、彼の生活はこのように窮屈なのか！
彼が××××××××××闘う一人であるからだ。彼

いるからだ。
彼のこの位置が、彼を今日ここに来させてしまった。
けれども、彼女だって同じ位置にいた。彼女は貧しかった。彼女は、一組の、うすい夜具しか持っていなかった。
仕方がないのだ。彼らの意志でそれを避けることの出来ない必然なのだ。
彼女は机の上に書物をひろげた。空腹で、書いてあることが頭に入らなかった。ペンを取って、紙の上に何か書こうとした。矢張り空腹から、手がふるえて字の形をなさなかった。
思い切って、彼女は机をはなれた。わざと電灯をつけたまま、蒲団の中へそっと、片方の脚から入って行った。
男はちょっと目を醒ました。
「ああ今寝るの？」
「ええ」
「何してたんだい？」
「本を読んで……」
しかし、男はもう答えなかった。すぐ元のように寝息を立て、微かな、しかし健やかないびきを洩らし始めた。
よほど疲れているのだ！
彼女は多少センチメンタルになった。涙が出て来た。自分はまだまだ駄目なのだという事をハッキリ知った。自分が今の今までひとり問題にしていることは、岸田などにとっては問題でもなくなっているのだ。生活的に、彼はずっとずっと高い所に行っている。況して石川などとは比べものにもならない。日常の実践が、人間をどんなにでも高いところに育てるものであることを、彼女はその身を以て今知った。
闘争の過程で、地球上の或る隅っこで小さな恋愛関係が生起する。それはプロレタリア運動が清教徒の運動でない限り、自然のことであろう。誰も、禁慾主義者になれと強要しはしないのだ。けれども、それが自然である瞬間に、その自然の圧迫にびくともしない強さは、一層有用なことだ。自然に圧し倒されたって、その事が闘争を害しはしないだろう。あたり前に起ったというだけの事だ。けれども、あたり前のことを起らせずに済む強さ――この力は、闘争のあらゆる場面で輝かしい役割を果す力なのだ。
ブルジョア側は、プロレタリアの闘争過程に自然に生起する恋愛ごとを取上げて、これを問題にする。そして、さも自分たちの階級ではそんなことは起らないかの如き顔をして口汚く罵るのだ。けれども、彼らは見落している。そういう自然の衝動を克服してやって来た無数の力も、その運動の中に無数にあったという事実を。新興階級の美徳は、その「新興」のための闘争過程の上に、最初は混沌とした形から、次第に具体的な形を備えて存在を開始し出すのだ。旧階級が敏感なのは、その混沌の中の不純物に対してのみだ。それが形を備えて行くところの美徳の本質につ

いては、彼らは一切盲目だ。
彼女もいつか眠ってしまった。
そして朝が又来た。

明後日頃××を寄越す。そう云いおいたまま岸田はお茶も飲まないで立去った。
その日、彼女は、山の手の同情者の家をもう一度訪れた。
同情者はいた。しかし、彼によっては同志の誰の消息を明かにすることも出来なかった。
二三日たった。同情者が呉れた金で、一カ月や二カ月の食いつなぎは出来そうだった。が、その金を自分ひとりのことに使うのは惜しい気がした。××が来たら、それを通じて何程か岸田に渡せると思った。
××は来なかった。
更に二日たった。矢張り来ない。
これ以上、荒物屋の二階にいることは××だと云う予感が頻りにした。もはや、誰かの××××××××××××××××いそうな頃だった。どこか他へ移ってしまわなければ――一刻も早く引越さなければ――そう思い、又一日二日とたって行った。
彼女はしかし、岸田からの××が来ること一つに、あらゆる望みをつないでいるのだ。××が来ないうちに此所を離れたら、もはや彼女は完全に××××××××××××××××断ち切られることになるのだ。
此所を離れることは×であった。
たとえばどんな××があろうとも、ここに彼女はいなければならなかった。
此所を離れて、孤立してしまうのも、ここにいて×××しまうのも、同じことだ！
今日も暮れた。矢張り、××は来ない。
もう諦めなければならないのだろうか？　岸田が××を呉れないと云うことは――岸田が彼女を見捨てたのだろうか？
だが、何故？
困難な×××路を踏み出している岸田たちだ。そしたら、彼女ひとりだって大切な人間ではないか。幸運にも残っている一人の同志を、彼らがそのまま放って置く筈は断然無いのだ。
それとも、岸田たちは、彼女を、今日の困難な道を行くための同伴者とするだけ、信頼していないのではあるまいか？
岸田はまだ彼女をよく知らない――しかしそんな事は有り得ない。
或いは女だから、彼らは彼女を利用する道が見つからないで弱っているのだろうか。それとも（女だから！）少々荷厄介に感じるとでも云うのだろうか。
そんな事は有り得る筈はない。

彼女は迷った。淋しく、心細かった。
或日とうとう思い切って、かの山の手の同情者の家を再び訪れた。
「岸田君？　あなたは知らないんですか、あの人も×××××××××××とところを目撃した労働者があるんだから嘘ではないでしょう」
同情者の言葉に彼女は真に仰天した。すっかり悄気て岸田の××××何時頃だろうと訊いた。いろいろの事を綜合して、彼女のところに泊った翌日のことらしかった。上野の山下で××××××××××××××というのだ。
「そうですか、少しも知りませんでした」
彼女は溜息をついた。
「誰かと——誰でも好いんです。××をつけて頂くわけには行かないでしょうか」
「まァ待ってらっしゃい。時々此の家に来て下さい。そのうちきっと誰かが来ますから」
同情者は自信ちるらしく微笑した。
彼女は自分の部屋に帰った。今はすっかり運動から孤立した自分を寒々と感じた。
明日はどこか他の貸二階でも捜そうと思った。ここが××になってから、何日ガン張ったことだろう。まだ××××××はいないのだ。
「みんなが、妾のことを黙っている——みんなが妾を×××呉れているのだ！」
彼女はそれを力強く感じた。肉体の苦痛でしわくちゃになった心臓の奥で、彼らは懸命に彼女を×××××守って呉れている。ここに、此の荒物屋の二階に、この通り彼女がしょんぼりと坐っていられるということは！
これは何ということだろう！
しょんぼりとして坐っていなくても好い。彼女は××××××。彼女のことを黙っている岸田や×××××を思うことで、初めて「同志愛」というものを噛みしめるように感じた。
これこそ力強い愛情だ。これこそ、世界を成長させる愛情だ。
そして、彼女は、今は自分の知らぬ所で、じみに、少しづつ××××××××××××××××仕事のことを考えて、じっとして居られないものを感じた。
捜そう！
希望をもって、捜そう！
一年たった。左翼は盛上ったか？　一九三〇年の階級闘争については我々が現実に見る通りだ。
彼女の消息は？　作者も知らない……

（一九三〇年一二月「改造」）

虱

手塚英孝

一

夜が更けるに随って寒さがヒシヒシ身にこたえてくる。

昼すぎから北村と二人で仕事に取りかかったのだが二人共なれない仕事だし、折角切ったのがインクが通らなかったり、ビラの大きさを間違えたりした揚句、あとから来た男と一緒になって、やっと仕事に油ののりかかった時は、もう大分夜も更けていた。この調子だと明日の引き渡しまで、たとえ徹夜でぶっ通しても指令の半分も危ない。

……で。皆、これじゃアいけないと思って急に馬力をかけ始めた。

原紙も四、五枚たまったので三人は、かわるがわる手を替えて印刷に一心になった。一人が刷ると一人は横へ廻って巧みに調子を合わせて、一枚ずつはね出した。出来た奴は、片っぱしからドシドシ荷作りして積み上げていった。一台の謄写版では随分不自由だが、それでも三人は何時の間にか上手にコツを覚えて割合能率をあげた。併し小一時間もたたない内に青山はひどく疲れてきた。目がチカチカして背すじがこわばって痛い。さっきから幾度も背延びしたり、腰をたたいたりして、やってみたが段々ぼんやりするばかりだった。それに何時の間にやら火の気もなくなって足の先がジッとしびれる様だった。

『横にならして貰うぜ、オイ』

青山はもう我慢が仕切れなくなって墨を練っている北村の背をつつくと、紙を傍へやってごろりと仰向けになった。ぐったり延びると、いい気持ちだけど、さっきから喰い付くようにやっている二人を思うと、どうも気がひけた。夕方やって来た青黒い瘦せた男は黙って続けている。折々、ゆっくり背のびをやってホーッと太息をついて又、やって行く。そのくぼんだ無表情な顔とぶっつかると青山ははね起きた。

『かわりましょう』

『いいよ』

『じあ、君少しかわろう』

『……ア』

中腰のままで、べとべとの手袋をぬぐと北村は『冷えるなア』と不機嫌そうに云って手をもんだ。

『少し横になれよ』

『ア、……まだ切ってない奴が』

北村は机の上をかき廻して居たが、やがて箱から原稿をより出した。
『こいつは弱ったなア、オイ、赤いインクはなかったねエ』
『そうだな、そいつを見て呉れ』
『青黒い男』が気だるげに傍のトランクを顎で指した。
あと六時間。とても間に合いそうにもない。青山は躍気になって音のしない様に用心しながらローラーに力を入れた。はっきり、にじみ出るスローガンがドシドシかさばって行くのをみると、何か、はりつめる様な気がして苦しさも忘れて少しずつ昂奮していった。自身のやっていることが此の上もなく、やり甲斐ある尊いものに思えたから……
『出ないぞ。オイ』
傍から注意されてウンと力を入れたが、未だ半分うすかった。
『糞!』
ぺっとり付けすぎて、今度は三、四枚駄目になった。しばらくやっていると、片隅へシワが斜めに出来て、インクがにじみ出した。ぽんとワクをあげて新しいのと取り替えようとしたが、中々、うまく合わない。下をきっちり、しめても、ずって居たり、いくら引張っても方々へ、シワがよれてしまう。畜生！　と思うとベタベタ手に喰っ付いて横が少し裂けた。
『オイ。どいて呉れ』
あわてて小突いて横の奴が入れ変った。

『……一ちょうらいを君……』
口の中で、こぼしながら可笑しな程、念入りにそーっとつまんで直すと、つぎをあててマッチでロウを少しとかした。
青山はもう心からぐったり参って鼻をすすりあげながら、ぼんやり北村の手元を見ていた。窓から光りがもれない様にぶきっちょに風呂敷を釣って、オーバーを腿に巻き付けたへんてこなかっこうで鉄筆を動かしている。その錙の音が妙にゴリゴリ頭にこたえた。
『なア、俺ア、少し休むぜ』
『………』
切りまで書くと、やっと充血した目をこっちへ向けて北村はアクビをかみしめた。
『奴が下の玄関で寝てるから、もぐってきたらいいだろう』
この部屋を貸した男はへんな野郎で、初めは手伝うようなことを云っていたが、晩になると、なんとか口実を付けてフトンを下へ運んで直ぐ寝てしまったので、皆憤慨していた。青山も彼の中へもぐり込む気にはどうもなれなかった。
『イヤ。一寸横になればいいんだ』
六畳の間一杯ちらかって横になる場もない。トランクと用紙包みを傍へやってみたが、青黒いのが真中でがん張っているので、邪魔になりそうだし、ふと思い付いて押入れをあけると、いい具合に上の段が空だった。

『いい頃に起してお呉れ』と云って這い上ったがイヤという程天井へ頭を打ち付けた。幸いに夏ブトンとカヤがあったから、そいつを敷いて、頭からすっぽりオーバーをかぶった。身振いが付いて頭がヅキヅキする。下腹へ手をつっ込むと、にわかに腹がすいてきた。妙に気分が上ついてぐっすり寝付かれない。うとうとまどろみながら、あれやこれやとりとめのない事が気になって仕様がない。……ローラーが耳元でじかに聞えるかと思うと、又遠く逃げて行く。うつらうつらしている内に青山は、やっている仕事とてんで自分は無関係のような気がしてきてへんな夢ばかりみた。

――北村にゆり起された時は、もう夜明けだった。東窓がすっかり明るくなっている、風呂敷も取ってあった。ボール紙にくるんで青黒いのが隅っこで寝ている。ひどく冷えた。

『奴ア三日もロクに寝てないんだとさ』

寝ぼけ面をして北村がボソボソどもった。

『こいつを頼むぜ、俺も少し寝るから……』

大体あとの仕事を青山に教えると北村も押入にあがった。

窓ぎわに謄写版を引き寄せて半分位掃除してあった。こいつを揮発油でふいて赤インクで千枚刷ればよいのだ。青山は手袋のよごれない奴をよって始めた。寝たせいか幾分楽だった。外は車が通ったり、足音がカチカチ聞えた。一枚の原紙で千枚も刷るのは少し無理だが用心して出来るだけ多くすろうと思った。

初めの五、六枚はへんな色が出たが直ぐよくなった。割台元気で六、七百も漕ぎつけたので彼等を起そうかとも思ったが『まあ、ついでに、やっちまえ』と思いながら一息ついた時、下のドアーを開けた気配がした。案内も乞わずに足音をしのばせて上ってくるらしい。ドキンとして手を置いているとつい一週間ばかり前、北村に紹介された党の人だった。

『ヨウ。未だ起きてたのか』

ニコニコして包みを置いた。

『イヤ、さっき交代したんです』

青山も笑顔になっていそいで又インクをとかそうとした。

『そいつが、一日延びたんだ。どうだい、まあ、これでも喰わないか』

アンパンの包みを破ってすすめて、隅の奴をゆり起した。青山は『なーんだ』と思うと急に拍子抜けがした。それならあれ程あわてるのではなかったのに……ローラーをほっぽかしてアンパンをぱくついた。二人も起きてきて喰べた。一日延びたので皆ホッとしたのだった。

『三ッ一も未だすまないのさ』

煙草を貰ってうまそうにやりながら北村が目糞だらけの顔で笑った。――この家は余りよい場所でもないし、下の人等がどんなに思っているかも確に解らないから出来るだ

け早く引越す方がよいだろうと云うのが、皆の意見だった。今、とりかかっている分も明日迄なら二人でなんとか片が付くだろうから、差し当り一人だけ直ぐ外へ廻ることになった。結局青山が選ばれた。青山にしてみれば北村と別れるのは嫌だったが仕方なく承諾した。傍へ呼んで所を教えると、そのアゴの長い奴は出て行った。

『弱ったなア』……青山は妙に不機嫌になってパンくずを、ほおばった。昼までに向うへ着けばよかったから一寸でも寝て置こうと思って謄写版を中へ押し出して横になった。

二

廻わされてきた家は郊外の住宅地で割合よい所だった。妻君は盲腸で入院していたし、主人は朝早く会社へ出て病院へ廻って、おそく帰るので都合がよかった。台所もこっちで占領して幸い米と味噌があったから三度の飯にもどうにかありつけた。

それに今度は謄写版も二台だから仕事もはかどった。お互に名も素性も知らなかった。が青山は直ぐ二人と仲善しになった。朝は六時にきちんと起きて一人が台所でゴトゴトやっている間に二人はフトンをあげて仕事にとりかかった。ずんぐりした肥っちょの飯たきは堂に入ったもので、直ぐオサンドンと綽名を貰った。たら腹かきこむと昼までは休まず続けた。アゴの長い奴は大抵日に一度は廻ってきて原稿を責任者に渡して行く。折々、煙草やら大福を持ってきて呉れるので煙草が長くきれると、てんでにアゴを頼みにした。

二日目の夕方北村が、ひょっこりやってきて青山を喜ばせた。前の家は外に目当てもないし出来る限り使う積りでいたが、ウチの人がびくつき出したので仕方なく早く切り上げて北村はこちらへ廻わされたのだった。四人になると仕事も、ドシドシやって行けたが、指定の量は益々増してくる。四人は絶えず分担をかえて、てんでの得手を活かしながら計画的にきちきち立ち働いた。

——党はノルかソルかのせと際だった。このカンパにうつる前既にひどい痛手をこうむっていたが、あらゆる弾圧に屈せずその全能力をあげて戦っていた。北村も青山もそれ迄はレポや金を集めたりしていた関係でこのカンパに動員されたのだった。

三時頃になると、きまって運搬の奴が、裏口からやってくる。小僧になったり職人に化けたりして大風呂敷で、ありだけのビラをしめ上げて出て行くと、一しきり片が付くので皆はホッとして一休みする。それから又明日の分にとりかかるのだ。

日が暮れると早く表の戸は閉めて玄関だけは奇麗にして電灯を付けて置いた。一軒占領していると時々御用ききや訪問客がくるのに弱った。小奇麗な青山が応対の役を引き

受けて要領よくやってのけねばならなかったので、手も余りよごさないように気を付けた。晩は十一時になると仕事をやめて片付けた。責任者は注意深く紙くずをよせ集めて、火鉢にくべる。皆は急に疲れを覚えながらありだけのフトンを引張り出して敷く。青山は何よりも寝るのが一番極楽だった。北村の側へもぐり込むと思う存分手足を伸ばしてロクに口もきかない内にすやすやと眠りに落ちた。
五日目にはもう味噌がきれた。それに米も残り少ない。外へ出るのは厳禁されていたので、買いに行くわけにもいかない。あと二日でここは切り上げる予定だから、なんとか残りで間に合わそうと云うことになって飯は十時頃と夕方二度にした。その朝は起きると直ぐ皆仕事に取りかかって少し早目に仕度をして貰って台所へ陣取ったが茶漬けの熱い奴を二ぜんずつもやると空になった。
『なーんだい。もうないのか』
北村が突き出した茶碗を引っこめながらニヤニヤする。
『まだ、お前。明日、明後日といるだろう』
『初めからなんとかすればよかったなア』
『ホントダヨ』
肥っちょが真顔になって合槌を打ったので皆クスクス笑い出したが、表で人の気配がしたのでソッとした。
『オイ、出てみろ』
つつかれて青山が用心しながら玄関のカギをはずすとアゴだった。……いつも裏からやってくるくせに。
『なんだ。今、飯かア』
笑いながら見廻していたが坐込むなり責任者と小声で話しだした。皆は又部署に付いてそろそろ仕事にとりかかった。
『佐野学に投票しろ!』『労働者農民は共産党に入れ!』……今度のビラはいやに小さいので断ち切るのが中々面倒だった。安全剃刀の刃も、もう役に立つのがないし、庖丁を持ち出して使ってみたが直ぐ切れなくなるので度々とがなければならなかった。アゴに刃を頼んで置こうと思いながら、北村が刷るのを揃えて青山は板で片方を押えてごしごし切った。よほど注意しないと印刷が、不揃のために、とんだへまをやる。下をめくってみては続けていた。
『君、……オイ』
『………』
アゴに呼ばれて北村が台所へ連れて行かれた。間のフスマを閉めたので『なんだろう』と青山はいぶかったが丁度切るのには手を焼いていたから、幸い北村の跡に坐ってローラーを押しながら台所が気になった。
しばらく小声で話し会っていたが、やがて北村が這入ってきたのをみるとやや青ざめている。
『……呼んでるよ』
『俺?』
どうも様子が違うから立ち上りながら『なんだい』とき

いたが北村は黙って居る。一寸不気味になってびくびくしながら台所へきてみると、散らかったちゃぶ台の傍に坐っていたアゴが優しい目で迎えて呉れた。
『話があるんだ。そこをしめて、まあ坐われよ』
『エ』
青山はフスマを閉めて坐ったがへんにおずおずして手をもんだ。
『どうだい、続けて行く気があるか』
『………』
『どうだネ』
『エ、そいでも。僕の出来ることなら……』
『学校の方は?』
『籍だけ、まあ……』
しばらく何かアゴは考えているらしかった。
『どうかい。家を持たんか』
『………』
青山は、よく意味がのみこめなかったが、急になんだか不安になって、どう答えていいやら分らなくなると手が少しふるえてきた。
『どうだ?』
『エ。そいつは。……今。その直ぐと云うわけには……』
しどろもどろで口ごもると首すじが、ぐーと熱くなってきた。
さっきから始終じっとアゴは青山の様子を見守っていたが黙って立ち上ると、オーバーの襟を立てた。
『よく考えてみたらいいだろう』
怒気のある声だ。青山は何か誤解されないように云い足そうとあせって顔を上げるとじっと見下しているアゴの視線とぶつかったのであわてて目をそらした。
その内にアゴは静かに裏から出て行った。一人になると急に寒けがした。へんに恥かしくなって、わけのわからぬ憂鬱に襲われボンヤリ坐っていた。やがてヌル湯を茶碗についで一口のむと、強いて気を取り直してフスマを開けた。
三人は黙って働いている。責任者は上衣をぬいで、ガリ版に向っているし、二人は謄写版に食付いている。青山は黙って北村の傍へ坐ると、かさ張ったビラを揃え初めた。
『なんと云ったかい?』
間を置いて北村が小声で尋ねた。
『……イヤ。なんでもないんだ』
青山はわざと平気をよそおったが、複雑な感情で頭が重かった。『北村がどう云ったか』それが聞きたくて仕様がなかったが、妙に気おくれがして切り出せなかった。庖丁を取ってゴシゴシ切り始めたが、さっきの事ばかり気になって仕事に身が入らない。知らぬ間に切り損なって曲ったり、下をめくってみるのを忘れて、四、五十枚も台なしにした。時々、流しで庖丁をといでは続けたが、その日はなんだか気が腐ってひどく疲れた。北村との間にもへんに溝

が出来て、余り口もきかなかった。九時前から、もうだれて、てんで仕事に手がつかない。なんでもいい。早く青山は寝てしまいたかった。

十一時すぎになって、北村と並んでフトンにもぐり込むと次第に気も休まってきた。さっきのことを切り出そうかどうしようかと思っていると、北村がこっちへ寝返りを打ってささやいた。

『オイ。君ア、どうするんか』

『……ウン』

『やるんかい』

『……ア』

『…………』

青山はフトンの中であいまいに、にごして思い切って尋ねた。

『君ア?』

『俺もサ』

『…………』

『俺ア、あすの朝、ここを出るよ』

『……え?』

余り意外だったので青山は、二の句がつげずに唾をのんだ。……淋しさが、こみ上げてきて恐しい程自分の卑怯を恥じた。たまらなくなって、フトンにもぐり込むと『あすはアゴに申し出よう』と繰返して決心した……

北村も亦、違った意味で、いくらか昂奮していた。親しい友人、親しい同志として、とに角ここまで一緒にやってきた青山と明日は別れなければならない。違う部署に着けば、或は殆ど会う機会もなくなるかもしれない。一緒に無新班をやった頃から、それから傍系ながらも党の仕事に少しずつ食付いてきた頃を思い出すと、青山と別れるのは淋しかった。併し、何よりも嬉しかったのは今迄仲間からちょいちょい悪く云われながらも、青山がグングン成長してきた事だ。あれやこれやと思うと、何時になく、頭がさえてきて容易に眠れなかった。

目がさめた時は、もう朝だ。北村は立たなければならないので仕度にとりかかった。青山も、親身になって世話をやいた。蟇口に三円ばかりあるので、余り持ち合せのない北村に半分わけた。二人は裏口で手を握り合って、山根の所をレンラク場所にきめて笑って別れた。

青山は、いつになく生々として愉快だった。『今日はアゴに申し出るんだ』と思うと、元気一杯で、ローラーを押した。二百、三百、六百……どんなぶきっちょでも一週間も、かん詰にされるといい技術家になる。青山も、もうインクをむらにしたり、原紙を早く、駄目にするような、へまはやらなかった。正確に手を動かしながらアゴに申し出るすべを考えた。率直に昨日の態度をあやまって改めて使って呉れるように、頼まうと思って待ち構えていたが、中々やって来ない。定刻より二時間もおくれてアゴが来た時は、昨日から、あれ程思い込んでいたくせに、いざとなると、なんだか気おくれがして切り出せない。責任者と話し

ている間、青山は妙にソワソワして、落ち付きを失った。『なんとか云って呉れればよいのに』とあせりながらも『出されたらどうしようか』と心配しだした。……併し、アゴは昨日の事などてんで忘れたかの様に青山には一べつも呉れなかった。ただ『戸籍調査のお巡がうろついているから気を付けろ』と皆に云い渡すとバットを二つ置いて行った。

アゴが居なくなると青山はホッとして肩荷を下ろした様に思ったが、しばらくたつと又憂鬱になって自分を責めた。

『北村に較べて、なんと俺ア駄目なんだろう』と、がっかりするかと思うと『糞、奴に負けるもんか』と力んでみた。『明日はきっと云うんだ』晩になると繰返して思いながらフトンにもぐり込んだ。北村が居なくなったのでいやに淋しかったが、明日の昼までここは切り上げる事になって居たから先のことを色々想像した。一週間も同じ部屋で単調な生活をすると、明日、又どこへ廻されても其の変化が楽しかった。久し振りで街も歩けるだろうし、何か、うまい物も食えるだろう。次の朝は皆、なんとなく浮き浮きしていた。仕事の量も二時間ですむ程だし、朝もゆっくり構えて、あるだけの米をたいて喰べた。九時頃仕事を初めたが原紙も昨夜切って置いたから楽だった。昨日注意された戸籍調査の巡査がくると困るから、青山は手を綺麗に洗ってビラを切った。アゴには折をみて云う方がよいと思って割合平気を構えた。

一時間もたった頃、表をたたく音がする。皆、ハッとして手を置いた。責任者に目顔でうながされて、青山はいそいで身繕いをしながら立ち上った。ドン、ドン、ドン、はげしく戸をたたく。青山は気味悪く思ったが『ハイ』とわざと大きく返事をしてカギをはずすと同時に、いきなり飛び込んできた奴に突き飛ばされて上り段に倒れかかった。続いて六、七人の奴が飛び込んでくる。青山はなにがなにやら分らない内に、ひどく背中をどやされて座敷へ引ずり込まれた。二人も顔色をかえてボウ然とつき立っている。やがてかんねんして三人は割合落ち付いて縛についた。

三

地下室のかん房はジメジメ冷えた。小窓のかけ目からつめたい風がしみ込んでくる。足の先きがチカチカ痛む。青山はオーバーのすそを引っぱって足先を包んで壁にゆっくり体を打ち付けた。絶えず、こうした動作を繰返していると幾分寒さもまぎれるし、又たとえようのない無聊も少しずつは薄らぐ様に思えた。ここへぶち込まれてから、もう三週間にもなるがてんで取調べる様子もない。途中で別れた二人はどこに居るだろうか。あの日の昼前にアゴがくることになっていたから奴もやられただろう。それから北村は今頃何をしているだろう……。

やられた時は、かなり疲れてはいたし、初めはがっかりして弁当にも手がつかず、晩になって毛布にくるまってからも横の目の悪い浮浪人が臭くて弱った。オーバーで間をしきって体がくっつかない様にしても、奴はゴロゴロ鼻をならして、へばり付いてくる。気持ちが悪くてろくに寝られなかった。併し、二日、三日と、たつ内に青山も次第になれてきて弁当も味が出るし、中の奴とも仲よくなって、看守の目をぬすんでは身の上話をきいたり、かんじんよりでワラジの作り方を習って、せっせと、はげんで相棒と出来ばえを自慢し合いながら『もう二時間……。あと一時間』と飯の時間を待った。日がたつにつれて甘いものが益々欲しくなる。……併し青山は絶えず取り調べの時の心構を怠らなかった。アゴはやられたにしろ北村だけは、どうしてもがん張らなければならんと思った。アナーキーでルンペンだった青山を、とに角ここまで引張ってきて呉れたのは北村だった。そのむっつり屋で親切だった彼を思うと北村だけは身を以て守ろうと決心した。

この地下室でも天候の工合だけは解る。今日はいい天気だとみえて部屋中がなんとなく明かるい。昼前には向う側のかん房には日がちょっぴり差し込む。すると中の奴は嬉んでシャツをぬいて虱をとる。それがこちらの奴は羨しくて仕様がない。――昼飯がすんで一時間もすると看守が交代だ。青山も皆と出されてがたがたふるえながら用をたすと深呼吸をやった。

『七番！』

どなられてゾウリを引きずって、いそいで戻ってみると呼び出しだ。高等の奴がニヤニヤして待っている。一寸、いやな気持ちだったが腹をすえて奴のアトをついて階段を幾つも登ると、がらんとして部屋だ。

『ヤア』

書類を鞄につつき込みながら一人の奴が親しそうに声をかけた。みると印刷所に飛び込んできた奴だ。

『大分へばったらしいなア。どうだい甘いものが欲しいだろう。……マア掛け給え』

ニコニコしていやに愛想がいい。青山も、つい釣り込まれてニヤニヤしながら買って呉れた大福をパク付いて煙草をふかした。

『今日は、一つ聴書をとるんだがネ』

鞄から用紙を取り出すと、奴も、ゆっくり煙草に火を付けた。

『もう何もかも分ってるんだから。……君たちがえらい奴と思ってる奴がペラペラなんだ。どうだ、此奴だろう』

つき出した写真はアゴだ。もう一人の奴はじっとこちらをみている。……青山は飲みかけた茶をソッと置いた。次第に、からみ込んでくる気配に押されて少しずつ口のあたりが、こわばってくる。アゴはやられたものとしてきめてかかっていたから『エ』と云ってうなずいた。

『ハハハハハ。さては、おどかされた方だな。まあお茶で

ものめよ』
青山はポカンとしていた。予期とは全てあてが違う。本庁の奴は、ゆっくり茶をのむと幾分調子を改めた。
『今日中に片を付けよう。……それで何時から知っとる?』
『なんですか』
『こ奴さ!』
がらりと変った態度だ。青山は黙っていた。答弁の筋を、まとめなければならないのだが、混乱して切り出しが付かない。
『どうだ?』
『エ』
『ハキ、ハキしろ!』
『……とっつかまる、その十日ばかり前です』
『どこで会った』
『……銀座』
『誰の紹介だ?』
『…………』
『ハキハキしろ! 野郎』
傍の奴が立って二三度頭を小突き廻す。
『どうだ!』
『え……知らない奴が呼び出しに……』
『馬鹿を云うな!』
鋭くおっかぶせて、にらみ付ける。

『この野郎。貴様の様な下っ葉が、かくし立てしても駄目なんだ』
『どうだ誰に紹介された』
『…………』
『野郎!』
向き直ってどなり付ける。青山は、何んだかわけが解らなかったがムラムラと反抗を覚えた。
『全く、知らない人が……』
『馬鹿野郎!』
グワーンと横びんたが飛ぶ。傍の奴も二つ三つ続けざまに食らわすと、二人がかりで両手をねじあげて、股を蹴り下ろす。青山は無我夢中で頭がぼーとしていたが、やがてギリギリ痛みを覚え出すと急にあわれっぽい声で何かしゃべった。
『品川だろう、前の家は?』
一人がすかさず突込むと、一人は青山を引き起しざまにビンタをくらわす。
『え、ソウです。……大崎です』
よろけながら、もう夢中でどもった。
『山本の紹介だろう?』
青山はグワーンとして、よく聞えなかったが、思わずギクリとした。『北村、北村』と思うとブルブルふるえてきたが、うなだれて、もう口をきく元気もなかった。
『つれて行け』

一人が命ずると、傍の奴が襟首をつかんで廊下へ引き出した。ヨロヨロよろける所をガーンとつきとばして引き立てる。

『この野郎、留置場でくたばれ！』

絶えず小突き廻されながら青山は階段を下りて、かん房にぶち込まれると、ふわりとして全て羽毛フトンにでもくるまる様な畝か味を覚えた。

――膝が痛んで動きがとれない。中の奴も気の毒そうにみている。別にキズはないが、坐る事も出来ない程痛む。足を投げ出すと看守がどなる。そっと横へ曲げて、股をもみながら青山はこみ上げてくる烈しい憤りを押える事が出来なかった。グレ、カッパライ、ラジオ、……そうした人達もおぼろげながらも共産党が大衆のものであることは知っている。妻子をかかえて職がなく、仕方なくアキスをやったおとなしいオヤジをとらえて、青山は昂奮しながらしゃべった。誰だって好きでカッパライをやる奴もいないだろうし、食うためにそうした手段にまで仕向けるのは、結局社会制度が悪いからだ、今の世では大衆をしゃぶってふくれるブルジョア……。

『誰だ！　しゃべる奴ア』

ビクッとして皆うつむいた。仁王立ちになった看守の奴は中の一人一人をにらみ付けている。青山はへんな敵がい心から投げ出した足をひっこめなかった。青山はへんな敵がい心から投げ出した足をひっこめなかった。それに看守はカッときた。

『貴様だろう！　生意気な。出てこい！』

真赤になってどなると、やにわに戸をあけて躍り込んだ。続けざまになぐりとばして引ずり出す。どんなにされても痛いという感情は、その瞬間青山にはない。熱にうかされたボーッとした気持ちだ。何かひどくどやされて、ガチャーンと戸のしまる音で初めて我にかえった。みると一番はしのかん房だ。ゴザもない、窓も明けっぱなしだ。体がヒリヒリして別に寒さも感じない。舌がねばって息苦しかったが頭は反対に妙にさえてくる。青山は全て別世界にきた様な気がした。人の気配もなく、遠く街のひびきがかすかに伝わってくる。丁度その時だった。青山はハッとして耳を傾けた。……国際共産党日本支部……日本共産党……そら耳だろうか？　思わず身をこわばらせて、むさぼり付く様にあとを待った。……×××××……それは意外にも上の方だった。ゆっくり句切りを付けた太い声だ。恐らく高等室の電話口だろう。事務的な太い声だがぼやけてよく聞えない。併し最後の字句だけははっきり分る。――その声をきくと青山は身振いをして思わず涙ぐんだ。それも敵の陣営のほんのちょっぴりした電話口だったが、しかもがこみ上げて、えたいの知れぬ力強さを覚えるのだった。工場に農村にあらゆる被圧迫階級の先頭に立つ党。嬉しさ外の嵐が明らかに解る。

ボッとして気がゆるむと急に寒さが身にこたえてきた。体中が痛い。尻がしびれて足の先をいくらこすり廻わして

も感じない。青山はふるえながらしゃがんでいた。もう何も考える元気もない。――晩になって人のよい看守の番になると丁度寝る時間だったので『要領よくやるものだ』ニヤニヤしながら元へかえして呉れた。毛布にくるまると耳が鳴る。腰のまわりが硬ばって寝がえりをしよう、しようと、あせりながら、もうトロトロしている。……すさまじい行進だ。青山は群集にもまれながら妙に体が浮いてくる。蒸、蒸、と前の奴の腕にしがみ付く。ドロドロした一面の灰だ。スルスルすべる、ハッと思う間に手がすべる。のしかかってくる。……ウーン。自分の声でハッと気が付いた。……傍の奴は軽くいびきをかいている。……コツコツ頭の上で靴音がする。

湿気が付いてみると、足先の凍傷がくずれて膿が出ている。

看守に訴えても取り合いもしない。中の奴に相談すると大丈夫だろうと云うが、どうも気になって仕方がない。一日毎にキズが拡がってくる。ちり紙を巻き付けて、日に二三度かえてみても悪くなる一方だ。『腐るかもしれない』と思うと青山は段々気がめいってくる、それに二十九日がすぎても蒸返しで調べる様子もない。へんに恐怖を覚え出すと『留置場でくたばれ』と云った言葉が頭にこびり付いてくる。

北村の奴が、わかっているのだろうか？』『そんな筈がない』と打ち消しながらも、どうも本庁の奴は『北村』と云ったような気がする。『なんて意久地がないんだろう』強いて自身を引きたててみても知らず知らずの内に『どうかして生きたい』『なんとかして俺だけはのがれたい』という物狂わしい本能だけになる。時々、自己批判をやると恐ろしく情けなくなるので気を取り直して中の奴と冗談云い合ったり、ワラジを作り始めてはみるが、直ぐあいてくる。青山は複雑な感情で次第に弱り果てて毎朝の体操も何時の間にやら止めてしまってぼんやり壁によりかかっている日が多くなった。

それから一週間もすぎて呼び出された時はホッとして嬉しかった。いそいでゾウリをつっかけながら、入口の戸にもたれている本庁の奴に思わずペコリと頭を下げた。奴は知らぬ顔でソッポを向いている、へんに間が抜けると青山は急に恥じて赤くなった。調べ室に導かれてみるとどうもうな奴が煙草をふかしている、もう恐怖もない、ぼんやり立っていると引っ張ってきた奴が『まあ掛けろ』と云ってニヤニヤする。

『大分、やられたなア。どうだい何もかも分っているのだから今日は聴書をやっちまおうぜ』

『え……どうでしょうか、何か甘いものを買って貰えませんか』

青山がおずおずして頼むと『ウン』と云って『すみませんが一つ買ってきてやって下さい』と、赤黒い奴に頼んで

呉れた。そ奴が出て行くと『まあ一プクやれ』と云って煙草をよせて呉れて仕度にとりかかる。青山はもうボーッとしていた。何時の間にやら北村は分っているのだろうと思ってしまうと重荷もとれた様な気持ちでお茶を飲みながら久し振りの街の景色を珍らしげに眺めていた。小学校が、屋根が、窓がカッとうき出されてギラギラ光る。

——やがて青山をうながすと本庁の奴はがらりと態度をかえて尋問を始める。傍の奴は新聞ばさみの棒を持ってきて、顎をもたせてじっとみている。たえられない気持ちだ。粘っこい息苦しさで後頭がずきずきする、何んでもよい早く楽になりたい。青山はしゃべっていることが自分のことやら人のことやら分らない程ぼやけていた。大体、一二年前からやってきた事が終ると刑事はペンを置いて一いきついた。

『……そうか、それからが今度の事件だなア。グズグズやっとると結句は党に食付くもんさ』

と云いながら一プクやった。……全で、このヒョッコ野郎がと云わないばかりに。

『続けてやろう……初めは大崎だったナ。大崎のどこだったかなア？』

『アレハ、××の所です』

『ウン、そうか。……待てよ、その前に君は此奴に会っている筈だナ？』

アゴの写真を出す。何もかも知ってる癖に知らん顔をよそうのが青山には気味が悪かった。

『え、北村の紹介で……』

『北村？』

『……』

『ペンネームか？　山本は』

『イヤ……』

と云ったが、青山には其の問いがふに落ちない『山本……北村』なんのことやら分らなかったが思わずマゴマゴした。

『ハア、北村の紹介か……以前、無新の男だな』

青山はぽかんとしていたが、ようやくその意味が解ると体中の血が一時に逆上する様な衝動を覚えた。頭がグワーンとしてへんなものが目の前をちらつく。足がブルブルふるえる。

刑事はそ知らぬ顔で調べを続けたが青山の答弁は、しどろもどろになり勝ちだった。刑事はどなり付ける。傍の奴は、

『野郎、これでぶんなぐるぞ』と云って棒を振り上げる。青山は夢中で大崎の印刷のメンバーをしゃべったが次第に常態に戻るにつれて北村が気になる。『奴は、分っていなかったんだ』と思うと、どうしていいやら分らない。

『野郎、名を知らんのか？　嘘つきゃがると』

『え、名なんか知らんです』

『知らねばそれでいいんだ。この野郎！　どんな奴だ？』

『……ソノ、青黒い痩せた男です』
『それからどうした？』
『私は、二日目にあの家の方へ廻されたので、全く知りません』
嘘でもないらしいと思って本庁の奴は次の家の事をきき始めたが、あとの二人もやられているので別に引っかかる所もなく進んだ。終り頃になってキッと鋭くにらんだ。
『どうしたんだ。北村は？』
『………』
『この野郎！　まだ！』
『イエ、ナニモ、ソノ』
青山はあわれっぽい声を出してあわてた。
『ハキハキしたらどうだい』
『え、……五日目の晩に帰ったんです』
『どうしてだい？』
『体が、その悪いの……』
『馬鹿野郎！』
『肺病です。奴は』
青山は必死だった。
傍の奴にガーンと背中をやられたが、へんに糞度胸が坐って不思議な程落ち付いて答えた。
『熱を出していたんです、前にも、血をはいた事もあるんです……それで五日目にはもう動けなくなったので了解を得て帰ったのです』

刑事はじっと青山の顔をにらみ付けていたが、もうそれ以上突込んでこなかった。
晩までかかって、やっと聴書がすんだ。最後に以後絶対に運動に関係しないと誓ってツメ印を押すと『サアすんだ』。刑事は上きげんで『いずれ君なんか執行猶予もんだよ』と云ってニコニコした。
はりつめた気が一度に抜けてふらふらだったが、青山はなんだか暗いトンネルから、ようやく明るみへ出てきた様な嬉しさを覚えると思わずホーッと太息をついた。どんぶりを食って、買って貰った膏薬を珍らしそうにいじくりながら、かん房に帰った時はもう皆寝ていた。
翌日から青山の生活は、すっかり楽になった。体は軽くなり、胸も空っぽだ。何かせいせいした身軽さを覚える。……かん房生活になれ切ったせいもあったが調べのすんだことが何より安心だった。あとはどうでもよい。ただ凍傷の治療が一日の仕事だった。膏薬をぬり、紙をとり換え、二、三時間もたつとはいでみる。効能書を大切にポケットにしまって幾度も繰返して読む。字だ、活字だ……。ガラガラ、ガラ戸があく度に鉄格子へにじり寄ってのぞく。狂人、ラジオ、酔パライ……。そうした新入りだけがちょっぴり目を楽しします風景だ。昼も夜もこの地下室は薄暗い。
壁。壁。鉄格子。ただ『食いたい』『甘いものが欲しい』『ウンと腹一杯』窓の針金をねぢ切って爪のアカをほじくりながら中の奴らは食物の話ばかりだ。婦女誘拐のあやしげな

奴が這入ってくると根掘り葉掘り色々な情景を尋ねてニヤニヤ笑う。弁当の時はソッと外の奴と量を見較べたり、人のよい看守の番にしつこく云いよって、たまに大福が手に入ると中の奴と分けて楽んで少しずつ食う。――獣だ。

青山はげっそり痩せ、髭鬚はのびながらも未だ外見だけはインテリらしい気品を失わなかったが、併し彼はただ本能をむさぼる動物だ。

――この生活。思慮も節操もぼやけ果てたこの生活にも青山は思わずハッと起き上るのだった。『北村は分っていなかったんだ』『俺ア意久地がないなあ。え？』忘れよう後の祭りだ、と思えば思う程ぐんぐんせり上ってくるへんな気持ちは体で押えられない。立っても坐っても居られなくなると青山は目を引き釣って一畳のゴザを行ったり、来たりするのだった。『とに角、市ガ谷に行くんだ』『俺ア革命家だ』。指紋をとられたり筆跡をとられたりすると、青山は一寸の事で昂奮して、しばらくは黙りこんで中の奴ともそれてしまってツンとして坐っているが二日目にはもうぐったりする。なんでもいい早く未決へ廻りたい、そこには本もあれば菓子も食えるだろう……。

呼び出しだ。検事だ。とうとう来やがった。青山はよろめく足をふみしめて身繕いしながら応接室に這入った、みるとしなびた小男だ。簡単な調べがすむと煙草に火をつけながら『今度はまあ出してやるから』と云った。

釈放？ ほんとだろうか？ それは、思いも染めないことだ。かん房に戻っても、どうも信じられない。ワナ？ 馬鹿野郎！ 疑い深いなア俺アと思いながらも、どこからとなくわき出る嬉しさは、たとえようもない、甘ったるい物狂しさだ。青山はもう、やたらに爪をかじりながら、ジワリと口のあたりに浮んでくる笑いが自分でわかる。

――雨が降る。一雨毎に暖くなる。春だ。ヒガンだ。もう桜だ。街の音も妙になやましい。ジャケツをぬいでみてもなんだか重苦しい、頭はくしゃくしゃする。出られるとなるともう一日も一時間も、いや一分でさえ青山にはこの生活がたえられないものとなった。坐るかと思うと直ぐ立ち上って、又グルグル歩き廻る。北村の事も、仕事のことも遠い過去にぼやけてしまって、思い出すことさえ気だるげになってしまったが、晩になると、へんな夢をみた。それは大抵田舎の事だ。老いたオフクロがいる、親父が出てくる。……リウマチのオフクロが土砂降りの中で行倒れになってうめいている。寝汗でぐっしょりになると、やり場のない程青山は淋しい。朝になってもやはり気になった。青山は洗面場で頭に水をかけて、やっと気をとりかえすことが出来たが、それでも未だこの事件が田舎に知れたら、どんなに思うだろうと心配するのだった。変なことだ。ここへ這入ってから長い間そんな事は殆ど考えもしなかったのに……。

併し青山は近い内に自由になれる、その事が何より明るい希望だった。急に元気ずくと看守には横柄になるし、中

の奴とは日に日に遠ざかって行く。五十日位だったら家の方もなんとか口実を付けられるだろうし、クヨクヨしたって仕様もない。久し振りの街、女、食物、……青山はとりとめもない空想が一番楽しみだった。陽気の加減か近頃は酔ぱらいの新入りが増えた、昨夜も一晩中わめきまわされて、今朝は寝不足で目が痛い、凍傷はよくなったが体がふらついて便所へ行く時でさえ壁にぶっつかる。

『中々おそいなア』

顔なじみの看守がのぞき込む。『何云ってやがるんだい、この野郎』体中の憤懣がさ細の事でカッと燃える。豚箱扱いにされたことや、蹴飛ばされたのが、今になって烈しい憤りになる、そればかりか哀れっぽい声で大福を頼んだのが癪で仕様がない。今日もいい天気だ。昼前になると向う側の奴は御天道様にあたって虱をとる、青山もシャツをぬいで虱をとり始めた、いくらつぶしても直ぐたかる。

『七番！　出るんだぞ』

高等の奴が這入ってくると大きな声でどなる。青山は飛び立つ程嬉しかったがわざと、とぼけた面をして、返事もしない。

『オイ、早くしろ、早くしろ』

せき立てられて、ゆっくり上着をきて、しわくちゃになった帽子を直しながらいそいで歩みかけたが頭ばかり前へのめって腰がふら付く、直ぐ出すのかと思っていたのに高等の奴は階段を上る、青山もそわそわしながらついて行く。検事に会った室だ。奴が先に立ってドアーを開けた。何げなくひょいとみると思わずよろめいてあとずさりした。……伯父がいる、憔悴した親父の顔。

四

青山の家は東京から四、五時間も離れた片田舎だった。息子のことが村中にパッと拡がると、親父は哀れな程しょげ切って村会議員もやめて、もう村中に顔向けも出来ない様に思った。青山を連れて帰った当分は、息子を無事に取り戻したのが嬉しくてすっかり安心したのか久し振りでホテイなどを引張り出して、ひなたぼっこをしながら磨きをかけるのだった。始終間にはさまってオロオロしていたオフクロもその態をみて、やっと胸をなで下ろした。

『のウ、お前年寄りに、これえな心痛をかけて呉れるなよ』

折をみてオフクロは顔色を伺いながら皆がどんなに心配したかをグチっぽく話すのだった。知れてからと云うものは、親父はもうロクに飯も喉に通らない程弱ってしまって、直ぐ役場へ辞表を出すとぼんやり気抜けがしたようになって仕事にも手がつかず、麦の見廻りさえやめてしまって一寸のことでかん癪を起すかと思うと、晩に床へ這入って、しばらくすると何を思ってかオイオイ子供のように声を上げて泣き出す。

『金で、そりゃあ生地獄でよ……お前』
オフクロは思い出しては終いには涙ぐむので、青山も弱ってそっと場をはずして裏口に廻った。そこには近頃出来たらしい牛小屋がある。肥えた牛がいる。朝鮮人がせっせとカイバを切っている。帰えるたびに目にみえて家の暮しがさびれて行く。父も母も野ら仕事がはげしくなったとみえて手足が荒れている。『すまないなア』と思うとなんだか目頭が熱くなってくる……。

青山の家は百俵ばかりの小地主だったが、親父は二人の息子をなんとかして立派に学問させようと思って、僅かの田畠を小くずしに売りながら、兄は写真学校に、学問好きの青山は大学に入れて、息子等の生長を何よりの頼みにしていた。兄貴の方は三年ばかり前卒業するとシンガポールで羽振りのよい叔父をたよって、今では店も割合よく青山の月費位の仕送りが出来る程だった。

米の値も次第に下ってくるし、上り米だけでは中々世帯が苦しいから近頃では小作田を段々返して貰って渡り歩きの朝鮮人を雇って親父も朝から田畑へ出た。オフクロも一日中タビハダシでいそがしく切り廻した。自作をやると、幾分実入りも違うが、今年の様に農作物がガタ落ちでは、とてもやって行けそうにない。親父は何より青山の卒業をあてにしていた。学士になれば、不景気とは云いながら、とに角一本立になれるだろうし、又立派な肩書があれば、楽な養子口も見付かるだろう。そうすれば月費もこちらへ廻せるし、ホッと一段楽つけるわけだった。それまでは石にかじり付いても、やって行かねばならぬと思って、好きな晩しゃくもひかえ目にして、汗水たらしてここまでやってきたのに、息子はこの始末だ。親父の落胆も無理もなかった。初めの内は息子の痩せた顔をみると可愛そうになって思う事も押えて口に出さなかったが、日がたつにつれてどうしても腹の虫がおさまらない。何かきっかけが出来ると、急に爆発した。オフクロはただオロオロして手をもんでいる。青山は返事も出来ずにうつむいている。

『親の面よごしが……お前のような奴は子とも思わんから出て行け』

終いには、いつもそう云って、手ぐわをさげて、頬かぶりをしながら畑へ出て行く。

親父がひどく怒ると、オフクロはあとで息子の味方になった。『……近頃は、あれいにガンコじゃからのウ。お前も気にかけるなよ、お父さんの身になりゃア無理にも思えんのじゃから……』と、なぐさめてへそくり金を出しては『湯にでもつかってお出で』と云った。

家を出て少し歩むと、温泉行きのバスが通っている。滑らかな小川に沿うた森林。水の音。若葉は軟かくなびいて、木立ちのどこかで鶯が鳴いている。近頃は、客足もめっきり減ったとみえて、大きな湯槽に人影もない。青山は長々とのびると、やっと、家の重苦しい空気から、救われるように思うのだった。青山にとっては、自分の家にが

まんがし切れなかった。親父との間がうまく行かないばかりではない。その単調な、生気のない、よどんだ生活がとてもたえられなかった。

暗い部屋。虫ばんだ柱。すすけた神棚がある。晩になるとオフクロは灯明を上げて、長い間、何か唱えている。春繭の値が未だ頭にこびり付いているらしい。夜の目もやすまず丹精をこめたものが、桑代にもならない程の相場だ。近頃のオフクロは気苦労にやつれて、ひどくグチっぽくなっている。それに去年から交渉しているのだが、川下の新田をどうしても小作人が返して呉れない。親父は農民組合が煙たかった。近頃は、隣り村に支部が出来て、何につけ後押しをする。公金を使い込んだ信用組合をやっ付けたのには同感だったが、いざ自分の田地となると、後押しをするらしい支部を目の敵に思った。近来の有様では先は、真暗だし、頼みにしていた息子も、こんな始末ではロクに役に立ちそうにも思えない。今になって、一体、何のために学問させたのか分らなくなった。――親と子とは、到底、了解し合うことも出来ない程、生活が、かけ離れている。

青山にしてみれば、自分の生活をてんで理解しようとも思わないばかりか、強制的に、息子の生活を押えつけてまで、何か役に立たせようとする親父を、あわれに思いながらも、『結局親の愛などは、利己的なものだ』と思うのだった。

体もよくなるし、とに角、一日も早く上京したかったが、親父に切り出す元気もなく、それとなく、オフクロをつつきながら古本などを引っ張り出して、毎日、離れでごろごろして暮した。

近頃の不景気はひどかった。陰惨な話ばかりだ。東京から歩いて帰る失業者がある、出稼ぎの働き口もないし、税金は高い。息子が死んであとの借金を苦にして首をつったオフクロがある。安い米を売って、利子のついた肥料代にしなければならない。作った米も食えずに麦の粥腹で激しい労働だ。夜逃する家、強制執行。銀行地主。日本の全農村を、今未曽有の大嵐が、吹きすさんでいる。折々『北村はどうしているだろうか?』と思うと、色々な情勢が、聞きたくてたまらない――。

親父は、もう学校をよさして兄の所へでも、やる方がよいと思った。都へ出すと、又無分別なことをやるかも知れないから、今の内に、方針を変える方が身のためだと思いながらも、あと一年で卒業だから惜しくもある。一方、オフクロは女だけに『あの子に限って二度と大それたことはしないだろう』『悪い友達に引ずられたのだろう』と思うと、折角、今まで辛抱してきたのに、もう一年と云う所で、やめさすのは可愛そうだし、そんなことになれば、親類筋へも、顔出しが出来ない様になるだろうと心配して、折をみては『お父さんのキゲンをお取りよ』と蔭に廻ってやきもきしながら息子に頼んだ。親父が畑に出ている時は『このクワを持って行って御上げ』と云い付けたり、お茶時

には一足先に戻って『これを持って行ってお上げ』と、云ってドビンを渡すのだった。青山も仕方なく畔道を伝って畑に行った。畔に腰を下ろしていた親父は、嬉しげに受け取って一杯のむと煙草入れをさぐり出した。肥料臭い歃かな風、麦も青々とのびて、雲雀がどこかで囀っている。野良に出てみれば晴やかな気持だ。青山も気軽くなって、刈り倒してある草を束ねて、籠に入れて未だ半分も刈り取ってないのでカマを取って刈り始めた。

『まあお前、それんことせんでもええ』

後からやさしく声かけた。

『体は、どうじゃ。部屋にばかりこもらずにもっと、湯につかる方がええぞ』

二人きりになると、何時もやさしい父親だった。

そうした親父をみると青山もなんだか涙ぐんでくる。籠の草を押え付けながら、ソッとみると、親父はキセルをくわえたまま、ボンヤリ何か見つめている……。

だが、家の中では親父とは余り口をきかなかった。折々、警察から調べにくる、そんな日には、親父は苦り切っている。オフクロは、二人の様子を見較べては、一人で心を痛めている。白らけ切った、陰気な生活だ。親父も時々たまらなくなると、さ細の事で怒り出す、それが直ぐグチに変る。

青山がムキになって云いわけをすると、

『学校もやめてシンガポールへ行け』『旅費だけはやる、あとはお前の勝手にせい』と云ってどなる。

青山はカッとして、黙ったまま家を飛び出る。一本道の国道を、十町も歩むと峠だ。『糞』『畜生』やけ糞だ。頭はクシャクシャして『もうどうにでもなれ』という気になる。『いい機会だ、飛び出してしまえ』と思うと、北村の顔がふわりと浮いてくる。……峠を登りきると、広々とした平野がみえる。夕霞にぼやけた遠い田畠。吹き上げてくる風は未だ肌寒かった。青山は、そこまでくると妙に淋しくなって、道傍にしゃがみ込んでしまった。しばらくぼんやりしていると、いきり立った感情も何時の間にやら消えてしまって、ただ、やる瀬ない淋しさが身にしみてくる。どこか、遠くで汽笛の音が聞える。それを聞くと幼い時の事が、ふと胸に浮んできた。ガキ大将だった兄がよくここへ青山を連れてきては『お化けだ』と、おどかしては逃げたものだ。青山はワンワン泣いて兄にしがみ付いたが、家に帰るまでは、いくら兄になだめられても、何か追っかけてくるように思って、オドオドしながら兄の手首を握って離さなかったものだ。……パッと、明るくなったので驚いて立ち上った。温泉通いのバスだ、だが、あたりはもう薄暗い。何時の間にこんなに暗くなったのだろう。青山は気を取り直すと、自分がへんに小供臭くみえて淋しく笑った。ブラブラ懐手をしながらうなだれて引きかえし初めた。だが、こんな生活程、みじめなものはない。どうかして切り抜けないと、もう腐ってしまうだろう。家のことを

思うと、底のないヌカルミだ。よし、山根に手紙を書こう。北村にレンラクの付き次第、思い切って飛び込んで行こう。青山は決心をすると、急に元気付いて、いそいで歩き出した。

　峠を下ると小川が流れている。家の灯火が間近にみえる。小供の時は、あの灯火をみると、どんなに安心したことか、兄と一緒で魚を取ったことや、兵隊ごっこをやったのを思い出すと、いつも優しいオフクロが妙になつかしく思える。青山が出たらオフクロはどんなに悲むだろう。

『今になって、へんなものだなァ』と、思いながら裏口から、こっそり部屋に戻って、山根に宛てた手紙を書き始めたが、妙に気がくじけて、一行書いたばかりであとが続かない。ぼんやり考え込んでいる内に、こんなものは必ず途中で開封されるだろうと思って、やめてしまうのだった。

　――二月ばかりも過ぎて、もう、そろそろ田植時が近付いてくる。苗代の世話やら、蒸し肥えのことやらで、いそがしくなってくる。青山も苗代に水をあてたり、蛾を取ったりした。帰った当分は家の手伝いをする気もなかったが、お互に不平を持ちながらも、やはり肉親だ。家の暮しをみていると青山は手助をせずには、居られなかった。その内に、親父の気も和らいできて、もう一年、やってみようかと思う様になった。それにしても一向、青山に悔い改める気配がないのが気にかかった。

『もう、やりませんと俺に一ペンも云わんじゃないか』と云って、オフクロを責めた。

　オフクロは、其の意向を、蔭で伝えて『お前の損じあろうぜ』と息子をうながした。

　学校の方は別に処分にもならないらしい。七月の初めにある追加試験の通知を、友達が送って呉れたのを口実にして、親父の機嫌のよい折を見て申し出ると、割合、心よく許して呉れた。

　それから家を出るまでは、オフクロは、しつこく付きまとって、

『お前も、二度とあれんことはあるまいのウ』

と、絶えず口癖の様に云ったが、息子の返事が口先ばかりに思われて気がかりだった。

『……もし、あれんことでもあるんなら、わし等を、先に殺してお呉れ』

　すぐ、涙声になるので青山も弱って『大丈夫だよ』と、云ってなぐさめたが、近頃、めっきり白髪のふえたオフクロをみると、兄貴の生活が羨しくなってくる……。

　いよいよ立つ日には、二人で、バスの停留場まで送ってきて、オフクロは道々『体を大切におし』とか『暑くなるから食べ物に気をおつけ』とか、幾度も繰返して云った。バスに乗込むと、窓ぎわに、あわててのぞいて、

『すぐ、ユカタ縫うて送るからのウ』

　と云って涙ぐんだ。

青山は妙に淋しくなった。トランクを膝にのせてぼやん

りしている。バスは田舎道を、ゆれながら進んだ。荷車に会うとけたたましい警笛を吹き鳴らした。

五

上京した当分は、どうしていいのやら分らなかった。久し振りで新刊書が珍らしかったので、青山は下宿で、ゴロゴロしながら、あてもなく読み散した。

汽車の中では、着いたら直ぐ北村に、どうかして会いたいとは思ったが、下宿に落ち付いてみれば、なんだか気おくれがして、家の事を考えると、卒業だけはして置かなければ、すまないと思ったが、もう、学校も続ける気もしない。下宿で、くすんでいると、だれてきて、心細くなってくる。とに角、一度、北村に会ってみようと思って、山根の所へ行ってみたが『一月ばかり前、一寸来たが、それ切り顔をみせない』と云う。外の心当りを、それとなく探ってみても、さっぱり分らない。がっかりして帰ったが、会えないとなると、妙なもので、益々会ってみたくなる。青山は、又、山根を尋ねて奴に会えたら渡して呉れる様に頼んで、アドレスを置いてきたが、なんだか、北村に会うのが、恐しい様にも思った。

――丁度其の頃の或る日、北村は、場末の汁こ屋でゆっくり煙草をふかしながら、レポに使った男を待っていた。約束の時間が十五分過ぎたのにやってこない。変だな、とは思ったが、二、三丁先きの次の場所へ行ってみることにした、まだ十分位間があったので、途中の古本屋へよって、きっかり行ってみたが、奴はきていない。いよいよ可笑しいと思うとへんな悪寒が背筋をのぼってくる。レポがやられたとすれば、堀田の家がバレたと思わなければならない。この春から打ち続く嵐の中ではこんな場合は度び度びだったが、併し北村は、いくらかあわてた、十五分程も待ってみたが、やはり来ない。いそいで飛び出すと、直ぐ、タクシーに乗った。何よりも早く今の下宿を引越さなければならない。非合法な生活になってから北村は同じ下宿に二カ月とは居らなかった。今の下宿もつい二、三日前に越したばかりだったが、堀田にはアドレスが知らせてあった。下宿に帰ると直ぐ荷物をまとめて、一応安全な場所へあずけて、晩には又森と会わなければならない。堀田がやられたとすれば被害の範囲をよく調べなければならなかった。それに会合にも顔を出さなければならないし、四、五日は非常にいそがしかったが、幸いにも、堀田の方は外に余り被害もないらしかった。そうすれば、レンラクの関係上、一日も早く住所を定めなければならない、いくらか纒った金が必要だったので山根をあてにして訪ずれた時初めて、青山のきたことを知ったのだった。

北村は、青山がやられたのも、その内出されたのも、どこから聞くともなく知って居たが、其の後の消息は、さっぱり分らなかった。『どうしたのだろうか？』と、気にな

ってはいたが、或は違う線にでも食付いているのかもしれないと思っていたのに、山根の話の様子だと、田舎で、ぼやぼやした揚句、こちらへきても、何も初めて居らないらしい。『少し、だらしがないなァ』とは思ったが、やはり親しい友達だけに、会ってみたかった。

その内に、北村はある裏町のハンコ屋の二階を借りた。市電にも近いし、家の人も親切だったので当分ここに居ることに決めた。梅雨に入ってからもカラ天気が続いていたが、この二、三日は又続けざまに降る、靴がビショビショになって気持ちが悪い。堀田がレンラクだけ付けて置いた、〇〇工場の男に、外から手を廻して、やっと会う事は出来たが、どうも要領を得ない。一週間先きで又会うことにして、その家を出た。霧の様な雨が降っていた。ここから麻布の青山の下宿まで三十分程もかからなかったので、少し疲れては居たが、なつかしく思って青山を訪れた。

久し振りで会うと何から話していいやら分らないものだ。余り突然だったから、青山も『ヤア』と云ったきり、切り出しが付かない。なんだかへんだったが無精に嬉しかった。

『久し振りだなァ』

『ア』

北村もニコニコしている。友人の話やら、青山も今迄の生活をちょいちょいつまんでは話したが、頼んだドンブリがくると、一寸話がとぎれた。

『元気でやってるのか』

『ウン』

ドンブリをやりながら相変らず北村は、小鼻に汗を出している。半年振りの北村は別に変ってもいない。併し青山は、なんだかへんな圧迫を覚えるのだった。初めは、そうも思わなかったが、しばらく向い合ってる内に妙に、話がそぐわなくなってくる。『何か、持ち出してくるかもしれない』と、思うと、青山は強いて、愉快な話を持ち出して、あたらずさわらずで、賑かにごまかそうとしたが、却って、座が白らけてくる。

北村は、しばらく黙っていたが、少し、あらたまって切り出した。

『どうだネ、これからどうする積りなんだ?』

『そうだねえ』

青山はそれを恐れていたのだ。

『……どうする積りって君、別にかわりはないよ』と、云ったが、思わずドキドキした、胃のあたりが、こわばってきて今迄にないへんな気持ちだった。

『……』

北村は、しばらく考えている。青山は、ドンブリを中途でやめて、お茶を続けざまに飲んだ。

『……なんなら世話してもいいんだが』

『……』

『直ぐ、ツケてもいいかい』

『ウン。……だけど君、俺ア今の所、そのなんだよ……』
青山はやたらにどもった。『やる気はない』とは、どうしても云えなかったが、グーッと、つまってくると、真赤になって脂汗がにじんでくる。
そのザマをみると、却って北村の方があわてた。『もうヘタばりゃがった』と思うと、カッとして、どなり付けかけたがそのままゴロリと横になって、新聞をひろげた。なんだか青山の顔をみるのが、たえられなかったのだ。
——急にバツが悪くなって、二人は黙ってしまった。青山は何か場を和らげようと、あせったがトッ着く方法もない。しばらく、気苦しく二人共黙っていたが、やがて北村は、何か思い出した様に起き上ると、
『俺ア失敬するよ』と云った。
『まあ、いいじゃあないか。まだ八時だよ』
『一寸、よりたい所もあるんでネ』
そっけない声だ。
『……だけど、折角、君……』
『ア。又、その内ゆっくり寄せて貰うよ』
『……』
このまま北村をかえすのは、どうしても気がすまない。だからと云って……
『ねエ、君……』
何を思ってか、急に青山は真面目腐って、向き直った。
『もう一度、近い内に会って貰えないかネ、よく相談して貰いたいと思ってるんだよ。そりゃあネ、君の暇の時で、いいんだけど』
『ア』
『……何時頃、きて貰えるか』
『そうだネ、そいつは今、はっきり云えないよ』
北村が別に感情を害しているようにもみえなかったが、青山は、へんに気を廻して、気持ちが悪るかった。階段を下りしなに小声で『金はあるか』ときいてみたが、北村は『ア』と云って、うなずいたばかりだ。玄関まで送って出て『一週間したら会えるかしら』と、もう一度、念を押すと、北村はキゲンよくうなずいたので、青山はいくらかほっとしたのだった。
小雨がやんで、風が少し立っていた。北村はブラリブラリ近くの電車道の方へ歩いた。
久し振りで会った青山は、もうへたばっていやがる。それが信頼していた古い友達だけに淋しかった。併し、あれ程なつかしく思って、尋ねたのに、一寸したいきさつで、一時間もたたないで出てきた自分が可笑しかった。そう思えば、この冬の大検挙に、どの程度に、バレているかを知りたいと思ってたのに、それも忘れてきた。雨上りの宵は、気持ちがよい。並木の緑もスガスガしかった。北村は時々、低く口笛を吹きながら、停留場まで歩み続けた。
……北村には、青山の動揺する気持ちがよく分ってはいた。誰だって、殊にインテリは初めは幾分動揺しながら食

付いて行くものだ。
——北村を送り出してから、青山は部屋に戻って、ぼんやり考え込んでいた。食いちらかしたドンブリを片付ける気もない、押し付けられるような淋しさだ。北村にみせた、取りみだした態度、それが如何にも腹立たしかった。併しながら今直ぐとなると、青山にはこれ以上積極的に飛び込むのが恐しかった。北村の奴に卑怯者と笑われるだろう。そう思えば進むことも、しりぞくことも、出来そうにない今の立場が苦しかった。あれやこれや思うと恐ろしく絶望的になって、部屋でジッとしていることさえ出来ない、たまらなくなって下宿を飛び出すと、あてもなく歩き出した。雨上りの晩は人出が多い、ど奴の面をみても気に食わない。曲り角のバーまでくると、青山はヌウと這りこんだ。騒々しいジャズの音、カビ臭いにおいがプーンとやってくる、天井の小蠅をながめながら、一杯のウイスキーが廻ってくると、次第に気もとけて、こんなことでくよくよしているのが恥ずかしくなってくる。
降り止むかとみえた天気も翌日から又シトシトやり出した。風も落ちて、蒸し暑い日が続いた。四、五日もすれば北村が又くるだろう、どうすればよいのやら、青山には分らなかった。『家の事情を話して、しばらく、このままで置いて貰おうか』と思ったが、老いた一人のオフクロをおいて、敢然と戦っている北村に、そんなことが云えたものではない。『正しく生きるためには、やって行くより外にないのだ』とは思いながら、決心は付かない。北村がどう云ってくるか、が気掛りだった。結局、自分が可愛いからだ。
昼は未だよかったが、寝苦しい晩が青山には苦しかった。この四、五日の間に、すっかり神経衰弱になってしまった。絶えずイライラして、とりとめもないもう想ばかり浮んでくる。
長く続いた雨がやむと、からりと晴れて暑かった。試験は明日からだったが、受ける気がなかった。今日あたりは北村が来そうに思えたので、朝から妙にソワ付く、北村に会った所で、気まずい思いをするばかりだと思うと、いっそ、留守を食わせて会わない方がよいと思った。一日中活動でも見て晩おそく帰る積りで、久し振りで湯に行った。だが湯から帰ってみると、誰か部屋にきている、北村だ。青山はどぎまぎして、あわてたが、却って『ヤア』と云って、景気のいい声をあげた。
『イヤニ暑いじゃあないか』
汗ばんだ顔をぬぐいながら、北村はキゲンがよかった。
『予感がしたよ、今日はきそうな天気だと思ったなア』
『ヘエー、そうかア』
青山が、すっかり元気になっているので、北村も嬉しかった。この一週間、あれ程思いなやんだくせに、一風呂あびてきた青山は、まるで見違える程元気がよかった。
『俺も又、一つやるかなア』と云った、タオルで鉢巻をし

めながら、あぐらをかいた。
『ア』
北村も、その様子をみて、目を細めて笑った。
『俺でも間に合う様な奴があるかネ』
勢いにのって思わず口をすべらせたが、其瞬間ヒヤリとした。
『そうだナ』
煙草に火をつけると、北村は二、三度ゆっくりふかした。堀田のつけたばかりの○○工場の奴は、中々、直ぐ動きそうにもみえなかった。上とのレンラクも一月ばかり前、切れたきりで未だついていないし、とに角、北村は、誰かを傍へ食付けて、そ奴にプリントをやらせて、当分やってみようと思っていた。
『……どうだい分会を手伝ってみんか？』
『分会？』
それがどの程度のものやら青山には分らなかった。精しくきいてから引込むことも出来ないので、一寸どじり気持だった。
『そりゃあ、やるさ。……だけど俺ァ学校の方を出られるなら出て置きたいのだが、ソイツ差支えないかしら？』
『ア、いいだろう』
『それがねエ……』と云って、青山は嬉しげに笑った。
『家の奴がうるさいんでネ、いずれ、なんとかなるだろうそれ迄は余り荒立てない方がよいと思ってネ。ア、そいつ、どんな仕事だい』
『近い内に向うの奴と会わすから、その時きめようじあないか』
『……』
『そうなると、君がプリントの金なんか幾分心配しなければならんよ』
『いいとも、その位やらなくちゃァ仕様がないだろう』
青山は元気よく、オッカぶせた、話を聞いている内に、とに角、その仕事に興味が持てた、殊に労働者に近付けるということが。向うの奴に会う場所と時間をきめると、北村は、いそいでいたので立ち上りかけたが、ふとこの前のことを思い出して、上着を引張りよせながら、テレ臭げに頬をなでた。
『どの程度に、俺ァバレていたかい？』
と云ったが、青山のけげんそうな顔をみると、
『イヤ、この前の君、青山のやられた時さ』と、付けたした。
『ア、あれかァ』
青山は、云いにくそうに顔をしかめたが、内心ヒヤリとした。
『それが君、分っていやがったさ』
『……』
『だけど、大丈夫だよ、君』
北村のこわばった視線をまぜ返して青山は間が悪そうに笑った。

『こうなんだ、君が二日目にいたのはバレていやがるのさ、……一寸手不足で動員された程度らしいがネ、でも直ぐ病気でやめたことになってるんだ』
『病気？』
『ウン、それは俺が云って置いたんだよ、……どうなんだろうなア、ソイツ、向うでは君、無新のことも知っていやがったぜ』
『……そうかな』
北村と会うたびに、あとで青山は、ひどく憂鬱になるのだった。面と向い合ってる時でも絶えず、何か、防がなければならないものがある。何故、以前の様に、打ちとけて、正直に云えないのだろうか。窓に腰を下ろして、ボンヤリしていると、急に、激しい自己卑下を覚えてくる、直ぐ北村の跡を追かけて、何もかもぶちまけてあやまろう。いそいで窓越しに乗り出してみたが、もうすがたはみえなかった。……下の露路を、二人連れの小学生が面白そうに、しゃべりながら通っている。青山はボッとしたまま後すがたを見送っていたが二人が曲り角で消えると、ようやく我にかえって、ペッと唾をはいた。
午後になると、北窓からは日が差しこんでくるが、南側からは涼しい風が吹きよせてくる。もう、すっかり夏の街だ。田舎では田植の最中だろう。青山は押入をあけて、書物を皆取り出して読みたいものだけ、二、三冊置いて、あとは売り払いたいと思った。その金が、いくらか仕事のたしにもなるだろうし、とに角、身のまわりを出来るだけかん単にしなければなるまいと思った。引き受けた仕事を、今度こそはしっかりやってみよう。そうすることが今迄のあやふやな行動に対しても、何より正しい償いであろうし、殊に労働者の間でみっしり鍛え上げて行ったら、インテリとしての弱い要素も次第にたたき直されるだろうと思うのだった。それにしても北村は実に立派な男だ。動揺することも知らず、鉄のような冷静な意志を持った人間だ。青山には北村が全で、どこか違った特殊の性格を持っているようにみえるのだった。
——併し北村は、何も青山が思っているように違った人間でもなかった。青山と同じ様に初めは、かなり動揺したものだった。この半年の生活は北村には決して楽なものではなかった。組織の一メンバーとしての仕事は、決して外の者が思う程、花々しいものでもないし、寧ろ、反対に、実に地味な、単調な、ものだった。絶えず上から厳密に批判されるし手を付ける仕事も思う様にはかどるものではない。組織が非常な打撃を受けたあとなどは、レンラクさえ中々、つかない時もあるし、体の調子の悪い時などは、イヤに心細くなってきて、自分には、こうした仕事が不適任ではあるまいかと、疑う時さえあった。併し、北村は、そうした気持ちを絶えず批判しながら食付いて行った。その内に仕事に対しては責任を感じてくるし、……そうした過程に於て北村は、知らず知らずの中の空気にまき込まれな

から、次第に沈着に、勇敢になり、献身的になって行くのだった。

（一九三一年四月「ナップ」）

根

中野重治

「ええ、ちきしょ。」

そう思ったがおそかった。看守長に目っかっちまったのだった。廊下の方は用心していたが、看守長が庭を廻っていることは知らなかった。庭の方は二階から見えないのだから仕末がわるい。呼び出されてギュウギュウ搾られたあげく、転房、図書閲読十日間禁止と来た。何か読もうと思ったって、字の書いてあるものは一つ残らず、「人」も「エコノミスト」も字引も官本も官本目録も、石筆、石盤に至るまで取上げられちまったのだからどうしようもない。転房先きがまた、わざと空房と空房との間へ持って来られたので、壁を叩いたって叩き返して貰えない。くやしくてたまらない。ドッカリ坐りこんで西式強健術をやり始めてみたが腹の虫がおさまらない。

「ええ、ちきしょッ！」
ハネ起きて、机を踏台にして窓へよじのぼったが、その時岡本信吉はすばらしいものを発見した。
ここは前の房と違って遠くまで見わたせる。松の植った広い中庭、その向うに刑務所全体を囲んでいるコンクリートの高塀、その向うに火の見櫓が見えて、その向って左の方に一本の大木が立っている。
太い幹が一本、そこから枝や小枝が何千本と出て、そこへ何万枚という葉っぱが生えてチラチラ動いている。遠くて何の木か分らないが、一本の木で一つの森のようだ。見ていると頼もしくなって来る。
「ほほう……」
その時、梢の繁みから二十羽ばかりの小鳥が飛立った。と、それをキッカケに何万枚とも知れぬ葉っぱが一せいに揺れはじめた。あらしが来たのだった。
小鳥はどこへ行ったのか影も見えない。ただ葉っぱがちぎれて吹きとぶのが見える。組み合った太い枝が互いちがいにねじれるのが見える。枝がこすれてキウキウいう声が岡本の所まで聞えて来るような気がする。
その時岡本は、ふと、この大木を地下で支えている根のことを考えた。あの大木が千貫あるとする。そこへ雨あらしが懸って来ると何千貫になるだろう？　根はそれを支えている。葉っぱは悲鳴をあげて飛ぶがその時こそ根の頑張る時だ。根が一分二分ずつ食いこんで行くのが恐らくこの時なんだ。年輪はその中で刻まれて行く。根はそれを黙ってやってるのだ。
「罰が何だ！」
と岡本はあらしのかかる大木の根に向って熱烈に挨拶した。
「君は汗を流してるだろうな！」

（一九三一年五月「戦旗」）

省電車掌

黒江　勇

一

ホームに下った時計は、既に午前零時十分を示して居た。

昭和五年と云う春は無雑作に来た。

ホームの端の階段に設けられた、板張りの僅か畳六、七畳敷程の土間の車掌休憩所には、一つのダルマストーヴを取囲んだ、七、八人の車掌が狭そうに喰っ附き合って、何かがやがや喋っていた。其の上で十燭光の電灯がぼんやりと見下して居る。

「さあさあ行こうぜ、相棒」

今迄野球の話で得意がって居た元気の好い二十五六の男が、カバンを右の肩へ引っかつぐと、フットボールの様な真ん円く肥った男が立ち上って、腰掛けて居る隣の男に云った。

「へっ、一足御先へ御免よ」

「馬鹿っ冷い毛布へ先にくるまるのを威張ってやがら」

「一杯熱いのを引っかけてお休みになるのだ」

畜生っ、色の黒い大きな目玉の男が怒鳴るのを後にして、二人の車掌が出て行くと、其れと入れ代りに二人の車掌がガタガタとガラス戸を気急わしく閉めて這入って来た。

「ヘッ——寒い寒い」

ぶるぶる顫えながら二人は皆を押しのける様にして火の方へ駈け寄った。

「全くヒーターが入ったって屁の糞にもなりゃしねえ」

髭をはやした丈の高い男が、尚も温めきれない身体を抱きつくようにして、ぶるぶる顫い乍らつぶやいた。

「此の野郎、俺の前へ立ちはだかって、腰掛けろ」

先っきの目玉が怒鳴った。

「お前、もう時間だよ」

「馬鹿、一分一秒でも永くあたって居なくっちゃ、車の中で凍り死んじもう」

「贅沢云うな、俺達はヒーターの入ってない車に何年乗って居たと思う。角の生えたでんでん虫だぜ。其の時と較べて見ろ、そんな贅沢が云えるかい」

盛にキザミを煙管に詰め込んでいた五十近い、皺枯れ声の車掌が如何にも誇りやかに云って、煙管の頭をカチカチ

とストーヴに叩きつけた。
「そうだ、全くだ、ヒーターは入るし、ドアーエンジンにはなるし……」
立った男が云った。
「へっ、其の代り車掌は不用になって来るよ」
目玉が又、怒鳴った。
「また車掌を減らす様な話だぞ」
「嚇すない。三年も命が縮まらあ」
そう云い乍ら、立った男が目玉の横へ腰掛けた。
「今度は皆、警手だってよ」
「おい、ほんとうか、いやだなあ」
「何云ってやがる、貴様見た様なずるい奴は大丈夫だ」
「いらぬ事を云うな」
丈の高い男は、目玉の肩を小突いた。
「まあ、いいや、他の会社見た様に首をちょん切られるより駅の警手になって、啖壺の掃除やら、便所の臭い所の掃除を、おとなしくしていた方が嬶や餓鬼を干乾しにせぬ丈幸福だ。それに——」
「しーっ」
丈の高い男が、云いかけていた年寄りの車掌の口を、突然止めると、金杓子を取って、石炭をストーヴに掬い込み始めた。
一同の顔はガラス戸の方へ集中した。
「フー、よく燃えてるね」

車掌所主任のデブが、正服姿で突然、此の所に大きなヅー態を現わした。
今迄やかましかった部屋が、総てのモーターの、ぴったりと止った時の様に静かになった。唯、金杓子で石炭の投げ入れられる音ばかりだ。
「もうお正月だよ、皆しっかり頼むよ、ふ、ふん——」
そう云うと、豚の姿は、一応皆の者を見廻して、ゆったり外へ消えて行った。
「おい、先生、酒を召してるよ。全く、好い顔色をして、如何にも満足の態だったよ」
主任の姿がホームの中程にある、運転整理室の影へかくれる迄、ガラス扉を開けて見て居た例の高い男が、踊るようにしてそう云った。
「馬鹿にしてやがら、自分は年越の酒を飲んで監督見廻りだ。エッヘン……」
目玉が、ぶんぶんし乍ら、ストーヴの上で湯気を立てている鉄瓶を取って茶碗に湯を汲んだ。
「癪だ、熱い湯が年越しの酒だ」
「全くだ。先生は酒の機嫌で、俺達をからかいに来たんだよ。おい、俺を見よ、もう、十何年と年越を汽車や、電車の中でして居るのだよ、考えて見りゃ、あれも一生、これも一生、馬鹿らしくて生きて居られないよ、あははは」
年寄りは淋しく笑った。
「それに、奴は如何だ。俺達の親父になって二カ月も経た

ない間に、もう五人も首を切ったじゃないか」
「用心しろよ、皆、此度の親父は皆の首が好きだよ」
「桑原桑原、南無阿弥陀南無阿弥陀」
年寄りは首を振った。
ストーヴはゴンゴン腹を唸らせながら燃え立って居た。
「さあ、時間だ、深沢」
目玉の矢野がカバンを肩にかけて立ち上ると、今迄黙って皆の話を聞いていた未だ新参らしい、二十を越えた許りの深沢は立ち上った。
流石東洋一の乗降客の多い所と誇る丈に、第一、第二の電車ホームは、多数の客が寒さに落ち着き兼ねて、足踏みして居るものもあり、ベンチに膝を縮めてうずくまっているものもあり、又、行きつ戻りつつ、小刻みに駆け足をして居るのもあった。
むこうの列車ホームには長野行きの機関車が、黒いズー体から白い湯気を濛々と吹き出して居た。
「オー寒む」
二人が中央線ホームに出ると、凍り切った空間を突っ切って電車が飛び込んで来た。
落ちて居た紙切れがひらひらと舞い上った。客の帽子が、突然、すっ飛んだ。駅名と、乗り替えを叫ぶ声が響き渡ると降りる客、乗る客とが客車の入り口にどよめき始め、ホームの上は靴、下駄、フェルトの引き掻き廻す雑音だ。

間もなく発車合図のベルが鳴り、電車は動き始めた。
深沢は第二番目の車に乗って、乗り越し客はないか、又窓の開けっ放しの所はないか、何か異状はないかと、ずーと中を見廻した。一人の客が靴をはいたまま腰掛けの上へ長々と寝そべって、他の客の迷惑等を省り見ないで居るのが目についた。幸、客は今の駅で殆んど降りつくしていた。
「もしもし」
深沢は寝そべっている客へ近寄って、其の肩を一寸ゆすった。其れでも客は目を覚まさなかった。
「もしもし」
此度は、ひどく肩をゆすった。
「何だっ……」
やっと其の客は目を覚して起き上った。
「何処でお降りですか」
「此処は何処だ」
「S駅とO駅の間です」
「何、S駅は出たのか」
其の客は慌てて下に転っていた帽子を拾って立ち上った。
「S駅で降りる筈でしたのですか」
「そうだ、もう返える電車はないか」
「あります、じゃ、次の駅で御帰りなさい、切符に証明してあげますから」

切符に証明して渡すと、又客は腰掛けに寝そべってしまった。
「もしもし靴ばきのまま足を上げては困ります。O駅は直ぐですから、眠ってはいけません」
「うん、そうか」
O駅に着くと深沢は其の客に上りホームを親切に教えてやって、後部車掌の所に飛び乗った。
「やれやれ、もう客は殆ど降りたね」
O駅を離れてしまうと目玉の矢野はドアーを閉めて小さな腰掛けに腰を下した。
「随分寒いねえ、今夜は眠れるかなあ」
もう郊外を走って居たので、辺りはタールを流した様に真闇だった。
唯、上り側の赤い信号灯や、青いのや、又橙黄色の淡い光りが後ろへ鉄砲玉の様に飛び去った。
車は絶えず振動して二人の内臓を揺り動かした。
ほーっと帝都の空と覚しき所が赤ばんで居た。
「おや！　ひどい落書だね」
「ふ、ふーん」
矢野はへんな笑い方をして、軍手用の手袋をした右手で制動機の頭をぼくんぼくん叩いて居た。
深沢はニス引きの板の上に、ナイフや又堅い鉛筆で刻み込まれた落書きを電灯の光りにすかし出す様にして読んで行った。

――上長には羊の如く俺達には狼の如きデブ――
――奴は餓鬼だ、用心しろ、もう五人切られたぞ、第六番目の餌食が欲しい頃だ――
「おやおや狼が死骸をあさっている漫画があるぞ」
――組合をつくれ！――
「随分書いてあるね、労働歌もあるぞ」
――主任、お前の嬶は電車マネキンか――
「あはははは甘い事を云ってるね。主任の嬶あは毎日白ペンキを顔に塗って電車に乗ってやがる」
「うん、主任の奴、山田の許嫁を横取りしたのだ、卑怯な奴だ」
「えっ、あの車掌の山田さんのか」
「そうだ、可愛相に、それが為め山田は警手に卸されたのだ」
「ふーん」
深沢は低く唸った。
――S車掌所の諸君団結しろ――
「誰が書くのかね、便所にも同じ事が書いてあるな」
「誰だって書きたくならぁ――畜生っ、油がくっつきやがった」
矢野は、うっかり手袋に黒い油がついているのを見て突然怒鳴った。
「昨日買ったばかりのが、もう真っ黒だ」
外套のポケットから紙を出して手袋を矢野は拭き始め

た。
「おい深沢、お前此んな紙がポケットに入ってなかったか」
「どんな紙？」
深沢は外套のポケットに両手を突き込んだ。
「あるある」
「それだそれだ」
「日本交通運輸労働組合」
深沢はそれを拡げて読み始めた。
中には、現業委員会の欺瞞政策の事実を列挙して攻撃した後、渡辺銀行破綻による保険掛長の不正共済金の利用が暴露され、渡辺銀行預け入れの六万円という共済金の処理方の不明を挙げ、最後に、此れ等は皆、我々従業員自身の力強い団結によってのみ処理が出来るのである。又現業委員会を自主化し、真に現業員のものとしなければならぬ事等が書き連ねてあった。
「どうだ、深沢お前如何考えるか」
「現業委員会なんて役に立ちませんね」
「そうだろう、現業委員会は俺達が作ったのじゃない、お上が拵えたのだから何の役にも立たないよ、それにあの六万円の損失は政府が決して補うものじゃないよ。やはり俺達の頭にかかるんだ、見ろ、此度の利子の引き下げは、つまりそれを補う為だ」
「へーえ」
「俺達は宜い様にされてるんだよ」
「おやっ」
二人は、突然、非常なショックを受けて飛び上った。と、同時に電車が急停車した。
「どうしたんだ」
直ぐ様矢野は横のドアーを開けて外を見た。
真暗な田圃だ。遠く文化住宅から漏れて来る狐火が、点々として凝視して居る。風の氷針が一時に顔面に突き刺さって来た。
「何かやったな」
前方の運転台から運転手が携帯電灯を下げて、急いで此方へ走って来る様だった。
「おーい」
矢野は叫んだ。
「おーい」と、先方から答があった。
「如何したんだ」
「やったんだやったんだ」
「何っ……」
二人は慌てて飛び降りると、砂利を蹴突ばして運転手の方へ駆けて行った。
「此処だ此処だ」
運転手は二輌目と一輌目の間の所に立って、はっはっ息をはずませ乍ら、電灯で車の下を照らし込んで居た。
二人の客が窓ガラスを下ろしていた。

「生きてるか」
「待て、動いて居る様だ」
「何所をやったんだ」
三人は興奮して自動連結機の下に横たわって居る黒い塊りを覗き込んだ。
車軸に油の焼け着く臭いと、腐れ肴の様な生×の香りが鼻を激しく突いた。
電灯の光りで、腸綿の様な×が、ねばねばしく枕木の上や小石の上に光って居た。
「おい、其所に×が附いて居るじゃないか!」
深沢はビックリして飛び退った。
直ぐ顔の横の車輛に生々しい×塊が焼き着いて居た。
「死んでる!」
「兎に角、引き出そう」
矢野は運転手にそう云うと車の下にもぐり込んだ。こういう事にいくらか慣れている筈の三人も、暫くは為すべきことを知らないでただうろたえた。
「君這入って呉れ!」
「いやだい!」
深沢は、運転手の云うのを、鋭く拒否して二、三歩後へ引き退った。
「じゃ、火を見せて呉れ」
運転手は電灯を深沢に渡すと、矢野と同様に車の下へもぐった。

「おい火を、よく見せないか」
矢野が怒鳴った。
「いいか、足がないぞ、君、顔の方を持って呉れ」
「よし、どうだ此の×は、臭いっ!」
「ちえっ、おい待って呉れ、血が附きやがった」
深沢は、電灯をさし出し乍ら、車の下でささやく二人の話を気味悪く聞いて居ると、運転手がするすると死体を引きずり出した。
「明りを、あかりを!」
矢野と、運転手は、照し出された死体の側で腰を折って調べ始めた。
見ると、××は、血と鉄粉と、土砂で、無茶無茶になっていた。
喰いしばった歯の間から血が流れ出て居り、両眼は後頭部を打撃された為か飛び出て居た。未だ、後頭部や、切断された下足部から×がどくどく吹き出して居た。
「両足は」
「其所にあるじゃないか!」
運転手が叫んで、深沢の足許を指さした。
「深沢、踏んでるじゃないか」
「えっっ」
「馬鹿、びくびくするな」
落ちついて来ると矢野は笑い乍ら、深沢の直ぐ、後ろにあった、両×を拾って死体の横に置いた。

「さあ――、此れで足らないものはないか、鼻はあるね、耳もあるね」
「商売人風だね、四十歳位だ」
運転手は、血や、土にまみれて、切れ切れになった縞名仙の着物をめくって居た。
「十分間停車だね、何杆だ？」
「十杆だよ」
白く墓標の様に浮き出た駅間キロ程標を見て、運転手は云った。もうすっかり事務的に調査して行った。
「じゃ早速出して呉れ、××駅で俺が手続きしよう。解ったね、十分間停車、十杆――」
「オーライ！」
運転手が、そう応答すると、三人は、ばたばたと車に飛び乗った。
「ちえっ、けたい糞が悪い、昭和五年だぜ、轢き始めだ、新年早々けちがつきやがる、どうせ俺達は普通の人間とは異うのだ、正月もへちまもあるものか」
後部運転台に納まると矢野は腹立たしげに、つぶやいた。
「全く、気色が悪い。新年早々死人を出すなんて、何だって今頃轢かれやがる」
「不景気のセイだろうよ。借金か、何かで動きもすごきも出来なくなったのだろう」
「あ――気持が悪い」

深沢は前のガラスに凄惨な死人が喰っ附いて来る様に思われて、急に身振いした。
「あの顔相と云ったら、二度と見られないね、凄い！」
「今夜は眠れねェぞ！」
「俺もだ。其れにしても不景気の為だ。こうやって惨めな死をとげるのが、全国で幾人あるか判らないよ。俺は母子三人一度に轢いた事があったが、全く可愛想でならなかった」
矢野は、つくづく考え込むのだった。
深夜の寒さが、ひしひしと身にこたえて来た。目にとまるものは唯真黒な空間のみで、電車の闇に吠える音が絶えず頭の中を掻き乱した。
二人が乗務を終えて××駅構内にある宿泊所に着いたのは午前二時三十分だった。
火の気一つもない、半バラック式の隙間だらけの冷えきった部屋の中には、七、八人の車掌が僅か三枚の毛布に土蜘蛛見た様に、服のまま丸寝をして居た。
「おい、矢野、今夜の寒いのは如何だ、眠れたもんじゃねえ――」
先っきのフットボールの車掌が、むくむくと毛布から頭を上げた。
「もう二時半だぜ、明日は五時乗務だ」
「明日だって今日じゃねえか」
「うん、そうだ、僅か二時間半の就寝時間だ、眠れるか」

「どうだ、一杯、ひっかけに行かんか？」
「貴様は未だ、行かなかったんか？」
「てめえが羨やましがるから待ってやったんだ」
「生意気抜かすな」
「理屈は後に、やって来ようじゃないか」
フットボールが言葉を改めた。
「うん正月早々の人轢きだ、寒くなっても眠れないや」
「凄い美人って云うじゃないか」
「馬鹿、此の助平が、すぐあれだ」
深沢は、そう云って笑い乍ら冷たい毛布の中へ服なりにもぐり込んだ。
「行こうじゃないか」
「うん、行くとも、深沢お前寝とれや」
矢野は、そう云ってフットボールと駅前の焼取り屋へ行ってしまった。
深沢は、冷たい毛布を被り乍ら、身体の温るのを待って居たが、冷え切った空気に仲々温って来そうにもなかった。
棺桶のような此の部屋の中だ、誰か盛んに嚙ぎしりをして居た。うーんと唸るのも居た。時々、貨物列車や、電車の車庫に入る車輪の音が地響を立てて枕元に響いた。
深沢の頭は益々冴えて来た。ナマリの様なガラス戸に轢死者の顔が呪わしく自分を見詰めて居る。轢断された足が、未だ、自分の瞳に喰っついているような冷たい気持ちがする。死人の血が、どくどくと、むれ上って自分の靴下に滲み込んで来た。と、突然、あの舌の様な肉塊が首すじへ、ぴったりと喰ついた。深沢は、それを慌ててもぎ取ろうとすると、此度は他の肉塊が腋の下へ飛び附いた。それを左の手で取ろうとすると、もう幾つもの冷たい肉塊が、べたべたと頰と云わず、口と云わず、身体中飛び附いて来た。もう彼は助け声を上げて逃げ始めたが、其所ら一面はどす黒い血がねばねばと流れて、足が滑って立ち上れなかった。彼は、あらん限りの力を出しもがき大声を上げて叫んだ。と、其のとたん目が覚めた。其所には、当番の石岡が彼の名を呼んで居た。勤務時間だ。
「あっっ、気持ちの悪い夢を見た」
横には何時しか、矢野が高いびきで寝て居た。
「いいわ、一往復、一寸だの、まだ客もないから一人で行って来よう」
深沢はそう当番に云って矢野を寝かしたまま、カバンをかついで外へ出た。
未だ、真っ暗で、ホームには迷い子の様に電灯が並んで顫えて居り空っぽの電車が御主人を待っていた。
深沢は、がたがた顫え乍ら後部の運転台にカバンを置くと其のまま空車を発車させた。ホームには唯一人の駅手がミーラの様に車を見送っていた。
××駅から××駅へ帰って来た時は、もう明るかった。
深沢は、必ず、其所のホームには矢野が待っているだろ

うと車から出て見ると、其所には矢野は居ず、其の代りに予備車掌が待って居た。
「矢野は呼び返されたよ、それで俺が来たのだ」
「えっ」
深沢は、余りの意外さに急に物が云えなかった。
「昨夜の当番が監督へ電話を掛けたのだ」
「畜生っ」
深沢は思わず拳を握り締めた。
「奴は陰険だからなあ――」
其の予備の男も憎悪の意を顔に表わして云うのだった。顔も洗ってない深沢は、唯、眼のみ空間をねめつけて居た。
「矢野を起して行かなかったと云うのは俺の落度だ。当番の石岡は陰険で卑怯だと云うのは有名なものだ。それを俺は知り乍ら、何故、起して行かなかったんだろう、もう後の祭りだ、俺は矢野に一生取返しのつかない事をした。申し訳がない。石岡の奴、卑怯だ、同僚を陥し入れて迄も上長に追従しようとして居る、うぬ覚えて居ろ」
客の中に交って深沢は車の中で、うんうん唸って歯を喰い絞って居た。
「あ――運が悪い、あの轢殺事故がけちの前兆だ。あの監督ならもう駄目だ。矢野は助かりっこない、俺は済まない、俺は如何すればいいのだ」
駅へ着くたびに、客の入口でへし合っているのも気がつかぬらしく、唯、失神者の様に彼は、茫然とホームへ下り立って居るのみだった。

二

矢野は車掌所主任の許へ呼び返えされると其のまま出勤停止を宣告され、其の結果は如何なるか、非常に険悪なものであった。
然るに、深沢は半ば、彼の責任であるにもかかわらず、何ら主任から叱責をも注意すらも受けなかった。恰も矢野とは無関係の様だ。彼にはそれが此の上もない苦痛だった。矢野に対して、平然と乗務を続けるのが心苦しくもあり、済まぬ様な気がしてならなかった。其の夜、身体の疲労をも省りみず、最も一般車掌に信望ある首席助役の宅を訪問して極力矢野の失態は自分の責任である事を説き何とかして矢野の宥恕方を切実に頼み込んだ。其の助役も非常に同情して引き受けたが、二、三日して、深沢を人目のつかない、或る別室へ呼び込んで、どうも勤務中飲酒したと云う廉で主任は頑として聞き入れない、御気の毒だが主任は駄目だと云い切った。
深沢は、其の助役のみを、只一つの頼みの綱として居たのが、かく云われると全く数万尺の断崖から墜落したかの様にがっかり力を落してしまった。
「もう駄目だろうか、矢野が首になれば俺も首になるのが

当然だ」
彼はぼんやり、車掌休憩室のベンチに皆から一人離れて腰掛けていた。
ふと、自分の前を古参の赤井と云う車掌が信号灯を提げて通り過ぎた。
「そうだ……」
彼は、或る考えが頭に浮んだ。
「そうだ、あの人に相談して見よう、あの人なら必らず、力を入れて呉れるだろう」
彼は早速、赤井と云う車掌の後を追って行った。
果して、其の人は、深沢の歎願的に、矢野欠乗に対する寛大なる所置方歎願書を作製し、全車掌の印を取って極力矢野の救助方を講ずることを約した。
二人が歎願書を持って主任の宅を訪問したのは、其れから二日後の夜分だった。
二人は未だ、新築の生々しい木の香りのする座敷で主任と会った。
中床には、M駅から当車掌所転勤の際、其所の駅員から強制的な醵金に依って贈られた大きな彫刻を施した大理石の置き時計が、キチキチ時を刻んでいた。右側の隅には銀杏の碁盤が置いてあり、黒く、きらきら光る壁には、円額に福寿草の絵が、ぶら下っていた。
大きな虎猫が、酒に真赤になった、ドテラ姿の主任の膝の上へなれなれしく横になっていた。主任は片手を火鉢の上にかざし、片手で歯を揚子でほぜくっていた。
「実は、夜分、御疲れの所甚だ恐れ入りますが、矢野君の事について御伺いしたいので御座います」
正服姿の三十二、三歳の赤井が、きちんと両膝を揃えてそう云った。
「うん――」
「で、甚だおこがましい事ですが、矢野君の親友として此の私が主任さんへ謝罪に参ったので御座居ます。どうか、矢野君を許して戴けませんでしょうか、此度は決して、矢野君のみではなく、全車掌が勤務中は酒なんか飲みに行かず真面目に勤めまする様に御誓い致しますから、此度丈けは、御寛大な御処置がして戴けませんでしょうか？」
「う、うふん――、全く、で。深沢、お前は何の事で来たんだ」
「はっ、やはり、矢野君の事で御願いに参ったので御座居ます。全く、矢野君の欠乗は、私が起さずに、唯浅はかな友情から、規定に違反しているのを知り乍ら、代乗したので御座居ます。此度の事は、矢野君ではなく、私の罪で御座居ます、ですから――」
「じゃ――、君も首になり度いと云うのかね」
「――」
「ふん、馬鹿な、君は君の職務を真面目に守って居ればいいのだ。それに責任で御座れ、浅薄な友情で御座れ。何だか角のたった言い方だね。君は与えられた仕事を一生懸命

やればいいのだ」
傍で聞いて居た赤井はぐっと来た。これが吾々の上長であり、又吾々の指導者である人の言葉であろうか、余りにも無人格であり、又、何たる侮辱だ。
もう赤井は、胸に湧き返った憤怒の炎がぐっぐっと喉元に突きかけるのを、じっと圧え乍ら落ち着いた、否、寧ろ悲痛な口調で口を開いた。
「全く、吾々如きが直接主任さんに此んな事を申し上ぐると云うのは身の程を知らないもので御座居ます。が未だ矢野君も二十代の前途ある者であり、自己建設の途次にあるので御座居ます。それに、鉄道教習所出身であれば鉄道以外で社会に尽すと云う意志はない事と思います。今、矢野君が一生鉄道に身を捧げようと思っている矢先を、追い出されては非常に不幸であり、又、身の破滅になりはしないかと思います。現在の様に就職難時代にやられては、却って其の前途を闇黒にしてしまうのではないかと思います。全く、主任さんには誠に今度の事件は正月早々で、御腹立ちの事は御もっともでしょうが、どうか、唯のうじ虫と思い下さって御見逃し下さいませぬか」
「う、ふん、君も仲々悧巧な事を云うね。じゃ聞こう、此所に人間には目に見えないコレラ菌が一疋居たとする、それを車掌合宿所の飯の中へ投げ込んだとしたら如何なると思う」
「……」
「ねえ、忽ち、其の一疋のコレラ菌は飯の中で何万何千という数に繁殖し、僅かの期間に全合宿所員の生命を奪ってしまうと云う事を知ってるかね。え、えへ……まあ、そんな他人の事は此の俺が知って居ればいい事だから、君達は少しは自分と云うものを修養し給え。それに、君等が何人来たって此の俺が如何なるのじゃなし、矢野の事は決定したと云うわけじゃなし、心配せずに、まあ今夜は帰り給え」
「では、主任さん、未だ矢野君は休職というのじゃないのですか」
深沢は思わず、今の言葉に一膝乗り出した。
「何に――、あは……君の知った事じゃない」
「でも、減俸か、何かで済むのでしょうか」
「馬鹿っ……」
「余りだ」
主任は、全く深沢を人間とは思って居なかった。
赤井は主任の上長で非ざる態度言語に極度に憤慨して思わず胸に叫んだ。
「実は主任さん、矢野君も鉄道に は五年以上も勤めて居り、今迄、欠勤もなく全車掌中でも珍しい精勤家で御座居ますので、最非共同僚が矢野君を救い度いとの考えから、此所に皆からの歎願書を以って参りました」
赤井は遂にポケットから全車掌四百六十人の連名書を主任の前へ出した。

「うーん――」
主任の眉の間にはだんだん癇癪玉がぴりぴり出て来た。今まで膝の上に心よく眠っていた虎猫が、突然眠を覚まして隣の部屋へ消えて行った。
「うふ……ふん、もう此んな事をしたって遅いよ。此んなものが俺に何んの役に立つと云うのか、あは……もう書類は事務所へ廻って居るよ」
「えっ」
二人は思わず顔を見合せた。
「じゃ、もう主任さん。矢野君は駄目でしょうか」
赤井は目を輝かせて主任を見詰めた。
「うん、まあそんな事だろう。然し、僕は起った事件として事務所へ報告した迄だ。僕が矢野君を如何すると云うのじゃなし、事務所次第だ。然し、まあ、皆の車掌がそれ程矢野を思うのなら何んとか事務所へ掛け合って見よう」
「是非共御願い致します」
深沢は頭を畳に摺りつけて御辞儀をした。然し、赤井は黙って唇を噛んで居た。
「じゃ、夜分遅く御邪魔致しました」
赤井はきっぱり云うと座を立った。
二人が戸外へ出ると、凄い月が大空にぴったり凍りついて居た。向い側の官舎からは御経見た様な下手な謡の声が漏れて来た。自転車に乗った出前持ちが盆を肩に載せて二人の横を抜けて行った。

「奴は人間じゃない、奴は餓鬼だ。もう、矢野は駄目だ」
赤井は、截然と地上に劃された月の影を踏み乍ら、つぶやいた。
「駄目でしょうか」
深沢は悄然として居た。
「事務所へ廻った以上は駄目だ。あれ迄頭を下げて機嫌を取ったのが馬鹿らしい。俺に妻子がなかったら、あの場でぶん殴ってやるのだ。あ――世智辛い世の中だ。でもあれを出したら大分怖気がついたのだ。それまで俺がって云ってたのが僕になったよ、事務所へ掛け合うと云ったのも怖くなったからだ。畜生、石岡の馬鹿が主任へ電話を掛けさえしなければ何のことはなかったのじゃ、誰だって、あんな事をして居るじゃないか、奴は同僚の欠陥を報告する事ばかりが出世の道だと思って居る、卑怯な奴だ」
S駅の方へ二人は歩いて行った。時々月に浮び出たアルミニューム色の道路を、自動車が強い光を投げながら二人の傍を通りすぎた。然し、二人は其の都度、只機械的に左の方へ身を避くるのみで、主任の横暴さと石岡の卑怯さを憤慨して居た。
「あ――俺達には何故力強い組合がないのかなあ、組合があったら此度の事なんか堂々と正面から俺達の要求を叩きつけることが出来ただろうに」
深沢はこう云い乍ら歩いた。
「ねえ、赤井さん何故吾々には組合が出来ないのでしょう

か」
「それは当局の圧迫と石岡見た様な奴が居るからだ」
「そうでしょうか」
「それに誰だって皆んな命が惜しいから自重して居るに過ぎないのさ」
深沢は大きな吐息をして空を仰いだ。
余りにも澄み切った月が自分の心臓を突き貫くかの様に鋭く照らして居た。
「俺も今職を失っては田舎に居る年老いた父母や弟妹も一緒に食えなくなるのだ」
彼は父からの覚束ない手付の手紙を思い出した。
「切角豊年で沢山取れた米も値段が半分になった為に肥料を買う金どころか、作った米の三分は地主さんへの年貢だから、残りの米を皆売って村の税金やら組合へ取られてしまう程だ。でお前も苦しかろうが十円程送って呉れまいか、頼む」
彼の頭は滅茶苦茶に混乱してしまった。
ふと、彼は立止った。何時しか二人は鉄道病院の前を通って居た。
「赤井さん、すみませぬが内山君を見舞って来ますから、又御礼は改めて――」
「うん内山君、いやいや御礼なんか、じゃ、行って来給え、宜敷く云って呉れ給え」
「はっ、じゃ失礼します」

深沢は別れると、其のまま鉄道病院の方へ足を向けて行った。

三

白いボール箱見た様な、一方のみ窓を持った病室の中で、深沢は三ヵ月程前、乗務中電車に振り落されて負傷した内山と談々して居た。
蒼白で、頬骨が馬鹿に尖って、目は落ち込み、唯、白い歯並のみが以前の儘で、厚い唇が突出して居る内山の顔は以前とは全く別人の様に見えた。
話が段々と進んで行くにつれ、蒼白だった顔が赤色を帯びて来、厚い唇が乾燥して唇の両側から白い唾液が滲み出て来る程内山は興奮して来た。
看病に来ている小柄の六十四、五歳位いの母親が、其の顔を見ては心配し乍ら時々、気を落ち着かせる様注意するのを、うるさく拒絶し乍ら内山は云い続けた。
「二本の腕が肩からないんだぜ、不具者だぜ、君、これから世間は俺を人間とは見ないんだぜ、場合によっては牛や馬より役立たない邪魔者としか見ないんだぜ」
「あんな事ばかり毎日申すのですよ」
「又、お母さん、うるさい……」
「君――君――もう、そんな事は考えずに――ねえ君――」

「まあ——深沢君、少しは僕の心になって聞いて呉れても宜いじゃないか」

「そりゃ、充分——然し、興奮しては却って身体に——」

「解って居る解って居る、でも、ねえ君、万一君が此んな身体になって見給え、第一に呪うものは何か、確に此の世の中だ、俺をこうしたのは、あの電車だ、人間自身が拵えて、そうして其の為に滅される。現代の社会組織内に構成される機械文明の為だ。いや、俺は機械文明は呪わない、それは人間を幸福にする為に拵らえたものだから、然し、それを独占して悪用しつつある奴を呪うのだ。ねえ、君、鉄道と云う、いや××鉄道はやはり他の営利会社と経営方針に於ては何ら変らないと思うが、如何だ？」

「うん——」

「ねえ、やはり××鉄道と云う大資本家根性を以て俺達を機械同様に、いや、奴隷だ、牛馬と同様に思ってるかも知れない、そんな気持ちで俺達を酷使して居るのだ。兎に角、奴等はより以上の収入を得ようとして居るのだ、そして俺達がカタワになっても」

「そうだ。でも、もう君——」

深沢は何んとかして話を打切らせようと、あせって居た。然し、内山は夢中になって話し続けた。

「君もそう思うだろう、俺の云う事は間違いがあるかい？」

「いいや、で——」

「見ろ、俺が不具者になったら、もうお払い準備だ。俺を飼って置く事の損失を知ってる。つい先日助役の奴が退職手続の事で来た。出来る丈公傷金を沢山貰ってやると、へっ、如何にも同情らしく恩にきせてやがる、当り前じゃないか、おい、考えて呉れ、今迄散々に酷き使って、さあ役に立たないとなると、僅かばかりの涙金を呉れて追い出すとは酷いじゃないか、それに此の通り一生取返しのつかない不具者にして追い出すとは余りにも人情知らずじゃないか、畜生じゃ俺は此れから如何なるのか、おい——」

内山の目には涙が光って居た。

「おい、君、もう止し給え」

「お前、そんなに、そんな事迄……」

「いいからいいから黙っといて下さい」

内山は、はらはらして居る母に、泣き出しそうな声を出して怒鳴った。

「俺は、君、君等の其の健全な身体を見ると気が狂いそうだ。切角鉄道で身を立て様として居たのが水の泡だ、俺の前途は暗黒だ。人生と云う橋が途中から崩壊したのだ。進む可き道がない、それに公傷年金が取れると思って居たのが取れないのだ」

「えっ、年金が取れないのか？」

深沢は非常に驚いて聞いた。

「見習い中に俺は傷をしたのだ。畜生、それを思うと俺の腹の綿が切れ切れになりそうだ。主任の奴、人が足りなか

ったので俺達を見習中に一人前の仕事をさせ乍ら、自分の不注意を隠すために、此の事を事務所へ誤魔化して報告したのだ。公傷年金を取ろうとすれば、未だ鉄道に出て半年も経たない年金を貰う資格のない俺を如何して乗せたかって事務所から聞かれるからだ。ねえ、君も見習中だったじゃないか」

「そうだ」

深沢は、今夜の主任の横柄な態度を思い浮べた。

何んと、卑怖極る奴だ。奴も規定違反である見習を本務に使い乍ら、其の過失を堂々と上長に誤魔化して居る。而も内山に取っては生死の問題である。其れを自己の過失を隠蔽する為に内山を犠牲にして居る。

深沢の目は思わず燃えて来た。

「だから、俺が止めるにしても、何んら鉄道から手当は受けないんだぜ。俺の過失として止めさせるのだ。畜生っ主任の奴が勝手に止めさせるのだ。云わば首にするのじゃ、丸で役に立たなくなった牛に肉屋の店頭にぶら下れと云う様なものじゃ、奴は、餓鬼だ。人間じゃない。自分の過失を全部俺に背負わせてやがる。それを事務所は真にして、俺達の云う事は全部欺瞞的な讒誣として受け入れないのだ。丸で世の中は無茶だ、弱肉強食だ。道徳も糞もあったものか、俺は人間というものをつくづく考えて馬鹿々々しくなって来たよ。如何して俺はあの時あっさり死ななかったかと思うよ、こうやって生きて居るのが俺には歯痒ゆくて仕様がない」

「お前はまあ……貴方、あんな事ばかり毎日申すので御座居ますよ。側に居る私は……聞いて居る私の方が、よっぽど辛うござんすよ」

老いの目をしばたたいて母親は、しょんぼり如何にも自分の方が死に度いと云う様な風態だった。

二畳敷の畳の隅にある火鉢にかけてある鉄瓶から湯気が盛んに湧き上って真鋳の蓋がブクブク音を立てて居た。窓ガラスが、がたがた顫えて居た。

深沢は、主任の横暴と、自分勝手の卑怯さを考えると、自分も一緒になって当局を呪って見たかった。然し、今此所で内山と一緒になって、色々な事を喋るのは却って内山を興奮させ、尚其の上世間を呪い自己を呪う材料を与えるようなものだった。で、出来る丈け内山を安心させる様な、又あきらめさせる様な事を云って、別れを告げて家へ帰ったのだった。

深沢は床の中で、今夜の主任の事や、矢野の事や、又内山の事等思い浮べ又、田舎の父母弟妹の事等考え出して、如何しても眠れなかった。内山も首だ。而も半殺しにして大道へほうり出された様なものだ。それにしても、あんな重大な規定違反をしても主任の奴等は平気で居られるのだ。それに引かえ、奴等は、吾々の些細の過失をも用捨しないのだ。

床の中を転々しながら繰り返して考えた。

四

「深沢居るか――」
　思わず、後ろの襖間を開いて這入って来た者があった。
「やあ……赤井さん……」
　深沢は今日は夜勤の為に、皆の出払った合宿所に只一人机に寄りかかって雑誌を読んで居た。其所へ、思いがけぬ先輩の赤井がやって来たので、慌てて、其所にあった友達の座布団を出すやら、消えかかった火鉢に炭をつぐやら、可成り狼狽振りを示して居た。
「いや、もう御茶なんかいらないよ」
「でも、まあ――」
「いやいや、そんな事で来たのじゃないんだよ。もうもうそんな事をしなくっても宜い。それよりか、君、まあ此所へ座り給え」
　赤井は、本箱の中から湯呑みや御茶の鑵を出そうとして居る深沢を押えつける様に、右手を揚げて差しまねいた。
「君、到々追い出されたよ」
「えっ、矢野君は免職されましたか」
　深沢は茶の鑵を持ち乍ら、豫ねてそれは覚悟して居たものの、今更、それと決っては、流石啞然たらざるを得なかった。只、赤井の眼を見詰めて居るのみだった。
「うん、それも出た、然し、――まあ、御茶は後として此所へ座り給え」
　赤井は深沢の側へ座ってしまうのを待って居た。
「おい、君、全く主任の奴は人間じゃないね、俺達は駅へ降されたんだよ」
「えっ……」
「おい、驚かなくっても宜いよ。そんなに、何んのあんな畜生見た様な奴から使われるよりは、却ってこうされた方が俺達には、幸福かも知れないよ。で、まあ聞き給え、俺と君は当然として、と云おうか、あの連名書取りに弃走した四人全部が降されたのだ」
「えっ……」
「そら、松木、常川、尾川、細谷、それに僕と君、六人が皆××駅やら、×駅やらの警手にさ――」
「畜生っ……」
　深沢の唇はぴりぴり震えて来た。
　新らしく、ついだ炭が、火鉢の中でぱちぱち火花を飛ばした。
「俺の為だ……」
　深沢は、両手で火鉢の縁を確りにぎり締めて、顔を俯向けて、心の中で、そう云った。
「済みません、赤井さん」
　彼は如何にも、苦しそうに赤井の顔を振仰いだ。
「皆、私から、貴方達へ、此んな御迷惑を及ぼしたのです。此度の矢野君を過らせたのも僕だし、又々、貴方方へ

――何と云って宜しいか、私は――私は――済みません、私の責任です」
深沢は悄然と首を垂れた。
「何、君、君の責任じゃない。元の起りは石岡からだ、誰だってあんな事は年中して居るじゃないか、奴が電話さえかけなければ、何事もなかったのだ。俺達の過失は少しも見逃せないように鉄道の仕組が出来ているのさ。君はそんなに心配しなくっても宜いよ。俺達も覚悟の前だ、覚悟がなかったらあんな事は始めから断ったのだ。お互だ、さあ――六人が主任の許へ呼び出されて居るのだから行こう、後の四人が待っているから――」
「そうですか――」
深沢はそれでも何か考え込んで居たが、急に立ち上った。
「じゃ――行きましょう」
断然たる、ある覚悟を持って答えた。
二人が、連れ立って車掌所へ来て見ると、既に四人の者は車掌所の入口に立って、二人を待っていた。
「やあ――赤井君、丁度、今、矢野が主任の所へ休職辞令を取りに行ったよ。俺達も奴の所から糞喰えだ」
四人の中の石臼と綽名を取った細谷が飛び出して、赤井の肩を叩いた。
「皆さん済みません、私の為にこんな御迷惑をかけて……」
深沢は四人に悄然として頭を下げた。

「なーに、構うもんか、心配するな」
異口同音に四人の者は、そう深沢に云って大きな声で笑った。
「さあ――勢揃いした、行こう」
細谷が、そう云うと、皆温和しく主任室へ次から次と這入って、横へ、ずらりと一列に並んだ。
丁度、其処へ、着物の矢野が、被服やら規定書類の貸与品を物品掛りへ返済して、辞令を取りに這入って来た。
「やーっ」
皆は、矢野にそう云ったきり、お互に黙り込んでしまった。
「うん、皆揃ったな、丁度宜い矢野も来て」
青いテーブル掛けの前へ、パークシャ種の豚の主任が、莨を吹かし乍ら、七人の名を皮肉な微笑を以って眺めて居た。
其の横に、ごつごつに痩せた、主席助役が、同情を以った目で、皆を見乍ら椅子に腰掛けて居るのは好いコントラストだった。
ガラス越しに、隣りの部屋で、十一人の内勤車掌、助役等が事務を取っており、絶えず車掌が出勤簿に印を押しに出たり這入ったりして居るのが見られた。又、彼方の方には、S駅の雑踏しているホームが小さく見えた。
「矢野君には、ゆっくり話があるから、一寸待って居て呉れ」

主任は案外に丁寧過ぎると思われる口調で矢野に言って、六人の者の方へ向き直った。
「おー――、お前達は、これから駅の掃除に行くんだ。皆、行ったら、駅長怠け者が鍛われに来ましたと挨拶するのじゃぞ、どの面も、そうとしか取られない者ばかりだ。うふふふふ、まあ――犒々駅で心を入れ換えて、勉強するのじゃ、いいか分ったか」
「主任さん――」
「何だ」
突然、深沢が口を開いたので、主任はにやにや笑って答えた。
「文句があるのか」
「あります、今の御言葉では、私は別として、他の五人の方は如何な点で怠け者と云われるのですか」
「何、貴様、それを聞いて如何するのだ」
豚の目が妙に光った。深沢の顔は真赤になって、口もとはびりびり痙攣が起って居た。
「いいえ、根も葉もない事を云って貰いたくないのです。如何な点で怠け者と云うのですか、多分勤務の点でしょう、私はけしからんと思います」
「だまれ！」
「いいえ、云います」
二人の言葉は怒気を含んで、かん走った。
六人の顔も一様に口を結んで怒気を帯びて来た。

「勤務で怠慢なら具体的に云って貰いたい。貴方の膝下のあの助役や、内勤車掌は勤務中売店の女をひやかしに行ったり、アミダクジを引いたりして居るのは何んですか。あれは勤務の一つですか」
「生意気な事を抜かすな、此の馬鹿、首になり度いのか」
「何、馬鹿って、よし、貴様は餓鬼だ、此の野郎、畜生っ」
深沢は無中になって叫んだ。
「其の上、貴様は、貴様は見習車掌を本勤務に乗せて、規則違反を事務所へ隠して居るじゃないか」
「何にーっ」
猛然と主任は立ち上った。握りこぶしがテーブルの上を伸びた。
「此の畜生っ、何をしやがる」
此の時、今迄黙って、一番端に立って居た矢野が、突然、主任の鼻柱をぶん殴った。
「貴様っ」
主任が顔を押えて腰掛けへ、どっかり尻餅をついた。
「此の野郎、――貴様はっ――」
「やっちまえ」
「待てっ待てっ」
「何をする邪魔するな」
「おい、乱暴な」
「貴様は、よくも、俺の首をきったな」

そう、どもりどもり云う矢野の声が、がやがや云う人声の中に聞えた。
突然、窓ガラスが音を立てて土間へ壊れ落ちた。と、まだ倒れて居る主任の上へ、テーブルが横殴りに倒れ落ちた。誰が投げたか、椅子が其の上へ飛んで落ちた。其の足が、戸棚のガラスに当って、がらんがらんと壊れ落ちた。
何時しか主任室には、内勤車掌や、助役や、出勤して居た車掌が入り乱れてわいわい叫んでいた。
「主任の奴のばしてしまえ」
「外へ引き出せ、俺達も叩いてやる」
「矢野君万才っ」
内へ入りきれない車掌が外でそんな事を云ってわーっと鬨の声を上げた。
「おい、矢野逃げろ」
赤井は、主任をかばう様な風をして、矢野を引離そうとする三、四人の助役の邪魔をして、やっと矢野を外へ押し出した。
「さあ——逃げろ」
「うん——じゃ、左様なら」
矢野は、そう云うと売店の横を通って、裏口から人家の露路へ消えてしまった。
わっしょいわっしょい、三、四十人の車掌が矢野の後を追うて裏の入口につめかけた。
「矢野君万才——」

又々鬨の声が上った。
それから、間もなく、赤井等六人の者の姿は、中央線の電車の中に見られた。
「おい、愉快だった。俺が机をひっくり返したのだよ」
「椅子を投げたのは誰だ」
「あれは俺だ、助役のやつが、矢野ばかりに押しかけているうちに俺がやったのだ」
「俺は矢野を止める様な風をして、主任の頭を蹴飛ばしたよ」
「俺もだ、愉快だ、わははは」
皆、各自に自慢らしく、喋り乍ら大声を出して笑った。
多くの客は、妙に、はしゃいでいる六人の者を見守っていた。
「ねえ、皆、あんな事をしたって、つまんないよ」
赤井は落着いた低音で、皆の興奮して居るのを押さえつけた。皆は急に、赤井の云い出すのを口を止めて待った。
「俺はもう長く此の商売をやって来たが、いつまで経ってもちっともくらしはよくならねえ。近頃になってつくづくその事を考えているんだが、分ったような分らぬような気がする。ただ一つ俺達もただの労働者でしかない事だけははっきりしているんだが……」
「そうだ、それで……」
石臼が肩をいからした。
「で、今から、×××に行って、ゆっくり話をしようじゃ

ないか。今日の問題もあるからね」
「よかろう」
「賛成」
　六人の者は赤井の発議に賛成して、親しい一団となって×××駅の改札口を出て行った。

（一九三一年七月「ナップ」）

テガミ（壁小説）

小林多喜二

此処を出入りするもの、必ずこの手紙を読むべし。

君チャンのオ父ッチャンハ、××デヤスリヲトイデイルウチニ、グル〳〵マワッテ居ルト石ガカケテトンデキテ、ソレガムネニアタッテ、タオレテ家ヘハコバレテキタノ。オイシャハ氷デヒヤセト云ウケレドモ、氷ガカエナイノ。オッ母チャンハワザワザ三町モアルイドニ、四ドモ五ドモ水ヲクミニユクノ。ソノイドノ水ガイチバンツメタイノ。君チャンノオッ母チャンハ、ナンデ今フユデナイカト云ッテ、泣イテバカリ居タノ。
　オ父ッチャモ泣イテルノ。ムネイタイノ、ト君チャンガキクト、イヤト頭ヲフルノ。アトニナッテ、又ムネイタイノ、トキクト、ダマッテ目ヲツブッテ、ソレカラムネナン

テ何ンデモナイ、ト云ッテ、君チャンノカオヲ見、何ンベンモソットナミダヲフイテルノ。

オ母ッチャモヤセテ、目ガヒッコンデ、カミノケガヌケタノ。ミンナハラガヘッタノ。ウチノナカガジトジトシテ、アルクト足ガタタミニネバル。工場ノ人ガクルト、クサイクサイト云ウノ。ソレモハジメノウチデ、工場ノ人モダンダンコナクナッテ、死ンダトキニハ、ミンナハモウ君チャンノオ父ッチャノコトヲワスレテシマッテイタノ。オ父ッチャハ半トシモネテ、ウチノ中ニ何ニモナクナッタトキニ死ンダノ。

　トコロガ、オッ母チャハソノツギノ日カラネテシマッタノ。死ンダオ父ッチャヨリモヤセテ、カミノケガヌケテ、ネテシマッタノ。工場カラスコシオ金ガキタケレドモ、足リナイノ。ソレデ、フルイ、マガッタ大キナ家ノ三ガイノ一バンウエノ小ッチャイトコロヘ、ウツッタノ。ソコヘノボルノニ、トチュウデナンベンモヤスンデ、イキヲ入レナケレバナラナイノ。ソノウチニハ何十人トイウ人ガ、ゴジャゴジャ住ンデイテ、ヤカマシイノ。ヨナカニケンカガオコルト、ウチガユキユキトユレルノ。

　君チャンノオ母ッチャハネタキリデ、目アナガウントヒッコンデ、ダマッテ見テイルトイキヲスルタビニウゴイテイタフトンガ、ダンダン分ラナイグライニナッテキタノ。アル日、オ母ッチャガ、君チャンニマイバン目ヲサマシタラオ母ッチャヲユリオコシテミテクレ、イツソノママ死ンデイルカワカラナイカラ、トイッタ。ソレカラ、君チャンハヨナカニ目ヲサマスト、ブルブルフルエナガラ、何ンダカオッカナクテオ母ッチャトコエモ出セズニ、ソーット手ダケヲノバシテヤッテ、ユスルノ。クラヤミノナカデ、オ母ッチャノコエガスルト、ヤット安心スルノ。シンデナカッタ。君チャンハホットシテ、ネガエリヲウッテ、足ヲチヂメテネルノ。ソレガマイ日ナノ。

　トコロガ、君チャンノオ母ッチャハ、ナカナカスグニヘンジヲシナクナッタノ。マイバン、ユリオコシテイルウチニ、君チャンハオ母ッチャノカラダガダンダンホネバッテユクノガワカルノ。ヨウヤク目ヲサマスト、オ母ッチャハ、アーアーモウ長クナイヨ、ト云ウノ。

　アルバン、君チャンガ何カニビックリサレタヨウニ、フト目ヲサマシタノ。イソイデオ母ッチャノ方ニ手ヲノバシテヤッテ、ヨナカニコエヲダスノガオッカナイノデハジメダマッテユスッテイタガ、オ母ッチャハナカナカ目ヲサマサナイノ。ソレデモ、シバラクダマッタママ、少シヅツ大キクユスッテイタノ。君チャンハ、シマイニオ母ッチャ、オ母ッチャトコエヲ出シテヨンダノ。コエダケガヨナカニヒビイテ、オ母ッチャハウゴカナイ。

　君チャンハ急ニ、キャットサケンデ、ハネオキルト、ソトヘトビダシタ。ソシテソノママ足ヲフミハズシテ、ヒドイ音ヲタテナガラマヨナカノ高イカイダンヲコロゲオチテシマッタ。君チャンノオ母ッチャハ死ンデイタノ。

ソレデ、君チャンヤ弟ヤ妹バカリノコサレテシマッタノ。ソレニカイダンヲオチテ、ウチドコロガワルクテ、君チャンガネコンデシマッタノ。ソウシキハソコノウチノ人ガタクサンアツマッテ、ドウニカヤッテクレルコトニナッタノ。ソコノウチノ人ハ、ドレモミンナビンボウナ人バカリナノデ、ビンボウナモノハ、ミンナヨリアツマラナケレバ、カワイソウナモノダト云ッテイタノ。

トコロガ、オツウヤノバンニ、キテイタ人ガオソクナッテカラ目ヲサマシテミルト、ホトケサマノマエニソナエテイタモノガ、ドレモコレモ一ツノコラズナクナッテイタコトガ分リ、大サワギニナッタノ。ネコヤネズミノシワザデハナイ。ドウシタンダロウ。

ソノトキ、私モオツウヤヲシテイタノデスガ、ナニゲナク君チャンタチノネテイルトナリノヘヤニ入ッテイッタトキ、マアー、コトモアロウニ、ジブンタチノシンダオ母ッチャニアゲタモノヲ、君チャンヤ、弟ヤ、妹ガ、ムチュウニナッテ、タベテイルデハナイノ。私ハオモワズ、コエヲ出シテシマッタノ。ソレデミンナガ入ッテキタノ。ドウシタ、ドウシタッテ。コノトキ、私ニハ、ドウシテモ君チャンタチハオソロシイ、ノドマデクチノサケタオニノヨウニオモワレタノ。

ミンナ君チャンニワケヲキイタノ。君チャンハ青イ顔ヲシテ、ダマッテイタノ。ソシテ急ニワット泣キ出シテシマッタノ。泣キナガラ、君チャンガ云ッタワ。君チャンタチハ、オ母ッチャガ死ヌ四五日モマエカラ、何ニモ食ベルモノガナク、目マイガシ、ムネガヒクヒクトシ、ベッタリネタキリダッタノ。長イアイダ、タベモノヲ見タコトガナカッタトコロヘハジメテ、ソウシキノオソナエモノヲ見ルト、モウ矢モタテモタマラズ、目ガクラクラットシテ、ソレニ小サイ弟ヤ妹ナノデ、死ンダオ母ッチャニワルイトハ思イナガラ、スキヲネラッテ、ミンナデ、ムチュウニナッテタベテシマッタンダッテ。

ナガヤノ人タチハ、ソレヲキイテイルウチニ、一人一人ミンナモライ泣キヲシテイタノ。今デハ、君チャンモモウ長イコトガナイノ。ソレデモトキドキ私ニコンナコトヲ云ウノ。××××人ッテ、ミンナコウヤッテ、オ父ッチャガ死ニ、オ母ッチャモ死ニ、ジブンモ死ナサレテユクモノダナンテ、何トイウコトダロウ。カラダガナオッタラ、××××××××ニナッテ、×ヲ××テアル キタイナアッテ。

（一九三一、六、三〇）

（一九三一年八月「中央公論」）

朝の一景（壁小説）

武田麟太郎

これはおくれたかな、しまったぞ。俺は半分駈け足だ。
——
朝の早い空は冷く灰色にひろがって、遠くから、どっかの汽笛が大様にひびき渡って来る。工場通い（かいしゃ）の連中のぼそぼそ歩き、陰気な背中つきをしてやがる。それらを追い抜いて、俺は気がせく、腕の時計をひっきりなしに見る。その腕をそのまま、顔に持って行き、寝呆けて眼やにのくっついている眼をごしごしとこするのだ。

巧い、まにあった。川向うからチビの井上が来る。約束通りだ。木橋の上で落ち合えた。やけに愛嬌のある顔した井上は、ニコニコして、ちょっと手を帽子のふちにかけて、アイサツした。片手には弁当包みと、大きな番傘。——降るかな、なるほど、運河はぶつぶついって鼠色の泡を吹き出している。こいつは降る前じるしだ。

くっついて、奴の工場の方へ歩いて行く。

「こないだは失敬」——井上と逢うのはこれで二回目——「で——」と彼は眼でうながす。「うん」と、俺は答え、懐中にした××包みを手さきに感じ「大丈夫かね」

「大丈夫——これだけ早けれぱ。——着更え場で××てやる」

渡そうとしたが、前から来る奴がじろっと見たので小さな声で——「どこへ入れるんだ」「そうだな——こうつと」

「××××じゃふくれあがるぞ」

「うん、弁当包みの風呂敷にくるもう」

井上はアルミ箱を出して、内ポケットへ横にして押し込んだ。

「汁はこぼれねえのかい」

「心配するな、下らないこと、梅干だから平気だ」

「おい、おい、梅干はアルミを腐らせるぜ」

「お節介なやつだ、ちゃんと飯の間に隠してあるんだ——うん」と彼は手早く会話の間に片膝をあげてその上で、××を風呂敷に包みこんだ。

「恐ろしい弁当が出来たぞ」

「守衛に気をつけろ」

「信用があるんだ——なにしろ」

井上は会社の御用組合の中幹部どこだ。上のやつにも下のやつにも好かれているいい若者だ。安心していい。こい

つを×んだのは上出来だった。
「――でだな、××の方にも巧く手を廻す方法を講じてくれ」
「そいつがね」と、彼は頭を掻く。そしておやと、上向く。俺もそれにつられて空を見た。とうとう降って来やがった。――「女工はどうも苦手だ」
「嘘つけ、元気出してやってくれ」
「うん、やるよ、やるよ。そうおっかない顔しないでくれ。――巧く行けば、此の次までに、しっかりしたのを××しよう」
一本道。――左にまがるとやはり小さな運河を越したところに、井上の工場、石鹸会社が見えた。
「だが」と彼は云ったのだ。「こんなに早く××の衆と××がつけられるとは思わなんだ――随分、俺だけではなく、他にも、そいつを待ってたんだよ」
「××の衆」と云った言葉に俺はちょっと微笑した。右翼組合の若い元気な連中の気持が色々と考えられるのだ。
会社の煉瓦塀が次第に近づいて、はっきり見えて来る。雨は落ちついて降りだした。
「この次は」――もう別れねばならないので、俺は云った。「あさっての朝、今日の時間、れいの木橋、はどうだ」
「おっと」と井上は答えた。「あさっての朝は駄目だ」
「ダメか」と俺は自分の方の予定表を心のうちで繰って見る。
「ダメだ――××だからな」
「検査？」
「うん、ほら×××××」
ほう、と俺は何かに感心して、井上の顔を見る。なるほど、そんな××があった。すっかり忘れてた。
「すると、お前は二十一だな」
「そうだ、とられるかも知れん、何にしろ、申分のない身体だからな――うん」
彼はうなずいて笑った。「とられてもよし、と考えてるよ」
――そうだ、男は一人前になると、×××××と云うものを×××なしにされる。そして、強い奴は事情が如何でも二年の××屋敷の××だ。――ところが、俺は？――俺もちょうど、こいつと同い歳、二十一になった若者だ。「普通ならば」そんな××を×××ければならないのだが。――だが、その××もない「位置」に置かれている。そんな一切の×××××的な「世間ごと」から切り離されて。×××が奴らの言葉で云えば非合法だからだ！　俺は俺たちの間に××に×きている人間なんだ！
一瞬の感慨。俺は、しかし、すぐ云った。
「そんなら、しあさっての夜、八時、木橋で」
「うん、そうしてくれ」
そして行こうとする俺に――「おい、この傘持って行っ

ていいぜ、名前も書いてないから」と云った。雨は今日中は降りつづけるだろう。

（六月二十五日）

（一九三一年八月「中央公論」）

差入競走（壁小説）

細田源吉

検束を喰って二日目。

A署の留置場。何しろ三畳って室に、十三人だ。争議団の仲間だけで九人、後は賭博だとか、無銭飲食だとか、そんなことでぶち込まれた男達だ。横になって、ぐっすり寝たくも睡られない。みんな、膝っこを抱いたまま居睡るよりないんだ。

室は蒸々してニシン臭い。二三分もじっとしていると、六月のことだ、蚊がとっついて来る。股や尻には、南京虫だ。畜生！

「……そいつがな、とてもモチ肌だろうじゃないか！」

ごそごそ話声が聞えて来るんだ。署長の許可してくれた新妻のことを、まるで情人のように、看守が猥がって話しつづけるんだ。椅子を持ち寄った二人の看守は、傍若無人だ。

午前四時前後らしい。ボートの入った高い窓が、煤色(すすいろ)になって来た。
「もう睡れねえ！」と、俺は忌々しくなった。
……猥談をやめてもれえてえなあ！
……やめねえんなら、もう少し気のきいたのをやってくれねえか！
だが、見ると、九人の仲間はまだ睡たがっているんだ。口一つきこうとしない。両隣りの室にも、向い側の室にも、俺達一つ会社の××××の仲間が、四五十人もいるんだ。で、どっちにしろ、時刻が早過ぎるようだ。
俺は仲間の安眠を祈って、もそもそと身体を置き替えた。ところが、仲間の一人が、首をあげて俺を見るなり低声(こごえ)だが、
「うるせえなっ！」と、やった。
「うん……癪だ！」
その仲間は、だが、S同盟なんだ。俺はZ労働のものだ。同じ××××製作所で、同じ××××をやりながら、組合は二つに分れているんだ。それでも俺は××だと思って、一緒に頑張りつづけているんだが……。
「おい……仕様がねえなあ、こっちでもおっぱじめるかっていたんじゃないんだ。その中で、天井へ口をあけて寝こけているのは、無銭飲食の男だ。
「いっそ眠れねえなら、エサが欲しいな！」
「そうだ……だけんど、まだエサの時間じゃねえよ」
無銭飲食のあいた口を見たせいだ。皆な、飯（エサ）が喰いたくなり出した。
××の方から、
「まだ夜があけない！　静かにしろ！」と怒鳴って来た。
「あけたら女房んとこへ帰れるんだろう」
と、仲間が、小首を突出してささやいた。くすり、くすりと、笑った。
「あはァ……」と、声をあげたものもあった。
「みんな！……」
俺はとうとう起ち上った。「エサのことで、俺はみんなと話し合ってみてえんだがなァ……俺はZ労働だ。Z労働は、そりゃS同盟と比べたひにゃ金がねえかも知れねえがね、どうだ兄弟！　昨夜から差入れのエサが違って来やしねえか？　Z労働から差入れたのは握飯だぜ。ところがS同盟なァ上弁(じょうべん)だ。協同××××委員会じゃ、双方の組合で握飯にきめたんだ……」
「そりゃあ仕方がねえじゃねえか。S同盟じゃ組合員が財産だから大事にするんだ。」
「そんなら協議破りじゃねえか！」
そこへ、看守の方からまた怒鳴って来た。
「うるさい！　黙らないと引きずり出すぞ！」
だが、一寸の間だった。俺は辛抱してられなくなった。
「協議破りはいけねえよ。第一、まずい握飯の前で、上弁

をぱくつかれちゃあ、やりきれねえからな。そんな真似するのも、肚を云やあ、組合員でも奪いとろうってんだろ！……」
「まずいもの食わせる組合よか、うまいもの食わせる組合の方がいいからなあ」
「冗談こくな！」
そこで、俺が立ち上りかけたが、看守がぬっと顔を出した。
朝になった。点検があった。食事は七時。ここで呉れるエサはとても××ない。仲間は委員会からの差入れをまっていた。
「田岡！」
「佐山！」
順々に看守が争議団員を呼びあげた。今朝はZ労働の方が早かった。そこで、俺も呼ばれて立った。看守から渡された弁当の箱を、俺は変に見廻した。S同盟のと間違ったんじゃねえか、と思ったからだ。ところが、矢張りZ労働から差入れたんだ。おれ達の幹部がS同盟と張り合い出したな、馬鹿！ 俺はあぐらをかいて、蓋をとった。
だが、俺達の後でS同盟の男達が順々に呼び上げられ、しかも上弁の外に手拭が一本ずつ配られた。
「どうだい！ S同盟はこうだ！ こっちへ来たらどうだい！」と、先刻からのあの男が、唆るように言った。
「ふざけてやがる！」
俺は、どっちの××に対しても、糞ッ、なんのための×××××だ、俺達労働者のためでなくって、組合を太らせるためだ！ と喚かずにいられなくなった。
「おら、差入れ競走なんて聞いたことがねえんだ……××××じゃ社会主義競走ってのがあるそうだが、だから、ダラ幹だって悪態つかれるんだぞ！ 今度の××××のビラを見たか！ スローガンなんかねえぞ！ てめえの組合の広告だ！ それがなんで××××の伝単だ！ 俺達の検束だって、ダラ幹が××とグルで××んだと思わねえか！ 職場××の騒ぎン時だって、そいからストック××し防止の時だって、みんな俺達××な××を手際よく引っくくらせるための会社とダラ幹と××の陥穽だ。××××製作所二百人の×××××で二回に半数の兄弟をぶち込ませたのは誰だ！」
俺はガンガン鳴り響くような声を立てた。他の室にいる俺達の仲間へ呼びかけるためだ。だが、それだけテキメンに、俺は××に引きずり出され、通路のコンクリートの上で××だり××たりされた。揚句に、そこへ一日××された。

六年七月作

（一九三一年「中央公論」八月号）

オルグ二人（壁小説）

村山知義

月に二十円あれば——いや、夜店のバナナ屋みたいだが十八円あれば万事完全に解決なんだ。（俺達の仕事では何しろ交通費がどうしても相当かさむので）——だが、その十八円。

インテリ出は×××を作るのがうまいが、俺達と来ちゃア——それに、やっとの事でシムパを一人××しても、どうも兎角シムパというものは部署の上の方の者を支持したがるんで、俺見たいな、地×オルグ位の者はいつ投げ出されるか知れない。だもんだから、あんまり苦しい時は、そんな事を云っちゃあいけないんだって事はくれぐれも知ってるんだが。——

俺とXとは同じ工場（金属だ）の分会員だが、争議で先ず俺が×になった。そして同じ地区の別の××オルグを命じられた。俺は家を飛び出して、不思議な縁をたどって、或る大学の学生で、二階六畳を間借りしている男の所へころがりこんだ。仮にこの男を一番と呼んで置こう。まず仕事はうまく行った。一番はプロレタリア小説を書いていた。俺が材料をやると、よろこんでとても興奮していた。だが二週間目にXがばれて、Xは家を飛び出した。雪の降ってる日だったが、Xは行き所がなくて俺をたよりに一番の所へやって来た。Xはまだ十七歳だ。初めて家を出たので興奮していた。

「おれ、とうとう家を出ちゃった、さア、モリモリ××ぞ！」

Xの家は親爺もお袋もとても反動で、会合へ出るたびにXは親子喧嘩をしなければならなかったのだ。

年の暮（去年だ）が愈々迫った或る夜、俺とXが××委員会から帰って来たら、一番は今度、上の方の或る人を××しなければならなくなった。それでその男のいる××へ間借をしてそこへ住むことになったから、ここは解散だと云った。それも今からすぐ引越すんだと云う。俺達は「ウン」と云った。そして円タクを頼んで来て、手伝って一番を引越さした。俺達は何もない部屋へポツンと残った。金は二人で三銭しかない。しかも一番の話に依るとここは××だそうだ。考えあぐんだ末、十二時近くなって、やっと二番の所へ行くことにきめて、それぞれ小さな風呂敷包みを一つずつ下げて出た。二番は同じ地区の或る××付のオルグだから、こういう事は原則的には許されていないんだ

が仕方がない。二番の受持××で動揺が初まった。そしてその関係上、学生×××が一人出来たからそこへ行くから引っ越してくれと云い出した。たった二週間目だ。俺は足をスリコギにして、二番が引越す四日前にインテリである出版物の支局の仕事をやっている三番の所へころがり込んだ。Xは X で別に探し歩いていた。所が四日目の夜、

「俺にゃァ矢っ張りさがせねえや」

憔悴した顔をしてXがころがり込んで来た。

こうして三番の所で一ト月程たった。所が或る晩、俺が九時頃帰って来ると三番はしきりに荷物を片附けている。戸籍しらべに下のオカミが、二階には男が三人いると云ってしまったし、別に出版物の支局の方からもバレて来たから、即刻、×××してくれと云う。Xは分会の会合に行ってまだ帰って来ない。仕方がないから俺はXの分と二つ風呂敷包みを持って、Xがいる会合に行き、会合の済むまで待って、二人は外へ出た。確か二月だった。仕方がないから飯屋へ這入って相談した。さっきから吹いていた風にとうとう雨がまじり出した。ひどい吹雪になった。考え迷って、悪いとは知りながら、同じ地区の××の分会キャップをしている四番のうちへグショグショに濡れて行った。だがこれは忽ち地区委員会の問題になり、××に生命のある男の所にいることは階級的な罪悪だと厳重に批判された。俺は仕方がないから三番の越した先をさがし当てて這入りこんだ。Xはのろまで無口で俺よりシムパさがしにかけては条件が悪いので、行く所がない。××ではまだいるかと批判される。——

俺が二度目に三番の家へ這入って半月たたんうちに或る夜遅く、カラッ風に吹かれながら、たった二册雑誌を持ったXが、やって来た。物も云わずに上り込んで来た。

「野宿するつもりで出たんだが——」

その牛見たいな顔に涙のアトがあった。俺とXとは又一緒にいることになった。それから一ト月目に——いや、何処迄書いても同じことだ。××は今、苦しい時期を経ているんだ。これが俺達の××なんだ。

三一・七

（一九三一年八月「中央公論」）

生きた新聞　ファッショ人形（一幕）

久保　栄

舞台の中央に、幾つかの人形を竝べた夜店の人形売。

人形売　（観客に向って）さあ、さあ、皆さん、大評判の自動バネ仕掛セルロイド人形。毎度お買い上げのお馴染の品から唯今特許出願中の斬新流行品に至るまで、ずらりと取りそろえまして、よりどり十銭。丁度、工場の退(ひ)け時で、電車はあのとおりの満員鈴生(な)り、こう申しちゃ失礼だが、僅かのお給金で、日がな一日働らかされた揚句、ギュウギュウ詰めの吊革にブラ下がって揉み立てられりゃあ、いい加減、カンシャク玉が破裂して、玄関の格子を開けるなり、おかみさんの横っ面を一つ二つ張り倒したくなるのが人情だ。さあ、あの満員電車を五六台やり過ごす手間で、店は狭いが、手前どもの宣伝品でも御覧になって、お気に召したのを御土産にお持ちになり、赤の集会なぞという危ない場所へは立ち寄らねえで、透いた電車で手足を伸ばしてお帰りなさりゃ、おかみさんもお小さいのも大喜び、家内安全、一家円満はきっと請合う。尤も中にゃどうせ夜店の売物だなんて、頭から馬鹿になさる不見識なお客もあるが、どうして手前どもの品は、そんじょそこらの露店物とは訳が違う。全世界到るところで――といいてえが、ロシヤはいけねえ。ついこの間も、あの国の腕っこきの人形作りが、仏蘭西から原料を仕込んで、産業党人形てえ素晴らしい珍型を拵れえたんだが、眼のねえお役人にかかっちゃ耐まらねえ、こんな代物を売り弘めちゃ、社会の秩序が擾れるてえんで、おさしとめになったという情けねえ有様だ。だから、あの国は別として、欧米各国津々浦々の果までも、羽根が生えて飛ぶような売れ行き。いわば諸外国で試験済みの、一粒選りの特製品だ。――（観客席の一方に向って）もし、もし、そっちの絆纏着のお爺つぁん。どうです、ひとつ、型は古いが、お馴染の社民人形、和蘭産の黄色セルロイドで製造した飛び切り上等の優良品だ。（と言い乍ら、人形のひとつを取り上げる。）物は試めし、この人形の眼の前に、お紙幣(さつ)を出して御覧なせえ、最新科学を応用した霊妙不可思議なバネ仕掛で、お金と見るなり、この人形が生けるが如く両手を出して、ピョ

ッコリピョッコリお辞儀をするてえのが手前の味噌——え、何？ そんなものは、こちとらの仲間じゃ流行らねえ？ え、何だって？ ブルジョアの旦那に、値を好く買ってもらえって？ ——しよぅがねえな。おめえさん、腹掛の丼に電車切符一枚しかお持合せがねえんだろう。十銭がとこのふん切りのつかねえ様なお客は、場塞げだから前に立たねえで貰おうぜ。——(観客席の別の方角をむいて)もし、もし、そっちの菜っ葉服の兄さん、どうです、こいつは。近頃はやりの真っ紅な色をした威勢のいいセルロイド人形。名づけまして、左翼社民人形てえんだが、お気に召さねえかい。——何？ え？——この間、隣の寅公が買った？ じゃあ、お隣同士、お揃いだ。——え？ 何？ ——寅公が雑巾でゴシゴシ拭いたら、赤い絵具が剝げて、生地はやっぱりまっ黄いろだ？ ——しよぅがねえな、底を割っちゃ。——え？ 何？ ——試めしにお紙幣を出して見せたら、やっぱり手を出しておじぎをした？ ——ウーム、そうか。——えらい、さすがに今夜はお客種がちがう。そう眼が高くっちゃ、仕方がねえから、こっちも対抗上、とっときを出そう。(ほかの人形をつまみ上げて)さあ、驚くな。こいつは、ファッショ人形といって、いわれ因縁を述べ立てりゃ、伊太利のムッソリニ会社が、一九二〇年に始めて売りだして全世界をあッと云わせたといぅ曰くつきの逸品。丁度その頃イタリーでボルシェヴィキ会社発売の鋼鉄製の赤人形が禁止を食って、その人形を買った奴も売った奴も、散々お上のお叱りをうけた跡だったから、瞬くひまにこいつが全国にひろまった。尤も労働者にゃ、あんまり受けがよかぁなかったが、中どこのお百姓とか小市民とか、とかく赤い色の嫌いな頼もしい手合は、しきりとこいつを珍重したもんだ。ファッショ人形、又の名を独占資本主義の突っかい棒といぅ位だから、セルロイドはセルロイドでも、かけ値なしの頑丈一式、さあ、この通り(人形を地べたにおいてフンヅケる。)踏んだって、蹴ったって、びくともしねえ。——何？ ——もっと足に力を入れて踏んで見ろ？ ——そりゃ、いけねえ。何てったって、もともとセルロイド人形だから、鉄でこさえた赤人形みたいなわけにゃ行かねえ。(大事そうに拾い上げる。) ところで、この人形の売れ行きがいいので、ハンガリーから、スペイン、ポーランドと、伊太利を見習ぅ人形作りが、日に増し月に増し殖えて来た。で、とうとう、こいつが最近にはヨーロッパの真んまん中、ドイツ共和国までノサバリ出したもんだ。何しろ、世界各国とも労働者がずんずん利口になって、社民人形は買い手がなくなる一方だ。で、これまで、黄色いセルロイド人形を作ったものも、宗旨を変えて、大抵気の利いた奴は、このファッショ人形の脅喝押売りの一手販売元になる。尤も極くわずかの同業者は、——いや、僅かともいえねえが、とかく眼先の見えねえ凡クラ野郎

は、よせばいいのに、赤人形の製造元に鞍がえをしやがった。余談は扨おき、ざっとまあこういう塩梅式で、泰西諸国の流行につれ、日本の同業者の間でも、近頃だんだんファッショ人形に眼をつけ出した。そこで手前の売捌元が機先を制して、イの一番に特許出願の抜け駈の功名。出願中は、特に宣伝のため大々的に勉強して、五十銭ともいいてえが、四十銭、三十銭、二十銭、十五銭、ギリギリ決着、ただの十銭というお値段だ。さあ、さあ、買ったり、買ったり。——え？ 何？ そんな下手な口上じゃ、いくら買いたくっても手が出ねえ？ ——え？ ——なぜ、また、ドイツにまでファッショ人形がはやり出したか、分らねえ？ ——おっと合点、そこに抜かりがあるものか。ドイツの独裁政治は、ファッショ人形売りひろめのためにゃ、宣伝価値正に百パーセントという最新ニュースだ。赤の宣伝演説なんぞよりゃ、いくら面白いか知れやしねえ。ドイツてえ国は、先刻御承知の通り、去年の春まで、日本製のこの社民人形なんぞよりゃ、はるかに優等品のヘルマン・ミューラー会社製の社民人形が天下を風靡していたもんだが、この会社もだんだん世帯が苦しくなって、賃金の切下げや、失業保険の引下げをやり乍ら、それでも一方じゃ、でっかい巡洋艦を造ったり、赤い仲間のメーデーを押しつぶしたり、何とか戦士同盟てえ恐しい結社を解散させたり、いや八面六臂の働き振りで金融ブルジョアに散々御奉公をしたが、もうこうなるてえと、ただの社民人形じゃねえ。何時の間にかファッショ人形に早変りの形だ。この人形が日本製品とちがうところは、セルロイドが硬質で仕上げが見事だというばかりじゃねえ、日本製品のように、僅かの端た金を出して見せても、安っぽく御辞儀をしねえところが値打だ。が、とうとうヘルマン・ミューラー会社も、金庫に大穴を明けちまってブリューニング聯合会社に世帯をゆずり渡したんだが、こいつはまた前の会社に輪をかけたファッショ人形の販売元。も一つ後ろにゃ、ヒットラー会社てえ斯界のダークホースも控えている折からだ。そこでブリューニング聯合会社も、いよいよ腕に縒りをかけて、世界の不景気もここまで来りゃ、もうブルジョア民主主義の議会政治のってえ、まだるっこい事を云っちゃいられねえ。ちっとやそっと横暴呼ばわりをされても、ありったけの勢力を集中して、早えとこパッパと事を運ばねえじゃ、世界中の、ひいてはドイツ一国の安全が保たれねえ。——え？ ——何？ そりゃ、ブルジョアだけの安全だろうって？ ——よけいな半畳をいれちゃいけねえ。ブリューニング聯合会社は、去年の七月からついこの間の十月七日までに、もう数え切れねえほど「緊急命令」を発布しているが——何？ 横暴？ ——横暴なことがあるものか。こいつは、ちゃんとドイツ憲法第四十八条てえのに麗々しく書いてある。知らねえ奴は知らねえだろうが、カイゼル髭が世

界の檜舞台から影を消して、今の共和国が出来たなあ、一九一八年。そこでドイツのブルジョア様は、共和国ドイツの憲法てえなあ、この世で一ばん自由な憲法だと大自慢で仰しゃったが、こいつは確かにそうに違えねえ。その一ばん自由な憲法に書いてある通りやるんだから、文句のつけようはありゃしねえや。つまり、ドイツの大統領は緊急時にゃ、議会を経ないで、軍事、財政、行政上の処分を、思う通りに出来るというのが、憲法第四十八条。――何？　――独裁政治絶対反対だと？　――うるさい、静かに聞いてくれ。そこで歴史始まって以来のこの不景気を切り抜けるにゃ、挙国一致で苦しい思いを我慢しなけりゃならねえ。――おいおい、そこの兄さん滅多な所に煙草の吸殻を抛らねえでくれ。うちの商売物はセルロイド細工だからな。――日本でもそうだが、ドイツの国も失業者の大洪水だ。おととしの暮にゃ、失業者二百十万。去年の暮にゃ、三百八十万。越えて今年の正月にゃ四百八十万、今年の夏にゃ失業者五百万。この勢いじゃ何処まで行くか分らねえが、いってえぜんてえ、なぜこんなに莫大な失業群が出来るかてえと――ええ、うるさい、うるさい、向う見ずの赤の連中が、民衆の不平不満につけ込んで、とんでもねえ出鱈目のお説教を並べ立て、挙国一致の足並をかき乱し、労働者に仕事をサボらせるからだ。――仕事をサボるからドイツ全国の生産力が衰える。生産力が衰えるから不景気になり、

不景気になるから失業者が出る――ええ、黙ってろ、黙ってろ。ここが大事なとこだ。で、この手前どもで宣伝中のファッショ人形の有難味は、国粋主義が表看板。日本て国も、この国粋保存てえ思想にかけちゃ、世界万国に劣らねえ筈だが――何？　――ファッショが国民主義的で排外的なのは侵略戦争の下準備だって？　――ええ、待て、待て、待てったら。とにかくこの、小うるせえ議会を飛び越した「緊急命令」という奴で、一方じゃ株式会社や有価証券の税金を引下げて今の世界の大立物金融ブルの懐工合を楽にして、景気の立て直しに御尽力を願う一方、一般民衆にもせいぜい辛抱をして貰い、世界大戦ももう大分前のことだから、廃兵、遺族の扶助料も、出来るだけ削りとり、下級官吏や下っ端軍人のお給金も切り取って、小の虫を殺して大の虫を生かそうてえ魂胆。――ま、こういった塩梅で、この資本主義の世の中にゃ社民人形だ、ファッショ人形だと、あとからあとから種々さまざまな流行品が現れて、つっかい棒のお役目をつとめるから、赤人形の効能書きに書いてあるような夢みてえな話は中々以て通用しねえ。――何？　――こんなセルロイド人形が突っかい棒になるもんかって？　――冗談じゃねえ、こいつが頑丈一式で、踏んでも蹴っても、びくともしねえなあ、さっきみなさんのお目の前で実験ずみだ。嘘だと思うんなら、もう一度やってお目にかけらあ。さあ、この通り、これでもかこれでもか。

（力ぁまってメリ〳〵と人形をふみつぶす。）　おっといけねえ、こいつあとんでもねえ事をした。大事な商売物を無駄にしちまったぜ。（惜しそうに拾い上げる。）　おやおや、折角呼び集めたお客が、みんなどこかへ散っちまったぞ。（一段と声をはりあげて）　さあさあ皆さん、寄ったり寄ったり、大評判の自動バネ仕掛ファッショ人形。特許出願中は特に宣伝のため、大々的に勉強して、ただの十銭。さあ大安売り、大安売り、最前からとぶような売れ行きで、今夜はもう一百から売りつくして、余すところわずかに十個、お時間も大分おそいから、ギセイ的社会奉仕の大衆相場、一個十銭とも言いてえが、八銭、六銭、五銭、三銭、エエ、大まけにまけて、唯の一銭、一銭銅貨が一枚だ。畜生、これでも買わないか、誰一人買わないか、買わないか。

声をからし叫んでいるうちに暗くなる。

（一九三一年一〇月）

万宝山

伊藤永之介

一

豚の唸声が夕空にワンワン響いていた。
「何時になったら、工事さかかるべなア」
鶏に餌をやって戻って来た裵貞花が訊いた。
額にブツブツ粟粒のような汗を浮かして、趙は一生懸命満州式の柳巴子（種籠）を編んでいた。朝鮮の故郷を追い出され、満州での永い放浪生活の間に覚えた、夜業仕事だった。
「まだ長春から返事来ねえだども、はじめねばこまるべエ」
　彼等は三月にこの土地へ移って来て、開墾をはじめた。満州では何処もそうだったが、此処も水利がまるで無かった。約十五支里東を流れている伊通河まで、水田から一直

線に水路をつくることになった。開墾の方が略片付くと、すぐ部落総出でそれにかかって、それも完成に近い処まで漕ぎつけた。ところが突然、吉林省から工事中止の通告書が来た。しょうことなく十日程前から仕事を休んでいた。
「何日になったら、返事来るてヨ」
「分らねえ……」
趙は不機嫌をかくせなかった。
通告書を受けるとすぐ、金光水と趙の二人が、長春に馬を飛ばして、日本領事館と鮮人居留民会に取消を要求して呉れるようにと訴えた。そしてその後何度返事をききに行ったか知れなかった。工事は半日を争うのだ。
しかし交渉して呉れているものか、居ないものか、それさえ一向埒が明かなかった。
女房は炕に這い上って、両腕に膝小僧を抱いた。
もう日影も消えたのに、彼女は飯の支度に立とうともしなかった。
「こんたら事していたら、皆乾干しになってしまうべエ」
暫らくして咽喉のつまった声で言った。
ズーッと此方、麦粥ばかり食っていたが、それも今朝で種切れになった。それをどうするかと言っているのだ。
「そうだとも、俺アすぐ工事さかかるように相談して来るつもりだヨ」
採種期はもう迫っていた。楡樹の方では、もう稲が四五寸にのびたところもあるらしかった。明日にも水路が通じなかったら、今年の収穫は皆無だ。行先は真暗だった。
クルックルッと不馴れな手付で、梢は柳の小枝を編み続けた。水で薄めた粥を食った切りで、眼先が暗むようだ。
――愚図々々してないで、粟でも借りて来ねえかよ。
向っ腹で咽喉まで出たが、言い出す気力がなかった。隣り近所を借り尽して了っていた。それに彼等だって余分がある訳じゃない。
「何時売りに行く気だか、遅くなったら買手がなかべに」
女房は腹立たしげに、趙の手元を凝めた。柳斗子はやっと二つ出来た切りだった。四五日過ぎたらこの辺の支那人百姓は籾蒔きを終る。
「明日二つでも三つでも持って行くべ、なんぼとも言われねえ……」
趙は右手の甲で汗と洟汁を一緒にぬぐった。
姜点始の婆さんがドロドロに汚れた裳を揺って這入って来た。
素焼の湯器を両手に持っている。
「日が永くなったのオ、これ今ためしに造えて見たから、食うて見てけれ」
湯器の中のものは焼きたての包米だった。
褒貞花は、急に笑皺を寄せて立上った。
「あい、またなア、何時も貰ってばかりいて……」
「なんの……下手だからうまくねえかも知れねえども」
婆さんはノソノソと出て行った。

外で遊んでいた息子の太秀が、跣足でチョコチョコと駆け込んで来た。
太秀は薄暗がりで、眼を光らして母親の方を見ていたが、歪んだ飯床の前に膝をつくと、早速包米をパクつきはじめた。
「これヨ、おまえばかり食うでねえどオ、この乞食餓鬼」
母親が恐ろしい見幕で怒鳴った。
が太秀は母親達に背中を見せて、がつがつとむさぼり食った。
「太秀や、貴様ばかり食うものでねえ」
趙も土間から首をもたげた。
母親が息子の手から湯器を引ったくった。
「おい、誰か居るか」
その瞬間、青い長掛子を着た巡警が、のそりと這入って来た。
丸太で背中をどやされたように、趙と女房は飛び上った。
――こりゃ、ただ事じゃない。
趙は光のない怯えた眼をショボショボさせた。
「お前は何か、農具は県の指定のものをつかわねばならん事を知ってるだろうな、どうだ」
巡警は彼を真向からねめつけて、右手に握っている、袋入りの鉄棒の尖端を動かして見せた。
「ハア、それはもう……」
趙は土べたに尻餅をついたまま、哀れっぽい眼で巡警を見た。
と十個ばかりの柳巴子を担いだ支那人が巡警のうしろから顔を出した。
「これはなア、値も安いし、使いいし、一挙両得じゃ、お前さんの仲間がみんな大喜びで買った品物だ」
支那人は変に早口で喋った。
南満洲の太子河のほとりに居たとき、精米所を経営している巡警が、自分のところで精白しない米には税金をかけると云って、鮮人百姓を困らした事を思い出した。
趙はあやまりにあやまった。
「金さえあれば貰うども、食うことも出来ねえ仕末で……それに俺ア、この通り自分でつくってるでなア」
「何だ、そりゃ、柳斗子じゃないか」
黒い顔に菊面のある巡警は前に屈んで、趙が出した柳斗子を鉄棒に引っかけて、グイと引っ張った。
「こっちへ出せ、お前は許可を受けているのか、指定のもの以外勝手に売り廻ることはならん」
狡るそうな眼の支那人は、猫のように素早く二つの柳斗子をひったくった。
趙は怒つて滅茶に飛びかかって行った。
と巡警の鉄棒がドシドシと肩から背中に来た。趙はカッと頭に何か上るような気がして、土間に仰向けにブッ倒れた。

「あれ、なにするッ、それだの持って行かれたら、俺アどうなるてか……」
女房が顔を真っ赤にして怒った猿のように土間に飛び降りた。
「黙れッ、余計な口をたたくな」
巡警は悄々しい歪んだ背中を見せて去った。
その夜、鮮農仲間のかたまっている四支里ばかり先の部落に、趙判世は工事継続の相談に出かけて行った。

二

鈍い太陽がいつも同じ高さにあるような気がする、そんな荒れた高原地帯であった。
何方を向いても何一つ眼ざわりになるものがない。北の方角に万宝山の低い隆起が見えるだけの平野は、北満洲の狂暴な冬が、殴りつけ、引き裂いた。荒っぽい起伏を見せて何処までも拡っていた。
風の音だけが、パン粉のように埃りをかぶった、赤錆びた雑草に唸っていた。
白い埃りが絶えず捲き上って、野面を何処までも吹いて行く。
遥か東の方に伊通河が横っている。野面をそっちに向けて、生々しい黒粘土を掘り返した水路が、地割れのように走っていた。
「それ、もう一頭張りだ、皆精出せよ――」
趙判世の削ったような頰には、微笑がムズムズと這い上った。
スポッとスコップを抱き込んで離さない粘土を、趙は根かぎりの力で跳ね上げた。その度にムッと息詰まるような新らしい土塊の臭いが、空っぽの胃袋まで貫きぬけた。
「おい、来た、承知だ」
苦力と百姓の群が、彼の周囲で必死になって動いていた。その横顔が胡麻油を塗ったように汗で光った。
あの夜、趙判世が相談に行くと、金光水の家に部落の百姓達が寄集っていた。もう誰も、領事館や居留民会の交渉を当にしている者がなかった。工事は次の日から継続されることになった。
それから今日で四日目だった。もう一町ばかりで水路は貫通するところまで来ていた。
黒い粘土が黒煙のようにモクモクと掘り返された。だんだん掘り下げるほど赤ちゃけた色になった。
頭の上をトロッコがゴーッと矢のように走った。モッコをかついだ百姓達が、上にかけ渡した足代板を、凹んだ腹を折り曲げてヒョロヒョロ上って行った。
「寝ぼけるでねえぞ、高い切場だったら命とりだあ」
誰かが唸った。足代板から寝呆けて転げ落ちた仲間が、顔一杯泥まぶれになって起き上るところだった。そういう

誰も寝呆けて居ないものはなかった。眼の先が霞んで自分が何をしているか分らなかった。
「おーい、何処まで来たア」
叫びと一緒に、すぐ向うの地表に猿のように飛び上ったのは姜点始だった。
(此方からも誰か叫んだ。)
「会いたさ、見たさにやって来たよ」
笑い声が地の底から爆発した。かけ声がそれに元気づけられるように調子を合せた。
黒砂糖色の顎骨と咽喉笛の飛び出た、数十人の苦力と百姓がドシドシとスコを揮っていた。
黒土が炭煙のようにモリモリ崩れる、うしろに投げすてられる。
二間巾の水路は、人間が歩くような速度で、メキメキと前進する。
「この分じゃ、明日にも水通せるぞオ」
趙は泥まぶれの握挙で額の汗をこくって叫んだ。
日本人地主に田を奪われ、家まで借金の抵当にふんだくられ国境から満洲へと流れ出て以来、何年も忘れていた人間らしい気持ちが、ムズムズと全身を流れるのを覚えた。
金光水達数人が、此処へ辿りついたのは三月はじめだった。
彼等は当座、長春で阿片の密売をしている鮮人仲間の厄介になっていたが、この辺の土地が荒れるに任せて放擲してあるのを知ると、その借地に百方奔走した。地主との直接交渉は、仲々思うように進まなかったので、ブローカーの沈を通じて万宝山五百天地の荒蕪地を一天地につき年籾二石で向う十箇年間契約した。が五百天地を開墾するにはこの数家族ではどうにもならなかった。もと慶尚南道で面長をしていた関係で、金は自分の近郷から満洲に流れ込んで来ている多数の百姓を知っていた。彼はそれらを呼び集める事に気がついた。
間もなく万宝山には、地主や巡警に北へ北へと追いまくられた百姓達が群って來た。荒れた野面には、高粱桿で蒲鉾形に屋根をふいた泥の家が、ポックリポックリと立ち並んだ。
それまで物音のなかった野面に、彼等の叫び声や物音が日に日に高まり出した。十人、二十人、三十人、と泥と垢で白衣をテカテカ光らせた鮮人の群が流れ込んで来た。趙判世の辿りついたのは四月に這入ってからだった。
「おしい、おしい、来たぞオ」
不意に地表からどえらい叫声が起った。
何事だ。趙判世はスコップを投げすてて水路から駆け上った。
「見ろ、馬兵でねえか、此方に来るぞオ」
百姓達は足代板を柳条のようにたゆませて、タタ、タタッと地表にあらわれた。
伊通河の岸を紐のように馬兵の群が此方に続いていた。

何百騎いるとも知れなかった。
それは悪い夢のように、平野の汚点（しみ）になって流れて来る。
趙判世の後頭部を不吉な予感が掠めた。
馬兵、それは悪病だった。彼はこの馬兵に二度も村から追われた。一度は家宅捜索を受けた時に、彼等の侵入を遮った為に、矢庭に銃床を横顔に受けた。その傷はまだ毛虫のようにこめかみの下に残っていた。
――来た。全然予想していない事ではなかった。がそれはとうとう来た。
野っ原にボロ屑のように群った百姓たちは、背を丸めて一セイに河の方を向いていた。
馬兵をのせた一頭の足の短い満洲馬が、プンプン真新しい香りのするような粘土を四方に蹴散らかして、砲丸のように百姓の群を射ぬけて行った。
「工事中止、省政府の命令じゃ、中止せい！」
と見ると、それまで縦隊だった馬兵は、散弾のように野っ原一面にひろがって、暴風のように迫っていた。
逃げるひまもなかった。バーッと飛沫のように飛び散る苦力と百姓を蹴散らして、馬隊は疾風のように駆けぬけた。そしてまた戻って来た。
野面で、汚れた白衣の百姓達が野鼠（のねずみ）のように乱れた。悲鳴、叫び、呻めきが、ドドドッと地殻に轟く馬蹄にこんがらかった。

趙は馬の蹴散らす泥土を浴びながら、無我無中で、水路の底に飛び降りた。
「何だって云うだア、畜生、無法にも程がある」
一隊の青服の当兵（ターピン）（支那兵）が、すぐ上で馬をとめた。
「出ろ、おい、貴様出ろ、上って来い」
黒土を崩してバラバラと飛び降りて来た当兵が、すぐ趙の腕をとらえた。
「こっちへ来い、行くんだ」
百姓たちは人々の頭越しに、褂（チョコリ）の袖をグイとつかまれながら、反り返って必死に反抗している趙判世を見た。
「行く理由（わけ）はねえで、俺ア何も悪いことした覚えはねえ」
とドシドシという鈍い音と一緒に、銃床が彼の痩せた背中をどやした。
土にまみれ真っ黒に上衣（チョコリ）を垢滲ませた百姓達は、ただ光りのない眼でぼんやり眺めているだけだ。
「こりゃ、ひどいべえ、今頃になって工事を禁止するなんて無法だア」
若い胸板の厚い孫道時（ソントシ）だけが、彼のそばを、雑草ばかり食わされてだぶついた馬の腹がかすめたとき、飛び上りざまに叫んだ。
乱れ立った馬隊は、間もなく隊伍を整えた。そして先刻のように、縦隊になって北方にのろのろと動き出した。進むにしたがって、土煙が二丈も三丈もの高さに濛々と立ちのぼった。

逃げ遅れた百姓たちは、彼方に三人、此方に五人と怯々(おずおず)とかたまって、その進行を眺めやった。
馬隊の真ん中頃には、趙たちの積み込まれた荷馬車が動いていた。
身軽な騎馬に遅れまいとして、一生懸命足掻いている駄馬の尻で、十人近い百姓が荷物のように飛び上った。お互の肩を掴(つか)んで、ボロ屑のようにかたまり合っていた。
「チョセオン!!」
誰かが哀れっぽい声で趙判世を呼んだ。がそれっきりで、百姓の群は押黙って、引かれて行く仲間を見送った。
馬隊はやがて轟きを上げて、濁流のように野面を流れ去った。
先頭の青い旗が、灰色に塗りつぶされた平原を、水脈のようにふるえて行った。

三

黒帽子(ヘイモーズ)（日本警官）の着いたのは、次の日の夕方だった。彼等は一台の荷馬車に、毛布やら天幕やら罐詰やら一杯に積んで、僅か五名の人数でのろくさとやって来た。その荷物の中には、機関銃がかくしてあるのだと百姓達は噂し合った。
彼等は警戒している当兵の一隊とは数町離れた工事現場に落着いた。平安北道あたりから来たらしい鮮人の巡補がいて、百姓たちに日本語で冗談口をきいた。
「ええ娘が居たら世話せんかい」
誰も返事しない。
「ペッ、畜生め、作男(トエム)の癖に、ピストルを下げたって、意張って居やがる」
巡道時(ソントシ)は眼をむき出して、口の中で唸った。
黒帽子(ヘイモーズ)はみんなピストルを肩から脇へブラ下げていた。ブローニングのピカピカする反射が、五支里も先に居る百姓の眼を射た。引き金の具合を調べたり、銃丸を装塡したりするカチカチ歯を食い合わせるような音が、百姓達を身ぶるいさせた。
数町先の野面に握拳みたいにかたまった当兵の一隊も、雨雲のように澱んでいた。
息詰まるようなものを百姓たちは下っ腹の方に重苦しく感じた。
風がまるでない。
空気までも呑んでしまいそうな、満洲特有の闇雲な乾燥が、野面を犇々と圧えつけた。
スコップの音だけが響いた。黒帽子は水路のへりを、虚勢で反り返りながら歩き廻った。
夕方近く、万宝山の方角から一団(いちだん)の黒いかたまりが、曠野を動いて来た。
段々それは支那農民の群であることが分った。百名ばかりの人数で、だらだらと後から後から続いていた。

昨夜から、水路の開墾によって多少の被害のある上流方面の農民が、非常に激昂して襲撃して来るだろうという噂があった。堰止めの上流は雨期になれば洪水に浸されるし、たださえ沿岸の田畑は水門の完成と同時に浸水するという、支那官憲の誇大な煽動的宣伝が大分動いているらしかった。事実は、僅か一天地ばかりの水田に浸水するだけだったが……。

「見ろよ、鉄砲もってるもの居るぞ」

水路の底から眼だけ地表にのぞかせて呟いた。

「鉄砲だ。スコップもってる者も居る」

「此方へ来るかよう」

野面を渡って来る一団は、向うにかたまっている馬隊の方に煙のように流れて行った。

突然、薄気味悪い砲声が平原を二つに切り裂いた。

「ウー」

「はじまったか」

苦力と百姓の首は一セイに地表に浮いた。

ただ一発の銃声は、疾風迅雷的蒙古の洪水のように、平原の果まで拡がって行って、何処か一方から鈍い呻めきが戻って来た。

それっきり静かだった。が、平原の一方に黒雲があらわれたが最後、忽ち嵐になりそうな、白み渡った寂寥だった。

夜になった。

趙判世の女房の裵貞花（ペチョン）は、家の中にとじこもって長いこと膝小僧を抱いていた。膝小僧は絶えず、中風やみのように小刻みにふるえた。

水路工事に出ていた趙が、当兵にひかれて行ったと聞くと、彼女は再び自分たちの前に盤石のような不幸の岩が立ちふさがった気がした。それは彼女が地主にこっぴどく苛められたり、兵隊の銃尻で小突き廻わされたりする度に感ずる不安だった。

三姓堡には保安隊が二百人も駐屯していた。彼女たちが万宝山に辿りついた時には、開墾の仕事も大分進んで、自分の住家など造ることにかまっていられない多忙さだったので、趙とその一家は、外の数家族と一緒に、朝鮮農民の殆ど居ない、この三姓堡に一先ず落着くことになった。

それだけに裵貞花の不安は一通りでなかった。何時、当兵や支那人百姓に襲われないとも限らなかった。

息子の太秀（テス）は、彼女の横で眼鼻の所在も分らないような真黒な顔で、小鼻をヒクヒクさせて眠っていた。

馬蹄の響きが間断なく外の闇を掠め去った。そのドドッドドッと変に腹にこたえる地響が、彼女をどやしつけた。

筆の先より小さい灯（トン）の炎が、百姓女にはめずらしい、彼女の豊かな、日焼けした片頬を、浮かせて見せた。

日暮れと同時にしのび寄る底冷えが、脇の下から丸みのある背中へ這い寄った。

銃声が四、五発響いた。

薄気味悪い天地にこもった呻めきが、ポンポンという最初の音のアトに尾を引くと、カチカチと彼女の歯が食い合った。それがどうしてもとまらなかった。

脂垢でニタニタする蓆子が、尻の方からゾクゾクする悪感をつたえた。

誰かが、ドンドンと戸をたたいた。押黙った闇にその音は不気味に響き渡った。

瞬間、彼女はギョッとして、思わずそばに寝ている息子にしがみついた。

そして怯えた眼で暗い闇を見詰めた。

「開けて呉れ、俺だ、外でもない俺だ」

聞いたような声だった。そうだ、それは地主の張だ。兵隊でないことが彼女をホッとさせた。が膝頭のふるえは止らなかった。

何やらギラギラ光る長掛子を着込んだ張老人は、何時もと違った性急な顔つきをしていた。

「主人は居ないかの……」

彼はそらとぼけた。

「この二、三日戻って来ませんが」

麥貞花は褄をふくらまして、困ったことでも起らねばよいがと、哀願するように額に細い皺を寄せていた。

老人は二十天地ばかりの田畑を持って居るに過ぎない小地主だった。彼女はまだ老人からひどい仕打を受けたことは無かった。

が突然張老人は、右手をあげて、落着きのある声で言い出した。

「お前さんには気の毒じゃがのう、たった今、お前さんに此処を出て行って貰わにゃアならないんじゃ」

「えっ、何だってかえ、そんな無理なこと出来るもんだてか」

彼女は恐ろしさに、ザラザラした掌を額に上げた。

ねぼけた息子の太秀が、テカテカ垢光りのする蓆子の上にぼんやり突っ立っていた。

と老人の頬には曲りくねった意地悪い皺が深くきざまれた。

「そりゃ無理か知らんて……だがな、俺はおかげでこの年で一晩拘留されたんじゃ」

張は蔑むように白い眉毛を上下に動かした。

「また明日でも話は聞くども、今晩出て行くなんて、そんなこと……」

烈しく両手を振り動かして泣声を出した。

「……お前さん達に家を貸したばっかりに、俺は公安局に一晩拘留されてお取調べを受けたんじゃ、今晩すぐにお前さんに出て行って貰わなかったら、俺はどうなると思う」

重々しい靴音がして、四五人の歩兵が、ドヤドヤと這っ入て来た。

「大人、これがその家かな、誰も家族は居らんな……」

その一人のどんぐり眼玉が、変に脂っこく女房の円みの

ある頬に注がれた。
「こりゃ、出て行くに訳がないわ、どれどれ」
歩兵は木の根っ子のような首玉をめぐらして、土間から炕へとジロジロ見廻した。
「気の毒じゃが、さあ、出て行って貰おう、俺の立つ瀬がないわい」
老人は鶏でも追い立てるように身構えた。
こんなことには馴れているはずの太秀が、ワーッと両手で眼をこすって泣いた。父親のいないセイかも知れない。すると彼女も急に眼が熱くなって、訳分らず、土間をウロウロ歩き廻った。
「おお、ぼやぼやすんな、俺がその辺までついて行ってやる、さあ出た出た」
歩兵は銃尻で彼女の腰を押しまくった。
「道具などまた後でとりに来るがええ」
その辺に転っている柳斗子（リウトウヌ）や糞耙（フンバ）を老人は爪先で蹴った。
「おい、豚はいねえか、豚は？」
闇の中で野太い声がした。歩兵たちが食糧を探し廻っているらしかった。
ケケッ、ケケケケと鶏のさわぐ声はすぐ止んだ。
「あ、鶏、それ持って行かれたら……」
麥貞花は白い袴（チマ）に風を入れて闇の中に駆け込んだ。
と彼女は荒々しい腕がグイッと自分の胴っ腹を締めつけるのを感じて、からだ全体宙に浮いた。
「大人、あとは俺達が引き受けるからお帰りなさい」
先刻の歩兵のふざけた声だった。
外の闇を数十騎の馬隊がかけり去った。

四

紐のような雨が降った。
夕方、平原の東方に煙雲が現われると、メキメキと野面半面におっかぶさった。最初、雨は白く光りながら横しぶきに降った。
樹木は呻めいた。ブルブルとたまらなそうに錆びた雑草が身悸いした。
乾き切った地べたを、雨はまるい丸になってコロコロ転げ廻った。
それが見る見る水溜りになると、地べたの凹みが、ゴクゴク咽喉を鳴らしてのみ込んだ。
何十日振りの雨だ。
冷々と、気持ちよかった。
麥貞花は柳條（リューテャオ）を一杯積んだ牛車の上でブランブラン足を動かしていた。
彼女の乗っているのは牛車だったが、アトのは二台とも馬車だった。牛はのろいので先に立っていた。
伊通河は紐のように南へ南へとのびて、その先は白くけ

ぶっていた。降りはじめたばかりで水量はましていなかったが、太い雨が白々と降り注いでいる様子は、悪い眺めではなかった。

車は暫らく、魚の腹を割いたような生々しい赤土色の川床を、泥土に深く車輪をめり込ませて進んだ。

何処でも冬は雪に埋れた川だけが坦々とした交通道路だったし、雪解水が流れ去って、川床が露き出しになると、四頭も五頭も満洲馬を繋いだ荷馬車が、勢よく四方に泥土を吹き飛ばして何処迄でも河の中を馳って行くのであった。岸が切り崩したように高くなると、荷車は、でんぐり返りそうに傾斜しながら、岸に這い上った。

何処にも道路と云うものがなかった。樹木が殆ど無いのを幸いに、牛車は暴化に乗ったように、前後左右に揺れ乍ら、岩でも根株でも藪でも、滅茶苦茶に乗り越え乗り越え進んだ。

後の車で白福岳がうなった。

蒼い空にはヨー
星も多いがネ
百姓の借金はヨー
倘更多いんだアー
アーリラン　アーリラン　アラーリーヨ
　アーリラン　コゲロ　ノムカンダ

公安局の当兵は依然として万宝山を去らなかった。

水路が貫通してからも、三家屯には二百名からの馬隊と歩兵が駐屯していた。野面にはさまって馬隊の列を見ることが出来た。青い旗がヒラヒラ揺れて丘のかげを走った。

彼等は毎日のように、平原の彼方此方を押し廻って、彼等部落の鮮人百姓たちを脅しつけていた。

長銃、ピストル、スコップ、そんなものを提げた支那人百姓が、野鼠のように野面を毀って来た。発砲するのは主に彼等だった。

平原の支那農民は悉く官憲から武器を供給されて所持しているらしかった。が、長春に一箇聯隊と多数の警官を擁している日本領事館は、鮮農の生命の危険などは、何処吹く風とばかりに、新に一名の警官も送って来ない。

「俺達がやられりゃ、いい金儲けの口実になるべよ」

この位は皆言い出した。

彼等の目的は鮮農達を此処から立退かせて、播種を待っている五百天地の水田を、完全に支那人の支配に収めることだった。

が黒帽子（日本警官）が形式的にも警戒している以上、彼等も無茶苦茶に手出しは出来なかった。で、馬隊は始終部落の周囲を、どうどうめぐりして、威嚇を加えて居た。

若し部落の百姓達が、いよいよ伊通河の堰止工事に着手したならば、立処に射殺すべしという、省の命令が出たという噂が、部落の鮮農たちの耳にも這入って来た。

無論、堰止工事にかかったらどんなことになるか分らなかった。不安は夜霧のように濃くなった。

が一方、堰止工事の時期は絶望的に迫った。
食糧が欠乏した。高粱を残しているものは何軒もなかった。包米ばかり食って咽喉のつまる思いだった。水をガブのみして、眼をつぶってやっと呑み下した。
何処がわるいというでもなく、突然倒れるものが出た。栄養不良から病人が幾人も出た。これで堰止工事がうまくいかなかったらどうなるんだ。日に焼けた変に底蒼い顔をした百姓達は、固く閉じた唇を動かそうとしない。梃でも誰にもうまい考えが浮かばなかった。
万宝山の市日に食糧を買いに出かけた二人が、次の日になって空手で戻って来た。巡警に食糧買込みを妨害された上に拘留されたのだ。彼等の口振りでは、商人達も、官憲の思惑を考えて売らないというのだ。
百姓からの買込みは倘更絶望であることがその後分った。
しかし、百姓達は鼻の下の方はそっちのけにして、堰止工事につかう柳条の買込みに夢中だった。が十支里も二十支里も伊通河を下っても、馬車は何も積まずに戻って来た。うまく契約しても、愈々運搬に行って見るともう邪魔が這入っていた。
長春でやっと成功した。がこれも荷馬車五十台を傭う段になって駄目だった。そこで六十支里の途を部落総出で出かけて筏に組んで伊通河を流下した。
筏は夜になって水路近くに流下する筈だった。

のろまな太陽が頭上に来た頃に、支那保安隊の手で筏の一部が毀されて、東支鉄道橋下にひっかかっていることが分った。
すぐに三人の女房達が、荷馬車に盥をつけて、柳拾いに出かけた。
半日水に浸っていた手が、白っぽくブヨブヨしていた。手車に続いた二台の馬車は、何処迄でも平原を揺れて進んだ。
「お前、ほんとに笠がよく似合うの——」
殿りの白福岳が嫉ましそうに褒めた。
裵貞花は作男のように、草帽を少し横っちょにかぶっていた。それが彼女のふくらみのある頬に愛嬌を添えた。腿引のような脛半分の套褲の下から、青みがかった足が出ていた。
肩からずぶぬれだった。
薄闇が低く降りていた。
黒々と濡れた水田が、好もしく拡がっていた。
「籾蒔く用意したらいいべにな」
「ほんにな、村のもの相談してるかも知れないよ」
と彼女は薄闇のズーッと向うに点々と動く黒い人影を見た。
「あれ、人がいるで、当兵(支那兵)でねえかな」
「うーん、当兵だら大変だぞ、止れ止れ」
うしろの女達は荷馬車の尻から飛び降りた。彼女も深く

足を食い込む泥の中に降り立った。
瞠めているうちに、薄闇はグッと濃くなった。
どうも当兵らしくはなかった。
「部落のもの籾蒔きに来たでねえかな」
一人一人のうしろにかくれるようにして、女房達は田圃の方へ進んで行った。
椀帽をかぶった支那人百姓が、泥を蹴って飛び廻っていた。
「へーい、皆、鉄砲もってるぞオ」
なるほど小腋に何か抱えていた。がそれは何うも三味線のような恰好の、種蒔につかう点葫蘆(チェンフル)らしかった。そうでないものは把斗子(パンドウズ)(種子籠)をブラ下げていた。
「人の田さ種まいて、皆さ知らせてやるべ」
褒貞花は憎々しく叫んで、薄闇に白い踵を返した。
播種して権利を主張する魂胆だ。
彼女はまた、地主が取り上げると、他に高い租糧(小作料)で貸すことが出来るので、弱い鮮農からドシドシ田を取り上げて追放することを臭いほど知っていた。
突然パーンと銃声が弾けた。
耳朶を双物で切るようなシュッという不気味な唸りが、湿って空気を通りぬけた。
「イラ、チャラアー」
彼女は夢中で牛車にかけ寄って、滅茶苦茶に牛の尻をひっぱたいた。
白福岳の馬が、闇に白い歯をむき出して狂ったように真先に飛び出した。
牛車の尻でガタンガタンと粥桶(チュクトン)が跳ね躍った。
柳条を山と積んだ三台の牛車と馬車が、半分でんぐり返りそうになりながら、部落の闇に、恐ろしい物音でおどり込んだ。
「畜生ども種蒔してけっかるぞオ」
女房たちは餓鬼のように家毎にかけ廻って叫んだ。
太い雨のまじった闇の底に、物音と罵声が渦巻き起った。
地べたをひきずるスコップがジャリジャリ鳴った。
棒切れや、糞耙(フンパ)を提げた白衣の鮮農の群が、四方八方から集って来た。

五

雨は晴れていたが蒸暑い夜であった。
土間の隅の台所からムンムンいう饐えた悪臭が重苦しく押寄せた。
一切合財が腐る気がした。席子(レーズ)には一面に青いかびが生えた。
銃声はこの二三日来何処からも聞えなかった。
ガヤガヤという人声が外から聞えた。近所合壁のものが慌しく外へ出る気はいだ。

裵貞花は、土間へ降りて、ソッと戸口から首だけ出した。
此処へ移住して来て間もなく、藪を切り払って急造したこの高粱茸きの家は五間房子（むね）だった。各々の房子（むね）は広くもない空地を抱き込んで向い合っていた。その房子から白衣の男や女房達が、虫のようにノロノロと這い出した。
「何だね、嫗（ハルマシ）」
彼女は厩の牛のように矢張り首だけできいた。
隣りの婆さんは腕をうしろに組んで、暑いのに着ぶくれた裳（チマ）を前に突き出していた。
「医者が来たのだべえ」
闇の中から足音が近づいて来た。
両方の房子から漏れる赤ちゃけた灯の微かな光で、洋服を着てカバンを下げた男を中心にして進んで来る一隊の人影が見えた。洋服男は日本人の医者だった。
「病人どうなったべ、死んだべか」
「うんにゃ……だが、ちょっともよくならねえてことだ、血が出るという話だに」
部落は何処も食うや食わずだった。過労と栄養不良のところへ、降ったりやんだりのジメジメした日が続いたので、赤痢が野火のように炎えひろがった。
夜半、何処の子供が疫痢にかかったというと、翌る朝もう死んでいた。
呪われたように子供はバタバタと倒れた。

親達がそれを平原に棄てに行った。
疫病は子供の上に心配気に屈み込んでいる母親に移った。女房の病気は亭主に感染した。どの房子（いえ）にも二家族か三家族折り重なるように寝起きしていた。一人が寝つくと家の者全部が倒れた。
そういう家が二房子（ふたむね）あった。——この土地は疫病神にとり憑かれてるだヨ——そういって平原にさまよい出ようとしているものもあった。
医師は長春朝鮮人居留民会の同情で派遣されたのであった。洋服姿がその家に姿を消すと、白衣の女房連中がゾロゾロ入口に押しかけて、ガヤガヤ呟き合った。
裵貞花は疫病を払いのけるように、バタンと烈しく戸口を締めて首をスッこめた。
蓆子（ミーズ）に敷いたジメジメした煎餅布団に横になったが、蒸し暑くって寝られなかった。雨量をふくんだ古綿のような雲が、低く平野に降りているのだ。
誰か戸を叩いた。
不精不精起きて行くと、それは亭主の趙判世だった。
あとから多勢、百姓たちがついて来ていた。
「おお、お前さんかの」
全く思いがけなかった。彼女は思わずニッと微笑んだ。
百姓たちは待ち切れないように促した。
「な、趙生員、どうだったか」
「よく生きて戻ったなア」

「話してきかせろ、どんな取扱受けたかよ」
　が趙は、不機嫌に黙り込んでいた。
　顎髯が平野の雑草のようにのびて、人相がまるで変っていた。引ッ込んだ眼の奥に、放たれて来たもののかすかな安心と喜びが閃いた。
「なアおい、俺ア包米(パオミー)一っ食わずに六十支里の路を歩いて来たんだ、死にそうだ、大至急何か食わせてくれ」
　女房は土間一杯につめかけている百姓達の間をぬけて、近所に食い物を貰いに行った。
　胸に抱き込んだ膝小僧の上で、趙は半死人のような顔面を歪めた。
「来る途々見て来たが、稲は二、三寸にのびたようだなア、こう雨がやんじゃ、明日にも枯れてしまうぞ、早く工事にかからにゃアのオ」
「それにお前、知るまいが……」
　垢と泥でテカテカ黒光りする襦(チョコリ)を着た張吾一(チャンオイル)が、咽喉にゴロゴロひっかかる声で続けた。
「……悪病がはやってのオ、死人は毎日のように出る、部落(むら)の半分は病人だよ」
「悪病神じゃよ」
　誰かがひとりごった。菜っ葉さえ這入らぬ粥で間に合わせることに馴れていたので、病気のもとは悪病神のおかげだと思った。

皆押黙った。
　灯の炎も揺れない。
　あの夜、ありあわせの武器を握って田圃へかけつけた群衆は、支那人百姓たちの不法な侵入者を追っ払った。彼等は一人の百姓を銃丸で倒しただけで、案外もろく退散した。
　次の日、総出で播種を了えた。連日の雨で兎も角も稲は、二、三寸にのびたが、昨夜から降らないというだけで、もう水のたまっている田は僅か四、五天地しかなかった。晴天が二日続けば苗は黄色く枯れ死ぬのだ。
　日本領事館からは、未だに堰止工事開始の指令が来なかった。がこうなれば部落全滅を覚悟しても工事にかからねばならない――。
　土間の隅で粥をたく高粱殻が、バリバリと勢よく燃え上った。
　煙にむせびながら顔の汚れた一人がきいた。
「お前よく殺されなかったなア、どんな具合だったか？」
「ウン、アトでゆっくり話すが……俺ア腹の皮ひっついて口をきく気んなんねえ」
　趙は子供がイヤイヤするように首を振った。
「……これだけ云ってきかせるがなア、ひっぱられているのは儂等だけじゃねえぞオ、楡樹溝の方からも、儂等と同じ百姓が十人近くも来て居たよ、遼河の方から来たという者の話しではな、何処も彼処も留置場は儂等百姓で一杯だ

と云うことだぞオ、こりゃ、ただ事じゃねえ……」

大抵のものは、借りただけの荒地を水田に仕上げて、さて収穫となると、巡警や当兵の銃で追い立てられた。その後には支那人の百姓が這入った。蒋介石の政府から満蒙の鮮農を放逐すべしという指令が達したというのは事実らしかった。鮮農追放は今に始った事ではなかったが、利権回収の煽りでそれが一層猛烈になった。――鮮農の背後には日本がある、支那に帰化した鮮農の名義で日本人が田地を買入れた。満蒙百数十万の鮮農を手先として、日本は次第に厖大な土地を自分の手に入れるだろう。

が、黒帽子は鮮農がどんな圧迫を受けても知らぬ顔をしている。当兵が鮮農を殴ったり蹴ったりすれば、日本はその最も恐れる共産主義を駆逐出来る。だから支那も日本が喜ぶように共産主義取締りの名義で、鮮農を荒野にたたき出し、ブタ箱にブチ込むのだ。

「……だがのオ、儂等をきらうのは官憲や地主ばかりでねえよ、長春あたりで仕事にあぶれたものが何万人と居てなア、それが田舎に戻っても畑仕事もみつからないし、この辺の土着の百姓だってもヨ、借金に詰って追い立てられるしさ……」

野ッ原の重い闇を叫声が揺った。

隣近所がガタゴト騒ぎ出した。

「何だべかなア」

百姓たちは二人、三人と外へ出た。趙も重い体を外の闇に運んだ。

白い着物が闇の中をフワフワ浮いて行った。

「ホオー、火事だぞオ」

部落のものを乗せた馬が、グヮタッグヮタッと地を踏み鳴らして走り過ぎた。

長春の方角の低い空が、悪血のように赤黒く染っていた。

馬が今度は此方にかけて来た。

「柳条に火がついたぞオ」

水路の吐き出し口に野積してある堰止用の夥しい柳条が炎えているのだ。番人の居眠りしている間に何者か放火したのだ。

六

寝しずまった闇に、息子の太秀が突然ツーッと泣声をあげた。

「どうしたよ、どうしたよ」

裴貞花は薄目をあけて、ねぼけ声を出した。

フト、彼女の手に触れた息子の顔が、カッと火のように熱かった。

彼女はバネのように跳ね起きた。やっと四歳になった太秀は俯伏せになってカーッと何か吐き出した。

疫痢だ――。

「これエ、起きてたもれ」
彼女はゾッという悪寒を感じて、烈しく亭主を揺り動かした。
──何処の子も翌朝には冷くなってしまったのだ。
息子は吐き出したもののねばつく口をあけて、蒟蒻のようにふるえながら、夢中に母親の胸にしがみついた。
慄えは、ブルブルッと母親の全身にこたえるほど烈しくなった。長春から六十支里歩いて来た疲れで、ぐっすり寝ていた趙が、ガバと跳ね起きざま狂ったように息子を揺った。
「これ、どしたどしたア」
それは狼のように子供の柔い咽喉に食いついて来る疫病だった。息子はもう明日の朝は冷くなるんだ──粒の大きい泪が彼女の歪んだ頬を流れた。
「医者だ、駄目だろうが、兎に角行って来る……」
あわてて趙は闇の中にかけ出した。
金光水の家の戸をたたいてきくと、医者は馬称口に帰ったとの事だった。厩から馬がひき出された。趙は無茶苦茶に馬に鞭を喰わせた。
平原の遥か遠方まで、馬蹄のひびきがカッ、カッと甲高く響いて行った。
夜が明けても日本人の医師はやって来なかった。太秀は、うつろな眼で宙をぼんやり凝視めたきり、セカセカと息苦しい呼吸を続けていた。

乾いた口からハッハッと吐き出される、熱っぽい臭いのする息が、その上に屈み込んでいる趙の鼻を打った。
「テスヤ、テスヤ」
いくら耳に口を寄せて叫んでも、息子は宙を睨んだきりだった。
「どんたら風だネ、少しはいいかの」
隣りの婆さんが戸口から呼びかけると、裵貞花は突然アイゴアイゴと肩をせり上げて泣いた。
同じ房子に寝起きしている姜点始が近所から荷馬車をひいて来て呉れた。小さいかじかんだ太秀の屍を、クルクルと黴臭い蓆子に巻き込んで、馬車に積み込んだ。
裵貞花はもう泣いていなかった。不幸が絶えずやって来るので、彼女は一度に存分泣き悲しむことが出来なかった。戸口に立って、ケロリとした顔で馬車の出るのを見ていた。
「お前さんも不幸じゃのオ」
「ほんになア、監獄にひかれるかと思えば今度は子供を無くするしよ」
赤子を胴っ腹にくくりつけた女房たちが趙に同情した。
「あ、医師が来た」
乎貴子がうしろを振り向いた。
「お前、医者に来て貰わなかったかえ」
腰の上に赤子を揺り上げて、彼女は荷馬車の仕度をしている趙にきいた。

「二度もよびに行ったが埒明かんでのォ」
昨夜診察に来た房子に這入りかけた医師はそのとき始めて思い出したように此方に足を運んだ。
「アタリ、オッチハンナ」
京城に永く居たという医者は、脂の乗った頬をタブタブと動かして、鮮語できいた。
「どうしたも、こうしたも、野辺送りに行くところだァ」
趙は不機嫌に言い放って馬をひき出した。
野ッ原に出ると、趙は手綱を馬の背中に投げかけて、馬車の尻に飛び乗った。
膝小僧を抱いて、眤と平原の涯を睨んだ。
太陽が地平を離れたばかりだった。
ギラギラする光が、凹凸のある野面を縞をつくって流れていた。
馬は単調に左右に首を振ってのろのろと進んだ。
彼の爪先で、蓆子包みの中の息子の屍が、むごたらしく震動した。
――もう息子は泣きも笑いもしないのだ。何一つ目標もない涯しない平原が、趙を悲しみの中に呑み込んだ。
四年前、彼等一家が奉天の南の太子河のほとりを追い出されたとき、息子の太秀は、まだ女房の腹の中で、手足を突ッ張っていた。
馬も家鴨も、みんな借金の代に取り上げられた。巡警の棍棒の傷痕はまだ額に残っている。

その土地には間島方面から流れて来た鮮農が、五十戸も入っていたが、そんなに群居されては赤化宣伝の恐れがあるというだけの理由だった。
青白い額に変に血をのぼらせて、大きな腹を抱え、更に荷物を背負った女房は、肩をセり上げセり上げ、前のめりに歩いた。その荷物だけ質に入れて、彼等はやっと四平街迄の貨物切符を買った。
紐のように長い貨物列車は、満洲の涯ない平原を北へ北へと突き進んだ。
豚の糞の臭いに息詰まる彼等の貨車には、苦力が一杯に詰っていた。鉄道工事に行く四、五百人の苦力等の巻添えで、趙は有蓋車に投げ込まれた。
戸外から吹き入れる風に、蒼ざめた顔を晒して、肩で息していた女房が、突然ガクッと首を折って、ウンウン唸り出した。
殴りつけるような風で、フワフワ裳の裾から、赤黒い肉塊がのぞいた。
趙は子供のようにあわてた。
苦力が馬の小便に濡れた藁を掴み出して、肉塊をその上に置いた。
赤子は喚いてピンピン手足を動かした。
「棄てちまえ、どうせ満足には、育ちはしねえ」
「余計な世話だい、黙ってスッ込んでろ、小兎子め」
世話好きな苦力が怒鳴った。

趙はただ小さい肉塊を見入っていた。小指の尖ほどの鼻と口――

苦力たちは面白がった。

「ええ子だぞオ」

「女の子だなア、こりゃめっけものだぞ」

「心配すんない、手前のもんじゃねえや」

貨車が大きく動揺する度に、赤子はコロッコロッと蓆の上から馬の小便でヌラヌラする床に転げた。

「今にそこいらにぶっつかってくたばっちまわア、抱きなヨ」

趙は長々と牛糞のねばりのついた床板に仰向にふんぞり返った。

そしてボロ屑に包んだ赤子を、自分の腹の上に安置した。臍のあたりに肉塊のぬくもりが伝った。

それでも趙は、貨車の烈しい動揺と響音が今にも小さい生命を爆発させてしまいそうな気がして、息が詰まりそうだった。

それが太秀の誕生だった。

部落から三、四十支里離れた伊通河(イートンホア)のほとりに来ると、趙は馬車から飛び降りた。

思ったより軽い蓆子包を抱いて、彼は畝の中に這入って行った。

戻って来ると、雑草に尻餅をついて煙草に火をつけた。

間もなく趙は、変なことの持ち上ったことに気がついた。

息子の屁をすてて来た畝のあたりから、子供達のガヤガヤさわぎ立てる声が野面を渡って来た。

気がつかなかったが、河原に遊んでいた餓鬼どもに違いない。

と、バラバラッと子供たちは野ッ原にかけ出して来た。若布のようなボロボロの恰好のや、素ッ裸の奴も居た。多勢の餓鬼どもが、片手にヒラヒラするものを下げた一人を、気狂いのように追いまくっていた。

「チョッ、泥棒猫め」

太秀の着物を裸の餓鬼どもが剝いで行ったのだ。

趙は憎々しく其方を睨んだ。

七

工事は夜も続けられた。

パシパシパシと燃える篝火が流れに写ってゆれた。

その炎の周囲で、一刻でも完成を早めようとして藻掻いている百姓の姿が、地獄絵のように躍った。

「そら、此処だ、持って行け」

「ハア来た」

浅い水流がビシャビシャと跳ね飛んだ。数百の人間の掛声、叫び、唸りは、ザーッという水音の底に、ムンムンと蚊の唸りのように聞えた。部落総出で工事を急いでいた。

半分形の出来た堰止は、河を横ざまに区切っている。

と、ズーッと川上の方からザッザッと、米を研ぐような音が流れにさからって突っ立っている趙判世の耳底に響いた。彼の背筋を、流れに足を掬われた瞬間のような、ゾッと云う悪寒が走った。

保安局の馬隊が瀬を渡って突進して来るのだ。

「おい、来たア、馬隊だ……」

趙は河童に襲われたように岸に跳ね上った。

馬隊は段々迫って来た。岸伝いのドドドッという地響と、馬が滅茶苦茶に浅瀬の水を蹴立てる嚙むような音が迫った。

「ヒーッ、来たア、逃げろ」

「馬鹿ア、声立てるな――」

百姓達は滅茶苦茶にしぶきを散らして岸にかけ上った。

重い轟音を川窪にひびかせて銃声が二、三度鳴った。数町川上に青い閃光が消えた。

平原一杯圧えつける沈黙が来た。

すぐに、続けさまの銃声が起った。

右岸の天幕張りの中からもパンパンという音がそれに応じた。

天幕の中には五人の黒帽子（日本警官）が警戒していた。

百姓達はバラバラと、饅頭形に野積みしてある柳条のかげに走り込んだ。

「朴書房アー」

誰か気狂いのように呼び廻った。

「どうした、どうした」

「誰だか水さ流れたと思ったら、朴書房がやられたらしいでのオ」

銃声はだんだんはげしくなった。頭の上を鈍い不気味な唸りが走った。サッと頭髪がよだった。

つながれている馬がバタバタあばれ出した。

「これよ、糞垂れ、死にに行く気だか」

駈け出そうとする馬を懸命に押える声だ。

「弾丸が尽きたべえ」

天幕張りの中の銃声がやんだ。それとも誰かやられて手当でもしているのか。

青い閃光が真向うの岸でパンパンともえた。

水路の土堤かげから新な銃声がおこった。

五人の警官が其処に退いて応戦しているのだ。

「今にみんなやられるでえ、ほらよ、すぐ其処さ来たア」

当兵の一隊は更に前進していた。銃声はすぐ耳もとで、ワンワンと川窪に応えて弾けた。

柳条のかげの暗闇で、百姓は踏まれた蟻の巣のように乱れた。

銃声は今度は、百姓達の背後の野面からも起った。不規則な場所各々にぶっぱなしている射撃からしても、それは官庁から武器を供給されている支那人百姓らしかった。

百姓の群はバラバラと水路の土堤めがけてなだれた。

野積みの柳条にしがみついた趙判世の足もとに、誰かがドシンと重く倒れかかった。

——やられたな。

恐怖が彼を飛上らせた。彼は無我無中で、バタバタ暴れている馬の方にかけ出した。

と、誰かが跳ね上る馬の手綱をグイグイ引張っていた。

「貸せえ、長春さ行って来るから……」

「うん、行くって、お前もかァ」

金光水の声だ。

長春の領事館警察署に急を告げる間に、部落のものは全滅するかも分らなかった。がそれより外方法もなかった。

川向うで青い銃火がもえた。

ブスーンブスーンと銃丸のうなりが耳を掠った。

馬は跳ね上って、そして唸りをあげて飛んだ。

遠く平野の方から銃声がきこえ始めると、部落に残っていた女子供たちは、弾かれたように戸外の闇に飛び出した。

それはたしかに伊通河の方角に違いない。パンパンという銃声のあとを引く唸りが、曠野の闇を巾広い洪水のように押し寄せて来た。その波は引き返したかと思えば、またすぐ押し戻して来る。

部屋の真ん中ごろに、裾広い女房連の白衣が濃い霧と溶け合ってほの白く不安に揺れた。

一しきりの銃声のあとに、死んだような寂寥が来たかと思うと、またすぐパンパンと弾けた。

銃丸の呻めきが、シューシューと夜鳥のように頭の上の高い空を掠めると、女達は首ッ玉を固くして、ぼんやり暗い夜空を仰いだ。

銃声がきこえはじめるとすぐに、野ッ原に駈け出して行った男達が、間もなく大急ぎで戻って来た。

「川の方で青い火が見えたぞオ、みんなやられたかも知んねえ」

「行って見たいども、弾丸が飛んで来るで、おっかなくてなァ」

いつも当兵や支那百姓どもが、部落の周囲を押し廻って歩く時の、こけおどしの銃声とは訳が違っていた。——どんなことになっているか分ったものではなかった。

女たちは眠としていられない不安から、闇の中をフラフラ歩き廻った。

誰かが此方に動いて来るとすぐ言葉をかけた。

「どうなったべかなァ」

時々、銃声は彼方此方に移動した。

その方角の低い空がボーッと赤らんだ。それは鳥の尻尾のように霧空にひろがった。

「火がついたでねえか、ほーら、あっち見れえ」

赤らみはぐっと濃くなったり、暗くなったりした。

バタバタゴム鞋を鳴らして女子供たちが向うに走った。

「野ッ原に出るなァ、弾丸が来るぞオ」

もうガタガタ恐ろしさにふるえているものもあった。
霧の中から誰か駈けて来る。ほの白い着物が其方に揺れて行った。ガヤガヤ鈍い唸きが起った。
「やっぱり当兵かい」
「俺ども殺してどうする気だべ」
裵貞花もその方へ駈け寄った。
「弾丸にあたったもの居るべえ」
平野を野犬のように逃げて来た若い李守東の眼玉が、暗闇の底から輝いた。彼は息苦しくハッハッと強い呼吸を止めなかった。
「俺すぐ逃げて来たから、よく分らねえども、きっと死んだものうんとあるべえ」
銃声がグッと此方に接近したようだった。銃丸の唸りが渡鳥のように低い空をよぎった。
白衣の群はパット飛沫のように四方に飛んだ。あたふたと女たちは高粱茸の中にかけ込んだ。
銃声は暫くやんだ。
裵貞花も逃げ戻った。
もう其処には息子の太秀はいなかった。——趙は弾丸に当りはしないだろうか？
彼女は半時以上も昵と灯の焔を凝めたきりだった。
また戸外に人声が聞え始めた。部落の中央部のあたりが騒々しくなった。甲高い叫声がまじる。もう彼女は凝として居られなかった。

白衣の群っている地点まで来ると、彼女は先刻とはまるで様子が違っていることに気がついた。
女子供達がすっかり出揃って、ワイワイ騒ぎ立てていた。彼女はグングン人混みの中に進んだ。
「……明日でねえば、長春から助け来ねえとよ、俺どもなど、なんとなってもええって事だべ……」
年寄が女どもにブツブツこぼしていた。
馬称口あたりに生き残ったものは逃げのびたらしかった。
「早くするんだぞオ、早く、孫道全、みんなさ触れて廻れ」
馬に乗った金光水が叫んだ。
「俺ア、村に残って居るウ、餓鬼ども三人も連れて、どうして行かれるかョ」
女達は右往左往した。
「オモニー、オマアー」
子供が泣き声をあげて母親を探し廻った。
裵貞花は金光水の馬に近づいた。
「趙どうしたべなア」
「あ、お前さんか、今探して居た」
彼は馬から飛び降りた。
「俺ア、お前さ会わせる顔ねえ、二人で長春さ行く途中に、当兵に押さえられてなあ……」
伊通河を沿って二支里ばかり下ったとき、突然、一隊の

馬兵が前方に立ちふさがった。二人はその中をガムシャラに突きぬけたが、趙判世の馬は当兵の銃床を喰って、気狂いのように跳び上った。趙は振り落された。金だけは瞬間数町逃げのびていた。

皆まできかず、裵貞花は肩を揺って烈しく泣き出した。

間もなく、白衣の群は部落の南口から、深い夜霧の中を揺れ動いて行った。

「ハルメーハルメー」

跣足の子供が婆さんのアトを追いかけた。

大抵の女房は、赤子を胴っ腹にくくりつけたり、垢滲んだ白布包みを頭にのせていた。

百人近くの女や子供たちは、ただ押し黙ってボソボソと歩いた。彼等は言わばこうして故郷を追われ、国境をさ迷い出で、涯しない満洲の曠野をあてもなく歩いて来たのだ。またそれが始った。

ただ女の子が母親（おふくろ）を呼ぶ声や、赤子の泣声などが聞えるだけだった。

裵貞花の前には、病み上りの女房や、足腰の立たない婆さんを、ボロ包みと一緒くたに乗せた牛車が、ガタゴト跳ね躍っていた。

彼女はもう泣いていなかった。間を置いて肩がピョコンとせり上った。ムズムズ痒い瞼を手を上げてこすった。

チョコチョコ歩く子供の坊主頭が、眼の前を揺れていた。

と彼女の眼はまた熱っぽくなった。――息子の太秀はもう居ない。そして趙もこの世に居ないかもしれない。

趙と一緒に故郷の村を追い出されて、もう六年になった。それから鮮内を北へ北へとさまよい、途中趙と別れ別れになって、やっと奉天近くの太子河のほとりに落着いた趙と、再び一緒になるまでの苦い記憶が、彼女の頭蓋の内側を硝子の破片（かけら）のようにかけ廻った。

「こりゃアまア、何と腰の痛え車だア」

車の上で婆さんが小言を云った。モゾモゾ動いた拍子に、ボロ包みがドシンと地べたに落ちた。

もう平原に出て居た。

群衆は涯ない闇にほの白くのろのろと流れて行った。

工事場の柳条（リューチャオ）に当兵が放った火は、まだ東の空をボーッと明るませていた。

霧に濡れた平原を、白衣の群は長春（チャンチュン）の方へ何処までも揺れ動いて行った。

――一九三一・七・二五――

（一九三一年「改造」十月号）

II 評論・声明書

一九三〇年度に於けるナップの方針書

ナップ中央協議会

一　一般的情勢

現在我々が当面する瞬間は、国際的には世界資本主義の相対的一時的安定の破壊、新×××戦争の危機の増大、支那××の漸次的進行、国内的には日本資本主義の半恐慌状態、資本主義的産業合理化に対する労働者農民大衆の熾烈なる反抗等、これを一言にしていえば文字通り「戦争と××の時代」であることを証明している。

世界大戦後、相対的一時的安定を保っていた世界資本主義は、アメリカに於ける昨年秋以来の株式恐慌によって、今や第三期の矛盾を赤裸々に曝露し初めている。世界資本主義の避け難き矛盾は、この事件を契機として、それ自身の××××に一歩一歩近づきつつあるのだ。而して、世界資本主義の均衡の破壊は、新たなる××××戦争の危機を倘一層切迫せしめずにはおかない。帝国主義列強は全力を挙げて戦備を充実し、政治的、経済的、思想的に、国内大衆の戦争への動員を最も巧妙に準備しつつある。現在ロンドンに開催されている軍縮会議は、平和のための協商ではなくて、いざ××となった場合、敵を最も不利な条件におき、味方を最も有利な条件におかんとする、帝国主義政策の狡猾なる駈引きにすぎない。

右の如き国際情勢は、我が国の金融ブルジョアジーをして、彼等の強力な支配を必要不可欠なものたらしめている。彼等の代理人である浜口内閣は、金解禁の実施、産業合理化の強行、××運動に対する兇暴な××によって、日本資本主義の再建、強化に狂奔しつつある。過日に於けるブルジョア議会選挙に於て与党たる民政党が絶対多数を獲得したという事実は、ブルジョア政局の一時的安定を可能ならしめ、金融資本の勢力を一層有利な地位につかしめたもののように見える。だが、国内及び国外市場の狭少、国内資源の不足等によって制限された、基礎の貧弱な日本資本主義は、自らが内包する諸矛盾によって、その前途を甚だ困難なものたらしめている。最近に於ける糸価暴落の事実は、右の事柄に対する最も有力な裏書きを与えるところのものである。

これに加うるに、暴力的破壊的な資本の集中集積、資本主義的産業合理化の進行は、労働者農民大衆を極端な窮乏に陥れつつある。彼等は、支配階級の巧妙なる××政策と猛烈な××にも拘らず、又右から左までの社会民主主義者の裏切りと妨害にも拘らず、全国各地に於て、続々英雄的闘争に蹶起し、その回数に於て、その参加人員数に於て、

近来稀な闘争記録を残している。大衆の旺盛なる自然成長性は、しばしば改良主義的指導の限界を越え、闘争が大衆的×起の形態をとったことも一再ではない。階級対立のかくの如き尖鋭化は、資本主義そのものの基礎をも脅かすに足る最も強力な××的エネルギーを、刻一刻と培養しつつあるのだ。

かくて、我々は今や破壊された陣営の整備、強化と相まって、新たなる労働攻勢の時期――××的大衆的闘争の時期に当面しなければならぬ。

二　芸術運動をめぐる諸条件

芸術運動をめぐる諸環境も以上の如き国際的並びに国内的情勢を或程度まで反映していると云える。

現在の芸術界に於ける最も著るしい特徴は、大衆の旺盛なる左翼化の傾向が一方に於ては、ブルジョア・ジャーナリズム乃至コムマーシャリズムを刺戟して、小ブルジョア的、自由主義的芸術傾向の上にまで著しい急進化を促すと共に、他方に於ては、ブルジョア・イデオローグをして加速度的にその反動化の過程を増進せしめつつあることである。

最近に於けるブルジョア芸術の積極的攻勢は、特に文学の領域に於て著しきものがある。だが、彼等に於けるプロレタリア芸術の攻撃は、大衆の左翼化によって脅かされた、自分自身の地位を擁護せんとするものに他ならぬ。従って、プロレタリア芸術の勝利が確実になればなるほど、彼等の攻撃が益々執拗になることは当然である。彼等の声を大にした攻撃は、むしろ我々の芸術を宣伝するに役立つであろう。更に、彼等のプロレタリア芸術攻撃は、その反面に於て、芸術のための芸術の擁護を意味しているのだが、××戦争が間近に迫っている現在に於ては、芸術のための芸術の理論に忠実に留まることは、以前に比して比較にならないほど困難になっている。もし彼等に物事を正当に考える能力があれば、彼等は階級闘争の現実に盲目とはなり得ないであろう。彼等は防塞のいずれの側に立つかをハッキリと表明せねばならないであろう。だが、彼等は、彼等自身の愚鈍さの故に、我れこそは芸術家であると自負しながら、意識せずして、ブルジョアジーの幇間になり下っているのだ。エロチシズムといい、ナンセンス文学といい、モダーニズムというも、要するに、文学的遊戯以外の何物でもない。

次に、小ブルジョア芸術の急激なる左翼化も、我々にとって、大いに注目さるべき事柄である。その現象は、特に演劇方面に於て著しい。左翼劇場を中心とする新興劇団協議会の成立、その他二三の劇団の動向は、明らかにこの事実を物語るものである。だが、これらの傾向の中には、売らんがための左翼化、芸術のための左翼化の危険が、多分に含まれていることを注意しなければならぬ。否、かくの

如き危険は、時として、プロレタリア芸術そのものの中にさえ、隠密の間に入りこまんとしているのだ。而して、ブルジョア・ジャーナリズム乃至コムマーシャリズムは、この売らんがための左翼化を利用し、日和見主義的諸要素は、それらのものの上に跳梁しつつある。

現在に於ける階級闘争の進展は、芸術的領域に於ても亦、大衆獲得の問題を中心的課題たらしめている。芸術上に於ける諸々の対立闘争も、最後の目標は、実にこの課題に懸っているのだ。大衆の意識を欺瞞し、これを骨抜きにせんとするブルジョア戯作者が勝つか、左翼化せる大衆を改良主義的限界に押し止めんとする日和見主義者が勝つか、それともプロレタリア××を目ざして進む我々が勝つか——問題はただ大衆獲得の頂点にかかっているのだ。

三　芸術運動の新たなる地位、任務

我がナップは一昨年春、左翼四団体の合同によって、その強力な一歩を踏み出したが、その後も更に二三の芸術団体を併せ、昨年春には技術部門別の再組織を完了し、名実共に左翼芸術団体の威力を発揮し初めるに至った。プロレタリアートの前衛に対する支配階級の比類なき××にも拘らず、我がナップは、階級的正道を踏み誤ることなく、今日の地位を築きあげることが出来た。これ明らかに我々があくまでも階級的忠誠と大衆に対する献身的誠意を惜しまなかったからである。

殊に一九二九年度は我がナップにとって飛躍的発展の時代であった。この発展は主として二つの方面から観察することができる。その一つは技術方面の急速な成長である。作家活動についてこれをみれば「蟹工船」、「太陽のない街」、その他多数の傑作輩出、美術方面では、「全線」の劃期的躍進等。その他例をあげれば、いくらでもあるであろう。その二は、芸術大衆化の漸次的実現である。芸術作品の大衆化は暫く度外視して、主として物的方面について見ても、戦旗社の確立、その事業の拡大(「少年戦旗」、「作家叢書」の刊行等)、戦旗発行部数の級数的増加、美術、演劇、絵画に於ける移動的芸術活動の発展、公演、展覧会、講演会に於ける観客、聴衆の巨大な動員数等。これを要するに、我々の芸術運動は今や、量の上でも質の上でも、階級闘争の有力な一部隊に成長しつつあるのだ。

だが、我々の芸術運動は、現在の階級闘争の現実的発展に比較すれば、尚、数歩おくれていると云わねばならぬ。前述の如く、階級対立の現発展段階は大衆的××的闘争が準備されつつある時代である。今や、一切の闘争はその決定的基礎に於て戦われんとしている。自らのための階級にまで成熟した××的プロレタリアートは、あらゆる運動の領域に於て広汎なる大衆動員の課題を、当面の議事日程に上ぼせつつあるのだ。しかも、幾多の試練によって鍛えら

れた××的プロレタリアートは、あらゆる社会民主主義的指導勢力と鋭く対立して、それ自身の独自性を極度に発揮しつつ、大衆的闘争の先頭に立っているのだ。かくて、現在に於てはもはや、漠然たる「プロレタリア的」乃至「無産階級的」なる文字は通用しない。道はいずれか一つである。「社会民主主義的」であるか、それとも「××主義的」であるか。中間の道は絶対に存在しない！

しかるに、我がプロレタリア芸術運動は、遺憾ながら未だかくの如き地点にまで到達して居らない。即ち、我々の運動は未だボルシェヴィキー的芸術運動にまで高まって居らない。事実、我々が創り出す芸術作品と社会民主主義的芸術家が創り出す作品との間には、単なる程度の差異もしくは方向の差異があるだけで、本質的な差異は殆んど見られないのだ。少数の例外を除けば、ナップ芸術家は、社会民主主義的芸術家がとりあげ得ないような題材を、彼等が取扱い得ないような方法で描いているとは決して云われないのだ。このような状態では、我々は到底旺盛なる大衆の自然成長に歩調を合せることができない。我々は漸く彼等の後を追っかけるに留まるであろう。

かくの如く、我々の芸術運動は旺盛なる大衆の自然成長性から、そして又、××的プロレタリアートの当面の課題からやや立ちおくれた気味がある。このギャップを埋めることこそ、我々に課せられた当面最も緊急な任務である。

そのためには何よりも先ず、我々自身のイデオロギーの不徹底さを克服して、真実のマルクス主義的観点に立つことが必要である。我々は昨年以来芸術の大衆化を口にし、又それを実践してきたが、我々のあげることのできた成果はいわば芸術の形式的大衆化にすぎなかった。だが、真実のボルシェヴィキー的芸術を生み出すためには単なる表面的技術だけであっては、不充分である。そのためには、我が国の××運動への絶え間ない関心と、参加並びにそれを理解し、表現することのできる、高度のマルクス主義的教養が必要である。そして、当面の階級的必要に最も近い題材が撰択され、しかも、あらゆる事象の隅々にまで、明確なるマルクス主義的眼光が浸透されねばならないのだ。所で、現在我々が最も力を入れて描かねばならない重要題目は凡そ次の如きものであろう。

我々はこれらのものを描く過程に於て、××の掲げるスローガン（例えば×××戦争反対、議会解散等）を如実に生かすことに力めねばならぬ。

前衛の活動。産業合理化、政治警察、疑獄事件等一切のブルジョア的政治機構、並びに経済機構の曝露。大工場、大経営内に於ける生活と闘争。大衆的ストライキ。社会民主主義的本質の曝露。反幹部派の闘争。労農提携。軍事問題。植民地問題、その他。

次に、我々は意識化しつつあるブルジョア芸術並びに日和見主義芸術と尚一層精力的に闘争しなければならぬ。現在、それらの芸術は、大衆に対して尚根強い力をもってい

る。従って、それらの芸術と徹底的に闘争することは、大衆に対する我々自身の影響力を高め、大衆を阿片的芸術から護ることに役立つであろう。更に、そのことによって我々は、間接的にではあるが我々自身の旗幟を鮮明ならしめ我々自身を強化することができるであろう。殊に、プロレタリア的仮面を被る似而非左翼芸術家並びに批評家に対しては、彼等の欺瞞的言辞に惑わさることなく、あくまでも彼等の階級的本質を曝露しなければならぬ。殆らんがための左翼化であるか、それとも真実の左翼化であるか――我々はその差異を誤ることなく認識しなければならぬ。而して好き意図の下にプロレタリア芸術に近づきつつある芸術傾向に対しては、我々は階級的ヘゲモニーを確保しつつ親切なる指導を与えてゆく必要がある。尚ブルジョア・ジャーナリズム乃至コムマーシャリズムに対しては、常に愼重なる態度がとられなければならぬ。それは屢々我々に対して、極めて巧妙な陥穽を準備する。我々は一時的好餌につられて我々自身の階級的立場を歪めてはならぬ。この場合、何よりも必要なことは芸術活動のプロレタリア的原則を確保することである。

最後に、我々は、ナップに於ける内部統制の力を、半ば失われかけている状態から回復しなければならぬ。いうまでもなく、過去一カ年間の闘争は、各技術部門の独自的発展の時代であった。だが技術部門の分化に随って、ナップ中央協議会の内部統制力が次第に微弱なものとなり、その結果、各同盟間の連絡不足、協力的活動の稀薄化を生み、ナップは遂に単なる形式的存在にしか過ぎなくなってしまった。ナップがかくの如き状態に留まることは、統一的集中的芸術運動に対する、各同盟の無関心乃至無理解を意味するものである。前述の如く、我々の上には、現在、極めて困難なる任務が負わされているのだ。この任務を効果的に遂行するためには、ナップ加盟の各団体が、協力一致して活動することが必要である。それなくしては、我々は、決して所期の効果を挙げ得ないであろう。かくしてナップ中央協議会の確立とその統一的な指導の回復は一刻もおろそかにすることができない重要問題である。我々はそのためにあらゆる努力を払わねばならぬ。

以上に於て、我々は、プロレタリア芸術運動の新たなる地位、任務について述べたが、これを要約すれば、本年度に於ける我がナップの中心的任務は、芸術運動をボルシェヴィキー化し、更に広汎なる大衆を獲得すべきことにある。ナップ加盟の各同盟は即時この任務を実行に移さねばならぬ。

一九三〇年三月

(一九三〇年九月「ナップ」)

文芸戦線の最近の傾向と分裂・乱闘事件の階級的意義

窪川鶴次郎

一

十一月二十四日夜行われた文芸戦線の乱闘事件の階級的意義を明かにするに際して、幸い入手した文戦打倒同盟のニュースに留って本事件の概略を示そう。

夜の十一時半頃であった。文芸戦線の里村欣三氏は、最近文戦を脱退した黒島伝治氏をおとずれた。

黒島伝治氏はすでに寝ていた。然し起きてこの深夜の訪問者に玄関の戸を開けてやった。文戦脱退後、身辺に注意を払っていた黒島が、かく残留組の里村に気を許したのは、里村が最近脱退派に非常な好意を持ち、自身が連盟内に残留している事に常に不快を感じていると人に洩らしたのを知っていたからとの事である。

里村は黒島にむかい、少し話したいことがあるから外に出てくれと言った。黒島がそれをことわるのを、里村は執拗に外出を促して無理に屋外へ引張り出した。

門外には、残留組の岩藤雪夫氏、長野兼一郎氏、井上健次氏等が待っていた。里村の呼び声と共に中へ跳び込み、黒島を押えて用意の自動車に引きずり込んだ。そして黒島の身を案じて同乗を要求する妻君を棍棒で振り払い、岩藤の家に拉し去った。

岩藤の家には、すでに前田河広一郎、葉山嘉樹氏等が待ち合せていた。岩藤の細君と共謀してわざわざコテを焼き、或は日本刀を畳に突き刺し、或はその刀で峰打ちを食わせ、或は目先に突きつけて、何を要求したか。

『貴様の脱退理由声明書は怪しからん、この場で直ぐ声明書の取消文を書け！』と要求したのである。

この時黒島の妻君の知らせによって、脱退組の伊藤貞助、長谷川進、今埜大力、今村恒夫氏等は、『陰謀の策源地』と睨んだ岩藤の家に駈けつけた。中から前田河、葉山、岩藤、長野等の罵る声が聞える。脱退組は黒島の身を心配し、今埜をして、表がしまっているので裏木戸を叩かしめた。

出て来た岩藤の細君に、黒島の在否をただしたところが、突然数人の者が奥から躍り出て、今埜の頭髪、襟首を掴んで中へ引きずり上げ、寄ってたかって乱打した。前田河は真赤に焼いておいたコテを今埜の右耳下へ押しつけた。

かくて、入れないで外に心配していた長谷川等と、岩藤を先頭にして棍棒、ステッキ、日本刀を携えて現れた残留組との間に、乱闘が始められるに至った。

二

この計画的武装と素手の間の乱闘!

或るものはこれを善悪の問題、または法律上の問題として批判するであろう。

或るものはまたこれを以って、プロレタリア芸術家一般に対する不信を喚び起さしめんとするであろう。例えば、『彼等プロレタリア文芸家は、もろい頭初は既成文壇という共通の大敵に対して手を握り合っていたが、今や既成文壇の勢力は衰え、従って団結力も弱まったわけで、今日の事件も決して偶然ではあるまい。』

という中村武羅夫氏の談話記事が、若し語られた通りのものであるとするならば、少くともかかる不信を助成するに充分であろう。

或るものは更にこれを単なる利害または感情の問題として看過し去るであろう。新聞の記事しか読んでないものにとっては、それは寧ろ当然であろう。

然し、最後に我々が見のがすことの出来ないのは、事件をかように単なる利害または感情の問題として看過し去らしむべき、一定の方向を与えんとする必死の努力が払われているということである。

残留組の、暴行事件に直接参加しなかった金子洋文、細田民樹氏等は、これを反感と多少の誤解のせいであるとなし、一般新聞紙の報ずるごとく一夜東京高円寺の一角に起ったプロ派の剣劇として、仲間同士の泥仕合として、問題を極力簡単に片づけようとしている。

彼等の言う如く、反感や多少の誤解くらいが、果して残留組をしてかかる計画的、武力的暴行を為さしめるに至ったと考え得られるであろうか。

若し事実にして然らば、自らプロレタリア芸術家を以て任じながら文芸戦線の残留組は、暴力団であるか!

若し自らを暴力団と区別する何物かがあるとするならば、それは何か!

ここにこの度の事件そのものの本質がある。そしてこの本質こそ、文芸戦線の本質に他ならぬのである。

単なる利害または感情の問題として、看過し去らしむべき一定の方向を与えんとする努力とは、要するにこの文芸戦線の本質を陰ぺいせんとする意図に他ならない。我々は進んでこの意図が大きな階級的必要から生まれたものであることを明かにせねばならぬ。

この度の事件は前にもすでに例がある。

現在のナップ員山田清三郎等が、今日のナップ成立前、現在の文芸戦線と政治的意見を異にして分裂し、一九二七年の末、前衛芸術家同盟を組織したとき、葉山等はやはり

山田の家に乱入して暴行を働いたのである。その時の理由はともかく政治的意義においては、この度の暴行事件と全く同一のものである。黒島が文戦脱退後、身辺を警戒していたということもうなずかれるであろう。

文芸戦線打倒同盟の檄文によれば、『暴行を働いたのは残留組が悪い、しかし脱退派の思想は××主義だからいけない、おとなしく仲直りして元の巣に帰れ』、と×憲は被害者に説いている。残留組の惨虐なる暴行にも拘らず、敢えて×憲が擁護するところの文芸戦線の思想、即ちその本質とは如何なるものであるのか。

三

この度の分裂の直接動機をなしたものは、九月二十八日の『連盟』の秋期総会において問題となった国際×色労働組合（プロフィンテルン）の支持如何ということであった。その時、青野、葉山、金子等は、政治委員会を作って慎重にプロフィンテルンの業蹟を調べなければ決定出来ないと言った。更に『文戦』十二月号においては、芸術家団体がプロフィンテルン支持を決議するのはおかしいと書いている。

本論において使っている文芸戦線或は文戦という言葉は、断るまでもなく労農芸術家連盟を指しているのである。而して労農芸術家連盟はその名の示す如く明かに芸術家団体である。

ここで我々は先ず芸術家団体と政党との関係を考えて見よう。政党とは『階級の利益を獲得するための政治的結合』である。そして芸術乃至は芸術家団体は必ず一つの階級に属している。従って芸術家団体と雖も、それの属している階級の利益を獲得するための政党を支持し、その階級の為に活動しなければならぬことは明白である。

では労農芸術家連盟は如何なる階級に属するか。彼等がプロレタリア芸術を口にする限り、恐らく労働者階級に属する芸術家団体であろう。

ここに世界プロレタリアートの×、国際×××（コミンテルン）がある。若し彼等の言が真実であるならば、彼等は当然この政党を支持しなければならぬであろう。若し支持しているとするならば、この政党の直接指導下にある唯一の国際的・××的労働組合たるプロフィンテルンを支持することも当然であろう。それは支持を決議するまでもなく、当然なことなのだ。

階級的プロレタリア芸術家団体を以って誇る文戦において、今更プロフィンテルンの支持如何が問題となったこと自体がおかしい。業蹟を慎重に調べるうんぬんに至っては、諸君、おかしいか、おかしくないか。

今日においては、すでに述べた如く、芸術家団体だからそんな労働組合の支持を決議するのはおかしいと、以前とは違った口の聞き方をしている。全く我々は彼等の口を縫うことは出来ぬのである。

然し支持するとしないとに拘らず、とも角『文戦』はその誌上において、コミンタンやプロフィンテルンのことを旺に書いている。そしてその点に対して我々は何等これに反対する理由を持っていない。そしてまたこの問題は海の彼方のことだとも言えないことはない（？）だから我々は我が国に戻ろう。

四

文芸戦線は山川均一派の『労農』を支持している。

その『労農』は、今日の無産政党をば社会民主主義的政党と見ない。これを一つの共同戦線党と見ている。そしてかかる立場から、『労農』は無産政治戦線の統一を唱え、そこからのみプロレタリアートの解放のための主観的条件を作り上げて来ると主張している。（××××党が厳然と存在している今日、その意味は現在の××××党とは別箇の、も一つの××××党を作り上げるというのであろうか。）だから『労農』は全無産政党の無条件合同を主張している全国大衆党を、無産政治戦線統一の基軸として支持している。

従ってかかる意味において、文芸戦線もまた彼等の属すると称するところの階級、プロレタリアートの政党（？）として全国大衆党を支持している。然しその故を以って、若しも文芸戦線に社会民主主義者乃至は社会民主主義的芸術のレッテルを貼りつけるならば、そのものは早速ウルトラのレッテルを貼り返されるであろう。だから我々は先ず用心深く、『労農』の政治的理論を、日本の××的プロレタリアートの現在の正しい見解にならって簡単に批判するのも無駄ではなかろう。

『労農』が主唱する共同戦線党とは何か。労働者、農民、若しくは無産市民によって構成された政党のことである。社会民衆党、全国大衆党、労農党、これみな彼等が称する共同戦線党である。

これに対して、日本の××的プロレタリアートは、かかる共同戦線党は絶対に有り得ないと主唱して来た。何故に有り得ないか。

政党とは『階級の利益を獲得するための政治的結合』である。そして政党は、『一つの階級の階級利益を最高度に代表する、その階級の指導部分であり、階級闘争における、その階級の前衛である。同時に二つ乃至二つ以上の異る社会階級を代表する政党というものは有り得ない。一つの階級の政党は、非常に屢々他の階級と同盟するが、然しその同盟体は決して二つの階級の政党ではない。

例えば、政友会や民政党はブル階級の頭部である。これらの政党は地主の利益をも主張するが、然し、それはただ、ブルジョアジーの階級利益を損せざる範囲に於いてであり、或はブルジョアジーの階級利益の必要のためにである。だから政友会や民政党は「資本家地主の政党」ではな

くて、「ブルジョア政党」であり、我が国に於ける所謂「政党内閣の確立」は、今日の政権を握れる資本家と地主とのブロック（同盟）に於ける、資本家階級のヘゲモニーを意味するのである。』

では労働者と農民の政党の場合はどうか。

『労働者と農民は何れも搾取と貧困と隷属とにつながれている点では同一であるが、その搾取され方、その貧困の原因、その隷属の状態は同一でない。その程度が同一でないのでなく、その歴史的条件がちがうのである。簡単に言えば、労働者――自分の労働力の外には何一つ生産手段を持たない、一切の私有財産から解放された労働者、資本によって直接に搾取される労働者は、自分の作るものはすべて雇主のものとして作るのであり、ただその中から生活資料――労働力の再生産のために必要なる――だけを賃銀として受け取るのであるが、これに反して、農民、後れたる僅かの生産手段（鋤、鍬等の農具、一二頭の牛馬、或は猫の額ほどの土地）を所有し、土地殊に地主の土地に縛りつけられ、地主によって搾取される農民は、自己のつくるものは一旦すべて自分のものとして作るのであるが、その一定の部分を小作料又は地代として地主に貢納するのである。

だから、労働者と農民とは、歴史的、経済的条件を異にする二つの社会階級をそれぞれ構成しているのである。労働者階級は、近代資本主義社会の生み出した決定的な叛逆児、鉄鎖より外に何等失うものを持たない徹底的な××的階級であって、資本の搾取と圧制とに対する相容れざる×であると共に、一切の搾取圧制に対する闘争、××廃絶のための闘争のチャンピオンである。それは現代社会に於ける最も進歩的な階級、未来のための階級である。然るに、農民は、封建的地主社会の遺物であって、それが今日××的であるのは、ただ封建的関係に対する叛逆――ブルジョア的農業××――のためである。勿論、彼等農民の、この土地××に対する要求は、今日非常に高潮して居り、到るところ農民×動の噴火口が開かれつつある。然しながら、土地××を目指す農民が、今、如何にすばらしい××力を発揮しているにもせよ――事実又、一見したところでは、ストライキをしている労働者よりも、地主や×察を×撃している農民の方が、遥かに激烈に、遥かに××的に思われる場合すら多いにもせよ――、それは、労働者の場合とちがって、一切の××財産に反抗する闘争へ向って働いているのではなく、××財産の範囲に於いて、もしくは××財産のために、働いているのであることは、所謂小作争議、立禁反対の闘争、その他水利問題等をめぐる諸闘争等を正直に見れば直ぐに分ることである。即ち、今日の我が国に於ける農民は、封建的土地関係の残存の下にある一種の小ブルジョア層であって、それは主として封建的土地制度の遺物を一掃せんとする限りにおいて××的であるが、労働者階級の如く、一切の搾取制度を××せんとする徹底的××階級ではない。それは、社会階級としては、現代社会に

於ける最も後れた階級の一つであり、未来のための階級ではなくて、過去の階級である。

かくの如くその社会階級を異にし、その××的要求の同一でない、労働者農民とは、その階級組織の力に於いても亦、大いに異っている。労働者は何れも裸一貫であるおかげで、近代工業制度の下に工場に集中され、集団的に組織され訓練されるおかげで、且つ統一されたるブルジョアジーの権力に直面してこれと抗争せざるを得ない地位にあるおかげで、自分を一つの階級として結成する強い力を与えられているが、これに反して農民は後れたる土地生産関係のおかげで到る処に分散され、僅かの私有財産のおかげで狭い土地に縛られ、社会的集団よりも家族的集団にかためられるから、自分を一つの階級として結成する力が弱いのみならず、むしろ反対に、その各々所有する多少の財産の相異と変動と、従って、その多数は益々貧農化し、進んで無一物のプロレタリアートに落ちこみ、その極少数は富農、地主、又は小資本家へ経登るから、全体が一個独立の階級として結成する代りに、益々分裂する運命におかれるのである。(農村に於ける階級分裂)。一口にいえば労働者階級は××力であるのみならず、××的組織的である。農民は××力ではあるが労働者階級によって指導され、援助されない限り、また労働者階級に結成せざる限り、××的組織力ではない。』

『そこで労働者と農民との政党なるものは、名前はあっても、実際はあり得ない。政党なるものは、単にその「構成要素」によって決定されるものでなく、それが如何なる階級の階級利益を徹底的に且つ最も尖鋭に代表するかによって決定されるものであり、寄合ではなく統一によって組織されるものである。如何に同じく被搾取被圧迫大衆であろうとも、かくも社会的歴史的条件を異にする労働者と農民、この二つの別々の階級の階級利益を徹底的に且つ統一して代表するところの政党かあり得ないことは明かである。』

従って、『労農』が主唱する共同戦線党などというものは絶対に有り得ないのだ。

断るまでもないが、我々はここで、労働者農民の解放のために闘うところの政党について論じているのである。かかる政党として、共同戦線党があり得ないということがかくも明白であるならば、『労農』が共同戦線党と見ている社会民衆党、全国大衆党、労農党とは、何か。

要するに労働者農民の解放のために闘うところの政党ではない。従ってかかる政党のもとに大衆を結成することは、労働者農民大衆の解放のための闘いから引き止めることである。これはブルジョアジーにとって有益である。ブルジョアジーの利益を擁護するものである。

我々は労働者農民の味方と称してかかる役割を果す政党を、社会民主主義的政党と言い、かかる理論の主張者を社会民主主義者という。そしてかかる政党、かかる理論を支

持する芸術家を社会民主主義的芸術家という。

文芸戦線の諸君は社会民主主義的芸術家である！

五

我々はここにいよいよ文芸戦線の今回の分裂問題と乱闘事件の階級的真相を明かにすることが出来る。

社会民主主義的政党乃至は社会民主主義者にもいろいろの種類がある。即ち、彼等は資本家階級の手先として、労働者農民の真の解放のために闘うところの××××党に対して、それぞれ異った任務を持っている。

第一に、××党を露骨にハイゲキすることによって、政治的に最もおくれている労働者農民の層を××党の影響から防ぎ止めようとする、社会民衆党や全国大衆党。これを右翼社会民主主義という。

第二に、口に出しては××党を否定しないが、実際には資本家地主の政府と一緒になって××党の攻撃をやることによって、即ちかかる欺瞞の方法によって、相当政治的に進んでいる労働者農民が××党の下に結集しようとするのを、踏みとどまらしめる、『労農』や全国大衆党内の『労農』支持派、それから大山等の労農党。これを左翼社会民主主義という。

その他××党の破壊運動をやっている解×派がある。

我々がここで問題としているのは、芸術の領域において左翼社会民主主義の役割を果しつつある文芸戦線である。

彼等が支持する『労農』は左翼社会民主主義者として、どんな方法によって××党を攻撃し、労働者農民を欺瞞しつつあるか。

第一に各無産政党を共同戦線党などと称して、それ等がブルジョアの手先たる社会民主主義的政党たることをごまかしている。

第二に、かかる社会民主主義的政党の合同による無産政治戦線の統一を主張して、実は今日、異常に左翼化しつつある労働者農民のより強大な闘争力への要望を利用して社会民主主義戦線の力を強めんとしている。

第三に、かかる統一の過程において労働者農民の真の解放のための前衛が作り上げられるのだと、一見××的な言葉を使用して、プロレタリアートの階級としての独自性を抹殺し、すでに今日、大衆の基礎の上に労働者階級の前衛としてあらゆる弾圧と困難を乗りこえて労働者農民の利益のために徹底的に戦いつつある××××党を無視し、その指導下のあらゆる闘争をばウルトラとして排撃することに狂奔している。だからコミンテルンは口にしても、その××支部としての××××党に就いては口にさえしない。若し口にするとすれば、それは潰滅していて無いと称する。況してプロフィンテルンの××支部たる日本労働組合全国協議会に就いては好んで冷笑慢罵を放っている。

文芸戦線はかかる『労農』の××的仮面を自らの仮面と

して、一切の芸術活動をなしているのだ。このことは後に述べる彼等の作品の最近の傾向を検討するに際して重要な意義を持つものである。

今回の分裂問題ならびに乱闘事件の本質をなすものは、一に彼等が、かかる左翼の社会民主主義的芸術家であるということだ。

脱退派はその脱退理由由声明書たる宣言において、一切の社会民主主義に反対してこの××的仮面をひんむいたのだ。そして文芸戦線が社会民主主義的芸術家団体として如何に腐敗堕落しているかを曝露したのだ。

彼等が社会民主主義者の代議士病のごとく、いかにジャーナリズムに毒された文壇病患者であるか、作品の階級的批判に対する自由の拘束、新進作家の抬頭の抑圧、投稿の無視或は横領、代作、劇場公演を一個人の選挙運動のために利用した事実、「文戦劇場員の決議権に対する反対、等々。プロフィンテルン支持の問題などはすでに述べたごとく言うまでもない。

脱退派は最後に、その宣言において斯くの如き反××的芸術家団体とその雑誌の、即時解体と叩きつぶしを主張して、真に正しきプロレタリア芸術運動の道を指し示して言う。

『我々の支持する基本的組織は、現在支配階級と解×派、社会民主主義者の包囲攻撃にあいながら、断乎としてマルクス・レーニン主義の正道を前進しつつあるプロレタリアートの×である。此の基本的組織の運動の発展の方向に沿いつつ、芸術の領域に於いて我々の運動を進展すること、これが我々の歩くべき唯一の道である。』

今回の分裂の本質をなすものはかくてもはや明瞭である。プロレタリアートの×の発展のもとに着々進行しつつある真実のプロレタリア芸術運動、即ち××主義芸術運動の圧力によって、欺瞞の上に立つ左翼社会民主主義的芸術内に起されたところの必然的な純化の作用に他ならぬ。左翼社会民主主義的芸術はそれ自身の内部にかかる純化の作用を起しつつ、社会民主主義の正体を曝露してますます右翼化と反動化の道をたどるであろう。本年夏以来捲き起された労農党解消運動と、これに対する大山等の労農党第一主義者の反動化を見よ。

一般的にこれを見るならば、一九二七年の四月か五月の旧プロレタリア芸術連盟と労農芸術家連盟の分裂、一九二七年十一月か十二月の旧前衛芸術家同盟と労農芸術家連盟の分裂、本年の六月及び十一月の労農芸術家連盟の分裂、これ等はすべて、要するにプロレタリア芸術運動の進展に伴うところの、××主義芸術と社会民主主義芸術との分化の進行を物語るものである。

今や切迫せる帝国主義××の危機と、この××準備のための産業合理化の強行に対する、労働者農民のストライキ、小作争議の闘争の高まりは、大衆の急速なる左翼化を促進せしめ、一方、××××党が公然と大衆の面前に現れ

て、あらゆる闘争の先頭に立たんとする時、その思想的・政治的影響力は大衆の間に深く滲透して、今日労働者農民の真の解放の指導者は×××党以外に存在しないという事実が日本の労働者農民の間に異常な速度を以って大衆化しつつある。従ってすでに述べられた如く、口に××党を否定せずとも実際の行動において、支配階級と共に××党の攻撃に狂奔しつつある左翼社会民主主義者は、全く労働者農民大衆の信頼を失っている。

文芸戦線の残留組にとって、かかる左翼社会民主主義の陣営の危窮に際し、脱退派がその欺瞞と反××的立場を徹底的に曝露して、行動において真実のプロレタリア芸術運動の軌道に歩み入ったことは、何物をもってしても償いがたい打撃である。

欺瞞におおわれた彼等の反××的本質を陰ぺいせんとし、且つは今日の彼等が陥ったところの窮境より自らを救わんとする必要こそ、彼等をして今回の脱退理由声明書の取消を要求せしめたのではないか。

更にその際、残留組が敢えて、全く計画的な武装の暴行に出でたことは、彼等の危窮がいかに切迫せるものであるかを示すのみに止まらず、次の如き重要なる性質を持つものである。

即ち、彼等の暴行がプロレタリアートの、芸術に対する真に正しき要求にむかって向けられたものであることは、プロレタリアートの××的運動一般に向けられた支配階級の×色テロルと軌を一にするものであるという点に於いて、彼等の暴行は国家機構と結合したものと言わねばならぬ。彼等社会民主主義的芸術家はその行動において今やファッショ化しつつある。我々は今回の暴行事件が持つ階級的意義をかかる特殊性において把握せねばならぬ。

されば乱闘事件の峻烈なる階級性を陰ぺいして単なる泥仕合の如き解釈を与えんとする一切の意図は、ブルジョアジーの階級的必要である。

六

文芸戦線の××的仮面と、その下にかくされたる社会民主主義的観点に就いてはすでに述べたところである。我々はすすんで、かかる社会民主主義的観点を、彼等の最近における文学作品の諸傾向の現れの中に具体的に検討してゆかねばならぬ。

最近のプロレタリア文学の諸傾向の一つとして次の如きことが言われた。

『各個のプロレタリア作家のもつ政治的イデイオロギーが、抽象的な形でなく、漸次に具体的に、その作品の芸術的プリズムを透して描かれ、感ぜられるようになって来ている。』

これは文戦の青野季吉氏の言葉だ。政治的イデイオロギーとか、それが作品の芸術的プリズムを透して描かれると

か、全く了解に苦しむ言葉が使用されているにも拘らず、兎に角何を言わんとしているかは理解出来る。即ち各個のプロレタリア作家の持つ観点が、文学作品の中に具体化されて来つつあるという程の意味であろう。

我々もまたかような意味に於いて文戦の青野の言葉に賛成することが出来る。という意味は、漸く彼等の社会民主主義的観点と我が××主義的観点とが個々の作品に具体化されて来て、プロレタリア文学というその一般的な呼称にもかかわらず、今や社会民主主義的文学と××主義的文学との差別が質的な相違にまで進んで来つつあるということだ。

文芸戦線の最近の著しい傾向の一つとして、先ず第一に挙げねばならぬのは、彼等の現実主義的傾向である。

『文芸戦線』十一月号を手に取って見よう。鶴田、菅野両氏の所謂共同製作になるところの『町工場』、伊藤永之介氏の『総督府模範竹林』、原木雄一郎氏の『地下線』、みなそうでないものはない。

『町工場』はまだ完成されていないが、日常生活の小さなことばかりがそのまま細々と、一体何のために書かれてるのだろう。然し大森義太郎氏は日常生活の正直な描写がよいと言っている。彼等の立場から言えばほんとによいのかも知れぬ。

『総督府模範竹林』は力作に違いない。ただそれだけである。土民の竹林が総督府の手によって大資本の所有に帰する経緯や、その間に土民がどんなに生活が苦しくなって追いつめられてゆくかが、非常に達者な筆で、実に辛抱づよく丹念に書かれている。然し肝仁な匪徒の植民地における歴史的意義などには、たとえ背景とは言え、思いも及ばぬことだ。何のために匪徒が起ったのかさえ書かれていないのだ。最後にプロレタリア作品としての申し訳に、匪首たる可鉄がかくれた大等山の濁流渓に沿うた支脈の、通草の海の底深く潜り込んで行く自分の小さい姿が眼の先に見えたと結んで、僅かに、竹林を奪われた主人公黄邱の、匪首の後を追わんとする反抗的意志を暗示しているに過ぎない。

『地下線工夫』にしてもそうではないか。また最後に申し訳的に、工事中感電して死んだ仲間に対して、「『浅野！お前の死は無駄にはしないぞ、きっときっと今に！』私は思わず叫んだ」ただそれだけだ。

要するに彼等は日常問題をそのまま扱ってさえいれば、それが現実的であり、プロレタリア芸術だと考えているのではないか。彼等の頭脳は現実の中からプロレタリアートの終局目標への方向を見出していない。それが若しも単なる技術や個々の作品における失敗の故ならば問題ではない。然し彼等の文学論がそうでないことを裏書きしているごとく、彼等は根本において現実の認識を誤っているのだ。

どんな風に誤っているか、彼等の政治的見解を、も一度

思い起して見れば足りる。彼等はただ、当面共同闘争をやれ、そうして戦線を統一して強くしろ、と言う。然しこの際、かかる戦線の統一者、即ち歴史的使命を持つプロレタリアートの××的指導精神を決して問題にはしない。問題にしているのは彼等の現実、即ち無産政党は分裂していて力が弱いということである。従ってこの現実主義は大衆に追随することであり、必然に改良主義であり、しかもその大衆は常に彼等の頭の中で作り上げられた大衆で、現実の大衆でないのだ。

そのよい証拠として現実の労働者の要求を例に引いて見よう。

『労働者の要求は、自然発生的には改良的要求であり、改良のための闘争である。』

これのみでは現実の労働者の要求とは言えない。然るに彼等左翼社会民主主義者にとってはこれが現実であるのだ。では現実の労働者の要求とはどんな性質のものか。××的プロレタリアートはこれを次の如く見る。

『この改良的要求は、搾取者圧制者との妥協の要求でもなく、合法主義の要求でもないばかりか、搾取及び圧制の×止という××的要求の原素であり、そのための××的闘争及び組織の原動力である。』

而して××的プロレタリアートは、『この資本と労働との存在から必然に約束された自然発生的衝突、闘争を通じて』、労働者を組織し、不断に労働者を××的要求、闘争に結合し、動員する。

我々はかく現実とその方向を認識する。これに反して、煩瑣な現実の現象の中にペンを埋没せしめ、労働者農民大衆の生活をブルジョア社会の枠内に閉じこめられた表面の姿においてのみ描き出すところの彼等の現実主義が、社会民主主義的観点でないと言えるか。この現実主義の傾向は、最近その作品において著しくなって来つつあるのだ。

青野は、貴司山治の『記念碑』(改造)が、××的プロレタリアートによって指導されたところの農民の闘争を扱っているのに対して、指導興味の内容なる言葉をもって云々している。この際、『謂ゆる「主体」の形成されて行く過程』を指している指導=興味という言葉の、デマゴギー的使い方は暫く措くも、この言葉を彼等の現実主義に対立せしめていることは明瞭である。即ち無指導興味に対する指導興味のことだ。これを政治的に表現するならば、無産政党が現実の政治的利害を代表すると称して、実は社会的××を目指さぬ改良主義的闘争に閉じこもりながら、大衆の日常当面のいかなる利害をもそれが政治的・階級的である限り取り上げて戦うところの××党が、空想の政治的利害をでも代表するかの如く称すると同断である。

これは現実主義的作品批評の一例である。

彼等は現実主義を振りまわし、現象を無差別に書き散らして、自らをレアリストと思っている。然しプロレタリア・レアリストは自分の主観によって現実を『勝手に歪め

たり粉飾したりする』ことの代りに、『我々の主観――プロレタリアートの階級的主観――に相応するものを現実の中に発見』せんとする。

彼等社会民主主義者の現実描写は、果していかなる階級の主観によってなされるのか。彼等の作品は、曽って新興ブルジョア階級の主観を代表した自然主義の鋭さをさえ持っていない。その闘争的意志に至っては、『経済的、政治的にはより多く階級協調的であり、思想的、道徳的には、博愛、正義、人道等の加担者』たらんとするところの、小ブルジョアジーの代表作家、ゾラ、ハウプトマン等の『社会文学』にさえ及ぶべくもないのだ。労資対立の尖鋭化された今日に於いて、それは現実主義文学の当然の帰結である。

彼等の現実描写は、彼等自身が××的プロレタリアートの陣営へ移行しない限り、その発展によって行き詰まるであろう。

七

最近の著しい傾向の第二として挙げられるものは、彼等の現実主義と同じく、プロレタリアートの階級としての何等の目的をも持たぬところの、謂ゆる曝露作品の横行である。

『文芸戦線』九月号の、細田民樹氏の『狂人と偽狂人』、金子洋文氏の『トラック』を見るに、前者は極悪な病院長を曝露し、後者は福本イズムを曝露しているが、両君はこの曝露を一体誰のためにやったのか。

細田の『真理の春』以来、この曝露小説なるものは相当流行を来たしたようである。然し彼等及びブルジョア・ジャーナリズムの称する曝露小説とは一体如何なるものなのか。

諸君は知ってるだろう。浜口内閣がさきに糸価補償法案を可決したとき、政友会は辛辣な曝露をやってのけた、民政党は金融ブルジョアジーの手先だ！　と。

東京の或る大工場地帯は、その組織率は兎も角、絶対に左翼の影響下にある。そして社民、大衆の両党とも未だに手を出せない。彼等がこの街へ来て演説会をやると、必ず互いに両党の反階級的、裏切的行動を具体的に、勇敢に曝露し合う。然し決して左翼の悪口は言わないのである。

これは己れの利害のためには彼等が最も勇敢に、最も徹底的に相手の曝露をやることを辞しないという卑近な例である。曝露戦術は闘うもの一切の武器である。階級闘争の武器、最も有力な武器たることは論を俟たぬ。

然し、だからと言って総ての曝露が階級闘争の武器ではないのだ。曝露は敢えてプロレタリア文学に限ったことはない。プロレタリア文学の特性でもない。

然らば、階級闘争に於けるプロレタリアートの曝露の武器は、自余の曝露と如何に区別されるか。

我々の曝露戦術は、先ず第一に階級対階級の上に立つ。第二にそれは、政治的にも経済的にも、アジテーションを行うための必要からのみ為される。
第三にそれは、プロレタリアートの歴史的使命、即ち労働者農民の真の解放を眼ざすマルクス主義のイデイオロギーによってのみなされる。
以上の観点に立脚しない曝露はいかなるものか、いかなる効果を持つものか、具体的な例に就いて述べよう。
大宅壮一の語るところによれば、或る新聞記者が総同盟の内情を曝露したリーフレットを出版した、資本家はこぞってこれを買い集めた、さて、自分の工場の全従業員に読ましたということだ。
或る資本家を曝露した細田の『真理の春』は、ブルジョアの喜ぶところとなり、細田は工業倶楽部に招待された。
或る資本家は労働組合に対する不信を宣伝するためにはリーフレットを買い集め、己れをバクロしてモラッタ資本家は、政党の陣笠が己れの漫画を書いてもらったことを喜んでそれの掲載された新聞紙を買い集めるが如き心理を以って、プロレタリア作家を招待した。
プロレタリア作品における曝露の適確な効果は、さきにあげた三つの観点に立ってのみ果される。而してかかる観点に立ち得る作家乃至は芸術家は、プロレタリアートの×の当面している課題を自らの芸術活動の課題とするもののみが為し得る。プロレタリアートの×を否定しないと言って、現実にはその攻撃を為している左翼社会民主主義的芸術家団体、文戦の作家の為し得ないところである。而してかかる適確な曝露を為し得ないものは、さきの例によって明白なごとく反動の役割を果すものである。
これを文芸戦線に就いて言うならば、彼等は階級闘争の激発の代りに、階級対階級の思想を抹殺するものであり、主観的には、かかる曝露の勇敢性を利用することによって自らを闘争的に、左翼的に粉飾し、労働者農民大衆の前に自らの反××的立場を陰ぺいせんとする。
我々は言うことが出来る。プロレタリア文学に於ける社会民主主義者の曝露興味は一切反動的な役割を果す。今日のボルシェビキーのために何等役立たぬ、そして左翼攻撃の役割を果すところの、漫然たる福本イズムの曝露はブルジョアジーの最も喜ぶところのものではないか。
文芸戦線の作家はその作品において反動化しつつある。第三の傾向は、その論文、雑文等においてやっていた左翼に対する冷笑、漫罵、中傷が、或は題材として、或は部分的に取り扱われた作品が、漸次その数を増して来つつあるということである。
『文芸戦線』十月号の、今野賢三氏の『工場管理』、最近読売新聞紙上に、共同製作のテーゼを発表して其の後同紙に連載された三人の共同製作『工場閉鎖』、さきにあげた金子の『トラック』がこの例である。前の二つは部分的に後のは題材として取り扱っている。

彼等が主としてその力を注ぐ点は、左翼の×合法活動に対する攻撃である。そしてその唯一の根拠は、左翼は好んで非合法活動をなすのだという見解である。彼等の意図は言うまでもなく明白である。自らの社会民主主義者としての合法主義を合理化し、自らの正体を左翼的に糊塗せんがためである。

我々は彼らのかかるデマゴギーが、その作品の増加と共に、今日においてはその反動的効果を高めていることを忘れてはならぬ。

彼らの見解に対しては、次の文章を引用することによって足りるであろう。

『労働者及び農民の「現実の政治的利害」を代表して真剣に戦う限り、資本家及び地主の政府の前に、頭から尻尾まで「合法的」であることは不可能であること、合法と非合法とは相争う諸階級間の力の関係によって決定されるものであること、そして、強固な×合法的地下建築の上に立った××党こそが、最もよく合法的闘争手段を利用し得るものであること。所謂「合法政党」主義は、だから、労働者及び農民の×装解除主義だ。』

結論として最後に言おう。

彼等の社会民主主義的観点がその作品に具体的に現れて来つつあると共に、客観的主観的情勢の推移は、必然的にかかる社会民主主義的観点をして右翼化と反動化への途を辿らしめつつあることを、その作品を通じて観取することが出来る。

（一九三〇年一二月「ナップ」）

六名の除名に就て

労農芸術家連盟

去る十一月六日、わが労農芸術家連盟は、黒島伝治、伊藤貞助、髙野次郎、山内謙吾、今埜大力、宗十三郎——以上六名を除名処分に附した。その理由は、左記声明書に述べた通りである。

声明書

——黒島等六名の脱退に際して——

全国の同志諸君！

前総会（七月二日）以後、我我は鋭意本連盟の活動を最も積極的に展開し来った。それは前総会に際して発しられた我々の声明書に言明した如く、内部的には、連盟の極左的及び右翼的偏向の清算であった。然るに、伊藤、黒島等一連の分子は、或は運動をサボタージュし、或は意見化さ

れざる不満を個人的に表明することによって連盟の活動を阻害し、或は陰険陋劣なるデマと策動によって連盟員間の感情の疎隔を計らんとした。

突如十一月四日に至り、それらの諸傾向を最も濃厚に示しつつあった伊藤貞助他一名は、遂に脱退を実践した。而も、その『輝ける』ウルトラ・ファン的声明のもとに！

本連盟執行委員会は即日脱退者の即時除名を決行すると共に、尚連盟の内部にあって、同様の偏向を助長しつつあった宗、今埜、山内等黒島伝治を取巻く一群の分子の処置について、数時間に亘って慎重に討議を重ねた結果、遂に除名を決議したのである。

翌六日に至り、黒島以下三名は先方より脱退を通告し来った。

同日直ちに本連盟は拡大執行委員会を召集して、前記六名の除名を満場一致を以て承認した。事件の経過は右の通りだ。

彼等の声明書を見ると、笑止にも政治的意見の相違によって今回の分裂を来たしたかの如く記されている。だが、事実は、連盟内に於て従来最も政治的無関心の態度を示し来たったものこそ彼等であり、又彼等が政治的意見の相違について何程かの疑問を表明した事実すら、我我は知らない。もしも我連盟の指導意見が彼等の慢罵するごとく『社会民主主義的』であり、彼等が真のコムミュニストであるならば、堂々と連盟内に於てその見解を述べ、我々を批判・克服すべきであったのだ。然るに彼等は、政治的意見に関するただ一回の討議をもなさずして連盟を逃亡し、我我こそは真正のコムミュニストだと叫んでいる！

しかし乍ら我々は彼等の実践と行動とのこの矛盾、この豹変を決して驚かない。我々は彼等が単なる極左ロマンテック乃至は極左的仮面にかくれた文壇利権屋の一群に過ぎない事実を、あまりにもよく知悉せしめられているからだ。

彼等はその声明書において、総会の席上プロフィンテルンの支持（！）如何が問題となり、我々が態度を曖昧にして云々と述べている。が、これこそ彼等のデマ性を立証する完全なるナンセンスであって、同時にあれほど簡単な討議の内容すら充分に呑みこめなかった彼等の認識不足を示すものに過ぎない。考えても見よ！　一個の芸術団体がプロフィンテルンの支持云々とは、一体何ごとか!?

周知の如く、我々が国際的なプロレタリアの党、及びプロフィンテルンの原則的な方針を否定したことが、嘗て一度でもあったか！　ただ我々は、日本におけるプロレタリアの党と称するもの及びその指導下にある諸団体の理論及び実践上の極左的誤謬、並びに単なる党の名のみによって如何なる誤謬にも無批判的に追随する者の坊主主義傾向とも鋭く対立しているに過ぎないのだ。我々は曾てそれを「曖昧」にしたこともなければ、隠蔽しようとしたこともない。これはあまりに明白な事実であって、今更らここに述

べる必要を見ない。

プロ芸、ナップとの分裂以来、我々は階級党の名が、あまりにも浅薄なる自己満足のため、乃至は醜劣なる功利的意図の下に不検束に利用され、それが宛かもジャーナリズムの波に乗る一個の処世術として軽々に使われていることを、我々は憎み且つ悲しむものだ。今又黒島等によって、同じ浅薄と醜劣とが繰返されたことを我々は遺憾とし、全国の同志諸君に深く謝する。

腐れ果てたる者よ、行け、ジャーナリズムの旗の下に！

わが連盟は、かかるバチルスを排除することによって、一層活潑なる運動を展開し、如何なる困難に遭遇するとも、労働者、農民大衆の心臓の中に、真のプロレタリアートの革命的精神を燃え上らしめることに鋭意努力することを誓うものである。

右声明す。

一九三〇・一一・六

附言 （なおこれは声明書の本文に書き込むなら無駄だと思うので、ここに附記しておくが、黒島・宗等の脱退者等は、同志青木・里村・鶴田の共同製作『工場閉鎖』（読売掲載中）は右三同志の共同製作でなく、第三の材料提供者があると『暴露』し、これを本連盟にたいするデマゴギーの一支柱としている。が、本連盟は嚢に『共同製作に関するテーゼ』を発表し、しかも宗はその調査委員であり、黒島は右テーゼを大会で立派に承認しているのだ。而してそのテーゼには明瞭に『単なる材料提供者』は共同製作者に非らずと規定してある。『工場閉鎖』に単なる材料提供者のあったことは、彼等の『暴露』するまでもなく、関係者の何人も知悉していることであり、公然と言明されて来たことだ。彼等がいかに脱退の口実に窮したかは、この一事で明白であろう）

（一九三〇年一二月「文芸戦線」）

日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議

同志松山の報告、及びそれに関して我々の間にかわされた質問、応答を通じて、我々は、日本プロレタリア作家同盟の従来の運動方針が正しく持たれて来たことを承認す

る。特に我々は、

一、彼等の芸術大衆化の方策について賛意を表したい、その方策の一端は、今や、労農通信運動の組織に結びつけられている。これは極めて重要なことである。『戦旗』発行所の支局が全国的に、特に農村・工場の間に、三百箇所も持たれて、その各々の周囲に労働者・農民より成る読書会の組織が興されたこと、その読書会と日本プロレタリア作家同盟及びその地方支部が密接に結びついた事、そうした結びつきをプロレタリア文学運動の基礎となした事、等は正しい戦略であった。かくして毎月の『戦旗』に実際に労働者・農民の手になる真に生彩ある労農通信の多数が掲載され、それらが同盟によって将来のプロレタリア文学の基本的要素として正当に評価され、受け容れられた事、或は労働者・農民の間から有能なる多数の作家が輩出せしめられ、殊に長篇小説『太陽のない街』を書いて作品の大衆化を最も効果的に実現した徳永直の如き作家が、印刷工の間から出現せしめられた事、等は最も喜ぶべき現象であった。次に、

二、彼等がその芸術創作の方針として『前衛の眼をもってこの世界を見、且つ描く』というスローガンを採用した事、また特に『我々の文学に党の影響を強めよう』という意識的運動を起した事に大なる賛成を表する。小林多喜二の中篇小説『工場細胞』は困難な情勢のさなかにある日本共産党がその地下運動を進めつつ、中でも最も運動の困難な対象とされている、『優良な工場』の一つたる或る製罐工場に、産業合理化の過程中たくみに機会を捉えて、遂に非合法的工場細胞の根を下し、やがて公然たる工場代表者会議その他の組織的活動にまで全従業員を動員するに至る全経過を内容としたもので、全く輝やかしい意図と正しい階級的観点のもとに製作されたということができる。

三、同伴者に対する日本プロレタリア作家同盟の方策も亦極めて正しかった。彼等がよく同伴者たちを自分たちの周囲に近づかしめ、これを自己の影響下に置き、よく導いた事は、彼等が片岡鉄兵、勝本清一郎、貴司山治、等を獲得したことの上に現れている。同伴者に対する方策を誤らなかったものは、世界でソヴェート同盟と日本のみである。且つ日本プロレタリア作家同盟は、或る同伴者が社会民主主義一派の中に公然と所属した時に於てのみ、敢然とこれに対して決定的闘争を開始している。これも全く正しい。同伴者獲得の問題は、社会民主主義との闘争に外ならぬものだからである。

四、我々は尚、一九二九年一月に於けるナップの再組織についても賛意を表する。この再組織によって技術部門別による全国的運動の基礎的組織が確立され、以後、運動の急速なる発展を導くことができたからである。再組織後のナップ（全日本無産者芸術団体協議会）は次の五箇の同盟によって構成された。

日本プロレタリア作家同盟

日本プロレタリア劇場同盟
日本プロレタリア美術家同盟
日本プロレタリア映画同盟
日本プロレタリア音楽家同盟

且つかかる分化後も、ナップ構成の諸同盟がよく完全なる一つの統制下に行動し得たことは、輝かしいことであった。

かくて我々は、日本プロレタリア作家同盟の苦闘の跡をかえりみて、幾多の満足を覚える。しかし我々にとっての絶えざる前進の必要は、我々をしてこの最もよき機会に、尚お次の如き提案を敢てせしめる。

一、日本プロレタリア作家同盟は、直ちに国際的組織に加入すべきである。

二、労農通信の運動が一層広汎に拡大され、その組織網の中に日本プロレタリア文学運動の基礎がしっかりと根を張り、運動の全根底が強化されなければならぬ。

三、国内に大きな農民層を持つ日本にあっては、農民文学に対するプロレタリアートの影響を深化する運動が一層注意される必要がある。日本プロレタリア作家同盟の内部に、農民文学研究会が特設されなければならぬ。しかし言うまでもなく、それがあくまでもプロレタリアートのヘゲモニーの下に置かれなければならぬことは、勿論である。

四、同盟全体の理論的・批評的活動に益々大きな注意が払われなければならぬ。特に農村・工場に於ける読書会の中に旺盛なる批評的活動を勃興せしめる必要がある。ソヴェート同盟の経験によれば、この方法によって農村・工場の中から最も優秀な理論家・批評家多数を生長させることができる。これは運動の全体的基礎を強化するために最も重大な要件である。

五、プロレタリア文学運動に於けるマルクス・レーニン主義の方針のもとに、左右両翼への偏向に対する二戦線の闘争が正しく理解され、強力に進められなければならぬ。

六、日本の植民地及び移民地(中国、朝鮮、北米、南米、その他)に於けるプロレタリア文学運動にもっとも注意を払い、それらと密接な関係を確立しなければならぬ。

七、特に日本と中国の間には、文字の同一、地理的近接及び政治的・経済的関係の密接により、プロレタリア文学運動の領域に於ても、従来すでに稍々密接な交渉があったが、しかしそれは未だ、組織的な関係にまで進められていなかった。両者は、両者の経験を交換するため、且つ相互に協力し合うため、速かに、組織的連結を確立しなければならぬ。

八、革命的同伴者を自己の周囲に引き寄せることによって、左翼社会民主主義政党の影響下にある文学団体たる『文芸戦線』一派と徹底的に闘争しなければならぬ。

尚、最後に附加したいのは、総会が特に次の提案をしていることである——日本に於けるプロレタリア文芸運動と

労農通信運動との結びつきに関する日本プロレタリア作家同盟の経験を、他の各国の代表者たちに知らしめるための特別な報告がなされて欲しい、と。また同志松山の報告は、これを総会のプロトコールに載せ、且つ小冊子になさるべきものである。

一九三〇年十一月十四日
ハリコフ市に於て
国際革命文学局第二回拡大総会
日本委員会

議長 ヂーガ Djiga (ソヴェート同盟)
委員 マダラス Madarass (ハンガリー)
同 シャオ Shao (中国)
同 キッシュ Kisch (ハンガリー)
同 ブアチゼ Buachize (ソヴェート同盟ヂョルヂヤ共和国)
同 ワイスコップ Weiskopf (ドイツ)
同 松山 (日本)
同 永田 (日本)
書記 ゴルプシティン Gorpstein (ソヴェート同盟)

(一九三一年二月「ナップ」)

農民とプロレタリア文学

池田寿夫

一 何故問題にするのか

農民文学とプロレタリア文学——こうした題目は一見明白過ぎて何故こんな題目を今更乍ら吾々が問題にするのか、了解に苦しむ程分りきってるようだ。けれどもよく考えてみると、吾々のプロレタリア文学は××的プロレタリアートの立場に立って、その前衛の眼を以って、労働者階級を対象として生み出されるのであるならば、農民と労働者が階級的範疇を異にする以上、問題は一見したほど単純なものではない、ということに気づくのである。労働者階級の立場に立って、農民を対象とする文学はどんな意義を持たねばならぬのか、労働者とは生活条件、習慣、心理、感覚等を異にする農民に向けらるべき吾々のプロレタリア

文学はどうした特別の注意と準備が要るであろうか？ 吾々は嘗つて農民を題材としたとき、どのようにして取扱って来たであろうか？ 彼等一連の社会民主主義者共はこれをどのように理解し、どのように表現し来ったか？ 又、マルクス――レーニン主義の原則を政治的強権主義なりとして無政府主義を標榜し、『土の精神』によって農民を解放せんとする所謂農民主義者共は、これを如何に理解し、如何に表現し来たったか？ 吾々はこれらの諸批判の上に、××化せる農民大衆の欲求をプロレタリアートの立場に於いて、如何に表現してゆかなければならぬか？ 等々これらの諸問題は、一見奇異の感を抱かせるほど平凡である。『農民とプロレタリア文学』という主題の解決を吾々に迫っているのである。

吾々は吾々の運動をより広汎にし、隅々までもマルクス――レーニン主義で武装し、現下のプロレタリアートの要求に応える為に、この問題を解決してゆかなければならない。

二 文学の題材としての農民

日本の近代文学、ブルジョア文学で農民を題材にしたのは恐らく長塚節の『土』が始めてであろう。この小説はブルジョア・レアリズムの観点から、農民の貧困化せる姿を悲惨なまでに描き出したものであった。社会の下積みの農民が如何に生活し、如何に困憊しているかの事実が描出された。けれども如何に生活の事実が描かれようと、農民をして非人間的な、まるで獣類に近い生活に陥れた根拠に就いての分析が、究明が些かも『土』の上ではなされていなかった。蓋し、ブルジョア・レアリズムとしての最後的到達たる現実の暴露は単に暴露であり、たかだか人道主義的センチメンタリズムによるれんびんが作品の主調を形成していたのである。

その後のブルジョア文学の発展は、次第に農民を文学的対象の埒外から放り出して、専らプチブル層、インテリゲンチャ等が題材として選ばれた、稀に農民が描かれたとしても、それは単なる題材上の新奇さを求める為か農民に仮託するかであって、農民の生活が全体的に文学の中にとりいれられたのではなかった。（例えば芥川龍之介の『一塊の土』とか、菊池寛の『義民甚兵衛』とか）

こうして都会に文学の中心が定るや、少数の反都市的文学が、所謂農民文学として、或いは『土の精神』を標榜し、或いは芸術の郷土性を主張することによって、農民を文学の主人公としようとした。中村星湖、加藤武雄、犬田卯、五十公野清一、伊福部隆輝、鑓田研一、内田伝、その他理論的・作品的活動がそうである。これらの活動は成程今日にまで継続しているが、文学的実勢力は殆んど持たず、全く文学的発展の流れから遠のいているということが出来る。これらは真実に農民の進歩的な階級的立場に立つので

はなく、歴史的に反動化せる小ブルジョア的観点からの最後的喘ぎに過ぎない。

吾がプロレタリア文学が漠然たる自然発生的な資本主義への反抗から出発した時、それはより近代的工場労働者よりも農民的体験の所有者が作家に多かった為に、農民を題材とすることが次第に多くなって来た。勿論作家自身の文学的成長と共に、作品そのものも成長し来った。けれども、労働者を題材とした文学が、異常に飛躍的に発展し、××主義文学と社会民主主義文学との分化が闡明化し、吾々がより強力に××主義的軌道を歩み出しているのに対し、農民を題材とする文学は内容的にも形式的にも数歩立ち遅れている。吾々はそれがどれほど遅れているか、どんな現状にあるか、××主義的農民文学は如何ように発展してゆかねばならぬか、内容は形式は如何ようにすべきか、社会民主主義的農民文学は如何なるか、等々の問題が吾々の前に横っているのである。その為に必要な作家と作品の具体的批判から始めよう。

三　佐々木俊郎の批判

ここに佐々木俊郎の作品の批判から始めることは若干奇異かも知れない。何となれば彼は所謂農民文学の陣営にも、社会民主主義的芸術家団体に属する文戦にも、ましてや吾々の側にも属していない作家だから。けれども彼ほど純粋に、典型的に、農民の生活を知り、非人間的生活の極致を描いている作家は珍らしいし、又彼は新芸術派の有する唯一の社会的テーマを取扱う作家でもあるし、長塚節の伝統を資本主義的発展の今日に照応しているが故に先ず吾々は彼の批判から始めることにしよう。

彼には無数の短篇があり、既に『黒い地帯』『熊の出る開墾地』『都会地図の膨脹』の三つの著作集がある位だ。(彼の農民を取扱ってない作品は問題にしない)

彼の作品は題材的に云って次の二つに大別することが出来る。即ち第一に、農民の生活を直接的に描いたものと、第二に、農村の都会化、乃至は都会の触手の次第に農村へ侵入する経過を描いたものの二つである。

第一の農民の生活を取扱った作品は『黒い地帯』『鴉鳥』『自殺を疑める話』『熊の出る開墾地』『山茶花』『悪い仲間の話』『裏面』『墜落』『桑を植える繭商人』『暴風に別れる言葉』『緑の芽』『闇の音』『不幸な母親の話』『運命を手繰る者』『馬と人間との話』『蜜柑』『鉄と土地と人間との話』『売物』『田舎医者の手帳から』『或る部落の五つの話』等々がそうである。

これらの諸作は、貧乏で馬だか、人間だか区別のつかないような生活を強いられている農民の姿をありのままに描き出したものである。小作料が払えなくて娘を女工に出したり、女工に出した娘が誰かの胤を宿して帰村して来たり、耕作だけで食えないので河川や堤防の修理工事に出な

ければならなかったり、愛玩する植物も金の為に売払わねばならなかったり、農村に愛想をつかして都会に走り出る青年や、土地にしがみついて離れず、結局土の為に死んでゆく母親や、――そうした農村の出来事、挿話が丹念に、きどらず、ありのままの姿で描き出されている。誇張もなければ附焼刃もない。けれどもここに描かれた農民の姿は、長塚節の『土』や芥川龍之介の『一塊の土』に描かれた人間より、どれだけ真実性を有しているであろうか。これらの作品に出て来る農民は成程人間性を附与されているが、それは悉く家庭悲劇的ポーズで登場しているのである。土地を耕し、自分の作った米の半分以上も地主に奪われる小作人の階級的な悲劇が、階級的背景の下に繰り展げられるのではなく、伝統と習慣とで二進も三進も進めない個人的な家庭悲劇として取扱われているのである。だからして小作人が地主と自らを対立せしめ、その対立の中に自らの悲劇を乗り超えようとする階級的努力は、佐々木俊郎の芸術的視野からは遙かに遠い、全く縁もないことに属するのである。

例えば自分の娘を都会に出さなければならない父親は、『お房！ 汝あ、恨むんなら、煉瓦場を恨めよ。なあ。森山の旦那が悪いのでも、俺等が悪いのでもねえ、煉瓦場が悪いのだから』（黒い地帯）と述懐して、地主との対立に悲劇の根拠を求めず、資本主義的企業の農村への侵入に微かな不満と反抗を示しているのみである。こう批判してみればこれらの諸作のイデオロギー的基礎は明らかに人道主義であり、プチブルの協調主義以外の何者でもない。だからこそ彼の視野は地主との対立にまで向けることが出来ないのである。

彼の農村が次第に都会化されてゆく経路を描き出した『都会の触手』『都会地図の膨脹』でも、農業生産の危機と資本主義的企業の制覇の観点から見られず、単なる風俗画的興味のみである。

成程佐々木は農民を描きはした、しかも生々しい挿話の数々を以って、近代悲劇の主人公たる農民の悲惨なまでに暗欝な生活を描き出した。けれども農民の悲劇が家庭悲劇や宿命悲劇、環境悲劇の中に封じ込められていて広汎な階級闘争の姿は描き出されていないのである。この姿を逸して、どうして現在の農民を真実に描き出したということが出来よう。無智、蒙昧、愚鈍、沈欝、狡猾な農民の生活的タイプが如何ほど現実性を持とうとも、日本の農業の封建的性質と資本主義的侵入との挾撃によって、全身土地を渇望している現在の農民の姿の現実性ではあり得ない。典型的な農民作家であり乍ら、佐々木はここに致命的な評価を受けなければならぬ。

吾々の農民文学は、先ずこうした家庭悲劇的エピソードを乗り超えて、広汎な階級闘争の現実を定式化し、芸術化することに努力しなければならない。総ての意図を階級闘争の中に置き、鋭い眼を以って日本農業の特質とその危機

を抉り出さなければならない。

四　金子洋文の批判

佐々木俊郎が農民を取扱い乍ら結局地主対小作の階級闘争の現実を見逭しているのに対し、金子洋文は一九二二年の作品である『地獄』に於いて既に小作人と地主との対立を描こうとした。『地獄』は旱魃による不作から小作料の減免を地主に交渉することを描いたものである。こうした自然発生的な農民闘争は今日では常識となっているが、当時にあっては確かに芸術的課題としてすぐれたものであった。けれどもここに描かれている事実は当時にあって卓越していたにも拘わらず、多くの欠陥と誤謬とを存していた。旱魃に苦悩する農民の焦燥はよく描かれているが、その解決の方法として選ばれた雨乞いと地主への交渉、嘆願という二つが、何等の批判もなく追随的に取り扱われている。雨乞いなどと云う非科学的な超階級的な戦術（！）がたとえ実際、農民の伝統的観念から己むなくとられたとしても、そうした方法には峻厳な批判がつきまとわなければならぬのに、金子は何等そうした努力を試みていない。加之、地主の描き方は典型的であり、不必要なエロチシズムで読者の興味を無駄な間違った方向に向け、更に小作人の反抗をすらもエロチシズムから説明しようとさえしている。

所が一九二八年の『赤い湖』ではそうした初歩的な誤謬と欠陥は成程清算している。『赤い湖』は、土地の不当なる取上によって蹶起した農民が大衆的に地主と抗争し、農民組合がこれを指導して勝利するという物語だ。農民が如何に土地を熱愛し渇望するかということ、地主が如何に横暴にもこれを取上げるかということ、×憲と×判所とは結局地主の側に立ってこれを積極的或は間接的に援助するかということ、これらの現在の農民闘争にとってイロハであることがここで取扱われているのである。問題は農民が如何に闘争の中から自己の階級的組織を築きあげてゆくか、如何なるスローガンによって農民の××的要求を表現し、これを獲得してゆくか、農民組合はこれを如何に指導し、闘争するかということにあるのだ。金子は『赤い湖』の三分の二をくたくたと土地取上げの事情を必要以上に説明して、残る三分の一でこの重大なる課題を芸術化しようとした。そして結果は？　勿論失敗している。それは単に作品構成上の失敗であるのみでなく、イデオロギー的に彼の労農派の農民運動理論を鵜呑みにしているからだ。勿論小作争議の戦術が労働者の争議と異るのは明白だ。けれども決定的な最後の大衆動員にまで訓練してゆくということはレーニンの云う『運動の最高期の特徴とするところは、きわめて広汎な経済的基礎であり、しかして政治的ストライキは――経済的ストライキの確固たる基礎の上に』おかれなければならぬのである。所が金子の『赤い湖』では成程組

合員がビラを撒いたり、立禁反対の演説会をやったり、更に大衆的にデモで地主の邸宅へ押しかけ、途中で×憲と衝突することが描かれているが、結局それは争議費用の吊上げに利用しているに過ぎない。こんなのこそ、ダラ幹であり、排撃しなければならぬ地主の忠実なる代理人なのである。殊に金子は争議の解決——小作の勝利の重要な一つのモメントとして、地主の祖母の恩愛と寛大を極度に誇張している。これなどはもっと整理さるべきである。

この作品は土地奪還の為に蹶起した小作人の大衆的闘争を描こうとしたにも拘わらず（勿論伏字の多いせいもあるが）結局、農民組合の争議方法、戦術などに対する無批判と誤れる合法主義闘争の肯定とで、遺憾なく金子の社会民主主義的な馬脚を露したものと云うことが出来る。

金子にはこの他に『闘争する廿三人』『金解禁と部落』『農民一揆戦』等がある。

五　山本勝治の批判

この作家はもう死んでいるから問題にしなくともいいかも知れないが『十姉妹』『員章を打つ』の二つの短篇は、農民文学の発展の中で、相当注目すべき作品であり、見遁すことが出来ないと思われるから、敢えてここで批判する。

『十姉妹』は昔気質の祖父と気の弱い正直者の父と階級的に自覚した息子との悲劇である。旱魃の為の不作から流行の十姉妹を飼おうとする祖父とそんなことの無駄を主張する息子の間にはさまって、父は賭博に手を出し遂に気が狂うという物語だ。

『員章を打つ』は不当にも取上げられた土地を奪還しようとして全村組合に加入して闘うのに、小地主から落魄したばかりで組合を呪っていた頑固な兄が父の遺言で弟と共に組合に加盟するという物語だ。

二つの作品共に、佐々木俊郎に見られるような農民の経済的窮困はさほどに描き出されてないが、農民の生活ドラマを階級闘争の観点から見ようとしていることは事実だ。この点佐々木などより数段進んでいる。だがここに於る階級闘争は決して作品の表面に出ているのではなく、遙かなる背景に押しやられて、結局新しい家庭悲劇——祖父と父と子との葛藤、兄と弟との思想的対立——の域を出ていない。佐々木が全然家庭悲劇にしているのに比すれば、階級闘争の事実が兎にも角にも、殊に組織化された組合の活動が作品に現われていることは、山本の方が吾々にとって重要だ。この作品が何故に家庭悲劇の域に留ったか？　これは労働者階級の偉大なる階級的成長に刺戟された小ブルジョアが、イデオロギー的に、思想的にプロレタリアートを理解し、その原則をそのまま農村に、農民に適用しようとしたからである。勿論彼の素朴な表現によって明かな如く、これらの作品は、新しい××的な農民獲得の思考方法、

生活習慣、道徳、感覚、心理等が生かされて居らず、一般的なマルクス主義的イデオロギーと農民の闘争生活から滲み出るプシコロギーとの間に矛盾があるからである。だからして『貝章を打つ』の弟の心理はたかだか急進的な人道主義に留って、戦闘的なものではないのである。従って心理葛藤に基礎づけられたプチブル的な農民文学でしかないのである。

農民の階級闘争は吾々の文学では背景であってはならない。あくまでも、階級闘争の現実が表面に構成されていなければならない。それは単なる悲劇的な家庭生活ドラマでは断じてない。

六　鶴田知也の批判

鶴田知也の『海鳴り』は厳密な意味で農民を題材にしているとは云えないが、北海道の牧場と農場、牧夫と農民の反抗がとり扱われている。監獄部屋を逃げ出した二人の放浪者が農民と牧場に働いて、協力して反抗運動を起すという物語である。前半は二人の放浪者の気持、心境を割りに巧みに描き乍ら、後半に到って甚だ粗雑にしか描いてないので、反抗が現実性を持たない。殊に結末の海鳴りを労働者農民の鯨波に比喩して説教するのは象徴的であって具体的ではない。

『牧場を逐われて』は『海鳴り』に続く作品であるが、前作に現れている牧歌調、放浪的ルンペン性が作の全体を掩うて全体の構成を甚しく無造作にしている。

北海道は日本農業にとっては全く内地と異っている。それは単に天候の相違や習慣、気風の違いだけでなく、農業経営に於いても、土地の所有に関しても多く異っている。殊に大農経営による農場地主が直接土着でなく、都会にあって資本家として労働者を搾取したり、金利生活者として生活したりする所謂不在地主等は、当然新しい農民作家に豊富な題材を提供している。小林多喜二は『不在地主』で北海道農民を取扱ったが、鶴田が折角北海道農民、牧夫を題材としながらも、ルンペン的牧歌詩に溺れてそこから抜けきれないのに比較して吾々と文戦作家との決定的な差異を劃している。

七　平林たい子の批判

平林たい子には『夜風』『労働』『耕地』等の農民小説がある。

『夜風』は諏訪湖畔の養蚕村に於ける貧窮な小作農の生活を描いたものだ。兄は百姓を嫌って工場に通い、出戻りの妹は父無児を孕み、製糸工場をひろげる為に田地をとりあげられる小作人の悲劇を描いたものである。

『労働』は農民組合の形成されてゆく過程を描いたもの、『耕地』は土地を取上げられようとする農民が、他の農民

の小作米を密告してまでも耕地にしがみつこうとする物語だ。

これらの小説を通じて特徴的ことは、作品が悲惨にまで暗いということである。それは非衛生的な少しでも生理学や衛生に注意する者なら到底住むことの出来ないような家屋、一日に拾五時間もの労働、全く胃腑を充すだけの食物、そして自給自足のゴツゴツした手織の木綿着、垢でヌラヌラした寝具、蠟燭よりも暗い五燭の電灯――そして自分で作った米の半分以上も無理矢理に地主にとられて了い、不作だからとて情容赦もないゴウツクの地主、小作料を滞納すればすぐに土地を取上げたり、立毛を差押えたり、全くふんだり、けったりされているのが小作農民の生活だ。何処にも都会的な明るさや、或いはジャズ的狂燥も無く、まして労働者的ながっちりした協働的な力学性もない。それはどこまで行っても明るみに出ない洞のようだ。

平林たい子の農民小説は佐々木俊郎の持つユーモアや牧歌調が少しもなく、金子洋文のようなエロチシズムや狂燥的附焼刃もない。実に底の知れない暗さである。

彼女の持つ暗さは勿論現実の貧困化せる農民の生活に由来していることは事実だ。けれども彼女の作品を貫くイデオロギーはこうした悲惨にまで暗い現実に向って、レアリスチックであるとは云え、無方向に、無目的な反抗精神によって、虚無的な暗さにまで塗りつぶされている。

農民の現実の暗さから暗さしか見出し得ない作家は確かにその内容の把握に於いてイデオロギー的欠陥があるものだ。例えば『夜風』に於いて、作者は兄、弟、妹等の人物描写に並々ならぬ巧みさを示し乍ら、結局地主への反抗を個人的な反抗にすりかえ、農民自身の伝統からする妹への無慈悲にまで惨酷な仕打の暴露等は、正しいプロレタリアートの観点から農民の生活を見ているのではなく、虚無的な無政府主義的なイデオロギーから、露出趣味によって、これでもかこれでもかの圧迫感を強めようと努力しているものと見ることが出来る。『労働』に於けるコンストラクションの不調和、単なるエピソードの累積等、或いは『耕地』に於ける自然主義的な描写等は、みなこうしたことに原因する。

吾々の農民文学は、農民の生活から出発しなければならない。頭の中や、机の上で吾々の文学が作られるのでなく、農民の具体的な生活の中にこそ、芸術的基礎を見出すものである。けれども吾々は農民の生活の現実の暗さから、作品全体に虚無的な死のような暗黒色で塗りつぶす必要はない。吾々は飽くまで農民の現実の生活から、闘争への蹶起、闘争によって緊張づけられた未来への展望の中に暗さ以上のものを見出さなければならないし、それこそ吾々のみが見出し得る所である。それは観念的な明るさでもないし、理想主義的なオプテミズムでもない。飽くまで現実の生活に裏づけられ、激化せる階級闘争に拍車づけられた未来の勝利、希望の中に、現在の農民の、独自の、新し

い明るさを見出さなければならない。

吾々は平林たい子の悲惨にまで暗い作品と全く別な作品を生み出さなければならない。平林のは吾々の文学でもないし今日の農民の文学でもなく、全く彼等の文学であり、過去の農民文学である。その為に吾々は何よりも先ず高度の××主義的教養と農民闘争の現実に鋭い、豊かな生活的接触面を持たなければならない。

八　黒島伝治の批判

この作家は最近文戦を脱退して吾々の陣営に加った優秀な作家の一人だ。既に『豚群』『橇』『氷河』『秋の洪水』『浮動する地価』等の短篇集を出している。数多い短篇は少数の身辺雑記的小説を除けば、反×的な作品と農民文学とに分けることが出来る。

彼の農民文学は三つに大別することが出来るだろう——

（一）農村生活の回顧的追想——『浮動する地価』『幼時』『脚を折られた男』『崖の上』

（二）農民の生活悲劇の挿話——『春の一円札事件』『ある娘ある親』『電報』『二銭銅貨』『彼等の一生』『田園挽歌』『盂蘭盆前後』『農夫の子』

（三）農民闘争の客観的描出——『豚群』『氾濫』

彼は恐るべきレアリストである。僕は嘗って彼を論じて、『写真師』だと云ったことがあるが、まことに彼はカメラを持って現実の断片を撮し得る技師のように、正確で、レアリスチックで、真実性を物語る。それは反×文学の場合でもそうであるが、殊に農民を対象とし、農村の生活を描く場合に、カメラのように冷酷で、而も正確だ。このレアリズムは彼の武器である。

彼の数多い農民文学の中で最も価値高く評価しなければならぬのは第三の方向即ち農民の大衆的闘争を客観的に描き出したものである。けれども『豚群』はこうした激化せる土地闘争に結びつけられた農民の姿を描いたものではなくして、豚の差押に抗して、全村挙って豚群を野山に放つという物語で、極めて原始的な初歩的な闘争でしかない。

『氾濫』になると甚だしく複雑して来る。小作料滞納のために立毛を差押えられた農民が公示札を砕いて田の中に入り、遂に×官隊に包囲せられて検束されてゆくという物語だ。立毛差押は地主の常套手段だ、そして×憲と×判所とは地主とグルになって小作人をいじめ抜く。小作人は自分で種を播き、自分で耕し草をとり、水をくれて育てあげた稲を、たった一本の公示札によって自分の手から取り上げられる、という矛盾がここでまざまざと描き出されている。この作品は我国の農民文学の中でも代表的と云っていい位、スタイルも事件的発展も整っている。けれどもここで吾々は、成程小作人の大衆的蹶起をいざという場合に身命を賭して闘う農民の××的気魄を見せつけられるが、この題材が計画的組織的のものではなく、無統制な非計画

的な非組織的な×起であり、×官隊との衝突であるということに対して、取り扱い方における作者の態度がいかなるものであったかという点に気づかねばならない。

殊に日常の、もっと地味の、目には見えないような組織闘争に基礎をおくところの、その必然的××的昂揚の姿において描くべきで、突発した大衆行動だけ浮き離れて描くことは多くの難点がある。

その他、農民の生活悲劇を挿話的にそのまま描き出したものは佐々木俊郎への批判がここでも適用される。生活悲劇を単に生活悲劇として描くこと、例えば『農夫の子』は佐々木などよりもっと平林たい子流に暗い断面の累積となる。挿話はあくまで挿話であって、これを階級闘争の現実に結合せしめ、一つの必然的な本流を形成してこそ、挿話の役割はあるので、それが単に農村スケッチであり、農民の生活ドラマの部分として、階級闘争から遊離しているとするならば、吾々は之を高く評価することが出来ない。その意味で黒島のレアリスチックの峻厳で正確な態度と方法は大いに買っても、前に述べたような意味での挿話や回顧的追想は今後は止めて貰わなければならない。農民は嘗っての旧い自己階級の姿よりも、新しい自己の姿を、土地を奪還する為に、都市プロレタリアートの指導の下に決死的に闘争しつつある自己の姿をこそ、文学的表現の中に要求しているのである。従って黒島の旧い作品、特に追想的なもの、挿話的なものは既に歴史的になっていると云っていいだろう。彼は新しく農民の生活を改めて描き出さなければならぬ。又彼は吾々の陣営への参加によって、必ずや現下の××的農民の芸術的課題を解決する重要なる一人である。

九　立野信之の批判

吾々の有する優秀な反×作家である立野信之は又同時にすぐれたる農民作家でもある。彼には『瀞蝕』『赤い空』『若者』『少年隊』『情報』『侮辱』等がある。

『赤い空』は道路普請用の砂利購入に不正があるのを発見した農民が役場に大衆的に押しかけるという物語だ。ここでは地主と経済的な対立が描かれずして、『俺等は自覚を持たなくちゃなんねえ。部落のことでも、町政でも、地主や町の旦那共に任しちゃおけねえ。……こっとらが政治ちうもんの自覚をもつことは……何だ……それこそ前例にねえこったがなあ……』という自覚に到達している。特定の主人公がなく、群集が個人々々相当明瞭に書きわけられてあるが農民の生活の特殊性が描写として不足している。『どぶいたち』は農民生活の一つの断面が挿話風に構成されている。『若者』では農村に於ける先進的分子の苦難に満ちた日常闘争から次第に大衆的闘争にまで昂揚してゆく経路を描いたものですぐれたものである。『少年隊』は親や兄達の争議に刺戟されて少年が自らの階級的自覚に達す

る過程を描いている。ここで米の小作人同士の共同管理という新しい戦術が描き出されているのは注目すべきだ。『花嫁』『侮辱』は農民生活の家庭悲劇であるが『情報』は夫を牢獄に奪われた妻がその後の運動が社会民主主義に転落してゆくことと闘い、モップルの運動を捲き起すという重要なるテーマを取扱っている。

立野の農民小説は数こそ少いが『若者』『少年隊』『情報』等は単なる挿話でもなく、個人的悲劇でもなく、又農民生活の自然主義的暴露でもなく次第に激化しゆく農民闘争である。立野の作品の形式的な特徴は、同じ農民を取扱い乍ら、平林や黒島の若干の作に漂う暗さがなく、潑剌としていることだ。キビキビした簡潔な文章と、冗長なる心理描写の排除は、作品を読み易く、動的なものにしている。全く立野は吾が農民文学が到達した一つの頂点を示していると云っていい。

だが吾々が要求するのは、農民の闘争を農民だけの闘争としてでなく、都市プロレタリアートの指導の下に、それとの強固な政治的結合をもって、土地××を遂行しなければならぬことをアヂ・プロすることが重要なのである。

『小農は労働者運動に加って、社会主義のための闘争、並びに土地その他生産手段（経営、機械等）の社会的所×化のための闘争において、労働者運動を扶けることによってのみ、資本の羈絆から脱却することが出来るのである。』（レーニン『労働者党と農民』）

この××的原則は、農民を題材とする作家にとって鉄則でなければならぬ。この基本的定式から逸脱することはとりも直さず社会民主主義以外の何ものでもない。従って吾々が強力に××主義の立場から農民を対象として文学を作る場合に飽くまで農民丈を切り離し、その大衆的闘争が究局的勝利を獲得するかの幻想を与えることを排撃せねばならない。

一〇　中野重治の批判

彼には『鉄の話その一』その他が二三ある。『鉄の話その一』は何よりも先ずテーマのよさと形式の完成さが高く評価さるべきだ。農民文学の中で封建的遺制との闘争を取扱ったものは恐らく今日までの所唯一つではなかろうか。地主との直接的な対立を取扱うことも必要であるし、現物小作料を納めるという封建的な搾取関係×絶のための闘争を描くことも必要であるが、それらを結集して要約した『地主、社寺、××の土地××』『×××の××』の二つのスローガンは今後積極的に農民文学の主要テーマとならなければならぬ。中野の『鉄の話その一』は『×××の××』のスローガンを真正面から取扱わず側面から取扱っている。勿論このテーマは吾々にとって、必要であるだけ敵の逆襲

も甚しいだろうけれど、中野が取扱ってるような側面的な取扱いも出来るのである。

『鉄の話その一』は又形式の単純性、素朴性によって、読み易く、理解し易くし、大衆化しようとした形式的努力を見落してはならない。

農民文学には常に方言がつきまとう。方言は方言としてなつかしみもあり、その地方の農民に受けいれられるだろうけれど、他地方の農民には理解し難いという欠点がある。事実金子洋文の秋田弁、黒島伝治の四国弁、平林たい子の信州弁、佐々木俊郎の盛岡弁等は、作品の理解を特殊化せしめる危険がある。不必要な会話の方言はだからして今後よほど慎重にせねばならない。作品に真実性を与える為に、理解し難いまでの方言を混入することは避けられねばならぬ。勿論そのことは地方の特殊性を無視し、方言を廃絶せよということではない。

中野のこの作品は方言の取扱い方にも、全体の表現、構成にも、異常な形式的努力が払われている。

二　細野孝二郎の批判

細野は純粋な農民作家と云っていい。今までに発表されたものは『雪崩』『耕地区分表』『貧農組合』の三篇でしかないが『貧農組合』は産業別小説の一つであり、吾々の新方針が確立して以来発表された長篇である。

『雪崩』は耕地を取上げられて山奥の炭焼に追いやられた農民が雪崩の為に死んで了う物語だ。細野はここで黒島のような手堅いレアリスチックの方法でこの悲惨な物語を展開しているが、小作人の地主に対する反抗感情が原始的であって、而も農民的忍従さで現実に支配されてゆくことだけしか描いていない。『耕地区分表』は農場の持主が役所とグルになっていつの間にか区分表を書き改め農民に強襲して来るという短篇だ。

『貧農組合』は前篇と後篇に分れている。前篇は吉造が貞次の死から次第に階級的に自覚して、ヤダ富と共に不作の故で小作料減免の闘争を捲き起してゆく、困難な組織事業が描かれている。後篇では地主との決死的な闘争が起り、遂に×動化するに到るが、この過程を通じて農民は『土地を農民へ！』という切実なる要求を飽くまで貫徹しようとするという物語だ。この小説は前篇と後篇とで構成上で著しい破綻を示している。即ち前篇では隈なく農民の貧困化せる生活を具体的に語ってレアリズムの本道を歩いているに対し、後篇は作品の×命性を政論的要素で掩い、作品の具体性を抽象的な政論で損耗しているのである。農民の××的要求を芸術化する為にわざわざ作者は政治的結論で労農党をバクロしているのであるが、この理論と作品の具体性とが水と油のように融和していないのである。それにも拘わらず、この作品は大きなスケールで地味な日常闘争から大衆動員にまで発展してゆく必然的過程をレアリスチッ

クに描き出している点で高く評価していい作品だ。けれどもこの作品も小作人大衆と指導的前衛との関係が不明瞭であり、ましてや×塗られた農民大会をプロレタリアートの運命に結びつける為の努力は些かもされていない。『土地を農民へ！』の××的スローガンを真実に徹底せしめる為に、都市プロレタリアートとの強固なる結合無くしては不可能であるという、マルクス主義の原則がここには未だ滲み出ていない。

だが、吾々は吾々の有する優秀なる農民作家として今後の彼に期待することが出来る。

二 小林多喜二の批判

小林多喜二の『不在地主』は農民の闘争を単に農民の闘争に終らせず、都市プロレタリアートの強力なる応援にまで筆を進めた点に偉大なる功績があると云うべきだ。だが労働者と農民との提携ということは、小林が書いているように、農村から都会に出かけて行って労働者からマルクス主義のイロハを説明されることでは断じてない。

『我々の第一の主要なる、必然的な仕事は農村のプロレタリア及半プロレタリアと都市プロレタリアの同盟を強固にすることである。この同盟の為には、今直ぐにでも、人民に完全なる政治的自由と農奴的隷属の×止が必要である。』(レーニン『貧農に与う』)

『現在まで日本の労働組合は農業労働者の独立組合の組織に全く注意を向けなかった。農業労働者の間に於ける活動の領域は急転換が為される必要がある。彼等の組織は農村の貧農層に対する労働運動の働きかけ、及びブルジョアジーと地主に反対する共同進出の為に必要である。』(プロフィンテルン第五回大会日本に関する決議文)

小林が労働者と貧農との提携という××的課題を芸術化しようとしたことは、如何なる農民作家と雖も企及し得なかったことである。不幸、この課題を小林は成功的に芸術化することは出来なかったが、問題を提出したことは不滅だ。殊に『不在地主』は中野の『鉄の話その一』とは又別個の意味での単純性を有していて、あらゆる労働者農民の間に大衆化しようとした形式的努力は充分認めらるべきだ。ここでは在来の暗欝な農民文学を一掃した新しい農民文学の萌芽が見えているのである。

三 その他の作家——結論

これらの諸作家の外に小島勗に伏石事件を取扱った『群盗』がある。これは我国の農民組合の運動に一転機を劃した伏石事件を真正面から戯曲化したものだが、芸術的具象化が不足している。その他文戦には『組合旗の下に』の杉田英男、『警鐘』の田中忠一郎等がいるが、いずれも自然主義的な手法で自然発生的な反抗を取扱ったものである。

る。

吾々の側には藤森成吉の『磔茂左衛門』『蜂起』、更に本庄陸男、上野壮夫、壺井繁治、田辺耕一郎（少年）等がいる。

けれども吾々は工場労働者を描いた『工場細胞』漁業労働者を描いた『蟹工船』に匹敵するような農民を題材にしてすぐれた××主義文学を未だ生み出していないと同時に、文戦派の社会民主主義的な農民文学と決定的に差異づけられるような優れた農民文学の無いことは、吾が作家達の今後の充分なる努力がここに向けられねばならぬことを示すだろう。

勿論、今日の日本農業は既に危機に瀕し、益々農村に於ける階級分裂を促進すると共に、農業労働者への注目が喚起せられねばならなくなり、同時に貧農と富農との決死的闘争が土地所有権を中心にして激化していることは見遁すことが出来ない。漠然とした農民を対象とすることから、今や貧農、更に農業プロレタリアこそ、今後の農民文学の主人公たらねばならぬ。

以上の諸批判を通じて結論を要約しよう――

（一）今や農民の闘争は小作料減免の闘争から貧農を中心とする土地所有権に対する闘争の段階に入っている。吾が農民文学も従来の悲劇的挿話的傾向を克服してこの新段階に照応せねばならぬ。

（二）労働者と貧農との政治的結合プロレタリアートのヘゲモニーの意義をあらゆる作品の隅々にまで滲透させせねばならぬ。

（三）従来閑却されて来た農業労働者への関心が深められなければならぬ。その貧農との結合が重要である。

（四）ルンペン的虚無的牧歌的傾向の克服と、農民の大衆動員、現下の農業恐慌、失業帰農者と貧農との結合、×力との直接的×突、日常的組織闘争等が描かれねばならぬ。

（五）農民文学の形式は勿論農民の心理、感覚に適合したものでなければならぬが、それは現実の農民生活から来る陰惨、暗欝、遅鈍なものでは決してなく、次第に労働者的形式に近づきつつあること。従って単純で明快で分り易くなければならない。

（六）これら総てを通じて、芸術運動のボルシェヴィキ的実践がより強化し、具体的し、農民の××的闘争との生活的タッチを豊かに広くせねばならぬ。

附記　忽忙の間にまとめなければならなかったので非常に不充分であることを読者にお詫びする。ここでは所謂農民文学に対する批判が殆んど為されていないので、その批判を併せて、吾々の今後の農民文学の進路に就いて続稿を書きたいと思っている。それをも併せて読んで頂ければ幸いである。

（一九三一年二月「ナップ」）

プロレタリア・リアリズムの実践について

青野季吉

一

われわれの文学はプロレタリア・リアリズムの線にそって、刻々に成長している。このことは立派に言い得る。だが、立ち入って観察すると、プロレタリア・リアリズムについての理解が、まだ十分だとは言えない。最も具体的であるべきこの方法の把握がまだよほど観念的であり、特に創作的経験の浅い作家たちに、その不足を見るようである。

一九三二年のわれわれの文学行動は、さまざまな客観的事情で、極めて困難な立場におかれることがハッキリと想像される。ファシズムは、その本質から、決して持続的生命のある文学を生むことは出来ないが、文学を拘束することが出来、文学を破壊することが出来る。この一事でも、三二年のわれわれの文学のおかれる困難な地位が容易に想像されよう。この場合われわれの文学行動にとって最も大切なのは、この困難な地位の故に、これまで断乎として執って来た線を少しでも意識的無意識的に放れることをしないことである。言いかえれば、プロレタリア・リアリズムの線を微塵も離れず、それをますます高度化して行くことである。それが出来ず、いろいろな思い付きの、日和見的な標語で、困難な地位を『改良』しようと試みれば、それは、それだけファシズムへの降服を意味するものだ。

そこで私は、プロレタリア・リアリズムの実践上に現われた、この方法の理解不充分のうち、特に顕著なものについて、ここで個別的に観察しておき度いと思う。

二

アプトン・シンクレヤーは、決してわれわれの科学的な理論の水先案内ではないが、その言説には非常に示唆的なものが含蓄されている。一二カ月まえの『モンド』誌に記載された彼の『文化と社会主義』の中で、彼は次のような、意味の深い宣明を試みている。

『私は、芸術の目的は現実を再生産するにあると説く理論家たちを、就中、嫌忌する。彼等は、生命とは創造の過程であるという事実、ならびに芸術は創造の過程であるということ、またわれわれは生命及び芸術の創造者であるということ、われわれはわれわれの作品の中で生命の新しいイメージを創ることによって、新らしい生命をつくることが出来るということを無視しているのだ。このことで私は、ただ単に芸術家は彼の作品によって、たとえばラ・マルセエーズが王政フランスの顚覆を助けたように、またジャングルがシカゴの屠獣所の改善を助けたように、人間社会を実際に感化することが出来るということを云おうとするのではない。偉大な芸術家は決して存在しない性格を創るということ、そして数百万の人間はこの性格を愛し、それを模倣しようとし、かくして現実の新らしい形態――それは創造者の想像の中で生れる以前には、決して存在しなかったものだ――を創るのだということを、私は云い度いのである。』

この言葉の中にはたしかに誤解され易いものが混入している。またプロレタリア・リアリズムの見地から云って、全く矛盾した表現がある。たとえば、芸術家は、『決して存在しない性格を創る』と云った点がそうで、これでは単なるロマンチシズムの芸術論と誤られても仕方がない。だが、またこの言葉の中には、われわれにとって重要な観察のポイントがふくまれている。

芸術の目的は現実の再生産乃至は複製だというのは、まさしくナチュラリズムの理論であって、プロレタリア・リアリズムの実践家たるシンクレヤーが、本能的にそういう理論を嫌忌するのは当然である。またわれわれの作家達もこれ位のことは『常識』としてわきまえている。だがリアリズムという言葉の機械的な受納から、まだリアリズムとは現実の再生産だと無意識的に考えて、一見固い、コチコチの現実と、彼の社会的・政治的の要求との間に挾まれて、身動きがならずに苦しんでいる作家が、これも創作的経験の浅い作家に多いのである。

プロレタリア・リアリズムは、現実主義ではあるが、現実の単なる再生産主義ではない。現実のなかにふくまれた本質の具体的な表現だという意味で、その意味でのみ、現実主義なのである。シンクレヤーは『決して存在しない性格』をつくるというが、これは間違いで、決して存在しないのではない、萌芽的にか、潜在的にか存在はしているが、まだ現実として普遍化されない性格や事象を、プロレタリア・リアリズムの芸術家は、立派に存在へと、現実へともたらすのである。その意味でのみ、彼は新らしい性格や事象を創ると云い得られるのである。現にシンクレヤー自身のジミー・ヒッギンスにしても、決して彼の単なる『想像』の産物ではなく、ああいう真の闘士性格が、潜在的に形成されつつあったか、既に部分的に形成されていたか――に違いない。

これでなければ数百万の大衆が、それを愛し、それを模倣するわけはない。芸術家は云わばその作品中でどんな性格でもつくれる。だがそれらの『創られた』性格の中で、大衆に愛せられ、大衆がそれを模倣しようとする性格は、単なる想像だけの産物ではない。猿飛佐助を愛し、模倣しようとする大衆はないのだ。芸術家の創った性格のうち、大衆が愛し、模倣しようとし、それによって新らしい生命がつくられる性格は、大衆のなかに既につくられつつある性格でなければならない。そして芸術家がそれに輝かしい具体性を附与するから、大衆の心を完全にとらえてしまうのである。

これは単に性格(人物)に関してだが、プロレタリア・リアリズムは、現実の正確、忠実な観察方法であるが、それは現実を表面的、現象的に写している方法ではなく、現実の動的の生命を顕揚する方法なのである。これが最も重大な点である。

だからわれわれは、固い、コチコチの現実に頭をぶっつけて、苦しむには当らないのである。またわれわれの批評は、与えられた作品の内容を見て、こんなことは現実にないと云った基準を軽率に持ち出すべきではないのである。問題は、現実を探求する眼の深さと、それに輝かしい具体性を与える『感覚的直感』(ウイットフォーゲル)の如何にかかっている。

三

たとえばかの『資本論』(第一巻)中の有名な『最後の一つ手前の章』の言葉である。マルクスは詩的光輝と音響をもった文字で、書き誌している。『……資本独占は、それと共に、またその下に、開花繁栄した生産方法の桎梏となる。生産機関の集中と労働の社会化とは、その資本制的外殻とは両立し難き点に達する。資本制的外殻は破裂する。資本制的私有の終焉をつぐる鐘が鳴る。収奪者は収奪される。』と。ジョルジュ・ソレルはこの言葉を一種の詩だといっている。それはともかくとして、現実の単なる再生産主義は、この言葉に触れると、こんなことは現実にはないと云うに違いない。現に、資本論を攻撃したブルジョア経済学者は、これを共産主義の『夢』だ、ブランキーズムの譫言だと貶しつけたのである。だがマルクスによって把握されたこの内面的現実は、半世紀とたたぬ中に世界的に普遍化された外面的現実となったのである。

マルクスは、資本主義経済を単に現象的に観察し、それを忠実に記録したのではない。そんなことをしていたのでは、一つの図書館が建つくらい多くの著述をやったところで、いまの詩的な宣明などに到達するものではない。彼は資本主義経済の本質(内面的現実)まで探ね究めて、そこからその経済を観て来たから、いまの光輝ある宣明に到達

することが出来たのである。マルクスのこの方法即ち唯物弁証法が、プロレタリア・リアリズムの方法なのである。

ただそれは、科学の領域のことであり、したがって『思想的抽象の手段を以って』（ウイットフォーゲル）なされたのであり、芸術の場合はそれと異って、『彼に固有な感覚的直感の手段を以って』（同上）それがなされねばならないのである。

四

以上はプロレタリア・リアリズムがナチュラリズム（ブルジョア・リアリズム）と本質的に異る点であるが、更に他方、プロレタリア・リアリズムがロマンチシズム（ブルジョア・アイディアリズム）と異った点を、これまた明確に理解しておかねばならない。

プロレタリア・リアリズムは、いまも云った通り、現実――現象のまわりをぐるぐるとまわって、あっちこっちへ頭をぶつけている方法ではなく、内面的現実に到達する方法である。がこのことはまた、現実――現象を無視したり、軽蔑したり、歪曲したりすることを微塵も許さないということを意味する。というのは、それは、現実の正確な、忠実の認識を透して、始めて可能だからである。

ロマンチシズムの方法はそうではない。現実を無視するか、現実から逃避するか、乃至は現実を歪曲し、修飾して来ることが、その可能の絶対条件なのである。だから現実に関して云えば、彼は絶対に、内面的の現実などへ到達することは出来ないのである。

曩に『資本論』の例をひいたから、それに対応するように、クロポトキンの例を見よう。彼はマルクスと異って、資本生産の現実を正確、忠実に観察したのではない。その罪悪的方面を道徳的にまた生物学的に観察して、そこからただちにミューチアル・エードの理想に到達したのである。そのロマンチシズムは、かく現実の無視を出発点としているのである。だから彼においては、マルクスの場合のように、実践によって立証された、光輝ある宣明に到達することは出来なかったのである。

われわれの文学作品には、ナチュラリズムの残滓を多分にもったものが多いが、それと同時に、このロマンチシズムを密輸入している作品もまた可成り多い。ウルトラの作品のほとんど全部はそうだと云って差支えない。彼等は現実を正確、忠実に観察することから出発しない。だから美男と美女の『赤い恋』と、堤の集会とによって、前衛運動が生長するようなテーマの作品が、臆面もなく、それも多量に生産されるのである。これでは、いつまで経っても内面的現実に到達することは出来ない。つまりナチュラリズムが現象のまわりをぐるぐるまわって、頭に無数のコブをこさえているのに反して、彼等は、現実をさまざまに修飾して、チンドン屋的不毛の芸当を演じているのである。だ

から彼等は、幾月目かにスローガンを取りかえて行くことを余儀なくされるのである。序に、小林多喜二によると、彼等の間の第何番かの、而して極く最近のスローガンは、『具体的知識の獲得へ』（！）と云うのだそうであるが、これではまるでプロレタリア・リアリズムの『手ほどき』へ帰ったようなものである。それに自己羞恥を感ずるどころか、小林は反対にそれを得意になって広告しているのである。これが本来間違っている。本統に具体的知識を獲得しようとすれば、これまでの彼等の知識が抽象的で、概念的で、機械的であったことの、正直な、謙抑な、科学的な確認から出発すべきではないか。それが既に具体的知識の獲得の第一歩なのである。その第一歩を彼方に踏み外している。

五

プロレタリア作品におけるロマンチシズムはさまざまな形態で密輸入されている。その顕著なものの一つには、謂ゆるプロレタリアの政治的イデオロギイが木に竹をついだように作品に附加されている場合である。これはウルトラ作品には勿論、そうでない方の作品にも観られる現象である。

プロレタリアの政治的イデオロギイ、その戦略・戦術の立場が、本統に唯物弁証法の方法によって把握されたものであれば、それを外部から機械的に作品に持ち込むなどということはあり得ない。現実の感覚的直覚の手段による表現によって、自らそれが正当づけられ、作品の全体の中において、自然的結合をもって現われて来なければならないのである。謂ゆる政治は行動によって、『上から』仕事をするので、芸術は創造によって、『下から』仕事をするのである。例えば戦線統一が正しいマルクス主義的把握によった戦術であれば、これを作品へ外部から持込まなくても、現実の正確な認識と内部的現実の把握とは、その戦術を正しき自然さを自身に体現して来るに相違ないのである。プロレタリア・リアリズムにおける政治的イデオロギイは、そのような内部的結合をもったものでなければならないのである。

これがそうでなく、政治的イデオロギイが機械的に作品に附着されているにとどまるのは、多かれ尠かれ現実の軽視か、歪曲か、認識不充分かに基くのであり、そこにロマンチックなものの混入があるのである。

先頃私は三好十郎の作品（名は忘れた）を読んだが、失業闘争と罷業闘争を結びつけようという国際的なスローガンを芸術化するのに、まったくの機械的な仕方で、簡単な煽動と、興奮との中で、『易々』とそれが実現されて、国際歌の合唱の中で幕になっているのを見た。これでは現実の土台に立っての失業闘争と罷業闘争との結合の必然という内部的現実には、一インチも接近しない。結局、その結

合にのみ憧憬したロマンチシズムに過ぎないのである。戦線統一を取扱った同志前田河広一郎の最近の作品にも、この偏向が若干見られたように記憶する。

プロレタリア・リアリズムの道は嶮岨である。誤りを犯すことは容易であるが、一旦誤りを犯したら、これを清算することは極めて困難なものだから。(一二・一九)

(一九三一年二月「文芸戦線」)

朝鮮に於けるプロレタリア芸術運動の現状

安 漠

はしがき

朝鮮プロレタリア芸術運動に関しては日本にあまりにも知られていない。日鮮のプロレタリア芸術家が、ともに芸術運動ボルシェヴィキ化を当面の中心的任務とし、日鮮プロレタリア芸術運動の組織的連結を新しき重大な課題として取り上げなければならない現在に於いて、此の一文は、ただかかる意味に於いてのみ意義をもつであろう。

二、朝鮮の現情勢

経済恐慌の渦中の××資本主義の最近に於ける全発展は、植民地諸国の××と、国内に於ける労働者階級及び広汎なる農民大衆に対する極度の×取と抑×に直接依拠した。帝国主義は経済恐慌の重荷を資本主義的産業合理化の強行に依って国内に於ける労働者階級に転嫁せんとするばかりでなく、経済恐慌からの活路を植民地××、××に対する×取×圧の極度の強化に於いて求めようとしている。即ち××帝国主義は販売市場及び原料市場としての××に対する攻勢を激化させた。××主義者、東拓会社、殖産銀行、金融組合に依って代表される地主及び高利貸の農民に対する搾取に依って喚起された××に於ける慢性的農業恐慌は、租税加重及び物価暴落に依って非常に激化した。恐慌は朝鮮に於ける労働者階級の生活水準を悪化させ、農民の土地喪失及び都市中間層の零落を促進させた。賃銀は低下し、労働時間は延長され、合理化は主に労働者特に婦人及び青年の労働強化に依って遂行され、工業に於ける失業は農業に於ける失業の増大と、××労働者の日本からの、

××農民の満洲からの帰国に依って激化した。

資本主義が植民地×圧と×取との世界的体系に発展していればこそ、吾々の眼前に渦巻く世界経済恐慌は自ら帝国主義の植民地統治の危機に、植民地に於ける帝国主義のヘゲモニーの危機に転化する。かくして××に於いて××帝国主義は第二次×××の危機を目前に控えて、白色×××を益々×暴化した。一九二八年二月より開始された×××大×挙は今も継続され、一切の××的組織は集会を禁ぜられ、言論出版の自由は最後の一片まで剝奪されてあり、植民地××教育は無制限にまで強化した。治安維持法は改×され監獄は増設され所謂思想警察は大拡張され移動警察は開始された。実に極端なる反動の嵐は全×を吹き捲くっている。

同時に××帝国主義は、大部分が其の独立性を喪失した土着ブルジョアジーに接近し、彼等を懐柔しつつある。民族改良主義的ブルジョアジーに『自治』を約束することに依って彼等を買収し彼等の積極的協力に依って、新しき××的潮流に対する防波堤を築きつつある。××に於ける××的昂揚の増大、支那及び印度××、サヴィエート同盟の社会主義建設事業の躍進的成功の前に怖れをなした民族改良主義的ブルジョアジーは『所謂公民権獲得運動』に狂奔し、国民党及び支那反×命を模倣に値する先例と考え、印度のガンジ主義を密輸入せんとすることに依って××帝国主義との協力を求め、反サヴィエート使嗾をやっている。

然しながら恐慌の結果、××帝国主義に対する民族解放闘争特にプロレタリアートの階級闘争は激化した。××帝国主義者の巧妙な××政策と××的白色××に拘らず、民族的改良主義者の××運動に対する妨害にも拘らず、労働者農民学生大衆の急激なる左翼化は全国的な大衆的××的闘争となって現われた。××に於いて新なる××的波潮の襲来を告ぐる警鐘であった元山ゼネストと、全×プロレタリアートに依る其の支持があった以後、××帝国主義支配に依る白色×××の嵐をついて、広汎なる××全被圧迫大衆は、××的×起の全国的汎濫へ、彼等の強力的な進行を展開した。労働者のストライキ闘争のすばらしい策略と広汎なる氾濫——釜山織維労働者ゼネスト、新興炭坑夫の英雄的闘争、平南海員ストライキ、平壌ゴム工ゼネスト等——と共に、今日××農村を全面的に支配している××的昂揚の強力的な推進力と速度をもった豊富なる汎濫——端川農民の闘争、龍川其他各地の小作争議等——の新しき政治的価値と発展傾向とは、被圧迫都市中間層にまで××的刺戟を与え、それは学生大衆の全×的な規模に於ける反帝国×動と最近各地に於いて提唱された青年同盟、改良主義団体新幹会及び槿友会の解消論争となって現われた。

斯くの如き現在朝鮮に於いて進行しつつある労働者農民小市民学生の××的闘争も、そしてそれが常に全被圧迫大衆の積極的支持を得るにも拘らず、一九二五年以来の連

続的×圧に依って労働階級の組織的力量の微弱化と、無力化とに依って、充分に目的意識的に指導されず充分な積極的援助の不可能とにより、大部分が惨憺たる敗北をよぎなくされた。此等の××的闘争に於いて表示された朝鮮無産階級解放運動の最大の欠陥と弱点とは実に『×の微弱、×が大衆的基礎の上に根を張った真実のボルシェヴィキ的×』として存在していないことに存する。ここにコミンタン執行委員会は一九二八年『十二月テーゼ』の中で××の現情勢と階級関係とに対する科学的評価を下した後、××××主義者の当面の基礎的活動を『×ボルシェヴィキ化のための強力的闘争』であると規定した。朝鮮に於ける××帝国主義がその全線に亘って階級闘争組織を改めようとして抑圧機関のファッショ化に依り民族改良主義者との協力とに依りそれを試みようとしているのに対して、朝鮮プロレタリアートと×は、××的飛躍の促進と準備とに、広汎なる労農大衆の××化に、プロレタリアートの勝利を可能ならしめる為に××的労働者運動の地位の強化の為めに、全精力を注ぎつつあるのだ。

以上の如きが経済恐慌の渦中の××帝国主義下の植民地××の現在の情勢である（朝鮮プロレタリア芸術運動が展開されつつある此等の客観的諸情勢を正当に理解していて始めて朝鮮に於ける芸術戦線の現勢を正確に知り得るであろう）

然らば斯くの如き一般的情勢下に於いて、朝鮮に於ける芸術戦線は如何なる状態にあるか？　それは階級闘争の激化が――資本主義的安定の震憾、ブルジョア支配機構のファッショ化、民族改良主義者との結合、プロレタリア大衆の急進化の増大等――芸術戦線の上にも反映して、プロレタリア芸術はボルシェヴィキ化の道程へ、ブルジョア芸術（民族主義芸術、芸術のための芸術、社会民主々義芸術等一切）はファッショ化の道程へ行進し、かくして朝鮮芸術戦線は、階級的関係が『階級対階級』に依る厳然と敵対し闘争する両陣営に対峙されてあり、中間的存在である小ブルジョア芸術家は、その何れかに加担しなければならない事態となった。此れが階級闘争の激化に依って特質づけられた現今の朝鮮芸術戦線の基本的特徴である。では朝鮮プロレタリア芸術運動は現在如何なる状勢にあるか？

二、『カップ』芸術家は如何に闘っているか？

朝鮮プロレタリア芸術運動は、一九二五年七月『カップ』（朝鮮プロレタリア芸術同盟の略号 C.A.P.F）を結成することに依って主体を確立した。其後カップは極端なる×圧の下にあって、ブルジョア芸術家（特に民族主義文学派）の妨害と、多くの困難なる条件に遭遇したけれども、常に朝鮮プロレタリアートと共にあり、朝鮮無産階級解放

運動の闘争戦線の一翼として、絶えず自己隊列の右翼的偏向或は極左的偏向の現れを克服し、末期資本主義芸術の芸術至上主義、個人主義、浪漫主義、民族主義の影響を清算して行きながら、ブルジョア芸術の影響の撃破、その指導権奪取の為めに果敢なる闘争を続行することに依って、七つの支部と三百余名の同盟員を獲得し、労働者農民に対する文化的××運動の確固たる地位を築き、大衆はプロレタリア芸術運動に益々支持を強くしてきた。然しながら、一九二九年度までは『カップ』の芸術的活動は主に文学の領域に局限せられていたが、朝鮮プロレタリアートの急速なる成長とプロレタリア芸術運動の進展により、組織の力量を全分野に拡大し、芸術的活動の範囲を広汎に展開することが要求され、一九三〇年四月カップは組織を再編成し、文学部、演劇部、映画部、美術部、音楽部の技術部門を設けることによって、カップは組織上飛躍的発展を遂げ、躍進的成果をかち得たのであった。

然し幾多のすぐれた作品を産出し加速度的発展を遂げたにも拘らず、朝鮮プロレタリア芸術運動は、現在困難なる重大な時期に当面している。朝鮮プロレタリア芸術運動が全分野に亙って萎縮と不活潑の色を最近まで認められたのは、朝鮮プロレタリア芸術運動の発展と労働者農民の××的大衆闘争力の成長との間の不均衡の故であった。経済恐慌の結果××に於ける階級闘争は激化した。××帝国主義者の×圧と民族的改良主義者の妨害とに抗して労働者農民学生大衆の旺盛なる自然生長性は、××的大衆闘争力の全面的高潮を来たした。また最近に於いて××化しつつある大衆の無産階級解放理論に対するマルクス主義出版物の要求、プロレタリア芸術運動に対する関心は急激に増大した。一方××帝国主義は彼等の壟断する一切の文化機関を運用し、民族改良主義者を含めるその飼養する走狗を、無産階級解放運動に敵対する一切の武器を、全面的に動員し、××化しつつある大衆の意識を麻痺させることによって、益々広汎なるプロレタリア層にその勢力を拡大しつつある××主義思想を放逐し、ブルジョアイデオロギーの下に大衆を逐い込むことを精力的に行っている。かくして朝鮮に於けるブルジョア芸術は、益々プロレタリア芸術に対するファシズム的攻勢を強化させた。此れらの諸条件は、××に於ける××主義芸術運動の任務により重要性を加えたのであった。斯る現実的発展は、その段階に相応する転換と発展を要求する。かくて、資本主義第三期の国際的影響、朝鮮プロレタリアートと農民の××的波の全面的高潮――その局面下の朝鮮プロレタリアートと×の当面の課題――コミンタン執行委員会の『十二月テーゼ』が指示した××プロレタリアートの貴重な基準と指針とは、過去一年間に於いてカップ員に依る芸術運動ボルシェヴィキ化の問題を提起させたのであり――（林和の『朝鮮プロ芸術運動の当面の中心的任務』横換の『朝鮮芸術運動の具体的道程』安漠の『朝鮮プロ芸術家の当面の緊急な任務』等）――

一九三〇年九月カップ中央委員会をして極く補足的ではあったが芸術運動ボルシェヴィキ化のための決定をなさしめた。

では朝鮮プロレタリア芸術運動ボルシェヴィキ化の任務はカップに何を要求したのか？　それはカップがボルシェヴィキ的自己批判を展開して活動上の誤謬と欠陥を検討批判し徹底的に是正し、朝鮮プロレタリアートと×の当面の任務『ボルシェヴィキ化のための×行的×争』を自らの芸術的課題とし、その課題を実践に移す任務に、カップの組織構成と活動方策とをレーニン主義的意味に於いて適合させることとであった。即ちカップを思想的にマルクス・レーニン主義の基礎の上に鞏固にし、一切の社会民主主義的影響を撃破し労農通信運動を広汎に発展させ、真の××主義芸術を大衆化することに依って、民族改良主義イデオロギーを含めた一切のブルジョアイデオロギーを粉砕し、××主義イデオロギーの影響下に大衆を獲得する任務を実践的に遂行することとであった。ではカップ芸術家諸君は、芸術運動ボルシェヴィキ化、××主義芸術の確立――此の困難な任務を、如何に実践的に具体化しつつあるか？

一、カップは最近に於いて、『ボルシェヴィキ化』の為の闘争に突進するための一つの広大なる教化運動として労農通信員運動の活動を開始した。『群旗』を発刊したのがそれである。昨年十二月より発刊された『群旗』は、三千部以上の発行部数と全鮮各地に支局が拡大しつつあり、職場からの闘争報告が多数掲載されている。朝鮮プロレタリア芸術運動が現に芸術大衆化のスローガンを提出しているがそれは通信員運動の拡大強化に依ってのみ其の実践的方策を得、其他イデオロギー、対象、題材、形式、に関する諸問題もその中に効果的に解決し得られるであろう。労農通信員運動は朝鮮プロレタリア芸術運動が、芸術大衆化のスローガンを実践的に果す方策であるばかりでなく、それは封鎖された地下層から労働者農民の芸術家をも育て上げるであろう。だが現在の『群旗』は支配階級の野×的検閲制度（原稿提出制）下にあること、編輯員たるカップ員の××主義思想の不徹底とにより、多分の社会民主主義的要素を含んでいる。これは速に克服されねばならぬ。それによって更に、大衆の支持はより積極的となるであろう。日本に於ける『戦旗』を中心とした労農通信運動の経験は、我々朝鮮にあるものに取って、何よりも摂取されなければならない貴重な国際的教訓なのだ。

二、カップの理論的、批評的活動は不充分にしか展開されていない。カップの主なる理論家は、朴英煕、金基鎮、尹基鼎、措煥、林和、安漠、等であるが、一九三〇年度より現在にかけての理論的、批評的活動は芸術運動ボルシェヴィキ化のための原則上、具体的方針のための論議が中心であったし、民族主義文学理論の批判、社会民主主義的映画論の暴露、作品の内容と形式の問題、マルクス主義芸術批評の基準に関する問題其他であり、創作批評等は甚だ稀

にしかなされなかった。カップが理論的、批評的活動に於いて不充分であった原因は、主として機関紙を持っていないこと、並びに、我々の理論、作品に対してブルジョア自由主義的態度を取っていたブルジョア出版物がボイコットをすることに依って（民族改良主義的出版物、特に東亜日報、朝鮮日報等はコンマシャリズム上の成功のためにカップ芸術家の理論、作品を掲載していたが、階級闘争の尖鋭化した今に於いては全然ボイコット的態度を取っている）カップの理論的批評的活動は同伴者的出版物『朝鮮の光』等に限られていたため充分な活動は困難であったに基因するけれども、特に『カップ』内に於いて右翼的傾向を代表する金基鎮等が『芸術運動ボルシェヴィキ化』の根本問題が提起されるや、固い沈黙を固守することであった。沈黙者は、現在の日和見主義の諸特点、即ち追随性、不決断性、妥協性、不明確性とに依り、此の重大なしかも困難な問題の提起に対して、受動的に拱手傍観し闘争に参加することなく、芸術運動ボルシェヴィキ化のための××的な闘争から完全に脱落せんとすることに依って、敵の陣営に移行せんとしつつある。彼等は朝鮮プロレタリア芸術運動に於いて、一時は卓越せる同志であったのであり（金其鎮、韓雪野等は現にカップ中央部にいる）それ故にカップの当面の任務——芸術運動ボルシェヴィキ化のための具体的方針確定は、彼等の積極的見解を必要としたのであった。しかるに彼等は最後まで沈黙を固守することに依って、カップの一切の芸術的活動を全然サボタージュした。故に二つの戦線——特に右翼日和見主義者に対する闘争、思想的強固さを保持するための闘争、追随性、無原則、妥協性——一切のボルシェヴィキ的方針の歪曲に対する闘争は、カップが当面した任務を成功をもって遂行するための前提条件である。

三、『カップ』作家の最近に於ける実践的活動は躍進、向上転換の傾向が見られる。カップ作家を代表する李箕永、宋影、尹基鼎、趙重滾、金兼滔、厳興変等諸君の最近に於いて発表された作品は、彼等が当面の任務——××主義芸術の確立の任務を果敢に実践的に遂行しつつあることを立証する。特に日鮮プロレタリアートの団結を題材とした宋影の『交代時間』等に見る××的題材への努力の強化は、朝鮮プロレタリア作家の××的地位を強化させた。然しながら此等のカップ作家のマルクス・レーニン的思想の不徹底さと技術の未完成さとに依り、彼等の作品に於いて社会民主主義作家が敢えて択ぶことも出来なければ、取扱うことの出来ない方法に依る表現は、極めて僅にしか発見されない。彼等の××的題材への精力的努力も、コミンタン執行委員会の『十二月テーゼ』並びにプロフィンタンの『一九三〇年九月テーゼ』に於いて指示された朝鮮××主義運動の当面の課題とは極く不充分にしか結ばれていないばかりでなく、彼等の作品の大部分は××的労働者の非現実的な描写、マルクス主義的分析批判の欠如した罷業、農

村の現情勢を理解し得ない農民の原始的描写、社会民主主義作家となんら違わない資本家の暴露等に終っており、殊に厳興変等に到っては小ブルジョア芸術家の作品と何等本質的差異は認められない程である。彼等の作品の極く僅かを除去するならば、他は純粋な××主義イデオロギーを発見することは余程困難なことであり、ダイナミックな構成と描写とは全然欠如している。だが最近に於けるカップ作家諸君のマルクス・レーニン主義的思想完成のための、××主義的技術の獲得のための努力の増大の傾向は、朝鮮プロレタリア文学を、真の××主義文学にまで高揚させる前提条件を作りつつあることを立証する。カップ文学内の研究会（理論研究会、小説戯曲研究会、詩研究会）は最近最も活潑となり、組織的生産は着々と進行しつつあり、カップは小ブルジョア作家の上にも刺戟を与え、朝鮮に於いてすぐれたる同伴者作家前鎮手、李考石等を自己陣営に獲得することに成功した。今年一月に発表された前鎮手の小説『女職工』『にいさん』は、カップ当面の任務の観点から見て注目すべき作品であった。

四、カップ映画部は一九三〇年四月以来社会民主主義的映画組織との闘争を果敢に続行することに依って、確立した。前新興映画同盟（一九二九年十二月十四日）が組織されたのを前後として、階級的（その実社会民主主義的）修辞を戴頭した一群の映画ブロックが、此の新興映画同盟なる組織を城塀にして、小市民的映画運動を展開し初めていた。彼等（その指導者は金幽影、徐光斎等である）は自身の反×命性、反プロレタリア性を、ブルジョアジャナリズムの上に似而非××主義映画論を発表し『左翼的言辞』を籠絡することに依って隠蔽し、カップの積極的支持者の如き幻想を撒布することに依って労働者農民を欺瞞しつづけていた。しかるに一九三〇年四月カップが組織を再編成し映画部門を新設するにあたり彼等の組織（新興映画同盟）のカップへの解消を勧告するや諸国に於ける改良主義者のすべてがそうであった如く、彼等は自身の一切の仮装粉飾を脱ぎすて、カップに対する悪宣伝をブルジョアジャナリズムに撒布し、遂には組織的抗争（彼等はカップ中央部の諸君に××の脅迫状を送る程の蛮勇さであった！）を試みることに依って、朝鮮プロレタリア芸術運動を絞殺せんとする陰謀をたくらむ程、××資本主義の事実上の使嗾をやっていた。其統治等は『ソウキノ』及び『シナリオライター協会』を組織しはしたが大衆の『撲滅せよ！』の叫びに今は全然蛮勇さをも喪失している（日本プロレタリア映画同盟が彼等と組織的連結を結んでいたこと並びに北川鉄夫がナップ創刊号に於いて『我々が朝鮮に於ける××的映画の製作上映組織であるソウルキーノ映画工場と現在の新興映画同盟との連絡を結び得たことは、正に劃期的なものとして迎えられるべきであるが――』と、言っているのは、したがって当時朝鮮に於けるプロレタリア映画運動に対する理解の仕方が、誤っていたことを意味する

カップは此等の小ブルジョア的分子に対する無慈悲な非妥協的闘争、彼等の左翼的言辞の背後にひそむ階級敵の声の暴露を(呉孝植の『映画運動の出発点の再吟味』――(一九三〇年八月中外日報所載)――を最も鋭く無慈悲に暴露したものであった)強力的に続行することに依って、カップ映画部を成長させ鞏固にし得たのであった。最近カップ映画部直属として『青服キノ』が結成され、カップ映画部の姜湖の監督の下に、朝鮮に於ける××的労働者運動を題材とした甲英の原作『地下村』(全十巻)を完成させた。此の映画は朝鮮に於ける最初のプロレタリア映画として殊にそれがカップ映画人の当面の任務、映画運動ボルシェヴィキ化のための任務を実践的に遂行しつつあると云う点に於いて高く評価されなければならないであろう。然し『カップ』映画部の多くの欠陥と弱点は認めなければならない。現に『カップ』映画部にある諸君は、小ブルジョア的残滓を清算し切っていず、その映画技術の方面に於いて、全然アマチュアの域を脱していないことである。

五、次にカップの演劇、美術、音楽に於ける活動はどうか? 此の三つの部門のカップの実践的活動は、他の文学、映画部分より遥かに微弱なものである。特に音楽部門は欠員の状態を現わしている程である。それにも拘らず、昨春水原に於いて朝鮮に於ける最初のプロレタリア美術展覧会を開いたこと、九月崔承一が、同伴者的傾向をもつ演劇組織の協力を得て、ル・メルテンの『炭坑夫』オットミュラの『荷車』シンクレアの『二階の男』等を上演したことは朝鮮プロレタリア芸術運動に於ける、一つの大きな前進であった。特に水原に於けるプロ美術展の巨大な成果(支配階級に依って百五十点の中五十点も奪われたにも拘らず、労働者農民、それが未組織大衆ばかりでなく組織された大衆に依って積極的支持をかち得たこと)は、朝鮮プロレタリア芸術の影響力を一層拡大させたものであった。最近美術部門に於いて、姜湖、鄭河普等の漫画的活動は注目すべきものがある。音楽の領域に於いても最近二、三の理論家に依って音楽に於ける階級性、労働者農民の音楽的要求、プロレタリア音楽の生産とその大衆化に対する最初の提起を見るようになった。

以上が『カップ』の当面の任務――芸術運動ボルシェヴィキ化の任務――を成功をもって遂行せんがための最近に於ける芸術的活動の全幅である。

以上に列記したカップの最近に於ける芸術的活動の実践的成果は、カップが芸術運動ボルシェヴィキ化のための強力的闘争の不充分さを立証するものである。カップの芸術的活動の不充分なる事実は、決して支配階級の×圧のみが原因でなく、カップが当面の任務の遂行のための正しい方針を、正しい組織的方策の上に発見し得なかった事にも基因するものである。××主義芸術の強化、新たなる地位の奪取のための闘争、ファシズム化しつつあるブルジョア芸術特に社会ファシズム化しつつある社会民主主義芸術に対

する闘争、同伴者芸術家の獲得のための闘争、及び右翼的偏向に対する闘争は正しい組織的方策を必要とするものである。しかも現にカップはボルシェヴィキ的決定を作定するばかりで、それを充分に強力的に遂行していない。中央部からは全鮮各地の支部に対して指令はおろか何んらかの連絡をも取ってはいない。それ故に各支部に対する統制は全くなされず、各支部員は名簿の上にのみカップ員であり、芸術的活動は殆んど遂行されていない。勿論此の責任はカップ中央部が大部分をおわなければならない。現在に於ける此等の主観的諸条件は、カップの新しい組織上の方策を問題にしなければならなくなった。全国に散在するカップ支部の芸術的活動を直接カップ技術部の各部門に直属せしめ、また同伴者芸術家をカップの影響下に引き寄せることに依ってカップが芸術の各部門——文学、演劇、映画、美術、等の専門的技術別全国同盟に再組織されるための準備的活動の一つとして、再組織準備委員会をもたなければならなくなった。林和は『朝鮮プロ芸術運動の当面の中心的任務』に於いて特に此れを強調した。斯かる組織上の特別に困難な方策は、カップの統一的集合的組織者としての機関誌発行を必要とするようになった。それ故に現在カップは如何なる困難な条件に於いても自身の機関誌を確立することに最大の努力を払いつつある『群旗』を中心として労農通信員運動は一層広汎に拡大強化さるべきであり、カップに取って何よりも重大さを増したのである。その為の前提条件は『群旗』を真の××主義的立場に高揚することである。カップは両つの戦線——特に呆基鎮等の右翼的逸脱に対する闘争の不徹底さを指摘しなければならない。他方——日和見主義者は言葉の上では、カップのボルシェヴィキ化のための方策を擁護している。然し実践的には彼等は一切の芸術的活動を全然サボタージュしており、事実上カップの当面の実践的活動、ボルシェヴィキ化の闘争から離脱せしめんとする敵階級の企図を支持しているのだ。彼等の右翼的偏向並びに彼等との妥協的気分に対する闘争は精力的に展開されなければならなくなった。カップ指導部は、新しい分子に依って代らせなければならなくなった。此の闘争は、現在不十分ながらもなされつつある。同盟全体の理論的批評的活動は、特に梁柱一派の民族改良主義文学理論に対するマルクス主義的批判は重要性を増大した。ブルジョア芸術並びに社会民主主義芸術に対する闘争はカップに取ってボルシェヴィキ化のための最も重要な任務である。他方カップ芸術家の××主義世界観の不徹底さは速かに克服されなければならない。

新たな時期に転入した朝鮮プロレタリア芸術運動は、支配階級の××に抗し、民族主義文学者が如何に妨害をなそうと、日和見主義者が如何に沈黙をもって嘲笑しようと、芸術運動ボルシェヴィキ化の道へ突進して行くであろう。

三、反××主義芸術の現状

××帝国主義は朝鮮に於いても、彼等の階級闘争組織を全線に亙って改めようと試みている。それはブルジョア階級支配のファッショ化により、ブルジョア抑圧機構への民族改良主義団体の引きよせにより、社会ファシズムによって試みようとするばかりでなく、彼等の一切の文化機関まで全面的に動員することに依って試みようとしている。××帝国主義者は民族改良主義的ブルジョアジーに自治を約束することに依って彼等を買収した。かくして民族改良主義者は自己の一切の文化機関を運用し反動思想を全××に撒布し、広汎なるプロレタリア層に益々勢力を強化しつつある××主義思想の放逐のために狂奔しつつある。

斯かる事態は朝鮮ブルジョア芸術を益々ファッショ化させた。最近に於けるブルジョア芸術のファシズム的攻勢は文学の領域に於いて特に強化した。朝鮮に於ける民族改良主義文学者――梁柱東、鄭盧風等――は朝鮮に於ける××的潮流の前に恐れをなし、民族主義文学と云う看板の下に、民族ブルジョアジーの幻想を宣伝し、プロレタリア芸術に対する理論的基礎をもたない悪宣伝と××主義仇視の理論を撒布することに依って××帝国主義の代弁者の役割を果しつつある。では彼等の民族主義文学論なるものは何んであるか？

『吾等が朝鮮民族の当面した現実を正視省察される如く、階級的民族意識たらざるを得ない。何故なれば、此の民族は今や民族的存滅の交叉点に於いて――中略――故に当面の朝鮮民族を活かす意識は――此れを朝鮮意識と呼ぶならば階級的民族意識たらざるを得ない。即ち単純な盲目的民族意識でなく、小階級意識でもなく、世界の情勢のみ問題にする国際的意識でもないのだ』（鄭盧風の『朝鮮文学建設の理論的基礎』――一九二九年一〇月朝鮮日報所載――よりの引用）

斯くの如く彼等の理論的基礎を形成するものは『宗主国の民族は支配階級に位し、植民地民族は被圧迫階級に処する』と云うことである。それは多層の階級に依って成る『民族と民族』とが相互に『階級対立の関係』を結ぶことはあり得ないと云う常識すらも意識的に理解しない無智の自己曝露であり、斯く叫囂することに依って、彼等は植民地に於けるプロレタリアートの闘争と資本主義国家に於けるプロレタリアートの闘争との××的結合を妨害しようとする帝国主義の意図を実践に於いて実現せんとするものである。彼等との闘争はカップが長い間精力的に続行したものであった。彼等の民族主義文学の旗の下に李光珠、廉想渉、呆東仁、朱等の作家は反××主義的作品に依って彼等の新聞、東亜日報、朝鮮日報を埋め、××化しつつある大衆の意識を麻痺させることに全努力をつくしている。崔独鵑等のエロ文学派も彼等の一種の変種であるに過ぎない。

映画の領域に於いて羅雲奎、安鐘和等に依る恋愛と放浪とに現実からの逃避場を求めている阿片的映画は洪水的に産出し、日本から遠山満等が渡鮮して朝鮮土着ブルジョア映画人達と結合して反動映画『金剛山』を上映することに依って、哀れむべき××帝国主義の忠実なる忠僕を見受けさせるのである。特に国民党と支那反×命を讃美し、印度のガンジ主義を密輸入しつつある民族改良主義者の最大の新聞東亜日報は正義は勝つと云う改良主義的映画を全鮮各地に持込ますことに依って、改良主義イデオロギーに依る大衆獲得を大規模に行っている。演劇に於いては、尹白南、李基世、朴勝喜等に依る反動的劇の上演『新興劇場』（築地にいた洪海果が指導する）『演劇市場』等の自由劇のマスクに隠蔽された反プロレタリア演劇と俗悪なる新派劇等――（然しながら演劇に於けるブルジョアジーの活動は極く微弱なものに過ぎない）――及び芸術のための芸術の殿堂を固守せんとしてもがいている騎士達――官製美術展であるが『鮮展』を初めとして『書画展』今度新しく出来たブルジョア音楽家組織である音楽家協会に集る分子の不絶の公演、ラジオ、レコード等に依る反動的民謡、流行歌、宗教歌は益々広汎に瀰漫しつつあるのだ。

そして此等の一切のブルジョア芸術のファッショ化は朝鮮に於ける労働者農民大衆闘争の××的波潮を喰い止め様とする××帝国主義の保護下にあり、またその企図に全面的に動員されたものに過ぎない。

階級闘争の尖鋭化は小ブルジョア芸術傾向の上に急速な自己分化をもたらした。作家鎮牛、李孝石等及び完重文学者の多数がプロレタリア芸術陣営に移行したのであり、他方に於いて小ブルジョア美術家組織である『緑郷号』『東美展』は益々反動化して自己の反×命性を暴露した。殊に『緑郷号』に集まる小ブルジョア等は所謂『シュルリアリズム』を唱え『カップ』美術部に対して公々然と抗争を宣している。映画の領域に於いて前新興映画同盟現在のソウルキノを中心とする一時急進的だった小ブルジョア同盟は上記した如く完全に××帝国主義の事実上の幇間に転落したのを上げられる。

彼等は、現在日本帝国主義の保護の下に、反××主義芸術戦線に於いて一個の反動的大同盟を結成せんとしつつある。民族改良主義的出版物東亜日報、朝鮮日報を初めとして、三千里、別朝、新女性等一切のブルジョア出版物に彼等の反×命性を擁護し、支配階級の検閲制度の一層の兇暴心、ブルジョア出版物のボイコット、ブルジョア芸術のファッシズム化は決着に於いて資本主義第三期としての階級闘争の激化、資本攻勢の反映したものなのだ。

以上に於いて見られる如く朝鮮に於ける芸術戦線は現在の階級闘争の激化した局面下に於いて『階級対階級』による両陣営に――××主義芸術戦線と反××主義芸術戦線と

に決定的に敵対している。此れが朝鮮芸術戦線の現在に於いて基本的特質である。

四、日鮮プロレタリア芸術運動の組織的連結に関して

資本主義第三期の激化した階級闘争は諸主要国に於けるプロレタリアートの闘争と植民地半植民地民族の××的闘争との単なる親交を結ぶことを問題としない。刻下の急務は、諸主要国に於けるプロレタリアートの闘争も諸植民地に於ける反××主義闘争との緊密な連帯を結ぶことである。帝国主義の内外政策の決定的な諸矛盾の激化により著しく進展して来た植民地半植民地の労働者運動並びに××運動はプロレタリアートの旗幟の下に展開されつつある。植民地××運動に於けるプロレタリアートのヘゲモニーは資本主義諸国に於ける××並びに××のための闘争と植民地に於ける××運動とを合一させる直接の楔をつくるのだ。

朝鮮に於ける××主義運動の盛衰は日本の××運動に対して異常なる影響を与えるものである。朝鮮民族ブルジョアジーと日本ブルジョアジーとの結合が鞏固になりつつある今に於いて日鮮プロレタリアートの連結は益々重大なる意義をもつであろう。

日本並びに朝鮮に於けるプロレタリア芸術運動は今やボルシェヴィキ的攻勢を取り初めた。斯かる時期に於いて日鮮プロレタリア芸術運動の組織的連結は最も要求されることである。一九三〇年一一月ハリコフに於いて開かれた『国際プロレタリア××作家大会』の日本の文学運動に関する決議の中でも強調された如く、ナップは朝鮮プロレタリア芸術運動に最も注意を払い最大の援助を与えなければならない。『ナップ』と『カップ』とは組織的連結を速かに確立しなければならない。これが日鮮プロレタリア芸術運動の当面の重大な課題である。

（一九三一年三月「ナップ」）

一九三一年に於けるナップの方針書

一

一九二九年の秋、アメリカに起った株式恐慌を契機として激化したところの世界経済恐慌は、この一年間に、益々広汎な範囲を捉え、生産の絶えざる減少と、賃銀の引下げ

と、失業者数の異常な増大等に見れるごとく、その深さを一層加えつつあることを示している。

生産過剰にその基礎をおくところの、かくのごとき恐慌の進展は、単に労働者階級の地位の一層の悪化にとどまらず、資本主義諸国をして、×争にその解決を求めることをますます痛切ならしめ、労働者階級に対する抑圧の加重と共に×備の充実に一切の力を動員して狂奔せしめつつあるのだ。世界の失業者群はすでに日本の二百万をも加えて二億に達せんとし、この中にあってひとり軍事工業のみ、膨大な軍事予算のもとに恐慌の影響外にあって着々と発達している。軍備縮小会議を了えた各国は、最新科学に依るより一層の高度なる軍の再編成に着手している。

市場の争奪のために惹き起された帝国主義諸国間の対立の尖鋭化は、また同時に、世界プロレタリアートの要×たるソヴェート同盟への共同攻撃の事業を押し進めつつある。最近の産業党事件はこの武力的攻撃の陰謀の曝露である。××帝国主義もまた、今や露骨にこの共同戦線の一分野たらんとしている。北洋漁業権の確保の問題、鮮銀支店の問題を中心に、資本家自身の利益を帝国権益の名を以ておおい、あたかも国民全般の利益であるかのごとき正義の言辞を弄して、もはや外交辞令による交渉の要なしと直接的に反ソヴェート的×動を行っている。

ここにその矛盾を完全に曝露した世界資本主義は、それ自身の必然を以て、国際的には新帝国×××の危機の増大、支那××の漸次的進行等を促進せしめると共に、国内的には、深刻な経済恐慌に捉えられた日本資本主義の産業合理化の強行と、これに逆襲せんとする労働者農民大衆の闘争への広汎な参加とに拍手を与えている。

日本資本主義はこの恐慌を切り抜けるために、金融独裁の強力なる支配を必要とし、浜口内閣をして金融資本への最も忠実なる奉仕をなさしめている。資本集中のための諸産業統制法案、米穀法改正案等々。この深まりゆく不況の罪を世界経済恐慌に嫁して、緊縮のデマゴギーを振り撒き、国産品の奨励を宣伝し、愛国主義のかげに一切の政策の本質を隠蔽せんとしている。他方、産業合理化の強行によって極度の貧困に突き落された労働者農民大衆の反抗を巧みに反らし、その闘争を抑圧せんがために、従来の治安維持法その他の反動的諸法案を以てしては足れりとせず、今また労働組合法案、小作法案、争議調停法の改正を制定せんとするに至った。

重工業における、極度の生産制限、一般的な労働条件の悪化に加うるに四〇パーセントの賃銀の低下、中小資本の倒潰による多くの工場閉鎖、農村における、米価その他の農産物価の下落、肥料代の吊り上げ、加うるに失業保険さえない膨大な失業者群等の条件のもとに、労働者農民の闘争は尖鋭な形態と逆襲的性質を帯び、ストライキの継続日数は著しく長引き、最も遅れている労働者、労働婦人が益々多く運動に参加している。

かかる階級闘争の激化と、形勢の悪化は、支配階級の×暴な圧×政策とファッショ化した左右社会民主主義者のこれへの協力も、抑止することを得ない。

我々は××的日本プロレタリアートがこの情勢に当面し、今や重大なる方向転換の期に立って、大衆的政治闘争の展開を以て労働の攻勢を組織せんとする時期に当面している。

二

これ等の国際的並びに国内的情勢は、日本における階級関係の変化を急速ならしめた。従って大衆の著しき左翼化の傾向と、プロレタリア芸術運動の高度化とは、小ブルジョア的、自由主義的芸術傾向を急進化しつつあるも、すでにブルジョア・ジァーナリズム乃至コムマーシャリズムの、上におけるがごとき単なる皮相的な急進化を不可能ならしめつつある。即ち労働者階級の側に立ってのみ、かかる急進化もあり得るということが明かになってきた。

ここにおいて一般にブルジョア芸術の反動化への増進はその露骨な姿を見せて行われつつある。

昨年度の始めに指摘されたようなブルジョア芸術の積極的攻勢は今日見られない。芸術のための芸術の理論に立脚した彼等の直接的な攻勢は、その拠るべき思想的支柱なきを以て、一時的な表面的現象として次第にその姿をひそめた。彼等はエロチシズム、ナンセンス、猟奇的興味のごとき、思想に対する無関心を示した態度から脱け出で、思想的反動の中にその支柱を求め始めた。

資本家自身乃至は青年団、在郷軍人等によって行われる工場、農村における各種の催し、並びに全国的規模において行われる各種の記念日、祭日の催し等に現れたブルジョアジーの反動的文化政策の著しき進出は、一般文化の反動と行き詰まりを来した。芸術の領域のみがかかる現象から取り残されるなどということは絶対にあり得ない。ラジオの芸術部門及び映画はその尖端を行くものである。

芸術発展の創意性を無視した共同制作の試み、歌舞伎界における動揺、新興劇団協議会から脱退した築地の小劇場の松竹への移入等は卑近な二三例である。

ここに我々が注意すべきは、ブルジョア・ジァーナリズム乃至はコムマーシャリズムによって触発されるごとき日和見主義的要素は消失しつつあるが、芸術運動の進展による一層の困難性のために左右両翼への偏向が生ずるということである。

三

一九二九年度における我がナップの全活動は、日本におけるプロレタリア芸術運動の最初の躍進であった。その成果は驚異という形容に値した。技術方面の急速な成長と、

芸術大衆化の漸次的実現とは、我々の芸術運動が階級闘争の有力な一部隊に成長しつつあることを確認せしめたところのものである。

かかる飛躍的発展の後を受けて、一九三〇年度の我がナップの方針書は、芸術運動を××主義化し、更に広汎なる大衆を獲得すべきことを、我々の中心的任務と規定した。

この任務を遂行するための我々の活動は、前半期において基本的諸問題の解決に向けられた。即ち、『ナップ芸術家の新しい任務』『芸術大衆化に関する決議』に示されるごとく、創作活動の根本的方針が明かにされ、労働者農民大衆に支持さるべき作品はいかなるものであるかに就き、作品の内容、形式、題材、対象に亙って委細なる検討が行われた。

これ等のことは、実に我が国におけるプロレタリア芸術運動をして大きな転換をなさしめるところの基軸をなすものとして、芸術運動発展の歴史における重要な成果であらねばならぬ。

昨年五月における優秀なるナップ成員の×挙、投×にも拘らず、我が芸術運動の発展を物語るものとして、活動領域の拡大を挙げることが出来る。映画同盟、音楽家同盟の組織の確立と制作の開始並びに移動活動への眼ざましき進出、映画同盟普通写真部の活動、プロレタリア演芸団の確立、最近における小公演活動の活潑な開始、プロレタリア戯曲研究会の創設、美術大展覧会の地方巡廻、美術家同盟各支部の地域的移動展、詩研究会と音楽作曲班との共同等。特にナップ機関誌の発刊は理論的活動を著しく促進せしめた。

次に我々の芸術的活動が、プロレタリアートの現実の闘争といかなる関連を有しているかという点に就て、我々の関心が向けられ始めたということの意義に注意が喚起されねばならぬ。このことは、その活動の遂行そのものが直接大衆の中におかれるところの演劇の如き方面において言われる。即ち公演活動の意義、移動活動の役割、並びに労働者農民劇団の結成等に対する認識のうちに現れている。その他作品の批評においてもこの傾向が観取される。

四

かかる成果の上に立って、我々は一九三〇年度における我々の活動が、作品の××主義的内容そのものに対する関心から起ったところの、偏向を伴ったことを先ず指摘しなければならぬ。

題材そのものに対する××性の要求に向ったところの偏向がその一つである。この偏向は、題材の一般的固定化の現象によって明かである。これは、我々に課せられた任務がいかに困難なものであるかを示すと共に、この困難を乗り越えるための、それに相応した努力の不充分さを示すものである。題材の取り扱い方、即ち我々の階級的主題をい

かにして生かすべきかに払わるべき努力が、多少なりとも題材そのものに対する××性の要求によって満足されるならば、題材が固定化し、観察の皮相化を来す。極言すればやがては芸術の創造性が危機に瀕するであろうことは当然である。我々に課せられた任務の遂行に当って、プロレタリアートの創造性、即ち主題の強化が強調されねばならぬ所以である。

次の偏向は、すでに清算されたものであるが、文学、美術における産業別生産の過重評価これである。それは我々の作品が独立してプロレタリアートの闘争に直接役立つかの如き見解から出発している。この過重評価のかげには作品の出来栄えに対する無関心をひそめている。勿論我々はその発表形式の効果を否定するものではない。

更に戦旗が我がナップから独立せんとした時、一時我々の間に起った見解の混乱、――戦旗の労働者農民大衆の間における現状を無視して芸術運動の埒内に引き止めんとするがごとき――もまた同じ偏向所謂ナップ主義的傾向に基くものである。

次に昨年度における我々の活動の欠陥をあげるならば、第一に、我々の作品に未だ前衛の英雄化された姿が充分に取り去られていないということである。我々は芸術大衆化の論議に際し、前衛の英雄化に対する闘争を強調し、我が国の前衛がいかに闘いつつあるかを現実的に描き出すことが必要であることを述べた。然し当時我々の闘争の対象となったものは、前衛を何等か超人的なものに扱おうとする態度であった。今日においては、我々は前衛の英雄化に対するより一層高度な闘争を遂行しなければならない。何となれば、前衛は労働者階級の指導部であり、その活動生活はプロレタリアートの必要の結晶体をなすものであって、若しも描かれた前衛の生活的基礎がかかる結晶体をなすものでない時は、必然的に前衛の姿は英雄的に浮き上るからである。殊に××的プロレタリアートがあらゆる大衆闘争の先頭に立つべく、ますます強固に労働者農民大衆の生活に結びつきつつあるとき、前衛の現実化のための闘争は強化されなければならぬ。

第二に、映画、音楽の部門が、技術的成長のための方策において、門戸が未だ充分には開放されていないということである。プロレタリア芸術運動は、決して無から生ずるものでもなければ、従来の文化的遺産に対する消極的態度によって階級的発展をなすものでもないことは自明である。映画、音楽のごとく最も専門的な技術を必要とし、しかもその技術の獲得の困難なる部門においては、階級的原則の上に立つ、我々の積極的な、大胆なる態度を必要とする。殊に映画は、今日、労働者農民大衆の渇望するところのものであって、その効果は非常に大きい。技術的成長のための、具体的活動を展開しなければならぬ。

五

××的国際プロレタリアートは、すでにプロレタリアートの文化・教育の問題を日程に上しつつある××作家第一回国際大会においても、この問題に関して次のように述べられている。『階級闘争の尖鋭化、資本主義の益々度を加える腐蝕、社会民主主義のファシズムへの変質、及び益々広汎なるプロレタリア層にその勢力を及ぼしつつあるところの××主義思想の強化、――斯くのごときが他の領域におけると同様に文化――芸術、文学の領域における根本問題のプロレタリアートによる自主的提起及びその自主的解決を可能且つ必要のものとしているところの事態である。』

プロレタリアートの日程に上ったこの文化・教育の問題は、プロレタリアートの闘争の一分野としての芸術運動が決して独立した存在権を持つものでないという重要な、全く新しい見解を示すものである。即ち我が芸術家活動は、ハリコフ大会において定式化されたごとく、プロレタリアートの階級闘争の××的実践がとる特殊な形態である。

従って我々の芸術家活動は、××的プロレタリアートの遂行する文化・教育活動の一部であらねばならない。そのためには、我々はこの××的プロレタリアートの事業に積極的に参加し、援助しなければならない。これが芸術運動の××主義化に進みつつある我が芸術家の新たな任務である。

演劇においては労働者農民劇団の問題を中心に、すでにこの任務に対する明確な理解がなされている。文学においても、戦旗の労農通信の中に実現されている。然し我々は、この新たな任務を遂行するために労働者農民劇団、労農通信員の運動をますます旺盛ならしめるための積極的活動をなさねばならぬ。ハリコフ大会の日本問題に関する決議においても、労農通信員の運動が一層拡大され、その組織網の中に文学運動の基礎がしっかりと根を張り、運動の全根柢が強化されねばならぬこと、農村工場における読書会の中に旺盛なる批評的活動を勃興せしめる必要が述べられている。労働者、特に労農通信員出身の作家の躍進に対する我々の決定的支持は、労農通信員運動の活潑なる展開によってのみ実現される。

××的文化・教育活動への我々の積極的参加並びに援助は、先ず第一に、工場農村における労働者農民の生活の創意の上に、我々の芸術を正しく健康に発展せしめる可能性を与える。第二に、演劇活動における最近の経験によって明かなごとく、××的プロレタリアートの工場内における文化的活動の見地に立つことのみが、一切の芸術的存在の内容に対する諸問題を正しく解決する可能性を与える。

階級闘争の異常なる激化は、この大きな歴史的渦巻の中に、我々自身の位置を常に正しく把握することを必要ならしめている。あらゆる偏向は、この把握の誤り乃至は不充

分さから起る。急速に走るものほど、誤れる微細な角度からも急激なカーヴを描くという原理は、我々の今日における運動に最もよく当て嵌まる。××的文化・教育活動への積極的参加は、第三に、この偏向を克服するところの、工場農村における××的プロレタリアートの文化的活動と、その中に発揮される労働者農民の生活の創意性に基くことを可能ならしめる。

次に我々はブルジョア芸術並びに日和見主義的芸術との闘争に一層の強化を計らねばならぬ。『文化的指導者としての役割、及び人類が従来の発展段階において蓄積した文化的遺産を享受し、それを批判的に琢磨する組織者としての役割は、既にプロレタリアートに移っている。』この役割を前面に押し出すことによってのみ、彼等との我々の正しき闘争はあり得る。言い換えるならば、前述した映画、音楽の部門に止まらず、すべての芸術部門において、ブルジョア芸術への一層の関心とその批判的摂取が増大せしめられねばならぬ。かくすることによって、我々の正しき闘争を強化するのみならず、日和見主義的芸術を駆逐し、芸術的同盟者を我々の側に獲得すると共に、更に一般芸術家の関心を惹き付けることに努めねばならない。我々はブルジョアジーの文化戦線における積極的反動政策の進出に抗して、一般芸術家並びにその下にある広汎なる大衆の反動陣営への移行に対する防禦戦線に立ち、プロレタリアートの文化反動に対する闘争に協力しなければならない。

一九三〇年度は、国際プロレタリア芸術運動において劃期的成果が遂げられた。即ち文学、演劇における国際的結合は、我々の芸術運動を、国際芸術運動の一環として認識せしめるに至った。我々は『ナップ』誌上に現れていたような従来の便宜主義的態度を克服して、国際連関を組織化せねばならぬ。我が国の植民地並びに移民地の芸術運動との密接な関係の確立は、芸術運動の国際的結合の強化に対して課せられた我々の任務である。

特にブルジョア諸国におけるプロレタリアートの階級意識に直接に作用しつつあるところの、ソヴェート同盟における文化革命の偉大なる意義を汲みとることは、××家の行動を以てしてばかりでなく、芸術家の言葉を以てしての、ソヴェート同盟の××の任務を果すものである。

これ等の国際的任務は、海外の芸術研究家の協力を要求している。

昨年度において活潑に展開された移動活動は、闘争の激化に直面して、一層精力的に遂行されねばならない。特に農民文化へのプロレタリア的影響を助成するために、農村に適応した移動活動の形態を必要としている。また移動活動は絶対に社会民主主義的幹部と妥協したり利用されることなしに、右翼・中間派の大衆とも密接に結びつくべきである。

ナップ各同盟の発展は、その活動領域の拡大によって、、各同盟の組織的協力並びに積極的な技術的援助の計画的遂

行を必要ならしめている。綜合移動芸術隊の編成、演劇団のレパートリーへの作家の積極的援助等。特に各同盟全体がプロレタリアートのカンパニアへの参加を一層活溌にすることの重要性を理解しなければならぬ。ナップ中央協議会は、これ等の協同的、集中的活動に対して計画的指導・援助を実現化することに於いて、組織上の権威を高めねばならない。

最後に、日本における最近の情勢は、ハリコフ大会が掲げた四つの旗印の一たる社会ファシズムに対する闘争を、我々が特に強調しなければならぬことを示している。

本年度における我がナップの中心的任務は、一切の芸術活動の基礎を工場農村に打ち立てることによって、××的プロレタリアートの文化・教育活動の一部となることにある。かくして芸術運動の××主義化と、広汎なる大衆獲得の事業はいよいよ押し進められるであろう。

一九三一年四月

ナップ中央協議会

（一九三一年四月「ナップ」）

一九三一年五月 日本プロレタリア作家同盟 第三回大会議事録

同盟活動報告

一九三〇年四月から一九三一年三月まで（部分的にはその後最近まで）の我が作家同盟の活動は、ほぼ次ぎの如くである。

一、戦旗社の独立と機関誌『ナップ』の発刊

この一年間に、我がプロレタリア芸術運動に非常に大きな影響を与えた二つの出来事があった。一つは一九三〇年九月戦旗社がナップから独立したことであり、一つは同じ月、ナップ協議会から機関誌『ナップ』が発刊されたことである。

元来雑誌『戦旗』はナップの機関誌として、一九二八年四月ナップ結成と共に、その機関誌部から、発刊されたのである。然し其後、『戦旗』の発展に伴って、機関誌部が階級的出版所たる戦旗社となり、戦旗社は作家同盟その他各同盟と並んでナップ加盟の一団体となり、雑誌『戦旗』は、ナップの機関誌から労働者農民の大衆雑誌という新たな方向へ第一歩を踏み出した。これが一九三〇年春開かれた作家同盟第二回大会当時の『戦旗』及び戦旗社の状態であった。

その後『戦旗』及び戦旗社の発展は、益々眼ざましくなった。例えば、（一）その当時までの『戦旗の下に』の欄が、四月号以来『工場農村から』に改められ、『労農大衆の通信活動が計画的に始められて、非常に旺盛になって来たこと。（二）時々刻々のプロレタリアートの闘争に結び付けて、芸術家の技術を動員し始めたこと、等。

組織上から見れば、戦旗社は、全国の工場農村に三百に近い支局を確立し、『戦旗』の編集も、全支局員——全労働者農民の積極的参加によって行われるに至った。それはまた、戦旗及び戦旗社の任務が一層明確な姿で認識され始めたことでもあった。

従って、戦旗社が芸術団体たるナップの組織の中になおも止まることは誤謬であることが明かにされ、その結果、戦旗及び戦旗社は、一九三〇年九月、その新たに確認された階級的使命を成功的に果すために、全労働者農民大衆の熱心な支持と、ナップ加盟団体、プロレタリア科学研究所、産業労働調査所、農民闘争社、その他の団体の支持援助の下に、ナップから独立したのであった。

当時わが作家同盟及びナップは、この戦旗社の独立の階級的意義を十分明確に認識することが出来なかった。

我々は一時次ぎの如くにさえ考えた。

『戦旗は元来ナップの機関誌として、即ち芸術雑誌として発刊された。従ってそれは飽くまで芸術雑誌として発展すべきである』

従って、我々は、当時の戦旗の新方針を一つの偏向として理解した。

この誤解は、ナップ、戦旗社、プロ科学、農民闘争、産労等によってもたれた戦旗防衛懇談会の席上で、明確に指摘され、同盟内でも活潑な討論の結果自己批判された。

だが我々は、戦旗社問題に対するこの討論を契機として、プロレタリアートの全文化運動と芸術運動との関係を全体とその部分との関係として一層明確に理解する方向へ進み得たのであった。

即ち一般文化活動の中、又芸術の問題を解消してならぬ

こと、両者を全体とその部分との交互関係において見ねばならぬことが明かとなり、この交互作用の上にプロレタリアートの芸術の発展的建設のあることが漸次明かとなって来た。

また事実戦旗社の独立は、我々の文学運動の発展のために――我々が第二回大会の方針に従って『文学大衆化の問題』を具体的に日程に登しつつあった時、それに対する最もよき拍車となり得たのであった。

戦旗及び戦旗社の独立と月を同じくして機関誌『ナップ』が発刊された。

我々は最初『ナップ』を『理論雑誌』と規定して小説等をのせなかった。これは、芸術上における理論と実践との関係に対する、及び労働者階級の文化活動内における『戦旗』と『ナップ』との交互関係に対する過去からの誤謬が我々の中に残っていたことを示すものであった。機関誌『ナップ』は単なる『理論雑誌』としてではなくて、芸術運動の統一的組織者であり、日本一国に於ける芸術運動の統一的組織者たるばかりではなく、国際的芸術運動の日本に於ける組織者として認識されねばならぬと云うことが、その後明確にされて来たのである。そこからして『ナップ』には芸術の理論と共に多くの作品がのせられるに至った。

かくして、一九三〇年度に於て我々は発表機関を倍加し得た、単に倍加し得たのみならず、それぞれの雑誌の任務を正しく認識し直すことによって、同盟の活動が極めて急速に発展したのである。

二、文学活動に於ける主要問題

一九三〇年度の文学活動を要約すれば、『前衛の眼をもってこの世界を見、且つ描く』と云う第二回大会の方針を具体化することと、さらにそれを発展させることにあったと云える。前半期に於ては、我々の活動は主としてこの方針を具体化するための基本的な諸問題の解決に向けられた。即ち、労働者農民に支持さるべき作品は如何なるものであるかに就き、作品の内容、形式、題材、対象に亙って、委細な検討が行われた。対象に関しては、労働者貧農を対象として書かれねばならぬことが明かにされ、題材については、従来取材の範囲が極めて狭かったことが指摘されてその広汎化が強調された。そしてその具体的解決方法として課題小説を我々は計画し、最初次のような形で課題を問題とした。

1、社会民主主義バクロ、2、植民地問題、3、失業問題、4、産業合理化、5、市電争議、6、鐘紡争議、7、工場労働者、8、自由労働者、9、金融恐慌、10、ブルジョア政治機構のバクロ、11、海上労働者、12、鉱山労働者、13、反動青年団バクロその他数項。

その後『生産の組織化』問題の進行につれて、この課題

小説の問題は『産業別小説叢書』刊行の計画へと、移って行った。そうしてそこで『産業別小説』の意義に関して種々の異論が現われ、結局『各作家がそれぞれ自由に執筆した作品の中、優れたものを産業別に編輯して出版する』という発表形式の中に『産業別小説叢書』の意義を認めるという所に一応結着したのであるが、この問題からはその後更に種々の異論が現れ、理論上根本的には未解決である現状が一方の作品制作の不振の現状に対応している。

これと類似の現象は『絵入小説叢書』刊行の計画にも現れている。この計画は中央公論社の提案によるものであったが我々はそれを、第一に我々の出版基金をつくるため、第二に労働者農民の諸組織の宣伝のためという二つの意味で取り上げたのであったが、この取上げ方も理論的に十分整理されず制作上にも仕事の進行が遅れているという現状である。

これらのことは、根本的には、わが文学の課題はわがプロレタリアートの当面の課題に外ならぬということを機械的に理解したことから来た。文学の課題に関する右の規定は、プロレタリアートの課題が文学の内容として、具体的な主題として生かされるという意味で理解すべきであったのを、我々は主題（内容）の問題としてでなく題材（形式）の問題として理解し、プロレタリアートの課題に沿うて題材を求めることによってこの問題を解決しようとした。従って、題材の広汎化ということも、プロレタリアートの課題を文学の内容として生かすということに従属させてのみ考えるべきであったのを、この関係をヌキにして題材の広汎化そのものを独立に問題とした。そのため、題材の選択そのもの、及び『産別小説』に於ける作家の配分そのものにおいては機械的になることを避けようと努めたが、出発が機械的であったために理論的にも制作の上でも行詰りに来たと見られるのである。『産別小説』の問題を発表形式の問題として解決した解決は、この問題を全体として理論的に整理出来なかったところから来た矛盾を、一応形式的に合理化したものに過ぎなかった。

『生産の組織化』（『産別小説』等はその部分である）の問題は、運動の進展と共に、これまで気付かなかった多くの問題を提出している。この問題を全体として理論的に深めると共に我々の取上げたそれぞれの具体策を正しい理論に基いて樹て直し、それによって停滞気味であった制作を活溌ならしめることが今後の問題となって来た。

産業別小説叢書の外にも、特殊な形式としては新年号の中央公論に小説『失業反対』を発表した。これは三人の作家が独立の短篇を書き、それを適当に編集して失業反対のテーマを前面に押し出そうとする試みであった。だがこの試みも問題の理解の根本に横る不精密と、経験の不足と時間の不足のため明かに失敗に帰した。だが、これらの失敗にも拘らず『生産の組織化』の全体としての解決のみがプロレタリアートの芸術確立の道たることを、我々は過去一

年間の苦しい実践を通してますますハッキリと確認したのである。

この外新たな試みとして、(1) 通信班 (2) 壁小説 (3) カンパニヤーへの動員、等を挙げることが出来る。

(1) 通信班。これは東京地方の同盟員を三班に分け、各班が毎月交代で、その月々に起った争議或いは各種の集会(ブルジョア議会から社会民主党の大会に至るまで)出掛けて行って、その通信文を作成しようと試みたのである。我々は当時まだ労農通信員の運動に対して明確な認識を持っていなかった。従って、この企てに対してもその意義を正しく理解することが出来なかった。我々はこれによって第一に作家の技術を高めようとしたが、これは、通信員運動の促進を目的とすべきであって、それとの交互関係に於てのみ作家の活動の成長を考えるべきであった。この理解が不正確であったためこの企ては途中で立消えの形になったが、それは企てそのものが悪かったからではない。新しい理解と共にこの種の活動はますます発展すべきことが明かとなりつつある。

(2) カンパニヤーへの動員(公判闘争)。これは、労働者階級の展開するカンパニヤーに作家が作品を以て動員される最初の試みであった。具体的には公判闘争における『波』を挙げられる。これはかなりに成功したが他の種々のカンパに応じることは出来なかった。今後はより多く動員されねばならぬ。また『戦旗』新年号以来発表されている壁小説なども明かにカンパへ結び付けて、作家の技術が動員される新しい一つの形式である。(詳細は作品活動報告に譲る)

(3) 壁小説。これは最初『戦旗』の要求によって生れたが、各種出版物(壁新聞、各種新聞、戦旗等)が小さな形での文学作品を要求する実際上の必要に応じたもので、その後は積極的に各種の小さな形式で制作することが始められたのである。十分成功したものはあまりないが、中絶なしにますます発展している。

次に我々は、我々の活動が不十分であったことを次の点で認めねばならぬ。第一には、階級闘争の進展と共にプロレタリアートの課題がますます生き生きと具体化して来たのに対して、それを文学の課題として生かし得なかった点。第二には、労働者階級の成長と共にその広汎な文化活動が展開されて来たのに対し、同盟の力をそれの促進のために注ぎ得ずまたそれとの交互作用の上にプロレタリア文学を強めて行くことが出来なかった点。第三には、労働者農民自身の各種文芸雑誌と組織的に結びつき得なかったのみならず、わが同盟を支持している『プロレタリア詩』『プロレタリア短歌』『集団』その他十種以上の文学雑誌に対しても十分の指導をなし得なかった。これらの弱点から我々は、広く大衆の中から作家を続々と輩出させることにも、十分の成功を見なかった。

この弱点は、『戦旗』、『ナップ』に発表された作品数か

らも知ることが出来る。
一九二九年四月—一九三〇年三月まで、三七篇（戦旗のみ）
一九三〇年四月—一九三一年三月まで、四〇篇（戦旗、ナップ）

前年度に比し、発表機関がその下半期に倍加しているにも係らず、作品数が僅かに三篇しか増加していない。これは（一）一九三〇年度の下半期に於て『戦旗』が非常な打撃を受けて紙面の縮小されたことにもよるが、（二）『ナップ』発刊当初理論雑誌と規定するような誤った見解があったことにもよった。第二の原因はその後急速に除去され、一九三一年度からは作品活動が再び活潑に始まった。

一月号　ナップ—五篇　戦旗—四篇
二月号　ナップ—五篇　戦旗—四篇
三月号　ナップ—三篇　戦旗 ｝合併号—三篇
四月号　ナップ—十篇　戦旗 ｝
五月号　ナップ—六篇　戦旗（改訂版）二篇

四五の二ヵ月で前年度までの一年間の作品に該当する作品が生産されている。
又次ぎの表からも我々の文学活動影響力の拡大を知ることが出来る。

団体名	一九二九・四月—一九三〇・三月 改造	公論中央	合計	%	一九三〇・四月—一九三一・三月 改造	公論中央	合計	%
作家同盟	4	7	11	11%	16	14	30	27%
文芸戦線	9	9	18	18%	10	9	19	17%
新興芸術	1	2	3	3%	5	3	8	7%
ブルジョア作家	46	22	68	68%	30	25	55	49%

我々は急速に高まりつつある作品活動を一層旺盛にせねばならぬ。

研究会活動

研究会の活動は、ナップ結成の当初に於ては、各部門（小説、詩、評論等）が各班に分れて行われて居った。然し、ナップの再組織の頃から、この活動は全く中絶してしまっていた。
第二回大会以後文学活動が旺盛になって来るに従って、再び左の五つの研究会が同盟内に組織された。

1　作品研究会
2　詩研究会
3　評論研究会
4　児童文学研究会

5　農民文学研究会

各研究会は月に一回乃至二回ずつ開かれ日を経ると共に盛んになって行った。出席者は十人以上四十人までである。

各研究会には、作家同盟の影響下にある各文学団体或いは個人が、中央委員会の承認を経て、常に数人傍聴者として出席した。

研究会では、主に『ナップ』及び『戦旗』に載った作品、評論の批判が行われ、続いて、各研究会が担当する、『ナップ』翌月号のそれぞれの部門のプランが自主的に作成された。

然し全体的に見て研究会の活動にはまだ極めて遺憾な点が多い。

どの研究会に於ても、政治上の問題或いは作家同盟の内部組織の問題がより多く討論され、芸術上の問題が討論されることが極めて乏しい。

その結果、各研究会の特性が稀薄になり、研究会の活動は明かに不活潑になりつつある。

出版活動

第二回大会を経て、我々の出版に対する原則的な態度が明かにされた。その結果、この一年間に於ける出版活動の総ては同盟の完全な統制の下に行われたのである。

出版された単行本の数は全てで六十一冊であった。

この内戦旗社から出版されたものは、次の六冊である。

工場細胞	小林多喜二
綾里村快挙録	片岡鉄兵
キャラメル工場から	窪川いね子
鉄の話	中野重治
	(以上作家叢書)
プロレタリア文学のために	蔵原惟人
壊滅	蔵原惟人

戦旗社からの出版が全出版面の僅か10％に過ぎず、殊に、作家叢書の刊行が、以後トン坐したのは戦旗社が打ちつづく弾圧のために非常な財政的困難を来し、一時単行本の出版が不可能になったからである。

三〇年度版の年鑑詩集が発行されなかったのも同様の原因による。然しこれは、三一年度版として新たにそれ以後の詩を増補し、出版されようとしている。

ブルジョア出版に対する我々の原則的態度を冒してまでもこの一年間、我々が非常に多く、ブルジョア出版に参加した理由は、1、戦旗社の財政的援助、2、ギセイ者の救援のためであった。この二つの理由のために、同盟は、次ぎの出版を行った。

現代日本文学全集	改造社
戦旗三十六人集	改造社
縮刷版『太陽のない街、蟹工船、鉄の話』	改造社

この外、改造社から出版された新鋭作家叢書に、非常に多く同盟員が参加したのも、ギセイ者及びその家族の救援を目的として居たのである。

犠牲者

一九三〇年五月以前　　三名
　　　五月以後　　七名
一九三一年三月以後　　三名

五月の暴圧によるギセイ者は三〇年十二月から、三一年一月にかけて大半保釈仮出獄になった。そして、数倍の元気をもって活動している。五月以前及び三月以後のギセイ者は猶保釈されぬ。

この間ギセイ者の救援活動は財政的には、可成りよく行われた。然し、出獄者の出迎え、入獄者見送り、その他動員の点では全くなっていなかった。他同盟殊にプロットなぞに比較して非常に劣っていたと云うことが出来る。

国際的結合

アメリカとの結合は、ニューマッセズ、及びジョン・リードクラブを通じて行われた。五月二十日の暴圧に対しては、ジョン・リードクラブ書記局及びマイケルゴールドから抗議が来た。

ドイツとの結合は、ドイツ・プロレタリア××作家同盟及びその機関誌リンクス、クルヴェとの間に行われた。

そして、ドイツからも五月二十日の暴圧に対して、書記長ルドウイッヒ・レンの名をもって抗議書が来た。

作家同盟からも、ドイツ・プロレタリア××作家同盟の大会にメッセージを送った。

この外ドイツ・プロレタリア作家同盟員の手によって我が作家同盟員の著書が次ぎ次ぎに飜訳され、ドイツの戦闘的労働者の間に非常な好評を博している。

同志徳永直の『太陽のない街』は、四十一の××的機関誌に一時に連載され、又単行本としてベルリンで発行された。『失業都市東京』『蟹工船』その他も飜訳されつつある。

サヴェート同盟との結合に関しては、まだ決して充分だと云うことは出来ない。

然し三〇年十一月ハリコフに開かれたプロレタリア××作家第一回国際大会には、日本代表が出席して、日本問題に就て多くの討論が行われ、我が同盟の階級的真価は、大会に於いて完全に承認された。

この結果、中国及び、イギリスの同志から五月二十日の暴圧に対する抗議が来た。

内部組織

三〇年六月三日の中央委員会に於て、今後運動の発展に伴って、支部を設けることが決定された。

在独同盟員によってドイツ支部が組織され、又大阪には

支部準備会が出来た。
大阪支部準備会は、その後なんら具体的な活動を行わなかったために一時消滅してしまった。然し最近再び、大阪にいる二三の作家同盟員が中心となって、研究会が持たれ、次第にその力を盛り返しつつある。
ドイツ支部は極めて精力的に活動した。在独同盟員が、然し作品活動は、まだほとんどなされていない。今後作品活動にもっと関心を持つことを希望したい。
最近山梨に支部が自然発生的に出来かけているが、連絡がまだ極めて不充分である。

同盟員獲得及び脱退

この一年間、作家同盟は、新同盟員の獲得に非常に努力した。然し労働者出身の作家は極く僅かしか生れなかった。
新同盟員は次ぎの通りである。
伊藤信吉、橋本正一、石井秀、村田達夫（以上プロレタリア詩人会）黒島伝治、伊藤貞助、長谷川進、山内謙吾、今村恒夫、今野大力、宗十三郎、山藤檣（以上文戦打倒同盟）手塚英彥、安瀬利郎、中条百合子、小宮山明敏、北川冬彥、淀野隆三、宮本顕治、泰巳三雄、林田茂雄、横山芳夫、原理充雄。
この内文戦打倒同盟の諸君は、三〇年十一月、労農芸術家連盟を脱退して以来、文戦打倒同盟を結成し、その闘争を経て作家同盟へ加盟したのである。
この期間内に脱退者が三名あった。
今東光、島影盟、石田茂
今東光の場合には単なる脱退ではなく、それは最悪の裏切りであった。
我々は今後、同盟員の獲得と併せて同盟員自己教育の問題を日程に登さなければならぬ。

講演会活動

四月上旬　上野自治会館（戦旗防衛）
五月十七日　京都三条青年会館（戦旗防衛巡回講演）
主催戦旗京都支局及びナップ地区協議会
講師　江口、中野、片岡、貴司、大宅、小林
五月十八日　大阪上本町実業会館（戦旗防衛）
主催　戦旗大阪支局
講師　同前
五月二十日　三重山田、有楽座（戦旗防衛）
講師　江口、貴司、片岡、小林
五月二十一日　三重松阪町公会堂（戦旗防衛）
講師　中野、江口、片岡、貴司、小林
十一月九日　上野自治会館（プロレタリア文芸大講演会）
主催　作家同盟
一月二十四日　京都三条青年会館（戦旗防衛）

主催　ナップ地区協議会
講師　武田、徳永、中条、窪川（いね）、黒島、長谷川
一月二十五日　大阪天王寺公会堂
主催　大阪戦旗支局
講師　同前
二月十六日―十七日　築地小劇場（戦旗ナップ防衛）
講師　ナップ各同盟からの出席で二日間に亙りメンバーを変えて行った。
一月二十日　長野県
講師　江口、鹿地
三月十七日―十八日　長野県
講師　武田麟太郎、窪川いね子

書記局確立

第二回大会以後書記局が確立された。書記局は書記長一名書記一名を以て構成されていたが、三一年三月以来書記を二名に増加した。

書記局はニュースの発行を行い、研究会の設立にあたっては最も積極的に活動し、その、財政、出版、人事、一切の同盟内の事務を処理した。

然し、同盟の発展に伴い、益々、多くの仕事が書記局に集中されて来て、書記局は非常に仕事が行いにくくなって来ている。

ニュースの発行も月二回、中央委員会の直後に発行すると云うことが決定されたが、それも充分には実行出来なかった。

今後書記局の仕事は、もっと適当に分化され、整理される必要がある。

財政問題

同盟財政の基礎である同盟費は従来、三〇銭であったが、二月以来、ナップ誌代をも含めて六〇銭に変更された。

単行本の印税の二分、三回以上に亙る連載物の原稿料の二分を納入することが決定された。

この外、同盟内に維持員を作り、維持員はそれぞれ定められた金額（一円―五円）を納入した。

然し、同盟費、維持費の納入状態は、極めて不活潑であった。殊に同盟費の納入状態に至っては零に等しい。維持費の納入も前半期に於てはやや行われたが下半期に至っては、全く行われなかったと云ってよろしい。

同盟の財政は単行本の印税によってと、戦旗三十六人集第二版の印税を同盟費の一部に繰り込むことによって、かろうじて支えられて来たのである。

我々は同盟費の納入を活潑にし財政の基礎を急速に確立しなければならぬ。

一九三一年度に於ける日本プロレタリア作家同盟の活動方針

序

我々が当面する客観的状勢は、国際的には資本主義体制の没落とソヴェート同盟に於ける、社会主義建設の躍進との対立、支那ソヴェートの拡大、反ソヴェート戦線の形成、その中において革命的大衆闘争を組織せんとするプロレタリアートの力の急激な増大であり、国内的には、日本資本主義と結びついて促進されつつある経済恐慌の激化である。金融資本独裁下の資本家地主政府は、この恐慌脱出のため産業合理化の強行、大衆の不満鎮圧法の制定、プロレタリアートの弾圧に狂奔しつつあるが、失業者の二百万に達する増加、賃銀の飢餓的値下げ、大衆的解雇、農村の極度の疲弊は、労資の対立をますます激化させている。ストライキと小作争議とは数と激しさを加え、広汎な未組織大衆、労働婦人が闘争に参加しつつある。闘争は政治的闘争への発展を孕みつつある。

特に我々の注意は、企業家及び××と公然と結び、労働者農民を飢餓へ追入れるために共同しつつある社会民主主義者の露骨なファッショ化、並びに労働者農民にますます密着し闘争の独自的指導を確保し、左右の日和見主義と戦い、弾圧に屈せずその組織を強化しつつある日本プロレタリアートの先頭の偉大な躍進に向けられる。

これが日本プロレタリア文学運動がその中に展開されるところの客観的情勢である。

次に、日本プロレタリア作家同盟の一九三一年度に於ける方針を決定するに当って、根本的な条件をなすものとして、プロレタリア文学運動の国際的組織の確立を述べなければならぬ。

一九三〇年十一月、ウクライナ・ソヴェート共和国の首都ハリコフに於いて、二十二の資本主義国、植民地、及び半植民地の代表者等により、国際××文学局の第二回拡大総会が開かれた。総会はプロレタリア・革命作家第一回国際大会に転化されて、ここにプロレタリア文学運動は、国際的に統一され、集中化されたところの、世界プロレタリアートが持つ唯一の組織としての、プロレタリア・××文学国際連盟の結成を見た。日本プロレタリア作家同盟の活動方針は、この大会の成果、その日本文学委員会の決議に基く。我々はかかる見地から、過去一カ年間の活動の成果を基礎とし、ナップ方針書の正しき理解の下に、一九三一

年度における我々の活動方針を次のごとく定める。

一

昨年度の大会で我々は中心的任務として文学運動の××主義化というスローガンをかかげた。これは昨年度の活動を指示した正しさの点においてのみならず、我々のマルクス主義者作家たらんとする意図を運動の上に意識化させた点で最も大きな意義を持った。

我々はこのスローガンの下に初めて、芸術大衆化問題の解決、作品のマルクス主義的検討に向い得た。

かくて我々の仕事は、マルクス主義的イデオロギーの徹底のために、且つ現実を正確に観察し、把握し、表現することを習得するために、製作における厳密な態度の中に現わされ始めた。作品活動においても批評活動においても我々は多くの成果をかち得た。我々は質的にも量的にも前進した。然し一般には、一九二九年度の諸作品に較べて更に躍進した個々の作品を持ったとは言い得ない。批評活動も作品活動を充分に刺戟し得るほどの旺盛さは示さなかった。

それにも拘らず、我々のかち得た成果は、一九三〇年度における新たな転回において、今後の我々の運動に豊富な且つ貴重な経験を与えた意味で極めて重要視される。その経験は何か。

現実を真にマルクス主義的に見る鋭い観察と、それを正確に表現する技術との困難さが具体的に示されたことである。このことは、文学における我々の仕事がプロレタリアートの闘争の部分として進むためには、その困難が日本プロレタリアートの全体的困難と、別ものではないことを我々に明示する。

第一に、制作において我々は意識的マルクス主義的観点に立とうと力めた、このことは、他の作家が扱い得ない題材をも扱うことを我々に要求すると共に、根本的には我々独自の扱い方を要求する。然し我々の努力は、この独自の扱い方が持つ困難性を征服し得なかった。ここにおいて、唯一の観点に飽くまでも立とうとする我々の欲求は、題材の××性に対する要求となって現われた。従って一般的には我々の作品の内容が固定化して来た。

多くの作品が、有機的な構成力に乏しく、文学的に粉飾された闘争の報告という感を抱かしめるものや、表面的説明に陥ったものが眼立った。

他方において、我々は一つの作品にその主題が内包するあらゆるプロレタリアートの政治的項目をたたき込もうとする努力をなした。そのために我々は、今日『戦旗』誌上に掲載され始めた壁小説のごときものや、短篇等の形式において、日常瑣末なる現象をも広汎に取り上げるということが少かったのである。我々は、観察を広め、且つ深めねばならぬ。そこに鍛えられた技術こそ我々の主題を強化し得

るであろう。題材の広汎化と共にその取り扱いのプロレタリア的独創性のために、あらゆる努力を傾注しなければならぬ。このことによって我々の観点を具象化するために不充分な技術を急速に向上せしめねばならぬ。

プロレタリアートの当面する課題が文学の課題であるということは、プロレタリアートの当面する課題を文学の内容として具体化すること、即ちそれぞれの作品の主題として生き生きと生かすことである。我々はプロレタリアート当面の課題を、階級闘争の現実の正しい把握とその表現との中に生かさねばならぬのである。過去の我々のこの問題に対する機械的理解から生じた多くの誤謬を実践的に清算することによって、我々は我々のこの任務を深めつつ果たして行くであろう。これが作品におけるプロレタリア・リアリズムの確立への道である。

二

我々は昨年度の方針書において、労農通信員運動の重要性を指摘した。

それは第一に、通信の内容が持つところの、闘争しつつある労働者農民の生活の創意性並びに現実の観察において、又そこから生れてくる新たな形式において、我々の文学を真にプロレタリア的なものとして成長させるところの大衆的基礎をなすものとして、第二に、労農通信員の中から作家を獲得してゆくという意味において全く正しかった。このことが更に一層強調されねばならぬと共に、我々はここに再び労農通信員の問題を、全く新たな見地から取り上げねばならぬ時に置かれている。即ちプロレタリアートによって文化・教育活動の問題が具体的に日程に上されると共に、我が作家活動もまたその構成部分として明確に認識されるに至ったからである。

生産の中にある労働者及び農民の通信員の活動は、プロレタリ文学の無限のエネルギーの源泉である。生産し闘争しつつある労働者農民の生活の大衆的創意性、その闘争の中に獲得されて行く現実の正しい観察、そこに大衆的に展開される文化的活動、この活動の最も重要な具体的表現としての通信員運動とかたく結合することによってのみ、プロレタリア文学は、労働者農民の広汎な生活にその根を下しつつ発展することが出来る。この結合によってのみ、文学は、プロレタリアートの文化・教育活動の構成部分として無限に拡大され強化される。わがプロレタリア文学をプロレタリアートの文化・教育活動の有機的部分とするため、同時にかかるものとして無限に発展させるために、通信員運動との結合を組織化することが最大の急務である。文学における理論的・批評的活動も勿論かかる規模の上に発展させられねばならぬ。そうしてこのことを、我々が日本における通信員運動の促進と組織化とに直接に参加することによって実践的に解決して行かねばならぬ。かかる実

践的解決のみが、通信員運動の中から作家を育て上げさせ、これをわが同盟の組織に獲得させ、文学の中にプロレタリアートのヘゲモニーを打ち立てて行くのである。通信員運動との組織的結合、これが我々の第一に解決すべき今年度の活動の中心任務である。

第二に我々は、ハリコフ大会の日本文学委員会の決議に示された農民文学の振興に努力しなければならぬ。我々は我々の過去の実践から及び右の決議からすでに農民文学研究会を持っているが、これを広汎な農民の大衆的参加の上に発展させることが重要である。

第三に我々は、過去のすべての文学、特にブルジョア文学及び小ブルジョア文学に対する闘争を組織化せねばならない。これについて我々の闘争は従来消極的であったことを認める。今や我々は、過去のすべての文学とプロレタリア文学とを並列して対抗するものとしてでなく、後者の歴史的優位性とその獲得して来た現実の力との認識の上に立って、一方では我々の力の一層の増大のために、他方では文化反動に対する闘争のために戦わなければならない。かくの如く戦うことによって我々は、過去の文学の与える遺産を批判的に摂取し、同時に文学的同盟者獲得のための適宜の方策を実践化し得るのである。

第四に我々は、文化反動の現段階における最悪の敵、文学における社会ファッシズムとの闘争を強化しなければならない。文学における社会民主主義者が日に日にファッシヨ化し文化反動の、労働者階級に対する最も巧みな欺瞞的部分となっている現在このことは強調さるべきである。

第五に我々は、我々の運動の国際化のための活動を精力的に開始しなければならない。そのためには、ハリコフ大会の成果及びその日本に関する決議を生かすと共に、わが大会に贈られた在ベルリン同盟員一同からのメッセージにある『ナップ』創刊号の宣言に現れた国際的芸術運動に関する誤謬を実践の中で清算しなければならない。このことは、一方では我が同盟に国際組織への加盟を義務づけると共に、他方では日本の植民地移民地における文学運動とわが同盟との結合を義務づけ、また東洋におけるプロレタリア文学運動のためのわが同盟の活潑な行動を激励するものである。

これらは我が同盟があらゆる困難と戦いつつ果たさねばならぬ主要任務であるが、これらの諸任務は、我々が本年度の活動の中心課題とした第一のもの、即ち我々の活動と労働者農民の通信員運動との結合の組織化ということによってのみ真に正しく実行されるのである。このことによってのみ我々は、ハリコフ大会が全世界のプロレタリア作家同盟に課した四つの原則的課題プロレタリア的・××主義的活動分子の結合とその強化、労働者作家（第一に、労働者通信員運動出身の）躍進に対する決定的支持、プロレタリア思想敵に対する一切の傾向と方針（小ブルジョア平和主義、エセ労働者的社会ファッシズム的、及びファッシズ

的文学をも含めて）とに対する仮借なき闘争、並びに都市小ブルジョア及び農民出身の幾多の革命的作家よりなる文学的同盟者のプロレタリアートへの接合を実現し得るのである。

この義務を現実に果たすこと、そのためにわが同盟の活動を労働者および農民の通信員運動に組織的に結びつけて行くこと、一切の活動をこの結合の上に展開して行くこと、これが一九三一年度における日本プロレタリア作家同盟の活動方針である。

規約変更に関する件

従来一カ月三十銭の同盟費は一九三一年三月以後之を六十銭に改む。従って同盟費『一カ月三十銭』を納入するものとする規約は『一カ月六十銭』に変更される。

国際組織に関する件

わが同盟の活動は、従来とも、プロレタリアートの国際的連帯性、したがってプロレタリア文学の国際的連帯性の上に立って展開されて来た。しかしこのことは、一九三〇年度においては特に著しい発展を見た。そのうちの重要なモメントとしては、ドイツの作家同盟との結合の著しい緊急化、アメリカの組織との新しい規模における結合、わが同盟員の文学作品の各国語への飜訳の組織化、わが同盟員に対する圧迫への各国同志、及び組織の強力な抗議等々をあげることが出来る。これらのことを通じてわが同盟は、かって持っていた国際的視野の狭さから急速に脱出して来た。だが我々の活動を更に前進させるためには、すなわち、日本の文学戦線における戦いを強め、中国をはじめとする東部アジアのプロレタリア文学運動発展のために与えられた課題をはたす等の仕事を正しく遂行するためには、我々は、一九三〇年末のハリコフ大会の協議決定するところに従い、プロレタリア文学運動の国際組織に加盟し、一切の活動をこの国際組織の方針の上に展開しなければならない。一九三〇年度における日本の文学運動国際化の最大のモメントはハリコフ大会である。ハリコフ大会およびハリコフ大会において特に持たれた日本文学委員会の成果と決定とを承認するわが同盟は、進んでこの国際組織に加盟し、わが同盟に課せられた諸課題、国際的観点に立って正しく果たして行かなければならない。プロレタリア文学の国際的成長のためのわが同盟の活動は、国際組織に加盟することによってヨリ一層強力に展開されるのである。

農民文学研究会活動促進に関する件

わが国のプロレタリア文学は年を追うて顕著な進歩をな

しつつある。然るに、従来わが国に於てはプロレタリアートの立場から農民を描いた作品は、他の、例えば工場労働者を取扱った作品に比して、質量共に劣っていた。これは全人口の四割五分を農民が占めているような我国に於ては、大いなる欠陥といわなければならない。

しかし我々は、従来よりこのことについて全く無関心でいたのではない。ただ我々の文学の成長の過程に於て、力の不足が、農民文学の、十分なる成果を収めしめなかったのである。原因は、全く此処にある。

今や、我々の文学は成長した。我々は農民文学の正当な発達を促進するために、十分の注意と協力を致さなければならない。

ハリコフ会議は、わが作家同盟内部に、農民文学研究会の特設を提案している。この提案の全く時宜を得たる、そして正当なることは言うまでもない。わが同盟はこの提案を機として、農民文学研究会を設置した。

農民文学は、現在、急激に××化しつつある貧農の中に根を下ろし、農村通信運動と密接に結びついてやらなければならない。我々は仕事の基準を其処に置いて、農民の××的成長に協力しつつ、我々の農民文学を量的にも質的にも高めなければならない。斯くすることによって農民文学のプロレタリア的発達は、可能である。

農民文学研究会は、かかる観点に立脚して、仕事を進めつつある。すでにその仕事は始まっている。我々は三月下旬第一回研究会を開き、さし当り、

一、過去の農民文学の批判
二、農民文学に関する理論の研究
三、農民組合との協力

等の研究題目を挙げた。

農民文学研究会は、同盟員の大衆的参加と協力とを希望する。

研究会活動に関する件

昨年度大会に於て可決された同盟内研究会は三〇年度において、作品、評論、詩、児童文学、農民文学（三一年）の五部門に亘って相ついで設けられ、国際文学研究会も亦確立の準備が進んでおり、研究会の仕事は相当よき成績をあげた。これを本年度に於て更に発展せしめるために、次のようにすべきであると考える。

一、各研究会は同盟の組織単位ではなく、どこまでも『研究会』であるが故に、問題の提出や討論や批判を盛んに行いその活動が益々自主的に行われなければならない。

二、而して我々の活動の対象が、労働者農民にある限り、同盟員の工場労働者農民の直接傍聴参加が誘致されるようにしなければならぬ。又、ナップ他同盟員をも広く参加せしむべきである。更に同盟外作家の傍聴参加を広汎に誘導すべきである。このことは、同伴者作家を同盟の周囲

に引きつけ、かれらの立場を高め、われわれの文学運動を強力にする新しい要素を獲得する役割をも果たしうると考える。

作家活動報告

小説に関する報告

一

一九三〇年度に於ける我が同盟の作品活動は、種々の点に於て進歩をなしたと云える。

其の著しい例は、組織的計画的に作品の生産がなされるに至ったことである。産業別叢書が計画され、同盟の大部分の作家が之に参加している。細野孝二郎の『貧農組合』堀田昇一の『奴隷市場』等は既に完成された。又貴司山治の『波』及び徳永、窪川、橋本の『失業反対』等の如く、我々がプロレタリアートの其の時々のカンパに応ずるために、計画的に作品を生産した一例である。其の他『戦旗』によって行われている壁小説も亦、労働者農民の日常闘争に直接役立つために重要な役割を持っている。

然し、是等の作品生産に当っては各作家が、用意の不充分さ、或いは技術の未熟等のために、充分に芸術的効果を伴なっていなかったことも、注意されねばならぬ。

次に、イデオロギーの強化があげられる。我々の作品が社会民主々義作家に依って生産されたものと、判然たる差異を表すに至った事は、昨年度の大なる進歩の一である。『文戦』が政治的には益々社会ファシストの配下たることをハッキリさせ、作品活動に於ては、反動的に自然主義的方向に還元されつつある。他方、我々の『××主義芸術』確立のための運動は着々と進捗しつつある。故に我々と社会民主主義作家との作品に於ける相違は何人の目にもハッキリして来た。

更に一九三〇年度を通じて、我々の作品活動が量的に非常に増大されたことを挙げなければならない。『戦旗』『ナップ』に対する積極的な作品提供と同時に、ブルジョア出版を通じての大衆への作品の浸透が著しかった。勿論、これは大衆の革命的昂揚が、ブルジョア出版にまで我々の作品を要求するに至ったのであるが、主観的には優秀な作家が活動の自由を奪われていたにも拘らず、同盟内の若き作家の成長があったからである。けれども、此の作品の量的増大は、他方にある程度の欠陥を伴なった。殊にブルジョア出版の場合に於てそうであったと云える。

運動の飛躍的前進に伴う多くの弱点にも拘らず、我々は前年度の運動方針が正しかったことを是認する。

二

一九三〇年度の活動の成果を詳細に『戦旗』『ナップ』に就いて調べて見よう。

(1) 題材に就いて

題材の範囲は、一九二九年度より、広くなったとは云えない。主として前衛、ストライキ等に関するものが多かった。労働者の生活を扱ったものはそれに次ぎ、兵卒、農民を扱った作品は、僅かに一二に過ぎなかった。堀田の『奴隷市場』は自由労働者を従来の如くルンペンとしてでなく扱った点に新しき題材の獲得があり、貴司山治の『波』は公判闘争を最初に扱い、充分に成功したものだ。

此の題材の固定化は、作品活動を逼塞せしむる危険を持っていることに注意しなければならぬ。

(2) 主題(テーマ)に就て

我々がプロレタリアートの立場から明確な主題を作品の中に生かすことは最も重要な任務である。前衛、ストライキ、組織の問題、社会民主主義者の排撃、失業反対等が、主題として最も多く取りあげられた。けれども農民の闘争、反帝、反戦等の主題は、その重要性に拘らず省られなかった。ただ後者には細野孝二郎の『貧農組合』、西田伊策の『帝国主義』がある。

小林多喜二の『工場細胞』は工場労働者との関係に於て×活動が扱われた点に於て、他の前衛を扱ったものより秀れていた。

前衛を描く場合に、多くの作家は其の題材の持つ××性にのみ依拠した。故に其の活動が全体的に大衆と結合して描かれず、単に挿話として取扱うだけで満足している。斯くの如きは、題材の固定化を招く原因となり、一方に於ては、前衛の不当な英雄化を招来するものである。

三

文学大衆化に関して、我々は、如何なる仕事をやって来たか。これは昨年度に於ても我々の最大の仕事であったし、今後もまたそうである。

昨年度に於ては『文学大衆化』の実践を、形式の点に集中したかの観があった。『ナップ』誌上に於て、同盟員の多くの意見が提出され、各作家の努力もそこに払われた。そしてそれは各作家にはその点だけでは進歩をもたらした。けれどもそれは作品の形式が、大衆に幾らか解り易くなったに止まっている。全体的には、『鉄の話』『太陽のない街』以上に見るべきものはなかったのである。形式で我々が進歩しなかったばかりでなく、文学の大衆化はどの程度になされたか疑問である。我々は大衆からの批評を、積極的に受け入れ、それに依って、大衆化の努力の成果を測定するような方法をとらねばならぬ。

大衆化に関して、吾々はその手法のみでなく構成に就て探究する必要がある。昨年度の多くの、殊に長篇小説に於て無雑作な構成をとっている。だから、作品は平板なものとなり読者を激動させるような筋の組立が無視されている。これは我々の作品の大きな欠点であった。同盟以外からの吾々の文学に加えられた『類型化』の批評に対して、耳を掩うようなことがあってはならぬ。

文学大衆化は、題材及び手法、構成等形式上のみの努力によってなされない。労働者農民の全闘争の持つ大衆性を、作品の中に生々と盛り上げることが重要である。

四

一九三〇年度に、我々は全体的な進歩をしながら、特に優秀な作品を見ることが出来なかった。小林多喜二の『工場細胞』、堀田昇一の『奴隷市場』、片岡鉄兵の『愛情の問題』等を挙げ得るのみ。個々の作家が、並行的に進歩して行った。

けれども、二三の作家に就ては、微かではあるがマンネリズムに陥ろうとする傾向を見る。それ等の作家は、小説作法の点では上達しているが、其の形式・内容・主題等の扱い方に於て、固定化しつつある。

五

結語として我々は一九三〇年度の作品活動に就て、次の如く云うことが出来る。

1　題材の広汎化が行われなければならない。

2　主題が強調されなければならぬ。殊にハリコフ決議にもある如く、農村の闘争を精力的に取生かさなければならない。

3　文学大衆化の仕事が更に強力に行われねばならない。

戯曲に関する報告

(一九三〇年四月——一九三一年三月)

一、今年度の創作戯曲としては左の如き作品がある。

久板栄二郎『山県万歳』『去年と今年』『ダラ幹修業時代』『工場地帯小景』(いずれも小戯曲)

三好十郎『ガス』『報国七生院』(以上長篇)『おまつり』『この旗の下』(以上小戯曲)

村山知義『日清戦後』(長篇)『スパイと踊子』『ツェッペリン事件』(小戯曲)

江馬修『南阿戦争』(長篇)『平和記念日』『秩序を保つ

ものは誰か』『十七人の兵士』（以上小戯曲）
落合三郎『慶安太平記』（長篇）
江口渙『地主の誕生日に』（小戯曲）
吉村浩太郎『プロレタリアートの道』（長篇）
新城信一郎『爆発』（長篇）『プロ裁判』（小戯曲）
島公靖『鉄仮面異聞』『プロ床』『空豆の煮えるまで』
（いずれも小戯曲）
久保栄『漁民』（長篇）

更に脚色されたものとして、貴司山治『ゴー・ストップ』、小林多喜二『不在地主』、徳永直『戦列への道』、ヤジェンスキーの『パリを焚く』、映画『アジアの嵐』がある。

一、このとおり、戯曲の創作は前年度に比して量的に劣っていない。むしろ、プロレタリア演劇運動の発展に伴って新進作家の出現が目につき、ますます盛んになって行こうとする傾向さえ看取する事ができる。とは云え、演劇運動の発展に比して脚本は絶えず不足をつげ『脚本飢饉』が叫ばれつづけてきた事は注意されなければならない。（註、前年度の創作戯曲は約二十四五、脚色されたもの七種である）

一、しかし主題の点より見る時は、前年度に比して特に目につく発展があったとは云われない。労働者農民の闘争、戦争反対、前衛の活動、植民地問題、社会民主々義の曝露、等々あらゆる方面から繰返し繰返し扱われることは勿論必要であるが、しかも我らが取扱うべき多種多様なる主題からみる時まだまだ充分とは云えない。

三好十郎の『ガス』は鉱山プロレタリアートの闘争を生々と表現し、大衆の動きと共に個々人を活躍させている点で秀れている。戦術上の誤り、古い感傷主義、技巧上の拙さ等幾多の欠点を伴っていたにしろ、労働者に与えた感銘は大きかった。『おまつり』は少年のための小戯曲であるが、その他島公靖の『空豆の煮えるまで』の如き、少年のための戯曲が書かれ始めたことは注目に値する。

吉村浩太郎の『プロレタリアートの道』はコンミューニストの恋と道徳を主題としたものであり、戯曲に於いてこうした問題を取上げた最初の試みである、――技巧上に拙劣で、主題の把握に於ける誤りがあるにも係わらず。

我々は今後我々の方針に基いて、主題の多様化と強化を一層計画的に進めなければならぬ。

一、それから、我々の目につく事は、長篇戯曲に比して小戯曲のずっと多い事である。小戯曲の多いという事には書き易いという消極的な理由も無くはないが、演劇の大衆化に伴って巡回小公演の活動が重要となってきた今日『プロ床』『プロ裁判』『空豆の煮えるまで』等の如き親しみ易い単純な形式の作品が書かれ出した事は意味が深い。それに反して、移動劇団用脚本は一つも書かれていない。移動劇場活動の重要性がひろく認知され、そして益々活潑な活動が要求されつつある時に、その脚本のために我々によって何の努力も示されていないという事は大いなる遺憾と云わ

るべきだ。我々は今後この方面にも大いに努力しなければならぬ。

一、最後に戯曲の創作の全体を見る時、わがプロレタリア作家同盟員の活動が非常に貧弱であった事が分る。我々はプロレタリア戯曲の制作についてもっと多くの関心を見出さねばならぬ。更に我々の作品が演劇活動に実際に適応する事の少かったことを思う時、主題の選択も勿論であるが、劇場メカニズムについてもっと注意を払う必要がある。

一、我々は前の大会に於ける『戯曲に関する報告』の中で劇場の活動との結びつきを緊密にし、戯曲研究会を確立することを提唱した。そして我々はそれを実現した。この一月、作家同盟と左翼劇場との共同発意のもとに創立された『プロレタリア戯曲研究会』のそれである。我々はこれによってプロレタリア戯曲の研究と生産を在来よりも一層組織的に、計画的に為しうるための重要な機関を持ったのだ。わがプロレタリア作家同盟は奮って研究会に参加し、よき戯曲の創作のために一層活潑に働かなければならぬ。

詩に関する報告

（一九三〇年四月—一九三一年三月）

一、この期間に『戦旗』及び『ナップ』に発表された詩の数は35篇であり、雑誌『プロレタリア』『プロレタリア詩』『プロレタリア短歌』『詩神』『女人芸術』其他に発表された詩を加えれば右の数倍の量に達する。プロレタリア詩は従前よりも著しく多量に生み出され、又、その作者の数も増加した。若い多数の詩人が『プロレタリア詩人会』を構成してナップの支持を表明し、吾が同盟の指導下に活動し始めた。プロレタリア歌人同盟の『プロレタリア短歌』の運動は短歌形式の破壊によって明かにプロレタリア詩運動へ発展的に合流しはじめている。

研究、討論も従前以上に活潑に行われた。殊に短歌、民謡、俳句等のもつ封建的な固定形式と、ブルジョア的自由詩形式の歴史的意義が検討され、吾々の詩の形式の一般的方向が探究されたことによって『プロレタリア短歌』が名実共にプロレタリア詩たるべきことが一層明白にされ『プロレタリア民謡』の如き提唱も批判され得た。『歌い得る詩を与えよ』と云う大衆の中からの要求を正しく受け入れ、一方に於ては音楽家同盟作曲班との組織的協働を開始し、他方に於ては吾々の詩に於ける一般的退屈さ——記述的傾向を批判した。

以上を通じて看取し得ることは、一つにはプロレタリア詩に対する一般の進歩的詩作者の関心が吾々との協力へまで高まって来たことであり、二つには当面した多くの問題がより広い場面に於て討議され実践に移されて来たことである。

二、『戦旗』及び『ナップ』に発表された三十五篇の詩

(内同盟員の作二十二篇)を便宜上その題材によって分類すれば、(一)ストライキ、八篇、(内、交通3、化学2、繊維2、農村1)(二)前衛闘士の活動四篇、(三)宗教一篇、(四)失業一篇、(五)婦人の闘争三篇、(六)其他メーデー、ソヴェート・ロシア、レーニン、パリ・コンミューン等、十三篇であり、他の詩誌に発表されたものの題材は更に頗る広範囲に汎っている。

顕著なことは、これらの題材の殆んど凡てがプロレタリアートの××的闘争に関しているに係わらず真実感を以て裏附けられた作品は極めて少数であったことである。深く生活に洗潜せる、抜き差しならぬ、真実の××的激情の代りに、単なる題材の激しさが置き代えられていた。恐らくはこれは、昨年度の大会に於て指摘された如き『労働者農民の闘争より遅れている』詩作品を単なる題材の烈しさによって救わんとした結果であろう。この弱点は、詩に於ける次の如き技術の未熟さをも伴って、非常に多くの作品を退屈ならしめ、冷却させた。即ち感情の直接的な表現の代りに多くの説明、雑多な叙述を試みて詩独自の職能を自ら無視したような作品が多かった。而も一つの題材を扱うに当って最も常識的なプロレタリア的断案を、余さずに下すが如き未熟さが、殊に雑誌『プロレタリア詩』其他の詩誌の、多くの作品に目立っていた。これらは一面に於て、詩に於ける吾々のリアリズムの成長の困難さを語るものであり、全身が情緒であるべき詩に於ては僅かの非現実性、僅かの感情のウソも決定的に禍したことを語っている。

一般に日本社会に於ける現実よりもソヴェート・ロシア、レーニン、ローザ、パリ・コンミューン等が遥かに多くの生彩を以て歌われた。『飢饉を越えて』(伊藤信吉)よりも同じ作者の『記念日』が優れ、『起ち上る』(森山啓)よりも同じ森山の『戦士達に』が優れていた。多くのカンパに応じて作られたこの種の詩――『革命十三週年を記念するソヴェート同盟』(窪川鶴次郎)、『レーニン年譜』(西沢隆二)等は、絵画又は写真に添えて発表され効果を挙げた。日本の階級的現実(殊に政治的時事問題)に関しては充分の迫真力を以ては歌われなかった。

三、『戦旗』『ナップ』に投書された詩の量(十二篇)はその質と共に、従前よりも稍々低下した。その原因の一つとして、発表された詩作品の多数が前述の如き弱点を持っていたことが考えられる。勤労する大衆の中からの詩人が自らの偽りなき生活感を歌い得る為の誘発の役を、吾々の詩は極めて僅かにしか果さなかった。

四、所謂『産別詩』の組織的生産は昨年末に於て問題となったが、各産業部門に於ける現実の生活や闘争を深く知ることなくして、直ちに歌い揃えんとする如き機械的方法によっては、善き成果を挙げ得なかったのは当然である。この為にも様々な部署にいる労働者詩人からのよき投稿を持つに至らねばならない。

五、昨年秋詩人と作家の組織的協働が始まって以来、曲

譜を附された詩は次の七篇である。『里子にやられたおけい』（𦚰川）。『おらが春』（高木）。『立毛差押えに抗して』（上村）。『渡政のうた』（森山）。『歌』（中野）。『消費組合歌』（白須）。『檻の中』（波立）。

集会に於て独唱、合唱、又は朗読された詩は極めて僅少であった。大衆の口に膾炙するに至った詩などは殆んど皆無であった。これは持ち込みの場面が狭小であった為よりは、むしろ現実の集会へ持ち込むに適した作品が少なかったり、階級的心理に即した大衆的な歌詞が未だ作製されていない為であった。そのために『プロレタリア演芸団』は詩の持ち込みを現在中止した形になっている。

六、今や次のことが強調され得る。

(一) 特に日本社会に於けるプロレタリアートの現実が、もっと全生活的に歌われねばならぬ。

(二) 技術上の弱点の克服――特に詩に於ける説明や、詩に於ける心理、感覚上の未熟さの克服。

(三) 労働者農民詩人の成長のための援助――このことが吾々の詩全体の成長に役立たせられねばならぬ。

(四) 眼前の集会に持ち込まれるための条件をそなえた詩や階級心理に即した大衆的な歌詞の作製等。

七、一九三〇年版の詩集は主として戦旗社の経済的事情によって刊行されなかった。一九三一年版は一九二九年六月以後三月までに現われた作品の善き収穫たらんとして、近く戦旗社より刊行の予定である。

児童文学に関する報告

（一九三〇年四月―一九三一年三月）

過去一年間の我等の活動は、先ず二つの活動分野に分けられる。第一は、最も重要な活動舞台であり、我等のエネルギーを集中した所の『少年戦旗』第二は、直接児童を対象としない刊行物を利用した場合。この二つの活動分野は、一九三〇年十月以降『少年戦旗』が休刊した事と、作品それ自体の内容・形態によって決定づけられた場合との、二つの理由による。

その概観を示せば次の如くである。

A 作品別――文学的形式による分類

(括弧内は『少年戦旗』の作品数を示す）作品総数七二篇（四二）――内訳、童謡二三（八）内、作曲附のもの一〇（二）、少年詩八（八）、童話四（二）、少年小説一〇（八）、少女小説三（三）、児童劇六（一）、寓話二（二）、解説的読物一二（一一）、飜訳童話三（〇）、飜訳遊戯唄一（〇）。

B 内容別――テーマによる分類

1、資本家地主への反抗一六種（一一）、2、プロレタリアヒロイズム七（四）、3、団結の威力六（三）、4、階級的組織・行動の解説六（六）、5、官憲への反抗四（二）、6、少年少女工のストライキ四（四）、7、組織への獲得

四（〇）、8、小作争議・労働争議への参加三（二）、9、戦争反対三（一）、10、同志愛二（〇）、11、前衛の子供二（〇）、12、反宗教二（〇）、13、反帝国主義二（二）、14、歴史的人物の解説二（二）、15、歴史的事件の解説二（一）、16、ソヴェット同盟への関心一（〇）、17、学校闘争一（一）、18、労働者の国際的連帯心一（一）、19、雑（未完其他）五（四）。

以上の統計によって、二つの活動分野に於ける大体の傾向は推測されると思うが、更に総括的に、各種作品に就て観れば次の如き事が云える。

童謡——数に於て首位を占めながら、題材・表現共に漸く固定化し、質的に観るべきものが尠なかった。槇本の『小さい同志』『我らの旗』が、合唱歌としての新しき試みをやった事と、窪川が『里子にやられたおけい』によって、労働者の子供をテーマとして、とらわれない形式を示した事とを挙げられる。いずれも曲譜と共に普及されている。少年詩——幼年期のヨリ奔放な空想性とリズミカルな表現とを脱し、やや大人びた、現実的で自由詩風の表現をした児童詩を斯く称ぶのだが、この形式の作品には観念露出のものが多く、叫喚と掛声に終っていた。童話——前年度と比較して数も少く、童謡の場合と同様の事が云われる。少年小説——作品活動の中心的なもので、質的にも注目すべきものが多かった。橋本の『石炭を送るな！』は英国の炭坑夫争議に取材し、児童に争議と労働者の国際連帯観念を理解せしめようとしたもので、内容・形式共に纏ったものであった。久板の『墨汁弾』は野田労働争議に参加した児童を描き、児童の階級的英雄心とダラ幹に対する憎悪とをアジ・プロしたもので、表現技術にも細心の注意が払われていた。その他、西田の『裂れた上衣（チョゴリ）』槇本の『ナポレオンの末路』未完ではあったが、田辺の『少年闘士』、投書の中坂滝蔵の『学校自治会』等は、テーマ的に深化を示したものと云える。少女小説——立野の『裏切者の子』、片岡の『源さんとなみ子』は、共に少女のストライキ参加をテーマとし、投書の柳沢幸三郎の『ストライキを起した少女』は製糸少女工を描いたものであったが、いずれも理に落ちて、児童文学としての形象化が不充分であった。然しテーマ的に開拓の点では見逃せない。児童劇——少年を対象とした現実的なものと幼年を対象とした空想的なものとの、二つの傾向があった。前者には三好の『おまつり』島公靖の『そら豆の煮えるまで』槇本の『小さい同志』等、組織児童の為の相当優れた作品があり、前二者は公演されたがいずれもスケッチ風のもので、大衆性に、乏しいものであった。然しこの期に特に移動演芸隊用の斯る作品の現われた事は、意義ある事である。後者の作品には観るべきものが無かった。寓話——松山によって試みられたが、深く科学的に考究しなかった為に、浅薄な寓意に終った。解説的読物——数に於て第二位を占める。佐々木の『コンミュン記念日』猪野の『メーデーが来た』等、優れたものが多

かった。飜訳・童話・遊戯唄——直接、児童に与えられるものが乏しかった。

以上によって、我等の活動は前年度に比して、(1) 執筆者の増加、(2) 作品種目の豊富、(3) テーマの拡大と深化、とを挙げられるのであるが、全体的には尚お次の如き欠陥が指摘される。

一、プロレタリア・貧農の児童の生活、及びその運動の現実を、充分理解していなかった。

二、プロレタリア少年運動の生育が不充分であった為と、同盟の活動が主として文学の大衆化問題を中心に小説に集中された為、児童文学に充分の力を注ぎ得なかった。

三、児童大衆の闘争の中に生れつつある文化的要素と、殆んど結びつき得なかった。

四、作品の生産が、内容的にも形態的にも、充分組織的計画的でなかった。

我等はこれ等の諸欠点を苛酷に批判克服すると共に、一九三一年度の同盟の活動方針に従い、完全に支配階級の反動教化用具と化し去った彼等の反動的児童文学の洪水に抗して、速に、強力に、わが児童文学の質的完成、児童文学運動の全面的進出を計らなければならない。その為には我等は、大略左記の項目に集中しなければならぬ。

一、『少年戦旗』復活の促進。

二、児童大衆の闘争の中に生れつつある文化的要素との積極的結合。

三、プロレタリア児童文学理論の確立。

四、題材の広汎化と、豊富な形態(聴くもの、観るもの、等の)による適応的な表現。

理論的・批評的活動の報告

第二回大会につづく一九三〇年度理論的・批評的活動の最良の特徴は、この活動の全体にわたる具体化である。このことを三つのことが証拠だてる。その第一は各種研究会の確立である。

第二回大会以前の理論的・批評的活動は、一般に文学全般に関して展開され、文学の各個の種類に応じて展開されなかったため、活動の成果は一般的抽象的なものとして止まっていたが、第二回大会以後は、小説、戯曲、詩、評論等の各種研究会がつくられ、理論的・批評的活動が各部門のなかで深められた。研究会を通して我々は多くの原則を実例によって発展させると共に、小説、戯曲等の作者を批評の仕事に引き入れ『評論は評論家によって、小説、戯曲等は作家によって』という前年度までの欠陥からぬけ出ることに成功した。これは研究会活動の最大の成果である。

しかし活動が具体化したために提出される問題の量は著しく増大し、その質は深まり複雑化した。この量の増大と質の複雑化深化とに我々は不十分にしか応じられなかった。

すなわち、理論的・批評的活動の全般的具体化に応じて各種研究会活動を起したことにおいて我々は一歩前進したが、この研究会の職能を十分発揮させることに於ては十分の成功を見なかった。各種研究会の職能を伸ばして行くことは今後の問題として横わっている。

第二のものは作品批評の進歩である。ここでは作品の内容がその題材の歴史的意義と対照され――即ち主題として検出され――この主題を作者がいかに形象化したかが検討され、それを通してプロレタリア・リアリズムの問題が具体的に発展させられた。この点で我々は、部分的には、過去のどの到達点よりも高く到達した。しかしこの到達点を一般化して、全体的到達となし得なかったし、そうするための努力もなされなかった。そのため、その後引き続き現れた問題のあるもの（プロレタリア・英雄主義の問題等）では理論的逆戻りの現象さえ出て来ている。

第三は、理論的・批評的活動の、国際的成果の取入れである。このことは従来とも叫ばれて来たが実行はこの年度にはいって初めてやられた。ソヴェート同盟、ドイツ、アメリカ等の成果が次々に発表され、そこからして我々は、プロレタリア・リアリズムの如き中心問題が国際的規模で問題とされていることを知り、この種の問題を諸外国の同志が如何に発展させているかを知り得た。しかしそれは、我々の計画的努力の結果であったよりもヨリ多く偶然の結果であった。国際的問題に我々が参加するために国際的問題を紹介し、日本における問題を解決するために国際的成果を取入れるというふうに、自主的にやられなかったため、第一には国際的成果を我々自身の成果として生かし得ず、第二には直ちに参加すべき国際的問題を放任しておくという結果が生じた。『ナップ』十一月号に発表されたイレシの『ハリコフプレナムを前にしての檄』が何ら問題とならなかった如きその一例である。プロレタリア文学の国際性に関する認識が一般に低く、『ナップ』発刊の辞の中にすら誤り（日本プロレタリア芸術をプロレタリア芸術の日本における部分として見ないという誤り）が含まれていた。全体としては我々は、この方面の国際的成果を取入れるというよりも、単に紹介したに止まっていたのである。

右の点で我々は欠陥を伴いながらも成功したが、次の諸点ではかなりの不成功に終った。

第一に我々は、理論的・批評的活動を全労働者運動との結びつきにおいて発展させていることに失敗した。国際的労働組合はこの年度において、文化の問題を極めて重要視して取上げた（それは『インターナショナル』等に発表された）が、我々は、それに殆ど関心を向けなかった。また我々は、少年運動組織方針の重大な変更（『インタナショナル』に発表されたもの『戦旗』に発表された第二回スロートの報告等）を児童文学の不振の打開とを結びつけて考えなかった。また通信員運動と文学との結びつきを口で重んじながら、通信員運動の日本における現状をも、この問

題について手近に現れた報告類（『ナップ』十一月号の秋田の報告等）をも放任していた。また同盟の活動の範囲内でも、作品生産組織化の問題、通信班の成果の批判等を放任していた。ここからして、文学活動における理論的・批評的指導の相対的弱まりが生じて来た。個々の論文や批評が著しく政論的色彩を欠いて来て、一つ一つ切りはなした場合には相当有意義なものも、その有用な点を全文学活動のよき手引きとして生かし得なかった。このことは理論を実践から切りはなして机の上で体系づけようとする危険に引きつづくものである。この第一の点で我々は失敗したというよりもむしろ誤りを犯していたと言えるであろう。

第二に我々は、理論的・批評的活動を企業内労働者および勤労農民を基礎として大衆的に起すことに成功しなかった。作品批評について広汎な読者による大衆的批評会合を持つことを計画せず（之はドイツに於ても行われている）プロットと共同に戯曲研究会をつくった以外には他同盟との協働を起さず、講演旅行その他を通じて理論的・批評的活動の種子を大衆的基礎の中に植えつけることを怠った。

我々は、勤労大衆の文学作品に対する批評の向上のために、努力しなかったことからも、我々自身の理論的・批評的活動を高め得なかったのである。この二つのことは結びついている。一二の人は読者側の作品批評を個人的に調査しているが、それは主として彼自己のためにやられてい、また発表されてもいない。

第三に我々は、我々がしばしば方法論上の誤謬をくり返して来たことを認めなければならない。芸術の内容と形式とについて誤謬が強く残っており、そこからして主題（テーマ）と題材、（これは形式の部分である）とを取違えたり、作品の成功、失敗を作家のイデオロギーの進歩・退化と見たり、プロレタリア・レアリズム、プロレタリア・ヘロイズムの問題でレアリズム一般、ヘロイズム一般から出発したり、形式を形式のみに即して探究したり、形式上の努力の経験から直ちに何らか制作上の一般的結論を引き出そうと試みたり等の誤謬がくり返されて来た。なかでも主題と題材とのハキ違いが最も大きかった。これらの欠点は、我々の中にある無理論性を暴露する一方、理論的・批評的活動における機械論を暴露している。それは我々が現象を取扱う際、既に与えられている理論芸術学の諸成果に結びつけることを忘れていたことにも現れている。この点で我々は、我々の活動とプロレタリア科学研究所芸術部の活動とを結びつけることをも怠っていた。しかも一般にかかる方法論上の誤りに対する戦いが戦われなかった。従って同盟全体の理論的・批評的向上が非常に妨げられていた。

第四に我々は、文化反動に対する理論的闘争、すなわちブルジョア文学理論に対する闘争、社会民主々義文学理論に対する闘争を組織的にやらなかった。また小ブルジョア作家および同伴者作家に対する理論的指導と激励とを怠っていた。この両者は全く結びついている。ブルジョア的お

よび社会民主々義的理論に対して徹底的に戦うことなしには、小ブルジョア作家、同伴者作家を激励し指導することは出来ない。このことの理解と実行とが極めて不充分であった。

以上が一九三〇年度の文学に於ける理論的・批評的活動の概観である。ここからして我々は

一、文学における理論的・批評的活動を文化反動に対する労働者農民の闘争と結びつけて進めねばならぬ。

二、企業内労働者、勤労農民のなかに文学の理論的・批評的活動を大衆的に喚起して行くことによってこれらのことを実行しなければならぬ。

三、我々自身の持っている方法論上の誤謬を訂正しつつ、即ち無理論主義、観念論、機械論と戦いつつ国際的・国内的に与えられる具体的問題の解決に、一せいに進まねばならぬ。

四、これを基礎として、ブルジョア的および社会民主々義的文学理論に対する戦いと小ブルジョア作家、同伴者作家に対する指導激励を急速に深めねばならぬ。

一九三〇年度の我々の活動により、また労働者運動の急速な成長により、我々が活動を新しく組織して行く条件は十分に与えられているのである。

（一九三一年五月）

プロレタリア芸術運動の組織問題
——工場農村を基礎としてその再組織の必要——

蔵原惟人

一

「ナップ」二月号には、昨年十一月ハリコフ市に開かれた国際革命文学局第二回拡大総会の「日本に於けるプロレタリア文学運動についての同志松山の報告に対する決議」が掲載された。これによって、日本プロレタリア作家同盟は、大体において、これまでの運動方針の正しかったことが国際的に承認されたわけだ。同じ程度に、我々は日本プロレタリア劇場同盟、日本プロレタリア美術家同盟の成果に就て語ることができるだろうと思う。これは日本のプロレタリア芸術運動にとって、一つの大きな名誉であるに相違ない。

しかし、ここでも最も注意すべきは、これによって決し

、有頂天になってはならないということである。決議にも示されているように、我々は常に前進する必要がある。日本の芸術運動は、この際、特に最も厳格な、大衆的な自己批判によって、更に新しい時代に踏み入らなければならない。しかも日本のこの運動には、この決議がその現存を前提としている組織上の問題に於ける重大な欠陥が存在していることを、我々は今に至って見ることが出来るのである。この欠陥を自己批判し、克服することなしには、日本の芸術運動はこの決議を真実に実践に移すことも、また前進することも出来ない。

重大な欠陥とは何か？　一言で言えば、我が国の芸術運動が、これまで、真に大衆的なプロレタリア的な基礎を有しなかったということである。ナップ所属の作家同盟なり、劇場同盟なり、美術家同盟なり、また映画同盟、音楽家同盟なりが、企業内の労働者にその組織的基礎を持っていなかったことである。

ナップ所属の各同盟は、昨年の春の大会に於て一斉に「共産主義芸術の確立」、「芸術運動のボルセヴィキー化」の新しい方針を採用した。それは全く正しかった。何となれば、我が国の共産主義運動の、従って又、それに従属する芸術運動の基本的任務は、ブルジョアジーとプロレタリアートとの決定的戦闘を前にして、労働者階級の多数をその影響下に獲得することであり、そして、それは、唯労働者階級の中に於ける、ブルジョアジーの手先きである社会ファシスト（芸術運動にあってはその芸術）との無慈悲的な闘争によってのみ初めて可能であるからである。しかし方針の問題は常に組織の問題である。我々がもし芸術運動の方向のみをボルセヴィキー化し、共産主義化して、組織を問題としないならば、我々の影響は結局唯イデオロギー的影響にのみ止まるであろう。だが、我々にとってイデオロギー的影響は、それが組織的影響となって初めてその実践的意義を獲得するのである。この意味に於いて、昨年の春、芸術運動のボルセヴィキー化の方針が採用されながら、それが直ちに組織の問題とならなかったところに、全体としては正しいところの方針の一面性、中途半端性があったと言わなければならない。

このことは、次第にわが国の芸術運動に参加しているものの意識に上ってきて、最近は「ナップ」などでも組織についての論文が段々見えるようになってきたようである。殊に、芸術活動そのものが直ちに組織の問題になってくる劇場同盟に於いて、それが活発に論議されるようになったのは、当然ではあるが、喜ぶべき現象である。しかし、その一つ一つを取ってみると、まずいずれもプロレタリア芸術運動の組織問題を正しく解決していないのみか、中には全く救うべからざる混乱に陥入っているものすらあるように思われる。

では、プロレタリア芸術運動のボルセヴィキー化の方針は組織的には如何にして実現されるか？　組織のボルセヴ

ィキー化によってか？　否、正にその正反対である。方針のボルセヴィキー化は、組織の徹底したデモクラシー化によって裏づけられねばならない。

所が、ナップ最近の事実を見ると、芸術運動のボルセヴィキー化ということを、芸術運動に於けるボルセヴィキー的指導という風に正しく理解せず、組織のボルセヴィキー化と誤認しているように思われる。しかも誤ったボルセヴィキー化を。極度の統制主義、必要以上の秘密主義、下からの意見を充分に反映させないこと、重要な問題を大衆的討議にかけないこと等はその重なる例である。極度の統制主義の例としては意見の対立、統制上の問題を、直ちに組織的手段（除名その他）によって解決しようとする傾向が挙げられる。これは大衆団体の組織原則を無視したもので、絶対に誤りである。組織をボルセヴィキー化し得るものは、唯共産党あるのみである。しかもその共産党においてすら、党内のデモクラシーは、党の政治的思想的発展の為に必須な条件であるとされている。まして、芸術団体において、内部に極度の中央集権主義、誤まった統制主義を実行することは、生々とした下からの大衆的自己批判を絞殺し、組織を腐敗させるのみでなく、元来、大衆的たるべき芸術団体を、イデオロギー的に完成された少数のセクト的組織に固定させる結果をもたらすものである。繰りかえして云う——指導のボルセヴィキー化は、組織の徹底したデモクラシー化によって裏づけられねばならない。

併し、ここで組織のデモクラシー化というのは、決してブルジョア的意味におけるデモクラシーではない。ブルジョア的意味に於ける平等ではない。それはプロレタリア的意味に於けるデモクラシーであって、ブルジョア的には寧ろ、不平等を意味する。というのは——

ナップ所属の各同盟は、その創立の当初、その構成メンバーを技術者として、かなりの専門的な芸術的技術と、かなりの高さのイデオロギー的確固性を要求した。これは所謂「左翼ファン」程度の学生・インテリゲンチャの流入からプロレタリア芸術運動を防衛するという相対的歴史的意義を持っていたのであるが、この原則は今日まで何等再検討されることなしに、自明なものとして持続されてきた。今日から顧り見るならば、芸術運動のこの「自明」の組織原則の中にこそ、明らかな、我々の誤謬があったのだということができる。ナップは今日の社会に於いて、あらゆる特権を有するインテリゲンチャと、それを有しない労働者とに対して、平等にこの原則を適用してきたということに於いて大いに誤まっていた。ナップはブルジョア的平等の見地に立っていたのだ。その結果、我が国の芸術運動のプロレタリア化は、ただ掛け声だけに終って、今日まで、殆んど何等組織的実果を示していないのである。のみならず、それがまるで「現段階」に於いては不可避であり、当然であるかの如くにさえ言われるようになったのである。併し、若しも、それが現実に労働者階級に組織的基礎を持

っていないとするならば、それはどんなに自己の内容を「ボルセヴィキー化」したところで、畢竟、街頭的小ブルジョア運動の限界を越えることは出来ないであろう。

ナップは、今この誤謬を厳密に批判し、清算して、広汎なプロレタリア・デモクラシーの組織原則を、芸術運動の中に確立し、企業内に於ける労働者を基礎として、それを再組織しなければならない。言い換えれば、インテリゲンチャに対しては今までと同様な基準を適用しつつ、労働者に対しては遙かにその要求を低下させることによって、広く芸術運動の門戸を労働大衆の前に開放することが必要である。この外見上の不平等こそが、労働者にとっての平等であり、そしてそれによってのみ、芸術団体の組織の労働者化が実現されるということを忘れてはならぬ。

だが、現実に於いて、労働者を芸術団体に組織するということは、果して可能であろうか？　それは実際運動の妨害になりはしないか？

話を具体的に進めよう。

二

我々は前に、日本の芸術運動が、企業の労働者に基礎を有しないと言った。併し、だからと言って、決してこの運動が企業内の活動に全然無経験であると言うのではない。ナップは雑誌「戦旗」がその統制下にある時「戦旗」読者会の形でかなりに広汎な組織を有していたし、劇場同盟も亦ドラマ・リーグのような組織を持っていた。だが、それ等は、十分に運動全体に貢献することも、芸術運動に労働者の基礎を与えることにも成功しなかった。併し、とも角も、芸術運動にとっては一つの大きな、貴重な経験であった。我々は、今この経験に基づいて、それを正しく批判し、その欠陥の根拠を見究めることによって、新しい組織の基礎を確立しなければならない。

凡そ、企業内に於ける総ての文化組織は、これをプロレタリア文化団体自体の立場から見るならば、ブルジョア及び社会ファシスト的文化と闘争して、労働者の間に真実のプロレタリア文化を普及せしめると共に、労働者自身の中から文化領域に於ける働き手を獲得するという任務を有するものであるが、これを運動全体の見地から見るならば、プロレタリアートの基本的組織（党及び組合）の政治的および組織的影響を労働者の間に拡大し、その指導の下に労働者を動員するための補助機関でなければならない。このことをはっきり理解して置くことは、今後の問題を進めてゆく上に於いて極めて重要である。

プロフィンテルン第五回大会の組織問題に関するテーゼは次のように述べている。

「工場内の労働者大衆をよりよく結成するために、非合法的組合は、種々の合法的、半合法的、そしてまた公然と存在する補助組織、例えば国際赤色救援会グループ、スポー

ツ団、相互扶助組織、文化サークル、労働組合文書の配布グループ、一般教育のためのクラブの如きに頼らねばならぬ。」

また同大会に於けるアギット・プロップ（宣伝・煽動）部で採用されたテーゼについてのハーエックの論文は「革命的教化組織の任務の一つは、革命的労働組合と共同して、新組合員獲得のカンパニアを行い、経済闘争の準備と遂行に際し、それと絶えず協働することによって、革命的労働組合を質的に又量的に強化することである」とはっきり規定している。

このことを、ナップの工場内組織は、正当に理解し、遂行していなかった。のみならず、却って、所によっては、プロレタリアートの基本的組織と対立して、全然反動的役割を演じたという事実すらあるのである。例えば、或る「戦旗」の読者会は、その組織が破壊されると言う理由で、組合の同志を近づけなかった。又、多くの読者会は、労働者を芸術運動の埒内に定着せしめることによって、事実上、組合その他の組織の拡大を妨害した、等々。このことは勿論芸術団体の側からの弱点としてのみ見らるべきものではないが、その罪の一端は当然芸術団体にかかって来なければならぬ。

これからして、芸術団体、一般に、文化団体の組織を工場内にのばすことは、有害であって、何の益もないのであるという、これも亦間違った理論が、我々の同志の間に現れてきた。併し、これは、前の事実に機械的に反撥したものに過ぎないもので、困難な仕事を革命的言辞によって蔽おうとする一種の日和見主義である。同志ベラ・スッアンドはその論文「革命的労働組合運動の当面の組織問題」（「インタナショナル」一九三〇年十一月号参照）の中で次のように言っている。

「多くの国では、労働者階級は盛んにスポーツ生活及び文化生活を展開している。だが、このスポーツ及び文化組織は、通常、工場と何等組織的には結びついていず、その日常闘争に参加していない。併し、工場生活との結びつきがなければ、それ等の組織は必然に非政治的組織とならざるを得ない。労働者のスポーツ及び文化生活が、その日常闘争と緊密に結びつかねばならぬこと、これ等の組織が個々の工場の大衆組織に発展するならば、それは大衆の動員及び指導の為めの重要な運河としての問題となることは明らかである。」

「それにも拘らず、革命的労働組合の陣列内には、スポーツ及び文化組織を、工場の基礎の上に移すことに就て、大いなる反対が存在しているのが見られる。一方には、スポーツ及び文化活動の意義の過小評価が現れており、他方には、スポーツ及び文化活動を工場の基礎の上に置くことの困難が過大視されている。根本に於ては、これ等の反対は、工場活動一般の嫌悪から生じている。それは『労働組合活動の重心を工場に』と言う要求に対する、実践に於ける日

和見主義を表すものである。」

これによってみても、芸術団体の組織的基礎を工場に置くことは、誤まっていないばかりでなく、反対に、それを否定する者が誤まっていることがわかる。で、問題は、組織をのばしたこと、そのことにあるのではなく、この正しい方針を実現する所の組織方針と、その運用とにあるのである。では我々の場合、その誤謬はいずれにあったのであろうか？　私は、それは就中次の二点にあると考える。

一、工場内の組織を「戦旗」読者会、ドラマ・リーグ等の形で持つことの誤謬。一般に、文化団体、特殊的には芸術団体は、左翼労働組合以上に大衆的なものでなければならない。（ここで大衆的と言うのは、勿論、必ずしも量的な意味ではなくて、政治的意味で用いているのである）言い換えればそこには左翼労働組合の支持者のみではなく、広く未組織及び右翼・中間派の労働者が組織されなければならない。でなければ、それは補助機関としての任務を、果し得ないのである。ところが「戦旗」読者会にしろ、左翼劇場のドラマ・リーグにしろ、それは一定の政治的・イデオロギー的高さを要求するものである。その結果、組合の組織の直接的対象と、「戦旗」読者会その他の組織の対象とがかち合って客観的には目標分子の奪い合いのような結果をさえもたらすに至った。そのために、読者会その他は組合の補助機関とならなかったばかりでなく、却ってその妨害となった場合さえ少くなかったのである。

二、「戦旗」読者会の中に、非政治主義或は文化主義とも名づけらるべき、日和見主義的傾向があったこと。幾多の読者会は左翼組合その他の拡大の為めに積極的に努力しなかったばかりでなく、前に述べたように、それとの連絡をつけることすら恐れていた。左翼組合の日常闘争に参加し、ストライキを積極的に支持することもなされなかった。そして「戦旗」のグループだけが小さくセクト的に固まる傾向があった。このことは、曽て「戦旗」が三万の読者を有し、その中には、労働者の読者も可成りの部分を占めていたにも拘らず、それが殆んど、全く左翼組合の組織の拡大ということに反映しなかった事実にも現れている。これは、勿論「戦旗」或はナップにその全責任を負わすべき性質の問題ではない。併し、ナップはナップとして、それに努力しなかった所に、その日和見主義的誤謬があったのである。

では、これ等の経験から我々が引き出さなければならない実際的結論は何であるか？　之れは第一に、企業内に於ける芸術運動組織を「戦旗」読者会或はドラマ・リーグというような限定されたものではなくて、もっと広汎な大衆的組織にすること、第二に、我が芸術運動内部に存在する日和見主義であるところの非政治主義・文化主義と徹底的に闘争すること、これである。

三

我々は更に具体的に進もう。

では以上のような組織方針に基づいて、我々は現実にどんな形態で企業の中に芸術運動の組織を持つべきであるか?

ナップ所属の各同盟は、先ず、青年同盟、左翼労働組合、その他との密接な連絡の下に(勿論それが不可能な場合には独立して)企業の中に労働者自身の文学グループ、演劇グループ、美術グループ、映画グループ、音楽グループ(勿論この名称は必要に応じて変化する)を組織すべきである。組織は極めて自由且つ大衆的なものでなければならぬ。つまりそこには前にも述べたように、左翼の労働者のみでなく、却って未組織及び社会民主主義の影響下にある労働者を主として、また、一定の技術的基準を設けることなく、凡そ文学、演劇、美術、映画、音楽等に多少とも関心を持つ、すべての労働者が組織されなければならない。即ち――

文学グループは――左翼の新聞雑誌の通信員、「戦旗」や、「ナップ」や「文戦」の愛読者、小説、戯曲、詩の作者、短篇や俳句の愛好者から、菊池寛や講談倶楽部の愛読者に到る総ての労働者を。

演劇グループは――左翼演劇の支持者、素人芝居の熱心家や、様々の「芸人」から歌舞伎や新派の所謂芝居好きの労働者に到る総てを。

美術グループは――プロレタリア及びブルジョア美術を問わず、総ての美術愛好者及び多少とも「絵心ある」総ての労働者を。

映画グループは――プロレタリア映画、ソヴェート映画の支持者から、栗島すみ子や林長二郎のファンに到る総てを。(普通の写真の愛好者は別に組織すべきであろう)

音楽グループは――ヴァイオリンやハーモニカや尺八等の技術者は勿論、あらゆる流行歌のファンを――夫々組織すべきである。

勿論、これは、必要又可能な限りに於いて組織するのであって、どの工場にも、また、どういう情勢に於いても、公式的機械的にこの総てを作らなければならないというようなものではない。例えば、文学の盛んな工場では文学グループを、映画ファンの多い所では映画グループを、また例えば同じ音楽グループでも、ハーモニカの流行している所では、ハーモニカ・バンドを、流行歌のファンの多い所(例えば紡績工場)では合唱団を主として作るという風にすべきである。また各部門を綜合した芸術グループとして作ることもゆるされる。この際、このグループのすべての成員に、直ちに「戦旗」や「ナップ」の購読を要求したり、これ等のグループを直ちにナップ所属の各同盟の支部とするようなことは勿論有害であり、従って誤謬である。

しかし、これ等のグループの中の多少とも芸術的技術をもっているものを広く各同盟に組織し、それを通じて、これ等のグループを指導してゆくことは必要である。

では、我々の見地からこれ等企業内に於けるグループの持つ芸術的及び政治的任務は何であるか？

先ず第一の任務は、ブルジョア及び社会ファシスト的芸術の影響下にある労働者を、プロレタリア芸術の影響下に獲得することである。この任務は極めて重要である。特に、最近ブルジョアジー及びファシストが、その芸術政策によって、労働者を獲得しようとしている今日、それに対抗するに、真のプロレタリア芸術を以てすることは、芸術運動に従事する者の義務である。だが、この任務は、一挙にして成功するものではない。労働者の中には、まだ封建的ブルジョア的芸術の影響が極めて強い。それを克服するには、注意深い、執拗な闘争が必要である。が、それと同時に、労働者は必ずプロレタリア芸術を理解するものであると言う確信を持って仕事をしなければならない。

例えば、文学グループでは、講談倶楽部や、ブルジョア文学や、「文戦」やの読者に対しては、茶話会その他によって、次第にこれ等の文学の階級性を説明し、ブルジョア芸術を暴露し、社会民主主義文学の反動性を明らかにして、次第に「戦旗」や「ナップ」、内外のプロレタリア作家の作品をすすめてゆく。この場合、初歩的な小説の読み方や、その内容を説明するために、作家同盟は出来るだけ、人を派すことが必要である。また、映画グループでは、同様の方法で茶話会などを開いて、初めは映画女優や映画俳優や、また撮影やの話からブルジョア映画、所謂イデオロギー映画の製作及び内容を曝露し、次第に我々自身の映画を持たなければならないという所まで、話を進めてゆく。また、ソヴェート映画が来た場合には、それの総見を行い、後で茶話会を開いて、その内容を説明したり、感想を話しあったりする。また、プロキノ製作の映画を見る会を開くこと等も必要である等々。

第二の任務は、何らかの芸術的技術をもっている労働者に対する技術的、イデオロギー的指導と言うことである。この為には、作品の批判会等を開き、そこに出来るだけナップ（作家同盟、美術家同盟等々）からも出席して指導し、優秀なものをどしどし「戦旗」や「ナップ」その他労働者の出版物に掲載し、又、プロレタリア美術展等に展覧する。

また、このグループを通じて、組合機関紙、工場新聞、「戦旗」その他への通信員運動を広汎に捲き起すことも出来る。通信員運動は勿論、ナップのみが独力でやる仕事ではないが、その技術的指導やその発表の取り次ぎ等に、作家同盟が積極的に参加することは必要である。尚通信は文学による通信ばかりでなくて、絵画通信、写真通信等を組織すべきである。また、壁新聞や、ビラの形態で、これ等の作品を工場内で発表することも考えられねばならぬ。

最後に、これ等のグループを通じて労働者出身の演劇団、音楽団を組織する必要がある。一月号の「ナップ」で、同志佐藤吉之助は、プロットが「職場を中心とする労働者農民劇団の結成へ！」のスローガンを掲げたことは「現在の状態から推察して」誤りであると言っているが、前に引用した、ペラ・スッアントの論文によっても明らかであるように、この見解自体が大きな誤りである。プロットの誤謬は、こういうスローガンを掲げたことにあるのではなくして、反対に、これを実践に移さなかったということにあるのである。殊に、最近、ブルジョア新聞で見ると、名古屋かどこかの労働者のハーモニカ・バンドが、ラヂオに出演するというような記事があったが、これ等はブルジョアジーの芸術政策の一つの表れであって、これに対して我々は、我々自身のハーモニカ・バンドを、我々自身の合唱隊を、我々自身の演芸団をもって対抗しなければならぬ。

今まで、ナップは企業内に於ける芸術活動を唯「持ち込み」としてのみ理解してきた。これは芸術運動が、全然企業の外にあった事を示すものであるが、今日でも、最近「ナップ」等に出た、各同盟の方針に関する論文を見ると、それから一歩も出ていないようである。移動劇場も、移動音楽隊も、移動展覧会も重要である。が、もっとも重要なのは、労働者自身の組織を、企業内に作ることである。これができれば「持ち込み」の問題は自然に解決される。のみならず、プロレタリアの色々の催しや、争議の時などに、労働者自身の合唱隊や演芸団が出ることは、技術は下手でも、外部からこれをよぶよりも、常により効果的であることを忘れてはならぬ。更に以上のことが成功的に行われれば、昨年来、主として作家同盟内で論議されてきた「作家と生活」の問題も自ら解決されるであろう。

またプロレタリア芸術そのものに確固たる労働者的基礎を与え、労働者自身の中から作家、演芸家、画家、音楽家、映画人及び評論家を作り出すと言うことは、プロレタリア芸術運動の主要な任務の一つであるが、それは唯上に述べたようにナップがその組織的基礎を工場にもってのみ初めて可能である。

四

前章に於いて、我々は主として、企業内に於ける芸術グループの芸術的任務に就て述べた。併し、前にもしばしば述べられているように、企業内に於ける芸術組織は、それが芸術的組織であると同時に、常に政治的組織である。従って、その芸術的任務は、その政治的任務と切り離して考えることは出来ない。企業内に於ける我々の芸術活動は、全体としての共産主義運動の政治的任務と結びついてこそ、始めてその全き意義を獲得するのである。だから、我々は芸術運動内部に於ける右翼日和見主義であるところ

の、非政治主義・文化主義のすべての現れと闘争し、芸術的組織が小さく、セクト的に固まることと、徹底的に闘わなければならない。

芸術組織のあらゆる会合を利用して、ブルジョア制度を曝露し、社会民主主義の反動を説明し、左翼労働組合及び共産党を宣伝することは勿論、芸術団体を企業内の日常闘争、各種カンパニヤに動員し、組合文書の配布を助け、労働者の日常的不平不満を激成して、ストライキの準備と遂行とに積極的に参加すること等は、企業内に於ける芸術組織の日常の仕事とならなければならない。又これ等の活動を通じて、自己のメンバーの優秀な一部、或は殆んど全部を救援会、反帝同盟、及び特に左翼労働組合（全協）に組織してゆくことは、これ等の芸術組織を指導してゆく者の重要な義務である。殊に、未組織或は社会民主主義の影響下にある工場にあってはそこに於ける芸術組織は、そこに左翼労働組合及び革命的反対派の組織を作る手がかりになるものである。勿論、これ等の仕事は、極めて慎重に行われなければならない。でなければ、却って芸術団体を破壊してしまう結果になるだろう。併し、だからと言って、これ等の活動を拒否することは、許すべからざる日和見主義である。

これ等の活動を最も効果的に行う為に、企業内に於ける芸術グループの指導者は、常に左翼労働組合、及び青年同盟の組織と密接な関係を結び、常にその指導の下に行動しなければならない。かくしてこそ、初めて、芸術的任務と政治的任務とを有機的に結合することができるのである。

今まで我々は我々自身の手によって作られる芸術グループのみについて書いた。だが、既に、企業家或は社会民主主義者の芸術組織のある場合は、どうすべきであるか？　その場合には、我々はその組織の中に入って行く必要がある。そこに入って行って、その芸術組織の中に、革命的反対派を形成して、内部から、それ等の組織の持つ意義を曝露すべきである。そして、企業家や社会ファシストが我々を除名しようとした場合には、文化団体分裂政策反対のスローガンを掲げて闘争し、その成員を漸次我々の影響下に獲得すべきである。反動的芸術団体の内部に於ける日常的活動の方向は、ほぼ独立の場合に準ずるから、ここでは特別に述べない。

以上、我々の述べたことの誤りないことを裏書きするために、もう一つ、同志ハーエックの論文（「インタナショナル」一九三一年一月号参照）から引用することを許して欲しい。

「革命的教化活動の諸形態が何よりも先ず生活に適応せねばならぬのは自明のことである。この条件を満した時にのみ広汎な労働者大衆の関心をこの活動の方へ転ぜしめ、彼等をこの活動に直接に参加させることが出来るのである。夜の討論会の開催、文芸的サークルの組織、反宗教講演の催し、労働者自身の書き又演ずる革命的演劇の上演、革命

的映画を上映している活動写真館の総見、こう言う催しを独自に組織すること、これ等が大衆的教化活動の二三の形態である。労働者やプロレタリア演劇団員が、資本主義諸国の労働者の生活や、ソヴェート労働者の生活や、ソヴェート同盟の社会主義建設の領域から取材して自ら脚本を書き下して上演している所のドイツ及びチェッコ・スロヴァキアのプロレタリア演劇連盟の経験、五カ年計画の一般化、大衆的デモを同時に組織する所の「文化デー」の計画は、大衆を革命的階級闘争の精神に於いて、文化的政治的に教育する為の手段と方法とが如何に豊富であり多様であるかを示している」

ここには「芸術運動を企業内の労働者に移すことは、実際運動の妨害になる」と言うような見解を許す一点の余地もない。我々が常に念頭においていなければならないことは、我が国には五百万の工業プロレタリアートを有しながら、その中の僅か三十五万が組織されているに過ぎず、それも、その大部分は改良主義的組合に組織されているということである。我々の開拓すべき処女地は広大であり、無限である。

国際青年同盟は今まで幾度か労働者クラブの創設の決議を採用し、また、プロフィンテルン第五回大会の煽動宣伝部協議会は、統一戦線クラブの組織を決定したと言うことである。これは労働者の文化的要求を満たし、同時に、左翼末組織及び右翼中間派の労働者をそれによって結合して「下からの統一戦線」を実現する所の労働者クラブである。で、若もこう言うものが日本に作られるようになれば（事実作られなければならないのであるが）この方面にもナップ芸術家及び企業内芸術家グループの積極的活動が要求されるわけである。

更に我々はここでは専ら企業内の組織に就て言ったが、ほぼ同様な組織が農村に於いて、特に農業労働者及び貧農・小作人の間に持たれなければならない。

ここで予想される危険を、警戒しておく必要がある。それは、かくの如き組織の大衆化は、決して芸術団体のボルセヴィキー的指導を少しもゆるめるものでないばかりでなく、却ってそれを強めるものであると言うことである。ナップ内部に於ける一切の日和見主義との闘争、活動方針と組織問題に於けるマルクス・レーニン的方向の歪曲――一般活動方針に於ける非政治主義と極左政治主義、評論に於ける観念主義と機械主義、作品に於ける自然主義的心理主義と、それへの機械的反撥である卑俗化的傾向、組織方針に於ける無統制主義と極度の統制主義等々と、並びにそれ等に対する妥協主義との容赦なき闘争は更に一層強められねばならぬ。そして、雑誌「ナップ」はこの芸術運動のボルセヴィキー的指導の機関誌たることを実践に於いて示す必要がある。その為には、「ナップ」編輯部はこれ等に対して正しい、明確な判断を下し得る人々、つまり、芸術運動に於けるボルセヴィキー的指導を果し得る人々によって

構成されていなければならない。
又芸術運動の組織の基礎を企業内の労働者に置くと言うことは、決して今までやっていた劇場及び映画同盟の公演、美術大展覧会、演奏会、プロレタリア演芸団、移動展覧会、移動音楽隊、移動映写隊及び作家の創作活動等の意義を少しも低めるものではない。否、却ってそれらはもっと強められなければならない。が、これ等の任務については多く語られているから、ここでは述べない。唯新しい方針に従って、企業内に於ける芸術グループとの密接な連絡が必要とされる。と同時に、各同盟はその同盟員の政治的・イデオロギー的教育にもっと力を用いなければならない。広汎なインテリゲンチャ的同伴者を我々の陣営に獲得して、それを親切に指導して共産主義的方向に向わしめるのもナップの重要な任務の一つである。

五

最後にナップそのものの組織について一言したい。
今日まで我が国のプロレタリア文化運動は芸術を中心に発達してきた。併し、文化運動には他の極めて重要な部門がある。主なるだけでも、反宗教、スポーツ、ラジオ、教育、科学、エスペラント等を挙げることが出来る。そして、その中でも、既にスポーツ、教育、科学、エスペラント及び反宗教は不十分ながら既にその組織をもっている。で、プロレタリア文化運動が、真にこの国の共産主義運動の一翼として活動し得る為には、是非共それ等を統一する全国的中心が作られなければならない。同志ディアメントはその論文「大衆組織化の為としての煽動宣伝」(「インタナショナル」一九三〇年十一月号参照)の中でその必要に就て左のように述べている。
「多くの国の企業は、禁止命令だけでは駄目だということを知り抜いている。だから彼等は労働者の「文化的要求」を満す為の特別の組織を作っている。企業家の手で創立された「教化施設」の網は日増しに増して行く。今日では各企業家組織、各カルテル、各トラストは労働者の間の煽動の為に一定の金額を見積っている。」
「これには社会ファシスト共が多大の助力を与えている。改良主義者の指導下にある労働者文化及び施設は、本来企業家の煽動宣伝部である。それ等は労働組合の改良主義的指導者と同様に、ストライキ破りの役割を果している。革命的組合と労働組合反対派は、在来、これ等の問題に余り注意しなかった。」
「経験の示す如く、吾々の組織は、在来、吾々の日常活動の為に、又これを吾々の革命的煽動宣伝の展開領域に変ずる為に、文化施設を余り利用しなかった。勿論、数個の国例えばドイツ、アメリカ、オーストリー、チェッコ・スロヴァキア、そしてまた日本に於いてさえ、国際赤色労働組合第四回大会少し前に比して、この方向へと可成り転換が

行われている。すべてこれらの国に於ては、労働者教育施設に於ける革命的反対派が著しく成長している。それは、その力を集中して、労働組合内の革命的分子と結合している。これ等すべてものは、吾々の大衆煽動方法を特に豊富にする。吾々の大衆煽動は、労働者、スポーツ団体、文学団体、新聞雑誌団体、劇場団体、ラヂオ団体、その他多くの団体の助力を受ける。

すべてこれら多くの組織を、大規模に利用すべき任務が、革命的労働組合及び労働組合反対派に課せられている。教化組織に加入している労働者グループは、すべて高い政治的発展の段階に達しているということを記憶していなければならぬ。彼等は政治的な革命的組合幹部の或る程度の候補者であり、或は屢々そうである。今日までの状態のように、彼等に注意せずに放っておくことは、一つの重大なる政治的誤謬である。即ちそれは、革命的煽動宣伝の為に一定の候補者を利用せず、彼等を社会ファシズムの影響下に放っておくことにあるのだ。だから、二三の国では、すでに遂行されている所のプロレタリア教化同盟或は文化機関の中心の創設に関する国際赤色労働執行局の方針は、他のすべての国でも実践に移されねばならぬ」

ナップは現存の他のプロレタリア文化団体と協力し、現在日本に存在していない反宗教同盟、ラヂオ愛好者の会等の創立を助けつつ、かくの如き中心の創設に努力すべきである。

かくの如き文化団体の中心は、日本プロレタリア文化連盟と言うような形でもたれるであろう。そして、このような組織の出来た場合には、ナップは自らを解体し、各同盟が独立にその連盟に参加すべきである。新しい連盟の指導部は正式に（正式にと言うことは必ずしも公然にということを意味しない）組合の指導部とその代表者を交換して、その政治的指導を仰ぐ。と同時に、この連盟は連盟加盟の各団体の独自的活動を妨げてはならぬ。各団体の内、国際組織のあるもの（文学、演劇、美術、スポーツ、反宗教、ラヂオ、教育、エスペラント等）は、その国際組織に加盟する必要がある。これまでの日本の運動には、この国際的関心が欠けていたように見える。何等かの理由をつけて、国際的組織への参加を拒否することは、完全な日和見主義である。

プロレタリア文化連盟の重要な任務は、反動文化（国家企業の教化制度による）との闘争、労働者の政治的経済的啓蒙、労働者の日常の文化的要求の充足等を全体的に統一し、指導してその活動を左翼労働組合の活動と結びつけることであるが、それは更に次のような具体的行動綱領を掲げて闘争する。

一、新聞、書籍、脚本、映画、ラヂオの検閲に対する闘争。

二、ブルジョア的ラヂオ独占反対、労働者農民の文化施設及び設備への課税反対。

三、学校の軍国主義化及び軍事教育反対、学内諸団体の自由。
四、父兄委員会の創立と、労働者・農民の児童に対する授業料全廃及び学用品の無料給与。
五、学校内に於ける宗教教育との闘争。
六、宗教団体の裏切り的役割の曝露と、プロレタリア自由思想家同盟（反宗教同盟）の支持。
七、植民地、属領に於ける帝国主義の文化的支配反対、民族文化の自由。
プロレタリ文化連盟は、以上のような闘争を実行するために、現在の「戦旗」のような大衆煽動宣伝の雑誌を持つべきである。

今やナップ所属の各同盟の大会は目睫の間に迫っている。昨年の大会は「共産主義芸術の確立」の方針を樹立することによって、芸術運動のレーニン的方向への第一歩を踏み出した。本年の大会は之等の方針の一カ年間に於ける総決算を行い、その間に企業内で行われた活動の経験に基づく大衆的自己批判（組合及び一般労働者をも含めて）の上に、工場・農村を基礎としての各同盟の再組織を断行することによって、更に第二の転回を準備しなければならぬ。（一九三一、三、一二）

× × ×

右の論文を書いてから既に二カ月以上が経過した。その間に「一九三一年度に於けるナップの方針書」が発表され、多くの同盟はその大会を済ませた。従ってこの論文は時間的には既に旧くなったと云わなければならない。しかし「方針書」は我々が此処で問題としているナップの工場内の組織――それを私は最も基本的な問題と考えているのであるが――について何も書いていないし、また各同盟の大会も必ずしも正当にこの問題を解決しなかったように思われる。で我々が此処で提起している問題は、若しもそれが間違っていないとするならば、依然としてその積極性を失っていない筈である。私は今此処でこれ等の問題について「方針書」を中心として誌上で討論が開始されることが最もよいと思う。私の論文も亦その討論の一部となり得れば幸である。

この際、私は今までナップ内に存在していた左のような誤った見解を克服することが、我々の運動をより高い段階に進展させる為に不可欠な条件であると考える。

一、ナップは工場内に自己の組織を持つべきでないと云う見解。

この見解の支持者は、工場内に文化的組織を作るのは党若しくは組合の任務であって、ナップの任務ではない、と云う「左翼」的な論拠の上に立っている。これ等の同志達の見解によれば工場内の文化組織――此処では芸術グループ――は党若しくは組合の手で作られ、ナップ等に組織的

に結びつけらるべきではなくて、これ等の工場内の組織を結びつける他の文化的中央部が作られなければならない。ナップは唯これ等の活動に「積極的」に参加し得るだけである、と云うのである。しかしよく考えて見るとこの「左翼」的な言辞の裏にはナップを現在のままの街頭的な非労働者的な組織として残して置こう、という日和見主義が隠されているのを発見するに困難ではない。

しかしそれは間違いであって、ナップ自身が工場内に自己の組織を持ち、ナップ自身が自己を発展させることによって文化的中央部の部分を構成しなければならないのである。此処で日本の「特殊事情」などは問題にならない。凡そ革命的なプロレタリアートの組織で工場内にその組織的基礎をもって悪いというような組織があるだろうか？ 一つもない。悪いどころではなくて持たなければならないのである。ナップは革命的なプロレタリアの組織であるか？ 少くともそう云うものたらんとしている。此処から引き出される結論は云うまでもないと思う。

このことは工場内の文化的グループが党や組合の指導の下に作られ、その指導の下に活動するということは少しも矛盾しない。しかしそれはあくまでも指導の問題で、全体としての組織の問題ではない。否、むしろそれが合法的な文化団体に組織的に属しているからこそ、合法舞台として利用され得るのである。

また芸術団体が工場内に組織をもつことは、労働者自身の中から様々な芸術家を作り出す為にも不可欠な条件である。

・

ではこの自明なことに対してなぜ反対があるのであるか？ それには、プロレタリア大衆組織に対する誤った見解と共にこの論文の中に引用されているような、工場に於ける文化活動の意義の過小評価、文化活動を工場の基礎に置くことの困難の過大視、そして根本的には工場生活一般の嫌悪、大衆に対する恐怖、等が指摘される。

プロフィンテルン第五回大会アヂ・プロ部協議会のテーゼ、「プロレタリア文化・教育組織の役割と任務」はこの問題について次のように云っている。

「文化・教育活動の為のプロレタリア大衆組織は、……工場がその活動の為の主たる基礎であらねばならぬ。それ故にプロレタリア文化・教育組織にとっては、すべての工場内に自己のグループ、活動団及び特別の世話役団を、その援助によって活動するために、創設する事が極めて重要である。全文化活動は工場内で革命的赤色工場委員会の活動と結合し、出来るだけ多くの労働者をその中に引き入れるべきである」

問題は極めて明瞭であると思われる。

二、ナップは政治闘争をなすべきものではないという見解。

この見解は勿論、こう云った形で提出されているのではない。しかし一部の同志達の見解を押しつめてゆくとこう

いうことになる。この人々の意見によれば、プロレタリアの政治闘争、経済闘争は党や組合の仕事であってナップ如きのやるべきことではないというのである。これは正しいか？　断じて正しくない。

かつて日和見主義者は、組合は経済闘争をやる所で、政治闘争をやる所でないという理由の下に、組合が政治に関係することを拒否した。今でも、社会民主主義者はそう云っている。またソヴェート労働組合の右翼的指導者（トムキスイその他）は、組合の任務は、労働階級の日常生活を向上させることにあると云う理由の下に、党の五ヵ年計画の実行に積極的に参加することをサボタージュした。文化団体は文化闘争や経済闘争をやる所ではないという見解は、これ等の日和見主義的な見解と似てはいないだろうか？

勿論我々は党、組合及び文化団体の基本的な任務に於ける本質的な区別をはっきりと見なければならない。組合そのものを政党化してそれがあたかも政治闘争を指導し得るかの如き考えが大きな誤りであると同様に、文化団体が党や組合を代用して政治的、経済的闘争を独立で指導し得るかの如く考えることは、勿論絶対に誤りである。だからと云って党と組合、組合と文化団体の間に越え得られない垣を作って、何処から何処までが党の仕事で、何処から何処までが組合の仕事で、何処から何処までが文化団体の仕事であるという風に規定するのも亦絶対に誤りである。一つは統一を知って差別を知らないものであり、他は差別を知って統一を知らないものだ。

凡そ革命的プロレタリアートの一切の組織は、皆終局に於いては同一の政治的目的の為に努力している。ここにこれら一切の活動の統一がある。勿論、党と組合と文化団体とは夫々異った立場から、また部分的には異った目標に向っている。しかしこの終局の目的に於ける統一を見ないことは、云うまでもなく大きな誤りである。従って、経済闘争は政治闘争に、文化闘争は経済闘争と政治闘争に夫々結びつけられてこそ初めてその全的な意義を獲得する。忘れてならないことは、党や組合の組織的及び政治的影響を拡大強化することは、唯に党や組合だけの仕事ではなくて、また革命的文化団体の任務であるということである。ナップが党や組合の指導の下に、その工場グループを通じて、工場内の経済的、政治的及び組織的活動に自発的に参加しなければならないのは自明のことではないか？

我々はこの意味に於いて、ソヴェートの芸術組織が、自ら「芸術突撃隊」を組織して工場農村に赴き、また「突撃隊員も芸術へ！」のスローガンの下に優秀な労働者を芸術に引入れることによって、ソヴェートの社会主義的建設に積極的に参加していることから多くを学ばなければならない。

かつて（一九二八年）我々は芸術運動に於ける誤った政治主義——即ちあたかもナップが政治的、経済的闘争を指

導し得るかの如き見解――に対して闘争した。そしてそれは次第に我々の陣営から姿を消して行った。しかしその際誤った政治主義との闘争のみが強化された結果、他のこれと正反対の偏向を生み、それが現在では次第に非政治主義、文化主義として結晶しようとしている。我々は今やこの偏向を主要な危険として闘争しなければならぬ。――勿論誤った政治主義との闘争を少しもゆるめることなく。

従って一九二八年の我々の闘争と、一九三一年の我々の闘争とを正反対の闘争と見ることは誤りである。これらの偏向はいずれも同じ階級的イデオロギー的基礎の上に発生したものであり、従ってそれとの闘争は芸術運動に於ける単一なレーニン的方向の為の闘争の二つの面でなければならぬ。

我々は政治的、経済的闘争への文化団体の積極的参加ということについて、前掲のテーゼをもう一度引用しよう。

「プロレタリア文化教育組織は、革命的労働組合及び反対派の煽動宣伝活動に参加せねばならぬ。その際革命的労働組合及び反対派の獲得カンパニア、また経済闘争の最中、その準備期の組織活動及び煽動活動を援助する事が必要である。それはこの目的の為に特別の組織者及び煽動家を引き寄せ、文書を販売し、ストライキ集会を組織するのを、そして一般にストライキ指導部の全活動を援助し、労働者に革命的組合反対派の掲げている要求と綱領とを啓蒙すべきである。プロレタリア文化・教育組織はその外にストライキ指導部の指導者が経済闘争の際の改良主義的ストライキ破りの裏切的役割を曝露するのを援助すべきである」

この問題もまた極めて明瞭であるように思われる。

以上のことからしてナップが新しい方向転換を決行しなければならないと云う結論は、既に疑う余地がないと私は考えるのである。しかしこの新しい方向転換は唯正しい指導の下に各同盟員全体が鞏固に結合した場合にのみ決行し得るのである。同盟の内部に分派を作るようなことは、それが指導的地位にある人々の側から為される場合にも、また一般同盟員の側から為される場合にも、いずれも正しい方向転換を妨害するものであって、許すべからざることである。

（一九三一年五月「ナップ」）

プロレタリア××作家、第一回国際大会に於ける日本プロレタリア文学運動についての報告

――その沿革、現勢、および将来――

松山敏

序

厳密に云うと、日本に於けるプロレタリアートの真に組織的な文学運動の基礎が確立したのは、一九二八年三月であった。この時、日本に於ける革命的プロレタリア文学運動の正統の唯一の担当者たる日本プロレタリア作家同盟の直接の母体である全日本無産者芸術連盟（ナップ）が組織されたのである。この時以前の運動は前史時代に属し、以後の運動との間に、大きな意義と段階の差違がある。しかし海外の同志たちには、日本の事情があまり知られていないと考えられるので、我々は、この前史時代についても、一応、輪廓を語らなければならぬ。

第一部　日本プロレタリア文学運動の前史時代
（一八八三―一九二八）

第一章　『原始期』（一八八三―一九一〇）

第一節　『政治文学』の段階（一八八三―）

近代の日本の幕は、一八六八年――今から六十二年前――のブルジョワ革命によって切り落された。この革命は、従来の絶対専制支配の封建的社会組織の一部を崩解せしめて、当時まだ幼稚だった、しかしすでに発展の道をたどりつつあった商業資本主義に飛躍の道をひらき、つづいて産業資本主義への進路を用意した。

かくして革命後十五年にして、軽工業に於ける産業革命が進行するとともに、国内に自由民権運動が拡まり、その中から無産階級的運動の最初の萌芽も分離し始めた。そこで我々は此の一八八三年頃以後に流行した『政治文学』の中に、我々の文学の最初の源流を発見するのである。

第二節　『社会小説』の段階（一八九四―）

ブルジョワ革命後二十七年にして、日本の半封建的ブルジョワ政府は、清国の封建的政府と戦争した。この戦争は日本の産業資本主義の基礎を確立するに役立った。階級として漸く成立し始めた日本プロレタリアートが、最初の未熟な、非組織的なストライキを自然発生的に敢行し始めたのもこの時期である。

文学の領域に於いては『社会小説』の運動が起り、ユーゴー、ゾラ、トルストイ、ツルゲネフ、ドストエフスキイ等の作品が読まれ始め、特にこれらの作品中の社会的理想主義の要素が受け入れられた。

第三節　『社会主義小説』の段階（一九〇四―一九一〇）

清国皇帝との戦争後十年にして、日本政府は今度はロシアのツアー政府との戦争を持った。この戦争により、日本は重工業を発達させ、これが今日の日本の帝国の基礎を築くこととなった。また、この戦争を機として、日本の社会主義者の間に非戦論が相当に根強く行われ、社会主義運動が前進させられた。同志片山潜がアムステルダムに於ける第六回国際社会党大会で、ロシア社会民主党代表プレハノフと握手したのもこの時である。ロシア社会情勢の中にあって、戦後、一九〇五年のロシアの××影響は深刻に日本に行き渡って、特に鉱山地方に幾多の大暴動的ストライキを続発せしめるに至った。以上の社会情勢の中にあって、日本の『社会小説』は遂に『社会主義小説』にまで発展した。

しかし、その内容は、まだキリスト教的社会主義、ブルジョワ自由主義、無政府主義、テロリズム、虚無思想、或は自然主義運動の要素をも混在せしめたものであって、唯物的社会主義の思潮は微弱であった。これは当時の日本のプロレタリアートの階級的成長の未発達のためである。そしてこの時機の終りには、それまで主導精神であったキリスト教的社会主義思想が、次第にアナルコ・サンジカリズムによって置き替えられるに至ったことが最も注意すべき現象であった。

第二章　沈滞期（一九一〇―一九一七）

アナルコ・サンジカリズムが支配的思潮に成り始めようとした時に、一九一〇年『×××××するテロリズムの陰謀』という事件が、支配階級の『××』によって、でっち上げられた。日本プロレタリアートの上への封建的勢力による大弾圧が始まって、日本プロレタリア文芸の源流も、一時地下に沈潜しなければならなくなった。そして沈潜したままで、一層アナーキズム的傾向を濃厚にした。

日本のブルジョワ文学の領域ではこれよりさき一九〇〇年から一九一〇年までが自然主義文学運動の急速な発展の時機であって、一九一〇年以後にはそれに対立する、ネオ・ローマンチズムと人道主義の運動が育っている。特に後者は次期のプロレタリア文学のための温床ともなった。

第三章　再生期（一九一七―一九二三）

第一節　『民衆芸術』の段階（一九一七―一九二〇）

一九一四年から一八年にかけての欧洲大戦は日本の帝国主義を急速に発展せしめた。日本のプロレタリアートもまた、真実に近代的な意味に於ける階級的運動を活潑に展開し始めた。また日本の全社会にはデモクラシーの運動が

広く盛り上り、この潮流の中で『民衆芸術』の運動も生れた。この『民衆芸術』の傾向の中には、トルストイ流の人道主義もあり、一方には又無政府主義もあったが、これは互に相交錯してとにかく日本文学史上に一種の新気運を作った。

第二節　『労働文学』の段階（一九二〇―一九二一）

『民衆芸術』は生まれて間もなく次第にプロレタリア的階級性を帯びるに至った。すなわち『労働文学』あるいは、『第四階級の文学』と呼ばれ始めた。当時すでに現実的に成長していたプロレタリアートと結びつき始めた訳である。時に労働者出身の作家さえ多く輩出するに至った。或はブルジョワ文壇から藤森成吉、秋田雨雀等が移行して来たのもこの時期である。

しかしこの当時の『労働文学』は未だ、単に労働者の生活に取材したと云うだけの自然主義的『貧乏』小説であるか、人道主義的同情小説であるか、無政府的『反抗気分』小説であるかに過ぎず、マルクス主義によるプロレタリアートの階級的観点に立脚したものからは遠いものであった。

第三節　『種蒔く人』の段階（一九二一―一九二三）

一九二一年十月、以上の発展が遂に一つの実を結んだ。プロレタリア文学運動のための稍大きなグループが形成され、且つ、雑誌『種蒔く人』が発行され始めたのである。且つ理論的にも、ブルジョワ文学者どもの守り本尊であった『芸術の本体』とか『芸術の永遠性』とかの諸観念に対する闘争が始まり、次第に、芸術の歴史性、階級性、が明らかにされ、或は『武器としての芸術』の意義が認識されるに至った。海外のプロレタリア文学運動との結びつきが要望され始めたのもこの時機である。

なお当時、政治的戦線に於いては、一九二二年の上半期をもって、アナルコ・サンジカリズムの絶頂期が終り、後半期には経済闘争を政治闘争に『方向転換』して行こうとする運動が支配的になった。且つ、一九二三年には第一次日本共産党に対する最初の総検束もあった。かくして、サンジカリズムとボルシェビズムとの対立、分離が決定的なものとなる。従って文学運動に於いてもこれに少し遅れて、同様の対立をはらみ、遂に一九二三年九月一日、有名な東京地方の大震災をもって、突然この形勢が中断されるに至る。

すなわち以上の再生期を通じて云えば、アナーキズムの思潮が支配していたプロレタリア文学運動に遂にマルクス主義の傾向が盛りあがって来て、前者と対立し、大きな対立のまま不意に幕を閉じた訳なのである。

第四章　再沈滞期（一九二三―一九二五）

大震災を機会に、日本には反動政治が敷かれ、プロレタリアートの政治戦線は全線的に破壊された。文学運動の分野に於ける『種蒔く人』の廃刊も無論まぬがれなかった。しかし、今度の再沈滞期は、そう長くある筈はなかった。社会はすでに成熟している。

大震災の翌年、一九二四年には、『種蒔く人』の延長として『文芸戦線』が発刊され、八カ月続いて倒れた。しかし次年の一九二五年には、プロレタリアートの政治戦線の復興(××××の再建運動その他)にともなって、六月遂に『文芸戦線』も確実に復活されるに至った。

第五章　勃興期(一九二五―3、一九二八)

第一節　アナ・ボル分裂の段階(一九二五―一九二六)

雑誌『文芸戦線』が復活されて半年のち、一九二五年十二月『文芸戦線』のグループを中心にして、プロレタリア文学運動のための共同戦線団体として『日本プロレタリア文芸連盟』が創立された。しかし今や問題は、アナーキズムに対する闘争の上にある。政治戦線の方面では、この問題はすでに解決され終っていて、日本共産党の再建運動はますます具体化し、一九二五年九月以来『無産者新聞』も刊行され始めていた。かくして翌、一九二六年十一月に至り、遂に日本プロレタリア文芸連盟は、アナキスト一派の除名を決行し、且つ連盟自身も『日本プロレタリア芸術連盟』と改称し、内部に文学部、演劇部、美術部、音楽部、の四部を持つに至った。この分裂によって、連盟は少しも動揺を受けなかったばかりか、かえって強化、拡大された。

この分裂を指導した芸術運動の理論は、プロレタリア芸術家が非政治意識にとどまり、自然成長的な観方や気分の中にこびりついている傾向を否定し、マルクス主義的目的意識によって導かれねばならぬことを規定したものであった。この理論は、日本のプロレタリア文学運動が意識的、組織的な運動の段階に這入るために重大な役割を持ったものであった。

かくして日本のプロレタリア芸術運動の組織は、これまで共同戦線組織であったものから一路、マルクス主義に立脚する芸術団体たろうとする方向へ向い始めたのである。

第二節　セクト主義の段階(一九二七―)

日本プロレタリア芸術連盟にとって、アナーキストの除名を成し遂げてから後の問題は、連盟内の社会民主主義的分子との闘争である筈だった。ところがこの問題が日程にのぼる前に、同じ政治的指導下に於いての混乱動揺、分裂を経験せざるを得なかった。これは一九二六年の末に再建組織を完了した当時に於ける日本共産党の指導理論が、セクト主義の傾向を持っていたための欠陥による。

かくして、一九二七年六月に至り、雑誌『文芸戦線』の

編輯同人たちが連盟から脱退して別に『労農芸術家連盟』を組織した。一方、日本プロレタリア芸術連盟は新たに機関紙『プロレタリア芸術』を創刊し、つまり、雑誌としては『文芸戦線』と『プロレタリア芸術』、組織としては、労農芸術家連盟と日本プロレタリア芸術連盟との対立期に入る。

第三節　社民、××分裂の段階（一九二七）

しかし、労農芸術家連盟は、脱退、独立後間もなく、更にまた大きな分裂を経験しなければならなくなった。今度の問題はいよいよ社会民主主義——特に左翼民主主義派——との闘争に関している。労農芸術家連盟の中で左翼派を形づくっていたマルクス主義芸術家の一団は、大挙して連盟から脱退し、別に『前衛芸術家同盟』を組織し、一九二八年一月から機関誌『前衛』を刊行した。これによって、日本プロレタリア文芸の分野は三分した。

（A）　日本プロレタリア芸術連盟（機関誌「プロレタリア芸術」）
（B）　前衛芸術家同盟（機関誌「前衛」）
（C）　労農芸術家連盟（機関誌「文芸戦線」）

この分裂事件について注意すべきは、これまで日本プロレタリア文学運動の上に公然とは存在しなかったところの社会民主主義の芸術団体が遂に公然たるグループを結集して——分裂後の労農芸術家連盟とその機関誌『文芸戦線』——遂に今日に至っていることである。

第四節　ナップ（NAPF）の確立
（—3、一九二八）

ところで、政治的所属を同じくする日本プロレタリア芸術連盟と前衛芸術家同盟とは、一時も早く合同をとげなければならぬ機会に来た。且つ日本共産党も、一九二七年上半期、モスクワに開催された日本問題委員会に於けるコンミンテルンの批判により、従来のセクト主義的傾向を清算し了り、党大衆化の実行に這入ろうとしていた時期であった。この流れに沿って一九二八年三月、遂に二つのマルクス主義的芸術団体は合同して、全日本無産者芸術連盟（La Nippona Artista Proleta Federacio）を成立させた。つづいて、五月には機関誌『戦旗』を創刊するに至り、ここに名実とも真に正しいプロレタリア芸術運動の主体が基礎づけられた訳なのである。

しかし、この一九二八年三月十五日には、いわゆる『三・一五事件』として日本全国に於て一千人以上の××××××、及びその外廓部員たちの総検束が見られ、日本共産党大衆化の芽生えが踏みにじられた。ナップは成立の当初からいきなり多事の情勢に直面しなければならなかった。かくして現在の日本プロレタリア作家同盟の直接母体である全日本無産者芸術連盟（ナップ）の強力な階級的芸術運動が進展することとなる。

第二部　日本××主義文学運動の展開——第一期——

第一章　プロレタリア・リアリズムの確立

ナップの成立が日本プロレタリア芸術運動に於けるマルクス主義的組織の確立であった以上、マルクス主義的理論の基礎の確立が伴わない訳はなかった。この要求に応ずるための努力が、一九二八年の初頭からすでに現われた。同志蔵原惟人は、芸術運動に於けるマルクス主義的方向をプロレタリア・リアリズムの道に求めた。

これまでの日本プロレタリア文学は、真にマルクス主義的観点から現実を把握する事について、まだ決して充分でなかった。或る者は自然主義的・日常主義的リアリズムに留り、或る者は現実認識から遊離した観念的態度で『叫びの文学』に走った。これらに対して、蔵原は厳正なリアリズムの態度を説くとともに『プロレタリア前衛の眼をもって』この世界を見、且つ描かなければならぬとする階級的観点を力説した。

このプロレタリア・リアリズムの方針は、我々の文学の方針として、現在に至るまで変らず、殊に本年三月の我が同盟第二回大会に於いては、一九三〇年度の活動方針書の中で、『プロレタリア・リアリズムの貫徹』ということを強調して居る。一方、社会民主主義一派（『文芸戦線』一派）の連中は、ついに此のプロレタリア・リアリズムを理解しないままで現在に至っているのだ。

我々の陣営内で、プロレタリア・リアリズムの方針に応じて現れた諸作品の中で、小林多喜二の『一九二八年三月十五日』及び『蟹工船』、片岡鉄兵の『綾里村快挙録』は注目すべきものであった。

第二章　プロレタリア芸術大衆化論の上程

プロレタリア・リアリズムの確立によって、我々の文学の方向は定った。しかし、同時に、ナップ成立当時の政治的事情——三・一五事件の直後であると云う——は、我々の仕事の大衆化という事を当面の重要問題たらしめたる『戦旗』が創刊されるや、ただちにこの問題が日程にのぼされた訳である。

この問題は、先ず、プロレタリア芸術の確立と大衆のための直接的アヂプロ運動との関係についての問題として提出された。両者の関係を一応区別すべしとなす者は『戦旗』

を芸術運動のための機関誌と規定し、他に別に絵入りのアヂプロ雑誌を発行せよと説いた。反対者は『我々の芸術の仕事は、全体として、プロレタリアートの政治闘争の中にあるから』として狭い意味での政治的アヂプロの仕事の中に芸術運動の全体を解消しようとした。

この二つの立場の対立は、本題の芸術大衆化の問題に至っても、やはり消えない。

（A）芸術として社会的価値を持っているところの作品の大衆化

（B）芸術性は持っていないが、或は極めて僅しか持っていないが、大衆の教化および宣伝の意味において価値を持っているところの大衆的作品の制作

この二つの区別を認めるものと、そう云う区別の仕方が間違っているとなすものが対立したままこの問題に関する論争は、一九二八年末に一応終った。かく、理論的には未解決であったものの、実際作品の上には大衆化のための努力の結果は大いに現れて藤森成吉の短篇『土堤の大会』徳永直の長篇『太陽のない街』村山知義の戯曲『全線』中野重治の短篇『鉄の話（その一）』等が一応の成功を示した。

第三章　ブルジョア末期文学との闘争

第一節　芸術至上主義との闘争（芸術的価値と政治価値の問題）

この時期のブルジョワ文壇からの攻撃の第一声は、社会民主主義的文芸批評家を代弁者として現われた。彼は云う、マルクス主義文芸批評家が評価する文学の価値は、結局、文学作品の政治的価値だけであって、芸術作品にはこれ以外に純芸術的価値がある、と。

我々は答えた。芸術に絶対的、超歴史的な『芸術的価値』がある筈はなく、芸術的価値とは結局、歴史的な『社会的価値』である。プロレタリアートのための社会的価値の方向に、我々の芸術的価値があるのだ、と。

この論争は、単に文芸批評家の間のみならず、日本の全文壇の大問題となったが、我々の同志はよく一致して攻撃的進出をとげ、これによって、遂にプロレタリア文学理論が、日本文学のヘゲモニーを握るに至る基礎を築いたのであった。

第二章　形式主義との闘争（芸術に於ける内容と形式との関係の問題）

ブルジョワ文壇からの第二の攻撃は、彼等の若い後継者たちのグループによって、形式主義と云う旗じるしの下に現れた。『芸術に於いては形式がすべてである。芸術の内容とは、形式を通して読者に与えられる幻想である。だから形式こそが、芸術の内容を決定する。形式こそ価値がある』と。

我々はこれに対して、芸術における形式と内容との関係を明かにし、或は芸術形式の発生およびその発達の問題等について唯物弁証法的解決を示して遂に彼等を沈黙させるに至った。

第三章　新芸術派との闘争

日本ブルジョワ文壇の最新の武器は、新芸術派という旗じるしであった。しかしその内容はモダーニズム文学、ナンセンス文学、エロチシズム文学、グロテスク文学、……等々の混成軍で、どれも彼等の最後のデカダンスを語るやくざな諸傾向に過ぎない。階級闘争が激化するにつれて、小市民層の間に一種の逃避的気分が醸された。――これを彼等は地盤として得ているだけである。

我々はこの児戯的攻撃に対しては、全線的黙殺の戦法をとった。この戦法が成功したこと稍左様に我々の自主的立場は、すでに強化されているのである。

第四章　共産主義文学確立の問題

しかし、我々は、我々の作品行動に鋭い自己批判の眼も向けた。従来、我々は、我々の作品の階級的性質を『前衛の眼をもって見、且つ描く』とか『党の思想的、政治的影響の確保、拡大』とか云う言葉で規定して来た。

しかし、前衛の眼をもって見ると云うことは、具体的に作品の上にはどう現われなければならないか……党の影響を確保、拡大することを任務とするとしても、その任務と芸術との特殊的な結びつきは、具体的にはどうであるか、……等々の問題は、まだ十分に明かにされなかった。この事からして実際作品の上に、大きな欠陥として、『社会民主主義的観点からハッキリ区別さるべき明確な共産主義的観点の欠如』と云う結果が生じた。

で、我々はいよいよ答えた。それは『先ず第一に、我々の芸術家が、わが国のプロレタリアートとその党とが現在に於いて当面している課題を、自らの芸術的活動課題とすることによって可能である』と。

そして、本年四月に於ける我が同盟の第二回大会では、『我々の文学を明確なるコンミュニズム文学にまで高めよ』の叫びが猛然と湧き上るに至った。

一体、この頃まで日本では、共産主義的立場に立つあらゆる作家が、カモフラージのために、いつもマルクス主義という名称で自己の立場を呼んでいた。しかし階級闘争の激化、左翼社会民主主義一派の大衆欺瞞の進行は遂に、我々をして、×××によっておびやかされるにも拘らず、公然と共産主義作家であると名乗らせるに至ったのだ。

また、我々はすでに昨年の八月（一九二九年）やはり公然と、確実に、共産主義的立場を大衆の前に大きく明示した事件を持った。それは、従来、日本共産党の指導下にあ

った大衆的政治戦線の一部の有力な指導者たちが、官憲の×圧に堪えかねて、運動の合法化運動を起して、日本共産党の指導下から脱落した——この出来事に対して断乎たる反対を声明して一糸みだれず階級的立場を守ったことに依ってである。

以上の方向に沿って努力された作品としては、藤森成吉の戯曲『蜂起』小林多喜二の『工場細胞』等を挙げることが出来る。

第五章　プロレタリア芸術大衆化の解決

我々の芸術運動は、かくして、日本のプロレタリアートの政治組織の中に自身の足場を発見し、明確な階級的基礎の上に公然と立つに至った。そこでこの事からして、如何にして我々の芸術を労働者・農民大衆の手に結びつけるかと言う問題が、当面の重大問題として再び起って来た。即ちプロレタリア芸術大衆化の問題が再上程されなければならなかった訳だ。

しかし今度の場合は、論材としての実際作品もすでに豊富に提供されている。論争は、遂に解決にまで達することが出来た。本年七月の『戦旗』に載った我が同盟中央委員会の決議『芸術大衆化に関する決議』が、その帰結である。

決議の大要は次の如くである。

(一) 我々の芸術は、××的プロレタリアートのイデオロギーを内容とする。この点に関しては何等の妥協も許されない。

(二) 我々の芸術の対象は、一般的には我が××的プロレタリアートが組織しなければならない、広汎な労働者・農民である。そして特に中心的な目標となるものは、現在我が××的プロレタリアートがその組織に全精力を挙げている重要産業の大工場労働者及び貧農である。

(三) 題材の選択の規準は次の如し。

前衛の活動、
社会民主主義の本質の暴露、
プロレタリア英雄主義の正当な現実化、
マッセンストライキ、
大工場内の組合反対派、或は刷新同盟の組織、
農民闘争と労働者の闘争との結合、
農民、漁民等の大衆的闘争の意義、
恐慌・軍縮会議・産業合理化・金解禁・保安警察拡張・買勲事件・私鉄疑獄・等……ブルジョア政治、経済過程の諸現象のマルクス主義的把握及びそれとプロレタリアートの闘争との結びつけ、
×帝国主義××、
ソヴェート同盟擁護の闘争、
植民地プロレタリアートと国内プロレタリアートと

の連帯、
プロレタリアートの国際的団結、

(四) 我々の芸術形式については、これのみが唯一のプロレタリアート的形式であるというように、単一の型にそれを限定することは出来ない。しかし我々の基本的視角或は基準は、内容の正確な把握による形式の単純さと明朗さということの上にある。そこで作品の大衆化の便宜のために過去の、時に封建時代の文学形式を摂取する場合も、以上の基準を離れてみだりに行われてはならぬ。

(五) 尚、一方、この形式問題に関連して興味ある現象は最近の『戦旗』紙上で、極めて生彩ある発展を示している労農通信が、新なプロレタリア文学形式を創造するための重要な鍵を、我々に提供しつつあるということである。

第六章　日本プロレタリア文学運動のボルシェヴィキ化

第一節　ナップ(NAPF)の再組織

これよりさき、ナップは成立後約十箇月にして、即ち、一九二九年一月に至って、一つの重要な再組織を行った。再組織以前には、ナップは文学部、演劇部、美術部、音楽部、映画部を一つの組織の中に包含していた。そして地方支部も亦、そのままの構成で、地域的に各地方毎に設けられてあった。しかし各部の活動の成長は、地域的横断的連絡よりも、部門別毎に全国的に縦断的に連絡することを一層必要とするに至った。かくして遂に技術部門別による分化、技術部門別毎の全国的縦断組織が完成し、全体の組織も、全日本無産者芸術団体協議会と改められた。尤も略称は元通りナップ(NAPF)である。

全日本無産者芸術団体協議会
- 日本プロレタリア作家同盟
- 日本プロレタリア劇場同盟
- 日本プロレタリア美術家同盟
- 日本プロレタリア音楽家同盟
- 日本プロレタリア映画同盟

この再組織によって、全日本無産者芸術団体協議会の統制のもとに、始めて、我が日本プロレタリア作家同盟も成立した。この再組織は我々の運動を益々拡大・強化するに役立ち、且つ各同盟間の統制も、もともと一つの母体から分れたものだけに、極めて良好に進行した。

第二節　第二回大会の前後

我が同盟の第一回創立大会は、ナップ再組織直後の一九二九年二月十日に、東京に於て持たれた。それから約一年を経て本年四月六日、やはり東京に第二回大会が持たれるに至った。この大会は×圧の暴風雨にさらされて、多くの議案やテーゼが×憲によって禁止された。

しかしこの大会に報告された過去一年間に於ける我々

――約一百の同盟員――の活動成績は、ことごとく非常な進展を示すもののみと言える。
先ず『戦旗』の発行部数は、一九二九年一月に於いて一万だったのが、一九三〇年三月には二万三千に進んだ。大会後には更に三万にまで進んだ。しかもこの発行部数は、日本の労働者・農民たちが雑誌を一人きりで読むことがないことと考え合わせると、少くとも十万の読者を持っていることを意味する。特に昨年後半期以来の経済恐慌、失業者軍増大の社会的情勢の中にあって、大衆が左翼化している際『戦旗』は極めて強力な影響力を持つことが出来たのである。
無論、発売禁止の処分は何度も襲来した。第二回大会後のそれを合せて報告すれば『戦旗』は創刊以来、本年十月までに三十一回発行されたうちで、十八回の禁止をうけた。中でも本年に這入ってからは、二回の臨時増刊を入れてすでに十二回発行したうちで、実に十回も発禁をうけている。この発禁率はまさに八十三パーセントにさえ当る。
しかし我々はこの発禁に対して、全国に三百の『戦旗』発行所の支局を設けることによって――即ち、プロレタリアート自身の雑誌配布網を組織することによって――よく果敢に効果的に闘いつつある。しかもこの配布網の組織が、工場、農村の中に飛躍的に拡大して、その周囲に読者会が組織されるのを常とし、そこから労働者、農民自身の手になる通信、寄稿が続々と『戦旗』に集注するに至ったことは、一層喜ばしい現象でなければならなかった。
また我々は『戦旗』ばかりでなく、昨年五月以来『戦旗』の附録として、プロレタリア少年少女のため『少年戦旗』を創設し、ついで昨年十月からは、それを単独雑誌として独立させた。これは労農大衆に非常に歓迎された。
また大会後、本年九月から、我々はナップの理論的指導の機関誌として月刊雑誌『ナップ』をも創刊するに至った。
さらに我々の出版は雑誌のみならず、単行本の方へも延びた。四月の大会に報告された出版物の主なものは『年刊日本プロレタリア詩集』と『日本プロレタリア作家叢書』七篇であったが、その後現在までに我々は、政治的・大衆的刊行物をも含めて、すでに三十冊以上の書物を発行している。
講演会が日本全国に渉って数多く催されたことも無論である。特に大会後には『戦旗』の発禁に抗議する『戦旗』防衛講演会が各地に数多く持たれた。
官憲の弾圧は『戦旗』に対する、発禁ばかりではなかった。同盟員の一時的拘留（多くは二十九日間）は毎月のように絶えず行われつつある。しかも遂に本年の大会後、五月二十日には、我が同盟員の全国的総検挙が行われ、その中で我が陣営中の最も優秀な代表的作家、批評家約十名が『日本共産党を援助した』という理由によって、×悪な××問と不潔な××の中に置かれるに至った。ブルジョア裁判

は、やがてこれらの同志たちに対して、各々数年の××を宣告するであろう。我々は日本赤色救援会とともにこの問題について闘争をつづけている。

第三節　ボルシェヴィキ化のスローガン

しかし本年の大会に於て一層注目すべきことは、本年の大会が『文芸運動のボルシェヴィキ化』という中心スローガンのもとに持たれたことであった。このスローガンの内容は、我々の文学が×の文学となり、真に××主義的性質にまで高められ、且つ真にこれを大衆の中に闘争的に生かさねばならぬことを規定した点にある。従ってさきに述べた××主義文学確立の問題に基づき、且つやはりさきに述べた芸術大衆化論の解決を予想したものに外ならない。そして尚この中心スローガンの中に、同盟の統制、規律、組織の問題が含ませられていたことも注意すべきであった。

文学運動をボルシェヴィキ化すると言う当面の中心的任務を我々が直ちに遂行するためには、どうしても組織の強化ということが第一の問題にならなければならなかったからだ。また現在、日本に於ける殆んど唯一のプロレタリア出版所である『戦旗社』の防衛、発展の問題も併せて議せられた。

尚『戦旗』の六月号に発表された『ブルジョア出版に対する我々の態度はこうでなければならぬ』という規約は、組織的出版統制によって、ブルジョア・ジャーナリズムと決定的に闘争しようとする具体策で、この統制問題の最も良き収穫であった。

かくして我々は、内部的統制の点からも、作品行動の目標の点からも、雑誌配布網の強化の点からも、労農通信の拡大の点からも、あらゆる必要の点から、我々の当面の中心的任務——文学運動のボルシェヴィキ化——を達成するために、全力を挙げて進みつつ、本年の上半期を終ったのだった。

第三部　日本共産主義文学運動の第二期へ！

第一章　労農通信文学の問題

労農通信に関しては、すでにさきに述べた『芸術大衆化についての決議』の中で、注目されている。しかしその決議はまた、特に誤解を警戒して『労農通信が我々の芸術形式の基礎的要素を指示しているということは、決して、そこに我々の芸術形式そのものが指されているということを意味しない』とも附け加えている。

ここに労農通信文学に関する我々の根本的態度が決定されている。つまり、我々は労農通信が将来のプロレタリア

文学の基本的要素として、正当に評価され、受け入れられなければならぬということをこそ言っているのだ。

所で今年の下半期に這入るとともに、この問題に非常に関係のある事柄が起った。絶えざる弾圧のもとに非合法たる日本共産党が、その多くの大衆的合法刊行物を片端から非合法に追いこまれるに従い、情勢の必要は『戦旗』『少年戦旗』を必然的に労農大衆のための政治的アヂプロの雑誌として発達させずには置かなかった。そこで『戦旗』『少年戦旗』及び『戦旗』発行所の一切の事業が、本年九月、××アヂプロ部×××××××に移され、その仕事の補助的任務につく事となった。そこで我々は、我々の芸術運動のための機関誌としては、九月に理論的機関誌として創刊した『ナップ』を拡張して、以前の『戦旗』に当てることとした。

この『戦旗』の所属変更は、今までも発達しつつあった労農通信網を一層拡大・強化する結果を生むであろう。そしてその広汎な地盤を一方に持ち、それと結びついて我々の文学運動が進んで行く事は、我々の仕事が非常に興味ある新しい大きな局面に向い始めたことを意味する。このことは、我々の××主義文学運動の第二期を特徴づけるものでなければならない。

第二章　国際的組織への加入

しかし我々の運動をいよいよ第二期の段階にまで高めるであろう更に一層重要なモメントは、我々の運動の海外との結びつきに関している。

従来、我々の運動は外国プロレタリア文学を取り入れることに全力を挙げ、特にソヴェート・プロレタリア文学の日本訳は世界のいずれの国とくらべて見ても最も多く、理論の上にも、作品の上にも、そこから、此の上ない影響を蒙っている。ドイツのプロレタリア文学、アメリカのプロレタリア文学の翻訳もまたそれに次いだ。又我々の側の作品及び理論は中国に翻訳されていることが最も多く、その他少数のロシア訳及び最近に至ってドイツ訳がこれに加わろうとしている。

更に昨年の終り頃から、我々はドイツ・プロレタリア革命作家同盟及びアメリカの同志たちと直接的な連絡を始めた。しかし今や、国際革命文学局の第二回拡大総会は、我々の運動をもう一層広大な、世界的な組織に結びつけようとしているのだ。

我々の運動が世界の組織に結びつくことは、全東洋の民衆と全西洋の民衆とを結びつける意味で重大な任務を帯びたものである。また我々は、この国際的組織への加入によってのみ、我々の仕事の意味を一層高いものにし、且つ強力なものとすることができる。

我々はすでに、日本のプロレタリア文学運動と世界万国のそれとの密接な連結事業を果たすために、ヨーロッパの

一都市に特別な一支部を創設した。この支部の活動は、××の帝国主義政府のあらゆる×害に対抗して行かなければならない。我々は、これまで幾分、孤立的運動だった我々の運動を世界的規模の運動の中心に結びつけ、特に×帝国主義××、ソヴェート同盟擁護のための、世界的文学活動と一緒に前進することによって、真の勝利にまで達し得よう。

（一九三〇年十一月十三日、ハリコフ市に於ける国際××文学局第二回総会日本委員会に於て）

（一九三一年「ナップ」）

通信員　文学サークル　文学新聞

中野重治

五月二四日の作家同盟第二回大会は、文学運動における通信員活動の重要性を正面におし出した。第三回大会の基礎的特色の一つは、文学運動を労働者階級の文化・教育活動の構成部分として確認したことだが、通信員運動の重要性もこの認識からひき出された。しかし第三回大会では、文学運動と通信員運動との結合を作家同盟の組織の問題として解決するところまでは行かなかった。組織問題は第三回大会後、大阪地方の代表者を加えた東京地方総会、臨時大会、東京支部創立総会などの大衆討議をとおして具体的に解決されて来た。そのうち重要なものは、臨時大会直前に出された『当面の任務に関する決議案』に書かれているが、決議案で取り扱われた問題もその後もっと発展して来た。問題の中心は、通信員、文学サークル、文学新聞などで、これらの問題について作家同盟の討議したところを敷衍して説明すれば次ぎのようである。

一　通信員の問題

文学運動における通信員問題の解決は、基本的には、ハリコフ大会の日本委員会の決議、「労農通信員運動がより広く拡大され、その組織網のなかに日本プロレタリア文学運動の基礎がしっかりと根を張り、運動の全根柢が強化されねばならぬ。」を具体化することであるが、これを具体化することは同時に、ハリコフの拡大総会の、「日本プロレタリア文学運動と労農通信員運動との結びつきに関する日本プロレタリア作家同盟の経験を、他の各国代表者たちに知らせるための特別の報告がなされてほしい。」という要求に答える準備にもなる。なぜならば、通信員運動の今日の問題をはっきりさせることによって、通信員活動と文学との過去の関係・経験を正しく整理することが出来るか

ら。我々が今日通信員問題を解決することは、拡大総会の要求している「報告」を大衆的に作制する仕事への第一ともなるのだ。

最初にはっきりさしておかねばならぬことは、通信員運動はそれ自身の目的を持っているものであって、文学のためにあるものではないということだ。このことは秋田が「ナップ」の上でくり返し強調して来た。

「注意しなければならないことは、労農通信員の運動は、決して文学を創造することにあるのではなくて、本質的な職能をそれ自身持っているということである……ソ同盟において労農通信員運動とは、工場あるいは農村の労働者たちが、中央ないし地方新聞の通信員として、自己の属している職場の実際生活およびそれに関する諸種の通信をなすものであって、この運動によって労働者農民の実際生活を知り得るばかりでなく、政治上のビューロクラシイ（官僚主義）を清算し、これによって最も適切な政治活動をなし得るのである。」（「ナップ」三〇年一一月号）

「労農通信の仕事は、まず文学を引き出すよりは正確な労働者農民の生活の報告でなければならない。これからすぐに立派な文学や文学者をひき出し得るように思ってはいけない……ソ同盟では労農通信を『労働者農民の直接的政治への参加』を意味すると云っている。だから事前においても労農通信は、まず文学的であったり、また文学に対して約束するよりも、プロレタリアートの政治および経済活動に役立たなければならない。そのことが正しくなされることが、プロレタリアートの真の階級文学の貴重な材料となるのだ。」（「ナップ」三二年七月号）

労農通信員の根本任務は階級闘争の「自発的援助者」という点にある。「ソヴェート労農通信員の強みは、日常の政治・文化戦線における彼らの実践力だ。書くより先きにやるところに彼等の異常な文化建設力がある。」（「ナップ」三〇年七月号　中条）通信員はすべての場面（経済的・政治的・文化的な）で闘争の先頭に立ち、それによって大衆の創造的自発性を高めるばかりでなく、その成果を必ず書いて発表するということで更に高めて行くところに基礎的任務を置いている。「書くより先きにやる」のだが、必ず書くのだ。したがって通信員はどれかの定期刊行物（色々の新聞や雑誌）に結合される。

通信員はめいめいの職場で、職場内生活からいろんな問題を引き出して、壁新聞、工場新聞その他の新聞雑誌に書く。自分が書くばかりでなく、外のものがどしどし書くようにしむけ（いろんな労働者に「俺もひとつ書いて見よう」という気を起させること）、それを適当な新聞や雑誌に取り次ぐ。また彼は、新聞や雑誌に通信を書くことによって他の職場との通信の交換を組織する。同時に彼は、プロレタリアートの当面する国際的・国内的な大きな問題を職場内の日常問題に結びつけて職場内に引き入れる。こういう仕事を実行することによって、通信員は、プロレタリアの

新聞や雑誌が「集合的オルグ」となることを助ける。

通信員の活動によって、およびますます多くの人が通信活動にはいって来ることによって、新聞や雑誌は豊富になり多彩になる。そこにプロレタリアートの創意が発揮されて行く。文学運動はこの創意性をくみ取って来る。「第一に通信の内容が持つ闘争しつつある労働者農民の生活の創意性ならびに現実の観察において、またそこから生れて来る新たな形式において、我々の文学を真にプロレタリア的なものとして成長させる大衆的基礎をなすものとして。第二に、労農通信員の中から作家を獲得して行くという意味において。」(作家同盟方針書)だから我々は、通信員をことごとく、また直ちに文学作家に育てようとする誤りを犯してはならないが、同時にあくまでも通信員運動を援助し、技術上の指導をし、そこから文学にくみ取るべきものを積極的にくみ取って来ねばならぬのである。

通信員はその任務から当然各種の新聞雑誌に結合されるが、文学運動——作家同盟の側から見れば、現在としては「ナップ」に結合される。他の諸新聞・諸雑誌の通信員と並んで「ナップ」通信員が出来るわけだ。(将来「文学雑誌」「演劇雑誌」が出るようになれば更にそれぞれの通信員が出来るだろう。)

通信員の仕事は全体としては前述の通りだが、「ナップ」通信員としては、ブルジョア文化および社会ファッシズム文化との闘争、プロレタリア文化の普及、労働者のなかから芸術上の働き手を獲得することなどを「ナップ」と連絡してやることである。「ナップ」通信員の活動は最近非常に活潑になって来たが、通信の内容が個人的である点にまだ欠点がある。通信員は自己の指導を放棄してはならないが、同時に「ナップ」やナップ各同盟の活動に対する意見や要求を大衆的に引き出して行く方にもっと進まねばならない。「鉄の流れ」の作者セラフィモーウィッチは、自伝の中で、「市民戦争の時、東部・ウランゲル・ポーランド戦線にいて最初の通信を送り、……の兵士に講演や芸術作品を読んで聞かせた。」と書いているが、このことは芸術的刊行物の通信員の活動を端的に表している。

次ぎに「ナップ」通信員を選定するのは誰か、選定の規準は何かという問題がある。それについては、まず一つの職場に一人のではなく多くの通信員をつくらねばならぬ。数人の通信員が出来れば、それらの通信員は大衆の意見・要求を指導しつつ纒めるとともに、「ナップ」通信員同志としても協議して更にその結果を纒めるべきは勿論、他の新聞雑誌の通信員とも連絡し協働すべきである。通信員は職場の労働者たちの代弁者だから、労働者の仲間うちから続々とおし出されて来るが、これを「ナップ」通信員として決定するのは「ナップ」(一般には各通信員の属する新聞・雑誌の)編輯局である。

では編輯局はいかなる規準でその通信員を指定するか?だが、その前に通信員となるには何か特別の資格がいるか

どうかという問題がある。「プロレタリア科学」七月号は、通信員規則を発表して「闘争の部署についている人は誰でもなってほしい」といっているが、闘争の部署ということは広い意味に解さねばならぬだろう。「ナップ」の場合は、「ナップ」の読者、何らかの意味で「ナップ」に通信を送って来るすべての読者が通信員としての資格を持っている。「ナップ」八月号には一通信者からの資格についての質問が来ているが、こうした質問を出すような人は通信員としての最大の資格を持っている。多くの通信のなかから通信員を決定する規準となるものは、第一には通信の正確なこと、第二にはそれが定期的・継続的なことである。

「ナップ」通信員は、もちろん、文学サークルその他の文化サークル設置のために、およびその中で、積極的に働かねばならぬ。

二　文学サークルの問題

文学サークルの問題は第三回大会以後になっていきいきとした形で討議されて来た。いろいろな芸術的サークル(労働者の同人雑誌演芸会、尺八同好会等)設置の問題は、工場では労働者の文芸雑誌を廃して工場新聞だけにしてしまおうという間違った考えが生れた時、それに対立して取り出されたのであったが(「戦旗」二九年四月号)、当時は問題が出されただけで何ら現実の発展は見せられなかった。それが第三回大会以後現実の問題となったのは、芸術運動がプロレタリアートの(労働者の大多数獲得のための)文化・教育活動の部分として再認識されて来たからである。「当面の任務に関する決議案」は次ぎのようにのべている。

「第三回大会では通信員の問題を正しく解決したが文学的サークルの問題にふれなかった。しかし文学的サークルの組織と通信員の組織とは不可分である。文学的サークルの組織について最も注意すべきことは、それに対して政治的意識および高度の技術水準を強制しないこと、それと共に、政治的にも技術的にもこれを高めるための指導を決して放棄してはならぬことである。このことは、ラップがソ同盟内の労働者農民の文学研究会について正しく転換した方向において、即ち文学サークルの活動を常にわがプロレタリアートの全般的問題および当該・工場地区等の日常生活に結びつけて展開することによってなされる。」

サークル活動そのものについては「五ヵ年計画とソヴェートの芸術」のなかで中条百合子が通信員の問題と結びつけて書いているし全体としては「プロレタリア芸術運動の組織問題」のなかで(特にその第三項で)古川荘一郎が詳しく書いている。

・しかしその後我々の仕事が進むに従って、一方ではつぎつぎと文学的サークルがつくられて来るのにつれて二、三

の問題が出て来た。

第一の問題は職場などにできている文学的サークルと作家同盟との組織上の関係であるが、これについて我々は次ぎのように規定した――「文学的サークルは同盟自体の組織ではない。即ち同盟自体の組織的部分ではない。それは、同盟が組織して行く組織（団体）である。だからそれは、同盟そのものの部分ではないが同盟に属するものだ。だから同盟はそれを指導し統制しなければならぬ。」

これについて、「農民文学研究会ニュース」の七月一日号が農村サークル設置等々の任務を掲げた後、「これらのことがらは……農民組合との協力の下にのみなし得る。だから我々は……農民組合との連絡を組織化されねばならぬ。」と書いているのは誤りである。……農民組合とは何か分からないが、文学的サークルは、労働者農民の………諸組織との協力の下に「のみ」つくるのではなく、それのないところにも作らねばならないし、作って行けるのだ。それでこそ文学サークルの組織が……的諸組織を援助し得るのだ。勿論このことは、サークルを、労働組合等と出来るだけ協力して作らねばならぬことと矛盾しない。要は、組合などの組織のないところにも積極的につくって行かねばならぬという点にある。

第二の問題は、サークルの活動と経済的活動との関係である。「プロレタリア科学」七月号の「プロ科学第三回大会記」の中で、小川は、「配布網に関しても研究所を中心とする組織を持っては悪いように考えているらしいが、読者会は幾らあってもよいので、ただそれが政治的な活動をしてはいけないだけである。」と書いている。ここでいう「読者会」もその活動の規定も共に「プロ科学」三〇年度の活動としての歴史的・具体的内容を持っているのではあるが、これを我々の仕事のために参考として考えれば、「政治的活動をしてはいけない」と規定するのは誤りである。「ナップ」六月号の古川の論文が特にその第四項で詳しく書いているように、各種サークルについて我々は、それを政治的・経済的闘争のための組織と考えてはならないと同時に、サークル及びサークルメムバーが政治的・経済的闘争に参加することを押えないばかりか、あらゆる場合参加させるように指導しなければならぬのである。文学サークルを政治闘争のための組織と見ることは政治主義としての誤りであり、政治闘争に参加してはならぬと見ることは文化主義としての誤りである。この二つの誤りを犯さず、文学的サークルとしての独自の活動と企業内の一般闘争とを統一的に展開することがサークル指導者の任務であって、それは「決議案」が示しているように、「文学サークルの活動を常にわがプロレタリアートの全般的問題および当該工場・地区等の日常生活と結びつけて展開することによってなされる。」

第三にサークルの名前の問題だが、「……工場プロ文学サークルなどという名前はほとんど全く用いられない。学

校やサラリーマンの間につくられる場合はそうした名も用いられるが、(「ナップ」七月号にある某大学のサークルは「プロ文学研究会」という名を持っている)、工場や農村では一般に雄弁会、文芸愛好会、持廻わり座談会等のひろい意味の名前をつける方がいい。ある所では「ナンセンス座談会」という名称で成功しているそうだが、名前だけとして見れば、これは左程よくない。しかしここでも肝心なことは、名前にこだわって小さく固らないことである。実際問題として、文学的サークル、演劇的サークル、美術的サークル等が別々に出来ることは、殆ど稀で普通は芸術的な趣味を持っている人々が雑然と集まるのだから、適当な名前を集った人達自身がつければいい。

第四にはサークル・メンバーから同盟員を獲得して来る問題。これは古川の論文等で詳しく説明されたサークルの職能と、この項の第一の問題の理解とからで大体明かになる。サークルの活動は、通信員、サークル内同盟員、およびサークル内積極分子の活動によって拡まり高まって行くが、サークルがそっくり同盟にはいるのではない。しかしサークルの中からサークルの活動を通して同盟員をどしどし獲得して来ることはあくまでもやらねばならぬ。「ナップ」七月号の「演劇運動の組織問題」で、生江健次が、演劇サークルを全体としてプロットに入れるのではなく、その中の積極分子のみを入れると説いているのは作家同盟にもあてはまる。しかしその際「積極性を持ったものだけ加入さすべきだという理由は、積極的に演劇に関心を持っているものは必ず演劇について多少の意見を持っているであろう。それを批評家と見なして、そうした資格でプロットに加入させるのである。」と書いている点は消極的だ。これでは、実際には資格がないが仮りに批評家と「見なして」そうした名目でプロットに加入させるように思われかねない。しかし実際には我々は、多数の原始的批評家の中からより高い批評家を育て上げねばならぬのである。それらの批評家を同盟メンバーとする際に、労働者に対する政治的・技術的規準は違って来るが、それは労働者だから何でもやみくもに入れるということではない。労働者に対して技術的水準をひき下げるということは、労働者の持っている技術そのものを低く評価するということではない。労働者の技術的水準とインテリゲンチャのそれとを、技術完成の度合からだけ見れば前者が一般に低いが、技術はその階級的内容を持っているのであって、我々は技術を常にその階級性と結びつけて考える。だが労働者に対する場合、表面上の水準について大胆にそれをひき下げ、しかも同盟の力を全体としてはひき上げ得る。水準の引下げは、専門家養成のための大きな努力と結びついている。これは通信員についても云えることで、三一年四月のソ同盟……中央委員会の「通信員運動建て直しに関する決議」(「プロ科」七月号)も、一般通信員の中から専門家を育て上げることを問題としている。

第五に、これらの活動にあたってサークル内「ナップ」読者等は特別のグループをつくるべきか否かという問題が出て来る。我々はサークル活動のために「ナップ」読者のグループ活動をなすべきではないと考える。「ナップ」読者会等のグループ組織をもつことは、「ナップ」読者をかためて浮き上らせ、グループをセクトにする。しかしこのことは、「ナップ」読者が、サークル活動展開のために緊密に結合し協議することを妨げるものではない。ただ、あくまでそれは活動のための協働であって、グループ(組織)としての活動になってはならないのである。従って、「ナップ」読者会をつくれ」という標語は誤りで、これは前述の意味に理解し直さなければならぬ。

第六に、通信員運動、サークル活動、その中からの同盟員獲得の仕事は、同盟支部組織についての新しい規定を浮び上らせた。それは、支部活動が当該地方の情勢によって相違して来ること、従って地方支部活動に通信員やサークル内積極分子を獲得して来る場合、運動の高度な東京地方大阪地方等の水準を適用してはならぬことである。その際の規準は、当該地方の労働者農民の文化闘争に堪え得る人を同盟員とするという点に置かれるであろう。地方における同人雑誌や新聞で活動している分子をこの意味で再組織して行くことが必要である。

第七に、工場農村にサークル組織が進められるのに並んで、学校及び小ブルジョア下層の間にも組織が進められねばならない。このことの理由は「決議案」が示している通りである。しかしその際注意すべきことは、小ブルジョアジー下層の名で「小商人階級」を考えてはならぬことである。小商人階級はブルジョア階級内へよじ昇ることに永久の希望をかけている階級であって、彼らはプロレタリアートの世界になってからも「資本の復活」を夢み、それによって社会主義的建設に反対する階級である。我々のいう小ブルジョアジー下層とは、下級官吏、サラリーマン、一般使用人、下級の学校教師、各種雇人等である。なお、かかる方面につくられる文学サークルについては、工場・農村の場合と違って、社会民主主義文学やブルジョア文学の意識的支持者は一般にふくまれない。労働者がブルジョア文学を愛読している場合と、学生等が愛読している場合とは、形は同一でも内容が違うから。このことは同盟員獲得の際、労働者とインテリゲンチャとで、適用規準に差を設ける理由と根本的にはつながるものである。但しこの場合も、学生と徒弟的被傭者等との間には適宜な差が考えられるであろう。

三 文学新聞の問題

通信員と文学サークルとの活動は第三回大会以後急テンポで高まっている。「ナップ」の「工場・農村から」欄に

のっているものは通信員およびサークルからの通信の一少部分にすぎず、八月号はその欄のページを増大したが、ページの増大は通信員およびサークルの活動の増大に追いつくことが出来ない。現在がその状態だから、今後「工場・農村から」欄のページをどれだけふやしても追いつかないことは明かだ。しかも集まって来る通信は量とともに質が高まっている。我々はこの貴重な多量の通信を「ナップ」の誌面が許さないならば何か他の方法で発表し大衆化せねばならない。

それと同時に、増大しつつある文学的サークルを雑誌「ナップ」および作家同盟組織部と今までの関係で結びつけて置くのに止めず、サークル同士の全国的連絡を組織し、サークル間の競争、経験の交換、それによるサークル組織の促進を更に積極化す必要が生じて来た。この問題解決のために引き出されて来たものが、サークルの集合的組織者として「文学新聞」の創設である。

サークルの組織される基本的場面としての工場農村では、あらゆる文学愛好者がサークルに組織されて来るのであり、文学新聞はこのサークルのためのものであるから、新聞の内容は極めて大衆的で、労働者農民のすべての文学愛好者に読まれるものでなければならない。そこではプロレタリア文学の問題や、事件や、ニュースが報導されると共に、一般関心の的となっているものはブルジョア文学についても報導されなければならない。そこでは有名なプロレタリア文学作品やブルジョア文学作品の批評（「ナップ」の取り扱うような専門的批評ではなく、それらの作品の読み方を教えるものとしての批評）、日本および各国の作家の紹介や、作品や通信を書くについての具体的な注意等が継続的に発表されねばならない。一方では、文学サークルの活動状態が直接反映するようにサークルの経験、サークル所在の職場の話、その他の多くの通信が広汎にのせられねばならない。

文学新聞は作家同盟によって発行されるものであるから、その編輯方針は一定しているが、新聞の紙面はあくまで大衆的で、新聞および新聞の読者が工場主等の側から追究されぬようなものでなければならぬ。それは何らかの譲歩をすることによって避けられるのではなく、労働者農民の文学愛好者の絶対多数に愛されるように編輯することによってなされる。サークル・メンバー、企業内の文学愛好者たちが最も気軽に読み得、最も気軽にそれについて話し合い、通信や投書を思い立ち、それを通してプロレタリア文学とブルジョア文学とを見分け、サークルの組織を考えつき、他のサークルの経験を取り入れ、またプロレタリア文学の一般的問題、作家同盟の大会等に関心するようになること、こういうところに文学新聞の目的がおかれる。

最後に、文学サークル以外に各種サークル、例えばスポーツのサークルや、発明のサークルや、科学のサークル等がどしどしつくられて行くことが考えられるし、ある種の

ものは旺んにつくられている。文学的サークル一個について見ても、前に明かになったように、それは多くの場合文学専門にコチンと固まるものではない。各種サークルはそれぞれ重なり合い、それは組合その他の組織とも重なり合って来る。こうした色々のサークルがサークルの独自性を発展させ、しかも全体が統一的に発展させられるためには、各種サークルを組織して行く各同盟各団体が協働し連絡しなければならないであろう。

（一八三一年八月「ナップ」）

一九三二年春季総会迄に於ける連盟活動方針

わが労農芸術家連盟は、一九三一年十月二十五日の秋季総会に於て、過去十年の闘争、並びに現下の情勢に鑑み、次期総会迄の活動主要方向を左の如く規定する。

1 本連盟は、共同戦線党の階級的意義の徹底を図るために、同一目的を持つ諸組織と積極的に結びつき、その拡大強化を期す。

2 本連盟は、一方に於てブルジョア文学及び極左文学との闘争を組織的に展開し、他方に於て左の闘争を通じて共同戦線党の階級的目的を発揚する文学の強力なる発展を期す。

3 本連盟は、従来の演劇活動の経験を基礎として労働者農民諸組織と結合することにより、活動の尚一層活潑なる展開を期す。

4 本連盟は、ブルジョア美術とウルトラ美術を粉砕し正しきプロレタリア美術運動を展開するため可及的速かに美術家獲得養成を期す。

5 本連盟は、右の文学・演劇・美術上の闘争を通じて、労働者農民のあらゆる組織・闘争の胎内よりの積極的なる芸術活動の生成発展を期す。

6 本連盟は、右の闘争を強力に遂行するために、連盟各部と読者相互間の結合を緊密にし、有機的・統一的の活動を期す。

1 ブルとトラの文学を組織的に粉砕しろ！
2 美術班を美術部へ！
3 戦線統一の階級的意義を作品活動の中へ！
4 凡ゆる組織の真只中へ職場演劇を！
5 文戦読者大衆の組織的前進へ！

一九三一・一一・二五——

労農芸術家連盟秋季総会

（一九三一年「文戦」一一月一二月合併号）

ベルリンからの緊急討論（その一）

勝本清一郎

前がき

日本の一同志からの通告によると、日本では、最近いよいよプロレタリア文化団体の綜合的組織の問題が熟して、特に同志古川荘一郎の提案にもとづいて、従来のナップの解体、ならびに来る十月か十一月頃を期しての日本プロレタリア文化連盟の結成が、急速に準備されつつあるそうである。

この組織の素早い進展ならびに一応の成果は、我々にとって非常に喜ばしい。が、ベルリンに於いて昨年来、慎重に討論されつつある同じ組織問題に対する成案と、同志古川の提案――彼の見解のその後に於ける発展は分らないが少くとも『ナップ』の六月号と八月号とに発表された限りでの提案――との間には、かなりな距離がある。根本的な差違点も存する。

私は少し前に『プロレタリア演劇のための大衆組織について』なる一文を書き上げて、演劇運動の分野に関する我々の組織論を明かにした。私はつづいて、文学的運動の分野に関しても、また文化運動全般の局面に関しても、順次に組織問題を論じて行きたい積りであった。

が、日本での事態は、すでに甚だ切迫している。私に長文を草する時間は与えてくれそうにない。私は意を決してとりあえず、我々と日本の同志たちとの間の見解の主要な差違点を明かにして、且つ我々の結論だけでも出来るだけ短かく書きつらねたものを、日本へ送ろうと思う。甚だ不十分ではある。しかし日本にいる同志たちが、我々の意のあるところをおぎなってくれて、我々の見解をそちらでの討論の材料にしてくれる事が出来れば、大変仕合わせだと思うのだ。

各種のドイツ新聞の報ずる所では、一昨々夜（九月十七日夜）以来、日本軍の奉天砲撃が始まり、東支鉄道は運転を休止したそうである。その後のくわしい形勢はまだ分らないが、うっかりすると、この一文が急速に日本へ到達し得るかどうか、甚だ疑わしい。しかし、緊急の必要が私を駆る！

第一の差違点

同志古川を始め、日本の多くの論者たちは、今度の全プロレタリア文化団体の組織問題を、×色労働組合ないし××的労働組合反対派の文化・教育組織についての問題の線に沿うてのみ展開している。同志古川は、プロフィンテルン第五回大会に於けるテーゼ『××的労働組合運動の組織的問題』及びやはり同大会に際して同アヂプロ部で採用されたテーゼ『プロレタリア文化・教育組織の役割と任務』の引用から始めて、同志ディアメントの論文と云い、同志ハーエックの論文と云い、同志ベラ・スッアンドの論文と云い、すべてプロフィンテルンのそれらのテーゼに関係した論文か、或はプロフィンテルンのアヂプロ事業の範囲内に於てのみ文化組織の問題を取り上げている文献の基礎の上に立っている。

かかる事は、偏向を生みやすい、たとえば同志古川が、『プロレタリア文化連盟の重要な任務』として規定している事は次の如くである。

『プロレタリア文化連盟の重要な任務は、反動文化（国家企業家の教化制度による）との闘争、労働者の政治的経済的啓蒙、労働者の日常の文化的要求の充足等を全体的に統一し、指導してその活動を左翼労働組合の活動と結びつけることである』

しかしかかる規定は、プロレタリア文化運動の、特にプロレタリア芸術運動の任務を、労働組合の文化事業の範囲内に解消してしまった見解であって、文化運動の分野に於ける一種の日常主義に外ならぬ。特にそれは、彼がつづいて掲げて居る具体的行動綱領に於いて甚だしい。これらの中には、文化運動、特に芸術運動の創造的側面、或は科学的運動のやはり創造的研究の側面の如きが、全く見失われてしまって居る。プロレタリア文化運動について、労働者農民の自立的・大衆的な文化教育活動の側面を重要視しない事は、甚だしい誤謬であるが、それだからと云って、プロレタリア文化××への質的進化の問題、創造的部署の問題の一切を見落すことは、プロレタリア文化運動の全翼の認識の上に立っているものではない。

我々の見解によれば、労働組合の文化事業としてのプロレタリア文化運動ないし芸術運動には一定の限度がある。何故ならそれはどこまでも労働組合の文化教育活動だからである。

組合の文化的ないし芸術的活動が、組合のアヂプロ事業の一部であると云う事からして、プロレタリアートの文化運動ないし、芸術運動の全容を、アヂプロ事業の範囲内でのみ認識してはならない。逆に、組合の文化活動ないし芸術活動は、プロレタリアートの文化的活動全体の一翼であり、一部なのである。つまり、プロレタリアートの文化運動と組合運動とは、その各々の一部局を共通にしている各

独自の運動体系に外ならぬ。

ナップ加盟諸団体の本年度の大会に於ける各活動方針書の中には、芸術運動を『××的プロレタリアートの文化・教育活動の構成部分』と見る見解が、極めて強調されて居る。が、この見解の拠って来った根源が、前記のプロフィンテルン関係の諸文献であったことからして、この言葉は具体的には『××的組合の文化・教育活動の構成部分』として理解されて来た。かくて『××的労働組合の指導のもとに』なる語が、しばしば不用意に、すべての上に主張されすぎた結果となったのである。

しかしプロレタリア文化運動ないし芸術運動の一部が、××的組合の遂行する文化・教育活動と一致する範囲内に於いてこそ、それは××的組合の指導下にあるのであって、かかる範囲以外に渡る全体としてのプロレタリア文化運動ないし芸術運動を指導し得るものは、ひとり×のみなのである。

この場合、×が×合法たる日本の特殊事情として、当分×の代理に、組合がその指導の任務についても好いのではないかと云う見解――これもまた非常な誤りである。組合が文化運動・芸術運動の全体を指導することは、非常に偏向を生みやすい。且つ、日本に於いて、組合運動があたかも×の運動の代用になるかの如き謬想がしばしば生れ、これによって実践上にこれまで幾多の害悪が伴わされた事は、前記のプロフィンテルン第五回大会に於いて、特に日本問題に関して、同志ロゾウスキイが痛論して居るところである。

前記・昨年度のプロフィンテルン大会を機として与えられたプロレタリアートの文化・教育組織に関するテーゼは、我々にとって甚だ貴重なものである。それが我々に教訓を垂れている点は甚だ深く、且つ大きい。が、それにも拘らず我々は、一方に於いて、近く、××××××及び×××××××××のアヂプロ部からも、やはりそれぞれに同様の問題に関するテーゼが、出されるであろう事を、当然、予想していなければならない。かかる視野に立つことによってのみ、正しく、偏らず、前者を根本的には何処までも組合運動の分野に於ける文献として理解して行く用意を怠らないことが出来る。特に同大会以後、プロフィンテルンの文化部は廃止され、文化問題のすべての指導権がコミンテルンに集注されつつある国際的現状に於いておやである。

すなわち我々は、プロレタリア文化運動ないし芸術運動を『××』の文化教育的活動の見地からのみ見る誤謬を、第一に打破しなければならぬ。

第二の差違点

同志古川は、プロレタリア文化諸団体の中心の創設に努力すべきことを力説し、

『かくの如き文化団体の中心は、日本プロレタリア文化連盟と言うような形でもたれるであろう。そして、このような組織の出来た場合には、ナップは自らを解体し、各同盟が独立にその連盟に参加すべきである』

と述べている。このナップ解体の可否について、我々の見解がまた岐れる。

日本プロレタリア文化連盟（又は日本プロレタリア文化団体協議会）が創設されたあかつきには、従来のナップは解体すべきであるとの見解は、組織論的には全くの機械的なものであるし、特に芸術団体が創造的側面の任務に関する特殊性を持つものである事を、全く見落している点に於いて、第一の誤謬、すなわち組合運動の啓蒙的・日常的文化事業の見地からのみ芸術運動を律しようとする誤謬と関連している。

たとえばプロレタリア作家同盟と×色スポーツの会とを全然同一規準の上にならべたり、プロレタリア美術家同盟と反宗教闘争同盟とを全然一列に取り扱おうとしたりするが如きことは、甚だしい不用意なことである。ドイツに於けるかかるプロレタリア文化団体の協議会たる『労働者文化連盟』(Interessen-gemeinschaft für Arbeiterkultur ――略称イーファー Ifa）について見てもよい。

このイーファーは、非常に広汎なプロレタリア文化諸団体の総合的協議会であるが、しかしこの組織中には部門別があって、文学、美術、音楽、合唱団、演劇、映画、ラジオ、ドラマリーグ等の諸同盟は、すべて『創造的・表現的文化部門協働団』(Arbeitsgemeinschaft für schaffende und darstellende Kulturgebiete）の組織に一括されて居るのだ。但し協議会（Interessen gemeinschaft）の組織には決議権があるが、協働団（Arbeits gemeinschaft）の組織には決議権がないことは、附記して置く。

すなわち日本のナップも、協議会としての決議権は、文化連盟ないし文化団体協議会の方へ解消すべきであるが、しかし協働団体（Arbeits gemeinschaft）としての限りではこれを存置しなければならぬ。この協働機関の運用によってこそ、芸術運動全般にわたる創造的・表現的仕事の特殊な側面を擁護し、且つその特殊性の上に基づく、特別な、芸術団体のみの相互的協働作業を促進して行くことが出来るのだ。

ナップ加盟の諸同盟は、各単独に文化連盟ないし文化団体協議会に加入するが、同時にナップとしての協働組織も文化運動の全体的組織機構の中にあって認められなければならぬ。又プロレタリア科学研究所などに関しても、その仕事に学問的創造性の一面の存することを見落すことなく、これをプロレタリア大衆の啓蒙的・日常的文化教育活動、或はもっと広い政治的・経済的闘争との唯物弁証法的関連のもとに包摂してゆく組織案が樹てられなければならぬ。

第三の差違点

企業内に於ける文学グループや演劇グループや或は芸術グループを、ナップの大衆的組織そのものの一肢体と考えない同志古川の見解——これにも我々は反対である。

曰く——、

『一部の同志達の間には各種の芸術サークルのメンバーはすべて夫々の同盟員にすべきだと云う意見が出たが、それは誤りであろう』

理由は——

『工場・農村に於ける各種の芸術サークルは極めて広汎なものであって、その中には左翼的芸術の支持者のみではなく一般に芸術の愛好者の多数をも含まなければならないのであるが、若しそれらの人々のすべてを各同盟に加入せしめるようになれば、各同盟のプロレタリア的××的方針は、それらの人々が決議権を持つことによって、解消されてしまう危険を持つ』

しかしこの危険の解決はなんでもない『芸術サークルを作る場合にそのメンバーを詮衡する』と云うが如き方法によって解決するのではない。各同盟内の部門別に応じて、代表員選挙の基準を変えれば好いのである。この事は前記『プロレタリア演劇のための大衆組織について』の中で演劇運動の場合について論じて置いたが、その方法は、作家同盟その他の場合についてもやはり全く当てはまるのだ。たとえば地方的プロレタリア文芸雑誌なり工場新聞文芸欄なりを中心としての労働者農民の素人的作家団体は、労働者農民の自立的劇団にあたり、文学愛好者の読書会ならドラマリーグにあたる、と云った具合だ。

この基準の確立によって、我々は芸術サークルの全員を我々の同盟に組織する事が、何等の危険なしに、可能である。同志古川の見解は、ナップ所属の各同盟が、従来『その構成メンバーを技術者として、かなりの専門的な芸術的技術とかなりの高さのイデオロギー的確固性を要求』する組織規準を『自明』なものとして持続して来た事について正しい再検討を行っていながら、しかも尚今後のナップを労働者農民の自立的文化団体たる各種サークル組織以外の地位に、一段高い組織として、文化的セクトとして残存せしめて行こうとする誤りを犯しているのである。

一体『文学のサークルなり演劇サークルなりが、作家同盟なり劇場同盟なりのサークルとして認められる』べきものでありながら、なお、同盟とサークルとは別だと云う見解は、何を意味するか？　高級団体と低級団体！　専門家的団体と大衆的自立団体！　左翼支持団体と超政党的団体！　このいずれの観点からする分離策も正しくない。しかも同じ文化団体でいながら、労働者・農民の自立的なそれは、下位の団体として、絶えず従来のナップの延長的団体から指導を受けなければならないとは！

我々は、労働者農民を我々の大衆的文化団体に獲得しようとする場合に——インテリゲンチャに対しては別だ——文化的高さに関する採用の規準と、×支持および組合所属に関する採用の規準は、一切これを撤廃しなければならぬ。×支持および組合所属に関する採用規準を撤廃することを、×および××的組合の立場からする指導を放棄するものと同一視し、後者を放棄せざらんが為には前者をも撤廃してはならぬかのように考えるのは、大なる誤りである。

たとえば昨年十一月ハリコフ市に第二回拡大総会を召集した××作家国際同盟は、何処までもはっきりと超政党的な立場を掲げて居る。コミンテルン及び各国に於ける××を支持しなければならないとは、規約・綱領その他のどこにも書いていない。しかも××作家国際同盟が政治的指導を決して放棄していないばかりか、その点について最も著しい効果をあげでいることは、日本問題に関して、はっきりと『文戦』を排撃している事などに依っても分る。ドイツに於ける各文化諸団体にしても、メンバー採用の規準に文化的高さや×支持・組合所属に関する条件を設けて居るものは、一つとしてない。すべて、むしろ超政党的立場を標榜して、且つ労働者農民の自発的な文化的要求の上に組織を樹てようとしているのだ。

我々自身の大衆的文化団体を、如何なる規準からしても——進んだ団体と遅れた団体、専門家的団体と啓蒙的な団体、左翼支持の団体と超政党的な団体、等々のいずれの理由によっても——上位のそれと下位のそれとの二段に分けることは許されない。しかも不用意に二重組織をつくり出すことは、かえって甚だしく危険でさえある。たとえば同志古川は次のようなことを云っている。

『各種芸術サークルはまた、自らの代表者会議を持つことが出来る。代表者会議は常住的な指導機関ではなくて、必要に応じて開かるべきであろう』

しかしこうした代表者会議は、我々にとって困難な或る時機をとらえての社会民主々義者どもの働きかけによっては、我々の同盟の大会と対立するものにもなり得るし、また『常住的』なものにも転化し得るものである。そうなってはせっかくの、我々の努力による我々自身の大衆団体を敵のためにお膳立てしてしまう事になる。我々は敵の攻撃のあらゆる手を封ずることを、頭初から精密に計算して掛からなければならぬ。逆に、同志古川の主張の如き二重組織案は、すでに敵側の手中にある既成文化団体——反動的文化団体や右翼組合的文化団体——に対する場合にこそ採用すべきものなのだ。

我々自身がイニシアチーフを実行し、ヘゲモニーを確立し得る文化団体の創設にあたって、何の必要があって、危険な二重組織を現出させなければならないか！　政治的戦線に於いて、曽て労農党をつくって、二重政党組織を現出しなければならなかったような事情は、現在、特に文化戦

線の分野に於いて決して見ることは出来ない。

同志古川の組織案は、従来の我々の間違った組織の文化団体を、今にしてなお、真に正しく大衆的に開放することを躊躇している、文化的セクト主義の残骸をまだまだ引摺っているものだと指摘せざるを得ない。我々はすべてのサークル員に『各同盟の大会なり、総会なりに於いて、当然決議権』を持つところの『代表者』の選出権を大胆にほがらかに与えなければならぬ。かかる組織的開放によってのみ、我々と手を握るあらゆるサークル員に、我々の全組織に対する生々した関心と、協働の仕事に対する能動的実践的参与を期待することが出来るのだ。　以上

（ベルリン、一九三一・九・二二）

（一九三一年十一月「ナップ」に掲載）

芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争

——忽卒な覚え書——

蔵原惟人

（発表名—古川荘一郎）

わが国に於けるマルクス主義芸術理論は、昨年あたりから一向発展していないようである。ここには今まで語られたことの単なる繰り返しがあるばかりでなく、反って時には若干の後ずさりさえ見受けられる。そのことは勿論、芸術運動の多くの有能な指導的分子が敵に奪われたということにもよるのであろうが、この状態はそれらの人々の帰って来ている現在にまで続けられている。これは許すべからざることだ。何故というに、芸術に対する正しい理論の発展なくしてプロレタリア芸術運動の発展はあり得ないからだ。

しかもこの二カ年足らずの間は、我々にとって国際的にも国内的にも極めて多事な期間であった。即ちその間ソヴェート同盟の社会主義建設は更に偉大な飛躍を為し遂げ、資本主義諸国の政治的経済的矛盾は益々深刻化して行った。それのみではない。この二カ年足らずの期間には、ソヴェート××党第十六回大会、プロフィンテルン第五回大会、コミンテルン執行委員会第十一回総会等が相ついで開かれて、そこでこの新しい情勢に適応する×××新しい戦略戦術が決定された。そしてその間に、党内に於ける右翼日和見主義が克服され、反××的産業党、メンシェヴィキー等の陰謀が暴露され、××しつつある資本主義諸国の反ソヴェート・カンパニヤの本質が明かにされた。

これらすべての事実は当然実践への指導であるところのマルクス主義理論の発展に反映せざるを得なかった。実際、この期間に、ブハーリンの日和見主義的理論、その哲

学的基礎を為すところの機械論及びデボーリン一派のメンシェヴィキー化しつつある観念論は徹底的に暴露されて、哲学に於けるレーニン的段階の意義が闡明された。

このことは、我々にとって時に重要な意義を持つものである。というのは、日本に於けるマルクス主義の理論は、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンから直接に学び取られたというよりも、寧ろもっぱらブハーリン、デボーリンを通じて輸入されたからである。つまり我々にとっては、これまでの我々の理論を正しい基礎の上に根本から建て直して行かなければならなくなったのである。

芸術理論もその例外ではあり得ない。日本に於ける芸術理論は、これまで知らず識らずの間にプレハーノフ、ブハーリン、デボーリンのメンシェヴィキー的、右翼日和見主義的理論十弁証法的唯物論の単なるカリカチュアーに過ぎない福本の極左日和見主義的理論の影響を蒙って来た。のみならずそれは、これまでソヴェート同盟に於いてさえマルクス主義芸術理論の正統派と目されていたプレハーノフ、フリーチェ、ルナチャールスキイ、マーツァ、ベスパーロフ及びラップ指導部の一部（エルーロフ、リベヂンスキイ、部分的にはアヴェルバッハ、ファヂェーエフ）等の観念論的・機械論的・折衷主義的芸術理論によって色揚げされている。事実最近までのわが芸術運動の指導的理論であったところの蔵原惟人、中野重治、鹿地亘、窪川鶴次郎、川口浩、及びやや傍系的地位にあったが、しかも一般芸術理論に影響を及ぼした勝本清一郎、大宅壮一、小宮山明敏等の芸術理論は多かれ少かれ、これらの上に、或はそれ以下のものの上に立てられている。これらの理論が夫々の時代にプロレタリア芸術運動の発展にとって如何に重要な役割を演じたにしろ、我々は今新しい段階の見地から、即ち国際的・国内的プロレタリア運動の実践に於ける新しい段階の見地から、そしてまた哲学に於けるレーニン的段階の見地から、これらの芸術理論を容赦なく批判し、発展せしめなければならない。批判は特に蔵原の芸術理論に向けられる必要がある。それは決して彼の理論が最も多くの誤謬を含んでいるからではなくて、むしろ彼の理論が最も系統づけられ、そして最も大きな影響力を持っているからである。

私は今これらの諸君の理論を全部読み返して系統的に批判し発展させせるだけの時間を持っていない。それはナップ及びプロレタリア科学芸術研究会の理論家達の今後の協同的作業のために残して置こう。私はここで蔵原の理論を中心として、その批判と発展との方向だけを、覚え書き風に記して置くにとどめなければならない。

第一にそれは芸術と政治との関係の問題に関連している。蔵原はかつて「文学と政治」という論文の中で、プロレタリアの場合、政治も文学も共にプロレタリアの前衛の立場に立つべきであり、そしてその限りに於いて両者の方向は一致するものであると述べている。これはこの論文が

一九二七年に書かれたというギャップをつけて考えなければならないとしても、それにしてもこの見解は全く正しくないばかりでなく、芸術に於ける非政治主義の直接の理論的根拠ともなり得るものである。その後蔵原はこの問題についてはっきりとした見解を示していない。その他のこの問題について書いた理論家に於いても、この問題は正しく解決されて居らず、或いは政治と文学との機械的対立、或いはその機械的な結合が見られる。

しかし我々の文学と政治との関係は、経済、政治及び理論の関係と同様に、こんな機械的なものではない。それはプロレタリアートの階級闘争の実践によって弁証法的に統一されたものとして認識されなければならない。と同時にその弁証法的な差別、及び現在の段階に於ける政治の指導的地位が明かにされなければならない。この問題と関連して文学（芸術）の党派性の問題（レーニン「文学は×のものとならなければならない」）が立っている。

昨年の三月に出た、佐藤耕一の「ナップ芸術家の新しい任務」はこの問題の正しい解決に近づきつつある。我々はこの佐藤の基本的に正しい立場を、更に理論的に発展させて行かなければならない。

第二に、プロレタリア・レアリズムの問題が新しい見地から再検討されなければならない。この場合プロレタリア・レアリズムのスローガンは「ロシアやドイツやアメリカでは既に用いられていない」とか、それはもう「古くなった」とか云うだけでは全く不十分である。何故というのに、私の知っている限りではこの言葉はスローガンとしてはドイツでは初めっから用いられていなかったし、アメリカではやっと一九三〇年に初めてマイケル・ゴールドによって、しかもかなりに歪められて（「ナップ」一九三〇年一一月号参照）用いられたのであるから。で此処では、何故プロレタリア・レアリズムという言葉が不正確であるかということが理論的に明かにされなければならない。

蔵原はその「再びプロレタリア・レアリズムについて」の中で、芸術上のレアリズムは哲学上の唯物論に相応し、芸術上のプロレタリア・レアリズムは弁証法的唯物論に相応すると云っている。これは一見如何にも正しいように見える。しかしよく考えて見ると、哲学上の唯物論と芸術上のレアリズムとは必ずしも一致しないのである。例えば、哲学上では唯物論の立場に立っていながら芸術では非レアリストであることが出来る（ディデロー）。反対に芸術上ではレアリズムの立場に立っている人が哲学上では観念論者として残ることが出来る（トルストイ）。この矛盾の秘密を解く鍵は、ディデローとかフォイエルバッハとかいうような人が、自然に対しては唯物論者であったが歴史に対しては観念論者であった（マルクス「ドイッチェ・イデオロギー」）ということの中に求められなければならない。また芸術上のレアリズムと非レアリズムとの区別は哲学上に於ける唯物論と観念論との区別にのみではなくて、可知論

と不可知論との区別（エンゲルス「フォイエルバッハ論」）に対応している。芸術上のレアリストは多かれ少かれ自然の現象は人間によって認識され得るものであるという立場に立っている。――それが例えば、終局に於ては神が創造したものであると信じているとしても。プロレタリア・レアリズムの問題、更にそれらの正確な表現であるところの芸術に於ける弁証法的唯物論の問題は、レーニンの反映論（若しくは模写説、レーニン「唯物論と経験批判論」及び「哲学ノート」）の観点から発展させられなければならない。

第三に、芸術に於ける形式と内容の関係が、この二つのものの真に弁証法的な統一の中に理解されないで、しばしば分裂的に考えられている。成程これまでの我々の理論家達は一応は内容と形式との「弁証法的統一」について云々する。例えば蔵原はその「プロレタリア芸術の内容と形式」の中で、『芸術を「内容」と「形式」とに分けることは、唯抽象的、理論的にのみ可能であって、現実に於いては芸術の内容と形式とは、我々がしばしば繰り返す如く不可分なる統一の中にある』と云っているが、それにもかかわらず、批評的実践に於いてはしばしばこの二つを分裂して問題にしている。この意味に於いて蔵原は、その後に続いた形式と内容との完全な機械論的分裂（特に小宮山、貴司、窪川、池田、岡本（唐）、藤沢その他）を準備したものと云わなければならない。此処で蔵原の誤謬が拡大再生産されている。実際、我々にとっては「内容はいいが形式が悪い」とか「形式はいいが内容が間違っている」とか「我々は内容は卒業したから形式に努力しなければならない」というような言葉は完全に意味を為さないのである。また内容を離れて、プロレタリア芸術の形式（「力学的形式」「映画的モンタージュ」）を問題にするのも間違っている。

第四に、この問題と関連して芸術の階級性の問題がもう一度検討されなければならない。我々は今まで「内容はプロレタリア的だが形式は小ブルジョア的だ」とかいうようなことを平気で云って来た。しかし我々は芸術の内容と形式とを二つの階級の間に分裂するようなことをしてはならない。芸術の階級性は内容と形式との統一の中に、即ちその統一の中に於ける矛盾の中に求められなければならない。

芸術の階級性をその内容と形式との対立の中にではなく、その作品そのものの統一の中に見出した古典的な文芸批評は、トルストイを論じたレーニンの論文（「ロシヤ革命の鏡としてのトルストイ」）である。此処で彼はトルストイの中に於ける様々の内面的矛盾を指摘し、その階級性を明かにしている。我々は芸術作品を如何に分析するかということについても、レーニンから多くのものを学ばなければならない。

第五に、芸術の価値の問題について。ナップの理論家達

は芸術の価値は社会的価値であるということに落ちついたらしい。その意見は大体次のことに帰結する。

芸術の価値は、その芸術が一定の社会に如何なる役割を演ずるかということによって規定される。しかし社会自身が発展するのだから芸術の価値の絶対的規準はあり得ない。芸術の価値は社会的価値である。しかしこの社会的価値ということを狭い意味の政治的価値ということにだけ限定してはいけない。それは後者よりももっと広い。

これはこの範囲では正しい。しかし若しも芸術の価値をその時々刻々の社会的功利価値だけに限定してしまうならば、それは相対主義の誤りに陥るものである。また芸術作品を唯単に特定の階級的イデオロギーの反映であるというだけでも不十分である。芸術作品は唯夫々の時代、夫々の階級のイデオロギーを反映しているばかりでなく、また何等かの形で夫々の時代の客観的現実(自然及び人間の生活)を反映している。だから我々は、芸術作品の価値を問題とする場合、その作品がどの程度まで正しくその時代の現実の客観性を反映しているかということを明かにしなければならない。それは芸術の客観的価値を為すものだ。これを反対の方面から云い換えるならば、作者の住んでいた(または住んでいる)時代と階級の制約性がどれだけ客観的な真理の芸術的反映を妨げているか、作者の持っている階級的イデオロギーがどれだけ現実を歪めているか、ということを明かにすることである。そしてこのことが我々の時代の実践的必要ということと(弁証法的に)結びつけられて考察されなければならない。かくしてのみ初めて芸術の「社会的分析」と「芸術的分析」の二元的方法(プレハーノフ「二十年間」の序文、ルナチャールスキイ「マルクス主義文芸批評の任務に関するテーゼ」、etc.)が止揚される。

第六、このことは芸術史の方法の問題と、直接関連している。我々の間にはこれまで芸術史家の任務と批評家の任務との間の対置(芸術史家は作品の歴史的価値を明かにし、批評家はその現代的価値を明かにする)があったが、この対置の正しい理解によって除かなければならない。またこれまでしばしばあったように過去の芸術作品を問題にするに当って、それに封建的とか、ブルジョア的とか、小ブルジョア的とかいうレッテルを押しつけるだけで満足していたが、それだけでは既に、不十分である。その階級性の内容が説明されなければならない。そこには客観的真理の反映の若干の要素があることを見逃してはならない。従って過去の芸術史を「失敗の歴史」として、我々に用のないものとして性質づけることは誤っている。それは客観的真理の正しい芸術的反映の発展の歴史として規定されなければならない。そこには勿論一時的後退はある。そしてこの前進と後退とは、夫々の時代の歴史的制約性及びその階級の発生・発展・没落の過程と結びつけられて説明されなけ

ればならない。また、様々の理由によって、この発展は必ずしも直線的ではないとしても、即ち時には後戻りすることがあるとしても、歴史の進展によって全体として、この発展をもって現れる。しかしそれにもかかわらず全体として、ホメロス――アエスキュロス――ダンテ――シエクスピア――セルバンテス――モリエール――ゲーテ――ユーゴー――フランスのレアリスト――トルストイ――プロレタリア文学――の間に何等かの発展をも見得ないものは、人類の歴史に於いて何物をも理解し得ないものである。

以上は唯我々の芸術運動の実践によって直接的な意義をもつ重要な問題だけをあげたに過ぎない。またここにあげた問題も更に今後我々によってもっと発展せしめられなければならない。そしてその為には我々がこれまでに持っている芸術理論（国際的、国内的）に対する容赦のない自己批判が為されなければならない。そこでは無用な遠慮や、弁解や、妥協は不必要だ。

しかし此処で忘れてならないことは、この批判＝発展は、唯最近に於ける国際的及び国内的なプロレタリア運動の実践の観点から、そしてまた哲学のレーニン的段階の観点からのみ為し得るのであって、それは決して、これらの理論によってさえ克服された一切のブルジョア的、社会民主主義的「芸術理論」（日本に於いては平林イズム、青野イズム等々）の復活をゆるすものでないばかりか、反ってそれに最後のとどめを刺すものであると、いうことだ。

それと同時に我々は、過去の我々の芸術理論をもって悉く単に「歴史的意義」をだけしか持たないものとして、アルヒーフ（書庫）に納めてしまおうとする努力と闘争しなければならない。それは決して問題をレーニン的に解決する所以ではない。ここに於いても亦或る一定の歴史的段階に積極的な役割を演じた理論は、我々によって批判的に研究され、その積極的な部分が発展せしめられなければならない。でなければ我々の理論は少しも発展しないだろう。マルクスの学説自身がレーニンの云っているように「人類が十九世紀にドイツの哲学、イギリスの政治経済学、フランスの社会主義において創造したところの最良のものの合法的継承者である」のだ。この意味に於いて、我々は我々が過去に持っている最良の美学及び芸術理論、特にマルクス主義芸術学の建設に種々な意味で寄与したプレハーノフ（「芸術論」「階級社会の芸術」）、ハウゼンシュタイン（「芸術と社会」）、ルナチャールスキイ（「マルクス主義芸術理論」）、フリーチェ（「芸術社会学」「欧洲文学発達史」）、ルメルテン（「芸術の本質と変化」）、マーツァ（「理論芸術学概論」）、等を批判的に研究することによってそれを発展せしめなければならない。日本に於いても亦、これまで芸術運動に於いて多少とも指導的役割を演じた理論は、それらを批判的に研究する便宜の為に、適当な序文を附して、系統的に出版されることは望ましいことである。

（一九三一年十一月「ナップ」）

文学批評の基準

宮本顕治

文学批評の基準の問題に関しては、平林初之輔の提出した、芸術的価値と政治的価値の問題以来、多くの論争が続けられてきている。論議の展開は、相対立する二つの方向に進んでいる。

ブルジョア文学理論は評価の個体的主観性の主張を執拗に守ろうとし続けている。「科学的批評」の可能の範囲を、作品の発生学的説明の面にのみ限ろうとした平林初之輔の「科学的批評の限界」論、また、結極、評価なるものを、作品に対する個体的鑑賞として理解する小林秀雄、井上良雄等の主張をみれば、このことは明瞭である。例えば、このイデオローグたちの一人は最近もいっている。「ある物の価値とは常に、その物の「私」に対して持つ意味以外のものではない。「私」のための実践を離れて、断じて価値というものはないのだ。私がそれを愛するということが、それは価値を持つということだ」（雑誌磁場、井上良雄）

×

これらのブルジョア文学理論を特徴づけるものは評価という仕事そのものが、個体的人間の個体的な営みとして理解されている点にある。ここから、評価の主観性の理論が生れてくることは全く当然である。そして、これらのイデオローグたちにとっては、作品に対する個体的嗜好を物語ることより外には「評価」なるものは成立し得ないのである。そして、評価の科学性というものが、彼等にとって、単なる空語としか映らないのは、彼等が評価する人間の実践そのものを、社会・階級的実践としてでなく一つの個体的現象としてしか理解し得ないからである。それだから、ブルジョア文学イデオローグたちの、これらの個体的評価論を批判する前提は、人間の実践に関する彼等の理解の仕方そのものに向けられなくてはならない。

×

最近のブルジョア文学のイデオローグたちの理論は、プロレタリア文学への公然たる反対のみでなく、全く言葉の上だけで、唯物弁証法の真理性をうんぬんし「実践」なる言葉の粉飾的な使用によって、実質的に自己の理論の防衛を行っているところに、今日の特質をみせている。文学批

評の基準に関する理論においてもそうである。彼等も作品評価が一つの人間実践であるという。しかし、彼等に理解された「実践」とは、今日、語られるに価する「実践」の意義とは似ても似つかぬものである。

我々にとって「実践」としての評価とは、作品に対する読者としての個体的愛憎を表白することでは断じてない。評価が、若しそのようなものであっていいならば、一つの作品に対する読者の数だけの価値判断がそれぞれ肯定されるであろう。そして、このような評価とは、芸術的方法をもって客観的真理に近よろうとする文学に対する批判的導きを与えることを役目とするものではなくて、一つの個体的思弁の空語と帰するであろう。

×

人間の実践として、彼らに考えられているものは社会的階級的現実から孤立化された、抽象的人間――個別的人間の感性的機能である。かくて彼等の行う評価の基礎として理解されているものは、「人間学的」な実践である。「人間学的な観点は、人間を、単に感性的知覚の能力を付与された有機体として観察するに過ぎない」（ペー・クーチェロフ）。こうした立場に立っているブルジョア・イデオローグたちにおいて、評価の社会階級的基準、科学性が正しく認定され得ないことこそ必然なのである。

×

評価の科学性への懐疑、否定を中心とする、ブルジョア文学理論の様々な混沌に反して、文学批評の基準の問題は、プロレタリア文学理論においては、より新らしい解決の段階へたかまりつつある。このことを殊更に、対立的方向として示すことは、我々の単なる誇示ではない。「ブルジョア科学の持ち得るものは、それ自身の過去の歴史のみである。」ということはフォイエルバッハ的人間学、あるいは素朴な効用的実証主義（新興芸術派の芸術価値論に見られたような）によっているブルジョア文学理論の運命について いえることであるからだ。資本主義の危機の一般的激化は、我国のブルジョア文学理論の行方を密接に規定している。

文学批評の基準の問題、芸術の価値の問題は、プロレタリア文学理論においては、理論戦線の新らしい段階――レーニン主義的段階から正しく理解されつつある。例えば「ナップ」所載のすぐれた芸術理論である古川荘一郎の「芸術理論におけるレーニン主義のための闘争」は、その中でこの問題にも触れている。この問題の新らしく正しい理解は、次の如き素描に要約してなすことが出来るだろう。

×

まず、我々は、評価における党派性の見地を問題としなければならない。既にソヴェートの理論戦線において語られている如く、唯物弁証法の発展において、レーニンによって高く掲げられた、理論の党派性なる命題は、理論の階級性なるマルクス主義的命題の、新らしき段階における具体的発展を意味している。「哲学者は世界をいろいろに解釈して来た。大切なことは世界を変革することである。」というあのテーゼは、理論の持つ、批判的実践の意義の輝かしい最初の確認であった。

プロレタリアートは、社会発展の客観的合法則性における自己の位置を認識するだけではない。プロレタリアートは、自己の革命的実践、批判的活動によって、世界を変革する。そしてかかる階級の「社会——政治的および生産的活動」こそ、階級の前衛たる党の指導の下に行われる活動を先頭とするものである。プロレタリアートの見地に立つことは×の見地に立つことである。かくてかかる実践の導きの線となる「理論」の階級性は具体的には党の見地に立つことである。

文学の見地においても、このことは、いささかもかかわることがらではない。文学は×のものとならねばならぬという鉄則は、文学批評の現実的基準である。

文学批評における党派性の見地については、社会民主主義者たちは、全く相応わしい「非党派的」な見解を示して来た。今日まで「我等の輝ける指導者」であったものが、×の帰属を多少異にしたといって、裏切者と呼び、ダラ幹と断ずるようなゆき方は狭い党意識からは多少寛容され得ようが、プロレタリア文学の認識は絶対そうであってはならないのだ。」（青野季吉「我々の方向についての覚え書」）。×の帰属ということを、このように一面的にしか理解し得ないからこそ、労農大衆党のための文学的宣伝隊としてたち現れている彼等を、社会ファシスト文学派と呼ぶことが、彼等には「抽象的公式主義的」命名であるとしか感ずることが出来ぬのであろう。

評価の党派性の確認の見地に立てば、「社会民主主義的」とはもっとも現実的、具体的な規定であることが瞭然とするものである。社会民主主義文学派の人々も、文学批評における唯物弁証法の見地についてうんぬんしている。しかし、彼らは、弁証法的唯物論が、プロレタリア党の世界観であり、×の見地を離れては、弁証法的唯物論の現実的発展が存在しないことについては何事も理解し得ない。理論と実践の分離は、メンシェビィキ的伝統そのものである。

文学批評の基準として、評価の党派性を前面におしだすことは、恐らくマルクス主義を何か「有害な宗派」の類と考えているすべてのブルジョア的、そして御用学的、ならびに自由主義的科学の最上の敵意と憎悪を招くであろう。

しかし、党派性の確認は、唯物弁証法の観点にあっては、何ら認識評価の客観性、科学性と矛盾するものではない。むしろ、×的見地に立つ評価は、プレハーノフ的、フリーチェ的な、いわば死せる客観主義よりも「より徹底的に」かつより深く、より十分に自己の客観主義を行っているのである。

若干の説明を加えよう。我々の眼の前にある作品は世界に対する作者の一定の認識を表明しつつ、我々に働きかけている当該作品が、客観的現実に対する正しい反映によってなっているならば、その作品は読者を誤たない実践的方向へ導き、組織して行く。現実の客観性をゆがみなしに伝達し得る作品は現実社会の発展方向を示すと共に社会を必然的方向に推し進めるための実践のくさびとなり得る。

×

プロレタリアの見地とは今日の階級社会において、世界をもっとも冷酷な客観性をもって反映すると共に、そこから世界を××へと働きかける階級的実践の見地である。ここには人間的実践を主観と客観との生物学的自然主義的形態においてのみ理解する素朴唯物論的理解とは全く異るところの主観と客観との統一としての社会的、階級的実践の見地が、もっとも理想的な意義をおびて表現されているのである。それだから我々は、この観点に立って、客観的現実に対する作品の認識を分析し、そのことから当該作品の実践的意義を評価する。

我々は考える。文学批評は、文学現象の間に「克服すべからざる歴史的傾向」を証明するに止まるのではなく、文学現象と社会の基本的発展方向との合法則性を理解したのちに、現象に対する、階級的実践、党的見地からの「導き」「働きかけ」を与えるものでなくてはならない。そして、客観的現実の正しい反映に立っている作品こそ、社会発展に対する実践的意義を持つということの弁証法的統一裡の関係を明らかにするものでなくてはならない。

×

この観点は、公然たる党派性、階級的実践の見地であり、同時に、比類なき客観性の見地である。そして、この立場こそ、文学批評における科学的基準の現実的把握を意味するものである。文学批評における唯一の科学的基準は唯物弁証法の見地に立つものよりほかにあり得ない。ここでは、作品に向けられた説明は評価と別々のものとしてはあり得ない。この見地は、作品の誕生の全秘密を、客観的にたどり得るとともに「一切の評価に際して、直接又は公然の一定の社会的集団の観点に立つことの義務を負わされている」（レーニン）のだ。

理論における、党派性の確認こそ、生ける客観的見地で

あることをもっとも痛烈に語ったものは、だれよりもレーニンであった。レーニン的段階へのたかまりを期しつつある我国のプロレタリア文学批評は党派性の統一を実践しなければならない。このことは、嘗ての我国のプロレタリア文学陣営における芸術価値論の多くの混迷、特に素朴実証主義見解の残存（例えば作品の現象的効用即ち価値概念とみた勝本の見解、需要供給関係に価値概念を設定した林田茂雄の見解等に強く代表されている）に正しい訣別を与え、同時に新らしき段階における文学批評の地盤を築くものとなるだろう。

（一九三一年十二月）

プロレタリア詩人会発展の概観

——機関雑誌発刊の一週年目に——

遠地輝武

はしがき

日本に於けるプロレタリア詩運動の歴史は未だ若い。一九二五年十二月「日本プロレタリア文芸連盟」が創立せられて、この運動の最初の組織的な基礎が確立せられたのであるが、しかし具体的には一九二九年一月に再組織された全日本無産者芸術団体協議会（ナップ）の創立によってはじめてプロレタリア的な組織的基礎が強化されたのであった。ところでわがプロレタリア詩人会はこのナップ再組織に於ける日本プロレタリア作家同盟の展開した文芸運動の顕著なる発展の過程に於て、特に詩の運動の分野を担当する団体として発生し、発展して来たものである。従って発展の概況を叙述するについては決してナップ・作家同盟との関係を切離して考えることは出来ない。すべて「作家同盟の運動の具体的な展開」との関係に於て見る時にのみ、わが詩人会の発展を歴史的に正しく見ることが出来るものだ。

第一期　結成前後より機関誌発行（一九三〇年七月——十二月）頃まで

第二期　機関誌発行以後再組織の確立（一九三一年正月——六月）頃まで

第三期　再組織後——現在（七月頃より）まで

今われわれは大体右のような三つの段階に於て、その発展過程を見、簡単に詩人会の将来問題についてもふれて置きたい。

第一期　発　生　期

一、詩人会の結成

一九二七年の上半期、「モスクワに開催せられた日本委員会に於けるコミンテルンの批判」により日本の共産主義運動は「従来のセクト的傾向を清算し了り」急速に党大衆化の実行に這入って行った。この流れに沿って、マルクス主義芸術運動も急速に統一化への過程が展開せられ、二八年三月全日本無産者芸術連盟が組織され、更に二九年一月の再組織による全日本無産者芸術団体協議会の創立によって全国的縦断組織が完備することとなった。ナップの斯の如き組織の確立は、亦当然その芸術運動の理論を基礎的に深化させずには置かず、早くも一九三〇年上半期に於て、作家同盟では文学運動をボルセヴィキ化するという中心的任務の達成に全力があげられることとなった。

かかる情勢はわが国のプロレタリアートの闘争の激化と共に、「詩分野に於ける各同人雑誌の左翼化を促した」当時「前衛詩人」「前衛評論」「新興詩人」「工場」「地下鉄」「赤鋒」「鎌」「衆像」「新興日本詩人」「宣言」其の他の左翼的同人雑誌が出現し、その統一化——即ち集中的組織的に闘争を展開すべく叫ばれることとなるや、その組織的意義を自覚した各同人雑誌は各々代表を送って第一回代表委員会を六月下旬に持った。この代表委員会は急速に詩人団体の組織という方向に発展して行った。当時の作家同盟にあっては詩班の力極めて弱く、この代表委員会の一部の意向はそれを強化する意味で日本プロレタリア詩人同盟の結成という方向にまで傾いたが、委員をあげて作家同盟に諮問した結果「わが国に於ける芸術運動の主体となるべきものは『ナップ』を措いて他にあり得ない。」従ってわれわれは「ナップの指導下に立って芸術運動の諸分野に於ける（プロレタリア詩）の確立、ブルジョア詩の闘争克服へのために闘いを押し進め」なければならないことが明らかにされ、これを闘争目標として九月中旬に「プロレタリア詩人会」を結成するに到った。

二、組織機関誌の創刊

プロレタリア詩人会結成後、われわれの課題として日程に上げられたのは、組織確立の問題と機関誌発行の件についてである。

先ず準備委員会が解散して地域的な班組織に改められ、そこで自主的な研究会を持つと共に、又班より二名の委員を選出して、自然発生的な統制委員会を構成した。この委員会に於て庶務を統轄し、詩人会強化の方針を具体的に討議遂行して行った。その主なる問題が機関誌発行に関する件で、これは十月号をもって各同人雑誌を廃刊したところから一方班研究会の確立にもかかわらず急に会員の作家活動が衰え、従ってこれを取り返すための唯一の方法として問題にされたのであった。しかし実際にこれが具体化され

るまでには種々経済的な障害があり、十一月創刊の予定が延引し乍ら年を越え、漸く一九三一年一月号の「プロレタリア詩」創刊より、具体的に、詩人会はその発展の第一歩をふみ出すこととなった。

第二期　成　長　期

一、詩人会の意義と任務についての再認識

われわれは詩人会の結成に際して、一応われわれが『ナップ』へ（作家同盟の意）の指導下に立って、芸術運動内の諸分野に於ける『プロレタリア詩』の確立、ブルジョア詩との闘争克服へのために、「闘争を押し進」（詩人会設立の辞）むべきことを規定した。この規定は大体誤りなかった。しかしわれわれが機関誌を創刊することとなり、われわれの運動が急に具体化するにつれて、「では如何なる位置に於て『ナップ』（作家同盟）の指導下に立ち、又それと緊密に結びつかねばならないか」の問題が当面の問題とならねばならなかった。そこでわれわれは討論の結果詩人会の意義及び社会的任務を次の如く再認識することが出来た。

「ナップ（具体的には作家同盟を意味する）は指導体であるが故に、詩人班は亦、詩分野に於ける指導体である。それ故詩人会は其処に於て各詩人がその意識及び技術を、マルクス主義的に鍛錬する『練習場』であり、同時に指導体の貯水池である。だが貯水池は決して固定化したるものではない。それは絶えず質的に発展するものである。それ故ある社会的階級的必要に応じては、適宜に独自的活動と飛躍とがなされるであろう。でその貯水池より送り出された詩人は常に貯水池を監視し、指導し、質的に高めねばならない。」

兎に角「プロレタリア詩人会は「練習場」であり「貯水池」であると同時に、その指導下に立ち、それと有機的に緊密に結びつくことに依り、プロレタリア詩運動の階級的任務を、即ち「プロレタリア詩の確立」「ブルジョア詩の克服」労働者農民の要求に答え得る詩の生産を、あらゆる困難をはねのけ断固として戦い抜くものであらねばならない」（機関誌第二号巻頭）という事になった。

われわれのこの再認識、再規定もこの限りに於て一応正しかった。しかし注意すべきことは、ただ一つ、かかる規定を指導体との組織関係に於て、如何に実践的に結合さすかに問題の中心があるのであって、詩人会が各詩人の意識的、技術的な鍛錬場たる意義も、亦、その適宜な独自的活動の能力も、その指導体との組織的関係に正常な結合に於てのみ解決されるものであったことを、われわれは自己批判すべきであろう。

二、詩人会の組織確立

詩人会の意義及び社会的任務の再認識を得るや、われわ

れはその規定に応じて、組織の変更を営んで行った。
即ち、一月の下旬に第一回大会を召集し、この大会に於て正式に詩人会（ＰＤ）の結成を宣すると共に綱領、行動綱領、規約を制定し、且つわれわれの最初の中央部とも言うべき常任委員会を設けて詩人会の庶務を具体的に執行することとなった。この常任委員会は委員長、書記長、及び組宣、編輯、財営、図書、救慰（之は後廃止）の五つの専門部長によって構成された。第一回大会に於て友誼団体としてプロレタリア歌人同盟より激励のメッセージを受けたことは、意義深いことであった。
ところでわが詩人会のこの組織の確立にあたって、先ずわれわれの努力の向けられねばならなかったことが、作家同盟との有機的な緊密という方向へであらねばならなかったにもかかわらず、われわれの組織構成の中心点が、詩人会の「適宜に独自的活動と飛躍とがなされねばならぬ」という意図の上になされたことは注意すべきであった。勿論、だからと言ってわれわれは決して作家同盟との関係を無視したのではなく、組織上の形式としてはその後作同詩研究会（詩人班が改められたもの）責任者と詩人会書記局との連絡、詩人会員の作同詩研究会への参加等々が闘いとられた。

三、創作方法に関する討論

さて、斯の如くして多かれ少かれの矛盾乃至は未成熟さをはらみつつも、詩人会自体のかかる組織的発展は、亦極めて旺盛にわれわれの作品活動を展開せしめた。
創刊号より、七月号に至る六冊の機関詩（六月号休刊）には七十余点の詩作品、十数点の海外のプロ詩紹介及び約二十点の論説・批評を発表している。では、われわれはかかる生産活動の過程に於て、如何なる創作上の実際問題を経験したか？

一、類型化の問題

この問題は先ず村田達夫の「一つの提案」（三月号）に於いて具体的に問題とせられた。即ち、「わがプロレタリア詩は、幾度かの鋭い自己批判によって絶えざる前進をつづけて来た。概念的なもの、観念的なものから、より具体的なもの、現実的なものの中へ。」「われわれの歌い上げねばならぬ素材は×のスローガンに沿うことによって、階級的に整理された。そしてまさにプロレタリア・リアリズムはコンムニスト・リアリズム（マルクスレーニン主義的リアリズムの意）にまで発展した。かくしてわれわれの芸術製作の構えに関する理論的輪廓は出来上った。われわれはペンを取り上げた。だが、この第一の点に於て、われわれの詩の大部分が似通っているのを発見した。それは類型化であった」とそこで村田はこの類型化の打破として、われわれの作品生産が「生きた労働者の集団的に訓練され生育された個性と感情をもった眼」で、見ることからなされねばならないことを主張し、特に「典型的な、何処にでも適応する階級的闘士型の詩であることを些かも必要としない」こ

とを強調して、『われわれが労働者農民の生活に近づ』くべき必要性を述べた。この論文は非常に重要な論文であった。即ち、ただ村田が「一つの提案」として提案した限に於ては、われわれの詩作品の類型化、固定化を救うものが一つのモニュメンタル叙事詩的作品を生産することによって得られるように強調されている所にやや別箇な結論を導き出している不充分さはあったが、われわれは寧ろこの欠点よりもわれわれの詩のスローガン化、詩の組立てに於ける公式論理的な極左主義の排撃として、重要な役割を果したことに注意すべきであった。

二、右翼的偏向の問題

ところで、一方この詩に於ける極左偏向に対して、当時われわれの詩作品に特に注目すべき傾向として他方に、それは極めて一部分的にではあるが右翼的な日和見主義的偏向が表われかけておった。これについて遠地輝武はその論文「作品批判の方法論の探究として」(四月号)の中で次のように批判した。即ちそれを要約すると結局右翼的な偏向を持った芸術がこの戦いの時代のわが国の社会情勢の中から生れるのは、「詩人が未だにインテリゲンチャの域を脱しない」からに他ならない。詩人がインテリゲンチャとしての日和見的な見解から脱しないが故に「プロレタリアートの闘争が激化するに従って、観念主義化し、現実を遊離して逃避へ、その遊離の道に於てロマンチシズムへ、或はセンチメンタリズムへと急ぐ」と云うに在る。しかし、この遠地の理論は多少一面的な物の見方に陥って居った。問題の中心は詩人がインテリゲンチャであるが故に右翼的な偏向を持った詩が生れたのではなく、工場農村の中に置かるべき詩運動の基礎が街頭的、文化主義的であったため、従って詩人の物の見方が弁証法的な唯物論者の方法から遊離して、右翼的な偏向が生れて来たことを批判するべきであった。

尚創作上の問題、批評に関する問題として、ナップ側から中野重治が「詩の仕事の研究」(七月号)を森山啓が「一つのロマンチズムの傾向への批判」を発表し、労働者側から山本一夫が「どう云う芸術——運動を要求するか」を発表して、われわれの作家活動の批判者として協力していることは、この期間の詩人会の全活動に重大な意義を与えた。又、新井徹、平沢貞二郎、佐野嶽夫、北野康等が会員として作家批評に力をなしていることも忘れてはならないであろう。

四、ブルジョア詩との闘争

われわれは斯くの如くして常に厳正なる自己批判のもとにプロレタリア詩の確立に急ぐと共に、又ブルジョア詩に対する闘争とその克服につとめて来た。

A、超現実主義詩の批判　この方面については四月号に於て登口義人が「超現実主義詩論批判」を発表し、この傾向の芸術にふくまれた夢想的、阿片的なブルジョア性を徹底的に批判している。

B、ブルジョア詩壇のヨタ者　に対して、平沢貞二郎は彼等が無批判にプロレタリア誌を慢罵し、所謂「絶対自由」の切り札をふりまわす愚劣な態度を批判し、われわれの詩の優位性を論じて、彼等をプロレタリア詩運動の側へ移向せしむべく、正当な努力をしている。

又、ブルジョア詩との闘争ではないが、登口が「機械として」郡山弘史が「詩の形式に関する断片」を発表して、われわれのプロレタリア詩学の確立に努力していることや、更にわれわれの側の記念的なカンパーニヤに応じて、プロレタリア詩に関する文献が発表せられて来たことも意義あることと言わなければならなかった。

五、作品及び発表形態

では、われわれはこの期間にどんな作品を持ったか。その時々にいろいろな意味で推賞され、問題とされた作品を取り上げると、（作品の紹介については編輯会議及び月評を参酌して出来るだけ客観的に取り上げる考えであるが、幾分の私見が挿まれるだろうことはまぬかれぬものとして、更に批判的に読まれ度し）

一月号に於ては「中国の同志に手をさしのべる」（橋本正一）「牢屋に冬を越すの同志へ」（村田達夫）「捕われた同志のおっかさん」（川口明）の諸作が編会で推賞された。このうち川口の作は詩の構成に映画的方法が用いられている処を問題としたのであった。二月号では「入営万歳」（新井徹）「アカホシ農民学校を守れ」（金龍済）の作が優れ、「猫やなぎ」（遠地輝武）は詩の主題の分野を拡大しようとする意図の下に努力された所に問題をふくんで居った。三月号では「啓坊のことなど」（村田）「玄海灘」（金）「牢獄の中で」（松浦茂作）「雪」（伊藤信吉）などよく、四月号では「芝浦」（村田）「国境を越えて」（白鉄）などが中心作と云われ、「前夜の動力（長編叙事詩）」（千田岩太郎）が新しい試みとして問題を含んでおった。五月号では組織的生産による方法で「メーデー」（佐野嶽夫、村田、金）が製作せられ一つの記念的な試みとして意義をもっておった。「俺達の唄を！」（多木要作）も詩に土地の民謡を折込んだ、面白い試みと云われた。七月号には詩が少く「六郷川の岸」（田中英士）が可とせられた。

尚、われわれは一つの新らしい作品発表の形態として四月にプロレタリア歌人同盟との共同主催、日本プロレタリア美術家同盟の後援で「プロレタリア詩と画の展覧会」を開催している。これは単に発表形態の新しい方法であったばかりでなく、われわれの詩運動を一歩前進せしめたものとして意義深かった。即ち、われわれはこの展覧会の中心スローガンとして「失業反対」をとりあげ、一つには展覧会自体の政治的意義を深からしめると共に、他方プロレタリア歌人同盟との友誼関係を甚だ深からしめた。この展覧会前後より、歌人同盟と詩人会との合同の問題が起ったが、詩人会ではそれが合同ではなく歌人同盟の詩人会への解消であることを明らかにし、爾後具体的な働きかけによ

ってそれを誘導する位置についた。

第三期　発　展　期

一、詩運動の共産主義化

A　文学運動の中心的方向と詩人会の組織問題

一九三一年度に於けるナップ各同盟の芸術運動に於ける中心的なスローガンは工場農村を基礎とする××主義芸術運動の大衆化ということであった。即ち、詩運動の分野に於ては××的プロレタリアートの文化教育活動の問題がプロレタリアート自身の問題として自主的に提起され、これの解決の問題が当面の日程とされて来た。のみならずかかる根本的な問題は亦、日本の××的プロレタリアートの文化教育活動の一部門を担当して、詩運動への積極的な参加を目図するわが詩人会の根本組織の問題にも多くの抵触と刺戟とを与えねばおかなくなった。

先ず問題の最初の現れは作家同盟との関係の行詰りから発生した。即ち、既に述べて来た如く、わがプロレタリア詩人会は作家同盟の詩人たるべき詩の技術とマルクスレーニン主義への理解・意織の鍛錬場として一応は規定され乍らも、実質的にはあくまでもナップの中心活動の方向を自己の活動の中心任務とする別個の団体として存在すべく傾いて居った。この作家同盟との有機的結合の欠如は約十カ月の組織的訓練を経て旺盛に発展して来た詩人会の力をより作家同盟と切り離して同盟をつくるべく、擡頭せしめると共に、特に六月に到り「ナップ」機関誌に発表せられた古川荘一郎の「プロレタリア芸術運動の組織問題」に関する所論の重大な刺戟と一方作家同盟の詩人会に対する消極的態度とが影響して、ここに果然作家同盟の頼り難き問題が詩人会内部の問題となったのみならず、当時の詩人会にあっては更に一つの問題、即ちプロレタリア歌人同盟の解消問題が具体化し、これと既に目前に控えた詩運動の転換・発展の必要性が起りそれに順応すべき詩人会自体の再組織を必然づけねばおけなくなった。

B　活動方針の決定と再組織の確立

われわれは急速に再組織の方向をたどって行った。即ち六月末、正式に臨時大会を召集し、当面の国際的、国内的な客観情勢に応じて詩運動の基礎を工場・農村の中に打ち建てることに積極的な努力が払われねばならぬことを決定した。言うまでもなく、かかる見地に立つことによってのみ、われわれの運動がプロレタリアートの文化教育活動の問題を中心とするナップとの抵触を防ぎ、且つナップの方針を具体的に展開して、その活動の有機的な構成部分となり、工場農村に於けるプロレタリアート、農民の文化的成長の基礎の上に、××主義的詩運動の大衆化が可能であることを認識したからであった。

1、詩運動の基礎を工場農村の中に打ち建てろ!

2、移動活動を通じて我々の詩を工場農村へ!

3、労農通信活動の誘発へ農民詩への関心を高めよ！
4、詩を中心とした一切の反動的韻文芸術と徹底的に闘え！
5、封建的韻文芸術（短歌・俳句・川柳）をプロレタリア自由詩の運動の中へ解消させろ！
6、詩分野に於ける社会民主主義的、ファシズム的傾向を叩きつぶせ！

以上のようなスローガンを打建ててわれわれは愈々具体的に運動を展開することとなった。従って詩人会の組織もこのスローガンの実践化に必要な組織として、一、本部支部の確立。二、本部構成を従来の専門部より救慰部を廃し、新たに移活教育の二活動部を構成し東京・福岡の二地方支部、大阪・（現在は支部）岡山、新潟、（現在では横浜・奈良を加え、岡山は壊滅）の各支部中に九十余名の尨大なる会員を有する、全国組織となり、恰も詩運動に於ける日本の指導体であるかの如き観を呈した、――だが、われわれが斯く意識的と無意識的とに係らず詩人会をかかる方向に再組織したことは、一方作家同盟の消極的態度を問題とするばかりではなく、当然その責は詩人会自体の作家同盟への結合の技術的不充分さに在ったことも批判しておかねばなるまい。

C　作品の大衆化

一、創作方法の問題　詩人会の組織問題と共に、われわれの日程に上げられたのは詩に於ける創作方法の確立に就ての問題であった。

これについて従来多くの論者達によって部分的に言われて来たものが、比較的まとめられた形で、先ず中野重治の「詩の仕事の研究」（七月号）から展開せられることとなった。

中野はこの論文に於て、詩の領域に於ける機械論者への闘争を正面から火蓋を切った。これは非常に重要なことであったのみならず、又之が非常に多くの影響をプロレタリア詩人会に所属する詩人に及ぼした。ただ中野はこの論文に於て詩に於ける機械論者をやっつけるの余りに、「われわれの作品の題材撰択の方向があくまでもプロレタリアートの弁証法的規準におかれているという意義を過少に考える結果に走っていると」（ナップ八月号宮本の論文より）他から考えられはせぬかと思われる誤りを犯したが、そのことのために決して中野の揺籃が無駄でなかったことはいうまでもない事であった。

又、この中野の論文と共に、ナップ九・十月号に発表せられた谷本清の「芸術方法についての感想」も多くの影響を詩人会の詩人の創作活動の上に及ぼした。この論文を中心としてわれわれの詩の創作方法に於ける唯物弁証法のための闘争が盛に展開せられ、それは十月号プロ詩に於ける白鉄の「唯物弁証法的理解と詩の創作」森山啓の「芸術的方法の問題に関連して」の諸論文、村田達夫の月評等によき根底を与えることとなった。かくしてこの旺盛に展開し

はじめられた批評活動と一方に於ける工場農村を基礎とするプロレタリアートの文化教育活動の具体的な展開との相互関係によって、われわれのプロレタリア詩は未曽有の発展を遂げて行った。

二、作品活動　機関誌九月号以後、われわれの作品活動の様子は非常に変って来た。それは非常に「いい意味で」であった。従って多くの新しい問題を提起した詩と、新しい詩人を生んだ。（言い落したが九月より十二月に至る機関誌に発表せられた詩は五十四篇、評論・感想・批評・紹介が二十篇、海外詩作品が六篇、他に工場農村より詩が三十一篇であった）その主なるものとしては、

九月号では「弟よ」（新井）、「疲れ」（細井敬）「割引電車」（佐野和子）、十月号では「用意」（細井）「朝ともなれば」（田中）「夜明けを待つ」（新井）「晴れ」（金）、「朝早く」（登口義人）十一月号では「十一月の空」（佐野）「母」（村田）「働く子はにくむ」（鈴木澄丸）「消息」（平沢貞二郎）「赤い塀」（林衛）十二月号では「若者」（北山雅子）「兄ちゃん」（木村好子）等があげられるであろう。これらはいずれも一長一短を有し、例えば部分的現象と現実の本質を切離して主題の革命性を薄めたかの感ある作品、抽象的なイデオロギーによって公式主義的なアカデミズムを形成しつつあるかの感ある作品、階級的分析を持たない、或いは現象に対する追随主義に他ならぬと考えられる作品、エピソード的な作品等いろいろであるが、しかしプロレタリア詩を弁証法的な創作方法によって前期より遥かに前進せしめていることは否めない事実である。

尚、この期間にわれわれは機関誌を工場からの通信で活気づかせたこと、そこから盛り上る新しい詩人の誘発につとめたことは意義あることであった。又これとは別に来海政敏が海外詩壇特にソヴェト・ロシヤの詩壇の紹介につとめたこと及びわれわれの関心が国際的に高まって行ったことも忘れてはならないであろう。

D　移動活動の展開

詩人会の再組織確立後、作品活動と共にわれわれの旺盛に展開したのは移動活動であった。これは主として東京支部福岡支部に於てなされた。

A、東京支部の活動　最初東京支部の移動活動部は、本部移動活動部の仕事に解消し混乱しておった。これは本部移活部の仕事がはっきりと認識されていなかったことから起った。しかし間もなく移活部の仕事がのみこめ、その性質が次第にはっきりとするにつれて、本部・支部の共同の仕事となし、更にこれを支部の仕事として展開すべきよう認識された。とは云え勿論かかる組織上の問題は移活部自体の活動に何等の障害を与えず、先ず九月六日の青年デーを記念するための反宗教闘争同盟準備会（戦無の準備会）主催のピクニックに参加したのを手初めに第一回、二回の「戦旗の夕」（上野自治会館）、亀戸、王子に開催せられた「労働者の夕」東京、横浜で開かれた数回の「無産者病院

の夕」其の他「文化クラブ」「労働クラブ」等々に出掛けて盛に詩を朗読した。これらは凡て非常に成功であった。と同時に労働者大衆のプロレタリア詩を歓迎することに恐れをなした敵階級は、到る処でわれわれの詩の朗読を中止させ、遂に「発禁の雑誌に発表された詩を朗読した」という理由で、「無産者病院の夕」に出演した千葉武郎が検束拘留された。これはわれわれの移活の最初の犠牲であった。

又、われわれは数度の詩の朗読研究会を持ち、PMプロットの同志から朗読に関する技術的な指導も受けた。多木、田中、北野、登口、新井、渡辺等が主として活動した。

B、福岡支部の活動　福岡支部では主として消費組合、農民組合主催の集会で活動した。地方支部の特殊性に応じて活動を展開したことが意義深かった。渋谷、林、松浦、大山等が活動メンバーであった。

かくしてわれわれは労働者農民の中に詩運動を展開して行くと共に、又この期間に於て公判闘争のための「詩と書展」を計画。

歌人同盟の後援の下に東京及び福岡にて開催した。作品の撤回、押収にもひるまず、われわれは敵階級の激しい弾圧の中に詩運動の旗を翻し、特にこの展覧会の最終日には江東地方労働者との懇談会を持って、詩に関する意見を交わせた。これは非常に意義深かった。又、われわれは労働者農民と接近すると共に、階級的な出版物にも多くの詩を送った。

二、プロレタリア詩人会の発展的解消

一九三一年度の後半期に於てナップ作家同盟の組織方針はその新たなる転換の道に於て急激に大衆化された。十月に於ける文学新聞の発刊を契機として、工場農村に文学サークル組織が盛り上り、これらのサークルはいつも作家同盟の指導に旺盛な活動を展開している。

このサークルの問題を中心として、詩人会の存在が作家同盟自体の問題とならずに置かなかったことは言うまでもなかった。が、これより前、わが詩人会にあっては、漸く自己の発展と作家同盟との関係の矛盾の増大を認識して、しきりにその解決方法についての具体的な問題を討議せずには済ませなくなった。即ち、十月初旬に定期の中央委員会を召集し、そこでこの問題に関する具体的な方針について討議した。

一、運動の新たなる転換の道に立てる詩人会の任務及び組織方針

一、日本プロレタリア文化連盟への加盟の件

一、その他

これがその際の中心的な議題であった。しかし文化連盟への加盟は詩人会と作家同盟との関連に於て解決せられる問題であり、従って中央委員会での問題は「作家同盟との関連に於ける詩人会の任務及び組織方針」ということが中

心的に討論せられ、

一、わが詩人会の存在的意義があくまで既定方針（作家同盟の詩人たるべき詩の技術的意識的鍛錬場たること）に変りなきこと。

二、従って、全国的組織を持ち、日本に於けるプロレタリア詩運動の中心的、指導的勢力を実質的に展開しつつあるも、これは誤謬であって、あくまでもそれは作家同盟の詩人によってなされねばならぬこと。

三、然るに作家同盟の詩班（詩研究会）の現在の力は未だ充分それを成し遂げる勢力にまで到達していない如く考えられるので、これはわれわれが一刻も早く作家同盟へ解消することによって解決しなければならぬこと。

等が基本的に明らかにせられた。これは非常に正当なことであった。その後この問題について作家同盟詩研究会の席上で及び個人的には窪川鶴次郎が「プロ詩人会の存在的意義に就ての私見」（十一月号）として述べた。この窪川の論文は飽迄も私見として見なければならない。部分的には事実の具体性をかき、又修正や補足せられねばならない点があるが、しかし基本的には詩人会の自己批判と一致している。そして今は詩人会の歴史的な発展的解消問題もただ時期の問題として残されているに過ぎないであろう。

尚、歌人同盟の詩人会への解消の問題は、詩人会自体の解消問題と関連して一時的沈滞を見せているが、歌人同盟の積極分子は、自発的にぞくぞく詩人会へ加りつつある。

三、解消の時期

最後に、ではわれわれは何時頃その解消を遂げ得るであろうか？ についての私見を付け加えて置こう。

明らかなことは詩人会がこの解消のための残務を整理し終った時である。

一、会員の出来るだけ多くを作家同盟の支部、支準に送り込むこと、それら作同の組織の全然ない地方に於ては、全員は自発的に、支準組織の活動を積極的にすること、更に残ったメンバーをそれぞれの地方の一個の独立したグループとして作家同盟のサークルに再組織、或いは現在のサークルに合流せしめること。

一、中央部地方支部の廃止。これは右の会員の将来問題の解決が進展することによって可能。

一、機関誌の廃止。しかし現在のわれわれの機関誌に代るべき詩人の発表機関を作家同盟の詩研究会より発刊するための努力が払われねばならぬこと。

一、会計の整理。等々が今後の詩人会の残務として残されている。

今、詩人会中央部では出来得る限り、この解消を短期間に遂げ、日本の分散したプロレタリア詩運動を組織的に統一して、国際的国内的プロレタリアアート農民大衆の支持と協力の下に、より旺盛な、より具体的な活動を展開する気運に燃えている。かくして

プロレタリア詩人会の発展的解消万歳！

プロレタリア詩運動の強化発展万歳である。

（一九三二年一月「プロレタリア詩」）

III

詩・短歌

雨の降る品川駅

中野重治

辛よ　さようなら
金よ　さようなら
君らは雨のふる品川駅から乗車する

李よ　さようなら
も一人の李よ　さようなら
君らは君らの父母の国にかえる

君らの国の河はさむい冬に凍る
君らの叛逆する心はわかれの一瞬に凍る

海は夕ぐれのなかに海鳴りの声をたかめる
鳩は雨にぬれて車庫の屋根からまいおりる

君らは雨にぬれて君らを逐う日本天皇をおもい出す
君らは雨にぬれて　髯　眼鏡　猫背の彼をおもい出す

ふりしぶく雨のなかに緑のシグナルはあがる
ふりしぶく雨のなかに君らの瞳（ひとみ）はとがる

雨は敷石にそそぎ暗い海面におちかかる
雨は君らのあつい頬にきえる
君らのくろい影は改札口をよぎる
君らの白いモスソは歩廊（プラットホーム）の闇にひるがえる

シグナルは色をかえる
君らは乗りこむ

君らは出発する
君らは去る

さようなら　辛
さようなら　金
さようなら　李
さようなら　女の李

行ってあのかたい　厚い　なめらかな氷をたたきわれ
ながく堰かれていた水をしてほとばしらしめよ
日本プロレタリアートの前だて後だて
さようなら
報復の歓喜に泣きわらう日まで

貧農のうたえる詩

長沢　佑

春――　三月――
薄氷をくだいて
おらの田んぼを打った
めっぽー冷こい水だ
足が紫色に死んでいやがる
今日は初田打
晩には一杯飲めるバーと気付いたので
おらあ勇気を出した
ペッ！
手に唾をひっかけて鍬の柄をにぎった
だがやっぱりだめ
手がかじかんで動かない
ちきしょう
おらあやっぱり小作人なんだ

それから夏が来た
煮えかえるような田の中で
俺達は除草機の役をする
十日も続く　指の先から血が惨む
其のいたいったら
ちきしょう！
地主のうちの娘っ子が通る
メンコイ顔した娘っ子が
町の女学校へ行くんだ
柄のデッケェこんもり傘だ
涼しそうなパラソルだな　俺んもな
妹の野郎がおふくろにしゃべった
馬鹿野郎　だまって仕事しろ
俺は怒鳴った　したらみんなだまった
また今年も半作だぞ
親父が暗い顔で言った
地主の野郎は今頃扇風機の三つもかけて居やがるだろう
ああ暑くて死にそうだ！
おらあやっぱり小作人なんだ

渡り鳥が来て秋になった
それからすぐ冬が来た
親父が又言った
今年も半作だぞ……
然し俺達は今迄の小作人では無かった
村では去年にこりて

組合を作ることにした
下村の奴等が仲間に成れと云って来た
だが　俺達は
一番しっかりした組合
全農の仲間入りをした
全国農民組合新潟県連合会南部地区西南部小地区
恐しい長い名前だ
おらあ何度もケーコしたが
まだおぼえられねい
そして演説会があった、俺は聞きに行って
新しい言葉をおぼえた『何たる矛盾ぞ』
俺は早速帰って来て呶鳴った
働く者は貧乏する！
遊んで居やがる地主は金持だ！
『何たる矛盾ぞ！』

機関庫の俺等

滝沢二一

未明
俺等は夜の明けるのを
時計や空の明るみで予知することを知らない
ビョービョービョウ
あの転轍手を呼ぶ汽笛は
とりも直さず俺等よりの搾取を意味する
俺等は起き上り、レーキを持って機関車の灰（アシュ）をかき出す
ため堀溝（ピット）の中にもぐり込む
そして機関助手がロッキングをゆすぶり
ドロップを卸している間に
もう幾配の機関車のアシュパンをかけば夜が白むかを指
折り数えるのだ
俺等は夜の明けはなれるのを
時計の針や鶏の鳴き声で知る事は忘れはてている

朝
ボーは六時に鳴る
職工の内儀さんたちが起きなければならない時間だ
時として据付エンジンの庫内手が五分と時間を違えたの
を知ろうものなら
庫内勤務（機関手）の野郎安全弁（セーフバルブ）でも吹いたようなすさ
まじい勢で怒鳴りやがる
それだのに自分は七時近くまで一眠りきめこむのだ
朝ぼらけ（それは俺等にとって清々（すがすが）しいものではない）

早起きの少数の彼奴等がラジオ体操で腹へらしをし
昨夜遅くまで妾のところや待合などで
ぞべぞべと夜をふかした奴等が
気持ちよさそうに眠りをむさぼっている時俺等は石炭を
　運ぶアシュペンをかき
蒸気を定圧に上げなければならない

九時
主任の出て来る時間
てもあのでぶっちょの頭がなんて戦闘艦に似ていること
　だろう
俺は特に軍艦頭と言っている
何かある度に軍国主義の喇叭を吹き
所謂る訓示なるものをやらかす

正午
俺等は思い思い弁当を持って
楽しい歌を笑顔で此処へ集って来る
俺等の血を躍らす幾つかのデモやゼネストの話は何時も
　この会合に充ち充ちている
明日にも革命の起るだろう事を俺等は時々考えることさ
　えある
それ程此処は活気に充ち充ちている

午の時間
理論や戦術を戦いとるべく努め励まし合っている俺等に
庫内手が気をきかせて何時も五分程ボーを遅らせる楽し
い時

正午
俺等はめいめい空弁当をたたきながら
楽しく　笑顔で
明日のことを話しあっている

五時
俺等の身体は煤煙と油で肉の中まで真黒になっている
石鹸なんぞそんな洒落臭いもんでおちるもんかい

五時
この時こそ見物だ
太いがっちりした骨っぷしを石油滓でぬりたくり回し
その上を洗濯するのだ
ごしごしごし
作業服でも洗うように自分の身体を洗濯するのだ

街
俺等は夜の街より知らない
たまさか昼の街へ出たりすれば

妙ちきりんな別の世界へほっぽり出されたような気がする

五時
俺等の時間の始まり
俺等の生活の始まり
さあ集まりへ行こう

（一九三一年版『日本プロレタリア詩集』より）

アルメニアの兄弟へ

新井徹

おれは地図をひろげる
そして深い感情の眼で視つめる
黒海と裏海の間にはさまった一枚のはっぱが君たちの国であるか

はるかなアルメニアの兄弟！
おれ達は知った　おれ達の第二祖国で
おれ達の親木ソヴェート同盟を組立てる一分子としての君達の共和国を

然も、かつてはおれ達に時につらかったあの大地震が
今度は君達の上にのしかかったということを

兄弟！
おれ達の記憶はまざまざとよみがえる
一九二三年九月一日――
この記憶をもって君達の不幸を想いうかべるこの記憶をもって南露に横たわった三百九十の犠牲に涙する
この記憶をもって七万一千の傷ついた兄弟の姿をいたむ
この記憶をもって暴雨に打たれ飢餓にせまっている君達に手をさしのべる
夫を失って呆然とした労働者の女房、親に別れて泣き迷う農民の子ら
しかし、資本家階級の貪慾が
かつておれ達に残虐の限りをつくしたと反対に
君達には天災に加重する何らの暴圧もなく
そこにあるものはただソヴェート同盟の深い同志愛――

はるかなアルメニアの兄弟！
かつて救護品満載のレーニン号を送ってくれた君達
資本家階級はそれをソヴェート同盟からの故に追返したが
おれ達は君達の愛を忘れはしない
今も、日本の資本家階級は奴等の新聞の隅っこで君達の

ことを数行書いたきり
ぴた一文だって送ろうとはしないが
おれ達は資本階級への憎しみを深めて
馘首・失業の暴風雨(あらし)の中から
一銭二銭の金を送る
はるかなアルメニアの兄弟！
世界の同志の慰めと励ましにつつまれて
惨苦の底から雄々しく立ち上れ
堂々たる復活の歩みを開始せよ！
昨日の不幸を明日の歓喜にかえるため
真実のおれ達仲間の復興を仕遂げるため
五カ年計画の完成のため！

（「ナップ」より）

最上川の歌

大道寺浩一

馬の好きな青草の数々も
山の麓の川鳴りの音も
空の青さも忘れていた
おれは今思い出の山に登っている

海抜二千尺の谷あいに
駄馬の手づなを曳いた夏の夜明け
春は残雪を踏んで柴を刈り
落葉の軋む坂の荷車に
汗をふりしぼった霜の朝よ！
ひろびろと展けた置賜(おいたま)の盆地
はるかにそそりたつ山脈の麓から
ギラギラと輝く刃物の流れ
盆地を貫く最上川の奔流
流域に鳴り渡る怒りのざわめきよ
おおその激しき川鳴りの音をおれは愛する！
自由な行く手を阻むもの
すべての押えつけるものを押し流し
川床を変革して驀進するお前の姿
おれはその新しい力に固い握手をかわす！
お前の流れに添う小作の村々
おれたちの仲間はどんな生活(くらし)をして来たことか
無智を強いられ
純朴と讃えられ
飢えに迫られながら
働らき疲れた人々は
土塊の崩れるように死んで行った
だが　村の若者はそれを知りつくした
赤銅色の額を集め

鍬たこの手で腕を組み
今こそおれたちは眼を輝かして語り合う
何から始めるか!
誰と手を握るか!
そして……
親爺の知らなかったことを決議する!
隣の村からその隣へ
モリモリ仲間のふえるところ
そこには組合のバリケードだ

ギラギラと輝やく刄物の流れ
最上川の流域に赤旗が靡く
小作の村に鳴り渡る怒りのざわめきよ
おおその激しき川鳴りの音をおれは愛する!

中野鈴子
(発表名一田アキ)

味噌汁

茶わんとはしの音がする
子供が片言まじりで何か話すと
亭主とおかみさんの笑い声が
ごっちゃになって響いて来る
下ではまた晩のごはんが始まった

仕立物をいそぐわたしの腹も空いたけれど
刑務所の晩めしは済んだろうか
思えば二年も経ちました
わたしは屋根裏の三畳の部屋に
慣れない賃仕事で腰が曲ってしまった
そして一人ですする味噌汁はほんとに味ない

わたしはあなたの女房
わたしはあなたの女房なのに
逢いに行けばガラス戸が下りている
手紙を書けば消されてしまう
わたしは時々泣く
わたしも下のおかみさんのように
あなたの茶わんに味噌汁がよそいたい
あなたはがんばっている
土の匂いや、陽の目さえも奪われて
たたき込まれ
血をしたたらせ……

わたしはあなたの女房です

わたしは亭主のあなたに誓う
愛するあなたの茶わんにあついおいしい味噌汁をよそう
　ことの出来る日まで
わたしは一人で味噌汁をすすりましょう
それは多くの女の味噌汁です

わたしは胸を抱きしめてあなたに誓う
そして
あなたを待つ

（「ナップ」から）

俺達の世の中

今野大力

そこにこうかつな野郎がいる
そこにあいつの繩工場がある
繩工場で私の母は働いていた

私の母はその工場で
十三年漆黒い髪を真白にし
真赤な血潮を枯らしちまった

私の母はそれでも子供を生んだ
それがあの病弱な幹男と芳子だ
私達の兄弟は肉付が悪くって蒼白い
私達は神経質でよく喧嘩をした
私達は小心者でよく睨み合った
私達の兄弟は痩せこけた母を中心に鬼ごっこをした
母は私達を決して追わない
母はいつでもぴったりと押えられた
私達は結局母の枯木のようにごそごそした手で押えられ
　ることを志願した

私達はよく母の手をしゃぶった
それは馬の胴引革のようだった
私達はよく自分達の手をしゃぶった
それはいつでも泥臭い砂糖玉の味がした

日本ではその頃外国への戦争を準備し
国内では至る処に暴動が起り
多数の共産主義者が捕えられた
しかし母はいつでも知らずに過ぎた
私達の母は文字を知らず、新らしい言葉を知らない
私達の母は新聞の読み方を知らなかった
ただその母は子供を生む方法を知り　稼いで働いて愛し、
　て育てることを知った無産者！
私達は神の神聖を知らぬように母の神聖を知らない。

私達は母のふところから離れ
母は婆さんになった
母はやがて墓土に埋もれよう
母は遂に共産主義の社会を知らない
だがその母の最後まで充されなかった希望は永久に——
「幸福な世界」俺達の世の中！

早春

森山啓

何と早く草木（くさき）の芽は
　ここに、ふくらんでいるか
林に巣立ち、草原（くさはら）に舞う鳥！
　わが荒川の流れを横切り
平野の、光の濃霧の中へ
　一筋に飛び込んで行く鳥！

おお亀戸の空の
　煙の旋風よ
休むことなく荒海を進む
　おれたちの地帯よ
無数の暮しを満載し
　無数の飢えを甲板に曝し
尚いま、不逞な汽笛を吹き上げる！

おお南葛よ
　おれは惚れなおす
この飢えた胃袋に誓わせろ
　斯くも愛す！　おれは地上を！
おれたちの力で
　耕しなおす
最後の日まで
　離れまい！　戦列を

おお草木（くさき）の芽は何と早く！
　ここにふくらんでいるか
林に巣立ち
　草原（くさはら）に舞う鳥
平野の彼方へ
　光の濃霧へ
一すじに飛び込んで行くもの！

（一九三一年四月「ナップ」）

飢えて

——女房に与える——

可愛い奴よ、待って呉れ
そして家を飛び出した
夜更けて家へ帰って来た
やっぱり仕事と食べ物がない

歌をうたって聞かせるぞ
飢えたお前を愛撫して
勇者の歌の一節(ひとふし)を
併し胃の腑は首を横に振る

お前よ、お前よ！
日本の名物は何なのか
林と立った牢屋なんだ
何で仕合せが落ちておろう！

仕事を探して歩いて行けば
飢えた仲間に会うだけだ
拳を握って押しかければ
刑務所の門がそこにある

おおお前よ決してがっかりするな
どたん場で
心に雄獅子のたてがみ振って
双向ってゆくのが俺らの芸だ

めくされ金で黙りはしない
別な社会が入用だ
建て直すための人夫ならば
お前よ、二人は募集されて居る

建設のロシア

村田達夫

1

地鳴りがする
曲った巨大な煙突の横腹は真赤だ
夜空は熔鉱炉のたぎる焔で燃えている
工場のコンクリートの素肌はあかあかと映え、鉄骨は焼
　けた風の中に唸っている、
焼け爛れた鉄汁はどろどろに流れ
やがて、鉄汁は冷え
(鋳型の中には、トラクタアの車輪が！　炉は燃え、煙
　突の横腹はただれるよう
焔を包み、地鳴りのする工場の中に
疲れを知らない人々の労働だ！

2

ハリコフ・トラクタア工場の朝
ベルトとモーターの轟は生産の歓喜の歌だ！
メーターが上る、スイッチを握る男の眼が輝き、よろこびが顔を走る
コムベイヤーは流れ、機械は動き、
十三人の突撃隊の瞳はいきいきと輝きを増している
おお　此処は俺達の職場　おれたちの兄弟のものだ
三十万馬力のトラクターをおれたちは作り出す！
休みない突撃隊の腕
今日も、トラクタア用モーター製作のレコードは上る！

3

モーターの響きが晴れた農場の空気をはじけば
ハンドルを握る腕は、車体の震動を跳ね返えし受けとめる
眼も届かない農場を斜めに
いま、二二台のトラクタアの列は走る
掘り返えす黒土の匂いはモーターのひびきに溶け
ギガンド農場十二万ヘクタアの耕地にみなぎるものは
赤銅色の腕に波打つ健康と力だ！
汗ばんだ額を振り向け、
（タチャーナ！　あと三〇分でおしまいだ。いいかい、
今夜は生産協議会だ
フッと口笛を止め
タチャーナはハンドルを強く廻す
突撃隊員・婦人トラクタア運転手の頬は潑剌と光っている！

4

広いウラル平野の小麦畠、風はその上を吹き渡る！
豊かな小麦の房をたわませ、たわませ、穂波がうねる
甘い実りの匂いに染みたコンバインが走る　熟れた小麦の房が飛び散る
（おお、二十日間に十一万六千ヘクタアの収穫だ！
積み上げた穀物の上で、ちぢれ毛のあの娘は胸を張っている
手足に溢れる力、婦人共産党員(コムソモルカ)！
農村突撃隊の彼女たちの胸は張り、
隷属・屈従の悲しみを彼女等は知らず、自由と生産の笑いを持っている！

（註）コンバインは連結トラクタア。ギガンドにて使用しているものは二三〇台のトラクタアを連結している。

5

口笛を吹きざわめきと笑いの中に人々は急いでいる
素晴らしい収穫に胸をはずませ

その顔は輝いている
かつて搾取と、棍棒と、屈従に呻いた農村に
いまはウォッカの匂いもない
あるものは力・規律と共同に張り切った生活の強い歌声
！
広い集団農場(コルホズ)、素晴らしい収穫の分配の集会へ！
急ぎゆく老いた農夫たち！

6

コルホズ『赤い十月』は、今日、秋の収益の分配、
爪を嚙み、拳を握り、いらいらと歩き廻る搾取農(クラアク)の顔
農民はクラアクを離れ眉を拡げて
泥の染みた皺だらけの手にペンを持つ
コルホズ加入のサイン！
農婦の額に結ばれた皺が解け
彼女の目に、壁新聞の数字が浮ぶ
（コルホズの進展は、この数字にはっきり出てるんだ！

7

レールは石コロだらけの荒野を拓き
シベリヤの真ン中に、いまはモーターの太(で)っかい唸り、
白樺の高い梢を
十三万六千キロワットの発電機の音が叩いている

8

汽車は鋼鉄の胸を張り、真ッ黒い煙を吹き上げ
荒れたシベリヤの曠野を走っている！
ぐんぐん、なんと落着きはらった動き振りだ！
長い車体には、おお　生産物の満載だ！

9

都会にも農村にも機械は鉄の脈搏をつたえている
うねり、もり上り、世界資本主義を脅かす！
いくたび反革命の陰謀がめぐらされるとも世界のプロレタリアートを結びつけ、盛り上っては流れて行く！
帝国主義者共の銃口は鋭く磨かれようとも若きソヴェート同盟は起ち、コムソモールの胸はプロレタリアの祖国を守る
世界のプロレタリアートは、社会主義建設の巨大な歩みを守る！
旗は、絶えず前へ！
上半期のレコードは見ろ！
——五カ年計画を三カ年で！
レーニンの計画の上に、いま巨大な十五カ年計画(ゲン・プラン)の実現を！

（一九三一年四月「ナップ」）

失業者　久勤

吼えろ

ハンマーの響きと
ベルトの唸りが
青天白日に
こだまする
それは工場が
歌っているのだ！
自由旗が
インターナショナルの旗が
高く靡びく
見よ！　同志よ！
団結の血潮が
躍っている
『万国の労働者よ
団結せよ！』
その言葉を知れ！
インターナショナルの叫びが
ここにもあそこにも
海を越えて
大陸の彼方にも
嵐の様に
兄弟よ！
貧しさは
新興階級の姿だ！
俺達は叫ぶ
無産階級の解放を
鉄鎖、鉄窓の
解放を。
集まった俺達の力。
同志よ！
朗かな顔を見せよ！
吾々は勝つ
俺達の筋肉が
手が足が自由に
躍るのだ！
閉じこめられた
そこばくの鎖は
俺達の吼咆に
一蹴されるだろう
数十万のむつかしい言葉は
尨大な辞典は
簡単な

合言葉だけに変るだろう。
それをそうするのは
誰の力だ!?
　プロレタリアートだ！
北海道は吼えているか？
蟹工船が
小樽に帰って来た
鬚の伸びた
原始人の様な同志が答える。
『吼えているぞ！』
九州は吼えているか？
炭坑から
真黒い顔をした
同志が答える
『吼えているぞ！』
台湾は？　朝鮮は？
『吼えているぞ！　吼えているぞ！』
東京は吼えているか!?
東京は吼えているか!?
全国から集まった前衛が答える
『皆んな吼えろ！』

（一九三一年十一月『ナップ』）

オレの喜び

赤木浩

お前も知ってる通り
俺の職場は印刷場だ。
仲間は二十人居ねえんだから
何しろ、小っぽけな職場さ。
今は高等学校の
校友会誌を刷ってるんだ。
中にはプロ小説もあるよ。
ソッと読もうと思うんだが。
読めねえんだ。
主人の奴は、飯食う時だって、
傍に居やがるんだからな。
主人はいつも親切で、
あんまり憎い気もしねえんだが、
此んな時だけは、
叩き出してやりてえよ！
だが、嬉しい事が出来たんだ――

昨日、校友会誌の校正に、
学生が一人来て手伝ったんだ。
S高の学生はよく来るんだが、
昨日のは始めてなんだ。
主人が居なかったもんだから、
俺と健公が三・一五を歌ったんだ。
ところが、その学生も知ってるんだ。
ドキッとした程嬉しかったよ――
此んな田舎じゃ
三・一五は誰だって知らねえからな。
彼奴は、キレイな髪をして、
役者見てえに鼻が高えんだが
何でも知ってるんだ。
今は不景気だから、
此処の主人だって、
馘首だって、何だってやるって事を、
筋道を通して話すんだ。
それに、レーニンの理論だって、
俺達の公判の事だって、
何でも知ってやがる！
俺達はとっても及ばねえ！
彼奴は何かの話のとき、
「俺はインテリだから」って
ケンソンしたが、

どうして、俺は彼奴から、
いろんな事を学ぶつもりだ。
今度の土曜日には奴と
秘密にあうことにした。
戦旗の古い奴を、
うんと持って来るってんだ。
此の頃弾圧が激しいんで、
戦旗は出てねえんだってよ！
それに、彼奴等のところじゃ、
中央との連絡もあるらしいし、
メンプロ（彼奴の話じゃエスペラント語だってよ）も多
　いらしいんだ。
始めてあったんだから、
話さなかったんだろう。
俺と健公は彼奴等と腕を組んで、
彼奴等に負けねえ様に、
しっかりやるつもりだ。
俺は、今、
何でもかでも突きとばしてえ程、
嬉しいんだ！

（一九三一年十二月「プロレタリア詩」）

おいらは炭焼だ

井上義雄

おいらは炭焼き　櫟（くぬぎ）の林がおいらの仕事場！　おいらの
斧でぶっ切れない何があろうか

おいらは炭焼き　穴熊のようなおいらのずう体！　おい
らの腕で出来ねえ何があろうか

この鎌　とげばとぐほど切れる鎌　おいらの腕に握られ
てぴかぴか光る鎌！

この鎌で　おいらの稲を刈る　おいらの稲奪（と）る奴の　首
も刈る！

立毛差押えの嵐よ　やって来い！　おいらには鎌がある
鎌の林がある！

半田静爾

六時間の労働に切り上げろ　もくもくと糸車の音が地底
に角っているのだ

肉を売るあんどん部屋は　女工等の　さびしい根城だ
うめきのやみだ

土井文枝

手足をもぐならもいでみろ　それでひるむ我々の闘争心
と思っているのか

海よあれろ　嵐よ吹きつけろ　腕は鉄　おいらは時代の
かじとりだ！

大半津啓

俺達の腕だ　仲間の腕だ、炎天に　ツルハシ振りあげ振
り下ろし　大地をほっくり返す

宏壮なビルヂング、巨大な橋、みんな俺たちの力の結晶
だ　一円少しの命の塊りだ

大原陽一

同志よ、歌ってゆこう　デモでゆこう、明日の世界が見えるじゃないか
その歌を　女車掌よ忘れるな、一人は二人、二人は四人に呼びかけるんだ
「大胆に細心に」——張り出されたビラに向けられたいくつもの顔、争議準備のせまい部屋だ

渡辺順三

女車掌さんよ

プラチナの腕時計はめたお嬢さんの前へ　その真黒い手をつき出してやれ、女車掌さんよ

二人の女車掌さんが引張りあって読んでいる戦旗だ　ここにも俺たちの同志がいる

ある演説会で

拍手に答える拍手、場内は嵐だ、中止を食った弁士は演壇で仁王立ちだ
ここでは拍手だけが許された武器、拍手の嵐は、奴等にゃ機関銃とも聞えよう
口にゃ出せなくても、耳にゃきこえなくても、胸にゃピンと来る、俺達あ拍手で答えるぜ

吉田龍次郎

四一六の犠牲者同志×庭××

真摯で剛毅でずぶとかったあいつ、あいつは四月十六日に工場の中からしょ引かれていった
どもりどもり飯場のテーブルで怒鳴りまくったあいつのの叫びが、メモス三千のサボになったのだ
むっつり無口で人一倍仕事をやったあいつ、あいつの意志が何千というおいらの強い塊りになった

竹内一美

暗い石炭庫（コールバンカ）で　ハンドランプの光りをたよりに働く、おいらあコロッパスだよ

鼻も口も　肺の中まで石炭の粉にまみれて働く　おいらあコロッパスだよ

ビラを見ろ、戦旗のビラだ、発禁にならねえうちに買おうぜ、兄弟

堤信一郎

ぎっしりと集った同志の頭上には数限りない赤旗の群だ

つぎつぎに練りこんでくる同志等の今日の顔はかがやいている

腕を組め、用意はいいか、俺たちの頭上の旗はうごき出したぞ

革命的になった大衆の目の前に今日のダラ幹はちぢこまっている

くちぐちに党を守れと叫びつつ俺たちのデモはぐんぐん進む

内藤雅之助

扉あけると　むっと鼻つく人いきれだ、紹介所はいつ来ても満員だ

紅白の幕の張られた会場で　模範工とだまされる、今日はその日だ（表彰式）

歯車に噛まれて死んだ仲間の、みじめな姿を社長に見せてやれ

中田忠夫

兄弟のともの命だ月島の空さまっくろに流れる煙は

九月一日

今もなお血潮の匂いはしてないか、このビルヂングの下のあたりに

××よ！　君の同胞(きょうだい)が×られた日だ、九月一日だ、何故叫ばない

藤田晋一

ひからびたさかなの骨を思わせる、一生を土に老いたわが母

五十年開墾してきた親爺だに、今一坪の土地もない、ここは北海道だ

汗みどろで耕作している作物を、わがもの顔に見廻りに来る地主だ

小池龍

ときどきやってくる不在地主を通すには黄金波うつ田圃路は勿体なすぎる

千石、万石作ったとて同じことだ、みんな地主の蔵に呑まれて行く

赤石茂

汗でコンクリになってる顔だ、手だ、炎天の軌道工事は俺もミキサも死物狂いだ

日傭は楽じゃなかろう、そういえば、あたり前よと妹はいう、黒い笑顔で

北沢孝夫

最後まで頼んできた彼等もとうとう裏切ったのかと暗い気持でルーラーを廻す

基隆(キールン)の波止場をまっ赤に血で染めた彼はおいらの中にいま生きている

彼が残した鉄のような言葉がいま幾万の兄弟の口をついて叫び出される

住田枝雪

黎明の街にたちまちわきあがる、労働歌よ、われらの団結の力よ

真夏の太陽がやけつく工場街を団旗は進む、奴らを踏みつぶせと

（以上、一九三〇年版「プロレタリア短歌集」より一九三〇年九月刊行）

新興の途上にて

坂根彌吉

どうすればよいのだ夜も眠らずに働いて吾等のこの貧しさは

人々の眠ろうとする夜の十時この危険な工場にまた働きに来た

着るになく食べるに足らぬ労働者の吾等は寒さにふるえ飢えて働く

着ることに食うことに困らせておくことが吾らを働かす道というのか

労働者はゆたかになれば働かず貧しくしておけと彼らが言えり

いわるるままにおとなしく働いていると見ゆる吾らだとのみただに思うな

機械よりよほどつまらぬ労働者と吾らを使う人は思うらし

はからずも機械にかまれ死にし友の妻がもらいし金は機械より安し

機械をば愛する事を知る人の人間を愛すること知らぬなり

ストーブを焚けども焚けどもま夜中の工場の中はすばらしく寒い

パン

西村耕二

何よりも先ずパンの問題を解決せよ思想善導はそれからのこと

一寸も土から眼をはなすことを許されないもぐらもちのような百姓の生活

小作争議が起って居ようと地上のことにはかかわりもない空の静けさ

マルクスを読めばただちに故もなく危険思想だとする頭の古さ

深夜業者の歌

大石鉄雄

働きて飢うるまだよし働くに職なきものも世にあるものを

産業の合理化によって激増するこの失業者たちをどうするつもりだ

労働者をさげすむ人にむらむらと湧ける怒りをじっと忍ぶも

今日もまた道路工事にツルハシを振りてかあらむわが父上よ

（以上雑誌「創作」より）

新ロシア風景

飯田兼次郎

労働服を着た若いコンミュニストの魅力があふれる工場

コンディションのよい機械が彼女達の体を解放している明るさ

ソヴィエト建設の若々しさをみなぎらした女体が工場にいっぱいだ

民衆を吸収してゆく若い婦人コンミュニストの写真の目
　がうごいた
戦いとった工場を経営する彼女達の手に己のこの心臓を
　つかませたいのだ

（雑誌「詩歌」昭五・一一月号）

解説

小田切秀雄

この巻では、前巻についで一九三〇年（昭和五年）八月ごろから翌三一年の末までの約一年半に発表された作品を収録した。この一年半は、プロレタリア文学運動最盛期としてのナップ時代の最後の時期に当り、新しく有力な作家も次々と登場するようになっているので、収録すべきもの、収録したいものは本書所収のぶん以外にもきわめて多かったが、紙数の制限のため予定の半分以上を割愛せねばならなかった。他の巻に作品が収録されている作家のはなるべくひかえるということにしたが、それでもなお紙数が足りず、結局、中本たか子・生江健次・北川冬彦・野上弥生子・下川儀太郎らの作品は収録できないことになった。他の巻でも同様のことがあり、いずれそれらの作品をまとめてこの『大系』をより完成なものにしたいと考えている。なお、この巻には俳句がおさめられていないが、第三巻、第四巻に収められたぶんのうちにこの期のものもふくまれているので、こうなったのである。

この一年半の間には、社会的・政治的にもいろいろの新しい動向が展開している。この期の前半については、本書所収の『一九三一年に於けるナップ方針書』[*]にくわしいのでここではその一節を引くこと

にする「一九二九年の秋、アメリカに起った株式恐慌を契機として激化したところの世界経済恐慌は、この一年間に、益々広汎な範囲を捉え、生産の絶えざる減少と、賃銀の引下げと、失業者数の異常な増大等に見られるごとく、その深さを一層加えつつあることを示している。生産過剰にその基礎をおくところの、かくのごとき恐慌の進展は、単に労働者階級の地位の一層の悪化にとどまらず、資本主義諸国をして、戦争にその解決を求めることをますます痛切ならしめ、労働者階級に対する抑圧の加重と共に軍備の充実に一切の力を動員して狂奔せしめつつあるのだ。世界の失業者軍はすでに日本の二百万をも加えて二億に達せんとし、この中にあってひとり軍事工業のみ、膨大な軍事予算のもとに恐慌の影響外にあって着々と発達している。軍備縮小会議を了えた各国は、最新科学に依るより一層の高度なる軍事の再編成に着手している。……日本資本主義はこの恐慌を切り抜けるために、金融独裁の強力なる支配を必要とし、浜口内閣をして金融資本への最も忠実なる奉仕をなさしめている。資本集中のための諸産業統制法案、米穀法改正案等々。この深まりゆく不況の罪を世界経済恐慌に稼して、緊縮のデマゴギーを振り撒き、国産品の奨励を宣伝し、愛国主義のかげに一切の政策の本質を陰蔽せんとしている。他方、産業合理化の強行によって極度の貧困に突き落された労働者農民大衆の反抗を巧みにそらし、その闘争を抑圧せんがために、従来の治安維持法その他の反動的諸法案を以てしてなお足れりとせず、今また労働組合法案、小作法案、争議調停法の改正を制定せんとするに至った。……労働者農民の闘争は尖鋭な形態と逆襲的性質を帯び、ストライキの継続日数は著しく長引き、最も遅れている労働者、労働婦人が益々多く運動に参加している。かかる階級闘争の激化と、形勢の悪化は、支配階級の狂暴な圧迫政策とファッショ化した左右社会民主主義者のこれへの協力も、抑止することを得ない。我々は革命的日本プロレタリアートがこの情勢に当面し、今や重大なる方向転換の期に立って、大衆的政治闘争の展開を以て労働の攻勢を組織せんとする時期に当面している」。

こうした情勢規定をふくむ一九三一年度の方針書を書いたのは直接には窪川鶴次郎であるが(もちろん、署名者である。ナップ中央協議会では討議した結果を窪川が書き、それがまた討議にかけられて発表されたわけだが)、敗戦後に窪川はこの方針書執筆前後のことを回想した文章(一九四八年一〇月民主評論社刊『闘いのあと』のなかの窪川『わが文学への道』)を書いているので、方針書に規定されている情勢をまたべつの面から照しだすものとして次に引用しよう。なお、この回想文には当時の文学運動の諸個性も登場しておのずとこの巻の背景を照しだしているのでやや長く引用する。なお窪川は、このしばらく前まではプロレタリア文学運動をはなれてもっぱら政治活動に没頭し、共産党の党員候補にまでなっていたが、二九年九月に病気でたおれ、寝ているうちに当時の運動の主流にたいして疑惑を感じはじめていた。「わたしは床のなかで全協ニュースを読んでいるとき、この洋モスの争議(二九年秋、東京亀戸の洋モス工場に大ストライキがあり、このときの繊維婦人労働者の活動と成長は佐多稲子=当時窪川いね子の『何を為すべきか』『幹部女工の涙』『小幹部』『祈禱』等の一連の作品のなかに生き生きと描きだされている。——引用者)の経験によってわれわれ革命的労働者はその組織をあくまでも破壊から守り、われわれの革命的闘争を遂行するためには武装しなければならぬ、という意味の文章にぶつかった。わたしは何かその主張の実体をとらえようとするかのように眼をニュースからはなして空間に泳がせた。病気のせいもあっただろうが、わたしはだんだんに陰気な気分のなかに沈んでいった。はたしてわたしにそういう武装した活動ができるであろうかと……。軍隊がある。警察がある。いまこれと正面から闘うつもりなのだろうか。わたしのまわりはまったく平穏な生活が営まれている。そのなかでその武装した闘いが行われる。わたしは思わずその僅かばかりの人たちが片っぱしから血祭にあげられていく凄惨な状景に、横たわっている身体全体をどうしようもなく苦しくなった。第一わたし自身つかまったとき武装しているとすればどう応対したらいいのか。わたしはその場で敵を倒して逃げ

るべきか、でなければその持っている武器にたいしてどう言いのがれればいいのか、と合法生活の習慣と顔をまったく知られていることにいかにもこだわった悩みかたをしたものである。しかしその文章から受けた凄惨な衝動はわたくしにとってのがれることのできない気分であった。大衆から孤立したこのような暴挙をどこまでも暴挙として断定するだけの自信があるわけではなかつた。それよりも、そういうことは自分に出来そうもないというひるむ気持にたいする反省のためにいっそう陰気になっていった」。その翌年（一九三〇年）の「四月に市電（いまの都電）に大争議が起きた。この頃はもうブラブラと外出していたのでわたしは錦織（共産党員）の身のまわりの用足しなどしてやっていた。ちょうどこの争議最中に小石川のある大きな屋敷の立派な部屋で彼と会った。彼はこの争議の共産党としての指導をしていたらしい。争議が悪化して電車の焼打をやったことや、共産党員が自動車で車庫に乗り込んで警戒の特高や巡査にピストルをかまえたままビラをまきこんだ話などをきいた。わたしはやはり全身に元気と力がみなぎってゆく感動にうたれた」。しかし、「この年のメーデーに『川崎において共産党系の分子が武装デモを敢行し、官憲と衝突したる事件あり』と報道された事件が起った。その武装もたしか竹槍だったようにおぼえている。時期ははっきりしていないが、この事件ののち、前年の秋の、全協のニュースにはじめてあらわれた極左的偏向にたいして明確な批判を下した文書がわたしの手にも入るようになった。この年の七月、党の主脳者であった田中清玄がつかまった。かれがやられたのはどこかの温泉だという噂も伝わってきた。この武装問題の批判に接したとき、療養のためにぶらぶらしているわたしは前途についての確固たる見透しももっていなかった。だからこの批判をわたし自身にとってだけのひそかな安心として受けとった気持がなかったとは言えない。そしてわたしはいつのまにか運動全体の空気をやはり今までとはがらりとちがった、しかしそのためにかえって身うちからの緊張した気持で受けとるようになっているのに気づいた」。「秋になってからのある日、西沢隆二（のちの、ぬやま・

ひろし）が久しぶりでやって来た。彼はわたしを文章運動へ引っぱり出す目的で来たのである。この年の五月小林多喜二や中野重治、村山知義、立野信之など文学演劇関係の中心の人たちが共産党のシンパ事件のため検挙されて、まだ刑務所に入っていた。蔵原惟人は検挙をのがれて、その行方を知っているものはほとんどなかった（かってソヴェトに留学したことのある蔵原は、モスクワでのプロフィンテルン第五回大会にひそかに出席する紺野与次郎の通訳としてふたたびソヴェトへ行くことになり、しばらく前から姿を消して準備し、七月に出かけてから翌三一年二月まで滞在した。滞在中、右の大会のアジ・プロ部協議会に出席して、その決議『プロレタリア文化・教育組織の役割と任務』――この『大系』第五巻に収む――をもちかえり、これを日本の文学・文化運動のなかに生かそうとして本書所収の『プ*ロレタリア芸術運動の組織問題』を書いたのである。そしてその方向をさらに進めてコップ結成が行われた。――引用者）。このような事情のなかで西沢は作家同盟の書記長になっていた。そこで彼は私を引っぱり出しに来たのであろう。……わたしはまず機関誌『ナップ』の編集を手伝うことになった。責任者は田辺耕一郎であった。彼は宝文館の『若草』の編集を前からやっていて、わたしや佐多はときどきそれに原稿を書いていたので彼とは面識があった。また大正十四、五年頃に日本詩話会発行の『日本詩人』（新潮社発行の雑誌）に田辺もわたしも新進詩人として詩を出していたので古くから彼の名は知っていた。わたしは編集のことで彼のいる中野の下宿屋へ出かけて行った。田辺は鹿地亘の妹さんと結婚したばかりであった。そのころのある日、「西沢とわたしは下落合の作家同盟の事務所からの帰り道、東中野の駅へ出る住吉町の当時はまだ狭かった通りを歩きながら、ソヴェトから中条百合子さんと湯浅芳子さんとが帰朝したという記事だけを頼りにして、この二人に作家同盟へ入ってもらうように勧誘しようではないかという相談をした。こういう相談になると、西沢はいかにも楽しそうでうまかった。しかし当時の文壇の作家としての中条さんは一面識もない無名のわたしたちにとっては近寄りがたい距離

があった。それを自分たちの団体の会員になってもらおうとするのだから、この相談はそんなに容易なことではない。しかしこのすぐれた作家がもし自分たちといっしょに仕事をするようになったらどんなに素晴らしいことだろうという、おのずからな弾みがあった」。「西沢とわたしは本郷三丁目の菊富士ホテルに中条さんと湯浅さんをたずねた。二階の大まかな部屋にすぐ通された。何だか久しぶりで親しい家庭をたずねたような気持であった。まずきれいによくとおる声が、部屋のなかをあちこちと中条さんが動くのにつれてこのうえないもてなしとしてわたしの耳をこころよくそばだてずにはおかなかった」。これは一九三〇年末のことだが、その同じ年末か三一年はじめのころに、「わたしは手塚英孝とはじめて会った。彼は終戦直前にフィリッピンで潰走の途中、餓死同様の死にかたをしたらしい生江健次と共に、党の資金部の仕事をしていた。はじめはその資金関係の用事をかねてであったかと思うが、文学運動を党のアジ・プロ部と結びつけるためにやって来たのである。この頃から――私の関係した範囲では、直接には手塚、生江らの手によって――プロレタリア文化運動と共産党との関係が、たんに文化人を活動資金のための対象にするというのではなく、党の全闘争の一部としての文化運動を正式に指導するという、組織的な連関のもとにおかれるようになった（敗戦後は小説『父の上京』と小林多喜二全集の綿密をきわめた編集とその伝記篇執筆とによって知られていた手塚は、本巻所収の『貮』*に反映しているような経過をとって共産党の活動に参加し、また窪川が右に述べているようにしてプロレタリア文学運動と時別な関係をもつにいたった。『貮』は、かれが表面的にも作家同盟員として通りうるように、加盟資格審査に提出するため書いた作品である。本巻収録の前篇だけで終ってついに後篇が書かれなかったのもそのことと関係していよう。しかし、表面的な資格をうるためのこの作品が、たんにそれだけに終るものでなくすぐれた芸術的性格――こうした地味な着実な書き方は当時必しも一般的ではなかった――をもっていたことは、かれの内部に文学的な要求が早くからひそめられていたことを推定させずに

はいない。しかし、以下に窪川が回想しているようなところがかれにあったために、かれはそれまで自分の内心の要求を外に出さずにいたのだろう。なお、手塚の学生時代からの友人であった生江は、『弐』が発表された同じ号に『過程』というこれも第一章百枚ほどだけで終ったすぐれた小説を発表しており、この巻に収録する予定だったが紙数のつごうで入れられなかった。どちらも革命運動に参加した学生の活動とその内面的な真実とを自分の経験そのものに密着しながら描こうとしている。――引用者)。「手塚は、少しどもりで非常に無口であった。それがまた彼の誠実と慎重な考慮とをよく表現していた。彼はただ……」。

窪川の回想文はなおこのあとの方をも引用せねばならぬが、ここで一応中断してこの時期の一般的問題についてのべよう。この時期は、社会的にはさきの「ナップ方針書」からの引用によって示されるような状態にあったが、共産党は三・一五から四・一六と引続く弾圧によって大きな傷手を受けたにもかかわらず急速にたち直りはじめ、一時は田中清玄を中心とする極左的一揆主義が力をふるったり三一年政治テーゼ草案に示されているような公式主義的(移植観念的)情勢判断が強化されたりという事情に苦しみながらも、個々の革命家や、革命運動全体としては活気にあふれた運動が展開された時期であり、窪川の回想に登場している綿織彦七という実在の党中央委員のエピソードによっても知られるように、昭和初年いらいの革命の波はまだ日本全体をいきいきとゆすぶっていたのである。木村良夫の『嵐*に抗して』に描かれているような事態は、決して絵そらごとではなかった(これはナップに投稿として送られてきた小説で、作者については作品内容から推定されること以外ほとんど何もわかっていない。『省電車掌*』の黒江勇についても全く同様である。わたしは数年前に黒江のこの作品を『国鉄文化』に掲載したさい、本人または縁故者または黒江について何か消息を知っている人などが現存しているなら連絡してほしいと書きそえておいたが、ついにどこからも連絡がなかった)。だが、革命運動のこの高

揚が、やがて迫ってくる満州事変（三一年九月からの中国東北への新たな侵略）とそれが伴う国内の大弾圧にたえて十分にたたかいぬいてゆけるだけの着実な展望と体形とをつくりだすことは容易なことではなかった。危機をひそめた高揚の時代――これがこの時期の革命運動一般の特色であり、それはまた文学運動についてもほぼそのまま妥当した。当時の文学運動は、窪川の回想や『大系』第四巻の解説によって知られるように革命運動との組織的な結びつきをもちはじめた時期であり、革命運動の活気に支えられまたそれを作品中にさまざまな形で反映しながら（その反映の仕方に問題がのこるという場合は多いにしても）展開しはじめていた。そしてたとえば革命運動の一時の主流に田中清玄流の一揆主義が支配的になったときにも、窪川が正直に回想しているように、「大衆から孤立したこのような暴挙をどこまでも暴挙として断定するだけの自信があるわけではなかった」、と考え、やがてかなりたってから、「極左的傾向にたいして明確な批判を下した文書が」手に入るようになったとき、はじめて「身うちから緊張した気持」で新しい活動に立ち上る、というような経過をとっていたのであった。プロレタリア文学者の若々しい謙虚さは、政治が時に陥りうる誤りにたいしてこうした態度をとったのである。政治にたいして文学が、また文学にたいして政治が、それぞれ必要な協力と批判を加えながら全体として政治に文学が従属してゆくというような関係はまだ自覚されなかった。文学者としての現実感覚で、『一九三〇年に於けるナップ方針書』の諸規定の全面的な観念性（三一年度のはずいぶんそれが少くなっているが）にたいして省察と追及とを行うということはまだどれほども行われなかったのである。かえって、たとえば片岡鉄兵の*『愛情の問題』に示されているような、革命運動のムリな進め方（当時そういうものがかなり実在した。すぐれたものもたくさんあったが、やがて堪えられなくなるようなムリなこともきわめて多かったのが実状である）への作者のまったくの無批判・迎合というような場合はほかにもすくなくなかった。これは、文学および作家にとっても、大きな危機を意味するもの

であって、革命運動の活気に支えられて作者が勇ましく右のような進め方をもち上げれば上げるほど、その作者自身がのちに自分で自分を裏切らざるをえないような結果が生じやすかった。片岡鉄兵をその代表としてもち出すわけではないが、才気と良心と心の強さとが永続的な関係をつくりだせないような仕方に陥りやすい面をふくんでいた当時の文学運動のなかで、この作品はたしかにその一面を代表するものとなっていたのである。しかしこの作品を収録したのはそういう意味だけでではない。ここには、作中人物と作者とがひきだしている結論そのものはべつとして（それはそれでこんにちなお尾をひいている問題であるが）、そこに反映している当時の若く無経験な革命家たちの男女関係のすがたのなかには、そういう結論をくっつけることによってのみ作品中に描かれえた当時の現実のなまなましい一面がある。このことはやはり評価せねばならぬ面をもっているのである。なお、徳永直の『赤い恋以上』などをはじめとしてこの時期にこうした作品が小さな流行を見たことは、のちに蔵原惟人が『芸術的方法に就いての感想』（『ナップ』一九三一年一〇月および一一月）のなかで批判的に指摘している通りであった。——ところで、この蔵原の論文は日本プロレタリア文学の全歴史を通じて最もすぐれた論文の一つであり、当時の国際プロレタリア文学運動のなかでも独自の位置を要求しうる画期的論文であったが、長篇論文であるし戦後（戦前にも）しばしば刊行されて広く流布してもいるので本巻へは収録しないことになった。この論文で蔵原は片岡のこの『愛情の問題』という作品をとりあげて、そこに描かれた人物たちと作者との非人間的な態度がコンミュニズムとはどんなにちがうかを明らかにしている。この蔵原の批判は見事であったが、片岡とその作中人物との態度がどのようなところから生れてきたのかという根源にまでつき進んでの追及がなかったために、ふたたびそうした作者やそうした人物が現れるのを封じ去ることができなかった。批評家の意見だけがそれをよくしうるものでないことというをまたぬが、批評家はそれをよくしうる方向にむかって自己の主張を進める以外にないのである。

文学運動がこの時期、危機をふくんだ高揚にあったことはなおいろいろな形で現れているが、芸術運動のボルシェヴィキ化という一九三〇年らいの方向の一層の発展として行われた作家同盟第三回大会(一九三一年五月)にもそれがさまざまな形で示されていることは、『日本プロレタリア作家同盟第三回大会議事録』*(一部分は『ナップ』に発表されているが、こんど完全なものが貴司山治によって提供されたのでそれを収録した)によって具体的に見ることができる。なお、この『議事録』には、ナップの従来の機関誌だった『戦旗』が独立の戦旗社の発行に変り、同時にナップ機関誌として『ナップ』(一九三〇年二九月創刊)が出るようになった事情、また本巻に収録した『プロレタリア革命作家国際大会*に於ける日本プロレタリア文学運動についての報告』(報告者は松山敏という署名になっていたが、実際は在ベルリンの勝本清一郎と藤森成吉とが入ソして報告したもの)においての、その国際大会(ハリコフ会議と略称された)の性質、等々、本巻に収録した諸作品やそれを生み出した運動とについてくわしい説明が行われているから、それ自体が本巻の「解説」となっていると同時に、日本プロレタリア文学運動史の詳細な断面図の一つとなっている。

さきにも触れたが、蔵原惟人は三一年二月に帰国してから、この高揚したプロレタリア文学運動をさらに強力に革命運動と結びつけるために、——そして四・一六以後にもなお引続いて加重されてきていた弾圧による共産党への打撃を押しもどすために、プロフィンテルン第五回大会のアジ・プロ部の前記の決議を日本の実情のなかに生かそうとして、『プロレタリア芸術運動の組織問題』を書いた。これ以後、コップ(日本プロレタリア文化連盟)結成にいたるまでの動きは蔵原惟人を中心として行われた。三一年一一月に結成(すでに結成大会が合法的に開催できぬ情勢になっていたので、コップ機関誌『プロレタリア文化』三一年一二月創刊号が発行になる時をコップ成立の時と定め、一一月二七日に発行され

たのでその日に成立したことになった）された この組織は、当時の共産主義的な文化運動の各領域の組織のほとんど大部分を結集し、いわば敵の前で勢揃いをしてたたかう態勢をつくった。そしてそれは、運動の全体的方針として、工場と農村へ根をおろした大衆的運動への転換ということを掲げて一せいに新たな活動に入ったのである。文学運動でいえば、『文学新聞』がこのような転換にそなえて早くから創刊され（一〇月）、工場農村のサークルへの作家の所属ということが精力的に試みられはじめていた。そして文化運動の各領域が多かれ少なかれこうした方向に進みはじめたのである。だが、このような進み方は、第一に、満州事変以後の支配権力の軍国主義的弾圧の加重をひかえて分散的な闘争に転換せねばならぬのにそれを敵前での勢揃いにもっていってしまったこと、第二に、工場農村のサークルに基礎をおくということが、実際には、作家たちに革命運動の基本組織のための直接の補助・代行の組織活動を行うことを求める方向に進められていたこと、このことをはじめとして実際上作家にとってきわめて無理な活動をおしつけることになったこと、これらの故に、三二年三月にコップへの大弾圧が来るとともに主だった活動家の大部分は一せいにとらえられ、各文化団体はその中心的個性の多くを失い、プロレタリア文化運動はそれ以後二年足らずのうちにほとんどすべての組織を失ってしまうほどの急激な衰退過程をたどったのである。

しかし、前記の窪川の回想文のなかに次のようなことが記されているのは注目にあたいする。「その頃（一九三〇年の二月ごろ）プロフィンテルン第五回大会のアジ・プロ部協議会の決議として出された『プロレタリア文化・教育組織の任務と役割』というテーゼを訳してプリントにしたものが、党のアジ・プロ部から出ていて、それが手塚と生江の手を通じて一部の人たちのあいだに読まれていた。あらたに書かるべきナップの方針書（窪川の書いた『一九三一年に於けるナップ方針書』のこと）はこのテーゼを考慮しなければならなかった。しかしわたしや手塚・生江たちのあいだでは――すくなくともわた

したちにとっては、このテーゼを基礎にして文化運動のうえに大転換をもたらすような具体的な方策をたてるにはどうしたらよいか、このテーゼには実際問題になると後でふれるようにわかりにくいところがあった。だから方針書を書くわたしとしては、このテーゼに対する責任感がわたしの頭をはなれないにもかかわらず、何かモヤモヤしたものにまつわりつかれながらナップの新方針のことを考えていた」。そのうち、蔵原の『プロレタリア芸術運動の組織問題』の原稿が地下から、しかも手塚や生江の手を通してでなく届けられた。そのころ窪川は『ナップ』編集の責任者になっていたのである。「わたしはこの原稿を読んで発表することに賛成できなかった。手塚もそうであった。そのとき中野にも見せてこの原稿を返すことについて相談したかも知れない。……このことがきっかけになったかどうかわからないが、蔵原はアジ・プロ部に結びつくようになり、そこで正式にこの論文がとりあげられて討議されその結果として『右の論文を書いてから既に二カ月以上が経過した』という書出しで、この論文に対する反対論を批判した文章を書加えた原稿が、こんどは手塚の手からわたしに渡された。そしてこの論文が『ナップ』の六月号に載ることになったのである……」。そして窪川はなお、当時自分が蔵原の意見に賛成できなかった根拠を具体的に一つ一つ説明しているが、もはや引用は略そう。窪川のこの回想は、本巻におさめた勝本清一郎の『ベルリンからの緊急提案』*やスペースの関係で収録できなかった生江健次の演劇運動組織についての論や、さらに後年の中野重治の小説『第一章』(一九三五年一月『中央公論』)にフイクショナルな形で描かれていること、等々と一連のものであり、ナップからコップへの組織的転換にたいする反対意見のかなりに強固な存在をあかしだてるものである。しかもこれらの意見は勝利することができず、結局蔵原の新しい方針はほぼそのままの仕方で実現されていったのであった。このことのなかには、蔵原が前記のような卓抜した『芸術的方法に就いての感想』*や『芸術理論に於けるレーニン主義のための闘争』というこれも卓抜した論文などの筆者であったこと、のちの獄中生活

（青木文庫版『芸術書簡』参照）につながるようなものをそれ以前からすでに示していたこと、等をはじめとしてさまざまな理由があり、またやがて三二年テーゼによって大幅な修正をよぎなくされたような当時の革命運動全体の展開の仕方にふくまれていた弱みなどもあって、やむをえない動向ではあったが、窪川たちが理論的に敗北したということはその後のプロレタリア文化・文学運動の運命に大きな影響をもたざるをえなかったのである。宿命論的決定論者でなければ、この窪川たちの見解の先に可能であった別個の道（つまり、もう一つの可能性）が実現されずに終ったことを、あらためて問題にせずにいることはできぬであろう。すでにこうした反省はこんにちはじめられており、蔵原が『大系』第四巻の解説のなかで示しているのもその一つである。

——なお、本巻収録の作品のうち、久保栄の『ファッショ人形』[*]はかれの作品を代表するものではないが、『火山灰地』が長すぎて入らず、主要な評論もよぎない事情で急に収録できなくなったので、この『ファッショ人形』を収録した。当時のアジ・プロ劇脚本の代表的なものの一つとして興味深いものがあろう。それから、『朝鮮[*]におけるプロレタリア芸術運動の現勢』は朝鮮プロレタリア文学運動の一応の概観となっているので採録した。筆者の安漠は朝鮮随一の舞踊家崔承喜の夫君である。

　＊は本巻に収録の作品であることを示す。

一九三〇年（昭和五年）八月——一二月

作品（『　』内は発表誌、紙、刊は単行本）

ガス！（橋本英吉）『戦旗』8
旗かげ（越中谷利一）『戦旗』8
小作人の息子（窪川いね子）『戦旗』8
『プロレタリア文学辞典』（山田清三郎・川口浩編）白揚社刊8
海と飛魚の子と（林房雄）『改造』8
蜂起（藤森成吉）『改造』8
荒っぽい村（武田麟太郎）『中央公論』8
組合旗のもとに（杉田英男）『文芸戦線』8
警鐘（田中忠一郎）『文芸戦線』8
プロレタリア・レアリズムの現段階（小宮山明敏）『プロレタリア文学』8
一九三〇年度に於けるナップ方針書（ナップ中央協議会）『ナップ』9

文学運動および関係事件

八月、プロキノ機関誌として『プロレタリア映画』創刊さる（『新興映画』改題）
同月一九日、新興教育研究所創立され、九月一日付で機関誌『新興教育』を発刊す。
同月、小林多喜二、治安維持法により起訴され豊多摩刑務所に収容さる。
九月、ナップの理論的機関誌として『ナップ』創刊さる。発行所は戦旗社（後、ナップ出版部）部数約六千。「ナップ機関誌創刊に際して」を同誌九月号に発表。
同月一七日、プロレタリア詩人会結成。主として作家同盟外の佐野嶽夫、遠地輝武、村田達夫、新井徹らによる。詩誌十余の詩人の左翼化の

政治的および社会的事件

八月一五日〜三〇日、**プロフィンテルン第五回大会**モスクワで開かれ、五六ヵ国四百名出席、組合運動の任務と戦術を討議決定す。同大会で、「日本における革命的労働組合の任務」決議され、極左冒険主義の克服と組合内民主主義の確立および分派刷同の解散を指示す。
同月、労農党解消運動始る。
同月一九日、日本教育労働者組合結成さる。
九月一〇日、刷同代表としてプロフインテルン大会に出席した野崎は、「刷同の解散に就て日本代表の声明書」を発表、刷同の即時解散を訴う。
同月、東洋モスリン亀戸工場のストライキはじまる。

演劇運動のボルシェヴィキ化へ！
（テーゼ・プロット常任中央委員会）
『プロレタリア演劇』9
間際の電報（山田清三郎）『戦旗』9
奴隷市場（堀田昇一）『戦旗』9～12
革命裁判（鹿地亘）『ナップ』9・10
社会民主主義の芸術と理論（鹿地亘）
『ナップ』9
寝床のない女（放浪記・林芙美子）
『女人芸術』9
作品批評のボルシェビキ的実践へ
（窪川鶴次郎）『ナップ』9・10
戯曲ゴー・ストップ（貴司山治作、
藤田満雄脚色）『プロレタリア演劇』
9
赤色スポーツ（徳永直）『改造』9
新興女流作家（板垣直子）『女人芸
術』9
**『文学革命の前哨』（小宮山明敏）
世界社刊9**
『三〇年版プロレタリア短歌集』（歌
人同盟編）マルクス書房刊9
バルチック艦隊（五幕・伊藤貞助）
『文芸戦線』10
工場管理（今野賢三）『文芸戦線』10
新アジ文学論（青野季吉）『文芸戦
線』10

結果として六月ごろから準備が進め
られ、ナップと連絡しつつ結成され
た。
一〇月、『前衛詩人』終刊。
同月、『プロレタリア演劇』終刊。
同月、『短歌前衛』終刊。
同月五日、プロレタリア歌人同盟第
二回大会開かる。
同月、**戦旗社ナップより独立**し、雑
誌『戦旗』はナップ、プロ科、産労
等の編集により、芸術運動の機関誌
から大衆啓蒙雑誌に変えられる。
十一月、『プロレタリア短歌』プロ
レタリア歌人同盟の機関誌として創
刊さる。
同月五日、**労農芸術家連盟分裂**。黒
島伝治、今野大力、伊藤貞助、山内
謙吾ら脱退、今村・長谷川を加え、
文戦打倒同盟を結成、十二日、宣言
（ナップ十二月号）を発表。文戦劇
場脱退派は無産者劇場を結成す。
同月六日、中条百合子、湯浅芳子ソ
同盟より帰国す。
同月同日、**国際革命作家第二回大会**
ハリコフにて開かれ、日本代表とし
て松山・永田（藤森成吉・勝本清一
郎）出席し、松山は「日本プロレタ

一〇月、刷同解体に着手す。
一一月一四日、浜口首相狙撃さる。

機械（堀田昇一）『ナップ』10
嵐に抗して（**木村良夫**）『**ナップ**』10
『プロレタリア文学のために』（蔵原惟人）戦旗社刊10
ある失業者の話（広津和郎）『中央公論』10
金—（林房雄）『経済往来』10
『芸術社会学の方法論』（フリーチェ・蔵原惟人訳）叢文閣刊10
『プロレタリア文学論』（コーガン・昇曙夢訳）白楊社刊10
邪盥（岩藤雪夫）『改造』10
卑怯者去らば去れ（中本たか子）『改造』10
文壇ウルトラ新進論（大宅壮一）『改造』10
詩・里子にやられたおけい（窪川鶴次郎。守田正義により作曲）『ナップ』11
転換期にあるプロレタリア文学（橋本英吉）『ナップ』11
『夜明け前のさよなら』（中野重治）改造社刊11
波（貴司山治）『戦旗』11
貧農組合（後篇）（細野孝二郎）『ナップ』11・12
加藤の場合（松田解子）『ナップ』11

リア文学について……」報告、一四日には「日本プロレタリア作家同盟に対する決議」なさる。
同月同日、労芸分裂について声明書を発表（文芸戦線一二月号）す。
同月、蔵原惟人ソヴェートに潜入。
同月一五日、国際革命作家同盟（モルプ）成立す。
同月二五日〜一二月一〇日、第三回プロレタリア美術大展覧会開かる。
同月一二日、戦旗社内に組織的対立おこる。
一二月、文戦打倒同盟機関誌として『プロレタリア』創刊さる（北斗社刊）、一月号まで二冊で廃刊となる。
同月、中条百合子、作家同盟に加入す。
同月、文戦打倒同盟解散し、黒島、今野らは作家同盟に参加す。
同月二六日、中野重治、壺井繁治保釈出所す。

一二月、学生全協支持団結成さる。

総督府模範竹林（伊藤永之介）『文芸戦線』11
『武装せる市街』（黒島伝治） **日本評論社刊11**
『芸術総論』（ソヴェート文学研究会編訳）叢文閣刊11
『或る時代の群像』（後に『一九一九年』と改題）（青野季吉）日本評論社刊11
『新興農民詩集』（犬田卯編）全国農民芸術連盟出版部刊11
東倶知安行（**小林多喜二**）『**改造**』12
血（野上彌生子）『中央公論』12
文芸戦線の最近の傾向と分裂・乱闘事件の階級的意義（窪川鶴次郎）『ナップ』12
六名の除名について（労農芸術家連盟）『文芸戦線』12
飯粒で貼られた伝単（越中谷利一）『ナップ』12
『失業都市東京』（徳永直）中央公論社刊12
彼等の欺瞞の面皮を引剝ごう（黒島伝治）『プロレタリア』12
戯曲・日本海々戦（伊藤貞助）『プロレタリア』12
雑誌「文戦」を何故粉砕しなければ

ならないか（貴司山治）『プロレタリア』12

『実践的文学論』（青野季吉）千倉書房刊12

官業（井上健次）『文芸戦線』12

一九三一年（昭和六年）

同志X村の遺作（徳永直）『戦旗』1
職場と街頭（橋本英吉）『戦旗』1
バス車掌七百人（貴司山治）『戦旗』1〜4
入営する青年は何をなすべきか（黒島伝治）『戦旗』1
十七人の兵士（江馬修）『戦旗』1
アジ太・プロ吉失業闘争記（窪川・西沢ら）『戦旗』1
五ヵ年計画とソヴェートの芸術（中条百合子）『ナップ』1〜『プロ文学』
科学的批評の可能及びその発展（小宮山明敏）『ナップ』1
戦列への道（徳永直）『ナップ』1
シナリオ・消費組合（徳永直）『プロレタリア映画』1
帝国主義（西田伊策）『ナップ』12
資本家・武藤山治氏の恐怖（堀田昇一）『ナップ』1
戯曲・プロレタリアートの途（吉村浩太郎）『ナップ』1
赤い恋以上（徳永直）『新潮』1
我々は新段階に進まねばならぬ（黒

一月、プロレタリア詩人会機関誌『プロレタリア詩』創刊さる。
同月、『文芸戦線』は『文戦』と改題す。
同月一八日、ポエウ第一回総会、日本プロレタリア・エスペランチスト同盟創立（三月機関誌『プロレタリア・エスペランチスト』を創刊）
同月二一日、小林多喜二、立野信之保釈出所す。
二月三日、プロレタリア詩人会第一回大会（会員六〇）
同月中旬、蔵原惟人非合法に帰国す。
この頃より壁小説の製作盛んになる。
三月、『プロレタリア映画』終刊。
四月、ナップ中央協議会「一九三一年に於けるナップの方針書」を発表（『ナップ』四月号）
同月、新築地劇団、プロットに加盟す。
同月、プロット、国際労働者演劇同盟に加盟、同日本支部となる。

一月、風間丈吉を中心に共産党中央委員会再建さる。この頃より戦略転換が意識的に行われはじむ。
同月二五日、『赤旗』再刊さる。
二月、労働組合法議会に提出さる。
同月、芝浦製作所争議・失業反対デーなどに活発な大衆運動展開さる。
三月、労働組合法衆議院を通過す。
四月、重要産業統制法成立す。
同月、若槻内閣成立す。
同月、総評議会結成さる。**同月、共産党「政治テーゼ草案」を発表し、日本革命の見透しをプロレタリア革命と改める。**
同月、台湾蕃人蜂起す。

島伝治）『プロレタリア』１
幹部女工の涙（窪川いね子＝佐多稲子）『改造』１
愛情の問題（片岡鉄兵）『改造』１
『日本プロレタリア文芸理論の発展』（山田清三郎）叢文閣刊１
『戦旗三十六人集』（江口渙・貴司山治編）改造社刊１
新しきシベリヤを横切る（中条百合子）『女人芸術』２
食堂のめし（窪川いね子）『戦旗』２
国境（黒島伝治）『戦旗』２
組織（武田麟太郎）『ナップ』２
支部ニュース第一号（本庄陸男）『ナップ』２
きよ子の経験（江馬修）『ナップ』２
地主の誕生日に（江口渙）『ナップ』２
『プロレタリア文学集』（現代日本文学全集第六二巻）改造社刊２
農民とプロレタリア文学（池田寿夫）『ナップ』２
『農民芸術論』（加藤一夫）春秋社刊２
日本に於けるプロレタリア文学運動の同志松山の報告に対する決議（国際革命文学局）『ナップ』２

同月、反宗教闘争同盟準備会結成さる。
同月、美術家同盟第三回大会開かる。
同月、プロレタリア詩人会とプロレタリア歌人同盟の共同主催、プロレタリア美術同盟の後援で「プロレタリア詩と画の展覧会」開催。
同月二三日、プロキノ第三回大会開かる。
五月、『婦人戦盟』（戦盟社）創刊。
同月、『プロレタリア科学』（季刊）創刊。
同月一一日、労芸再分裂、脱退の細田源吉・間宮茂輔ら七名の除名、声明を発表（文戦六月号）
同月同日、右の脱退者により第二文戦打倒同盟結成さる。
同月一三日、プロット第三回大会開かる。
同月二四日、作家同盟第三回大会築地小劇場にて開かる。一般活動方針として(一)労農通信運動との組織的結合――プロレタリア・リアリズムの確立、(二)農民文学の強化、(三)ブルジョア文学・小ブルジョア文学に対する闘争の組織化、(四)社会フ

五月、官吏減俸反対運動起る。
同月、日本一般・日本医務・日本教育労働者の各組合合同し、日本一般使用人組合結成さる。
同月、前進座創立。
六月、共産党中央部公判はじまり、公判闘争おこる。
同月、日本労働クラブ結成さる。
七月、全国労農大衆党結成さる。
同月、全労クラブ排撃闘争同盟結成されクラブ反対運動おこる。
同月、市川正一、法廷にて「日本共産党小史」の陳述をはじむ。
同月、万宝山事件。
八月一日、反戦デー、戦争の危機切迫を強く訴う。
同月、ドイツ共産党弾圧さる。
九月一八日、満州事変おこり、共産党は戦争の本質を暴露・反戦闘争の強化を激しく訴う。
同月、失業者の自主的組織続々と結成され、失業者運動激化す。
一〇月、東北・北海道に冷害大飢饉おこる。
一一月七日、「革命記念日」闘争、ソ同盟擁護とくに強調さる。
同月、プロフィンテルン中央評議会

プロレタリア革命作家第二回国際大会の成果（国際革命文学局）『ナップ』2
『東倶知安行』（小林多喜二）改造社刊3
農民文学の新しき転回（池田寿夫）『ナップ』3
朝鮮におけるプロレタリア芸術運動の現勢（安漠）『ナップ』3
卑しき者（貴司山治）『ナップ』3
労働官僚（堀田昇一）『ナップ』3
労働者農民劇団の問題（生江健次）『ナップ』3
『プロレタリア文学論』（小林・立野）天人社刊3
貧しき砂丘（浜崎秀司）『文戦』3
健康保険患者（加藤竜郎）『文戦』3
優秀船狸丸（葉山嘉樹）『改造』3
北方（北川冬彦）『中央公論』4
貧農（立野信之）『ナップ』4
過程（生江健次）『ナップ』4
太平の雪（鹿地亘）『ナップ』4
未組織工場へ（神田鎗三）『ナップ』4
その一歩（戸川静子）『ナップ』4
海風（長谷川進）『ナップ』4
青年達よ遺業をついで（大森二郎）

アシズムとの闘争、㈤運動の国際的結合のための活動強化を決定。この時の同盟員約一二〇。
同月、プロレタリア図書館創立す。
同月、二九日～六月一日、全連邦プロレタリア作家団体統一同盟（ウオアップ）総会モスクワで開かる。
六月、『反宗教闘争』創刊（一〇月まで）
同月、蔵原惟人、プロレタリア文化運動の工場、農村を基礎としての再組織と全国的中央部としてのプロレタリア文化連盟の結成を提唱す（『ナップ』六月号、古川荘一郎署名「プロレタリア芸術運動の組織問題」）
同月、モルプ機関誌『国際革命文学』創刊さる。
同月一四日、アメリカ、プロレタリア文化連盟結成さる（一三〇団体、二万名）
同月一五日、平林初之輔パリに客死す。
同月二七日、ソヴェート友の会創立。
同月二八日、プロレタリア詩人会臨時大会開かる。
同月、作家同盟に農民文学研究会設

「日本における国際赤色労組支持者の状態、その活動と当面の任務」を発表。
同月、全協機関誌『全協の旗の下に』発刊さる。
一二月一三日、犬養内閣成立す。この頃よりファシズム政権論主張されはじむ。
同月一四日、金輸出再禁止。
同月、東京市電の革反強し、各車庫に闘争委結成されはじむ。

『ナップ』4
一応の平穏(宗十三郎)『ナップ』4
金時計(貴司山治)『ナップ』4
乱(**手塚英孝**)『**ナップ**』**4**
阿蘇山(徳永直)『ナップ』4・5
『マルクス主義芸術理論』(ルナチャルスキー・外村史郎訳)叢文閣刊4
現代欧洲文学とプロレタリアート(マーツァ・熊沢復六訳)鉄塔書院刊4
オルグ(**小林多喜二**)『**改造**』**5**
社会ファシスト(橋本英吉)『戦旗』5
根(中野重治)『戦旗』5
資本主義諸国に於ける労働者演劇の昂揚(久保栄)『ナップ』5
壁にはられた写真(小林多喜二)『ナップ』5
シナリオ・幸福(佐々元十)『ナップ』5
沈み繰り(安瀬利八郎)『ナップ』5
小作米不納同盟(細野孝二郎)『ナップ』5
メーデー詩特集(佐野嶽夫・長谷川進・伊藤信吉)『ナップ』5
『綜合プロレタリア芸術講座』1

置さる。
同月、『マルクス主義芸術学研究』(プロ科編・四季刊)
同月、第二文戦打倒同盟機関誌『前線』発刊さる(一号のみ)
七月六日、作家同盟第四回(臨時)大会上落合同盟本部に開かる。「当面の任務に関する決議案」を可決、指導部の強化、労農通信員組織・工場農村(学校)に文学サークルの組織・支部組織の強化等、新方針の具体化をなす。
同一二日、ナップ中協、芸術団体に科学団体を加え、文化連盟の結成を決定す。
同月二三日、音楽家同盟第一回大会開かる。
同月、『戦旗』は「三・一五、四・一六公判闘争のために」特集号外を発行す。
八月二〇日、文化団体協議会結成の勧誘声明発表さる。
九月二〇日、日本戦闘的無神論者同盟(戦無)創立、川内唯彦、岡田文吉、永田広志ら約八〇名。
同月三〇日、小宮山明敏歿す。
同月、『演劇新聞』創刊。

（五巻まで）内外社刊 5

創作方法に於ける唯物弁証法のための闘争（プロ科訳）『ナップ』6・8

プロレタリア芸術運動の組織問題（古川荘一郎＝蔵原惟人）『ナップ』6

戯曲・東洋車輛工場（村山知義）『ナップ』6

捕手（武田麟太郎）『ナップ』6

協同戦（志田鉄也）『ナップ』6

ズラカッタ信吉（中条百合子）『改造』6〜9

開墾（中野重治）『中央公論』6

スキャップ（細田源吉）『前線』6

或る種の武装（細田民樹）『前線』6

鉱山（間宮茂輔）『前線』6

現代日本文学史1（小宮山明敏）『マルクス主義芸術学研究』6

『オルグ』（小林多喜二）戦旗社刊 7

独房（小林多喜二）『中央公論』7

プロレタリアの修身（小林多喜二）『戦旗』7

罰の逃げた話（立野信之）『戦旗』7

爆発（安瀬利八郎）『戦旗』7

プロレタリア革命作家国際大会に於

一〇月七日、文化連盟中央協議会組織準備第四回総会開かれ、「文化連盟」の名称、規約草案等を決定す。

同月一〇日、作家同盟機関紙『文学新聞』創刊さる。

同月一一日、プロット第四回大会開かれ日本プロレタリア演劇（従来は劇場）同盟と改称す。加盟劇団十三、同盟員約四〇〇。

同月、『ソヴェートの友』創刊さる。

同月、エスペラント文学会（S・F・L）結成さる。

一一月、『ナップ』廃刊さる、二巻十二号・全十六冊。

同月、戦無機関誌『戦闘的無神論者』創刊さる。

同月一二日、ナップ解散す。

同月、ラップ第五回総会開かる（ソヴェト）

同月二七日、日本プロレタリア文化連盟創立す（大会なし）加盟団体——作家同盟、演劇同盟、音楽同盟、美術家同盟、プロ科、新興教育研究所、戦無、プロ・エス、写真家同盟、無産同盟、中協員——中野・壷井・中条・小林・村山・土方・小野・小

ける日本プロレタリア文学運動についての報告（松山敏）『ナップ』7
農民文学の正しき理解の為に（柴田和郎＝蔵原惟人）『ナップ』7
旱魃（金親清）『ナップ』7〜9
省電車掌（黒江勇）『ナップ』7
吹雪（細野孝二郎）『ナップ』7
『ナップ戦線に立ちて』（山田清三郎）白楊社刊7
『二十世紀の欧洲文学』（フリーチェ・熊沢復六訳）鉄塔書院刊7
プロレタリアの星（平林たい子）『改造』8
テガミ（小林多喜二）『中央公論』8
新女性気質〔後に『安子』と改題〕（小林多喜二）『都新聞』8〜10
通信員・サークル・文学新聞（中野重治）『ナップ』8
芸術運動の組織問題再論（古川荘一郎）『ナップ』8
綿（須井一＝加賀）『ナップ』8・9
戯曲・小作人（立野信之）8
『日本プロレタリア詩集・一九三一年版』（作家同盟編）戦旗社刊8
浅野セメント争議ルポルタージュ（今野賢三）『文芸戦線』8
壁小説六篇（片岡鉄兵・立野信之・川・寺島・平田・野村（小椋）・永田・石川・佐野・秋沢・岩崎・佐々・貴司・岡本・大月ら、婦人・青年・少年・農民各協議会を設置す。

同月同日、同機関誌『**プレタリア文化**』**創刊**（一二月五日付）され、同号に「プロレタリア文化連盟の任務」を発表す。

一二月、『**戦旗**』**終刊**、四巻十号、二八年五月以来全五一冊（内改訂版八冊）

同月、『少年戦旗』『婦人戦旗』も終刊。

同月、中国左翼文化連盟結成さる。

同月二二日、作家同盟常中委、プロレタリア詩人会解消に関するテーゼ草案を可決。

同月三〇日、**戦旗社解散**、「解体に際して檄す」（プロ文化二月）を発表。

村山知義・細田源吉・武田麟太郎・小林多喜二）『中央公論』8
争われない事実（小林多喜二）『戦旗』9
芸術的方法についての感想（谷本清＝蔵原惟人）『ナップ』9・10
『東洋車輛工場』（村山知義）往来社刊9
田植ばなし（藤沢桓夫）『文芸春秋』9
『現代芸術の諸傾向』（ソヴェート文学研究会編）叢文閣刊9
『理論芸術学概論』（マーツァ・外村史郎訳）鉄塔書院刊9
ファッショ人形（久保栄）上演10
万宝山（伊藤永之介）『改造』10
祈禱（窪川いね子＝佐多稲子）『中央公論』10
転形期の人々（小林多喜二）『ナップ』10～『プロ文学』
手（鹿地亘）『ナップ』10
監房細房（鈴木清）『ナップ』10・11
『ナップ傑作（十人）集』江口渙・貴司山治編）改造社刊10
『詩集・断片』（萩原恭次郎）溪文社刊10

母たち（小林多喜二）『改造』11
ベルリンからの緊急討論1（勝本清一郎）『ナップ』11
芸術理論に於けるレーニン主義の為の闘争（古川荘一郎＝蔵原惟人）『ナップ』11
日本プロレタリア文化聯盟の任務（無署名）『ナップ』11
社会民主主義文学派の行方1（宮本顕治）『ナップ』11
農村における文学活動（小松原義孝）『ナップ』11
『農民の旗』（作同農民文学研編）新潮社刊11
夜襲（伊藤永之介）『文戦』11・12合併号
一九三二年春季総会までの活動方針（労農芸術家連盟）『文戦』11
プロレタリアートと文化の問題（野崎雄三＝蔵原惟人）『プロレタリア文化』12
『ナップ七人詩集』（中野重治編）白楊社刊12
『真理の春』掲載中止について（細田民樹）『中央公論』12
レール（北川冬彦）『中央公論』12

日本プロレタリア文学大系　5　定価一二〇〇円

一九五五年　五月三十一日 第一版発行
一九六九年　五月　十五日 第二刷発行

編者代表　野　間　　宏
発行者　竹　村　一
発行所　株式会社　三　一　書　房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京　八四一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

全9巻　第6回配本

5

三一書房